金日成伝

——生い立ちから祖国凱旋まで——

白　峯著・金日成伝翻訳委員会訳

第一部

雄　山　閣　刊

민족의 태양
김일성장군

金日成伝

（生い立ちから祖国凱旋まで）

第一部

白峯著
金日成伝翻訳委員会訳

雄山閣版

金 日 成 首 相

〈上〉 幼年時代の金日成将軍（第一章第3節参照）

〈下〉 祖国よ、また会う日まで（第一章第1節参照）

〈上〉毓文中学校在学中のころの金日成将軍
（第二章第1節参照）

〈下〉農民のなかで、日本帝国主義に反対し祖国解放を説く金日成将軍
（第二章第5節参照）

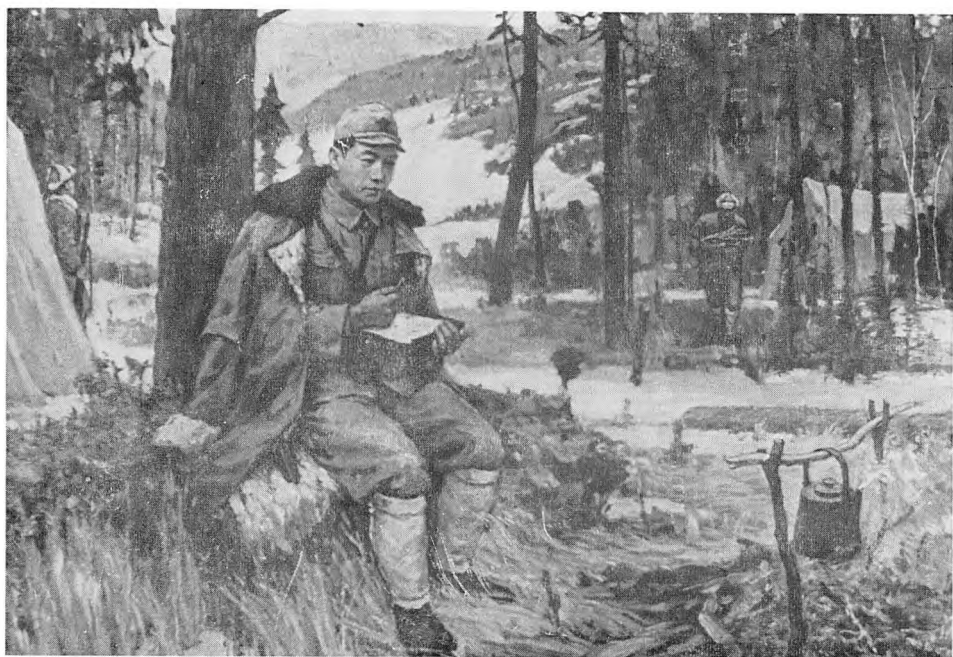
安図革命組織責任者会議で抗日武装闘争をよびかける金日成将軍
（第三章第1節参照）

父が使用していた2挺の拳銃を母からもらいうける金日成将軍
（第三章第2節参照）

1932年４月25日、 金日成将軍は安図で抗日遊撃隊を創建した
（第三章第２節参照）

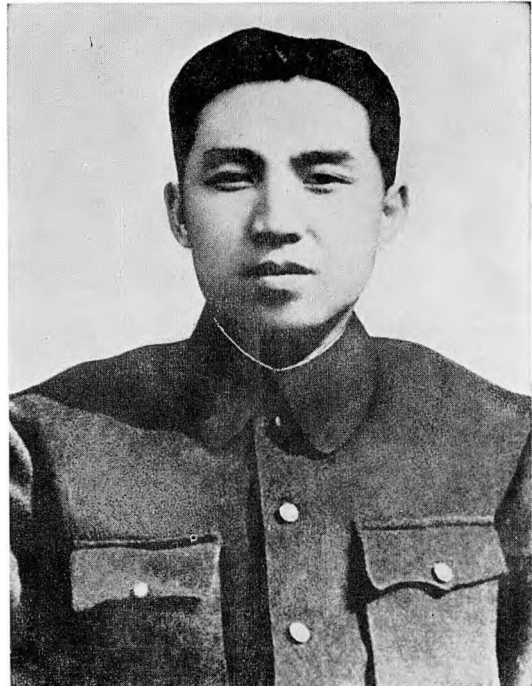
反日統一戦線の実現のため、中国人救国軍の頭目呉義成と談判する金日成将軍　（第三章第４節参照）

遊撃根拠地の児童団員をいつくしむ金日成将軍　（第四章第３節参照）

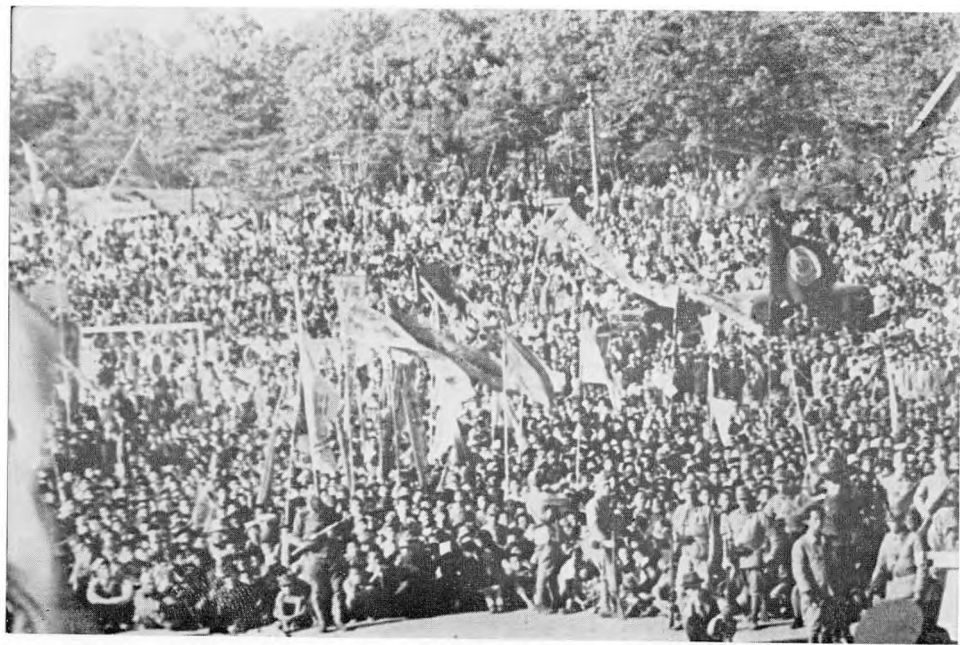
抗日武装闘争当時の金日成将軍　　（第五章第３節参照）

祖国光復の偉大な構想をねる金日成将軍　　（第六章第１節参照）

臨江県五道溝の密営で隊員たちとともにいる金日成将軍
ー前列左から4人目ー（第六章第4節参照）

「司令官も人民の息子です」　　　　（第六章第6節参照）

普天堡ののろし ー朝鮮は生きているー　　（第八章第１節参照）

〈上〉　抗日武装闘争のころの金日成将軍（第十一章第2節参照）

〈下〉　夾信子木材労働者のまえで演説する金日成将軍（第十章第1節参照）

ピョンヤン市群衆大会で祖国凱旋のあいさつを行なう金日成将軍
（第十二章第2節参照）

祖母と感激的な再会をする金日成将軍　　（第十二章第２節参照）

はじめに

ながい歳月にわたって、国の内外からきびしい苦難をうけてきたわが朝鮮(チョソン)人民は、悲運につつまれた祖国と人民を救いだす、たぐいまれなすぐれた指導者を心の底から待ちのぞんでおりました。わけても、祖国が日本帝国主義の植民地に転落し、人民の運命がきわめて重大な危機にさらされたとき、それはもっとも切迫した民族的な渇望となっていました。

まばゆい太陽も、明るい月も光を失った民族受難の暗い冬の季節に、このような全民族の切実なねがいを一身ににになってたちあがった人こそ、絶世の愛国者であり、民族の英雄であり、百戦百勝の、鋼鉄の霊将であり、国際共産主義運動と労働運動のすぐれた指導者のひとりである四千万朝鮮人民の偉大な首領金日成(キムイルソン)将軍その人だったのです。

霊峰白頭(ペクトゥ)の山なみに祖国解放ののろしを高くかかげ、三千里江山(ちょうせんのさんが)に解放のあかつきをもたらした金日成将軍、まさしくこの将軍の誕生こそ、朝鮮民族にあたえられたもっとも大きな幸福だったといえます。

貧しい農家に生まれた将軍は、早くも十四歳のときから祖国と人民のために一身をささげる決心をし、たたかいの道に旅立ったのちは二十歳の身で、すでに英雄的な抗日武装闘争の旗じるしを高くかかげ、広はんな人民を救国闘争へとたちあがらせました。このときから朝鮮人民は、かぎりない感激と尊敬をこめて金日成将軍の名をよび、将軍を救国の英雄、民族の首領として仰ぎみるようになりました。

こうして文字どおり、老人から幼な子にいたるわれわれのすべての世代は、金日成将軍の名をよんでは暗い日々

にも勇気と力をよみがえらせ、希望を燃やし、侵略者とのたたかいに決起してきました。そして朝鮮人民は、一九三〇年代から金日成将軍を偉大な首領としていただくようになり、ついに指導者にたいする歴史的な願望をかなえたのであります。

わが人民は将軍をかぎりなく慕い、うやまい、将軍を霊峰白頭の精気から生まれ、天地を意のままにすることのできる伝説的な英雄として、また千里の険山をも一気にたぐりよせ、うしおのようにおしよせる敵の大軍をも一撃のもとにうちくだくたぐいまれな将軍として、さらに全人民を救国のたたかいへと導く卓越した民族の指導者としてたたえ、敬愛しております。それゆえ、白頭のけわしい山なみを十五星霜にもわたって踏みわけ、日本帝国主義侵略者をうちくだき、恐怖におののかせ、ついに祖国を救った金日成将軍の偉大な業績は、わが民族の歴史とともに燦然たる光を放ちつづけているのです。

たたかいの道に最初の歩みをしるしたその日から、四十余年のながい歳月をへてこんにちにいたる金日成将軍の革命活動の道程――、それは朝鮮人民にたいする熱烈な愛と献身的な服務の歴史であり、民族の敵との血にまみれたたたかいの歴史でした。しかもそれは、はげしくきびしい革命と創造の歴史であり、輝かしい勝利の歴史だったのです。

わが民族の歴史はすでに五千年を数えていますが、金日成将軍のように科学的な革命理論とすぐれた指導力、そして気高い徳性とをかねそなえた指導者をいまだかつて推戴したことはありませんでした。また将軍のように、生死存亡の危機に直面しても民族を救出し、炎のような革命的展開力で前人未踏の道をつきすすみながら、祖国と人民を繁栄と勝利の道ひとすじに確信をもって導いた指導者を記録にとどめてはおりません。

だからこそすべての朝鮮人民はかぎりない誇りをもち、金日成将軍を民族の太陽として、人民の偉大な指導者としてあおいでおり、世界の人民もまた国際共産主義運動と労働運動に寄与した巨大な貢献により、世界革命運動の

傑出した指導者のひとりとして将軍をたたえ、深く尊敬しているのです。

こうした偉大な指導者を推戴しているからこそ、こんにちアメリカ帝国主義者の植民地統治のもとであらゆる苦痛をうけている南朝鮮の同胞たちも、ひたすら統一された祖国で幸福に暮らす日を夢みながら力強く生きぬき、勇敢にたたかっているのです。

わたしは、すべてをなげうって将軍の教えにしたがい、祖国の自主的統一をめざしてたたかっている全朝鮮人民のために、四千万朝鮮人民の敬愛する指導者である金日成将軍の伝記をつづることにしました。

この本はその第一部にあたります。ここには金日成首相の幼年時代と初期の革命活動、そして、熾烈で多面的な、深刻な政治闘争をふくむ将軍の偉大な抗日武装闘争など、重要な内容がとりあげられています。

しかし、このように複雑でぼう大な内容を一冊の本にまとめるということは、きわめて力のいるむずかしい仕事でした。可能なかぎり数多くの文献や資料を収集し全力をつくしてはみたものの、もともと将軍の業績があまりにも幅ひろく巨大なため、研究不足なわたしにとっては、それらをことごとく語りつくすことは到底できませんでした。わたし自身がぼう大な内容に圧倒され、まよったことも一度や二度ではありませんし、劇的な場面では自分自身の力不足をなげいたことも幾度かありました。

しかし、広はんな人びとが将軍の伝記を切実にもとめていることを考え、あえて上梓することにしました。今後さらに研究をかさね、より完成したものに近づけてゆきたいと考えております。

金日成首相の伝記の第二部は、八・一五解放から現在までを包括して書こうと考えています。

わたしはこの本を出版する機会をかり、祖国の統一と繁栄、人民の未来と幸福のために、四千万朝鮮人民の敬愛する指導者金日成首相のご健康と長寿を心からいのるものであります。

一九六八年一月

白峯

金日成伝〈第一部〉目次

目　次

はじめに……1
第一章　家系と少年時代……1
1　ふるさと——万景台……1
2　将軍の父母……7
3　少年の日々……22
4　祖国よ、また会う日まで！……39
第二章　母なる祖国の解放めざして……47
1　社会主義への道……47
2　青年学生運動の旗手……59
3　団結を妨げるものへの打撃……71
4　鉄窓のなかで……79
5　農村を活動舞台に……83
第三章　抗日武装闘争の旗を高くかかげて……97
1　偉大なよびかけ「武器をとれ！」……97
2　抗日遊撃隊の誕生……105
3　最初の試練……112
4　大胆な談判……125

目　次

第四章　革命の揺籃――解放地区……135
1　遊撃根拠地にたいする将軍の構想……135
2　新しい社会の創造……140
3　将軍と児童団員たち……149
4　小汪清防御戦闘……156
5　団結の力……164
第五章　革命の危機をのりこえて……177
1　祖国と民族の運命を一身ににない……177
2　偽満軍の瓦解に成功……191
3　遠征の壮途で……200
第六章　朝鮮全土を照らす白頭山ののろし……215
1　歴史的な会議……215
2　祖国光復会と十大綱領……223
3　撫松県城の攻略戦闘……231
4　白頭山根拠地……242
5　祖国光復の旗ひるがえる……250
6　人民のなかで……261

第七章　マルクス・レーニン主義の党を創建するために……273
第八章　朝鮮は生きている……289
1　普天堡ののろし……289
2　九月のよびかけ……304
第九章　峻嶺をこえて……311
1　きびしい冬……311
2　大敵に包囲された密林のなかで……323
3　苦難の行軍……331
4　茂山地区戦闘……348
第十章　日本帝国主義を戦慄させた大旋回作戦……359
1　白頭山の東北部をぬって……359
2　千変万化の戦術……370
第十一章　最後の勝利のために……381
1　革命の大転換期をむかえるための方針……381
2　小部隊活動……386
3　あたたかい愛情、かぎりない信頼……396

4　三千万は将軍につづく……408
第十二章　将軍の祖国凱旋……417
1　最後の決戦、朝鮮の解放……417
2　歓呼の嵐につつまれて……421
第十三章　民 族 の 太 陽……433
1　偉大なたたかい、輝かしい革命伝統……433
2　四千万朝鮮人民の偉大な指導者……440
付　録
金日成将軍の主要活動年表
（一九一二年四月～一九四五年八月）……457
抗日武装闘争主要戦跡図……巻末
訳者あとがき……462

金日成伝〈第一部〉

第一章　家系と少年時代

1　ふるさと——万景台

けわしい狼林山脈の谷間からはじまる大同江は、悠々とうねりうねって西海（黄海）へと流れこんでゆく——。

この流れにそってピョンヤン（平壌）から十二キロばかりくだっていくと、河の北岸にそそりたつ万景台が目に映る。古くから名勝の地として知られる万景台のひろびろとした展望は、人びとの心をとらえてはなさない美しい風光にめぐまれている。

静かな流れに青い影をおとす年ふりた松、鶴がかろやかにつばさをひろげたようなかたちの亭閣がある頂上にのぼれば、眼下にはみずみずしい緑にかこまれた農村がはてしなくひろがる。

この峰から遠くのぞまれる川面には、西海からさかのぼってくる小型汽船や緑こい豆老島、鶻游島の姿がくっきりとうかぶ。南の方へ目を移すと中和平野がひらけ、北方には霞につつまれた青い山なみが高く低く、まるで絵のようにつらなっている。

わたしたちの先祖は、こうした美しい山河を一目で見わたすことができるというのでここを万景峰と名づけ、その頂上には万景閣を建てて風光をめで、村の名を万景台とよんだのである。

古来、ピョンヤン八景とともに景勝地の一つにかぞえられ、旅人がたえなかったといわれるこの村は、いまのピョンヤン市万景台区域万景台里（かつての平安南道大同郡古平面南里）にあたる。

まさにこの地が、四千万朝鮮人民の敬愛する指導者金日成将軍の生まれ故郷であり、将軍が幼年時代をすごした由緒深い村なのである。

一九一二年四月十五日、金日成将軍はここ万景台の貧しい農家で、熱烈な反日（反日本帝国主義の略）闘士であった金亨稷先生と康盤石女史の長男として生まれた。

ちょうどそのころは、民族受難の暗い時代であった。

かねてから朝鮮にたいし侵略の魔手をのばしていた日本帝国主義は、一九一〇年八月二十九日、ついにわが国権のすべてを奪いとり、苛酷な植民地支配を開始した。悠久な歴史をもつ大地は侵略者の軍靴に踏みにじられ、亡国の悲運をのろう朝鮮民族の慟哭は文字どおり全土をゆさぶった。

いわゆる「統監部」は「総督府」にかわり、侵略者の銃剣による「武断統治」が朝鮮人民をがんじがらめにした。「朝鮮総督」寺内正毅は、「朝鮮人は日本の法律に服従するか、さもなくば死をえらばねばならない」とさえ公言した。そして日本の侵略者たちは、愛国的な朝鮮人民を手あたりしだいに検挙し、投獄し、虐殺した。それはかれらが縮小して発表した統計によっても、日本の憲兵と警察による朝鮮人検挙件数は、一九一二年だけでじつに五万二千余件に達し、数多くの愛国者が日本の軍隊によって銃殺されたり、憲兵や警察の手にかかって虐殺された。こうして全国各地で、愛国的な朝鮮人民のおびただしい血が流されたのである。

また日本の侵略者たちは、朝鮮をたちおくれた農業国としてしばりつけておきながら、帝国主義的略奪をいっそう強化する目的のもとに、悪名高い「土地調査事業」を強行した。

しかし朝鮮人民は、祖国の受難を決して宿命とは考えなかったし、侵略者のまえにひざを折る無抵抗主義的な人民ではなかった。

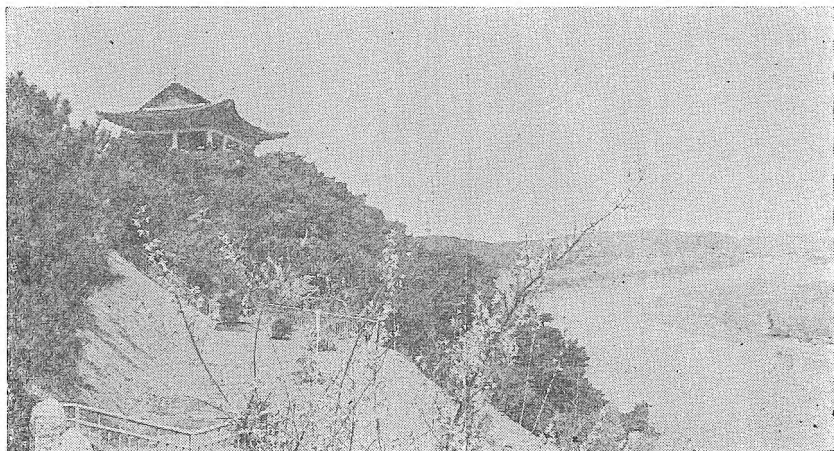
朝鮮の反日義兵部隊は、いたるところで日本の侵略軍と激烈な戦闘をくりひろげた。また広はんな人民も、あら

ゆるかたちで侵略者に反抗し勇敢にたたかった。

このように、亡国の民となった二千万朝鮮人民（当時の人口は二千万といわれた）の痛哭と憤怒の叫びが全土をおおっていたとき、万景台の貧しい農家で生まれた金日成将軍の前途には、日本の侵略者を追いだし、悲運にとざされた祖国と人民を救う歴史的な使命がよこたわっていたのである。

将軍は、全羅(ジョンラ)北道全州(ジョンジュ)地方から北へ移った金継祥(キムケサン)先生の十二代目の孫にあたり、名は成柱(ソンジュ)といった。

壬辰(イムジン)の乱（豊臣秀吉の朝鮮侵略）の戦火のなかで全州をあとにした先生の一家は、一応ピョンヤンに近い大同郡南串面(ナムゴッ)月内里(ウォルネ)におちついた。先生の家では代々、子弟を愛国の精神でもって教育することを家憲としていた。そのため将軍の家は古くから、「清貧にして義理と節操を重んずる家柄」として知られた。

将軍の曽祖父にあたる金膺禹(キムウンウ)先生の代になって、一家は生活難のため現在の万景台へと移った。そして先生は、地主李平沢(リピョンテク)の墓守りとして小屋に住み、小作をしながら苦しい生計をたてた。愛国心に燃えていた先生は、アメリカの海賊船シャーマン号が大同江へ侵入してきたとき（一八六六年八月）、それをくいとめるため群衆の先頭にたって勇敢にたたかった。

万　　景　　峰

しかし一家はあまりにも貧しく、暮らしをたてるのがやっとの状態だった。

将軍の叔父にあたる金亨禄(キムヒョンロク)先生は、当時の生活についてこう語っている。

「うちの暮らしむきといったら、農家でありながら、かゆ一つ満足にすすれないありさまでした。まだ物心つかないときでしたが、お客がくるたびに、かゆの心配をしていた祖母のことが忘れられません。ある日、やはり客がきたときでした。わたしは台所にいた祖母に、『またお客ですね。おかゆがたりないんじゃない?』ときいたんです。すると祖母が、『そう、お客さんだよ。でも、お釜に水をたしておかゆをのばすしか、どうしようもないでしょう』とこたえたのが、まるできのうのことのようです。こんなわけですから、わたしは九つのときに『千字文(せんじもん)』を少しならっただけで学校へもゆけず、ただ万景台で野良仕事をつづけてきました」

生活は苦しかったが、子孫にはめぐまれた。金膺禹先生は、万景台へ移ってから長男金輔鉉(キムボヒョン)をもうけ、亨稷、亨禄、亨権(ヒョングォン)の三人の孫をみた。そして一番うえの孫にあたる金亨稷先生のもうけた曽孫(ひまご)が将軍(成柱)であり、その弟が哲柱(チョルチュ)と英柱(ヨンジュ)であった。

金日成将軍の祖父にあたる金輔鉉先生は、息子や孫たちの独立運動と革命活動をたすけることに一生をささげた人であった。先生は夫人の李宝益(リボイク)女史とともに、息子や孫たちが祖国のためにたたかっているという理由だけで、日本の官憲からきびしい圧迫をうけねばならなかった。しかし侵略者たちが迫害をくわえるたびに、先生夫妻は祖国のためにつくすことをこのうえない誇りとした。そして、ながい歳月にわたる生活苦と迫害のなかでも勇敢な息子や孫たちに生きがいをみいだし、最後まで侵略者に反対して気高い生涯をとじたのである。

将軍の父金亨稷先生は、祖国光復(祖国解放という意味)のために一生をささげた熱烈な愛国者であり、強力な地下組織をつくって献身的にたたかった前衛的な闘士であり、すぐれた革命家であった。そしてまた先生は、数多くの青少年を愛国思想で教育し、かれらを勇敢な闘士に育てあげた進歩的な教育者でもあった。

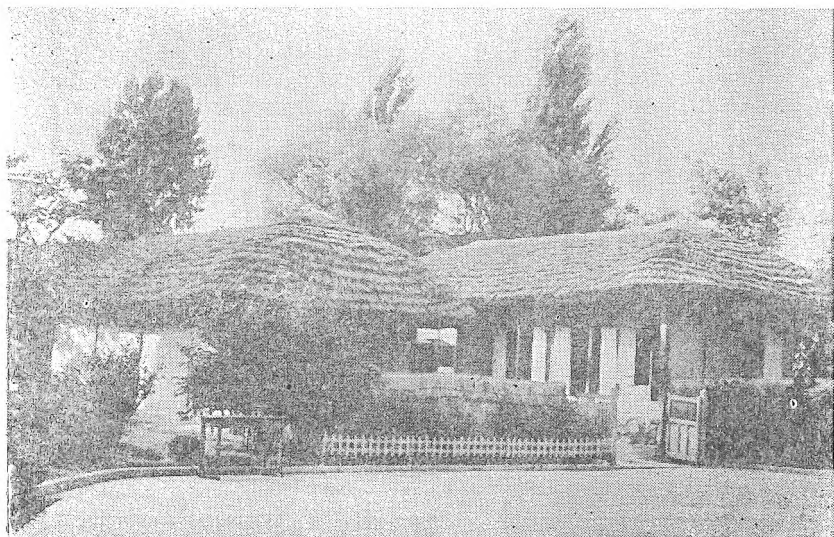
将軍の母である康盤石女史もまた、反日闘争に生涯をささげた意志の強い女性であった。女史は革命家の忠実な妻として、婦人たちのなかで反日啓蒙活動をねばり強くおしすすめただけでなく、三人の息子たち、なかでも長男の金日成将軍を革命家に育てあげ、祖国光復の偉業にむかわせたすぐれた母親であり、数多くの闘士をわが子のように愛した朝鮮のまことの母であった。

　また、将軍の叔父にあたる金亨権先生も熱烈な革命家であった。先生は日本帝国主義に反対し武器を手にしてたたかったが、日本の官憲に逮捕されて十五年六か月の重刑をうけ、ソウルの西大門（ソデムン）刑務所に服役中、日本人刑吏の残酷な拷問にあって獄死した。

　そしてまた、将軍のすぐしたの弟である金哲柱も熱烈な反日闘士であったが、一九三五年に満州でとらえられ、二十歳の若さでこの世を去った。

　このように、金日成将軍の一家は熱烈な反日愛国の家柄であり、一族が代をついで祖国の独立のために身をささげた世界でもまれな革命家の家筋であった。

　こうした家庭で、熱烈な愛国の血をうけついで生まれ

金日成将軍の生家

た金日成将軍は、ふるさと万景台で夢多い幼年時代をおくり、金亨稷先生の愛国主義教育をうけながらすくすくと成長した。岩一つ、樹一株にいたるまで学びの対象でないものはなく、元気な遊び場でないものはなかった。万景台はまた、将軍にとってはそのまま祖国の象徴でもあった。だからこそ将軍は、のちの抗日武装闘争の日々にも遊撃隊員たちにしばしば万景台の話をしてきかせ、やがて解放されるであろう祖国の輝かしい未来について情熱的に語ったのである。

将軍が祖国にたいするかぎりない愛から故郷万景台を思い、日本帝国主義を打倒するための武装闘争を展開していたとき、万景台の家では、叔父金亨禄先生だけがのこって祖父母の世話をしていた。

暗くもきびしい歳月——。ときをえらばずおそいかかる日本官憲の弾圧のなかでも、将軍の祖父母が暗いともしびのもとで夜ごとに夢見たのは、若くして祖国のために身をささげた息子たちと嫁の血ぬられたねがいであり、そして白頭の山なみをつたい、侵略者をうちつづけている孫の炎のようなねがいが必ずやとげられ、祖国の山河によみがえる、あのあざやかな朝のことであった。

こうして、万景台の屋根の低い小さなわらぶきの家は、ながくきびしい風雪にかたむきながらも、つきることのない希望にささえられ、いつまでも建ちつづけてきたのである。

いまでも金日成将軍のふるさとの家は、万景峰のふもとに、むかしのまま保存されている。軒の低い小さなわらぶきの家、庭には古ぼけた納屋が一つ。家具類はどれもが、受難の時期のむくわれることのない苦しい労働と、しいたげられた生活の遺物である。わずかな食器類と古風な箪笥、火ばち、砧、鋤、チゲ(背負いこ)、鎌、飼い葉切り、機、紡ぎ車、鍬、そして将軍の曾祖母が買ってきたいびつな水がめと、荒けずりの座机と、そのうえにおかれている硯——。これが三代をへてきたこの家の全財産なのである。

これらの貧しい家具類は、金日成将軍の愛国的な志をはぐくんだ苦難の歳月を、なによりも雄弁に物語ってくれ

る。まさに将軍は、貧しさのどん底でもだえる人民の苦しみを骨身に徹して感じたからこそ、偉大な革命闘争をくりひろげることによって、もっとも強く朝鮮人民を愛することができたのである。

だからこそ、こんにち朝鮮人民ばかりでなく、世界の広はんな人びとが万景台をおとずれ、将軍の生家をつぶさに見てまわりながら、かぎりない感動に胸を熱くするのである。

万景台の小さなわらぶきの家——。この家はわたしたち朝鮮人民にとって、どんな豪壮な宮殿よりも貴重であり、気高く美しい。そして万景台はつねに、四千万朝鮮人民の心のふるさととなっているのである。

2　将軍の父母

金亨稷先生

将軍の父金亨稷先生は、甲午農民戦争の年にあたる一八九四年七月十日、万景台で生まれた。

祖国が植民地の深い泥沼におちこんだため、あらゆる悲劇的な事件を体験した先生は、人民を愛国思想で啓蒙教育し、日本の侵略者たちに反対するたたかいへと決起させた前衛的な闘士の一人であった。

幼いころから聡明だった先生は、漢文をならうあいだ曽祖父の蔵書のなかから東医学にかんする書物をさがしだし、熱心に読みふけった。

また先生は弁がたつうえに闊達(かったつ)で、竹をわったような性格の持ち主であったため、人びとからこよなく愛され

親しまれた。

「祖国を奪いかえすためには、まず学ばなくてはならない」という強い信念をいだいていた先生は、貧しさにめげず向学心に燃えていた。そして故郷で順和（スンファ）学校を終えると、十八歳のときからピョンヤンの崇実（スンシル）中学校の門をくぐって苦学をつづけた。

愛国心に燃えていた先生は、乙支文徳（ウルチムンドク）将軍（七世紀の朝鮮のすぐれた軍事戦略家であり熱烈な愛国者であった。六一二年に隋が三百万の大軍をひきいて高句麗を攻めたとき、たくみな戦術を駆使してこれを撃退した）や李舜臣（リスンシン）将軍（十六世紀朝鮮の熱烈な愛国者であり水軍の名将。豊臣秀吉の侵略を撃破したすぐれた戦略家で、かれがつくった亀甲船は驚異的な力を発揮して戦争の勝利に大きく寄与した）など、祖国のために勇敢にたたかった名将たちの伝記や歴史書、それに愛国的な内容をもった書物を熟読した。とくに新聞や雑誌などはかかさず目をとおし、世界の動きにこまかい注意をはらった。反日救国の思想をもる書物などは官憲の目をさけ、みんなが寝静まった夜なかにおきて読みふけった。

幼くして父親から愛国主義教育をほどこされた先生は、こうした社会の出来事についての深い洞察と読書、その他の自己形成の過程をつうじて、日本の侵略者たちにたいする憎悪と闘志をいっそう強く燃やしていった。

当時はちょうど、日本帝国主義によって国が植民地に転落した直後であったため、全国津々浦々で祖国の運命を憂う痛憤の叫びがみちあふれ、内外いたるところで、さまざまなかたちの反日闘争がくりひろげられていた。江原（カンウォン）道、咸鏡（ハムギョン）道、平安道を中心とした山間地帯では、愛国的な農民大衆を先頭とする反日義兵闘争がはげしくつづけられ、満州に移動した一部の義兵部隊は、朝鮮と満州の国境付近で活発な動きを見せていた。

また、かつての愛国文化啓蒙運動をうけついだインテリは、数多くの私立学校や団体のなかでひそかに反日運動をつづけ、国の内外で愛国主義精神を鼓吹（こすい）する文筆活動を力強くおしすすめていた。

これらと前後して海外でも祖国の独立をめざす団体が組織され、活発な動きを見せていた。しかし、この海外に

おける反日諸団体の活動には本質的な弱点があった。

なぜなら、海外にいた独立運動家たちは、国内の人民大衆から遠くかけはなれていただけでなく、海外同胞のなかですら、その根を深くおろしていなかったからである。かれらのほとんどは旧韓国時代の高官や両班(ヤンバン)(封建時代の貴族)、あるいは小ブルジョア出身のインテリにいたる雑多な階層のものたちで、ブルジョア共和国の樹立を叫ぶかと思えば旧王朝の復古をとなえたりするなど、その政治的な見解はまったくでたらめであった。しかも、かれらのなかでは偏狭な地方割拠主義と派閥あらそいがひどく、たがいに協力するどころか、みにくい対立と反目がうずまくだけであった。

しかし、こうした動きとは関係なく、朝鮮人民の反日勢力は日ましに大きくなっていった。

祖国の悲惨な境遇と日々に高まる人民の反日気勢は、早くから独立運動に身を投じることを決心していた金亨稷先生に、はかり知れない大きな影響をあたえた。若い先生の胸は、愛国闘士たちへのつきない共感と、悪らつな侵略者たちにたいする憤りでにえくりかえった。そして、たたかいの突破口をもとめていた先生は、すでに武器をとって国の内外で活動していた反日闘士である義兄の康晋錫(カンジンソク)先生をはじめ、数多くの愛国志士たちとのつながりをもち、中学生の身を独立運動の嵐のなかに投じた。

そのうち崇実中学校を中退し、順和学校で教鞭をとりながら独立運動にくわわっていた先生は、一九一六年の春、すなわち二十三歳のとき平安南道江東(カンドン)郡高邑(コウプ)面東三(ドンサム)里内洞(ネドン)部落(いまの江東郡烽火(ボンファ)里)へ移り、その地の明新(ミョンシン)学校で教壇にたちながら、より積極的な革命活動を展開した。

このころから先生は、個別的または地域的なせまい活動範囲からぬけだし、より広はんな地域における朝鮮独立運動の組織指導者として登場した。

先生が東三里に移ったのは、当時ここが反日運動の強力な江東郡、成川(ソンチョン)郡、順川(スンチョン)郡、大同郡との連係をたもちや

すく、しかもピョンヤンまで近いわりに山奥であり、官憲の目をくぐって活動するのには非常に有利だったからである。

先生は、昼間は教壇で学生たちに愛国思想と民族的な誇りをもたせながら反日思想を鼓吹し、夜は農村の青壮年を相手に夜学をひらき、朝鮮の文字と歴史、地理などを教え、政治教育と文化啓蒙に力をそそいだ。また学生たちに愛国的な名将の話をしたり、革命歌を教えたり、運動会や演芸会をひらくなどの精力的な活動をくりひろげた。そのため、この地方の若ものたちは急速にめざめ、反日愛国思想を身につけていった。

先生は多忙な身にもかかわらず、官憲の目をさけては、国の内外の独立運動家たちとひんぱんに会っていた。ときには山奥で、ときには自宅でひそかにかれらと会い、当面の活動方針を論じたり、新しい闘争任務をあたえたりした。

これらは、反日地下組織をつくるための準備活動であった。

やがて金亨稷先生は、同志たちとともに国の内外にいた独立運動家や崇実中学出身の青年たちを中心に一九一七年三月二十三日、反日地下組織である朝鮮国民会（チョソンクンミンフェ）を組織した。

この組織の目的は、やがて欧米勢力が東洋に進出し、日本がかれらと覇権をあらそうようになったとき、その機会をのがさず朝鮮人みずからの力で独立をかちとるために、同志たちの結集とその準備をすすめることにあった。こうして朝鮮国民会は、その勢力を中国の間島（カンド）地方と朝鮮南部にまで拡大し、武器を手にいれ、闘争資金をつくり、軍事幹部を養成するなど積極的に活動した。

またこの会は遠く中国の安東（アンドン）に連絡員をおくり、北京に通信員をおいていた。

朝鮮国民会は、そのころ海外で漠然とした理想をもち、派閥あらそいに汲々としていたどの民族運動団体よりもすぐれていただけでなく、外国の勢力にたよっていた多くの団体とは本質的にちがっていた。

朝鮮国民会は、まずその目的と、それを実現するための闘争方法が正確であった。この組織は、わが国に科学的マルクス・レーニン主義思想が普及する以前に、すでに反帝民族解放の闘争課題を正しくうちだしていたし、祖国朝鮮の独立をかちとるための方法としては、外国勢力にたよらず自主的な力によって、しかも請願や改良の方法ではなく、政治的な活動と軍事的な活動を適切にくみあわせることによって目的を達成することなどを明らかにしていた。

このように、朝鮮国民会は国内と国外をむすんだひろい範囲の反日秘密結社であり、三・一運動以前におけるもっとも大きな反日運動組織であった。

その組織方法はたくみで、しかも緻密であった。侵略者の野蛮な武断統治のもとでも活動の自由をたもつことができるよう、同志のあいだと組織のあいだではつねに暗号をつかって秘密を守り、会への加入に際しても愛国的な人民のなかから、同志的な団結を守り、祖国光復のために命をかけてたたかう決意をもった人びとを厳選した。

そのかたわら金亨稷先生は、合法的な組織である碑石契（祖先の墓石をたてるためのたのもし講）や学校契（子どもを学校に入学させるためのたのもし講）をつくり、これに広はんな大衆を結集した。これは、おもてむきには経済的な相互扶助と親睦をはかる集まりのようにつくろっていたが、実際には先生の指導のもとに朝鮮国民会の組織をひろげ、農民に反日愛国思想をうえつけながら独立運動をたすける目的をもっていた。

このように先生は、文字どおり昼夜の別なく、寝食を忘れて組織をつくり運動を指導して、ほとんど疲れることを知らなかった。

先生はいつも、祖国光復の遠大な意味をこめた「志遠」という二字を書いて学校や家にかかげ、自分自身と子弟たちの心身をきたえるための座右銘にした。

しかし一九一七年の秋、朝鮮国民会は日本帝国主義の手先の密告によって明るみにだされ、金亨稷先生をはじめ

とする多くの会のメンバーやこれに関係した百余名の人たちが全国各地で検挙された。これは、三・一運動前夜における もっとも大きな事件の一つであった。
先生はピョンヤンの監獄のなかで、日本官憲の苛酷な拷問とあらゆる懐柔や欺瞞にも屈せず頑強にたたかいぬいた。
かれらは毎日のように、むごい拷問と仕うちをくわえたが、革命にたいする先生の強固な決意をくつがえすことができなかったばかりか、たった一言の秘密さえひきだせなかった。
こうして先生は、三度も裁判にかけられた。しかしそのたびごとに先生は、「わたしは絶対に刑に服する わけにはいかない。朝鮮人が自分の国を愛し、祖国のためにたたかうことがどうして罪になるというのか。わたしはこのような不当な判決を絶対に認めない」と主張し、断固としてたたかった。そして先生は、最初の判決である二年の重刑を断固拒否し、二回目の判決である一年六か月の刑も一蹴してしまった。しかし血に飢えた侵略者たちは三回目にいたって九か月の刑を強引にいいわたした。
獄中における先生は、出獄後の新しいたたかいの構想をねりながら医学の勉強にはげんだ。医学を身につけて病院を建てれば、同志たちや革命組織との連絡もとりやすく、官憲のきびしい警戒のなかでも合法的に活動できると考えたからである。
一九一八年の秋、先生ははじめての試練にたえ、傷だらけの身で出獄した。そしてしばらく自宅で休養をつづけた。先生はからだがいくらか回復すると、敵の監視がきびしい郷里では革命活動をつづけることがむずかしいと考え、その年の暮れ、祖国光復の志をつらぬくため鴨緑江（アムノク）沿岸の国境地帯へと活動の舞台を移した。
先生は、なつかしい故郷をはなれるにあたり、不屈の闘志と必勝の信念をこめた詩一首をのこした。

南山ニ
青クシゲレル彼ノ松
雪ト霜トニ
ウタレ埋レテ
千辛万苦ノ苦シミヲ
耐エシノビ
フタタビ春ニメグリ会イテ
生返ルヲ
ヒトヨ
君知ルヤ

先生は、家族がからだのことを気づかい、いま少し回復してからとすすめるのをふり切り、つぎのようにいいのこして旅にでた。

「祖国の独立がかちとれないのなら、生きてなんになりましょう。たとえこの身がさけ、骨がくだけようとも、日本の侵略者とたたかって勝たねばならないのです。もし、わたしがたたかってたおれたら子どもがあとをつぎ、子どもたちがはたせなければ孫たちがあとをついでたたかってでも、わたしたちは必ず勝たなければならないのです。そして国を独立させるのです」

はじめ、先生は中江鎮（チュンガンジン）で活動した。そしてその後、故郷に帰って夫人と幼い長男の将軍と次男の哲柱をつれ、中江鎮をへて鴨緑江対岸の南満州通化（トンフア）省の臨江（リムガン）、長白（チャンベク）県八道溝（パルドゥグ）、撫松（ムソン）へと移住した。こうして先生は、日本官憲のき

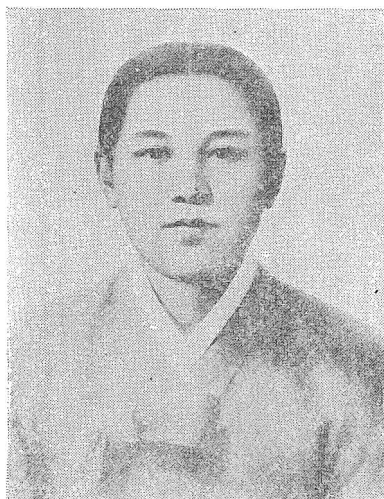
びしい監視と暴圧から多少なりとも身を遠ざけることができた。

この付近は同胞がたくさん住んでいたうえ、国境が近く、国内と連絡をとるにも有利であった。また独立軍や多くの愛国的な闘士たちも活動していた。先生はたたかいに有利なすべての点を考慮し、この鴨緑江沿岸一帯を革命活動の中心地としてえらんだ。

こうして先生は、表面では医師として患者をみながら独立運動の諸団体とつながりをつけ、多くの同志たちを国内に派遣したりした。貧しい患者からはびた一文うけとらず治療してやりながら、国内と国外のたたかいをつなぐ中枢的な役割をはたしたのである。

国内の同志たちとの連絡は、おもに医薬品の郵送というかたちでおこなわれた。ピョンヤン、ソウル、釜山(プサン)をはじめ国内各地からおくられてくる小包のなかには、医薬品のほかに、国内の各組織から先生にあてた重要な資料などがはいっていた。

ときどき先生は往診をよそおってたたかいの指導をおこない、十日間も二十日間も撫松県の各地や国内で活動をつづけることがあった。

一九二四年の暮れ、国内に足をのばした先生は、葡坪(ポピョン)でふたたび日本の警察官に逮捕されてしまった。かれらは独立軍が先生を奪いかえすことをおそれ、すぐに秋島という巡査に命じて厚昌(フチャン)警察署へ護送した。だが先生は、少しもあわてたり失望したりしなかった。このとき、先生の護送のことを察知した黄(ホワン)という同志は、度の強い酒を一本たずさえてあとを追い、延葡(ヨンポ)里で秋島巡査をつかまえて酒場にさそうと、かれを正体なく酔いつぶしてしまった。巡査が寝こんでしまったすきにのがれた先生は、金(キム)という老人のたすけをかり、数日のあいだを山小屋ですごした。そして凍傷に病むからだをおしてふたたび、きびしい寒さのなかを八道溝から撫松へとむかった先生は、高じる病にひどく苦しんだ。

しかし当時、もっとも熱烈な反日独立運動の指導者の一人であった先生は、その後も多くの独立運動家たちと連係を深め、ねばり強い活動をおしすすめた。

先生は撫松においても、若ものたちにたいする教育をおろそかにしなかった。白山(ペクサン)学校を建てて貧しい農民の子弟たちに学問をほどこしていた先生は、教具や教材まであてがったりして教育に心血をかたむけた。

このように金亨稷先生は、ピョンヤン付近の江東から鴨緑江の沿岸と中国東北地方へ住居を移しながら、じつに十年余のながいあいだ、ひたすら日本帝国主義に反対してたたかった。

しかし、からだを休めるいとまもなく、先生の病状はさらに悪化した。そしてついに、民族受難の苦渋にみちた歳月に一身を祖国光復のたたかいにささげた不屈の愛国者であり、進歩的な教育家であった金亨稷先生は、一九二六年六月五日、夫人と三人の息子たちに自分がはたせなかった夢をたくし、満三十二歳の若さでこの世を去ったのである。

康盤石女史

将軍の母康盤石女史は、夫の遺志をついで息子たちをりっぱな革命家に育てあげるために、あらゆる情熱をかたむけた。じつに、女史の生涯はたとえようもない苦難とたたかいの連続であった。

一八九二年四月二十一日、康盤石女史は平安南道大同郡龍山面下里七谷(リョンサンハリチルゴル)で、康敦煜(カンドンウク)先生の次女として生まれた。

康敦煜先生も熱烈な愛国者であり、三十余年間を次代の教育につくした経験ゆたかな教育家であった。数多くの弟子たちは先生の功績を後世にながくつたえるため、現在の

ピョンヤン市万景台区域七谷洞に碑を建立した。「黙契(ムクゲ)先生康敦煜記念碑」がそれである。

また康盤石女史の一番うえの兄にあたる康晋錫先生も、早くから国の内外の独立運動家たちと武器をとり、祖国の独立のためにたたかった熱烈な反日闘士であった。

先生は反日愛国勢力を結集して朝鮮独立青年団を組織し、その責任者として勇敢にたたかった。とくに三・一運動（一九一九年）のときは万景峰一帯の組織者の一人として、父親とともにデモの先頭にたって指揮をとった。

そののち先生は中国東北地方へ移り、独立運動に参加してなんどか国内をゆききしながら活動をつづけたが、一九二四年五月十九日、ピョンヤンの大同旅館で日本の警察に逮捕された。そして先生は十五年の重刑をいいわたされ、十三年八か月ものあいだ牢獄で苦しんだすえ、ようやく仮出所の身となったが獄中での病が悪化し、一九四一年十一月三十日にこの世を去った。

こうした革命的な家庭で育った康盤石女史は、幼いときから日本の侵略者にたいする憎しみが人一倍強く、人柄もなみはずれてりっぱであった。貧しさのため学校へゆけなかった女史は、せわしい野良仕事や家事に追われながらも父親から朝鮮の文字をならい、夜おそくまで勉学にいそしんだ。

女史は早くから搾取階級にたいする強い憎しみをいだき、地主が農民の膏血をしぼりとるのだということを村の婦人たちに教えたりしていた。

女史が十五歳のときだった。初夏のある日のこと、畑仕事から帰ってきた女史は、汗だくで機(はた)を織っていた隣家の婦人が泣きじゃくる背なかの子どもをあやし疲れ、いまにも泣きだしそうな顔をしているのを見た。女史はすぐにかけよってその婦人の背なかから子どもをおろすと、自分がおぶって懸命にあやしはじめた。しかし、子どもは

泣きやむどころか、かえって火がついたように足をばたつかせて泣きわめいた。金持ちの子どもがそばでたべているおいしそうな餅、それがほしかったのだ。歯をくいしばるようにして機を織っていた婦人は、いよいよがまんがしきれなくなったのか、やにわにとびだしてくると、ぶるぶるふるえるこぶしでわが子をぶとうとした。見かねた女史は母親の手をおさえ、つぎのようにいった。

「おばさん、一日ぢゅうおなかをすかしているこの子に、いったいなんの罪があるというのでしょう。ぶたれていいのはほかにいるはずです。かわいい子どもに餅一つたべさせることができないほど、なにもかもしぼりとってゆくものたちとたたかうことこそ、ほんとうではありませんか。わたしたちが毎日、汗水たらしてつくったお米を地主がそっくりとりあげていくのをおばさんも知ってるでしょう。わたしたちの暮らしが苦しくなるばっかりで着るものさえ満足になく、毎日ひもじい思いをしているのも、みんな悪魔のような地主どものせいですわ。おばさんのつらい気持ちは、わたしにはよくわかります」

その婦人は、じゅんじゅんと説く女史の話をきくと、わが子をひしとだきしめ、矛盾だらけの世のなかをのろうかのように、憤怒の涙をいっぱい目にうかべていた。

りっぱな教養と気高い品性をかねそなえていた女史は一九〇八年、十七歳のときに金亨稷先生と結婚した。家族が十二人もいる貧しい家庭の長男の嫁となった女史は、舅と姑によくつかえ、義妹ともなかよく、家事のきりもりもじょうずでたちまち村の評判となった。

女史が江東郡古邑面東三里で、夫の活動を手つだっていた一九一七年のお盆のときのことだった。となりの家から餅が一皿とどいた。毎日おかゆをすする生活をしながらも女史はその餅に手をつけず、万景台の姑がきたときの用意にと、餅をそっくり水がめのなかにしまっておいた。ところが姑は約束の日から一週間がすぎてもやってこなかった。女史は朝夕、水がめの水をとりかえながら姑のくる日を待った。

そして十日もすぎてから姑がたずねてきたとき、はじめて女史はその餅をさしだした。すべてをさとった姑は、「ほんとうにありがとう。おまえの心づくしは一生忘れません。真冬の雪のなかからイチゴをさがしだしたという昔話がありますが、おまえの真心はそれ以上ですよ」と感嘆し、目をしばたたいた。

このように女史の心根はやさしく美しかったが、日本の侵略者にたいする憎しみと怒りは炎のようにはげしく強かった。

女史は革命家のりっぱな妻として、せわしい家事のきりもりをてきぱきとやってのけながらも、夫の活動を懸命に手つだった。そして朝早くから夜おそくまで働きつづけながら、革命活動にたずさわる夫をたすけることにかぎりない生きがいを感じていた。

また女史は、夫の同志たちの活動をも骨身を惜しまずたすけた。暮らしは貧しかったが夫の友人たちは朝晩よく家に出入りした。女史は自分のひもじさをこらえ、つねにほほえみをうかべて心からかれらをもてなし、夜どおしで汗まみれになった衣服を洗ったり、ほころびを縫ってやったりした。

夫の友人たちにたいする女史の心づかいは、万景台から江東、中江鎮、臨江、八道溝、撫松、安図（アンド）にいたる生活のなかでも、つねにかわることなくつづけられた。

こうして康盤石女史は、侵略者たちの迫害が影のようにつきまとっていたきびしい情勢のなかでも、ひたすら祖国の独立を信じて生きぬいた。

女史といっしょに生活したことのある龠（ユ）さんは、当時のことを回想してつぎのようにのべている。

「康盤石女史とわたしは、おおぜいの革命家たちにごはんを炊いてあげたり、着物を洗ってやったりしました。わたしはそのころ、こうした努力がなにか無意味なように思われてならなかったものですから、ある日、康盤石女史に、『姉さん、いくらこんなことをしたって、なんの得にもならないんじゃないかしら。朝鮮がいますぐにでも

独立するみたいに独立、独立っていうけど、何年たっても同じじゃないの。そんなことばは、そう信じられないんじゃないかしら……』といったところ、女史は、『なんてことをいうの。美しくゆたかな実というものは、いつもおそくなってからみのるものなのよ。わたしたちはいま苦しい思いをしているけど朝鮮はきっと独立します。もうじきにね。そしたらいっしょに祖国へ帰ってしあわせに暮らしましょうよ』といわれたのです」

女史は、金亨稷先生が亡くなってからもこの信念をまげなかっただけでなく、みずから夫の遺志をうけついでたたかった。白山学校をつづけてゆくために、あちこちかけずりまわっては基金を集めたりした。そして女史は、三人の息子を革命の道へとむかわせた意志の強い革命家の母でもあった。

将軍が武装闘争の準備のため安図県興隆村(フンリュン)で教鞭をとり、敵の目をさけながら地下活動をしていたときのことを当時、その村に住んでいた李(リ)老人はこう語っている。

「ある晩のことでした。わたしは夜警で村じゅうをまわっていましたが、いつものように学校のまえまでいって、なんの気なしになかをのぞいて見たんです。すると、こんな夜ふけに康盤石女史がかまどのまえにかがみこんで火を燃しておられたんです。しかもふしぎなことに、たき木をチマ(スカート)にくるんで一生懸命に折っていなさるんですよ。わたしはまえに、康盤石女史がからだの具合を悪くしなさったという話をきいていたもんですから、きっと手でも痛くてそうなさっているんだろうと思い、ご苦労をなぐさめてあげるつもりでそばまでいったんです。すると、あの方はわたしを見ていそいでたちあがりながら、大きな声をださないようにと、ご自分の口もとに指をあてて合図をしました。そして外へでると、『成柱の帰りがあんまりおそいのできて見ましたら、あんな冷たいオンドル部屋(床下で火をたき数条のみぞに煙をとおして保温する朝鮮の暖房装置)で夢中になって本を読んでいるじゃありませんか。勉強のじゃまになってはと思って音をたてないようにたき木を燃やしているんですよ』と小声で

おっしゃるのです。なんとりっぱな母親でしょう。わたしはつくづく感心したものです」

女史はまた、将軍の革命活動をはげましただけではなく、直接それに協力することもたびたびあった。

将軍が撫松で青年運動を指導していたときのことである。ふとしたことから将軍は四、五名の同志と敵に包囲されてしまい、それを突破するためにはどうしても武器が必要だった。ところが、その武器は万里河（マンリホ）までゆかなければ手にはいらなかった。このとき女史は、身の危険をもかえりみず敵のきびしい警戒網をくぐりぬけ、万里河へと走った。

女史は万里河の同志から二梃の拳銃をうけとると、「弾丸をこめてちょうだい。引き金さえひけばいいように」とたのんだ。むろん女史は拳銃のあつかい方を知らなかった。

敵の目をあざむくため、あらかじめ準備していった牛肉のなかに拳銃をかくした女史は、それをかごにいれると頭にのせ、いそいで帰ってきた。

拳銃をうけとった将軍は、弾丸がこめてあるのに気がつき、おどろいてそのわけをたずねた。すると女史は、さりげなくこうこたえた。

「もし敵があらわれたら、だまっているわけにはいかないでしょう。わたしにできることはするつもりでしたよ。あらわれたとしても、せいぜい二、三人の敵でしょうから万一のときはと思ってね」

女史は病弱の身であった。そのうえ生活はますます苦しくなるばかりだった。家には夫の友人だけではなく、将軍の同志たちも足しげく出入りした。

しかし女史は、病と貧困にさいなまれながらも将軍の仲間たちをわが子のように大切にし、食物や衣服はむろん、わずかばかりの貯金をはたいてまでかれらの活動をたすけた。

その当時、女史といっしょに暮らしたことのある蔡周善（チェジュソン）さんの回想によると、将軍の同志たちはだれもがこうい

っていたという。

「どんなぜいたくなごちそうでも、将軍のお母さんが心をこめてつくってくれたあの山菜料理やヌカ餅には遠くおよぶまい。成柱同志のお母さんは、ぼくらみんなのお母さんだ。あの尊くあたたかい心づくしを思うたびに、もっともっと革命のためにがんばらなくては、という気持ちになるんだ」

このように、女史は若い革命家たちのよき母親であると同時に、みずから革命活動にくわわった婦人闘士でもあった。

金亨稷先生の亡きあと、女史は婦女会で活動した。一九二八年からは白山地区婦女会の会長として、撫松鎮を中心に、その周辺の部落や遠く万里河、大営（ターイン）、知响屯（チシャントウン）、万良屯（マンリャントウン）、三道花園（サムドハウオン）など広はんな地域で活躍した。女史は夜学や講演、解説などの方法をつうじて、朝鮮の婦人たちを祖国独立と女性解放のたたかいにふるいたたせ、彼女たちを革命組織にかたく結集させた。また女史は、将軍が指導した秘密組織に参加してセナル少年同盟（セナルは新しい時代の意味）や反帝青年同盟の仕事を直接手つだったりした。

文字どおり、遠くけわしい茨の道であらゆる苦しみにたえ、革命家の妻として、母として、また自身を革命の闘士としてたたかいぬいてきた康盤石女史は、世に勇名をとどろかせはじめた将軍の凱旋の日を待たずに、一九三二年七月三十一日、ながい病苦のすえ満四十歳でその生涯をとじた。

女史は臨終をまえに、つきそいの隣家の婦人にこう語ったという。

「……わたしが死んだあと、息子の成柱がたずねてきましたら、どうかわたしにかわって成柱をはげましてやってください。でも、まだ日本の侵略者たちがいばりちらし、朝鮮の独立がまだ成就しないうちに帰ってきましたら、わたしの墓を動かしてはならないとつたえてください。……しかし成柱にかぎって、たたかいの途中で帰ってくるようなことはしないでしょう。祖国が解放されたらあなたも一度、万景台へいってごらんなさい。いいところ

ですよ、ほんとうに。……日本の侵略者さえいなければ、だれがこんな遠い、こんなにさびしい、こんなにつらい異国の空のしたで暮らすものですか……」

このことばのなかには、祖国光復と故郷にたいする康盤石女史の気高いねがいと、息子へのつきない愛と信頼と、侵略者への炎のような闘志がひめられていた。

偉大な人物のかげには、かれを育て導いたりっぱな父母がいるものだという。これはまさに、将軍の場合をさしていう世のたとえでもあるかのようだ。このようなたぐいまれな両親がいたからこそ、金日成将軍は青年期をむかえると早くも祖国と人民の運命を一身にになう偉大な指導者として、ひろい歴史の舞台に登場したのである。

3　少年の日々

金日成将軍は幼いとき、家ぢゅうからたいへん愛された。祖父母は、あとつぎの孫である将軍をとくにかわいがった。万景台へ移った金膺禹先生からかぞえると将軍は曽孫にあたる。

当時二十代の青年であった金亨稷先生は、独立運動にたずさわるようになってから家庭をかえりみることができなかった。しかし、どんなにいそがしいなかでも子どもの教育にはとくに深い関心をはらった。

先生は、将軍に大きな夢と期待をこめてつぎのような子守歌をつくった。

朝鮮の子よ　いとし子よ
すくすくのびよ　早よのびよ
そして明日にも小学校

家では孝行　となりにゃなかよし
国のためには英雄に
祖国の英雄に　早よ育て

幼い将軍は、母のふところでこの歌をききながら育った。
性格は大胆で快活だった。両親は、幼い将軍のこのような気質をのばすことに心をくばった。将軍がひどいいたずらをしたときでも、そこに後日、豪胆な性格を形成するきざしが少しでも見えたときには頭からしかったりせず、そのたのもしい気質をのばすように導いた。
将軍が四、五歳のときであった。
近所の人たちが金を集め、ピョンヤンの蓄音器商から蓄音器をかりてきて正月をたのしくすごそうとしたことがあった。
蓄音器からは犬の鳴き声にあわせて、いくぶんふざけたような「犬づくし」の節が流れだした。蓄音器をはじめて見る幼い将軍には、それがとてもめずらしかった。
このときだれかが冗談に、このなかには子犬がはいっているといった。
幼い将軍は目をまるくした。そんなはずがあるだろうか。蓄音器のなかで子犬が芸をするとは——。
将軍はおさえがたい好奇心にかられた。そして、おとながいないあいだに金づちでレコードをわってみた。子犬はいなかった。こんどは刃物で蓄音器のボックスをこじあけようとした。
これを見つけたおとなたちは、びっくり仰天した。かれらは幼い将軍が、その当時の価格からするとわらぶき家一軒の値段にも相当するような蓄音器をこわしてしまったのだから、えらいことになったと心配した。

しかし金亨稷先生は声をたてて笑いながら、こわれた蓄音器の修理費は自分がはらうから心配することはないといった。

その夜、父によばれた将軍は、いよいよ大目玉をくうものと覚悟した。ところが先生は静かな口調で、蓄音器のなかに、犬かなにかがほんとうにいたのかとたずねた。

なにもいなかったというわが子のこたえに、先生は笑いながら蓄音器というものが音をだす器械であることをわかりやすく説明し、人間が蓄音器だけでなく飛行機のような複雑な機械も発明したこと、つきることのない人間の才能は、これから先もさらにおどろくべき機械をつくりだすだろうことなどを話してきかせた。

幼い将軍の心は漠たるものではあったが、人間の才能と創造力にたいする大きな夢でみたされた。

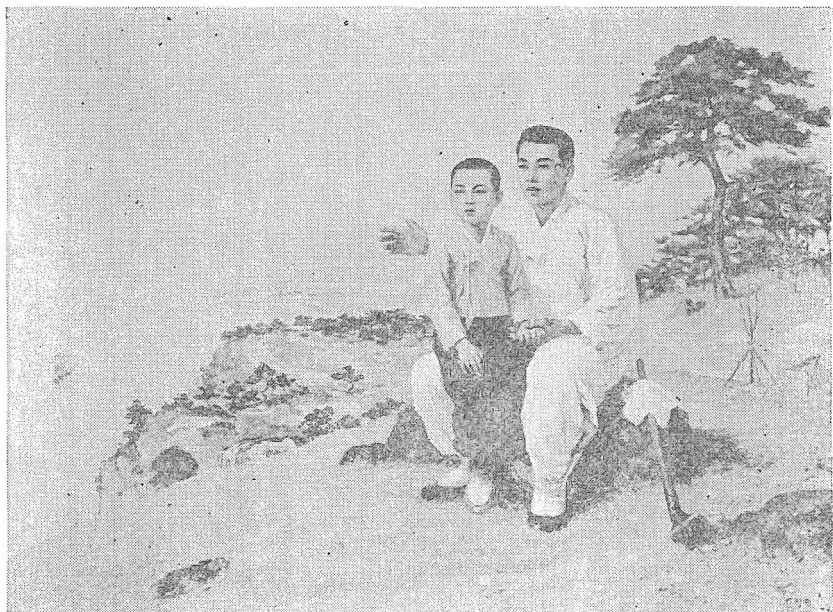
幼い将軍は木の枝で乗馬ごっこをやったり、そりにのってたのしんだり、わらや布ぎれでまりをつくっては一日じゅうそれをけって遊んだりした。

だがある日、将軍は着物がやぶれ、わらじが早くいたむのを気にしたのか、そり遊びやまりけりをぷっつりやめてしまった。

これに気づいた康盤石女史は、わが子をよんでこういった。

「おまえが強く丈夫に育つのなら、着物がやぶけるくらいなんでもないんですよ。わたしがよけいに木綿を織ればすむことだからね。さあ、そんなことを心配しないで思いっ切りまりをけり、そりにのっておいで」

ここには、人間が物に左右されてはならないという女史の考えがしめされていた。

また金亨稷先生は、よく幼い将軍をつれて万景峰にのぼり、美しい景色や史跡などを見て歩きながら、それにまつわる物語を話してきかせた。大同江を攻めのぼってきたアメリカの海賊船シャーマン号を一挙に焼きはらった話とか、外敵を勇敢に撃退した乙支文徳、姜邯贊（カンガムチャン）（高麗時代の愛国的な名将で、すぐれた政治家。十世紀から十一世紀にかけ

父親から祖国についての話をきく幼年時代の金日成将軍

て侵入してきた契丹族の大軍を全滅させ、国の栄誉と独立を守りとおした）、李舜臣などといった愛国的な名将の話、そして朝鮮侵略の頭目伊藤博文をたおした安重根(アンジュングン)の話など、どれも幼い将軍の胸に勇気と愛国心をつちかうものばかりであった。

しかし、将軍の家庭が貧しいということにはかわりなかった。将軍は一家の宝ではあったが、盆正月でさえ米のご飯を口にすることはできなかった。日本の官憲と地主の収奪はまったくひどかった。いつも食卓にだされるのは稗(ひえ)がゆであった。とうもろこしか粟のおかゆなら、まだいい方であった。

将軍は六歳のとき、反日運動に参加していた父について平安南道江東郡古邑面東三里内洞部落へ移った。しかし朝鮮国民会事件によって父が検挙されピョンヤンの監獄へ移送されたため、将軍はふたたび母とともに万景台に帰った。

ある日、将軍は母とともにピョンヤンへでかけた。監獄にとじこめられた父と面会するためだった。

暗くじめじめした面会室には、ひどい拷問によっ

てかわりはてた無残な父の姿があった。七歳の将軍は幼な心にも凶悪な日本の侵略者にたいする憎悪をはげしく燃やし、怒りの涙を流した。
後日、母はわが子の手をとりつぎのようにいいきかせた。
「あの大同江の氷がとけ、青葉の季節になってもお父さんは帰ってこないでしょう。おまえのお父さんは、奪われた祖国をとりもどすためにたたかったことが罪だというので、いま、とらわれの身となっているのです。おまえも早く大きくなってお父さんの気高い志をついでおくれ」
このとき将軍は、父の仇はきっと自分がうってみせると母にいったという。将軍が戦争ごっこに熱中しはじめたのは、ちょうどそのころからであった。
木の枝でつくった刀を腰にさげ、岩にのぼっては胸をはり、村の子どもたちに号令をかけるときの将軍の姿は、子どもながらもみごとなものであったという。そしてどんな遊びでも、はじめたら勝つまでやめなかった。
将軍はまた、友だちのあいだのいさかいをまとめることがじょうずで、「陸軍判事」というあだ名がついたほどであった。
しかし家に帰ると、将軍を待ちうけている家族たちの顔には、いつも暗いかげがやどっていた。
ちょうどそのころ、金亨稷先生は出獄しても家にもどらず、そのまま中江鎮で活動をつづけていたし、舅とともに留守宅を守っていた康盤石女史は日本官憲の脅迫と監視のもとで暗い日々をおくらねばならなかった。
父の逮捕と獄中生活、それにつづく一家の離散――こういった悲劇から幼い将軍の心は、日本官憲にたいする憎しみと国を奪われた悲しみとにうちふるえた。
やがて全朝鮮をゆるがす三・一人民蜂起がおこった。全国的な蜂起に呼応し万景台一帯でわきおこった激烈な反日抗争は、当時八歳であった将軍の心を強くとらえた。家から路上にとびだす怒りの群衆、鋤や鍬をふりかざす手

と手、熱風をまきおこす絶叫、万歳の声――。そして、熱弁をふるい檄をとばし、群衆を指導する母方の祖父（康敦煜先生）と叔父（康晋錫先生）の姿――。これらすべての光景は、幼い将軍の目にはさながらたたかいの絵巻物のように映った。

憤激した群衆は一気にピョンヤン城におしよせた。すすんでデモにくわわった将軍は、はだしのままはきものを手にもち、舞いあがるほこりにまみれながら普通門（ポトンムン）までの数キロの道のりを走っていった。そして将軍は、勇敢な群衆が武装した敵を恐怖におとしいれるのを目撃し、その威力に強い感動をおぼえた。

あわてふためいた日本の侵略者たちは、憲兵隊と警察を総動員してデモの隊列に発砲した。幼い将軍は、白い着物を真っ赤にそめてたおれる同胞たちの姿に目をうるませた。

ピョンヤン城内にまで進出して果敢にたたかった群衆は、その後も万景峰に集結し、数日のあいだラッパを吹きならし、太鼓をたたきながら「独立万歳！」を叫んで侵略者たちとたたかった。

また江東郡では、朝鮮国民会、碑石契、学校契などにもうらされ、金亨稷先生の指導をうけていた二百余名の青年たちが、東三里、道徳里（トドク）、麦田里（メクチョン）、香木里（ヒャンモク）など各地の群衆一千余名をひきいて江東邑に肉迫し、敵に大きな打撃をあたえた。

朝鮮人民は、全国いたるところで武装した敵と正面からぶつかり、犠牲をおそれずたたかった。最前列にたっていた人びとがたおれると、うしろの隊列がこれにかわってたたかい、その隊列がたおれると、またつぎの隊列が先頭にたって敵に肉迫した。

ソウルでは、弾圧に血まなことなった悪らつな日本の侵略軍が、国旗をふりかざして独立万歳を叫ぶ一女学生の右腕を軍刀で切っておとした。だがそれにも屈せず彼女が国旗を左手にもちかえて万歳を叫びつづけるや、悪鬼のように狂いたった日本軍はその左腕までも切りおとし、なおもひるまず万歳を叫ぶと、今度は彼女の胸を軍刀でつ

きさして虐殺した。

しかしこの勇敢な女学生は、息をひきとるその瞬間まで「朝鮮独立万歳！」を叫びつづけたのである。

朝鮮全国百十九の市と郡のうち、じつに百十七の市と郡が参加した全民族的なこの蜂起は、朝鮮人民の燃えたぎる愛国心と日本の侵略者たちにたいする民族的な怒りの爆発にほかならなかった。

しかし厚かましくも、この闘争の指導者と自称する三十三人の「民族代表」たちは、人民の闘争がかれらの予期していたのとはいちじるしくことなって、はげしく燃えあがるのにおそれをなした。かれらが期待をかけたのは、ひたすらアメリカ帝国主義であり、ウィルソンがとなえたいわゆる「民族自決論」であった。

ところで、この「民族自決論」の本質はなんであっただろうか。

それはアメリカ帝国主義者が、ロシアの十月革命のおよぼす世界的な影響をくいとめ、資本主義世界において自己の覇権を確立しようとする目的以外のなにものでもなかった。「民族自決」という欺瞞的なスローガンのもとに多民族国家である新生ソビエト連邦を内部から切りくずし、さらには弱小民族の独立闘争を失敗させるため、これらの民族をたがいに離間させながら一方では敗戦国を犠牲にし、その領土をせしめようという狡猾な目的をもったものであった。

このような侵略者——、ましてシャーマン号事件以来、朝鮮に侵略の魔手をのばしてきたアメリカ帝国主義者に救いをもとめようとした「民族代表」の試みは、論ずる余地もないものであった。

朝鮮にたいするアメリカ帝国主義の露骨な侵略は、すでに十九世紀の中葉からはじまっていた。アメリカの政治家ターネットは、その著書『ルーズベルトと露日戦争』において、「アメリカが、一八六五年から七〇年代、東アジアにおける海軍基地獲得問題を審議したとき、朝鮮は未来の根拠地の一つとして予見されていた」とはっきりのべている。

こうした計画にもとづき、アメリカはたえず朝鮮にたいして経済、文化、軍事的侵略をつづけてきた。
　アメリカ帝国主義侵略者は一八六六年八月、シャーマン号の侵入を皮切りにして朝鮮にたいする流血的な侵略史の幕をあけた。かれらは一八六八年、大院君（テェウォングン）の父南延君（ナムヨングン）の墓を盗掘し、一八七一年（この年が辛未年（かのとひつじ）であったため、この事件を辛未洋擾（シンミヤンヨ）という）には、いわゆる「朝鮮遠征艦隊」なるものを江華島（カンファ）に侵入させ、一八八二年には、不平等きわまりない「朝・米修好通商条約」を強制的に締結させた。そして朝鮮人民の心と経済的な命脈をおさえるために宗教、文化ならびに経済的侵略をたくらむなど一連の直接侵略を強行するとともに、朝鮮侵略に血まなこになっていた日本帝国主義にたいしても支援するなど、強盗を地でいく暴力沙汰から狡猾きわまりないペテンにいたるまで、ありとあらゆる手段をろうしたのである。
　一九二四年にいたってはじめて明らかにされたことであるが、一九〇五年七月、米陸軍長官タフトと日本の総理大臣桂との秘密会談がおこなわれたとき、アメリカはなんのためらいもなく、日本が朝鮮を支配することを承認した。そしてそのかわり日本帝国主義は、アメリカ帝国主義が朝鮮でもっているあらゆる経済利権を侵さないこと、またアメリカの植民地フィリッピンには手をださないことなどを約束させられた。こうしてアメリカ帝国主義は、その後も日本帝国主義の朝鮮占領と植民地支配を積極的に支持したのである。
　三・一人民蜂起がおこると、アメリカ国務長官代理は、「日本が朝鮮を帝国の一部としたことがすでに明白であるため、現在の朝鮮をむかしの状態にかえそうという提案はまったく不可能である」と断言した。
　こうした凶悪なアメリカ帝国主義に依存しようというものたちとは関係なく、勇敢に蜂起した愛国的な朝鮮人民は、決死的な救国闘争をくりひろげることによって日本の侵略勢力に甚大な打撃をくわえ、全世界に大きな衝撃をあたえた。
　反日蜂起の嵐がすぎ去ると、ふたたび暗たんとした月日が流れた。

そうしたある日、将軍の父が思いがけなく帰郷した。

革命闘争のため異国の地へむかおうと決意した金亨稷先生は、妻子をいっしょにつれていくために帰ってきたのである。

こうして八歳の将軍は、なつかしい故郷の山河に幼年時代の思い出をのこし家族とともに見知らぬ遠い国へと旅立った。

将軍の一家は中江鎮でしばらく暮らしたのち、鴨緑江をこえて中国の通化省臨江に移り、さらにその後、長白県の八道溝へと移った。

将軍はこの八道溝で小学校に入学した。

部屋一間と台所しかない、やっと風雨をしのげるようなわらぶき小屋が一家の新しい住居であった。金亨稷先生は一間きりの家を三つにしきりなおし、一部屋を薬局にして広済(クヮンジエ)医院という看板をかかげた。

やがてこの医院は、遠方の人びとのあいだでもたいへんな評判となった。貧しい患者にたいしては無料で治療をしたこの医院は、毎日のようにたずねてくる患者と訪問客でごったがえした。

将軍は患者の治療にうちこむ父の姿を見て、幼な心にも人間にたいする愛情の尊さというものを学んだ。しかしそれよりも大きな感銘をうけたのは、父が奥の部屋で反日闘士たちとおこなう秘密会合であり、そこで父が語る祖国と故郷の山河を奪いかえすための熱のこもった話をきくときであった。

金亨稷先生はときどき、幼い将軍に手紙や通信の連絡などのような重要な任務をあたえ、遠くまでいかせたりした。そのたびに将軍は、いつもよろこんでその任務をはたしてきた。尊敬する父親を手つだって重要な仕事をするということが誇らしかったのである。またときには、通信連絡のために日本の警察のきびしい監視をくぐりぬけ、国内までいくようなこともあった。

将軍がかよっていた学校は、四年制の小学校であった。将軍は全科目にわたって熱心に勉強し、あらゆる点で抜群の成績をおさめた。たくましいからだにはすでに気骨があふれ、また敏捷で指折りの運動選手でもあった。そして、どんな困難にぶつかっても笑いを失わない将軍の楽天的な気質は数多くの学生たちに親しまれ、厚い信頼をうけた。

幼いときから戦争ごっこの大将であった将軍は、見知らぬ異国の地にきても「日本の侵略者狩り」という遊びを考えだし、その先頭にたって号令をかけたりしながら元気に遊んだ。

友だちも多かった。しかし民族的なさげすみをあらわすものは決して容赦しなかった。そのころ学校では、満州の官吏や地主の子どもたちが、なにかにつけて朝鮮人学生に「亡国奴」とか、「朝鮮乞食」とかいってさげすんでいた。こうした子どもたちの大将格だったのは学校でも一番年長の生徒で、しかも馬鹿力があるというので全校生に知られた中国反動警察の息子の「のっぽ」であった。

これを見てがまんができなくなった将軍は、ある日、この「のっぽ」を一撃のもとになげたおし、かれらが二度と朝鮮人学生をばかにできないようにした。

だが将軍は、日本帝国主義侵略者を追いだし、国をとりもどさないかぎり、民族的な蔑視からまぬがれることはできないということを骨身にしみて感じないわけにはいかなかった。

将軍は学校から帰ると父から朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理を教わり、愛国名将の伝記をはじめ、世界偉人伝など多くの書物を熱心に読みふけった。こうした日々をすごすにつれ、将軍の脳裏には、どんなことがあっても祖国をとりもどさねばならないという考えが、ますます強く刻みつけられていった。

このころ、かねてからわが子の将来についていろいろと思いをめぐらせていた金亨稷先生は、夫人と相談したうえで幼い将軍を祖国朝鮮で勉強させようと決心した。

先生のこの措置には、深い意図がひめられていた。――息子は祖国を知らなければならない。日本帝国主義の軍靴に踏みにじられている祖国の惨状を自分の目で見きわめ、同胞たちの悲惨な生活を目撃することによって思想をきたえ、闘志をつちかう必要があった。金亨稷先生は、祖国を救うべきわが子にとってこれ以上の学校はないと考えたのである。

これはまた、将軍にとってものぞむところであった。将軍はよろこんで父のことばにしたがった。行先は万景台の近くにある七谷の母の実家であった。

幼いわが子をけわしい千里の道（当時まだ満浦線は敷設されていなかった）へ一人で旅立たせることになった康盤石女史は、やっとの思いでその悲しみにたえた。

旅立つわが子をまえにして先生はこういった。

「まず自分の国の実情をよく知っておくことが大切だ。……他国(ひと)のものを学ぶのも、自分の国のものをよりりっぱにし、いっそう美しくするためなのだ」

一九二三年一月三十日の朝早く、十二歳の将軍は旅じたくもかいがいしく、両親と幼い弟たちに見おくられて八道溝の渡し場をはなれた。ふところにはわずかばかりの旅費と父が書いてくれた七谷までの地図がはいっていた。その地図には道すじばかりでなく、宿泊するところまでくわしく書きこまれ、江界(カンゲ)にはいってからと、ピョンヤンについてからは電報をうつことまでしたためてあった。

朝鮮についた将軍は、葡坪、厚昌、江界をすぎ、雪深い山とけわしい峠をこえ、遠い道のりをひたすら歩きつづけた。おとなでさえ一人旅は無理だといわれるけものの住む北部山岳地帯や、交通手段さえない冬の山道――。ときには人家一つ見えない山道をたった一人で十数キロも歩かねばならなかった。まさにそれは勇気と忍耐なくしては不可能な遠征のようなものであった。

途中ですれちがう旅人は、だれもがおどろきの目を見はった。しかし、こうした旅人のなかには、故郷の山河と祖国をあとにして浮雲のように流浪の旅にでた人も少なくなかった。満州が住みよいといううわさを信じてわずかな荷物を背にしてゆく人びと、小走りに親のあとからついていく幼い子どもたち、のこりわずかな余生さえ奪われ、つえにすがって重い足をはこぶ白髪の老人——。

こうした光景は、将軍の胸をかきむしらずにはおかなかった。そして全朝鮮が救いの手を待ちわび、身もだえしているかのように思われ、侵略者をうたなければならないという炎のような怒りが、いっそうはげしく燃えあがるのだった。

将軍は、ときには道すじの木賃宿で、そうした流浪の旅人とともに一夜をすごし、かれらの恨み多い身の上話に耳をかたむけた。

そうしたとき、いつも思いおこすのは、かつて父がいった「国を奪われた人民は、とむらいのある家の犬にも劣る」ということばであった。

きびしい冬のさなか、多くのにがい思い出を胸に千里の道のりを踏みこえてきた将軍は、満州を出発して十三日目に、無事に万景台の祖父の家にたどりついた。

思いがけなく帰ってきた孫をむかえて、祖父母と叔父夫婦は、よろこぶよりも先におどろいてしまった。

祖母は、将軍をひしとだきしめてこういった。

「おまえ、ほんとうに一人できたというのかい。おまえのお父さんは虎よりもむごいことをする人だよ」

「おばあさん、そうじゃありません。ぼくはもう子どもじゃないんだもの、国境をこえるくらい平気ですよ」

ほおに大きなえくぼをつくって笑いながらこうこたえた将軍。——いつのまにかりっぱな若ものに成長した孫のりりしい姿をたのもし気に見やって、祖母はこうつぶやくのだった。

「そうかい、やっぱりおまえは亨稷の息子だね！」

将軍はすぐ七谷の彰徳(チャンドク)学校に編入し、母の実家から通学することになった。

七谷は万景台からピョンヤンにむかって四キロくらいはなれたところにある農村であった。ひろびろとした村の入口、小川の堤にははんの木が茂り、裏山はくぬぎと松の木でおおわれていた。

彰徳学校の校舎は、裏山の傾斜にそったカギ型の、さして大きくないかわら屋根の建物であった。

将軍の母の実家は、学校にほど近い小じんまりした農家であった。

康敦煜先生の一家は孫がきてからというもの、なんとなく活気をおびてきた。それまで校監の家だからと遠慮していた生徒たちも足しげく出入りするようになった。

将軍は、ならったことのない科目に追いつくために、他の生徒よりも数倍の努力をしなければならなかった。まえの年につかった教科書をかりて自習をしたり、担任の先生が複式授業をする場合には、すすんでとなりの組の授業をうけたりした。また母方の祖父一家の野良仕事を手つだったり、万景台の祖父の家をたずねることもおこたらなかった。

将軍は書物を手にすると、いつも時間のたつのを忘れた。

ある日、万景台の家から牛をつれて草をたべさせにでかけたとき、日の暮れるのも知らず読書に夢中になり、牛だけが先に家に帰ってしまったことがあった。将軍は、うす暗くなった川岸までむかえにきた祖母のよび声ではじめて気がつき、あわてて牛をさがしはじめた。

将軍が七谷にきて二か月ばかりたつと、おくれた学科にも追いつくことができるようになり、学期末にはすぐれた成績をあげて家ぢゅうのものをよろこばせた。朝鮮語、算数、習字などは、将軍がとくに得意とする科目であった。しかし、日本語だけは力をいれなかった。

あるとき将軍は、日本語の教科書（『国語読本』と書かれていた）をもって康敦煜先生の部屋にゆき、こうたずねた。
「おじいさん、この本で勉強しなければならないのですか？ なぜ日本語の本を『国語』といわなければならないのです？」
祖父は興奮している孫をそばにすわらせ、しずんだ口調で話しはじめた。
「わが国にはね、虎におそわれても気さえたしかにもてば死なない、という諺があるんだよ」
こうきりだした祖父は、まともに教育さえうけられない朝鮮人が、ならいたくもない日本語を勉強しなければならなくなったいきさつについて話してきかせた。
当時、日本の侵略者たちは朝鮮人民を愚民化するため、わけても青少年を「皇国臣民」化するために普通学校（小学校）から教育用語として日本語を強要し、朝鮮の歴史や民族文化については、これを教えることを全面的に禁止した。
そこで反日運動家たちは、愛国思想をひろめるため、あらゆる障害をのりこえて私立学校や塾を建てた。彰徳学校もこうした学校の一つであった。しかし「総督府」は、自分たちが指定した教科書を使用することと、日本語を必ず教えるという条件をいれなければ絶対に学校の運営を許可しなかった。
こうした事実を話してから、祖父はつぎのようにつけくわえた。
「国を奪われたためにこんな目に会うのだ。だが、かれらのつくった制度をうまく利用し、どんなことがあっても朝鮮について、もっともっと学ばなければならない。日本語のような科目をならっても、正しい目的のために利用すれば、それはそれでまた役にたつというものだ」
自分の部屋に帰った将軍は、ナイフで『国語読本』の国という字をけずりとり、そこへ日の字を書きこんで「日語読本」となおした。そして、その日から『日語読本』は本箱のなかにしまわず机のしたにおくことにした。

またそのころ、将軍は祖父からもらった父の詩集を読みふけった。その詩集には、朝鮮の史上に名をはせた数多くの愛国詩人や英雄、名将の詩がおさめられていた。

将軍はその多くの詩のなかでも、とくに南怡（ナムイ）将軍（十五世紀の朝鮮の愛国的名将。幼くして武勇にすぐれ、女真族の侵入を撃退した功により若冠二十六歳で兵曹判書―陸軍大臣―の重責についたが、ざん訴によって二十代の終りに刑死した）の豪胆で気迫にみちた詩を愛誦した。

白頭山ノ石ハ刀（かたな）ヲ磨イテ尽キ
豆満江ノ水ハ軍馬（うま）ニ飲マセテ無シ
男児二十ニシテ未（いま）ダ国ヲ平（おさ）メエズンバ
後世誰カ大丈夫（ますらお）ト称（い）ワン

この詩を声高くそらんずると将軍の心はいつも高なった。そしてときには、祖国の敵をうつ壮烈なたたかいのさなかで猛虎のように雄飛する自分自身の姿を描きながら、深い思いにふけることもあった。

詩集のなかで将軍の心をかきたてたもう一つの詩は、父がつくった『挺身歌』であった。

あわれ汝（なんじ）朝鮮民族よ
四千年の青史をほこるはらからよ
代々幸（さち）多かれと願いしに
ああ　いまは国もなき

この悲しみを如何にせん

がんじがらめにいましめられしこの身をば
たちきれよ　同志よ　その手もて
独立万歳を叫ぶ声　いかづちのごと
わたつみを裂き　山ゆるがせよ

南山の草木も心あらば
この悲しみをわかつらむ
東海の魚介も涙あらば
この怒りをばともにせよ

がんじがらめにいましめられしこの身をば
たちきれよ　同志よ　その手もて
独立万歳を叫ぶ声　いかづちのごと
わたつみを裂き　山ゆるがせよ

これは将軍が遠く中江鎮への旅の途中、父からならった悲壮なメロディーのうたの歌詞であった。
なつかしい両親のおもかげとともに、流浪の民のみじめな姿や怒りにふるえる祖国の山河を思いおこさせるこの

歌詞は、幼い将軍の心を大きくゆすぶった。

そのころ、母方の祖父が話してくれた朝鮮の悲惨な状態は、社会の動きに深い関心をよせていた将軍に大きな影響をあたえた。

将軍はピョンヤンにでて、いたるところを見て歩き、あらゆる出来事に注意をはらった。むろん、新しいものにひかれるという少年にありがちな好奇心もなくはなかった。しかし目に映るものといえば怒りなしには見ることができない光景ばかりであり、胸をえぐられるような悲惨な現実だけであった。目につくものすべてが慟哭し、大地をたたいて救いをもとめているかのようだった。

くずれかかったわらぶき小屋の土かべには、税金告知書がベタベタとはりつけてあって、それがおりからの風にはためいていた。重病の子どもに薬も買ってやれずただ神だのみにすがる母親。高官の車のまえをよこぎったというだけの理由で日本刀で背なかを切られた百姓。留置場からは、ムチの音と血を吐くようなうめき声がもれ、それを警察署の塀にしがみついてきいては泣きくずれる女の人――。目に映るもの、見るものすべてが怒りをよびおこすものばかりであった。

緑につつまれたピョンヤン市内の宏大な邸宅では、日本の侵略者たちが酒宴をもよおし酔いつぶれているときに、同じピョンヤンの土城廊（トソンラン）（日本の植民地支配当時、ピョンヤン市内にあったもっとも悲惨なスラム街の名）の貧民窟では、雨がほんの少しばかりふっただけでも付近一帯が泥水につかり、大さわぎをしなければならないような状態だった。ひもじさをうったえて泣きじゃくっていた子どもたちも、いまはもう泣き疲れて声をたてることもできなかった。

こうして幼い将軍は、日本の侵略者を追いださないかぎり、決して国を救うことができないということを身をもってたしかめたのである。

4　祖国よ、また会う日まで！

将軍が両親のもとをはなれてから、すでにながい月日がすぎ去った。それは、じつにめまぐるしい日々の連続であった。将軍はおりにふれて、父母やかわいい弟たちに思いをはせてはいっそう勉学にはげみ、からだを懸命にきたえた。

そうしたある日のこと、万景台の祖父のところからつかいの人がたずねてきた。その人が帰ると母方の祖父は、なぜか顔をくもらせて将軍をよんだ。そして悲しい知らせをつげた。

それは、将軍の父がまた日本の警察に逮捕されたから、いそいで帰ってくるようにという八道溝の母からの知らせであった。

興奮のあまり、将軍はこぶしをかたくにぎりしめたまま口をきくこともできなかった。

一刻も猶予できなかった将軍は、その夜、学友たちと母方の親戚一同の心のこもった見おくりをうけながら万景台へむかった。

朝鮮で中学校まで終えようという計画は、これでくずれてしまった。

故郷のわが家で一夜を明かした将軍は、翌朝早くから旅じたくをととのえた。

そして、いくぶん興奮した口調で祖父や祖母にこうつげた。

「わたくしは父の念願をはたすまでは、日本の侵略者どもを追いだし祖国をとりもどすまでは、二度と祖国にもどらないつもりです」

「よくいってくれた。それでこそ父親の志をつぐというものだ……」

祖母はのどをつまらせた。そばにいた人たちもみな涙ぐんだ。

将軍の旅じたくは質素なものであった。祖母は、はったい粉（米や麦をいって粉にひいたもの）と、むしたさつまいもをいくつかと、祖父が夜なべをして編んだわらじ二足をつつんでくれた。将軍はそのつつみのなかに何冊かの本をいれた。

祖父は、小さくたたんだ紙づつみをさしだしながらいった。

「これは旅費だ。途中でつかうこともあるだろう」

「そんなにたくさんいりません」

「これは、おまえがつかいのこしたお金だ。それにわたしがいくらかつけたしただけだ。さあ、もっておゆき」

朝もやが村にたちこめるころ、将軍は目をうるませる祖父母や叔父夫婦に別れのあいさつをのこし、遠い旅路についた。

ピョンヤンにむかう大通りまででた将軍は、いつまでもなごり惜しげに見おくる祖父、祖母、叔父夫婦らをふりかえりながら帽子をなんどもふった。そして、すぎ去った日々の思い出がこめられている故郷の村や山や川をそのまま脳裏にやきつけるかのように、しばらくは感無量のおももちで見つづけた。

将軍は北へ北へと足をいそがせた。疲れても休まなかった。夜がすっかりふけて歩きにくくなるとはじめて寝ぐらをもとめ、夜明けを待つのももどかしくけわしい道をふたたび歩きつづけた。

こうして、万景台をたってから十二日目に、以前にもとおって見おぼえのある厚昌郡葡坪の渡し場についた。

渡し場には、生きるすべをもとめて涙ながらに故郷をあとにし、満州へ流れてゆく多くの貧しい同胞の姿があった。

目のまえには、国境をなしている鴨緑江が流れていた。

しかし将軍にとっては、この鴨緑江はただたんなる国境、たんなる江(かわ)以上のなにものかがあった。それはひきつづく異郷への移住と数千里の旅路のなかですごした幼年時代と少年時代への訣別の境界線であり、また悲壮なひびきもあるが、はかり知れない深い意味がこめられている新しい領域、新しい世界とのめぐり会いの接線でもあった。

このような感慨にひたっている将軍のかたわらには、祖国との別離をまえにした多くの人びとがたがいに肩よせあって涙ぐんでいた。

朝鮮に生まれ、朝鮮で育ったものであれば、なんの感慨もなくこの鴨緑江をこえることのできる人は一人もいないであろう。この江の流れこそは豆満江(トゥマンコウ)とともに、恨みと怒りにみちた流浪の民と闘士たちの涙がたまってできたものかも知れない。

思えば同胞たちは、すでに遠く十九世紀のなかばごろから群れをなして悲しみの歌をうたいながらこの国境の江をこえはじめた。乙巳(ウルサ)条約（一九〇五年、日本帝国主義が朝鮮の主権を強奪した五か条からなる条約。この年が乙巳年(きのとみ)であったのでこうよぶ）が締結され、日本の侵略者たちの横暴さが露骨になるにつれ、江をわたる人びとの数は急速にふえていった。

亡国の年一九一〇年（朝鮮がいわゆる「併合」された年）からは、その数がさらにふえ、何年もたたないうちに数十万の同胞が満州各地に散らばった。

かれらは、亡国の悲運と追いつめられた生活にたえきれず鴨緑江をわたっていった人びとであり、集団的に江をわたった義兵部隊であり、また三・一運動に参加した亡命者たちであり、あるいは国内で反日秘密結社を組織してたたかい、江をわたった闘士たちであった。

いま十四歳の将軍も父の志をつぎ、遠くけわしいたたかいの道につくため鴨緑江の渡し場にきたのである。

見知らぬ異国へ流れていく同胞たちといっしょに鴨緑江をわたりながら、将軍は胸にせまる悲しみをかみしめ、朝鮮の山河をふりかえってこう叫んだ。

「祖国よ、また会う日まで待っていておくれ！　必ずおまえをとりもどしにくるその日まで！」

祖国が解放されたのち金日成将軍は、このときの心境をつぎのように回想している。

「わたしは十四歳のとき、朝鮮が独立しなければふたたび帰ることはないであろうとかたく決心し、鴨緑江をわたりました。そのときわたしは、だれがつくったかはわからないが、『鴨緑江のうた』というのをうたいながら、いつまたこの地を踏むことができるだろうか、わたしが生まれ育ち、先祖の墓のあるこの地にまた帰ってくる日は、はたしていつのことであろうかと思い、幼な心にも悲しみを禁ずることができませんでした」（『金日成選集』第一巻、朝鮮労働党出版社、一九六三年版十一ページ）。

将軍は無事に鴨緑江をわたって長白地方にはいった。河岸からそそりたつ山の頂上に築かれた城壁と四方に銃口があいている砲台がばかにいかめしく見えた。

八道溝はこのせまい谷間に位置した小さな村だったが、鴨緑江の対岸には厚昌郡葡坪（現在の葡三里）が遠くのぞまれた。

八道溝の家についた将軍は、夢にも忘れることのなかった母や弟たちと再会した。

母と弟たちは、千里の道を一人で歩いてきた将軍をむかえ、うれしさのあまり身のおきどころを知らないほどであった。康盤石女史は無事に帰ってきたわが子をいたわりながら、秀いでてたくましい十四歳の息子をこのうえなくたのもしく思った。

そして将軍の母は、敵に逮捕された父が護送の途中さいわいにも脱出に成功し、いま撫松に難をさけていると話した。

将軍は、心に重くのしかかっていたあせりと心配が一時に晴れるのを感じた。そして、そのときになってはじめて将軍は旅の疲れを感じ、なつかしい弟たちとひざをまじえてすわった。

しかし疲れをいやすまもなく、ふたたび旅にでなければならなかった。

母親は、将軍が夕食を終えるのを待ちかねていたかのように、いますぐここを出発するようにといった。父のいる撫松にゆくため、まず幼い弟たちをつれて臨江に住む父の親友の家へ移る手はずになっており、母は身のまわりを整理してあとからいくというのであった。

将軍にとってはまったく予期しないことであった。千里の苦しい道のりを歩きつづけ、久しぶりで家に帰ってきた自分に、母が二、三日でもいっしょにいてからとはいわず、この真夜中に、すぐここを出発するようにといったからである。

むろん、母親もさびしくないわけではなかった。だが、母親の考えにはもっと深いものがあった。

当時、八道溝の家はきわめて不安な状況におかれていた。敵はいったん逮捕しておきながら逃がした金亨稷先生をとらえようと血まなこになり、いたるところに捜索の手をのばしていた。

かれらがいつ、この家に踏みこんでくるかわからなかった。だから康盤石女史は、わが子をこのような危険にさらすより、むしろ再会の日に、また別れる方をえらんだのである。

将軍は、どんな場合でも大事と私情とを混同しない母の強い性格を知っていたので、その夜のうちに幼い弟たちをつれふたたび出発した。

将軍の母は、遠ざかっていく息子たちを見おくりながら暗い村の入口にいつまでもたちつくしていた。

将軍は二人の弟をつれて無事、臨江についた。

それから数日後、待ちこがれた母も到着した。そして家の主人に丁重なあいさつをすませた母親は、三人の息子

をつれて近くの食堂にはいった。

女史は食事をすませたのち、三人の兄弟がその間どのようにすごしてきたかをきき、あやしい男がたずねてくるようなことはなかったか、家のあるじは親切だったか、おまえたち三人がここにきているのを知っているのはだれだれか、などについてくわしくたずねた。

つねに敵にたいして注意をおこたらない康盤石女史は、そのあいだの動静をくわしくたしかめてからやっと安心したようすであった。明るい表情にかえった女史は、三人の息子たちに今後の生活で注意すべきことや対処すべきことについてさとしたのち、夫の友人の家へもどっていった。

将軍はこのとき、万事に慎重で警戒心をゆるめない母のすぐれた気質をはっきりと知ることができた。奪われた祖国をとりもどすため、崇高なたたかいひとすじに生きる母をもったからこそ将軍は人なみすぐれてりっぱに成長し、燃えるような闘争の情熱をはぐくむことができたのである。

臨江に滞在したのは一か月くらいであった。その間、新把（シンパ）にいっていた叔父（金亨権）も臨江にやってきた。そうしたある日、父の親友がさしむけたつかいの人がやってきた。将軍は母と叔父、それに二人の弟といっしょに、その道案内人にしたがって父のいる撫松の小南門（ソナムムン）通りの家に移った。

金亨稷先生は、獄中での拷問と脱出の途中でうけた凍傷に苦しみ、一時は危篤状態におちいったこともあった。しかし将軍がたずねていったときは、からだもようやく回復し、簡素なものではあったが医院（撫林（ムリム）医院といった）をひらき、そこで革命活動をつづけていた。

久しぶりにわが子と会った父のよろこびは、たとえようもなく大きかった。将軍のりりしい姿をながめ、朝鮮での暮らしのようすをたずねる金亨稷先生の顔には、すでに社会のからくりを見ぬいている青年にたいするような深い信頼の情があふれていた。

また、将軍は父の姿から、自分のことはかえりみず、ひたすら革命のために生きぬく人間の不屈さを感じとった。そして、このようなすぐれた父をもつ誇りと、その父にたいする尊敬の念をいっそう強くしたのである。

金亨稷先生が撫松の小南門通りにかまえた家は、臨江、八道溝のそれと同じように、おもてむきは医院であったが、実際には中国にわたってきた独立志士たちの集合場所であり、国内国外の地下組織と連係を結ぶ重要な拠点であった。

この医院には毎日のように数多くの人びとが治療をうけにきたが、その多くは独立運動家たちであった。かれらは先生と活動方針をねったり、工作任務をおびては国内に潜入していった。

先生は休むことなく革命活動をつづけた。

奥の部屋で見知らぬ客と徹夜で討論をしたかと思うと、夜明けにはわらじのひもをむすんで活動にでかけることがしばしばであった。また、診療にゆくといって家をでては十日も二十日も帰ってこないことがあった。

この往診は、地方の貧しい農民たちを無料で治療しながら反日愛国思想を鼓吹する一方、独立運動家たちと活動を展開するためのものであった。

先生は吉林(キルリム)、樺甸(ファヂョン)などで多くの独立運動家たちと会い、かれらと闘争方針を協議したり、ときには撫松を中心に樺甸、濛江(モンガン)、安図など、周辺の各県に散在して活動していた独立運動家の会議を召集するなど、不眠不休の活動をつづけた。

将軍はこうした父の精力的な活動と、父をたずねてくる不幸な患者たちを見ては、国を奪われること以上の不幸はないということ、そして祖国をとりかえすこと以上の大事はないということを深く肝に銘じたのである。

将軍が故郷をはなれるとき、そしてまた鴨緑江をわたるとき心に誓った悲壮な決意は炎のような情熱となって燃えあがっていた。

そして将軍の胸中に燃えさかるこの情熱の炎は、すべてを託しうるすぐれた思想と闘争方法をもとめて、いっそう力強く、いっそう大きく燃えひろがっていったのである。

第二章　母なる祖国の解放めざして

1　社会主義への道

将軍は一九二五年の春、撫松第一優級小学校に編入した。

ある日のこと金亨稷先生は、将軍が自分の志をうけつごうとする決意をかためていることを知り、いくつかの重要なことがらについて話した。

先生はまず、同志を糾合するための原則と人物を見きわめる方法などを一つ一つ教えながら、「一番大切なことは、同志とのまじわりや人を見る目をやしなうことだ」とかさねて強調した。それ以来、将軍は学校での友人たちとの交際をいっそう慎重にするようになり、家に帰ってはたずねてくる独立運動家たちや、かれらにたいする父の態度などを注意深く見守ったりした。

そのころ撫松では、金亨稷先生の努力によって朝鮮人の四年制小学校である白山学校が設立された。

将軍は、この学校の設立を非常によろこんだ。そしてこれを、民族教育を抑圧する敵とのたたかいによってかちとった一つの勝利だとみなした。将軍はすぐ開校を祝う演芸会をひらき、みずからこれに出演した。

演芸会には父兄や学生たちのほか、教育関係者も多数招かれた。

開幕に先だって将軍が演壇にあがった。将軍は怒りをこめ、日本の侵略者によって祖国を奪われた同胞たちの悲惨な運命について語った。そして最後に、安重根が伊藤博文をたおす内容の劇をこれから上演するとつげ、つぎの

ようにことばをつづけた。

「これは祖国を奪われたものが、その犯罪者にたいしておこなう復讐です。しかし安重根は敵にとらわれ、犠牲となりました。いま日本帝国主義者たちは、こうした強盗の法律をふりかざして数多くの朝鮮の愛国者を逮捕し、拷問をくわえ、虐殺しています。これをどうして許すことができましょう。祖国のために命をささげた安重根に同情しない人が、はたしているでしょうか。国を愛する人はみんなかたく団結しましょう。安重根はたった一人であったためそれで終りになりましたが、みんなが団結すれば、われわれの力はもっと強くなります。伊藤博文が死んでも侵略者たちはそのままのこっているのです。われわれは、この強盗の群れを祖国から追いださなければなりません。そのためになによりも大切なことは団結することなのです」

聴衆は、われんばかりの拍手をおくった。

劇『安重根、伊藤博文を射つ』で、将軍は主人公である安重根の役にふんし、日本の侵略者たちの罪悪をあばき、民族の憤りを吐露しながら観客たちに反日愛国思想と民族的団結の精神を鼓吹した。

将軍はこの日、みんなの人気を一身に集めた。もともと将軍は、金亨稷先生の子息としてよく知られていたうえに、学校で「人あたりがよく、いつも貧しい子どもたちの味方で正義感の強い学生」として有名であった。ところがこの日からは、「雄弁家で反日思想の強い少年」としていっそう評判が高くなった。そして、将軍のもとに集まる学生たちもしだいに数をましていった。

将軍は友人たちにたいし、いっそう情熱的に反日思想を鼓吹した。かれらの大部分は貧しい朝鮮の少年であったが、なかには中国の少年もまじっていた。将軍は、こうした多くの友人たちを親切に導きながら、そのなかから堅実な同志をえらんでいった。将軍は授業が終ったあとも、おそくまで友人たちとすごしながら、熱心に反日思想を説いた。

ところが一九二六年にはいると将軍の帰宅がいつもより早くなり、家の空気もしだいに沈うつになっていった。ひところは快方にむかっていた父の病気がふたたび悪化しはじめ、ついに重態におちいったからである。もともとながびく病気であったところへ、完治しないままはげしい革命活動をつづけたため、病状は手のほどこしようもないほど急速に悪化していた。

叔父や同志たちの盡力によっていろいろな治療がほどこされたが、ときはすでにおそかった。

他人の病気には、なにはさておいてもかけつける先生であったが、自分のこととなると、どうしてこうもかえりみなかったのだろうと同志たちは口をそろえて悔んだ。

金亨稷先生は、すでに予期するところがあったのか、家族を枕もとによびよせて最後のことばをのこした。

先生は悲しみ嘆く康盤石女史に、成柱はなんとかして大学まで進学させたかったが、いまとなってはどうしようもない、しかしどのようなことがあってもせめて中学まではゆかせてほしいと、くりかえしたのんだ。また三人の兄弟にたいしては、たとえ身がくだけるようなことがあっても、必ず祖国をとりもどさなければならない、といってきかせた。

時の流れもとまったかのような重苦しい沈黙がつづいた。

やがて先生が口をひらき、自分の亡きがらは、いつの日か朝鮮が独立したら大同江のほとりにうめるようにとたのんだ。

そして、いままで愛用していた二挺の拳銃を康盤石女史にわたしながら、ときがくれば成柱にあたえるようにといいのこした。

先生の臨終は静寂そのものであった。熱のこもったまなざしで人びとを見まわしていた先生は、生涯をかけた大きな希望を胸にひめたまま安らかに息をひきとった。

こうして金亨稷先生は、はたしえなかった大きな志をのこしたまま一九二六年六月五日、はるかな異国の地で永遠の眠りについた。

人びとは泣き悲しんだ。同志たちも涙を流した。

また、悲報をつたえきいた独立運動家たちや、撫松市内の朝鮮人や中国人が数多く集まってきた。

おおぜいの人びとのまえでとりおこなわれた告別式は、朝鮮が生んだすぐれた息子、熱烈な革命家を失った悲しみにみちていた。

喪服を身につけた将軍は、父の霊前でおごそかに誓った。

「おとうさん、ぼくは必ず侵略者たちをうちたおし、おとうさんの遺志をりっぱになしとげてみせます」

将軍は父を失った悲しみにつつまれながらも、祖国光復の偉業を必ずなしとげるのだという崇高な使命感をひしひしと感じた。

康盤石女史は、こうした決意をかためる将軍をはげました。

この日、女史は喪服をつけた三人の息子たちを弔問客のまえにたたせながらも、なぜか自分は葬儀の列にくわわらなかった。

それから幾日かあとのことだった。旧暦五月の端午の節句がやってきた。

将軍は、この日だけは母も父の墓参りにいくものと考えていたが、母はやはりいこうとしなかった。

「わたしにかまわないで、さあ、おまえたちだけでいっておいで」

母はこういうだけで、ちっともいく気配を見せなかった。

弟たちと墓参りにいった将軍は、道すがら考えにふけった。

「おかあさんはどうしていかないのだろう」

しかし、あとでこの疑問は解けた。

母はいつも一人で墓参りをしていたのだった。そして、だれもいない墓のまえで、母は思う存分泣いていたのだった。

康盤石女史は、こうした自分の姿を成柱に見せてはならないと思った。夫の志をついで大事をはたさなければならない息子が、母親の涙を見て弱気でもおこしはしないだろうかと、ただそのことが心配で愛する息子たちといっしょに墓参りしたい気持をじっとこらえていたのである。

家庭での女史の責任は、なおいっそう重くなった。知らせをきいてはるばるやってきた姑がいるうえに、いままでいっしょにいた義弟（金亨権）もよくでかけるようになったため、病弱な女史は一人で家庭をきりもりしなければならなかった。

しかし、子どもたちの教育にはとくに気をくばり、社会活動もつづけた。夫のはたしえなかった志を息子たちがなしとげるよう、子どもたちをりっぱに教育することを自身のかけがえのない義務であると考えた。

一九二六年、将軍は撫松第一優級学校を卒業し、父の親友たちの援助と推せんによって樺甸にある華成義塾に入学した。

さして大きくない平家づくりの義塾は、「正義府」系の民族主義運動家たちが独立軍の幹部を養成するために建てた政治学校兼軍官学校であった。したがって民族主義についての教育が基本となっていた。

将軍は熱心に学ぼうとしたが、なぜか民族主義教育が気にいらなかった。どこか偏狭で強引なところがあるように思われた。

そして、民族主義者たちの運動と闘争方法を知るにつれ、ますます大きな疑問がおこり、欠点ばかりが目につく

ようになった。
将軍は、新しいなにものかを手さぐりでもとめた。そうしたなかで、世界最初の社会主義国家であるソ連について数多くのことを知る機会をえた。
そのころ、将軍は樺甸にいた父の親友の家ではじめて社会主義にかんする書物を見つけ、それを借りてきては熱心に読みふけった。この過程で将軍は、民族主義者たちの闘争方法にたいして大きな幻滅を感ずるようになった。
複雑な社会現象をむだのない科学的な思想で分析批判し、明確な進路をしめした革命的な書物が将軍にあたえた影響は非常に大きかった。それは、どれが真理であり、どれが正義であるかを洞察しうる偉大な灯台であった。
はじめて読む本であるのに、少しもうとい感じがしなかった。それはこの本が、いままでさがしもとめてやまなかったものであり、しかもその内容が将軍を完全に魅了したからであった。読めば読むほど、いままでの疑問がつぎつぎに解け、明るい未来がはっきりと見とおせた。
将軍は労働者と農民の国ソ連にあこがれながら、社会主義思想をよりいっそう探求した。
こうして将軍は、民族主義者たちの主張と闘争方法の限界を痛感し、共産主義運動に共鳴する進歩的な青年学生とともに、新しい大道を切りひらきはじめた。
将軍は、まずはじめに、ㅌ・ㄷ（打倒帝国主義という朝鮮語の頭文字をならべたもので、打倒帝国主義同盟の略称）という非合法組織をつくった。まさにこれは、将軍が本格的な革命活動に踏みだした歴史的な第一歩であった。
将軍は、ㅌ・ㄷの目的を、社会主義、共産主義の建設のためにたたかうことであるとした。そして当面は日本帝国主義を打倒し、朝鮮の解放と独立をなしとげることだと主張した。
これは、ブルジョア民族主義運動に幻滅を感じていた進歩的な青年学生から熱烈に歓迎された。
将軍は、自分の志を達成するためには、なによりもまずマルクス・レーニン主義の先進思想を研究し、組織を拡

大しなければならないと考えた。

しかし樺甸県のような辺ぴで、しかも先進的な社会風潮からたちおくれているところでは、こうした要求を満足させることができなかった。いろいろと考えたあげく、将軍はひろびろとして活気にみちている吉林市に活動の舞台を移すことにきめた。

そして、十五歳の金日成将軍は後日、吉林で活動することをE・D（ヨウドウ）のメンバーと約束し、一九二六年秋、華成義塾を中退して母のいる撫松へ帰った。

このように、古いものをきっぱりとすて去り、新しいものを大胆にもとめる気迫、新しいものをもとめるためには、気にいらない華成義塾をいさぎよく中退してしまうという決断力、――こうしたことは、だれにでもかんたんにできることではなかった。

将軍は吉林へむかうまえに、撫松での小学校時代の同窓生やそのほかの青年たちを集めてセナル少年同盟を組織した。将軍はこの組織をとおして、親たちのもつ古い民族主義思想の影響から青少年を切りはなし、進歩的な革命思想を身につけるよう、啓蒙活動をくりひろげた。

そして翌一九二七年のはじめに吉林へむかった。

吉林市は松花江（ソンファア）のほとりにある中国の古い都市であり、吉林省の省庁所在地として、政治、経済、文化の中心地であった。

また当時の吉林省には、中国の他の地方よりも朝鮮人がたくさん住んでいた。したがってその省庁所在地である吉林市は、満州での朝鮮人共産主義者とブルジョア民族主義運動家の活動の中心地でもあった。

一九二〇年代の後半、とくにこの都市は満州における朝鮮人ブルジョア民族運動のおもな勢力であった「正義府」、「参議府」、「新民府」系の民族主義の「巨頭」たちの集結地となっていた。かと思うと、朝鮮人の共産主義隊

列内の「M・L派」、「火曜派」、「ソウル・上海派」などの分派分子たちが、それぞれ自分の勢力をひろげるためにやっきとなって動きまわっていたのもやはりここであった。

こうした環境のなかで将軍は、朝鮮人、中国人、民族主義者、共産主義者、分派分子などいろいろな人たちと会い、ありとあらゆる思想潮流を身をもって知ることができた。

将軍は新旧思潮を比較するなかでマルクス・レーニン主義の正しさをさらにはっきりと認識し、それをより深く研究してみようという熱意にかられた。

将軍は一九二七年の春、父の友人たちの紹介で吉林の毓文(ユクムン)中学校に入学した。

康盤石女史は、将軍を中学まですすませるようにといいのこした夫の遺言をかたく守り、苦しい生計のなかから針仕事をしてやっとこしらえた学費をおくりつづけた。

病弱の母からの学費をうけとるたびに、将軍の胸ははりさけんばかりであった。貧しい生活のなかから学費まで負担させるのが、このうえなくつらかったからである。

将軍は幼いときから非常に親孝行であった。寒い冬など母が外から帰ってくると、冷たい母の手を小さな自分の手でつつみ、息をふきかけながらあたたかい部屋へ案内したりした。また母が市にでかけて帰りがおそくなるようなときなど、ご飯をさまさないようにと食器を釜のなかにいれておいたり、ひもじさをこらえて村の入口で母を待っていたりした。

八道溝に住んでいたときのこと、つかいのために葡坪まででかけた将軍は、靴を買ってはくようにと母がくれた金で、自分の靴を買うかわりに母親のはきものを買って家に帰り、村の人たちをたいへん感動させたこともあった。

また将軍は、幼いときから母に金をねだることなど絶対にせず、母の労苦を思い、一文の金もむだづかいしない

毓文中学校の図書室でマルクス・レーニン主義の学習を指導する金日成将軍

でひたすら勉強にうちこんだ。

毓文中学校は、市内の数多い中学校のなかでも、もっとも進歩的な学校であった。革新的な考えをもつ教員が多く、それが学生にあたえる影響は大きかった。そのため、保守的な教員や学生たちは小さくなっていた。

将軍をとくによろこばせたのは、この学校に進歩的な書籍が多かったことと、学生たちの課外読書がわりあい自由であるということだった。

こうして将軍は、マルクス・レーニン主義思想を学ぶのに全力をそそいだ。学校のなかに組織した秘密の読書会を指導しながら、授業科目以外に、朝鮮の歴史やマルクス・レーニン主義の基礎的な文献を熱心に読んだ。

しかも、さらに好都合だったのは、将軍が学校図書館の責任者に二度もえらばれたことだった。将軍はこの機をのがさず、必要な文献をどしどし買ってはそれを読破した。

そして将軍は、『資本論』をはじめとするマルクス・レーニン主義の古典をむさぼるように読みふけった。とくに植民地民族問題に深い関心をよせ、独自の研究をすすめた。

またゴーリキーの作品など、革命的な文学作品も数多く読んだ。なかでもゴーリキーの小説『母』は、将軍が非常に愛読し深い感動をおぼえた作品であった。

将軍はこの作品をとおして階級社会の矛盾を深く理解し、古い社会をくつがえして新しい社会をつくる革命の道へ、ひたすらつきすすむ覚悟をいっそう強くした。

そして、革命とは困難ではあるが栄光にみちたものであり、真の革命家だけが真に自国を愛することができるのだということを深く把握した。

学校では将軍を中心にして学生たちがよく政治論争をおこなった。そうしたとき、将軍はいつも独創的な問題をだして学友たちを論争させ、簡明で、しかも科学的な結論をくだしたりした。とくに、帝国主義の本質と矛盾にたいする論争がしばしばおこなわれたが、そのつど将軍は日本帝国主義を例にとり、それを具体的に立証してみせたのち、日本帝国主義を打倒して祖国の解放をかちとる実践的な結論をだしたりした。

将軍の存在はひときわ目だっていった。進歩的な学生たちはどんどん将軍のまわりに集まり、教師たちの関心も高まった。

こうして将軍は、マルクス・レーニン主義を独自の方法で学び、熱烈な青年共産主義者に成長した。そして、ブルジョア民族主義者の独立運動がもつ限界と弱点をまったく科学的な理論によって分析し批判するようにもなった。

将軍は、民族主義者たちの主張や闘争方法では決して朝鮮の解放と独立を達成することができないと考えた。なぜなら、朝鮮の民族主義運動が歩んできたこれまでの道程そのものが、みずからそれを証明していたからであ

る。

民族主義者たちの独立運動は、日本の朝鮮支配を前後して北部国境地帯や満州、あるいは沿海州を中心に展開された独立軍運動などのように、侵略者に反対する死にもの狂いのたたかいもあったが、しかしそれは最初から歴史的な限界性と弱点をもっていた。

独立軍の運動は、外国の侵略勢力に反対し政治、軍事的独立を目標としてはいたが、その運動の指導権は旧韓国時代の官吏や両班出身と、資本主義をめざすブルジョア民族主義思想をもった小ブルジョア出身者たちがにぎっていた。したがってこの運動は、人民大衆にたいする搾取を土台とした資本主義制度の樹立をめざすものであり、その内部には古くさい封建思想が根強くはびこっていた。

そのためこの運動は、住民の絶対多数を占める労働者階級と農民はもちろん、広はんな人民大衆の希望にもそぐわなかった。

このように、朝鮮のブルジョア民族主義運動は最初から失敗する運命にあった。そのうえ運動内部で支配的だった事大主義や無抵抗主義までいりみだれていて、その没落はさけられないものとなっていた。

これは三・一人民蜂起のとき、ブルジョア民族運動の指導者たちがおかしたあやまちのなかに集中的にあらわれていた。

かれらは、人民が力強い実力闘争をくりひろげると逆におじ気づき、帝国主義の国アメリカに依存して独立をはかろうとする一方、植民地宗主国である日本にまで幻想をいだくようになり、ついにはさじをなげだす始末であった。

こうして、ソ連の十月革命の影響をうけておこった三・一人民蜂起を境として、朝鮮のブルジョア民族主義運動は終りを告げたのである。

その後、民族主義者の大部分は急速に民族改良主義者に転落し、はては日本帝国主義に投降したり、その手先になりさがった。

満州で独立運動をつづけているという民族主義者たちも、ただ軍資金を集めたり、いくばくもない朝鮮人居住地域の「統治」をめぐって派閥あらそいに明け暮れしているありさまであった。

これらの事情を総合し分析した将軍は、民族主義者は絶対に朝鮮民族解放運動の指導者となりえないし、ブルジョア民族主義そのものが、すでに古びた歴史的遺物でしかないという確信を深めた。

将軍は、民族解放闘争の進路を正しく明示しうるのは、マルクス・レーニン主義をおいてほかにはないと考えた。それはマルクス・レーニン主義が、圧迫され、搾取されている全大衆の完全な階級的解放と、すべての植民地人民の民族的独立の道を明らかにしているばかりでなく、全社会から搾取と抑圧が一掃されて自由と平等が支配し、主権も、またあらゆる物質的富も勤労人民のものとなり、真の民族文化が花ひらく人類の理想社会を建設するもっとも革命的で科学的な理論だからであった。

このようなマルクス・レーニン主義思想は、すでに一九一七年、ロシアの社会主義十月革命以後、わが国にひろく普及しはじめ、日本帝国主義に反対する民族解放闘争の力強い武器となり、その旗じるしとなった。

もっとも圧迫され、もっとも革命的である労働者階級は、この革命思想のなかから輝かしい勝利が約束された進路を見いだし、ためらうことなくその道へつきすすんでいった。

一九二〇年代にはいり、労働者階級は急速に成長した。

時代の主力軍となった労働者階級は、たのもしい同盟者である農民や広はんな大衆を導く堂々たる政治的力量として民族解放闘争の先頭にたった。

将軍は、歴史の発展にしたがって方向づけられ、三・一運動を契機としていっそう明確となったこの道をしっか

りと踏まえてこそ、日本の侵略者たちをうちたおし国の独立をたたかいとることができるのであり、すべての勤労大衆を搾取と圧迫から解放することもできると確信した。まさにマルクス・レーニン主義こそ革命思想の宝庫であり、革命武力の兵器庫であった。

こうして将軍は、祖国光復の真の道を社会主義、すなわちマルクス・レーニン主義思想にもとめたのである。この真理を将軍は、マルクス・レーニン主義の古典に、そして生活のなかにもとめ、それを自身の思想に、熱情にかえた。そして将軍は、これがとりもなおさず亡くなった父の念願をうけつぎ、それをりっぱに実現する道であると考えた。

このように将軍は、金亨稷先生から愛国主義教育をうけ、複雑多難な社会環境のなかで独自にマルクス・レーニン主義を探求し、すぐれた革命家、共産主義者に成長していったのである。

2　青年学生運動の旗手

将軍は、みずから探求したマルクス・レーニン主義をたんなる思潮や理論としてではなく、それを闘争の武器、実践の手段とみなした。

将軍は確固とした信念をもち、マルクス・レーニン主義がさししめす道にしたがって青年学生運動に情熱をかたむけた。それは自分が学生の身であったからだけではない。将軍の考えによれば、青少年のなかに先進思想をひろめることは革命の未来にそなえるための重要な活動であった。しかも青年学生運動は、労働者、農民をはじめする基本大衆を革命へとよびおこし案内する、たのもしい橋梁の役割をはたすものであった。

吉林で将軍が最初につくった組織は、合法的な朝鮮人吉林少年会であった。

将軍はこれに吉林市内のすべての朝鮮人少年を結集した。そして、少年たちを反日思想で教育しながらしだいに階級意識で武装させることを目的とした。

将軍は少年たちの好みにあわせて、かれらが興味をもつ読書会や討論会をたびたびひらき、ときには演芸会や体育会もひらいたりして、異国にあっても胸をはり堂々と生きていくことができるよう、かれらの民族的自負心と闘争意識を高めた。

一九二七年の夏、将軍は朝鮮人留吉学友会を指導することになった。

吉林市内には以前から、民族主義者たちが後援する朝鮮人旅吉学友会という朝鮮人留学生の合法的な団体があったが、将軍はこの組織の責任者になると同時に、その名称を朝鮮人留吉学友会とかえた。

この団体には、吉林市内の各学校に在学する朝鮮人学生の大部分がくわわっていたが、メンバーの構成はきわめて複雑であり、その思想的傾向もさまざまであった。だが全般的に見て民族主義を信奉する層もあったが、時代の風潮にしたがって共産主義をめざす層の方が多かった。

そのため、この団体をひきつづき自分たちの勢力下にとどめておこうと頭を痛めていた民族主義の「巨頭」たちは、学生のあいだで強い影響力をもつ将軍に大きな期待をかけた。しかし将軍は、かれらの期待とはまったく逆の方向にすすんだ。

将軍は、学友会に集まった学生たちを反日革命精神と反帝思想、そしてとくに先進的なマルクス・レーニン主義思想で教育するため、『レーニンの生涯と活動』、『帝国主義論』、『植民地と民族問題』などの書物を重要な教育資料にえらんだ。

つぎつぎにひらかれた読書発表会や雄弁大会、討論会などでは「朝鮮革命の現段階」、「日本帝国主義の侵略政策」、「朝鮮革命をどうすすめるべきか」などのテーマが熱心に討論された。将軍はこれらの集会で学生たちが提起

する問題をそのつどわかりやすく解明した。

こうして将軍は、学友会を徐々に共産主義をめざす大衆団体につくりかえていった。その結果、民族主義を信奉していた青年学生たちもしだいに共産主義をめざすようになった。

この時期の将軍の活動は、きわめて多方面にわたっていた。読書のつどいをひらいたりするかと思えば、ほかではすぐ討論会のチューターとなって重要な役割をはたし、図書室で読書に熱中しているかと思えば、学友たちを集めて新しい活動を分担させるというように、寝食を忘れたかのような活躍ぶりであった。

成柱といえば、だれもが一目おいた。民族主義者や共産主義活動家と称する連中のあいだでも将軍の名はひろく知れわたっていた。

こうして、各地方から吉林に集まってくる学生たちが足しげく将軍をたずねた。そのなかには、ソ連帰りの青年や、朝鮮や間島からわざわざやってくるものもいた。また独立軍に幻滅を感じた青年や、日本留学中に社会主義関係の書物を読み、大きな抱負をいだいてたずねてくる青年もいた。

将軍はこういった青年たちの中心であり、旗手であった。

このころの将軍は、どうすればマルクス・レーニン主義の旗のもとに青年学生と民族的力量を結集させ、たたかいに動員することができるだろうか、そのための原則と当面するスローガンをどう決めるべきか、朝鮮民族解放運動の勝利をうながすための当面の闘争目標と活動方針をどこにおくべきか、などといった複雑な実践上の問題に真正面からとりくんでいった。

当時、こうした問題に解答をあたえうる人はいなかった。

まだ年少であった将軍は、真の革命家の出現を心から待ちのぞんでいた。そしてひところ、学籍を吉林にのこしたまま、信頼できる革命家をもとめて各地を歩きまわったりもした。

しかし、ひろい地域をたずねて歩き、多くの人びとにも会ってみたが、将軍が期待するような革命家にめぐり会うことはできなかった。事実このころは、満州にも朝鮮にもそのようなすぐれた革命家は一人も存在しなかった。

まさに時代と人民は金日成将軍を待ちこがれていた。将軍が一日も早く成長し、将軍の目が千里を見とおし、将軍の手で不滅ののろしがかかげられる日を待ちのぞんでいたのである。

将軍は独自に前途を切りひらき、まわりの青年たちを闘争へと導かねばならなかった。

将軍は吉林で再会した樺甸時代のㅌ・ㄷのメンバーを中核に、目ざめた青年たちと各地からたずねてきた進歩的な青年を結集してㅌ・ㄷの組織を拡大し、やがてそれを反帝青年同盟と改称した。

この時期の将軍の活動について、二十年後の一九四五年十二月、ソウルで出版された『海外朝鮮革命運動小史』はつぎのようにのべている。

「……金日成（本名金成柱、ピョンヤンの生まれ）は、吉林で少年運動指導者の一人として一年有余のあいだ心血をそそいだ。社会的意識が芽ばえはじめたばかりの金日成の純粋な胸中には苦悶が波うっていた。……金日成の頭脳は、いや学生金成柱の意識は……、その独自の発展によって将来の目的達成を期しうることを悟った。革命的情熱に燃える金日成にとっては宇宙の森羅万象がすべて同志であり、指導者のように思えた。しかしこの……志を理解しない当時の社会が恨まれてならなかった。事実、新思潮の転換期にあった金日成をとりまく社会的現象は、かれの志を理解するまでには距離があった。金日成は試練をおそれず、みずからの理想実現に必要な活動舞台と同志をさがしもとめた。伊・懐間（伊通県と懐徳県）をもっとも適したところとさだめ、伊・懐の社会的中堅である……と会った。かれらはすべて二十二、三歳の青年で急進的運動を展開し、新社会建設に相応した学術、思想、文化を研究していた。全幅の歓迎をうけて金日成はこの同志たちと握手した。左右両翼の小児病的傾向を排除し、『ㅌ・ㄷ』すなわち打倒帝国主義同盟を組織した。……金日成にたいする期待は大きかった。この団体の運動の意義も大きか

った。熱の人、正義の人である金日成にたいする民衆の支持も大きかった」（崔衡宇（チュエヒョンウ）著『海外朝鮮革命運動小史』第一輯ソウル東方文化社版、一九四五年、二八〜三〇ページ）。

反帝青年同盟は、青年の組織らしく活気にあふれ闘志にみちていた。だれもが同志と組織を愛し、それがまたかれらのよろこびでもあった。同盟の第一段階における活動目標は、吉林市内の学校や周辺の農村に組織を拡大することであった。

将軍は、各地から集まってきた進歩的な青年をまず一定期間、同盟で訓練したのち、市内の各学校や農村へおくりこんで活動させた。その結果、各地にすぐ同盟の下部組織ができあがり、めざましく活動しはじめた。

たとえば市内の文光（ムングヮン）中学校では、数十名の学生が集まって支部を結成していた。

農村地区でも組織は急速にひろがった。吉林周辺の農村である新安屯（シンアントゥン）などではとくに大きな成果をあげた。

将軍はいそがしい身をもかえりみず、土曜と日曜には直接卡倫（カリュン）、新安屯

海外朝鮮革命運動小史（第一輯）

金日成将軍が打倒帝国主義同盟（ㅌ（トウ）・ㄷ（ドウ））を組織したことにかんする『海外朝鮮革命運動小史』の資料

などの農村地帯にでかけて講演をし、同盟の下部組織を指導してまわった。

こうして、将軍が組織指導した秘密結社反帝青年同盟は、広はんな青年学生と農民のあいだに反日愛国思想をひろめ、かれらを組織に結集していった。

将軍の活動はますます活発になった。それは、将軍が中核的な組織として掌握していた共青（共産主義青年同盟）の地下組織が成長するにつれて、いちだんとはげしさをました。

将軍が吉林で青年運動をはじめた当時は、マルクス・レーニン主義思想がひろまってはいたが、まだ共産主義的な組織は存在していなかった。一九二七年の夏、将軍が吉林ではじめて共青を組織したのはこうした時期のことである。

将軍は進歩的な学生たちをえらんで共青組織をつくり、朝鮮人吉林少年会、朝鮮人留吉学友会、反帝青年同盟などのような大衆団体を共青の影響下におきながら統一的な指導を強めていった。

共青は勢力を拡大していった。吉林市内の各学校に支部ができ、遠く敦化中学校にまで下部組織をもつにいたった。

しかし満州軍閥の弾圧がひどかったため、共青自体が秘密組織であったのはいうまでもなく、そのすべての活動も極秘裏におこなわなければならなかった。

将軍は多くの場合、松花江の対岸にある静かな松林と市内の北山公園、南江公園などを会議の場として利用した。このような林のなかでひらかれる秘密共青会議には、吉林師範学校をはじめとする市内の多くの中学校の代表が参加し、将軍に活動の報告をおこない、それにもとづく新たな指示をうけたりした。

極秘を要する会議には北山公園にある薬王廟の地下室が利用された。

共青が活発に動き、大衆のなかでその影響力が大きくなると、将軍は青年学生を日本の侵略者と中国の国民党軍

共産主義青年同盟の秘密会議を指導する金日成将軍

閥に反対する積極的な闘争へとたちあがらせた。

将軍がはじめて指導した青年学生の公然としたたたかいは、毓文中学校の反動的な教員を追放する同盟休校であった。

右翼系の反動的な教員たちは、校内で共青の役割が大きくなり、学生のあいだで左翼的傾向が強まると悪どい策動を露骨におこなうようになった。

かれらは反動軍閥当局の権力をかさにきて、校長をはじめとする進歩的な教員たちに圧力をくわえ、学生たちの学科目選択の自由と、学校運営におけるわずかばかりの民主主義的自由までも奪おうとした。これに憤激した学生たちはすぐたちあがった。将軍は共青を動員し、反動的な教員の悪らつな策動を粉砕するために同盟休校を断行した。

将軍の周到で緻密な準備と指導のもと

に全校生はいっせいに決起した。かれらは授業にでることを拒否しながら、教務主任をはじめ悪質教員の罪状をばくろする強力な抗議運動をくりひろげた。と同時に、学生の待遇を改善すること、学生が要求する学科目の授業を保障すること、校長に圧力をくわえないことなどの要求をつきつけた。

必要とあれば実力行使も辞さないような学生たちの気勢に、反動教員一派はおじ気づいた。そして結局、学校当局は学生の要求をのみ同盟休校は勝利に終った。

その後学校では、学生たちの学科目選択にいくらかの自由が認められ、待遇も従来よりはよくなった。

たたかいの成果はきわめて貴重であった。とくに将軍は、闘争の勝利をつうじて学生たちが団結の威力を実感としてうけとることができたことを非常に重視した。これはさらに大きな勝利をうるための重要な基礎となった。

初の勝利で力をえた将軍は、たたかいの規模を大胆に拡大していった。そして学生たちのたたかいは、吉林市全体をわきたたせ、全満州に影響をあたえた吉会線（吉林―会寧間の鉄道）の敷設反対闘争へと発展した。

満州侵略の準備を着々とすすめてきた日本帝国主義は、吉敦線（吉林―敦化間の鉄道）の敷設を終えると、その延長として一九二八年、長大線（長春―大連間の鉄道）とともに満州侵略の主要幹線として計画されていた吉会線の敷設にとりかかった。

一九二八年十月、将軍の指導のもとに共青員たちは、満州侵略をめざす日本帝国主義の吉会線鉄道敷設に反対するたたかいを組織した。

このたたかいは広はんな青年学生によるはげしい示威闘争へと拡大していった。

この闘争には、共青の指導のもとに反帝青年同盟や朝鮮人留吉学友会などの大衆団体が先頭にたち、吉林市内のあらゆる学校の学生たちが示威にくわわった。

街頭にでた学生たちは三、四名、または十名前後のグループをくんで行動した。かれらは旗をふって気勢をあ

げ、群衆のまえで、日本帝国主義による吉会線鉄道敷設の侵略的な目的をあばき、この闘争に積極的に呼応して決起せよとアジ演説をおこなった。

これにつづいて、市内のほとんどの学生が学校別に隊列をくみ、怒濤のように街路をうめつくして行進した。かれらが叫ぶスローガンは、吉林の街をゆるがした。

「日本侵略者を打倒せよ！」

「吉会線鉄道敷設反対！」

屋上からビラがまかれた。日本帝国主義の侵略と国民党反動軍閥の売国的行為を断罪する檄文であった。

都市は闘争のるつぼと化した。

学生たちの大示威は十一月まで、ほとんど毎日のようにつづけられた。示威はますます高まり、大衆もこれに合流しはじめた。日本の侵略者たちと結託した国民党反動軍閥は、事態の急変におどろいて警察力を行使した。

しかし、示威に参加した大衆はひるまなかった。警察が銃剣をふりかざしておそいかかり、二十余名の死

吉林市内の青年学生たちによる吉会線鉄道敷設反対闘争

傷者がでた。武力弾圧のまえに大衆は一時後退したが、たたかいはさらに積極性をおびていった。共青、反帝青年同盟をはじめとする大衆団体は、将軍の精力的な指導のもとに群衆の一部で行動隊をいくつか編成し、市内各所に派遣した。

勇敢な行動隊は、示威群衆の自由な活動を保障するため棍棒をもって市内の各所で警察を包囲し、警官をしばりあげ、敵の武力行使を未然にふせいだ。そして一方では、示威に参加した学生たちが日本人の商店から商品をひっぱりだして松花江になげすてるなど、日貨排斥闘争をくりひろげた。

吉林の青年学生によるはげしい反日闘争は、哈爾濱（ハルビン）、天津など、各都市の青年学生との積極的な連帯闘争へと発展した。

なかでも、もっとも積極的に呼応してたちあがったのは哈爾濱の学生たちであった。かれらは十一月九日、警官隊とはげしい衝突をくりかえし、百数十名の負傷者をだした。

このように、各地で大規模な連帯闘争をつぎつぎとよびおこした吉会線鉄道敷設反対闘争は、中国はもちろん朝鮮国内にまでひろく報道され、内外各地の人民から注目をあびた。

当時ソウルで発行されていた朝鮮語日刊新聞『東亜日報』は、一九二八年十一月二日付けで、「吉敦線延長その他の問題で、吉林排日険悪化。学生ら連日示威行進継続、天津排日も逐日深刻化す」という見だしのもとに、吉林の学生の示威闘争の真相と、その拡大の状況をつたえ、同十一月十三日付けでは、「反日学生団体の吉会線反対高潮。九日、警官隊と衝突、百四十八名負傷」の見だしをつけ、哈爾濱の学生闘争のもようを報道した。

将軍をはじめ共青員の指導のもとに展開された吉林の学生の反日示威闘争は、日本帝国主義者と売国的反動軍閥に大きな打撃をあたえ、広はんな青年学生と人民大衆の反日闘争の気勢を高めた。

将軍は、こうした実際の闘争をつうじて共青や反帝青年同盟など大衆団体の役割を高め、たたかいのなかで同盟

員をきたえ、点検することによって組織をいっそう強化した。そして正確な政治的スローガンとすべての反日勢力の団結にくわえて、統一的な指導による組織性がたもたれるならば、たたかいは必ず勝利するという貴重な教訓をえた。

将軍はまた、反動軍閥の策動に反対するたたかいも組織し指導した。

これは当時のいわゆる「三矢協約」とかんれんする焦眉の闘争課題の一つであった。

日本帝国主義は、満州に住む朝鮮人の反日運動が日本の満州侵略政策にとって障害であるばかりでなく、朝鮮統治にたいする直接的脅威であるとみなした。かれらは一九二五年六月十一日、朝鮮総督府警務局長三矢宮松を代表にたて、中国東三省軍閥の頭目張作霖とのあいだに、在満朝鮮人取締りにかんする条約を締結した。これがいわゆる「三矢協約」である。

この協約には朝鮮人反日運動家を逮捕した場合、必ず日本の領事館にひきわたすことと、その代価として日本側は賞金をはらい、その一部は逮捕に協力した官吏に分配するということなどが規定されていた。

これによって、満州軍閥当局は親日的な傾向をおびはじめ、軍警は朝鮮人反日運動家をとらえようとやっきになった。

こうした状況のもとで将軍は共青を動員し、中国の青年学生までひきいれ、中国軍閥当局に反対する青年学生のたたかいを組織した。

一九二九年におこなわれた中国軍閥の反革命的な「北伐」計画に反対する吉林市内中学生の同盟休校は、こうした反軍閥闘争の一つであった。このたたかいは、ちょうどときを同じくして朝鮮でおこった光州（クァンジュ）における学生の大衆的反日示威闘争とともに各地の学生たちに大きな革命的影響をあたえた。

将軍は、吉林市内で青年学生のたたかいを組織指導するかたわら、おりをみては学校に欠席届をだし、遠く撫

松、安図、敦化などにでかけて共青と大衆団体の活動を指導をした。

各地をまわって歩くうちに将軍は、ときたますぐれた人物にめぐり会うようなことがあった。

車千里（チャチョンリ）老人も、そうした人物の一人であった。車という姓のこの老人は一夜に千里をゆききするというのでその名があった。

将軍は、友人たちとともに劇やうたをいくつか用意して、撫松と濛江のあいだの杜枝洞（トゥジ）というところに住んでいるという車千里老人をたずねたことがあった。

将軍の一行は、吉林から樺甸をへて敦化、間島一帯を巡回公演しながら目的地の杜枝洞についた。

おりよく車千里老人は家にいた。

かれは高齢ながらも健康にすぐれ、ゆたかな白ひげをたくわえた風采のりっぱな老人であった。

一行のなかの一人が、ほんとうに一夜に千里（約四百キロ）をゆききしたのかとたずねた。

すると老人は、「千里は無理だが、五百里は歩いたものじゃ」とこたえた。

ひところは江界地方の山野をかけめぐって義兵闘争にくわわったというこの老人は、見識が高く政治的見解もしっかりしたものをもっていた。

かれは情熱に燃える青年たちに過去の朝鮮の統治者たちの腐敗ぶりを話しながら、朝鮮人は日本人とりっぱにたたかえたはずであり、国を発展させることもできたのに、腐りきった無能な官僚どものため、ろくにたたかいもせず国を奪われたといって慨嘆した。

そしてかれは、年をとりすぎて独立運動もできなくなったいま、すべての希望を青年にかけていると語った。

「独立をのぞむなら口先だけではだめじゃ。一人でも多くの日本の侵略者をやっつけなくちゃならん。そして、朝鮮人のなかにもぐりこんだ日本帝国主義の手先をつねに警戒しなくちゃならん。要は多くの人びとが団結して敵

とたたかうことじゃ」

ながい生涯をつうじてえた教訓を語る車千里老人の姿は悲壮で厳粛でさえあった。

将軍にとってはむろん、こうした老人の政治的見解や闘争方法はこと新しいものではなかった。しかし老人の切々たる憂国の情からうけた感動はきわめて大きなものがあった。この老人のおもかげには、悲運に身もだえする祖国の姿があった。そしてその声には、祖国のすべての人びとの血を吐くような訴えがこめられていた。

後日、あのはげしい抗日武装闘争の日々にも、車千里老人のことはしばしば将軍の胸中によみがえったという。

将軍はふたたび吉林へもどった。

将軍の活動地域はすでに延吉(ヨンギル)、通化、長春、哈爾濱、伊通などにまでおよんでいた。

これらの地域で将軍は民族の将来を憂う青年たちとまじわり、かれらを共青にひきいれて組織隊列をひきつづき拡大強化し、また撫松にもでかけセナル少年同盟の活動を指導したりした。

このように、将軍は燃えるような情熱をもって広はんな青年学生大衆を社会主義思想の旗じるしのもとに結束させ、その組織された力で日本の侵略者とその手先に反対するたたかいを果敢に展開していった。

青年学生運動の最先端にたってすすむ将軍の一歩一歩は、すでに革命的信念と正確な闘争戦術にもとづいた着実な歩みとなっていた。

3　団結を妨げるものへの打撃

将軍は共青活動と青少年大衆団体活動を指導しながら、ブルジョア民族主義者たちの誤った主張と行動にたいしても原則的にたたかった。

そのころ吉林には、共産主義者を自称するものも少なくはなかったが、民族主義者の方がはるかに多かった。そのなかには呉東振、李雄、張喆鎬などをはじめ、他の地方から吉林へやってきた民族主義の「巨頭」たちも多かった。

かれらは、青年学生運動を自分たちの手中におさめようと試み、とくに将軍や進歩的な青年たちを民族主義運動の同伴者にしたてあげようとやっきになっていた。

しかし将軍は、自身の独自の探究によってえらんだ社会主義の道から決してしりぞこうとしなかったばかりでなく、民族主義者たちの誤った主張と行動を容赦なく批判した。

一九二七年の春のことであった。

民族運動家のなかで「民族運動の大先輩」とうたわれた安昌浩が吉林にきて、「朝鮮民族運動の将来」について講演をするといううわさがひろまった。

吉林にきていた民族運動家たちは、この日まるで「大統領」でもやってきたかのようにかれをむかえ、講演会場へと案内した。

講演会場には、ちょうど「三府統合会議」に参加していた満州各地の民族運動団体の幹部と独立軍、そして「有志」など数百名の聴衆が集まっていた。

将軍も一種の好奇心にひかれ、多数の青年学生といっしょに会場へいった。

安昌浩は気炎をあげた。かれの演説に興奮した民族主義運動家たちは、演説の区切りごとにさかんな拍手をおくった。

しかし大多数の青年学生は冷淡そのものだった。これという感銘をうけなかったからである。

わけても将軍は、冷笑を禁じえなかった。それというのも講演そのものが最初から誤った民族主義についての宣

伝であったため、とくに興味がもてなかったからである。

安昌浩の一貫した主張は、「各個人の自己修養」と、「教育と産業振興によって国力をつくる運動」を展開しようというもので、「この力の準備こそ、独立目的達成のための唯一無二の近道」であるというのだった。

まったくばかばかしい主張だった。「各個人の自己修養」不足うんぬんは、反動的な政治制度をそのままにしても、「自己修養」をつうじて幸福になれるという牧歌的な無抵抗主義を、みずからばくろしたものにほかならなかった。

どだい、全民族が侵略者の軍靴に踏みにじられている状況のもとで、どうして思いどおりに教育と産業の振興ができ、「国力をつくる」ことができるというのか。かりに百歩ゆずってそれが可能だとしても、敵との闘争なくして、どうして「独立目的」が達成できるというのだろうか。

それはまったく不可能なことであった。人民を革命へと組織し教育しなければならない時代の要求を無視することはできず、敵と生死をあらそうたたかいの場で、闘争そのものをおろそかにすることは絶対にできないことであった。

将軍は安昌浩の理論がその本質において、「文明開化された」奴隷になるための「民族改良」と「民族産業復興」、そして「農村振興」をとなえることにあり、民族主義運動の陣営のなかで、支配的な力をもちはじめた民族改良主義者たちの投降主義的な主張にすぎないということを見ぬいていた。

将軍は即座に、安昌浩の講演内容に反駁する質問状をしたため、それを他の学生の手をつうじて弁士につきつけた。

熱弁をふるっていた安昌浩はさすがにあわてたものとみえ、質問にこたえることもできず演壇で立往生してしまった。

それからというもの、民族主義者の「巨頭」たちは「異彩を放つすぐれた少年だ」といって将軍を注目しはじめた。しかしそうなればなるほど将軍はかれらに批判的に対処した。

そのころ(一九二七年)、吉林の福興泰という精米所では何か月ものあいだ民族主義者たちの「三府統合会議」がひらかれていた。これは、「参議府」(一九二四年八月、南満州通化県で結成)、「正義府」(一九二五年、南満州で十余の軍事団体を統合して結成)、「新民府」(一九二五年三月、北満州で数個の軍事団体を統合して結成)を一つに統合するための会議であった。

会場にあてられた福興泰精米所は、将軍が毓文中学校へかよう道のそばにあった。そのため将軍は、よくそこにたちよっては会議の内容をつぶさにみてとることができた。かれらは「三府統合」をうんぬんしながらも実際には地位あらそいに明け暮れ、会議はまるで市場のような騒々しさに終始した。みにくい強弁とののしりあいがいりみだれているそこでは、初歩的な礼儀も良心のかけらも見いだすことはできなかった。ましてや、そこから愛国心を期待するなどということは、それこそ空の星を数えるにひとしいことだった。

かれらに強い幻滅を感じた将軍は、それを風刺劇(三人が集まって地位あらそいをする内容を劇にしたもの)にして、しんらつに批判したことがあった。もちろん、この劇をみた民族主義者たちはあわてふためき幕がおりないうちから早々に退散してしまった。

その翌日、将軍はかれらと会って、「昨夜はどうして公演の途中で帰ったのですか。最後までごらんになればもっとよかったのに」とさり気なくいってみた。するとかれらは、「昨晩はよくもあんなに、われわれの悪口をならべたててくれたな」と怒りをぶちまけた。

将軍は、そ知らぬふりをしてこたえた。

「先生がた、なにをそんなに怒っているのですか。あらそってばかりいては、なんにもならないじゃないですか。

昨晩の劇は青年たちの気持を率直にあらわしたものなんです。少しは青年の声にも耳をかたむけたらどうです」

これにはさすがの民族主義者たちも、「青年たちに笑われないよう、なにかしなければならないのだが……」というだけで、なすべきすべを知らなかった。

こうして、かたちばかりではあったが民族運動の「統合」団体という名目で「国民府」が出現したのは、それから数日後のことであった。

かれらがまだ地位あらそいに明け暮れながら会議をつづけていたとき、いわゆる「上海臨時政府」から、さかんに自分を大物だと宣伝する「財政部長」なる男が、「上海臨時政府」の代表数名をつれてやってきたことがあった。

その大物というのは、性質が粗暴なうえ頑固な保守主義者であったが、どうしたわけか青年たちに会うと、さも進歩的であるかのようによそおい、ときにはくだらない冗談までとばしたりした。

ある日曜日のこと、将軍は進歩的な青年学生たちをつれ、泰豊閣（テアンハク）という精米所でかれに会い論争をいどんだ。

「あなたがた年寄りは地位に目がくらんで祖国のことなど念頭にないではないか。朝鮮人農家もわずかしかないのに、それを一人占めにしようとあらそってばかりいて、いったいどうするつもりなのか」

質問はつづいた。「実権もなく大衆もいないのに『政府』なんかをつくりあげ、そこにあぐらをかいていて独立運動になんのたしになるというのか。同胞から集めた独立運動資金を乱費しながら大国に頭をさげてえたものはいったいなにか。ただ手をこまねいて、『政府』の看板を後生大事に守ることが独立の道なのか」

青年学生たちのするどい質問と論駁のまえに、「上海臨時政府」の「要人」はかえすことばもなく口をつぐんでしまった。

なんの指導理論もなく、民族主義運動陣営の「要人」という看板だけをかついであらわれたかれが、マルクス・レーニン主義理論の学習に熱中していた青年学生のするどい論理に対抗できなかったのはきわめて当然なことであ

った。

するとその「要人」は、やにわに上衣をぬぎすてると、「ではなにか。おまえたちだけがえらくて、われわれはとるにたらないというのか。それならおまえたちも、このわしといっしょに世間の笑いものにしてやるわい」とわめきながらいまにも外へとびだそうとした。

思いがけなくこの無頼漢のようなおどろくべき行為を目撃した将軍は、「上海臨時政府」の自称「愛国者」たちがどのような人間の集まりであるかをいま一度はっきりと知ることできたのである。

民族主義者たちの誤った行動に反対する将軍のたたかいは、その後一九二九年にひらかれた「南満青総大会」を契機にいっそう本格的にすすめられた。

一九二九年春、興京県(フンギョン)汪清門(ワンチョンムン)において民族主義連合団体である「国民府」の主催によって「南満青総大会」なるものが召集された。将軍はもともと「南満青総」や「東満青総」とはなんの関係もなかったが、青年運動の統一と反日青年団体内における共産主義的影響を強化するために、白山青年同盟の代表という資格で「南満青総大会」に出席した。白山青年同盟は撫松、安図、臨江および長白と敦化の一部など、白頭山周辺の青年組織であり、「南満青総」の支部というかたちになっていた。

会議に先だち、大会の一部の代表たちによって「南満青総大会」の準備委員会が組織されたが、そこには将軍をはじめ進歩的な青年たちも多数くわわっていた。

これをみてとった「国民府」の「巨頭」らは、大会が自分たちの思いどおりにすすめられないものと考え、大会前夜になって準備委員にたいするテロを強行しはじめた。その首謀者は、民族主義者のなかでも理論家をもって自任している高而虚(コイホ)らであった。

このとき将軍は、E・C(トゥドュ)のメンバーであった同志たちから、崔奉(チュエボン)などの準備委員が民族主義者につかまったとい

う知らせと身辺が危険だからすぐに身をさけるようにという勧告をうけた。

しかし、民族主義者のテロに憤激した将軍は「南満青総大会」の主催者の一人であった高而虚をたずね、正面から非難をくわえた。

「あなたがたは南満青総大会を召集しておきながら、準備委員の意見を全部ききもせず、準備委員会が提出した要綱だけを検討し、頭からそれを悪いものときめつけて委員をつかまえたりしているが、これはいったいどうしたことか。これは他国にまできて同じ民族同士がおこした白色テロでなくてなんであろう。人間の思想を抑圧することはできないものだ。あなたは肉体を抑圧することはできるだろうが、思想は決して抑圧できないということを知るべきだ。いま若い人たちの思想はめざましく発展しているが、その人たちの気勢をそぐようなことをするのは、革命に害をあたえることにしかならないのだ。あなたがぼくを殺したいのなら殺すがよい。――わたしはいつでも死ぬ覚悟ができているのだ」

将軍はこう応酬して高而虚をはげしくせめたてた。

将軍は、その夜のうちに同志たちのいる能家（ヌンガ）へむかった。そして同志とともに柳河（リュハ）県三源浦（サムウォンポ）で、崔奉ら「南満青総大会」の準備委員を虐殺した民族主義者の罪状をばくろする声明を発表した。

このように、将軍がマルクス・レーニン主義の教える革命の道を切りひらいてゆく過程は、民族主義者との深刻な思想闘争をともなっていたのである。

そのころ将軍はまた、共産主義運動の隊列に巣くう分派分子らともはげしくたたかった。

共産主義運動におよぼした分派主義者の害毒はじつに甚大なものがあった。わが国にマルクス・レーニン主義が普及し、労働運動が成長するにつれ、一九二五年に組織された朝鮮共産党は、日本帝国主義の苛酷な弾圧と分派主義者たちの分裂策動によって、早くも一九二八年には解散してしまう状態であった。

党は解散したが、労働者や農民は共産主義者の指導のもとに闘争をつづけていた。しかし、分派分子は党が解散したのちも自分たちの犯した罪悪から教訓を見いだすどころか、かえって自分たちの派を中心とする党再建グループをつくり、依然として分裂策動に血道をあげていた。

こうした事情は、満州にきていた分派分子の場合でも同じであった。かれらはそれぞれ、自分たちの派を中心とした党再建グループ満州総局なるものをつくり、派閥と派閥とのあいだ、または同じ派閥内でみにくいあらそいをつづけた。

吉林に集まっていたかれら各派の「巨頭」たちは、朝鮮人青年学生の政治問題にかんする討論会や雄弁大会にまであらわれて自派の主張を宣伝し、歓心を買おうとしてやっきとなっていた。

分派分子のこのような醜態に憤激した将軍は、そのつどかれらの誤った主張を容赦なく批判し、かれらの罪悪を青年学生たちのまえであますところなくばくろした。

将軍は、団結をそこなう分派分子の行動を犯罪であると烙印をおした。将軍は、「M・L派」、「火曜派」、「ソウル・上海派」などの各派で、「共産主義の大先輩」を自称する分派の「巨頭」らにたいしても断固とした批判をくわえ、とくにかれらが革命の当面の課題を忘れ去り、むなしい論争で虚勢をはるのを許さなかった。

このように将軍は、一方では分派分子と、そしてもう一方では民族主義者との思想闘争を展開しながら青年学生をその影響から切りはなし、マルクス・レーニン主義の旗のもとに団結させるため全力をかたむけた。

将軍は、このような思想闘争を土台にして、わずかのあいだに吉林市を中心とした青年学生運動を力強く前進させることができたのである。

4　鉄窓のなかで

将軍が「南満青総大会」のために吉林をはなれているあいだ、吉林市の形勢は非常に険悪なものとなっていた。すでに中国国民党の反動軍閥当局とつうじていた日本帝国主義は一九二九年の後半から、共産主義者を先頭とする在満朝鮮人反日運動家たちをかつてないはげしさでもって弾圧しはじめた。

悪質な高而虚の行動など、内部からの危険をすでに感じていた将軍の身辺には外からのより大きな、新たな危険がせまりはじめていた。

こうしたとき、吉林第五中学校の共青組織が敵に内偵され、そこから端を発して市内の共青にたいする検挙旋風がまきおこった。将軍もこのとき、中国反動軍閥当局によって逮捕されてしまった。

しかし軍閥当局は、数多くの共青員を逮捕したとはいうものの、かれらの活動にたいする具体的な資料をつかむまでにはいたらなかった。軍閥当局は将軍を主要人物だと考えていたが、これといった物的証拠をにぎってはいなかった。背後関係をしらべても、法にふれるような特別なものをさがしだすことはできなかった。友人たちの関係をしらべても、中国人をふくめて将軍を悪くいうものは一人もいなかった。

したがって当局者たちは、ただ自分たちなりに、青年学生のなかで将軍の政治、思想的影響力が大きいだろうということを推測するしか手がなかった。

かれらは拷問と脅迫をくりかえしたが、将軍からはなにもききだすことができなかった。しかしかれらは将軍を無罪釈放にしようとはしなかった。

将軍は結局、青年学生を扇動し現秩序を破壊するための共産主義革命闘争を指導したという「罪名」の調書とと

もに吉林監獄へおくられた。これは将軍が地下活動をはじめてから二度目にうけた監禁であった。
最初の監禁は撫松地方でうけた。将軍はこのとき、友人とともに封建思想を批判する演劇を創作して公演したが、敵の手先が将軍を密告したため警察に逮捕されたのである。三度目に安図警察署に監禁されたときには、康盤石女史が多くの同胞たちをひきつれ、釈放をもとめてはげしくたたかったこともあった。
将軍が二度目に監禁された吉林監獄は十字監であった。東西南北に十字形の廊下がのび、その廊下の両側に監房があった。そして、その北側の最初から二番目が将軍のいた監房であった。
非道きわまりない権力のまえにつながれた将軍は、あらためて革命のけわしさを痛感し、敵とのたたかいにおいて暴力がはたす作用を深く考えないではいられなかった。
鉄窓は将軍を苦しめた。それは自身がうけた肉体的な苦痛よりも、囚人たちのみじめな境遇を見つめながら、正義と良心が犯罪となる醜悪な社会を痛感する精神的苦痛の方がより大きかった。とくに祖国を失った朝鮮人収監者がうける民族的蔑視と屈辱は、たえることができないものであった。そうしたときなど、将軍は亡き父の詩句を思いかえして重い心をなぐさめるのだった。

国をなくせしわが民よ
海にうかべる塵のごと
流れ　さすらう汝(なれ)なるか
国なくせしを泣くなかれ
祖国を奪いかえす日の
遠からざるを心せよ

鉄窓のなかでも、将軍の心は世界をかけめぐった。

あるときは、父が歩んだ道とその遺言を思いかえすこともあった。またあるときは、祖国の山河と異国のいたるところで鉄鎖につながれた数千数万の朝鮮の愛国者たちの群像を描きながら、かれらの怒りと叫びを胸深く感じとったりした。

そうしたときなど、将軍には朝鮮全体がまるで一つの監獄のように思われてならなかった。いや朝鮮は、日本帝国主義という監獄につながれた血にそまった囚人であった。

このような朝鮮にたいする愛は、日本帝国主義の死刑執行吏どもをうちのめす闘争によってのみ、実現できるのだということを将軍は痛感した。

まさに、武装した敵を掃討することなしには、祖国を救うことも、そこに希望の楽園を築くこともできなかった。監獄は結局、敵が意図したものとは逆に、将軍に祖国の解放と繁栄のため死を賭してたたかう決意をかためさせただけであった。

1929年～1930年の春まで金日成将軍が監禁されていた吉林監獄とその獄窓

将軍はしだいに獄中生活になれ、監獄の内部の動きを把握できるようになると、あらゆる機会と条件を利用して獄中の同志たちと連絡をとり、かれらのたたかいを指導しはじめた。そのかたわら看守たちにも近づいて、かれらをねばり強く教育した。

やがて看守たちは、将軍にたいしてしだいに尊敬と好感をもちはじめた。将軍はかれらと会うたびに共産主義についてわかりやすく説明した。

この過程で看守たちは共産主義者にたいする態度をあらためるようになり、やがては将軍の外部との連絡までひきうけ、獄外の同志たちからおくられてくる書物や差しいれ品なども、そのまま将軍に手わたしてくれるようになった。そのため将軍は、読書も比較的思いのままにつづけることができた。

将軍は精力的に読書をつづけた。そして『帝国主義論』、『植民地民族問題』、『レーニンの生涯と活動』などの書物は、それがすり切れるまでくりかえして読んだ。

将軍は政治にかんする書物を読破する一方、革命の前途について深い思索をめぐらした。とくに朝鮮にたいする日本帝国主義の植民地政策の本質と、民族解放運動の経験や教訓をさがしもとめることに没頭した。

朝鮮革命は今後どのように発展するのだろうか。朝鮮の解放を早める方途はなんであり、一貫した原則はどうあらねばならないのか。——こうした問題について将軍は深い思いをめぐらせた。

とくに将軍は、「暴力には暴力で!」という原則をどのように具現すべきかについて思索を集中させながら、朝鮮民族解放運動の作戦図を構想することに心血をそそいだ。

このようにして将軍は、一九三〇年の春、八か月ぶりに出獄することができたのである。

5　農村を活動舞台に

監獄の門をでた将軍のまえには、いくつかの難関がよこたわっていた。獄中にいるあいだ、将軍はすでに毓文中学校の学籍簿からのぞかれていたし、共青の組織はほとんど破壊されていた。

そのため学校では二度と活動することもできず、散りぢりになった同志たちと連係をむすぶのもむずかしい状況だった。

生活が苦しいうえに、すべてが混乱していて前途は漠然としていた。しかも五・三〇暴動による険悪な情勢は、将軍の活動にいっそう大きな支障をもたらしていた。

当時、派閥あらそいに明け暮れしていた分派分子たちは、一九三〇年代にはいってコミンテルンから一国一党問題が提起されるや、それぞれ党再建グループ満州総局を解体し、中国共産党いりをもくろんで汲々とするあまり、自分たちの「革命性」を立証しようと中国共産党の李立三の左翼冒険主義路線に盲従して、なんらの打算もなく東満州で一九三〇年五月三十日、大衆を無謀な暴動へと追いこんだ。

日本の侵略者たちは、これを機会に多数の朝鮮人共産主義者と革命的な大衆を逮捕して虐殺する一方、朝・中両国人民を敵対させるための離間策動をいっそう強化した。

また国民党軍閥政府と一部の中国人は五・三〇暴動を契機に、それでなくても差別されている朝鮮人を「日本人の手先だ」とののしって排斥し、手あたりしだいに虐殺しはじめた。

こうして、祖国を奪われた朝鮮人は前後からおそいかかる日本帝国主義侵略者と国民党軍閥とによって、さらに

筆舌につくしがたい迫害と弾圧をうけるようになったのである。

殺伐とした空気は、出獄直後の将軍の身のうえにも大きな危険をもたらした。

しかし新しい闘志を胸にひめて出獄した将軍は、じっと手をこまねいてはいなかった。危険な事態はかえって将軍の勇気をふるいたたせた。将軍は悲壮な決意をかためて、意義深い探求とみのり多い闘争の思い出深い吉林に別れをつげ、長春県卡倫地方へ移って新しい活動をはじめた。

かつては吉林市を中心に青年学生をおもな対象として活動してきた将軍は、このときから舞台を農村へと移し、広はんな農民大衆のなかにはいって工作をはじめるようになった。

これは将軍が獄中で構想した遠大な作戦図の一端をひらいたものであり、革命、とくに農民が人口の多数をしめる植民地民族解放闘争においては、労働者とともに農民を革命的に教育することが重要であるというマルクス・レーニン主義の原理から出発したものであった。

帝国主義者たちは例外なく植民地隷属国のなかに封建的、半封建的な関係をのこしておき、買弁資本家とともに地主を自己の植民地統治の支柱として利用した。そのため植民地の人民は、外来帝国主義勢力とそれにむすびついた国内の反動勢力とによる二重三重の搾取と圧迫をうけたが、なかでも住民の絶対多数をしめる農民がそのおもな対象であった。したがって、植民地民族解放革命の性格は反帝反封建民主主義革命であり、農民問題と土地問題の解決がその主要な課題となっていた。

そのため共産主義者たちは、植民地民族解放革命を遂行するうえで、広はんな農民大衆を労働者階級のたのもしい同盟者として教育し、団結させ、闘争へと決起させることに大きな力をそそがねばならなかった。

将軍は、こうした課題が解決できるという見とおしのもとに卡倫へ移っていった。

吉林と長春のあいだに位置する卡倫は、長春から四十数キロはなれた小さな駅のある農村で、将軍が一九二八年

の秋ごろから革命組織をつくって指導したことのある土地だった。

将軍がこの一帯をえらんだのは、卡倫から長春が近く、哈爾濱と連絡をとるのにも便利だったからである。

卡倫に到着した将軍は、そこから約四キロばかりはなれた賈家屯（ジャジャトゥン）（賈屯（ジャトゥン）ともいう）に住むことにした。賈家屯はさして大きくない朝鮮人部落であったが、共産主義者たちの活動の拠点となっているところであった。

住民の大多数は、朝鮮で三・一運動に参加して亡命してきた人びとと生活難から流浪して住みついた人たちであり、血と汗によって開墾したわずかばかりの水田でかろうじて命をつないで生きてゆく貧農たちであった。

将軍はここで、同志たちとともに卡倫と伊通県孤楡樹（コユス）とをゆききしながら、その一帯の革命組織を指導し、農民大衆にたいする啓蒙活動をはじめた。

最初は卡倫に四年制の進明（ジンミョン）学校を設け、文化啓蒙活動をすすめた。孤楡樹では三光（サムグワン）学校が中心であった。

将軍は貧しさのため学ぶことのできない農民の子どもたちに無料教育をおこない、夜学をひらいて青壮年と婦人たちを教育した。

こうした啓蒙活動をもとにして、つぎは住民を階層別に組織し、政治的にきたえていった。学生たちは少年団、あるいは少年探険隊へいれ、婦人は婦女会へ、農民は農民協会へといったように組織していった。

進明学校では少年団を、三光学校では少年探険隊を組織して学生たちを結集し、かれらに秘密通信連絡と警備、歩哨勤務、偵察、武器運搬、軍事学習と宣伝物の配布などの任務をあたえた。

一方、青年会には地方の進歩的な青年をうけいれ、マルクス・レーニン主義の思想を教えながら部落を警備させ、日本帝国主義の手先どもを処断し、革命家たちの身辺を保護する任務などをあたえた。婦女会と農民協会は村民を対象に文化啓蒙活動をおこなうかたわら、会員たちに反日愛国教育をおこなった。

将軍は啓蒙と組織活動を指導しながら、同志たちとともに夜を徹して『ボルシェビーク』という政治雑誌を発行

したり、また講習会や講演会にも出席して大衆を革命思想で教育することに全力をそそいだ。
将軍は疲れを知らなかった。革命意識にようやく目ざめ、組織生活が新しい力をあたえてくれるとよろこぶ農民たち――、どんなことでも熱心にやってのける青年たちの姿を見るたびに努力のかいがあったと思い、革命の明るい未来像を描いてみるのだった。
日がたつにつれて農民の革命意識は高まり、すべての組織が力強く機動的に働くようになった。
将軍はとくに、孤楡樹で革命の幹部を計画的に育成することに大きな力をそそいだ。将軍は四年制の三光学校に二年制の高等科を併設し、そこへ孤楡樹はむろん、卡倫と南満州一帯からえらばれた少年団員をうけいれた。かれらの年齢は十四歳から二十歳までであった。
高等科の教員は反帝青年同盟員で、すでにこの地に派遣されていた共産主義者たちが直接教壇にたった。かれらは学生たちに朝鮮の歴史、マルクスの『資本論』、『弁証法的唯物論』、『人類社会発展史』、『ソ連社会主義革命史』などの社会科学課目を中心に教えた。こうした教材は将軍の指導のもとに共産主義者たちが直接作成し、プリントしたものをもちいた。
またこの学校ではとくに、青少年たちに銃のあつかい方をならわせ、軍事知識を教えたりした。
将軍が一九三〇年の夏におこなったこのような活動は、革命の前途のために、今後の本格的な武装闘争の土台を築く重要な活動であった。つまり将軍のすべての活動は、武装闘争へと移行するための準備であった。
事実、将軍は卡倫地方で活動を開始したときから、すでに国内へ試験的に武装グループを派遣する決意をかため、反帝青年同盟員のなかから一部の同志をえらび、当時安図で共青活動をしていた叔父の金亨権先生のもとへおくり、武装グループを編成させていた。
金亨権先生を先頭とする武装グループは、一九三〇年八月に国内へ進出して咸鏡南道豊山(プンサン)郡把撥(パバル)里の駐在所を襲

撃した。また九月のはじめには洪原郡(ホンウォン)一帯で日本の警察に打撃をあたえた。
しかしその途中、スパイの密告によって武装グループのメンバー全員が敵に逮捕されてしまうという事件がおこった。
そのため金亨権先生は十五年間の刑をうけ、他の同志たちとともにながいあいだソウル西大門刑務所に監禁され、一九三五年、痛ましくも獄死した。
将軍の活動はいっそう複雑になった。
一九三〇年の夏、将軍は農村工作をつづけるかたわら共青指導者として吉東(キルトン)地区の数多くの部落をたずね歩き、分散していた同志たちと連係をむすび、破壊された共青の組織を復活させるためにあらゆる情熱をそそいだ。
しかし、この時期の将軍の活動は困難をきわめた。
敵は将軍を逮捕しようと血まなこになっていた。将軍はどこへいっても敵のきびしい警戒網につきあたり、なんども危険な状態にさらされた。
将軍が同志たちとの連係をとりもどそうと吉林へいったときのことだった。将軍は敵のきびしい監視をくぐりぬけ無事に吉林へはいることはできたが、組織に関係のある友人たちと会う方法がなかった。
五・三〇暴動の悪影響によって、朝鮮人にたいする日本の侵略者と国民党軍閥の暴圧は、いっそうはげしくなっていた。一部の中国人は、朝鮮人を見つけさえすれば「小東洋鬼(シャオトンヤンクイ)（小日本人め！）」といいながら手あたりしだいに殺害するというありさまであった。
こうした状況のもとで、組織に関係していた同志たちはほとんど一時身をひそめていた。
将軍はやむなく海竜(ヘリョン)、清原(チョンウォン)地区に住んでいる一共青員と会い、かれをつうじて連係をたもとうと考えた。
しかし軍閥当局の取締りがきびしいうえ、日本官憲の手先まであとをつけまわすために吉林市内をぬけだすこと

自体がまず問題であった。

将軍は考えぬいたすえ中国人の紳士に変装し、吉林の本駅をさけて郊外の駅から列車にのることにした。

こうして将軍は、二等車（いまの一等にあたる）で海竜駅まで無事にゆきつくことができた。

将軍はいくらか安心した。

しかし敵は、今度こそまちがいなく将軍を逮捕できるものと信じていた。なぜなら、吉林から将軍を尾行したスパイが、郊外の駅で将軍が海竜ゆきの乗車券を買いもとめたことまでつきとめ、海竜にあった日本領事館に急報していたからである。

日本領事館はただちに軍警を駅に出動させた。将軍が列車からおりると同時に逮捕する計画だった。

将軍は敵の策動には気づいていなかったが、（将軍は、あとで同志をつうじてくわしくこの間の事情を知った）列車が海竜駅のホームにすべりこんだとき、殺気だった目つきで列車の到着を見はっている日本軍警の姿を発見して、これはただごとではないと直感的に感じとった。

将軍はすばやく駅の構内を脱出すると馬車で市内のある高級旅館にのりつけ、この危険からのがれることができた。

危機を脱した将軍は旅館にしばらく滞在しながら、予定していた同志たちと連絡をとって具体的な任務をあたえたのち、他の同志と連係をとるために蛟河（キョハ）へむけて出発した。

その後、海竜地区では青年運動がいちだんと活気をおびるようになった。

将軍がたずねていった蛟河も、やはり敵の暴圧のために血なまぐさい空気がただよっていた。しかも、それまで活動していた青年たちが身をかくしたあとだったので、将軍はだれにも会うことができなかった。

敵の弾圧があまりにもきびしいため、将軍自身も当分のあいだ身をかくさなければならなかった。

将軍はやむなく父の旧友をたずねることにした。この地方には父の古い親友である張喆鎬と、かつて父と親しかった李在淳（リジェスン）という人が住んでいた。

しかし、かれらをたずねた将軍は失望した。最初は張喆鎬をたずねたが、かれはとうに金に目がくらみ、独立運動については少しも関心をしめさず完全に堕落していた。将軍と会ったかれは、親友の息子が自分をたずねてくれたのをよろこぶかわりに、わざわいが自分におよぶのをおそれてふるえあがるありさまだった。

将軍はかれに見切りをつけ李在淳の家をたずねた。かれは旧友の息子がきたといってなつかしがりはしたが、やはり将軍をかくまおうとせず、食事でもしてから別れようといった調子だった。

将軍はかれらと別れてから深いもの思いにとらわれた。

活動が順調にすすみ、目のまえが明るかったときは独立の志士を自称し、自分こそはもっとも熱烈な愛国者であるかのようにふるまっていたものたちが、敵の弾圧がはげしくなり情勢が困難になると戦列からはなれ、自分だけの安逸をはかる道に逃避し、むかしの親しい関係はおろか、義理もなにもすっかりすてて去ってしまったのである。思想的に堕落したものは、人間的にも卑劣であった。

きびしい革命闘争は、思想的にも人間的にもしっかりとむすばれていなければ成功しないものである。よろこびも苦しみも、ともにわかちあうことができる同志愛、死のまえでもかわらぬ同志愛、これを同志たちのあいだで育てていこう――、将軍はこう決心した。

将軍は気をとりなおし、吉林で青年組織に関係していた友人をたずねることにした。しかし、だれが密告したものか、また国民党軍閥の手下が追跡してきた。

危険な状態におちいった将軍は敵の追跡をかわしながら、とある家のまえまできた。このとき、その家から一人の朝鮮の婦人があらわれ、「どなたか存じませんが追われているんですね。さあ早くわたしの子どもをおぶってい

なさい」といってすばやく自分の子どもを将軍に背負わせると、かまどのまえで火をくべるようにいった。そして、軍警がくれば自分がとりなすから、だまっているようにとつけくわえた。危険なときだったので将軍は婦人のいうとおりにした。

やがて国民党の兵隊がかけつけてきて、「たったいま、ここへ若い男がやってきただろう。どこへいった！」とわめきたてた。

婦人は平然として、だれもこなかったとこたえた。

しかしそのとき、将軍の背におぶさっていた子どもが人見知りをしてか急に泣きだした。まったくあやうい一瞬であった。

とっさに、その婦人は敵にさとられまいと中国語で食事をすすめたり、心にもないあいそをふりまいたりして急場をしのいだ。

すると敵は、すぐにでもつかまえられると思った男が影もかたちもなくなるとは奇怪千万だ、とつぶやきながらたち去った。

だが、まだ安心はできなかった。勇敢で機知にとんだその婦人はこういった。

「安心してもう少し、うちの主人のようにふるまっていてください。主人は畑へいっていますが、まもなくもどってくるころですから、もうしばらくしてから帰ってくるようにと、これからいって話してきます。あいつらが帰ってしまってから先のことを考えたらいいでしょう」

そしてその婦人は、おなかをすかしているだろうからと食事の用意までととのえてくれた。じつに用意周到で心のやさしい婦人であった。

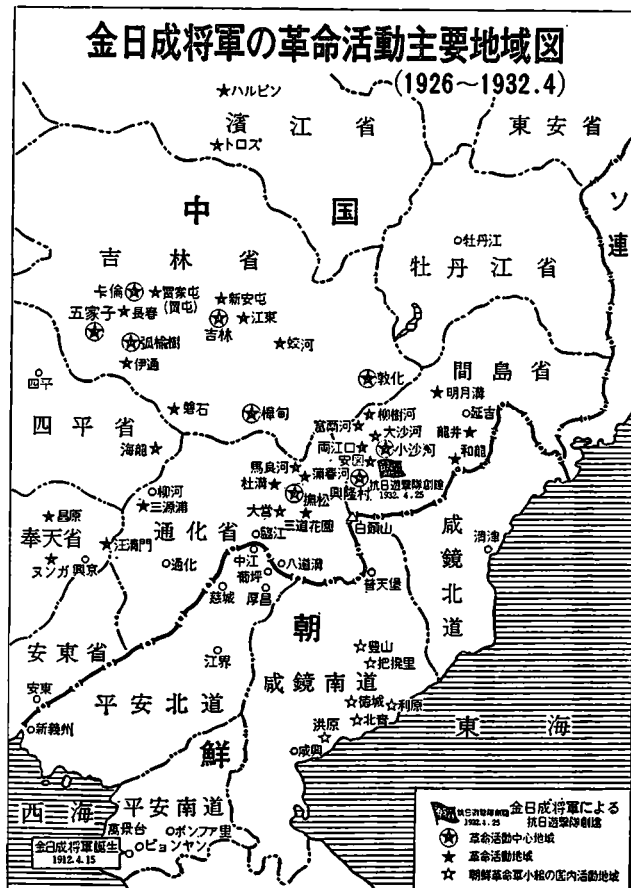
ところが、そこへまた国民党の兵士たちがやってきて、用があるからと今度は将軍をよびつけた。

すると婦人は顔色一つかえず、「主人はからだをこわしていますので、わたしがかわりにいってきましょう」といって、かれらの用事をたしてからもどってきた。
将軍は、しばらくして畑から帰ってきた家の主人と会い、あいさつをかわした。つね日ごろから革命家をたすけようと考えていたこの家の主人は、将軍が身をかくすところまで紹介してくれた。
将軍は、危険をおかしてまで献身的につくしてくれた良心的で気丈な婦人とその主人に深く謝意を表し、別れをつげた。
ひところの「独立の志士」たちは尻ごみをし堕落しても、つねにかわりなく誠実で不屈なのは人民であった。将軍はこのとき、どんな逆境のなかにあってもかわらない力と美しさをもちつづける民衆こそ、革命家が依拠しなければならないもっとも貴重なふところだと感じた。
将軍はその後、さがしもとめていた同志と会ってその地方の情勢をくわしく把握し、今後の活動についてうちあわせたのち哈爾濱へむかって出発した。
目的地に無事ついて組織とつながりをつけることに成功した将軍は、今後の活動についてその地方の同志たちといろいろ話しあった。
しかしここでも、将軍は敵の目をさけるためにさまざまな困難にたえねばならなかった。まず普通の旅館では臨検がきびしいため、白系ロシア人が経営する安全な高級旅館に身をよせることにした。
ところがまもなく白系ロシア人の女中が、りっぱな背広に身をかためた将軍に食事の注文をとりにきた。将軍は困った。ふところには高級旅館で食事をとるだけのもちあわせがなかった。
そこで将軍は、女中が注文をとりにくるたびに友人の家で食事をすませてきたといってはその場をとりつくろった。そして夕食どきには外にでて、一番安いとうもろこしのピロシキを買ってきては腹のたしにした。

哈爾濱で用をすませた将軍は、同志たちに別れをつげて敦化(トンファ)へむかった。
しかし、ここも敵の弾圧がきびしかったため、一九三〇年の秋には伊通県孤楡樹へたちより、しばらくその地方の革命組織を指導したのち、同志たちといっしょに懐徳県五家子(オガジャ)一帯の農民大衆のなかへはいっていった。
このように、いかなる難関も将軍の前途をはばむことはできなかった。敵は「水ももらさぬ警戒網」をはりめぐらしたが将軍を逮捕することはできなかった。
将軍がつきやぶり、のりこえてきた死線はどれほど多かったことだろう。
遠大な構想をいだき、ひたすら同志と人民大衆を信じ、かれらのために生きてゆく将軍の胸には失望の生ずる余地などまったくなかった。
ひとたびすすめば、たとえ敵のためおくれたり迂回しなければならないようなことがあっても、最後には必ず目的地に到達する将軍であった。
ゆく先ざきで将軍は活動をくりひろげ、革命を準備した。ひとところで任務が終れば休むことなく他の地方へと移っていった。
こうして将軍はいたるところで同志をつくり、人民のあたたかい愛にむかえられた。
将軍は、かたむきかけたわらぶきの家で見知らぬ老婆がしつらえてくれた質素な床につくときも、それに深く感謝しながら夜ふけまで新しい活動の構想をねり、ぼろをまとったあわれな同胞の姿を見ては、おのれをきびしくムチうった。
闘争と革命は将軍の唯一の義務であり、またしあわせでもあった。
将軍とその同志たちがたずねた五家子は、この地域を開拓した三百余戸の朝鮮人が部落をかたちづくっている純然たる農村地帯であった。

この地方には、すでに青年会、婦女会、農友会などの大衆団体が組織されて活動しており、教育機関としては三星(サムソン)小学校が設立されていて、つぎの世代にたいする教育がおこなわれていた。また農民にたいする文化啓蒙活動もすすめられていた。

しかしマルクス・レーニン主義の思想が普及していなかったため、この地域はまだ民族主義の古い殻(から)からぬけでることができないでいた。将軍は同志たちとともに、この地方の先覚者や進歩的な青年をたずねてつながりをつけ、かれらをつうじて各団体をしだいにマルクス・レーニン主義的な革命組織にかえてゆく活動をはじめた。

将軍はまず、三星小学校に目をむけ、教員を進歩的な青年たちにとってかわらせ、高学年の学生たちにはマルクス・レーニン主義理論にもとづく『宗教批判論』、『共産党宣言』、『レーニン主義の諸問

題』などの政治課目も教えるようにした。そして全校生（約二百名であった）で少年先鋒隊と少年探険隊を組織し、直接これを指導しながら軍事訓練をおこなった。

また大衆のなかにマルクス・レーニン主義思想を普及しやすくするために、青年会、婦女会、農友会などを改編し、すぐれた青年会員たちで反帝青年同盟を組織した。

農友会は、その名称を農民同盟にかえて『農友』という雑誌を発行した。また改編された婦女会は婦人たちを朝鮮独立と女性解放の思想で教育しながら、彼女たちの文化水準を高める活動をおこなった。

将軍は農民大衆と寝食をともにしながら、かれらのなかでねばり強く講演と解説活動をつづけた。

このようにして将軍は卡倫、孤楡樹地方から五家子一帯にいたる農村地域での精力的な活動によって、広はんな農民大衆を短時日のあいだに革命意識にめざめさせこの一帯に確固とした革命的な大衆の基盤を築いたのである。

数多くの自称「愛国者」や「共産主義の闘士」たちが、とるにたらない目先きの地位や名誉のための勢力あらそいに明け暮れしていたとき、まだはたちにもならない若さで早くも革命の大局と民族の運命を見とおし、大衆のなかに深くはいって、ひたすら祖国と人民のために力をそそいでいる将軍の姿は、この地方の人民大衆と先覚者たちを深く感動させずにはおかなかった。

かれらは、愛国的節操と革命的な情熱で人びとの心を燃えたたせている将軍のことばに感激し、つねに大衆に依拠し、大衆とともにいる将軍の活動ぶりとその人間性に深い感動をおぼえた。

こうして、将軍にたいする同志たちと人民大衆の期待と支持は日ましに高まっていった。

五家子一帯で革命勢力をはぐくんだ将軍は、一九三一年のはじめ敦化へむかった。

将軍はここを拠点として共青組織を復活させ、中核的な青年たちを結集するために間島地方へ同志を派遣したりした。

こうした過程をつうじて、敦化には車光洙（チャグワンス）をはじめとする反帝青年同盟員と、吉林でつながりをもっていた共青員、そして約二十名におよぶ敦化中学校の卒業生など数多くの若ものたちが将軍のまわりに結集した。

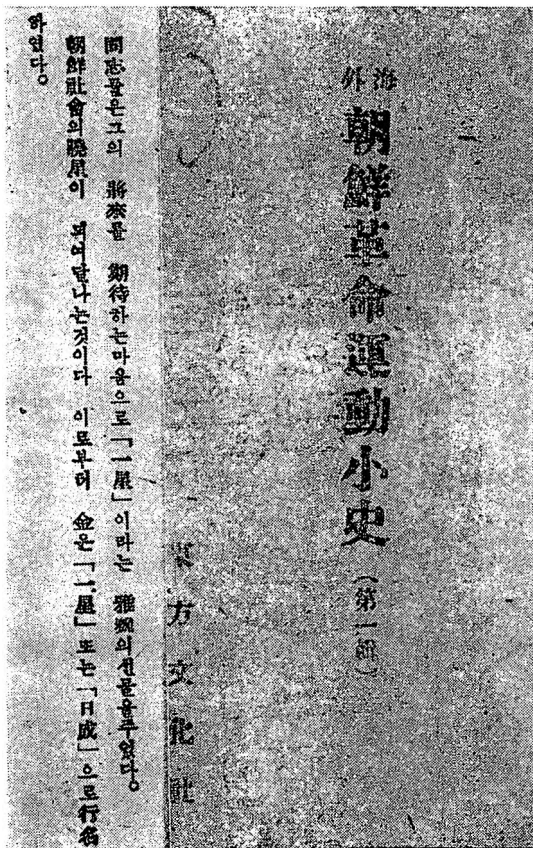
将軍はかれらを動員して吉東地区の共青組織を復活させ、農民大衆のなかで革命教育をねばり強くおしすすめながら、新しい情勢に対処していっそう積極的な闘争にそなえた。

しかし、このころの将軍の生活はきわめて苦しかった。

とくに敦化から甕石磖子（オンソクラジャ）へ移ってからは、ふとんも枕もなく、ひろってきた薪ざっぽうを燃やしながら夜をすごすありさまだった。

そして、とうもろこしがゆに朝鮮漬だけで食事をすますことが多かった。

このような生活をおくりながらも、将軍は昼夜をとわず農民のなかで精力的な地下活動を展開した。

こうして将軍は、その犠牲的な努力によって、広はんな人民大衆をしだいに日本帝国主義に反対する武装闘争の道へと導いていった

海外朝鮮革命運動小史（第一輯）

将軍の名が「日成」とよばれるようになったいきさつにかんする資料『海外朝鮮革命運動小史』

のである。

だれもが将軍のめざましい活動に感嘆し、やがてはすぐれた指導者になる人物だと信じてうたがわなかった。まただれもが将軍を自分たちの戦友として、旗手としていただくことをこのうえない誇りとした。

将軍の名はしだいに、同志や人民大衆のなかで成柱（ソンジュ）ではなく日成（イルソン）とよばれるようになった。

金日成という名は、将軍が五家子一帯で活動していたときに同志たちが名づけたものである。

朝鮮の輝かしい導きの星になってほしいという意味から、同志たちは最初、将軍を一星（イルソン）、または一つ星（ハンビョル）とよんでいた。

しかし、かれらはその名前にも満足できなかった。朝鮮を植民地の暗黒から救いださなければならない将軍は、一つの星よりも、むしろ太陽でなければならなかった。

そのため将軍の名は、日成（イルソン）とあらためてよばれるようになったのである。

まさにこの名は、革命の戦友たちと人民大衆が心の底から将軍にかけたかぎりない期待の輝かしい形象化であった。

「同志たちは、かれの将来に期待する心から一星という雅号をおくった。朝鮮の暁（あけ）の明星になってほしいというのだった。このときからかれは、一星、または日成とよばれた」（崔衡宇著『海外朝鮮革命運動小史』第一輯、ソウル東方文化社版、一九四五年、三一ページ）

こうして朝鮮人民は、将軍が抗日武装闘争を展開しはじめたときから、将軍を祖国の救世主として、民族の太陽としてあおぎみ、金日成将軍とよんで慕うようになったのである。

第三章　抗日武装闘争の旗を高くかかげて

1　偉大なよびかけ「武器をとれ！」

金日成将軍は各地の革命勢力をさらに拡大しながら、抗日武装闘争の準備を精力的におしすすめた。
日ましに激化する内外の情勢を科学的に分析した将軍は、武装闘争へ移行することがこれ以上おくらすことのできない切迫した問題だと判断した。

一九二九年からはじまった経済恐慌は、かつてない破壊力をもって資本主義世界をゆさぶっていた。いくつかの資本主義国家の支配層はもっとも反動的なファッショ統治制度を樹立し、自国内の人民をいっそう苛酷に搾取する一方、侵略戦争を挑発することによって深刻な経済恐慌の破局からのがれようとあがいていた。

こうして歴史の舞台には、ドイツ、イタリア、日本などによる凶悪なファシズム国家が台頭し、植民地と勢力範囲再分割のための新しい侵略戦争の暗雲がふたたび低くたれこめはじめたのである。

すでに一九二七年ごろから経済恐慌のうずのなかでもがいていた日本帝国主義は、いち早くファッショ軍閥統治を樹立し、勤労大衆にたいする搾取と革命運動にたいする弾圧を強化しながら、大陸侵略の野望をとげようといっそう露骨に策動した。このことは朝鮮に大きな影響をあたえた。

日本の独占資本と軍閥は、深刻な経済恐慌でうけた損失をとりもどし、新たな侵略戦争の費用をつくりだすために朝鮮での収奪をさらに強化した。そのため朝鮮人労働者と農民の生活はいっそう悲惨なものとなった。

一方、日本帝国主義は自己の略奪を保障し、朝鮮を大陸侵略の安全な「銃後」につくりかえるために、愛国的な朝鮮の革命勢力を野獣のように弾圧した。一九二九年には、悪名高い「治安維持法」がさらに改悪され、人民大衆は手あたりしだいに牢獄へとおくりこまれた。

こうして合法的な活動のわずかな可能性まで抹殺され、朝鮮は手かせ足かせの状態となった。

朝鮮人民は坐して死ぬか、さもなくばたちあがってたたかうかの岐路に直面した。この岐路でひざを屈してしまえば、朝鮮人民は永遠に亡国の民の宿命からのがれることができなかっただろう。

生と自由と解放をたたかいとる道はただ一つ、闘争だけ、――決死的な闘争の道だけであった。

朝鮮人民は決然と闘争にたちあがらねばならなかったし、たたかって勝利をおさめなければならなかった。

こうして革命的な労働者、農民を先頭とする朝鮮人民は、一九二〇年代の末期から共産主義者の指導のもとに強力な闘争をくりひろげた。

一九二九年に、元山(ウォンサン)の労働者たちがゼネストを断行したのにひきつづき、釜山紡績工場、新興(シンフン)炭鉱、ピョンヤンゴム工場の労働者たちによる大規模なストライキや暴動があいついでおこった。

労働者たちの革命的進出にはげまされ、農民大衆も各地で力強い闘争をくりひろげた。

慶尚(ギョンサン)南道金海(キムヘ)の迫間(はざま)農場における千三百名の小作人たちの争議と暴動、平安北道竜川(リョンチョン)の不二(ふじ)農場における農民闘争、咸鏡南道端川(タンチョン)の農民暴動をはじめ、いたるところで農民の大衆的な闘争と暴動がおこった。

東満州一帯でも大規模な農民の小作争議や暴動の火の手があがった。

一九三一年の秋、間島一帯の朝鮮農民は、共産主義者の指導のもとに秋のとりいれ暴動（秋収暴動といわれている）

をおこした。秋の収穫期に減租闘争としてはじまったこのたたかいは、しだいに日本帝国主義と反動軍閥と地主に反対する大衆的な暴動へと発展した。
この暴動には東満州全域から、じつに十万余名の農民が参加した。そしてこの闘争は翌年の端境期の暴動（春慌暴動といわれている）へと発展した。
学生たちの反日運動も、一九二九年の光州学生闘争を契機にいっそう積極的にくりひろげられた。
この時期の革命的な闘争における重要な特徴は、広はんな人民大衆による果敢な暴動的進出であった。
暴動的進出は闘争の過程で鍛錬され、めざめた労働者や農民の革命性と戦闘性の表現であり、大衆的な闘争の発展における必然的な産物であった。したがって事態は、大衆のこうした暴動的進出を一般化し組織化して、より高度の武装闘争へと発展させることを切実に要求していた。すなわち武装闘争だけが武装した敵を撃滅し、民族解放闘争の終局的な勝利をたたかいとる唯一の道であった。これはまた、長期にわたる朝鮮人民の民族解放闘争の歴史的な経験がなによりも雄弁に物語っている。
周知のように、朝鮮人民はながい歳月にわたり、侵略者に反対するさまざまな形態の闘争をくりひろげてきた。義兵闘争もおこなわれたし、独立軍の闘争もあった。
しかし敵の武力が大きくなり弾圧がはげしくなると、団結することを知らないかれらは結局ばらばらに散ってしまった。
また、進歩的なインテリによる愛国的な啓蒙運動もおこなわれたし、暴力的進出にまで到達した労働者や農民の大衆的な闘争もあった。
こうした闘争はもちろん、民族解放闘争において肯定的な意義をもつものであった。
しかし、それだけでは決して日本帝国主義を打倒することもできないし、朝鮮人民の不幸と受難の歴史に終止符

をうつこともできなかった。
過去における運動の経験は、広はんな大衆の暴力闘争も、それが確固とした統一的指導とマルクス・レーニン主義にもとづく正しい戦略戦術的指導によって保障されなければ、失敗をさけることができないということを明白に物語っていた。
また請願の方法や外部の力に依存して独立を達成しようという試みなども、きわめておろかな妄想にすぎないということをはっきりと教えていた。
もっとも正確で唯一の道——それは武装した侵略者を武力によって撃退する道、すなわちマルクス・レーニン主義を指針とするさまざまなかたちの大衆闘争と密接にむすびつき、確固とした大衆的な基盤のうえにたつ組織的な武装闘争を展開する道であった。こうした武装闘争によってのみ、日本帝国主義侵略者を完全に撃退することができ、民族の前途を切りひらくことができるのだった。
しかもこの時期、将軍が活動していた東満州の事態は、武装闘争への決起をいっそう切迫した問題として提起していた。
農民大衆の革命的進出にあわてふためいた日本の侵略者たちは、血なまぐさい殺戮行為にしがみついた。かれらは、「朝鮮人を百人殺せば、そのなかに共産主義者が一人はいるはずだ。だから容赦なく手あたりしだいに殺せ」と公言してはばからなかった。そしてかれらは砲兵隊まで動員して村に砲弾をうちこみ、騎兵隊は逃げまどう婦女子を踏み殺したりした。
こうしてじつに四万余名のわが同胞が虫ケラのように殺され、数千戸の農家が焼きはらわれた。まさに日本の侵略者たちの野獣のような蛮行は、悪魔も顔をそむけるほどのものであった。
侵略者にたいする朝鮮人民の憤怒は極度に達し、復讐の炎は強く燃えさかった。

将軍は日ましに険悪になる困難な情勢を注視しながら、すでに吉林監獄から出獄した一九三〇年の夏、朝鮮革命にかんする主体的なマルクス・レーニン主義路線——すなわち反帝反封建民主主義革命路線と武装闘争路線、統一戦線路線および朝鮮共産党創建の方針をうちだし、まず抗日武装闘争のために共産主義者たちの武装組織である朝鮮革命軍を組織して、そのメンバーを国内と中部満州各地に派遣していた。

ちょうどこのころ、情勢の急変をつげる事態が発生した。「満州事変」がおこったのである。

一九三一年九月十八日の夜、奉天（いまの瀋陽）の北方にある柳条溝付近で満鉄の線路が連続的に爆破された。戦争の口火となったこの事件は、いうまでもなく日本軍閥統治集団の謀略屋どもがひきおこしたものだった。満州全土は動乱で騒然となった。図にのった日本侵略軍は全満州に野火のようにひろがっていった。

この事変の直後、安図では各地の革命組織の責任者会議がひらかれた。

この集まりで将軍は、抗日武装闘争だけが朝鮮の革命を発展させる道であり、共産主義者はあらゆる障害をのりこえてこの闘争に広はんな大衆を結集しなければならないとよびかけた。

「われわれが武器をとる問題はなまやさしいことではない。しかしこんにちの情勢は、われわれが武器をとらなければならない段階にまで到達した。……武器のあるものは武器、金のあるものは金というふうに、われわれがもっているすべての力をあわせ、総動員してたたかわなければならない。坐して嘆いたり、敵の鬼畜のような蛮行を見て絶叫するだけでは決して問題は解決されない。われわれはたちあがって手に武器をとり、敵とたたかわなければならない」

つづけて将軍は、武器を入手する方法についてのべた。

「武器をどこで手にいれるのか。金があれば買うこともでき、またつくることもできる。しかし、もっとも早い方法は敵の武器を奪いとることである。知恵をだしあい、場所をえらび、死をおそれずたちあがれば、自分のもつ

武器は解決することができる」

この決定的な訴えは、会議に参加した人びとの心をはげしくゆすぶった。そして全員がこの提案を心から支持した。

金日成将軍がしめした武装闘争への移行路線は、民族解放闘争を勝利へと導く唯一の、可能で、正当な道を照らす偉大な発起であり、天才的な革命路線であった。またこれは、将軍がマルクス・レーニン主義の真理を朝鮮革命の具体的な実情にあうよう創造的に適用し、発展させたもっとも科学的な闘争路線であった。

当時、こうした合法則性と革命の前途をだれ一人として予見するものはいなかったし、また明らかにすることもできなかった。

これはただ、マルクス・レーニン主義理論にたいする高い識見と、天才的な洞察力をもつ金日成将軍にしてはじめて可能なことであった。

将軍は、わが国の民族解放闘争の具体的な条件を科学的に分析し、それにもとづいて抗日武装闘争を民族解放闘争のおもな闘争形態として規定し、他の形態の闘争をこれと密接にむすびつけて発展させなければならないと判断したのである。

とくに将軍は、革命の参謀部である朝鮮の真のマルクス・レーニン主義党を創建する準備も、広はんな反日民族統一戦線をつくる活動も、武装闘争と結合されることによってのみ実現が可能であると考えた。

日本帝国主義の弾圧と分派分子たちの分裂策動により、一九二五年に創建された朝鮮共産党が解散され、反日の唯一の旗じるしのもとに民族的団結がまだ実現されていない条件のもとで、将軍はマルクス・レーニン主義党創建の準備と、反日民族統一戦線の形成を朝鮮人共産主義者たちの重要な課題として提起した。しかしこの課題は、朝鮮民族解放闘争のおもな形態である抗日武装闘争に依拠しないでは実現できなかった。

これは将軍が以前から考えていたことであり、実践闘争の過程ではぐくまれた独創的な構想であった。

このように将軍は、武装闘争と党創建の準備と統一戦線――この三つはたがいに切りはなしては考えることもできず、そのうちの一つをとりのぞいても他の二つは実現できないという弁証法的な相互関係にある全一体とみなした。こうした意味でも、おもな闘争形態を武装闘争とみなした将軍の路線は独創的なものであった。

金日成将軍が明らかにしたこのような路線の底には、歴史発展の推進力である人民大衆の力、とくに気高く勇敢な朝鮮人民の威力にたいする確固とした信念がよこたわっていた。人民を教育し、組織し、闘争へと導けば、日本の侵略者たちは必ず滅亡し、祖国の独立を達成できるというのが将軍のゆるぎない信念であった。そしてこれこそ朝鮮革命の主人公は朝鮮人民であり、朝鮮人民だけが朝鮮の革命を遂行することができるという、将軍の徹底した主体思想と自主的な立場から出発したものであった。

将軍は抗日武装闘争路線とともに、それを実現するための具体的な方針も明らかにした。

将軍は、武装闘争を展開するためにはまず常設的な革命武力である抗日遊撃隊を組織し、それを強固なものにしなければならないとして、遊撃隊を創建する方針をさししめした。

将軍は遊撃隊を創建するうえで守らなければならない重要な原則として、マルクス・レーニン主義を戦略戦術の基礎にし、人民大衆との連係を強め、その隊伍を労働者、農民、進歩的な青年たちを中核として組織し、かれらを共産主義思想で武装させるための政治教育活動を強化することであるとした。

将軍は一九三三年九月、当時、遊撃隊の中隊長であった崔賢（チュエヒョン）同志に抗日武装闘争路線について説明したのち、遊撃隊伍を真の革命武力にする問題についてつぎのようにのべた。

「抗日遊撃隊は、わが祖国の独立と解放のために、日本帝国主義侵略者とその手先に反対してたたかう真の人民の武力とならなければならない。……われわれは武装闘争をすすめる過程で新しい隊員をもっとうけいれ、われわ

れの隊伍をつねに拡大してゆかなければならない。……敵とのたたかいできたえられ、点検された青年は少なくない。かれらを遊撃隊にうけいれ、りっぱな革命戦士に育てなければならない。われわれの遊撃活動地域内には多くの鉱山労働者や林業労働者がいる。かれらは遊撃隊伍を拡大し発展させるための重要な源泉である。……遊撃隊員を共産主義思想でしっかりと武装させなければ、長期的で、しかも困難な抗日武装闘争において勝利をおさめることはできない。したがって隊員たちにたいする軍事訓練を強化する一方、かれらのなかで思想教育活動を強めることが大切である」

抗日遊撃隊を創建するうえにおいて、将軍が重要な問題の一つとして提起したのは、労働者、農民をはじめとする人民大衆との連係を強化し、ゆるぎない大衆的基盤を築きあげることであった。将軍はとくに人民大衆の積極的な支持をえることが、遊撃隊を結成し、それを強化して、さらに抗日武装闘争を持続させる決定的な保障になると強調した。

将軍はまた、遊撃活動の拠点となり、朝鮮革命の策源地となるべき遊撃根拠地の創設にかんする方針をさししめした。

金日成将軍が明らかにした抗日武装闘争についてのこれらすべての方針は、遊撃戦にかんするマルクス・レーニン主義の理論を創造的に発展させた輝かしい模範であった。

将軍の抗日武装闘争方針は、たたかいに決起した朝鮮人共産主義者と朝鮮人民に新しい力をあたえ、闘争の前途を模索していた民衆に明確な進路をさししめした。

こうして将軍は、抗日遊撃隊を組織するための歴史的なたたかいを精力的におしすすめたのである。

2　抗日遊撃隊の誕生

一九三一年十一月、将軍の参加のもとに明月溝（ミョンウォルグ）会議がひらかれた。十日間もつづけられたこの会議では、日本帝国主義の満州占領とかんれんして反日勢力を積極的に動員し、遊撃隊を創建する問題が真剣に討議された。

この会議ののち将軍は共青指導の責任を他の同志にまかせ、久しぶりに母がいる安図県興隆村へもどった。そしてあくる年の一九三二年のはじめに家族を小沙河（ソサハ）へ移してから、武装隊伍を組織するための地下工作に全力をそそいだ。

将軍は延吉県、和龍県、安図県にあったいくつかの地下組織に工作員を派遣する一方、自分自身は直接、安図において小沙河、大沙河（テサハ）、興隆村一帯の地下工作をひきうけ、夜を日についで精力的な活動をくりひろげた。

将軍の指導のもとに共産主義者たちは、間島地方の秋収暴動と春慌暴動できたえられた労働者、農民、青年たちでもって遊撃隊の骨幹をつくりあげた。

革命的な大衆は、敵の残忍な白色テロのまえで武器をとらなければならないということを骨身にしみて感じとっていた。将軍と同志たちはこのような人びとの気持ちをくみ、大衆のなかで武装隊伍を組織するための活動を猛烈におしすすめた。また一方で将軍は、武装闘争の大衆的基盤をかためる活動にも精力をかたむけた。

将軍は同志たちの地下工作を指導する一方、みずからもっとも困難な地方へおもむいて工作をすることにより実践的な模範をしめした。

なかでも、安図県から敦化県へむかう途中の蒲留河（プルホ）近辺の農村でおこなわれた将軍の地下工作は、きわめて異彩

を放っていた。

その村は敵の監視がきびしいうえ、スパイ網がすみずみにまではりめぐらされていて非常に危険なところであった。しかし、数多くの朝鮮人が住んでいたためにどうしても組織をつくり、革命化しなければならない村であった。村にはすでに一人の工作員がいたが、まだ経験にとぼしく、これといった成果はあげていなかった。

将軍はかれがたずねてきたとき、まえもってこう指示しておいた。

「家の仕事がたいへんなので、作男を一人つれてくるといううわさを村ぢゅうに流すのだ。そうすればわたしがきみの家へいって、一か月半ぐらい作男として暮らしながら組織をつくろう」

数日後、将軍はわざと床屋にもゆかず、ぼろを身にまとい、だれが見ても同情せざるをえないような作男のいでたちで工作員といっしょに馬車にのり、問題の村へはいっていった。

しかし、すぐに危険がせまってきた。

夕刻ごろ、友人と部屋にいた将軍は遠くからきこえてくる騒々しい馬のひずめの音を耳にした。外で遊んでいた子どもたちは、騎馬隊がやってくるといって大騒ぎをした。敵がなにかをかぎつけて将軍を追跡してきたのにまちがいなかった。

だが、それをさけるすべはもうなかった。将軍はすぐに土間におりて薪を割った。

そこへ騎馬隊がやってきた。敵はみすぼらしい格好で薪を割っている将軍になにかたずねようとした。このとき工作員は、「これはうちの作男ですよ」とこたえた。

敵は、自分たちが追っている男が少なくとも洋服は着ているものと考えていたらしく、将軍の方を見て、とんだ見当ちがいをしたものだとぶつぶついいながらひきあげていった。

つぎの日から将軍は、たき木でもとりにいくかのようによそおいながら、工作員とそりをひいて山へのぼった。

将軍は山で書類を読んだり、部落の実情を具体的にきくかたわら工作員にこまかく任務をあたえた。

こうした内幕を知るよしもない村人たちは、だれもが将軍のことをよく働く作男だとばかり思っていた。そのため村の婦人たちから、井戸に凍りついた氷をわってくれとたのまれたときでも、将軍はだまって氷をわってやった。

傑作なことも一度や二度ではなかった。

ある日、となりの家で祝いごとがあった。そのため村の青年たちがなんどもやってきては用をいいつけた。将軍はしかたなく、いわれたとおりにした。すると今度は餅をついてくれといってきた。将軍は困ってしまった。工作員がそれを察し、この男はきのう山でたき木をとるとき腕にけががをしたので、きねをもてないだろうから自分がかわってやろうといい、将軍のかわりに餅をついた。

そのため村の婦人たちまで作男だといって見さげる始末で、他の人たちには餅を皿にもってだしながら、将軍にだけは手づかみでわたしたりした。しかし将軍は、これも地下工作にはかえって好都合だと考え、心のなかで笑った。

このように、一か月半にわたって努力をかさねた将軍は、工作員を導きながらしっかりした革命組織をつくりあげたのち村をはなれた。

同志たちのもとに帰った将軍が村での出来事を話すと、みんなは腹をかかえて笑いころげた。将軍は自分の体験からみんなにこう語った。

「革命家というものは、どこへいっても住みつくことができるものだ。もしそれができなかったとすれば、それは紳士的に革命活動をおこなったからである」

同志たちは、万難を排してひたすら革命のために身をさげる将軍の闘争精神に深く感動し、その模範に見ならお

うと誓いあった。

このエピソードにはつぎのような後日譚がある。

のちに将軍は、パルチザンの隊長となり、かつて、作男をよそおって工作した蒲留河付近の村へ馬にのってゆき、多数の村人たちのまえで演説をしたことがあった。そのとき、村の婦人たちはすっかりあわててしまった。

「こんなことってあるかしら。あの人はここで作男をしていたのに、どうしてパルチザンの隊長になったんでしょう」

真相を知るよしもない彼女たちにとっては、まったく無理からぬことであった。

将軍はこのように、同志たちに実践的な模範をしめしながら広大な地域で共産主義組織と反帝同盟、農民協会と革命互済会など、革命的な大衆組織に多数の人民を結集し、かれらに決定的な瞬間にはいっせいにたちあがるよう思想的な準備をととのえさせた。

また一方では、赤衛隊や少年先鋒隊のような半軍事組織をさらに拡大し、敵の攻撃から革命組織と大衆を守ることができるよう準備させた。

こうした精力的なたたかいによって革命勢力は日ましに成長し、遊撃隊創建のたのもしい骨幹がかたちづくられた。

また、将軍は革命の大業のために献身しながらも、病床についていた母親のことを気づかい、家にたびたびたちよることもあった。

将軍の母はそのころ、病弱な身にもかかわらずわが子の革命活動をたすけようと幼い弟たちをつれて興隆村をはなれ、はじめての土地である茂朱屯（ムジュトゥン）の土器店（トキチョム）という村に移っていた。

康盤石女史は重い病に苦しみながらも将軍に会うと、祖国のためにたたかっているわが子に心配をかけまいとし

て、自分の病状をひたかくしにかくした。

将軍はせわしいなかでも、わずかなひまをぬっては家にたちより、母親に薬をとどけた。しかしそのたびに女史は、将軍をまえにすわらせてきびしくいってきかせた。

「祖国をとりもどそうと決心した男子が、こんなわたくしごとに気をとられてどうしますか」

母のはげましにいっそう勇気をえた将軍は、武装をととのえるための本格的な闘争をくりひろげた。

人間と武器は武装力をかたちづくる二大要素であった。それゆえ武器を獲得するたたかいはきわめて重要であり、第一次的な課題であった。

しかし、武装をととのえるということはなまやさしい問題ではなかった。

まず第一に武器工場があるわけでもなく、武器を購入する資金があるわけでもなかった。また、だからといって武器を提供してくれる人がいるわけでもなかった。したがって武器をそろえるということは、徹頭徹尾、至難のわざであった。

だがこれくらいの困難でひるむような将軍ではなかった。将軍はこう語った。

「武力を強化するためには敵を奇襲し、武器を奪う闘争をより強力におしすすめなければならない。……このことを武器獲得の第一義的な方法と考えなければならない。日本帝国主義は、遊撃隊のための武器生産者であり、その侵略軍隊と警察は武器輸送隊である。だから武器の供給源がたえる心配はない。……われわれは敵から武器を奪取するとともに、自分自身の力で武器をつくるべきである。……共産主義者はなにもない困難な環境のなかでも、革命が要求するときには必要なものすべてをつくりださなければならないのだ」

こうした将軍の方針にしたがって、共産主義者たちは各地で武器獲得のためのたたかいをくりひろげた。

将軍にはすでに二挺の拳銃があった。それは父のものだった。康盤石女史はこの拳銃を何年ものあいだ夫の墓地

にうめておいて、将軍が遊撃隊を組織すると、それを掘りだして将軍にあたえたのであった。安図にかくしてあった小銃と拳銃も掘りだした。

将軍は愛国の魂がひめられたこの二挺の拳銃を手に、武器獲得闘争の先頭にたった。

共産主義者たちは、武器獲得闘争を全大衆的なたたかいとしてくりひろげた。革命的な大衆は、「武器はわれわれの生命だ。団結せよ！　準備せよ！　武装路線に総決起せよ！」というよびかけにこたえ、一丸となって武器獲得闘争に決起した。

この闘争には共産主義者たちとともに共青員、赤衛隊員、少年先鋒隊員、婦女会員をはじめ、老人や子どもたちまで参加した。だれもが死をおそれなかった。祖国をとりもどす武器、異国にさまよう亡国の民の恨みをはらす武器のためなら、おそれるものはなに一つなかった。

こうした炎のような愛国心は、おどろくべき知恵と勇敢さを発揮した。各地で決死的なたたかいがくりひろげられた。共産主義者や共青員、それに赤衛隊員たちは、大胆に敵をおそっては武器を手にいれた。かれらは素手で、または木でつくった模擬銃をもって敵をあざむき、公安局、税関、地主の家や軍用トラックを襲撃して武器を獲得した。

江のほとりで草を刈っているときなど、「背負って江をわたれ」と命令する警官や地主がいると、そいつを急な流れのなかにほうりんでかれらのもっていた銃を奪ったりした。

年よりや婦人や子どもたちも武器獲得のたたかいにたちあがった。かれらのなかにはお膳の脚でつくった木銃（むかしの朝鮮のお膳の脚は拳銃のかたちに似ていた）で警察をおそい、ほんものの銃を奪ってきた老人もいれば、機知にたけた子どもたちもいた。

山では岩をもくだく勢いで槍をつくり、刀をうち、はては唐辛子爆弾（ダイナマイトと唐辛子の粉末でつくった爆弾。

爆発音がものすごく、目やのどが確実にやられるという)や、爆音爆弾をはじめ日本の軍警がその名前をきいただけでもふるえあがる延吉爆弾(延吉県王隅溝の遊撃根拠地でつくったことからこういう名がついた)をつくりだした。勇敢な若ものたちはこれらを利用して不意に敵をおそい、数多くの武器を奪いとった。

こうして、きわめてみじかい期間に大量の武器を獲得した将軍は、革命組織からえらばれた青年たちにたいしてはげしい軍事訓練をおこなった。

いったん基礎的な準備をととのえた将軍は、共青活動のときからきたえてきた車光洙をはじめとする十八名の優秀な青年を中核に、安図、延吉、和龍一帯の革命的な労働者や農民、愛国青年らを結集し、ついに安図県で抗日遊撃隊の歴史的な創建を宣布したのである。

それは一九三二年四月二十五日のことであった。

これにひきつづき、東満州の汪清、琿春、延吉、和龍などの各地方でも、将軍が派遣した同志たちによってぞくぞくと遊撃隊が組織された。また同じころ、北満州と南満州でも朝鮮の共産主義者たちが遊撃隊を組織した。

金日成将軍が創建した抗日遊撃隊は、まさに朝鮮人民がその歴史上はじめてもつにいたった進歩的な労働者や農民、愛国青年たちからなるマルクス・レーニン主義的革命軍隊であった。

それはまさしく、人類の敵である帝国主義と封建勢力に反対し、労働者階級をはじめとする勤労人民の利益を擁護し、人民政権の樹立めざしてたたかう真の人民の武装力であった。

抗日遊撃隊は武器をとってたたかうだけの単純な武装隊伍ではなく、マルクス・レーニン主義思想を指針として、人民大衆を反日民族解放闘争へ決起させる宣伝者であり組織者であった。

抗日遊撃隊は、将軍がさししめした武装闘争路線にしたがって軍事活動をおこなうとともに、党創建の準備と反日民族統一戦線運動を展開する政治的部隊であった。

このように、金日成将軍の指導のもとに遊撃隊が組織され、熾烈な抗日遊撃戦の幕が切っておとされるや、敵の鎖につながれた母なる祖国の胸にはふたたび希望と情熱の火が燃えさかり、わが人民の反日民族解放闘争はより新たな高い段階へと発展していったのである。

3　最初の試練

抗日遊撃隊は、自分たちをささえてくれる領土も、主権も、正規軍の支援もなく、足の爪先まで武装した日本の侵略軍とたたかわなければならなかった。それはたしかに苦難にみちたものではあったが、すでに予測されていた道のりであった。

誕生してまもない遊撃隊の前途には、まったく新しい数かずの難関がよこたわっていた。

まず中国人救国軍（反日部隊）の問題があった。かれらは朝鮮の共産主義者や朝鮮人遊撃隊員を見つけさえすれば、まるで敵にでも出会ったかのように虐殺行為を働き、さらに「朝鮮独立軍」までが朝鮮人共産主義者たちを敵対視した。

もともと救国軍は、日本が満州を侵略したとき、張学良軍閥の麾下にあった旧東北軍のうち、一部の良心的な部隊が反日の旗じるしをかかげてたちあがったものであった。かれらは東満州、南満州と北満州各地の県庁所在地をはじめ、多くの中小都市と農村地域に勢力をのばしていた。

しかしかれらは、地主と資本家の権益を代表する民族主義的な軍隊で、かたちばかり大きく反日スローガンもたいへん勇ましかったが、実際にはわずかな困難にもすぐひるみ、はては弾一発もうたずに敵に投降するありさまであった。

日本の侵略者たちは「反日部隊」のこうした弱点を利用し、かれらを内部から切りくずす一方、共産主義者と救国軍を対立させるためにありとあらゆる策動をおこなった。

ぬれ手に粟を夢みて血まなこになったかれらは五・三〇暴動以後、朝鮮人民にたいする中国人民の険悪な対立感情をいっそうかきたてた。そして満州侵略の口実をつくる目的もあって、万宝山事件（一九三一年七月、長春付近の万宝山で朝鮮人と中国人が日本帝国主義の挑発によって流血さわぎをおこした。日本の侵略者たちは、この事件をいわゆる「満州事変」のきっかけの一つにつかった）まででっちあげた。

救国軍はかれらのこうした策動に完全に乗ぜられていた。そのためかれらは、「共産党は救国軍の武装解除をしようとしている」とか、「朝鮮人は中国人の当面の敵だ」とか、「朝鮮人は日本の手先だ」などとさわぎたてる始末だった。

思想的にめざめていない救国軍は、日本の侵略者とたたかおうとはせず、逆に祖国を追われてさまよう朝鮮人にたいして危害をくわえる方向へ目をむけはじめた。そしてとくに、朝鮮人共産主義者にたいしては無理してさがしだしてまで虐殺するという蛮行をあえてした。これには例外がなかった。

かれらは、抗日武装闘争に参加しようと各地から金日成将軍をたずねて集まってくる青年たちにたいしても、「共産党」だというだけの理由でもって集団的に虐殺してはばからなかった。

安図に駐屯していた魏（ウィ）司令部隊をはじめ延吉、汪清など東満州各県の救国軍全部が、こうした蛮行を日常茶飯事のようにおこなっていた。しかし、この理不尽な蛮行をどこにも訴えでるところがなかった。じつに息がつまるような殺伐とした状態であった。

そのため、まだ誕生してまもない抗日遊撃隊の公然とした活動などは思いもよらないことだった。やむなく抗日遊撃隊は夜をえらんで活動するしかなかったが、これはじつにたえがたいことであった。

もしこうした事態がつづくならば、遊撃隊を強化することも、人民に革命的な影響をあたえることもできないし、ましてや日本の侵略者たちをうちたおすことなどは思いもよらなかった。つまり万事が水の泡となりかねなかったのである。

したがって、この難関を切りぬけることができるかどうかは、抗日遊撃隊を強化し、武装闘争を発展させることができるかいなかにつながる深刻な問題であった。

組織されたばかりの抗日遊撃隊のまえには、なによりもまず公然と活動できる条件をつくることがもっとも緊急な課題であった。

しかし事態を憂慮するだけで、だれ一人問題解決のためにたちあがろうとはしなかった。状況があまりにも複雑で危険このうえなかったからである。

こうしたとき、ためらうことなくたちあがったのは、朝鮮革命の運命を一身にになった金日成将軍であった。

将軍は問題解決のためなら、どのような危険もあえていとわない悲壮な決意をかためた。

将軍はまず、安図一帯に根をはり、朝鮮人共産主義者たちの活動を妨げていた魏司令の部隊を説得し、かれらの敵対行為を中止させるために直接その部隊へのりこむ決心をした。当時、王徳林（ワントウリン）の麾下にあった魏司令の部隊は救国軍のなかでも大きな勢力をもっていたばかりでなく、その暴虐ぶりも一段とぬきんでていた。抗日遊撃隊が組織された直後、延吉、琿春をはじめとする各地から金日成将軍をたずねてやってくる愛国的な朝鮮青年を虐殺したのも、ほかならぬこの魏司令部隊のしわざであった。

しかし当年二十一歳の将軍は、わずか三、四名の部下をつれただけで安図にいる魏司令の部隊をたずねた。

魏司令との最初の対面は冷淡そのものであったが、強い決意をかためてきた将軍の態度は堂々としていた。将軍は、陰険な頭目の巣窟のなかにいて危険を感じているというよりも、かえって大部隊をひきいる主人が客にた

いしているかのように悠々せまらぬものがあった。

こうなると、魏司令の態度からはしだいにごう慢さが消えてゆき、若い将軍をおどろきの目で見つめるようになった。

将軍は話がはずむにつれ、敵は朝鮮人でなく日本帝国主義者であるということを理路整然と説いていった。魏司令の気勢はますますしぼんでいった。

つづけて将軍は、朝鮮人民と中国人民が抗日の旗のもとにかたく団結し、共同の敵である日本帝国主義者とたたかわねばならないということ、また救国軍が朝鮮人にくわえている蛮行は、日本帝国主義の民族離間策動を積極的にたすけるものであり、反日闘争をすすめるうえにおいては、百害あって一利もないということなどをじゅんじゅんと説いた。

会談は何日間もつづいた。そして将軍の理路整然とした論理と正当な主張は、ついにあれほどまでに頑迷で、しかも凶暴であった魏司令の心を大きくゆり動かした。

こうして、朝鮮人、とくに朝鮮の共産主義者と見ればうむをいわさず殺していた魏司令も、若い金日成将軍の堂々とした風貌と複雑な帝国主義者の策動を手にとるように解明したするどい判断力、また抗日にたいする燃えるような闘志と決断力にたいして敬服せざるをえなかった。

このようにして将軍は、一時的にせよ革命の前途にたちふさがった難関をみごとに克服し、抗日遊撃隊の公然とした活動を保障した。このときから遊撃隊は白昼堂々と赤旗をかかげ、整然とした隊列をくんで悠々と行軍できるようになったのである。

将軍はまた汪清をはじめとする東満州各県においても、遊撃隊が公然と活動できるような緊急対策を講じた。このとき将軍は、李光(リグァン)をはじめとする一部の大胆な隊員を汪清へ派遣して公然と活動させた。これは当時、抗日遊撃

隊の活動範囲をひろげ、隊伍を強化するうえで重要な意義をもつ措置であった。

救国軍の敵対行為を中止させ、遊撃隊の公然とした活動を実現させた将軍は、つぎに南満州で活動していた「朝鮮独立軍」の梁世奉（リャンセボン）部隊と手をにぎろうと考えた。そのため将軍は一九三二年六月初旬、みずから約四十名の隊員をひきいて遠く南満州の通化へとむかった。

梁世奉に会った将軍は、話をはじめてみると、かれの政治思想的な見解や闘争方法が自分とは正反対であることにすぐ気づいた。しかし将軍はねばり強く、共産主義だの民族主義だのといってあらそわず、すべての反日勢力が団結しなければならないと説得した。そして、日がたつにつれ民族主義者の内部で混乱と分裂が深まっているため、このままでは敵とたたかえないではないかと指摘し、民族的な団結をよびかけた。

将軍はもちろん、「独立軍」のほかの頭目たちと同じように、梁世奉が共産主義者を敵視していることをはじめから知っていた。またかれらの思想と闘争方法などが、いかに時代錯誤もはなはだしい古びたものであるかということも十分承知していた。しかし将軍は、ただ全民族が力をあわせて日本帝国主義に反対し、祖国解放の歴史的偉業をなしとげようという炎のような愛国的熱情から、主義、思想には関係なく、ひたすら団結してたたかうことをのぞんだのであった。

しかしかれらは元来、進歩的な思想をかたくなにしりぞける頑迷な民族主義者であり、世界観や政治思想的見解があまりにも将軍とちがっていたため、きわめて正当な提議すらうけいれようとはしなかった。そればかりか梁世奉は、こともあろうに遊撃隊の武装を解除しようという陰謀までたくらんだ。

こうして「独立軍」との提携工作は、相手のおろかな行動によって決裂してしまった。

将軍は遊撃隊をひきいて通化を出発し、柳河をへて濛江にむかった。濛江県で将軍は朝鮮の青年たちを遊撃隊にうけいれる一方、数多くの武器を入手し武装隊伍をさらに強化した。

その後、将軍は東満州各県にいる遊撃隊をいっそう拡大強化し、武装闘争をより発展させるために隊伍をひきつれ南満州から東満州へと移動した。

東満州の両江口(リャンガンク)に到着した将軍は安図県へ同志をおくり、すでにできあがっていた革命組織と連係をたもつ一方、汪清、延吉県など東満州各県に隊員を派遣して、その地方の遊撃隊の活動をたすけた。

一九三二年九月、将軍は両江口で、安図、和龍、延吉などの各地で活動していた遊撃隊の責任幹部を集め、会議をひらいた。この両江口会議では、救国軍と共同闘争をおこなうべきか、遊撃隊が単独で活動すべきかという問題が討議された。

当時の情勢は騒然としていた。日本の侵略軍が安図に攻めこむと、それまでわがもの顔にふるまっていた救国軍はおそれをなし右往左往しはじめた。逃亡兵も続出した。

こうした状態であったため会議では、救国軍とは別個に活動しようという意見が多かった。

しかし将軍は、遊撃隊が救国軍とともに行動し、かれらと共同闘争を展開した方がよいと主張した。そうすれば遊撃隊の積極的な活動にも有利であり、また朝鮮人が中国人とともに日本帝国主義に反対しているということ、とくに共産主義者は熱烈な反日闘士であるということなどをかれらに知らせることができるのだとのべた。

そして将軍は、遊撃隊の力をより強化して救国軍に影響をあたえ、かれらが敵に投降したり、逃亡したりすることのないよう、積極的に導いてゆかなければならないと主張した。

遠い先ざきまで見とおした将軍の意見は、会議の決定として採択された。

複雑な情勢のもとで、遊撃隊のまえに提起された緊急な問題を解決した将軍は、ある日、わずかな時間のあいまをぬって病床の母をたずねるため、小沙河の茂朱屯土器店部落へむかった。消息がとぎれ、いつも心に案じながら困難な闘争に明け暮れていた将軍は、このときになってやっと母をたずねることができたのである。

しかし、土器店部落の貧しいわらぶきの家にかけつけた将軍のまえには、あまりにも悲しい出来事が待ちうけていた。

康盤石女史がすでに、ながく苦渋にみちたその生涯をとじていたのである。

将軍の心は深い悲しみの底に沈んだ。家の暮らしむきも貧しさをはるかにとおりこしていた。母を失った幼い二人の弟は地下工作をしている人の家にあずけられ、貧しく悲しい生活をおくっていた。しかし、そうした苦しみのなかでも、うえの弟の哲柱は革命組織で活動していたし、すえの弟の英柱も児童団にくわわっていた。

将軍は二人の弟をつれ、村はずれにある母の墓をたずねた。墓のそばには、一本の高い楡の木が冷たい風に枝をふるわせていた。

なんということだろう。……たのしみもしあわせもすべてを未来に託し、ひるむことなく世の苦しみとたたかってきた心臓が、その気高い鼓動をとめてしまってよいものだろうか。

あれほどまでに祖国と故郷の地を愛し、つねに日本の侵略者をにくみながら重い病にもめげず生きぬいてきた母が、いま抗日武装闘争の陣頭にたって革命を導く息子の姿を見ることもなく生涯を終えようとは――。

悲しい追憶に将軍の胸は痛んだ。武装隊伍を組織したばかりのころ、母をたずねたときのことがありありとよみがえってきた。

そのとき将軍は家にたき木がないのに気づき、山へいってたき木をとってきた。それを見た康盤石女史は将軍をそばへよんですわらせ、きびしくさとした。

「この薪だらけの山のなかで、くべるものがないと思ってわざわざたき木をとりにいったのかい？　おまえは自分のやることとでも心配すればいいのです。おまえが革命をやりとおすつもりなら、そのことだけに専念すればよいし、家のことがしたいのなら、家のことだけをするというように、どちらか一つの道をえらびなさい」

将軍は、これから先は自分が大部隊活動をおこなうため、ながいあいだ家にはたちよれなくなるかも知れないので、家のことや母の病気のことが気がかりになるのだとこたえた。すると女史はきびしい語調でたしなめた。

「わたしのことを心配する必要はありません。おまえが家にたちよれなくても、革命のためにりっぱにたたかってくれれば、それでこの母の病もいえるというものです。だからおまえは心配しないでいってらっしゃい」

冬の風にざわめく楡のこずえを見あげながら、将軍は目をつむった。「独立軍」部隊とつながりをもつため南満州へでかけねばならなかったとき、同志たちからもらった金で粟を一斗買い、病床の母を見舞ったことが思いだされた。

「そのように家のことばかり気にしていたのでは革命はできません。生きている人間の口にクモの巣がはるって法はないものです。祖国をとりもどそうという人が、家のことに気をとられて大事がなしとげられますか。おまえはもっと大きな部隊をつくってたたかわなくてはならないのですよ。お母さんの考えでは、おまえがわたしのためにやってくれていることはまちがっていると思います」

なんと気高い心であろう。なんと強い意志であろう。

いまから思えば、あのときが最後の別れであった。母の気高い志をうけついで必ず敵をうち、革命を勝利に導かなければならないという炎のような決意が将軍の胸を熱くたぎらせた。しかし、休息と安楽を知らず一生を革命のためにささげ、窮乏と苦しみの茨の道を切りひらきながら病でたおれた母親に、あたたかいかゆ一杯さしあげられなかったことが将軍の心を痛く悲しませた。

だが重要な仕事をのこしてきた将軍は、家にながくとどまることができなかった。やむをえず将軍は、幼い二人の弟たちのことをあずける家の主人にくれぐれもたのみ、深い悲しみをいだいたまま両江口へもどった。

ところがある日、突然、弟の哲柱がはるばるたずねてきて遊撃隊にいれてほしいとせがみはじめた。

「兄さん、ぼく一人じゃいやだ。兄さんの部隊にいれてください」

哲柱はなんどもこうたのんだ。思いつめたまなざしがいじらしかった。ふびんでもあった。ましていまは母も亡く、他人の家でさびしい日々をおくる不幸な弟のたのみでもあった。

将軍はつらかった。幼い弟にはむりであった。将軍はやむをえず、もう少し大きくなったらいれてやるからと弟にいいきかせた。哲柱は非常にがっかりしたようすだった。

涙ぐんでいる弟をそのまま帰すにしのびなかった将軍は、考えあぐねたすえ、凍豆腐をさかなに酒を一杯ずつついで弟とむかいあった。

冷い風が吹きこむ宿の一室。異国の地にうずもれた父母と同じように、いつ会えるやも知れない弟——。それも、氷のように冷い凍豆腐と飲めもしない酒をまえにして、つくねんとすわっている幼い哲柱——。そのいじらしい弟の姿を見つめる将軍の胸は、ひきさかれるように痛んだ。

こうした苦しみも、家庭の悲劇も、暗い歳月と敵によってもたらされたことを痛感した将軍は、必ず敵に復讐し、社会的な悲劇のない新しい社会をつくりだそうとかたく心に誓った。

だが哲柱とは、やはりこれが最後の別れとなってしまった。

その後、将軍は遊撃隊をひきいて両江口を出発し、敦化、額穆（エクモク）、南湖頭（ナムホドウ）などのながい道のりをへて汪清県羅子溝（ラジャグ）についた。

当時、日本の侵略者たちは、大兵力を満州、とくに将軍のひきいる遊撃隊が活動していた東満州一帯に集結させ、これを掃滅するとやっきになっていた。

日本帝国主義はすでに一九三二年の春、第十九歩兵師団七十五連隊長の指揮のもとに、歩兵、騎兵、砲兵、工兵などで間島派遣隊なるものを編成し、これを東満州に投入していた。また当時の「朝鮮軍」司令部は、一九三三年

末に、いわゆる「間島地方共匪掃滅要領」なるものをつくって、抗日遊撃隊にたいする気ちがいじみた攻勢をくわえはじめていた。

日本帝国主義は自分たちの間島総領事館で、関東軍、関東軍憲兵隊、朝鮮駐屯軍間島派遣隊、咸鏡北道警察部と朝鮮国境警察隊、満州警察機関の高官らによる連席会議をひらき、一九三二年の後半期における東満州の抗日遊撃隊にたいする「討伐」状況を総括し、一九三三年の初頭から攻勢をより強化するための措置をとった。

こうして東満州一帯は日満軍警でひしめきあった。

またかれらは、抗日遊撃隊を大衆から孤立させ、遊撃隊と人民に反共思想を吹きこみ、抗日遊撃隊を内と外から切りくずそうという悪らつな策動も試みた。

敵の攻勢が強まり、その魔手がしだいに羅子溝全域におよぶにつれ、いままで遊撃隊と手をにぎっていた救国軍はクモの子を散らすように逃げだしてしまった。

抗日遊撃隊にはすべてが不利であったし、苦しい活動をつづけなければならなかった。

隊員の数も、武器も、敵とは比較にならないほど少なかったし、闘争経験も浅く、組織されてまだ半年にしかならない抗日遊撃隊にとって、それは到底いいつくすことのできない試練の連続であった。

一九三二年十二月、将軍はやむなく隊員をひきつれ、羅子溝から東寧(トンニョン)県老黒(ロフク)山にむかって出発した。

隊伍はゆく先々で出没する敵の「討伐隊」をかわしながら、苦心のすえ、ようやく雪にうずもれたけわしい老黒山にたどりつくことができた。

山のなかの深い渓谷には世捨人が住むような小屋が一つあって、そこには馬(マ)という姓を名のる一人の老人が住んでいた。その老人の語るところによれば近くに救国軍部隊がいて、遊撃隊の武装を解除するための陰謀をめぐらしているとのことだった。山のふもとでは「討伐隊」がうろついているというのに、救国軍までが行手にたちふさが

っていたのである。

しかも遊撃隊は、まだ戦闘と困苦のなかで十分にきたえられていなかった。そのため遊撃隊員のなかには複雑できびしい状況に気おくれし、革命の前途に確信をもつことができないものもではじめた。しかもその間、数名の隊員を他の部隊に派遣していたし、きびしい試練のなかで犠牲となった隊員も少なからずいた。それに重病のためやむなく隊列からはなれたものもあったりして、隊伍がこの地に到着したときには、遊撃隊を組織した当初、その中核となった十八名しかのこっていないありさまであった。

外は暗く凍りつくような寒さで、吹雪が荒れ狂っていた。それはちょうど、一九三二年十二月三十一日の夜だった。たき火のまえに腰をおろした将軍の心は重かった。どうすべきか。なにをすべきか。遊撃活動を果敢に展開するにはあまりにも人員が少なく、鍛練が不足していた。

さかまく怒濤のなかへ、木の葉のような小舟をこいでゆく感じがなくはなかった。前途をどう切りひらくか、きわめて漠然としていた。

隊員の半数以上が、きのうまでの中学生や大学生たちであった。共青活動のころのかれらは、みな天下をも呑むようないっぱしの英雄や豪傑であったが、いざ難関にぶちあたってみるとどうすることもできなかった。

たき火のまえで闘争の前途を模索していた将軍に、老人はこうたずねた。

「あなたが責任者かのう。わしがいいところへ案内してあげよう。山のなかじゃが、六里ほどゆくと安全なところがあるのじゃ。そこはどうじゃろうか……」

将軍はうなずいた。みんなは老人のあとについてその安全な場所へと移っていった。そして、しばらくそこですごしながら、これからの問題について論議をかさねた。

遊撃闘争をやめて地下活動にもどるべきなのか、でなければ汪清県で活動している遊撃隊を集め、部隊を拡大し

て本格的な戦闘をくりひろげるべきなのか。——隊員たちがだした問題は深刻であった。武装闘争をつづけるか、それとも屈するかという岐路のまえで、将軍は革命的な情熱をもって隊員たちをたたかいへとふるいたたせた。

「新しいものをつくりだす革命というものは、もともとはてしない難関を突破する過程ではないか。われわれはこの難関をのりこえ、祖国を解放し、新しい社会をうちたてなければならない。われわれの希望も、青春も、知恵も、ただ革命のためにのみあるのだ。亡国の民となった人民のことを考えてみよう。われわれの同胞を踏みにじっている敵を思いだしてみよう。はたしてわれわれが、それをたえしのぶことができるだろうか。さあ決然としてたたかおう。人民はわれわれを待っているのだ!」

将軍の熱のこもったことばは隊員たちの士気をふるいたたせた。討論は幾日もつづけられ、マルクス・レーニン主義革命の情熱はふたたび勢いよく燃えさかった。全員が将軍にしたがい、侵略者をうつ武装闘争の道で生死苦楽をともにすることを誓いあった。

将軍は隊員たちと狩りをしたりして、愉快な休息のひとときをすごした。そして隊員たちの士気はますます高まり、だれもが戦闘を待ちのぞむようになった。

こうして抗日遊撃隊員は、将軍の指導のもとにきびしい試練にたえ、不屈の共産主義闘士として成長していった。老黒山中で誓ったかれらのかたい決意は無限の力を生みだし、新しい勝利をもたらす重要な契機となった。

一九三三年一月、将軍の統率のもとに老黒山を出発した隊員たちは、「反日遊撃隊」と書かれた旗を先頭にひるがえし、ラッパの音も高らかに堂々と汪清県腰営溝(ヨロング)に到着した。

群衆は将軍と遊撃隊員を熱烈に歓迎した。

腰営溝についた将軍は、その地方で活動していた遊撃隊員をうけいれ、隊伍をととのえて日本軍守備隊を攻撃

し、これをせん滅して拳銃、歩兵銃をはじめ数多くの軍需物資をろ獲した。また、その年の三月に決行した汪清県夾皮溝（チャピゴウ）の戦闘では、軍事施設の拡張に狂奔していた敵に甚大な打撃をあたえ、つもりつもった人民の恨みをはらした。

　こうした大小の戦闘をつうじて、抗日遊撃隊は量的にも質的にも強大になっていった。とくに独特な遊撃戦術をあみだすことによって、遊撃隊はまるで翼でもはえたかのような進退自在で強力な部隊となった。そして、たたかうすべもなく暗中模索していた初期の大きな難関をりっぱに克服したのである。

　初期のことについていえば、隊員たちの闘志は高かったが、豊富な戦闘経験や軍事知識には欠けていた。しかも、だれかが書いてくれた遊撃活動についての軍事教範や兵書があるわけでもなかった。

　過去の義兵運動や独立軍運動は、革命的な理論と科学的な戦略戦術によって指導されなかったため、これといった戦術をのこすことができなかった。また他の国の経験は、あったとしても実情にそぐわないものであった。なぜなら、それはすべて国家的後方の支援のもとに展開された遊撃戦であったからである。しかもそうした遊撃隊は、おもに正規軍の作戦任務遂行を補助する役割をになっているだけだった。

　しかし金日成将軍が指導した抗日遊撃隊は、後楯となる国家的後方も、正規軍の支援もなかったために、強大な日本の侵略軍を相手に、独自の血のにじむような長期戦をおこなわなければならなかった。

　こうした実情のなかで、誕生してまもない抗日遊撃隊をどのようにして鋼鉄の隊伍につくりあげ、またどのような方法で、どのような戦術をもって敵とたたかい勝利を獲得するかということは、じつに複雑で重大な課題であった。

　しかし将軍は文字どおり、超人的な奇跡ともいえる自力更生の高い革命精神と天才的な知略によってこの難関をりっぱに克服した。将軍はそれまで、革命に必要なすべてのものをつくりだしたと同じように、遊撃隊の戦略戦術

も、敵との決死的なたたかいのなかで一つ一つあみだしていった。遊撃隊の力は日ましに強大になった。将軍の指導のもとに、汪清、延吉、琿春、和龍などの各県に組織された遊撃隊は、一九三三年からそれぞれ連隊級の大部隊に成長し、半軍事組織である反日自衛隊の力もいっそう強大になった。

4　大胆な談判

抗日遊撃隊の急速な発展にあわてふためいた日本の侵略者たちは、遊撃隊にたいする「討伐」準備に奔走した。かれらは満州に各種の警備隊と「討伐隊」を組織し、満州派遣軍をひきつづき増強した。とくに東満州地方へは朝鮮駐屯の日本侵略軍まで大々的におくりこみ、国境一帯には警備道路と警備通信網施設を緊急に拡張した。また「朝鮮総督」は間島領事館と協力し、一九三三年には延吉、琿春、和龍の各県に最初の「集団部落」（日本帝国主義が遊撃隊の影響から人民を切りはなして監視するため、住民を一定の場所に強制的に移住させてつくった部落）を強制的につくり、「武装自衛団」の数を大々的に増加させた。

そして日本の侵略者たちは、救国軍部隊にたいして全面的な攻勢をとった。かれらは北満州にいた馬占山（マチヨーシャン）部隊、東満州の呉義成（オイソン）部隊をはじめ、すべての救国軍部隊に攻撃をしかける一方、ふたたび抗日遊撃隊と救国軍、朝鮮人民と中国人民を対立させ反目させようとあらゆる悪宣伝と謀略をおこなった。

そこへ、革命隊列のなかにもぐりこんだ左翼日和見主義者たちの悪どい策動が一枚くわわった。

左翼日和見主義者たちは、救国軍「反日部隊」を日本帝国主義侵略軍とかわらない敵とみなし、その兵士たちに、「地主、資産階級である将校らを打倒せよ」とか、「反乱をおこして遊撃隊に参加せよ」などとよびかけた。そしてさらに、「反日部隊」の武装を解除する行動まであえてした。

その ため「反日部隊」はまたもや朝鮮人を敵視しはじめ、一九三三年四月末には、李光同志の指揮する三十余名の遊撃隊員が、羅子溝、老黒山方面で「反日部隊」に虐殺されるという惨事までおこった。

事態はふたたび険悪となった。

日本の侵略者たちが救国軍を投降させて反日勢力を壊滅させるか、さもなければ、抗日遊撃隊が救国軍を味方にひきいれて反日勢力をより拡大するかという決定的な時期となった。

革命のためには、この困難で、しかも重大な問題を早急に解決しなければならなかった。

事態は、この危険な問題の解決に命をかけてたちあがる人物を待ちのぞんでいた。

この困難な問題を打開するすぐれた手腕と智略と政治、思想的準備をととのえた人物は、金日成将軍をおいてほかにはいなかった。

そのころ羅子溝にいた救国軍の呉義成部隊のなかでは、かつて金日成将軍とともに共青活動をしていた同志たちが統一戦線工作をつづけていたが、事態は悪化してゆくだけで、これといった成果をおさめることができないでいた。やがて同志たちは、金日成将軍がきてくれさえすれば問題を解決することができると考え、将軍あてに手紙をおくった。

実際、生死をかけるこの困難で重大な問題は、金日成将軍以外に解決しうる人がいなかったのである。

将軍は抗日遊撃隊を組織し、敵に打撃をあたえたことによってその名を世にとどろかせ、「反日部隊」にもひろく知れわたっていた。将軍は武装闘争の初期、安図に駐屯していた「反日部隊」のかしらである魏司令と談判して遊撃隊の自由な活動を保障したことがあり、一九三二年秋、遊撃隊が両江口から額穆、南湖頭をへて汪清県羅子溝に進出したときも、兵士委員会をひらいて「反日部隊」とのあいだに生じた一連の事態を収拾した。

当時、武装遊撃隊を組織してまもない汪清遊撃部隊は、武器をふやすために「反日部隊」の銃を何挺か奪取した

ことがあったが、そのため救国軍の逆襲をうけ、隊員のなかから犠牲者をだす惨事までひきおこしてしまった。そのうえ日本の侵略軍が羅子溝を占領して「討伐」を強化し、「反日部隊」が抗日の旗じるしをなげすてて逃げだしたため、多数の遊撃隊員は、かれらとの団結と連合を中止しようと主張しだした。

将軍は兵士委員会で、汪清遊撃隊がおかした極左的なあやまりと不当な主張をきびしく批判し、「反日部隊」との共同行動をより強め、共産主義者はかれらをねばり強く説得し、かれらが日本侵略軍に反対してひきつづきたたかうよう導かなければならないとのべた。この会議があってから「反日部隊」にたいする工作がいっそう活発になっていった。

これらの事実は、金日成将軍だけが「反日部隊」との談判を成功させうるということをしめしていた。

将軍は大胆にも救国軍の頭目をたずねることにした。同志たちは将軍の身辺を気づかい、極力それをひきとめようとした。しかし将軍は、革命の利益のためには一身をもかえりみないとかたく決心していた。

将軍は同志たちにこういった。

「現在、抗日救国軍は政治的なたちおくれのため、われわれの正当な反日闘争を理解できないばかりか、朝鮮人共産主義者を殺害している。しかし、われわれはかれらと接触し、日本帝国主義の狡猾な民族離間政策をばくろしなければならない。そして日本帝国主義こそ、朝・中両国人民の凶悪な共同の敵であるということをよく理解させなければならない。それと同時に、われわれ自身の行動と実際の闘争をつうじ、かれらに生きた模範をしめすならば、かれらはわれわれについてくるだろうし、われわれの闘争に見ならって日本帝国主義と勇敢にたたかうようになるであろう。そして人民にたいするときも、かれらが正しい態度で行動するよう、われわれがねばり強く説得して教育するならば、かれらの横暴で略奪的な傾向もあらたまってくるにちがいない。抗日救国軍との統一戦線は十分に可能であるし、またそうしなければならない革命課題である。困難だからといって手をひいてしまえば、それ

は真の革命家の態度ではない」
革命のためには万難を排して、ためらうことなく一身をなげだす将軍の気高い革命精神と品性に、同志たちは深く感動した。
一九三三年六月、金日成将軍は羅子溝地方に駐屯していた救国軍の呉義成部隊をたずねるために出発した。
このとき将軍は、抗日遊撃隊が羅子溝へ進出するという声明を発表し、新しい軍服にどっしりした弾帯をつけ、新しい歩兵銃をかついだ百名の隊員をひきいて白昼堂々と行進していった。ラッパ手は行進曲を吹きならし、先頭には赤旗がひるがえっていた。すべてが力強く生き生きとしていた。
金日成将軍は、万一の場合にそなえて一部の隊員を太平溝付近に待機させ、五十名の隊員だけをつれてさっそうと白馬にまたがり、大陸の嵐できたえられたからだに威厳をただよわせて、呉義成部隊の本拠地へとのりこんでいった。
と白馬にまたがり、大陸の嵐できたえられたからだに威厳をただよわせて、猛々しい呉義成部隊の本拠地へとのりこんでいったのである。
将軍は呉義成の部屋にはいった。
事前に金日成将軍のすぐれた人となりについて知っていたためか、呉義成はそれほど不快な態度はしめさなかったが、前年に会った魏司令と同じくごう慢であった。濃い口ひげを八の字にはやし、からだつきがでっぷりしているところなどは、まるでどこかの国の王様を思わせた。
しかしその呉義成も、二十二歳のぬきんでた金日成将軍のまえでは驚嘆の色をかくすことができなかった。
会談はなごやかなふんいきのなかですすめられた。
「わたしは、金隊長が日本軍と勇敢にたたかっていることを、うわさをきいてよく知っている。あなたがたは数

もそう多くないのに日本軍とよくたたかっているが、われわれの方は兵隊の数が多くてもどうもうまくゆかない。……ところであなたがたは、みんな新しい銃をかついできているが、何挺でもいいから古いものととりかえてくれまいか?」
呉義成はまずこう切りだした。将軍は笑いながらこたえた。
「ただで進呈してもよい。日本軍を一度攻撃しさえすれば武器の問題はいつでも解決できるのだから、とりかえることもないと思う……」
すると呉義成は話題をかえて、こうつめよってきた。
「ところで、あなたがたは地蔵堂をこわしているそうではないか?」
将軍はきっぱりとこたえた。
「とんでもないことだ。われわれがそれをこわすはずがないではないか。それは悪い連中が共産主義者を中傷するためにそういいふらしているのだ」
「では、金隊長は地蔵様におじぎをするのか?」
「こわしもしないが、おじぎもしない。ところであなたはどうか?」
「しない。あなたと同じだ。まあ、それはそうとして、共産党は他人の財産を奪うというが、それはほんとうなのか?」
「それごらんなさい。あなたも悪い連中の宣伝にまどわされている。それはまったくのでたらめだ。しかし、小作人はたべるものがなくて飢えているというのに、あなたがたお金持ちはあまりにも欲が深すぎる。少し、貧しい人たちに食糧をわけてやったらどうか?」
「それもそうだ」

「地主が飢えた農民に食糧をわけてやれば、なんでかれらがたちあがるだろうか？　われわれはつねに民衆のことを考えている。共産主義者ほど清廉潔白な人間はこの世にはいないのだ」
「わたしを共産党にしようというのかね」
「それは余計な心配だ。ただ、力をあわせて日本の侵略軍とたたかおうというのだ」
「それはむずかしいな」
「別々にたたかいもするし、また力がたりないときは協力してもやろうというのだ。ときと場合によっては、あなたがたがわれわれのたすけをかりることもあるかも知れない」
「あるいは、そういうことがあるかも知れない。人間のことはわからないからね。……ところで、あなたは酒をやらないのか？」
呉義成はまた話題をかえた。将軍は微笑してこたえた。
「飲めないことはないが、反日闘争にさしさわりがあってはならないので飲まない」
「あなたがた共産党はとてもいい人たちだ。しかし日本軍は、あなたがたのことをたいへんおそろしい人間だといっているそうではないか？　協力はしても、あなたがた共産党の影響をうけないようにしたいものだ」
「それはとりこし苦労というものだ。日本軍とたたかうことについてだけ話そうではないか」
「あなたがたの共産党は、いうなれば両班（サンバン）共産党だな」
こうした内容の対話が、いつ終るともなくつづいた。将軍はいろいろな側面から呉義成を説得し、かれの誤った考えをただした。
呉義成は、雅量のある将軍の態度と理路整然とした主張、そして革命の大局を手中にし、それを伸縮自在に展開していく非凡な知略に感嘆の声を放った。そして、かれは将軍を、かれらの仲間では最高の尊称である「司令」づ

けで「金司令」とよび、心から敬意を表した。こうして、さしもの呉義成も遊撃隊と共同戦線をはることに同意したのである。

このように、将軍は救国軍の頭目たちとの談判を成功裏におしすすめ、共産主義者と救国軍との連係をたもつうえで大きな転換をもたらす契機をひらいた。

この談判ののち、各地に散在していた「反日部隊」は共同の敵である日本帝国主義に反対し、そのたたかいに力を集中するようになった。

抗日遊撃隊は将軍の総指揮のもとに救国軍をひきいれ、東寧県城の攻略戦闘(一九三三年九月)、羅子溝戦闘(一九三四年六月)、撫松県城の攻略戦闘(一九三六年八月)など数多くの連合作戦を展開し、日本帝国主義に強力な打撃をくわえた。

とりわけ、東寧県城の攻略戦闘のもつ意義は大きかった。この戦闘は呉義成との談判に成功したのちにはじめておこなわれた共同作戦であったばかりでなく、遊撃隊創建以来、反日統一戦線の旗のもとに展開された救国軍部隊との最初の連合作戦であり、しかも最初の大規模な城市攻略戦闘であった。

当時、ソ・中国境に位置していた東寧県城は、ソ連侵略をねらう日本の軍事戦略的な要衝として、城内には日本軍一個大隊(石田部隊)五百名と、偽満軍(日本帝国主義のかいらい「満州国」軍)一個連隊約二千名のほか、数多くの日満警察と自衛団が駐屯していた。

将軍は、このような城市を攻撃することによって、日本の侵略者たちに甚大な政治的、軍事的打撃をあたえようと決意した。そして同時に、反日共同戦線の威力を誇示し、救国軍に抗日遊撃隊の勇敢さと大胆さを直接しめすことによって、かれらに勝利への確信をもたせようと考えた。

将軍は呉義成との談判ののち、ただちにこの城市にたいする攻略作戦を計画した。

金日成将軍が総指揮をとった東寧県城の攻略戦闘には、遊撃隊と救国軍一千六百余名が参加した。そして遊撃隊からえらばれた各部隊が主力となり、救国軍からは史忠恒（サチュンハン）旅団長、李三俠（リサムヒョプ）、蔡（チェ）司令（サリョン）、それに呉義成部隊がこれにくわわった。

将軍は東寧県城の西南三キロの地点に全軍をひそかに集結させ、正確な偵察資料にもとづいて各部隊の指揮官にそれぞれ戦闘任務をあたえた。

それによれば、主力である遊撃隊は将軍の直接的な指揮のもとに、敵の抵抗がもっともはげしいと考えられる西（ソ）山（サン）砲台（県城西門外の高台に位置して数多くの重機と軽機を配置し、砲台と城内の日本軍本部とのあいだには深いざん壕がつうじ、予備兵力をつぎつぎと動員できる要塞だった）を占領したのち、西門から市内に突入することになっていた。そして突入後は、日本軍の兵舎を占領または封鎖して敵の主力を掃滅し、東門と南門から進入するはずの救国軍部隊が、城内にはいってたたかうのに有利な条件をつくりださねばならなかった。

一九三三年九月六日夜九時、西山砲台にたいする遊撃隊の強力な集中射撃によって戦闘の火ぶたが切られた。予想どおり、西山砲台の日本軍守備隊は城内からのざん壕をつうじてくりだされる援軍と力をあわせ、頑強な抵抗ぶりを見せた。熾烈な射撃戦がつづいた。

将軍は遊撃隊の一部をすばやく砲台の北側に迂回させて敵の火力を分散させたのち、遊撃隊の主力を迅速果敢に突撃させ、またたくまに砲台を占領してしまった。

そして遊撃隊の一部は西北方面の砲台に猛攻をくわえ、主力部隊は将軍の指揮のもとに西門内に突入して日本軍兵舎を完全に封鎖した。

抗日遊撃隊の猛攻ぶりに勇気をえた救国軍部隊は、それに呼応して東と南の両門から突入を開始した。そして夜明け近くまで市街戦がつづけられたが、県城はほぼ完全に遊撃隊と救国軍部隊の制圧下におかれた。勢いにのった

遊撃隊と救国軍部隊は、ひきつづき敵の兵器工場と軍需品倉庫を襲撃し、大量の軍需物質をろ獲すると同時に五百余名の日本軍と三百余名の偽満軍を掃討した。

しかし敵は応援部隊をくりだし必死の抵抗を試みた。最後のあがきだった。すると一部の救国軍兵士はその抵抗ぶりにおそれをなし、われ先にと逃亡しはじめた。状況は急変し攻略部隊は一時的に不利となった。

だが遊撃隊は将軍のはげましのもとに先頭にたって勇敢にたたかいつづけた。この犠牲的なたたかいぶりは、動揺していた救国軍兵士に新しい勇気と必勝の信念をあたえた。

将軍は戦闘を勝利のうちに終え、夜がまだ完全に明けきらぬうちに攻略部隊を城内からひきあげさせた。

しかしこの戦闘で救国軍の史旅長が重傷を負った。ところがおよそ二十名もいたかれの副官と連絡兵は、死地をさまよう史旅長をなげだしたまま先をあらそって退却してしまった。一般の兵士も同様だった。そのため史旅長は敵の捕虜になりかねない危険な状態におかれていた。

これを知った将軍は、ただちに汪清遊撃隊の第一中隊長と隊員に命令をくだし、危険をおかして史旅長を救出させることに成功した。

そのため救国軍の将兵たちは、まえにもまして将軍を尊敬するようになり、朝鮮の共産主義者にたいして正しい認識をもつようになった。

かれらはこの戦闘をつうじ、共産主義者こそ真の反日闘士であり、愛国者であり、気高い人道主義者であるということを身をもってさとった。そして、抗日遊撃隊との連合作戦こそ勝利の道であるとかたく信じるようになったのである。

救出された史旅長は、感謝の念をおさえきれずこう語った。

「金司令はわたしの命の恩人であり、抗日武装闘争のすぐれた指導者である。金司令が教えるとおりにたたかえ

ば、必ず勝利をおさめることができる」

そしてかれは、遊撃隊に編入させてほしいと将軍に嘆願した。

将軍はそれを許した。史旅長はそののち遊撃隊の師団長として将軍の命令に最後まで忠実であった。

このように、東寧県城の攻略戦闘は抗日遊撃隊の威力と不屈さをしめし、いかに困難な状況のもとでも、つねに戦闘の主導権をにぎってすすむ将軍のすぐれた遊撃戦術をあますところなくひれきした。

戦闘はつづいた。遊撃隊は戦火のなかできたえられながら、急速に強力な精鋭部隊へと発展していった。

第四章　革命の揺籃――解放地区

1　遊撃根拠地にたいする将軍の構想

金日成将軍は、抗日遊撃隊のまえにたちはだかっていた最初の難関をのりこえる一方、ひきつづき遊撃根拠地を創設するための困難なたたかいをおしすすめた。

遊撃根拠地は、遊撃隊が日常的に依拠する軍事的、政治的根拠地であり、すべての活動の拠点である。したがって遊撃根拠地の創設は、抗日武装闘争の発展と朝鮮革命の勝利を達成するための切実な要求となっていた。これは遊撃闘争における一つの戦略的な問題であった。

将軍は抗日武装闘争を基本とする朝鮮革命の具体的条件にかなうよう、革命根拠地の問題を創造的に具現していった。

将軍はまず、遊撃根拠地が抗日遊撃隊の成長と抗日武装闘争の拡大発展のための基地として必要だと考えた。抗日遊撃隊は強大な敵と対峙していたが、朝鮮がすでに日本帝国主義の完全な植民地となっていたため、国家的後方も、正規軍の支援もうけることはできなかった。

したがって抗日遊撃隊をさらに拡大し、軍事訓練や休息を保障し、食糧、被服をはじめとする補給問題を解決するためには、一刻も早く遊撃根拠地を創設しなければならなかった。

いいかえれば、後方を保障し軍事行動を組織するための根拠地がなければ、長期にわたる困難な抗日武装闘争の発展を保障することはできなかったのである。

将軍はまた、革命運動を全国的な規模で急速に発展させる策源地として遊撃根拠地が必要であると考えた。根拠地をもつことによって革命の中核勢力を育成し、保存することができるばかりでなく、全国の広はんな人民大衆に革命運動の影響をあたえ、革命を力強くおしすすめ、マルクス・レーニン主義的指導を強化することができるのである。

さらに共産主義者を系統的に育成し、マルクス・レーニン主義党の創建準備活動をより強力におしすすめることが可能であった。

将軍は主、客観的な条件にしたがって、根拠地の形態を抗日武装闘争の公開的な解放地区形態と非公開的な秘密根拠地形態と、比較的長期性をおびる固定根拠地と暫定的な臨時根拠地などに分類した。

将軍は、抗日武装闘争の戦略的な基地として、また全般的な朝鮮革命の策源地として、さらに共産主義者のまえに提起された当面の課題を解決する基地としての遊撃根拠地は、つぎのような条件をそなえていなければならないと考えた。

第一に、革命闘争を支持声援する革命的な大衆と一定の経済的基盤をもつ地域であること。

第二に、地理的には遊撃隊の防衛と攻撃に有利であり、敵の支配力がおよびにくく、その支配体系のなかで比較的弱い環となっている地域であること。

第三に、全国に革命的な影響力を効果的におよぼすことのできる地域であること。

第四に、ある程度の防衛能力をもつ武装力をそなえた地域であること。

しかし遊撃根拠地の位置を決定するためには以上の条件ばかりでなく、当面の情勢はもちろんのこと、武装闘争

の発展の展望をも総合的に考慮しなければならなかった。

これらすべての条件を科学的に分析した将軍のまなざしは、白頭山を中心とする大密林地帯と無数の峡谷をもつ間島の山岳地帯にそそがれた。

将軍は確固たる信念をもって朝鮮と満州の隣接地域、すなわち白頭山を中心とする豆満江や鴨緑江沿岸地帯と、間島の山間および農村地帯が遊撃根拠地には最適であると判断した。日本帝国主義が朝鮮の都市と農村、山間僻地にいたるまで兵力をくまなく配置し、いっさいの合法的な政治活動を抹殺していた条件のもとでは、この一帯こそ抗日武装闘争を強力に発展させ、その影響力を直接全国に強く波及させて朝鮮革命を全般的に指導しうるもっとも有利な地域であった。

将軍は多面的で立体的な判断と構想にもとづき、武装闘争の初期、その根拠地は間島を中心にして国内にもっとも近い豆満江沿岸の広大な地域に創設することとし、公開的な解放地区形態をとることにした。

この地域は朝鮮と地理的につながっており、大部分がうっそうとした密林地帯であった。そのため一帯の起伏をなしてひろがる丘陵とけわしい山岳やせまく深い渓谷などを利用して根拠地をもうけるならば、優勢な敵の侵入も少数の兵力で十分にはばむことができるはずだった。

また朝鮮と間島の境界をなす豆満江には各所に橋や渡し場などがあった。しかも上流では歩いて浅瀬をわたることもでき、また冬になればどこからでも自由に氷のうえをわたることができた。

この一帯が有利なのは、それればかりではなかった。

住民の階級構成も適していた。東満州は以前から朝鮮人民の反日闘争がつづいてきたところであり、とくに一九三〇年代のはじめからは朝鮮の共産主義者たちの活動舞台となっていた。東満州の住民の約八〇パーセントが朝鮮人であり、そのうち約九〇パーセントが貧農あるいは雇農で、大部分が日本帝国主義の支配力のおよばない深い山

間地帯で農業をいとなんでいた。しかもかれらのほとんどは日本帝国主義の植民地略奪政策にたえかね、生きる道をもとめて移住してきた人びとであり、そのなかには反日運動にくわわっていた人たちも少なくなかった。そのためこの地方でも日本帝国主義の弾圧がきびしくなると、かれらは積極的にたちあがった。

さらにこの一帯は、将軍が組織した朝鮮人民の最初の革命的武装力である抗日遊撃隊発祥の地であり、将軍の指導のもとに朝鮮共産主義運動の新しい世代が育ち、人民大衆が急速に革命化しているところであった。その反面、日本帝国主義にとっては、朝鮮にくらべてこの一帯が植民地支配体系を形成するうえにおいては弱い環となっていた。日本帝国主義はまだ間島地方における植民地支配の地盤を完全に確立しておらず、とくに農村と山間地帯にはその魔手をのばすことができずにいた。

このころは全満州を占領した日本帝国主義がその侵略勢力を広大な地域に分散させ、いわゆる「新秩序」を樹立するために汲々としていた時期であった。

これらすべての条件からして、この一帯は遊撃根拠地創設にもっとも有利な地域であった。

もともと、将軍がこの地域に解放地区形態の根拠地を創設することにしたのは、革命闘争にたちあがった共産主義者の革命組織と人民大衆を日本帝国主義の野蛮な弾圧と集団的な虐殺から保護するためであった。

この地域で共産主義者の指導のもとに人民大衆の革命闘争が高まると、敵は一九三二年の春から大砲や飛行機まで動員して朝鮮人居住地を焼きはらい、老若男女をとわず手あたりしだいに虐殺する方法をとった。

敵のまえにひざまづいて死を待つか、生きて最後までたたかい、勝利をかちとるかという岐路にたたされた革命的な大衆は臆することなく闘争の道をえらんだ。

したがって、ぼう大な革命大衆をうけいれてこれを保護し、大衆の渇望する人民政権をうちたて、新しい政治経済的改革をおこない、それによってかれらを強力な革命勢力に育てるためには、どうしても解放地区の根拠地をも

つことが必要であった。これは組織されたばかりの抗日遊撃隊をひきつづき拡大するための大衆的基盤をつくるうえでも有利であった。

これらすべての問題は、ただ公開的な解放地域形態の根拠地を創設してこそ、はじめて解決することができたのである。

このような解放地区の創設は、共産主義者の指導のもとに人民大衆が自分の力で十分に日本帝国主義の支配と封建的な圧制を一掃し、新しい民主主義社会を建設しうることを現実のものとしてしめすうえでも大きな意義があった。将軍は根拠地を解放地区の形態で創設するために強力な人民的防衛体系を樹立し、大衆の革命化を重要な方針の一つとして提起した。

抗日遊撃隊はその使命からして、根拠地防衛だけでなく多くの場合、根拠地をはなれてひろい地域を遊動しながら戦闘をおこなわなければならなかった。したがって根拠地を守るためには人民を武装させ、遊撃隊を骨幹とする人民的な防衛体系を確立することが急務であった。そして敵とのきびしい階級闘争のなかで根拠地を公然と維持していくためには、あらゆる可能性を最大限に利用して大衆をかちとり、根拠地をできるだけ早く革命一色の要塞にかえなければならなかった。

金日成将軍の方針にしたがって創設された遊撃根拠地——解放地区は、初期の抗日武装闘争を拡大するうえで大きな役割をはたした。

将軍はその後、抗日武装闘争の戦略的段階に応じて根拠地創設地域と形態をそのつどかえていった。

一九三〇年代後半期には白頭山を中心とする朝・満国境地帯に半公然的な秘密根拠地をつくり、一九四〇年代前半期には軍事行動のおよぶ全地域に臨時の根拠地をもうけ、ひきつづき抗日武装闘争を発展させていった。

遊撃根拠地の創設方針とその実践闘争からえた経験は、解放後、国土が分断されている条件のもとで北半部に強

力な革命的民主基地を創設し、それを強化する闘争の根源となった。将軍の指導により朝鮮の北半部に祖国統一のための確固たる革命基地が創設されたため、朝鮮人民は祖国解放戦争でアメリカ帝国主義を中心とする帝国主義侵略勢力を撃破し、偉大な勝利をかちとることができたのである。

このように抗日武装闘争の時期からこんにちにいたるまで、長期にわたる朝鮮革命の実践闘争で実証され完成された将軍の革命根拠地理論は、革命における根拠地理論の創造的模範であり、植民地従属国人民の反米反帝闘争において、大きな理論的、実践的意義をもつものである。

2　新しい社会の創造

抗日遊撃隊と共産主義者たちは、金日成将軍の科学的な方針にしたがって人民を組織動員し、一九三二年の夏から遊撃根拠地の創設にとりかかった。

これはあらゆる点からみて熾烈なたたかいであった。

敵はいたるところで同胞たちを虐殺した。侵略者が足を踏みいれたところでは必ず血が流され、村が焼かれた。生きのこった人びとは老若男女をとわず遊撃隊をたずねて山へやってきた。

遊撃根拠地は、こうして追われてきた大衆を敵の蛮行から守るのに有利な地域であった。将軍が創設した遊撃根拠地には、けわしい山とうっそうたる密林だけの地域もあった。だがそうした地域も決してやすらぎの場所とはなりえなかった。敵は執拗に追撃してきては銃火をあびせかけた。そのため遊撃隊は、昼夜をわかたずいどみかかってくる敵を撃退する血みどろな戦闘をくりかえさねばならなかった。

敵を撃退すると、根拠地の人びとはふたたび木を切って家を建てた。子どもから白髪の老人にいたるまで、すべてがいっしょになって働いた。そんなところへ敵が性こりもなく攻めてくると、またしてもはげしい戦闘がくりひ

ろげられた。

一九三三年の最初の数か月間だけでも、東満州一帯では小規模ながら、じつに数百回に達する連続的な戦闘がおこなわれた。

はげしい戦闘のくりかえしのなかでも遊撃根拠地は一つ一つ築かれていった。

汪清県では大汪清、小汪清の山岳地帯を中心とする地域に、延吉県では三道湾一帯と依蘭溝、石人溝を中心とする地域に、琿春県では大荒溝、煙筒磖子を中心とする地域に、和龍県では漁郎村、牛復洞一帯に、安図県では車廠子などを中心にした農村と山岳地帯に解放地区形態の根拠地がぞくぞくと創設された。

その範囲は東満州の京図線（いまの長春と図們間の鉄道）と図佳線（図們と佳木斯間の鉄道）沿線の都市と農村をのぞく、すべての地域を包括するものであった。

各地の遊撃根拠地は山岳地帯をつうじて連結されており、豆満江にそって朝鮮の北部地帯とソ連沿海州にも接していた。

しかし金日成将軍は、これだけで満足しなかった。将軍は創設された根拠地を難攻不落の要塞に築きあげないかぎり、それが革命基地としての役割をはたすことはできないと考えていた。

根拠地内では将軍の指導のもとに、まず人民的な防衛体制を確立する方針を実施するたたかいがくりひろげられた。共産主義者は遊撃隊を強化する一方、解放地区の人民を反日自衛隊、少年先鋒隊などの半軍事組織や、各種の革命団体に加入させて教育、訓練し、遊撃隊を中心とする強力な革命力量をつくりあげた。

半軍事組織は青年を中心とした組織で、敵とたたかうことのできる根拠地内の勇敢な青壮年すべてがもうらされた。かれらは遊撃隊の指導のもとに軍事訓練を計画的におこない、武器獲得のためのたたかいを大胆に展開して自分自身を武装した。

かれらはまた根拠地防衛の活動である通信連絡、根拠地警戒勤務、反間諜闘争などの任務を担当した。さらに根拠地内のすべての人びとは、軍事的に重要な地点に砲台、ざん壕、待避壕をもうけ、敵に石つぶてをあびせるため崖や高地に石をつみあげたりした。

こうして根拠地には、軍民一致にもとづく強力な人民的防衛体制が確立されていった。

解放地区は活気にみちあふれた。古い支配機構を一掃して革命政権を樹立し、民主主義的な諸改革の実施をめざすたたかいがくりひろげられた。

わけても革命政権を樹立することが最大の急務であった。ふえる一方だった根拠地をたよってやってくる人びとの生活を安定させ、生活全体を新しくつくりなおし、根拠地を遊撃隊のしっかりした後方にかえるためには、どうしても革命政権が必要であった。

こうして、新しい真の人民政権のすぐれた施策を人民大衆に体験させることによって、解放後の朝鮮にうちたてるべき政権をはっきりと認識させることができたのである。

だが政権の形態を正しく規定することは、なまやさしいことではなかった。なぜなら、それまでの朝鮮の歴史にはその手本となるような政権の形態が存在しなかったからである。しかしこうした理由のほかにも、労働者や農民をはじめ勤労人民の利益を代表する真の人民政権をうちたてるということはなみなみならぬ問題であった。

革命の性格とそれに相応する政権の形態を知らないものたちは、「社会主義革命の即時実現」を叫び、ソ連や中国本土の解放地区のようにソビエトを樹立せよと主張した。かれらは土地政策においても私的所有を否定し、反日的な傾向をもつ地主や中農の土地を没収して共同所有にすべきだと主張した。

一部の地域では実際にこうした偏向があらわれた。

このような極左的偏向は解放地区内の活動ばかりでなく、敵の支配区域内の広はんな反日勢力を団結させる活動

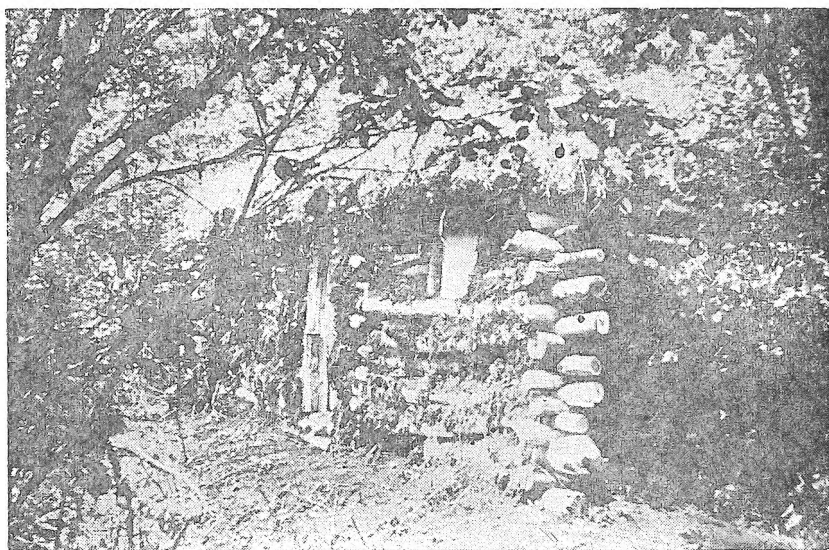
と「反日部隊」との協力にも重大な害をおよぼす結果をもたらした。

将軍は一九三三年の春にひらかれた汪清会議に参加して、極左的な主張に決定的な反撃をくわえ、それを是正するための正しい方途を明らかにした。

将軍は、現段階における朝鮮革命は反帝反封建民主主義革命であるからこそ、解放地区内の政権は労働者階級の指導する労農同盟にもとづき、広はんな反日愛国力量の統一戦線を土台にした人民革命政府でなければならず、この政権は当然、反帝反封建民主主義革命の課題を遂行しなければならないと強調した。

金日成将軍は、これまでの社会、経済政策および統一戦線路線を実行する過程においてあらわれた一連の極左的誤りをただす方途をも明らかにし、それを具体的に指導した。

そのころの将軍は、東満州一帯のすべての根拠地の指導に適した汪清県遊撃根拠地に指導部をおいて活動した。

将軍は遊撃隊を指導するだけでなく、根拠地内にお

金日成将軍がいた小汪清遊撃根拠地の馬村指揮部

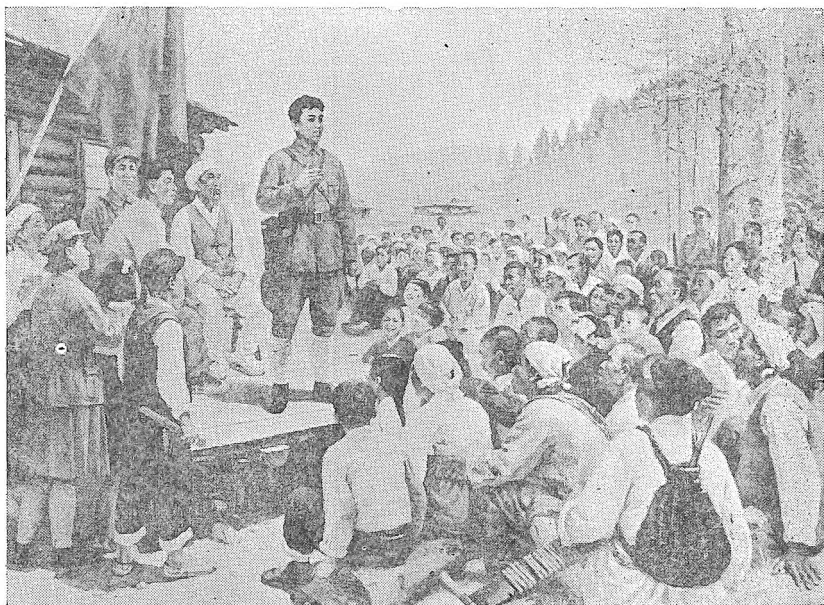
ける地方政権諸機関の極左的偏向の是正、反「民生団」闘争の誤りをただすたたかい（反「民生団」闘争についてはつぎの章でのべる）、統一戦線政策の貫徹、「反日部隊」にたいする工作、さらには教育文化活動などにいたるまで、遊撃根拠地の活動と生活全般を導いた。将軍は人民革命政府で演説し、「反日部隊」をたずねて話しあい、反日自衛隊本部や少年先鋒隊ばかりでなく婦女会や児童学校にもでむいて提起される問題を一つ一つ解決していった。

将軍は寝食を忘れて活動した。夜明けを待たず早朝から山のなかを歩きまわって、雨にでもうたれたようにびしょぬれになることもしばしばであった。将軍は部下たちの心配をよそにびっしょりぬれた服を手でしぼり、それをまた無造作に着ては活動にでかけた。朝露にぬれた将軍に着がえはおろか、靴下一足さしだすことのできない婦人隊員たちの胸は痛んだ。しかし将軍は、くったくのない明るい笑顔を見せるだけだった。

将軍がとくに力をそそいだのは、政権の性格と任務を人民大衆に正しく説明することであった。

泗水坪(サスピョン)地区にでかけたとき、将軍は大衆をまえに要旨つぎのような演説をおこなった。

「われわれがたてる政府は、王様がおさめるのでもなければ、地主や資本家、あるいは個人の利益のためのものでもなく、ほかならぬ人民の権利と幸福のための、自由と独立のための政府である。この政府は農民には土地をあたえ、女性には男性とまったく同じ権利をあたえ、だれもが学び、だれもが働き、すべての人びとがしあわせに暮らせるようにする政権なのだ。……われわれが奪われた祖国をとりもどして幸福に暮らすためには、なによりもまず日本帝国主義と最後までたたかわなければならない。そうしてこそ、はじめてこのような幸福が永遠にわれわれのものとなるのだ。……遊撃隊は人民をたすけ、人民は遊撃隊をたすけなければならない。お金のある人はお金で、知識のある人は知識で支援しなければならない。そして百人、千人が心を一つにして団結し、最後までたたかうならば革命は必ず勝利する」

将軍の精力的な指導と遊撃隊員と共産主義者たちの戦闘的な活動によって、極左分子が解放地区内で一時的にも

根拠地内の人民のまえで演説する金日成将軍

たらした誤りはしだいに是正されていった。

こうして、広大な解放地区に人民革命政府が急速に樹立されていった。遊撃根拠地ごとに数個の区政府がたち、そのしたに数個の村政府が組織された。区政府と村政府には土地部、軍事部、教養部、食糧部などがおかれた。

人民革命政府は、反帝反封建民主主義革命の政治綱領を発表し、遊撃根拠地内で民主主義的な施策を実施した。

根拠地内のすべての公民には、朝鮮の歴史上はじめての民主主義的自由と平等、選挙権と被選挙権があたえられた。女性は封建制と植民地的抑圧から解放され、男性と平等な権利をもつにいたった。

このような政治的自由と民主主義的権利は、人民革命政府が実施した社会、経済的改革をつうじ、実生活で輝かしく具現されていった。

日本帝国主義と売国的な親日地主の土地を無償で没収し、これを農民に無償でわけあたえる土地

改革が実施され、土地は等級にしたがい、雇農、貧農、遊撃隊の後方家族に優先的に分配された。こうして土地のない農民と土地の少ない農民には根拠地の広大な面積の土地があたえられることになった。

日本帝国主義の極秘文献である『満州共産匪の研究』によれば、延吉県三道湾東区の農民は、一戸あたり平均四千八百坪の土地をうけとったと記録されている。

土地改革は、革命の要求と土地にたいする農民の世紀的なねがいを解決した偉大な変革であった。

農民はこおどりした。あたえられた土地が、はたして自分の土地かどうかをたしかめてもらいに村政府をたずねる農民も少なくなかった。すべての人びとはよろこびにつつまれ、生まれてはじめてもつ自分の土地をよくこえた、みのりゆたかな土地にするために精いっぱい働いた。ある老人などはうれしさのあまり、夜そっと月のあかりに照らされる自分の土地をさわってみたという。

また人民革命政府は、日本帝国主義者と売国奴の所有であった重要産業を没収して人民の所有とし、八時間労働制を実施するとともに失業者と罹災民の救済をひろく宣言した。これは全朝鮮に大きな政治的影響をもたらした。

人民革命政府は、敵と対決する困難な条件のもとでも学校を建て、無料義務教育制を実施した。動乱の炎のなかでも、子どもたちは丸木小屋の学校で歌をうたい、文字をならった。この光景を見た大人たちが目をうるませたのはいうまでもない。

また、人民大衆の民族的自覚と階級意識を高めるための教育活動がくりひろげられ、敵にたいする闘争精神と自力更生の精神がつちかわれた。

さらに根拠地では、革命的な出版物の刊行活動が活発におこなわれた。

当時、東満州一帯で発行され、配布されていた革命的出版物の種類は、抗日遊撃隊の機関紙『戦闘報』と『軍人常識』、『反帝戦線』、『解放戦線』、『大衆新聞』、『少年先鋒』、『青年闘争』、『唯物史観』、『秘密工作常識』、『革命歌

謡集』など、じつに五百余種に達していた。間島領事館の諸機関が一九三三年に押収した出版物の数だけでも四万四千九百十三部におよんだが、そのうち九〇パーセントが東満州地方で出版されたものであったという（雑誌『東亜』一九三四年版）。

出版活動とともに、人民を啓蒙し教育するための多彩で機動的な芸術公演も随時おこなわれた。

そのなかでも、反日統一戦線をテーマにした音楽舞踊劇『団結もかたく』、愛国心をテーマにした音楽舞踊劇『十三道お国自慢』（その当時の朝鮮は十三道にわかれていた）、文盲退治をテーマにした劇『実家の母からきた手紙』、侵略戦争に反対する日本人民の闘争をテーマにした劇『親をたずね、夫をたずねて』などは芸術的にすぐれ、思想性の高い内容によってとくに注目をあびた。

将軍の具体的な指導をうけたこれらの公演活動は、他の多くの宣伝手段とともに大衆の生活をたのしませ、反日闘争を鼓舞するうえでも大きく寄与した。

遊撃根拠地の創造的な情熱はきわめて高かった。

被服工場がつくられ、病院では無償治療がほどこされた。また兵器工場では武器の修理ばかりでなく、世上に名高い「延吉爆弾」をはじめ各種の弾薬や武器が製造された。

遊撃根拠地―解放地区でおこなわれた民主主義的施策について報道する当時の新聞

人民政権の威力は絶大であった。

はじめてみずからの政権をもった人民は、搾取も差別も、抑圧も蔑視も知らず、真の民主主義的権利と自由を心ゆくまで享受することができた。根拠地内の人民は異国で、それも野蛮な敵の面前で創造のよろこびと生きることの真のよろこびを味わい、やがて祖国の地にうちたてるはずの新しい政権と新しい制度がどのようなものであるかを十分に知ることができた。事実、この時期につみかさねられた人民政権創設の経験は、解放後、祖国の北半部に樹立された新しい制度、新しい政権のいしずえとなったのであり、朝鮮民主主義人民共和国は、まさにその継承と発展をしめすものなのである。

金日成将軍は遊撃隊と根拠地をさらに強化しながら、朝鮮と東満州一帯の敵の支配区域に多数の政治工作員を派遣した。この国内政治工作について『東亜日報』（一九三三年十二月二十六日付）は、「……赤色思想の侵入にたいする水ももらさぬ咸鏡北道警察の警戒網はさらに強められているが、秘密裏におこなわれる地下工作がこの一、二年間（一九三二年〜一九三三年）に表面化したものだけでも、それはおどろくべき数字に」達すると報道している。

一方、将軍は国内に遊撃隊の武装グループを進出させて日本帝国主義の植民地支配に打撃をくわえ、人民大衆に勝利の信念をいだかせた。

日本帝国主義が縮小して発表した資料によっても、遊撃隊の国内進撃回数は、一九三二年から一九三三年までの一年間だけでも十二回におよんだという（『最近における朝鮮の治安状況』一九四二年五月号）。

こうして、東満州一帯や国内から金日成将軍を慕い、抗日遊撃隊と根拠地をたよってくる人びとは日ましにふえていった。かれらは敵の弾圧のもとであらゆる辛酸をなめてきたえられた労働者や農民、青年学生たちであった。かれらのうち血気さかんな青壮年は遊撃隊に入隊した。

このような将軍の統一的指導と不屈な闘争、またこれに絶対の信頼をおく遊撃隊員と共産主義者たちの血のにじ

むような努力とによって、解放地区における極左的偏向は克服され、抗日武装闘争の大衆的基盤が解放地区および国内でますます拡大されていった。

3　将軍と児童団員たち

遊撃根拠地――解放地区には多くの子どもたちがいた。かれらは敵の無差別的な虐殺行為によって父母や身よりを殺され、住むに家なく流浪していた孤児や、たたかいにたおれた遊撃隊員の遺児や根拠地の人びとの子どもたちであった。どの子もみなきびしい試練にたえ、苦労に苦労をかさねて、ようやく将軍と遊撃隊員によつて救われた子どもたちばかりであった。

将軍はいそがしい活動のさなかでも、困難な情勢のもとでも、この子どもたちのことをかたときも忘れることがなかった。

それは不幸な子どもたちにたいする、たんなる同情ではなかった。将軍は、革命の新しい世代であり祖国の未来であるこの子どもたちが、着るものも着られずひもじい思いをしてはいないか、また天真らんまんであるべき子どもたちの心に暗いかげがさしはしないかといつも気をつかい、かれらが明るく育つよう、あらゆる努力を惜しまなかった。

将軍はとくに、たたかいで犠牲になった戦友や、革命でたおれた人びとの遺児にたいしては肉親もおよばぬ愛情をそそぎ、そのことを共産主義者としての当然の義務とみなした。

将軍が梨樹溝(リスグ)の谷あいにある小さな丸木小屋ですごしていたある日のことであった。

この日もはげしい戦闘がおこなわれた。

戦闘が終わるのももどかしく将軍は児童団の宿舎へかけつけた。そして児童局長に会った将軍は、戦闘の際に子どもたちにけがはなかったか、宿舎は被害をうけなかったか、子どもたちがおびえはしなかったか、みんな夕食を

すませたのかとくわしくたずねた。

児童局長は、ご心配にはおよびません、とこたえた。しかし将軍はそれでも安心できなかったのか、寝静まった宿舎にはいり、父親のようなやさしいまなざしで室内を見わたした。そして、うすい毛布にくるまり、からだをちぢめて眠っている子どもたちの姿が目に映ると将軍の顔は急にくもってしまった。

将軍はすぐに対策を講じた。

それから数日後、子どもたちは大きなよろこびにつつまれた。将軍が子どもたち全部に綿いれの冬服一着とふとん一組、そして学習帳二冊ずつを贈ってくれたからである。

子どもたちは、この贈り物がどんないきさつで、そしてどんな苦労のすえに自分たちのところへとどけられたのかをよく知っていた。子どもたちは綿いれの服を着て口ぐちにいった。

「わたしたちはこんなにあったかい服を着てるけど、将軍さまや遊撃隊のおじさんたちは、ひとえの服を着てたたかっておられるのだ。どんなに寒いことだろう」

児童団員たちは感謝の気持ちをこめて将軍を招待し、村の人びとや遊撃隊員のまえで学芸会をひらいた。その席上、子どもたちは真心こめてつくった新しい服と防寒靴を将軍に贈った。

将軍は子どもたちの心づかいをよろこびながらも、それをうけとろうとしなかった。子どもたちの真心だからおうけになるべきだという人びとのすすめにも、自分はまだ若いから少々の苦労はなんともないし、よい服を着てあたたかくすごすわけにはいかないといいながら、その贈り物を根拠地内の最年長の老人にあたえた。

また、こんなこともあった。

遊撃隊がろ獲した軍需品のなかから、思いがけずいくつかの朝鮮リンゴの箱がでてきた。遠くはなれた祖国の香りを狂おしいまでに思いださせる朝鮮リンゴ！　隊員たちはそのリンゴをまず将軍にさしだした。ところが、将軍

はつぎのようにいった。
「われわれの根拠地には、いまだに朝鮮の土を踏んだこともなく、名高い朝鮮リンゴを見たこともない子どもたちがどれほど多いことだろう。子どもたちにこのリンゴをおくり、腹いっぱいたべさせられないまでも、せめて祖国の味をあじわわせてやろう……」
こうしてそのリンゴは、そっくり根拠地内の子どもたちにくばられた。
子どもたちにたいする将軍の愛はかぎりなかった。万難を排して学校を建て、学用品をあたえ、無料で勉強できる条件をととのえもした。そればかりでなく、父母を亡くしたみなし子のためには司令部の近くに児童団宿舎を建てて肉親のように面倒をみた。
暑きにつけ寒きにつけ、子どもたちのことを案じつづけた将軍。自分自身は満州のきびしい寒さにもひとえの服ですごしながら子どもたちにはあたたかい服を着せ、食事や学習にいたるまで肉親にもまさる愛をそそいでやまなかった将軍――。
子どもたちにたいするつきることのない将軍の愛情は解放後もかわることがなかった。祖国の解放と同時に、すぐさま革命家遺児学院と学校が建てられた。
祖国解放戦争後の廃墟のなかでも、まず最初に建てられた建物は学校であった。東洋ではじめて九年制技術義務教育制が実施されたのも、新しい世代にたいする将軍のかぎりない愛情のあらわれであった。
「よいものはすべて子どもたちに!」
これは、むかしもいまもかわることのない将軍の自然な心であり気高い教えである。事実、将軍は子どもたちのためにはなにものをも惜しまなかった。
将軍が主力部隊をひきいて北満州に進出し、撫松方面へ行軍していたときのことである。

馬鞍山（マアン）にたちよった将軍は、そこで日本帝国主義に父母を奪われた多くの孤児たちに会った。それは見るにしのびないみじめな光景であった。さいわい遊撃隊員にたすけられて生命はとりとめたが、苦しい時期ともかさなってたべるもの、着るものすべてがあまりにもひどすぎた。

故郷がどこで、父母がだれなのかもわからない子どもたち——。かれらは将軍の心痛をよそに無邪気にかけまわってたわむれていた。この光景を見つめるおとなたちは涙をおさえることができなかった。

将軍は数年間もつかわずにしまっていた非常用の金をそこの同志たちにわたしながら、子どもたちに着物をつくってやるようにいった。

その金は、将軍の母が病弱にもかかわらず身をけずるような思いをしてたくわえたもので、将軍が革命闘争に身を投じたとき、「男子のふところには、いつも急場につかうお金がなければなりません」といって、あたえた金であった。

その間、窮乏と困難は数知れなかった。しかし将軍は最悪の場合を考え、万難を排してその金には手をふれないでいたのだった。将軍はその金で孤児たちに服を着せたのである。

将軍が子どもたちにしめした配慮は、たんに物質的なものだけではなかった。将軍は子どもたちを手にとるようにして教育した。

根拠地では児童団を組織して子どもたちを教育し訓練する対策をたて、敵の支配地区にも優秀な青年工作員を派遣して多くの児童団を組織し、革命的な教養をあたえながらかれらをきたえていった。

将軍は一九三三年の春、汪清県腰営溝の共青拡大会議において、青年工作員たちに具体的な活動方針と工作方法を明示し、優秀な青年工作員を羅子溝をはじめ広はんな敵の支配地区へ大々的に派遣した。

また将軍はときおり児童学校にでむき、子どもたちにいろいろな話をしてきかせた。十里坪（シムリピョン）にある児童学校をた

ずねたときは、子どもたちといっしょに輪になってすわり、つぎのような話をした。
「祖国を奪い、父母を虐殺し、みんなをみなし児にした日本帝国主義侵略者とその手先たちをなくしてしまわないかぎり、わたしたちがしあわせに暮らせる世のなかはやってこない。そのためにはみんな決意を新たにし、からだを丈夫にきたえ、遊撃隊でたたかっているお父さんやお兄さん、お姉さんたちのことを考えて、一生懸命に勉強しなければならない。みんなは、わが祖国の花のつぼみであり、未来の柱なのだ。みんなが明るく朗らかであればわたしたちも明るく朗らかになり、みんなが丈夫に育ってくれれば、わたしたちも力がわいてくる。どんな困難に会おうとも失望したり悲観したりせず、勝利の確信をもってすくすくと育ち、祖国のりっぱな働き手になりなさい」
それからまた将軍は、「つねに準備を！」という児童団の敬礼の意味についても説明し、これは幸福で希望にみちた新しい社会を建設するりっぱな働き手になるため、つねに準備しようという意味であると教えた。
子どもたちは金日成将軍のりっぱな戦士になろうというひたむきな気持ちで、児童団の生活を規則正しくりっぱにおくった。
児童団員は将軍の配慮を一身にうけて学ぶかたわら、根拠地の警戒や通信連絡、そして演芸公演による大衆啓蒙や遊撃隊員の慰安活動など多くの任務にもたずさわり、それをみごとになしとげた。こうした過程をつうじて幼いかれらも革命思想をつちかい、たたかいの経験をつみかさねていった。
なかでも児童団員の才気あふれる演芸会は遊撃隊員の士気を高め、大衆の闘争意欲を燃えたたせるうえで重要な役割をはたした。大衆集会には、ほとんどもれなく児童団の歌と踊りが登場した。
子どもたちは根拠地の人びとと遊撃隊だけでなく救国軍のなかにまではいって公演し、かれらの反日気勢を高めもした。

汪清遊撃根拠地内の児童団員は、一九三四年にあのけわしい老爺嶺をこえて遠い北満州地方にまでゆき、演芸活動をおこなってその地方の遊撃隊員を慰問し、大衆に革命的影響をあたえた。

児童団の公演に深く感動したその地方の人びとは公演期間を一週間も延長させ、幾箱もの菓子や学用品、それに数挺の武器まで贈り物としてもたせてくれた。

いいつくせないほどの困難にみまわれていた車廠子遊撃根拠地の児童団員たちは、遊撃隊員をねぎらうためにひもじさをかくして舞台にたち、踊りながらたおれたこともあった。

小汪清根拠地の児童団員は、敵弾をくぐりぬけて戦闘にも参加した。

このように、将軍によって教育された児童団員は敵に出会えばたたかうことを知っていたし、革命の秘密を守るためには、ためらうことなく幼い生命をささげもしたのである。

当時、中国の新聞『救国新報』やコミンテルンの雑誌にまで紹介され、世界じゅうに知れわたった児童団員琴順少女も、こうしたけなげな子どもの一人であった。

一九三四年の晩秋のこと、琴順は不幸にも百草溝に駐屯していた日本の憲兵隊にとらえられた。敵に両親を虐殺された琴順は、ひとかたならぬ将軍の愛と教育をうけ、幼いながらも敵にたいする憎悪と復讐心の強い児童団員であり、意志の強いしっかりとした少女であった。

逮捕した少女が将軍の司令部がある根拠地にいたことを知った日本の憲兵たちは、秘密をひきだそうと狂いたった。

しかしかれらは、なに一つうるものがなかった。甘いことばでなだめすかしても少女はがんとして口をきかなかった。いきりたった憲兵は、「早くいえ。さもなければ殺すぞ!」とおどかした。

そのときはじめて琴順は口をひらき、「けがらわしい! おまえたちのような犬畜生とは口もききたくない!」

と叫び、将校の顔につばをはきかけた。
憲兵将校は真っ赤になって怒った。子どもだと見くびったが朝鮮の唐辛子は小つぶでも辛かった。
ムチが鳴った。憲兵たちは幼い少女を棒で容赦なくうちつづけた。しかし琴順は血まみれになりながらも敵をののしった。
どうにも手のほどこしようがなくなった憲兵たちは、群衆を無理やりにかき集め、少女をかれらのまえにひきずりだした。銃殺しようというのだった。人びとは侵略者の野獣のようなふるまいに歯ぎしりし身をふるわせた。
憲兵は琴順に、悪かったと一言あやまればたすけてやろうといった。しかし琴順は、群衆にむかって声をかぎりに叫んだ。
「おじさん！　おばさん！　泣くことはありません。悲しまないでください。遊撃隊のおじさんたちが必ずこの仇をうってくれます。祖国が解放されるその日まで力強くたたかってください。……日本帝国主義を打倒しよう！」
銃声がとどろき、少女はたおれた。琴順は十歳であった。
数多くの出版物をつうじて世界ぢゅうに知れわたったこの事実は、各国の広はんな人民の怒りをよびおこした。
将軍は、このような子どもたちを育てたのである。
将軍は児童団の優秀な少年たちをえらんで少年先鋒隊を組織した。この少年先鋒隊は、半軍事団体として系統的な軍事学習と訓練をつみかさねながら、遊撃根拠地内におけるスパイの摘発や根拠地警戒勤務、重要な通信連絡などをはじめ、敵情の偵察や大衆扇動活動など実際の闘争をつうじて心身をきたえていった。
将軍の方針にしたがって、すべての根拠地と根拠地付近の敵の支配区域にも児童団で訓練された少年先鋒隊が組織され、活動をはじめた。

将軍は後日、遊撃根拠地および敵の支配地区内における児童団と少年先鋒隊などで系統的に教育され、きたえられた優秀な少年たちからなる少年中隊を組織し、これを遊撃隊に配属した。

将軍は少年中隊を直接指導し、かれらを一人のこらずりっぱな遊撃隊員に、不撓不屈の革命闘士に育てあげていった。

このようにして、きびしい歳月や苦難の日々にも子どもたちは将軍のそばで明るく元気に成長し、革命の新しい世代として闘争のなかできたえられながら、明るい未来にむかっての準備をおこたりなくととのえていったのである。

4　小汪清防御戦闘

侵略者たちはあわてふためいた。

かれらにとって東満州遊撃根拠地──解放地区は、満州の支配体系にうちこまれたおそろしいくさびであった。かれらは抗日遊撃隊が「武器をとり朝鮮侵攻を企図するなど、長期にわたり朝鮮治安の一大癌を形成」（『在満朝鮮人概況』第七号）していると悲鳴をあげた。

日本帝国主義侵略軍は日ましに増強された。いわゆる「満州国」がでっちあげられた（一九三二年三月一日）当時は約六万五千の兵力であったものが、九か月後には九万四千百余名に激増した。そのうえ満州にいた旧東北軍（張学良の軍隊）の敗残兵のうち、十一万名が再編成されて日本軍の手先になった。

かれらはこのほか偽満軍と警察機構を拡大し、いたるところで泥なわ式に警備隊や「討伐隊」を編成した。

こうして大量の侵略軍隊が東満州におしよせ、「反日部隊」の「討伐」にむけられていた大兵力も東満州根拠地にたいする攻撃のため狩りだされることになった。

一方、根拠地周辺には監獄となんらかわりない「集団部落」がつくられ、有形、無形の鎖で手足をしばりつける「五家作統」、「十家連座法」などの「保甲制度」が実施された。これは十戸を一つのグループ(牌)とし、だいたい十の牌を一つの甲に、いくつかの甲を一つの保に組織し、警察署の統制のもとに住民をたがいに監視させ、もし遊撃隊と関係のあるものがでたときには、かれの属する五戸ないしは十戸に連帯責任を負わせ、同時に処罰するという日本帝国主義が考えついたもっとも卑劣な制度の一つであった。

これによって日本帝国主義は、遊撃隊と人民とのあいだに深くひろい溝をつくり、とくに遊撃隊と解放地区の大衆を孤立無援の窒息状態におとしいれようともくろんだ。

一九三三年の春、東満州遊撃根拠地にたいして関東軍と偽満軍、朝鮮駐屯羅南師団管下の部隊など八千五百余名の大兵力がおしよせてきた。

敵は、いわゆる焦土化作戦と包囲作戦で根拠地を一挙におしつぶそうとした。

抗日遊撃隊と遊撃根拠地の人びとのまえには、生死を決するきびしい試練のときがやってきた。しかし、遊撃隊員と根拠地の人びとは少しも動揺しなかった。これ以上しりぞくところもなく、またしりぞくわけにもいかなかった。

かれらはふたたび奴隷の恥辱と苦痛をうけないためにも、また自分たちの人民政権と革命の獲得物を守りぬくためにも、最後まで敵とたたかわなければならないことを知っていた。

一九三三年四月、敵の大部隊は東満州地方の中心根拠地である汪清地区小汪清根拠地に攻撃をくわえてきた。ここには金日成将軍の指揮部があった。

将軍は小汪清根拠地の防御戦闘で、圧倒的に優勢な数千名の敵を相手に種々さまざまな遊撃戦術を縦横に駆使した。おもに円形防御の体制をとりながら、これに根拠地の中心部深く配置した火力を適切に配合する戦術をもちい

た。そして、ときには地形を利用して敏速に移動しながら不意の打撃をくわえ、またときには誘引戦術をもちいながら敵にせん滅的な打撃をあたえた。

敵は大砲や飛行機までくりだし三日間にわたって連続的な攻撃をくわえてきたが、そのつど勇敢な遊撃隊と、それと一体になってたちあがった人民の英雄的な反撃をうけ、甚大な損害をこうむった。

敵は解放地区の民家を焼きはらっただけで、四百余名の死体をのこして敗走した。

結局、将軍が指揮した小汪清の防御戦闘は敵の大軍を撃破し、遊撃根拠地創設以来、最初の大勝利をおさめた輝かしい戦闘となった。それはまた遊撃隊とともにたちあがった根拠地の人民の勝利でもあった。

根拠地内の反日自衛隊、少年先鋒隊はいうまでもなく、老人や婦人までが幸福のゆりかごである根拠地を守ろうと献身的にたたかった。婦人たちは弾雨をついて遊撃隊員に食事と水をはこび、老人は山頂から岩をころがし、かん声をあげてたたかった。少年たちも遊撃隊を力づけようと、岩のかげや草むらのなかで声をかぎりに革命歌をうたった。こうした根拠地の人びとの犠牲的な闘争は、遊撃隊員の士気をいっそう燃えたたせた。

遊撃隊員は根拠地の人びとに、安全なところへ身をさけるようにといってきかせたが、だれ一人たち去ろうとはしなかった。銃のない人は石をもち、棒切れをにぎってたたかった。また児童団員は古鉄でつくった手製の拳銃をもち、突撃ラッパを吹きながら敵にたちむかっていった。婦人たちも根拠地防衛の哨兵となった。

後日、『朝鮮日報』はこの戦闘をとりあげ、根拠地では「子どもや婦女子まで戦術にたけ、機関銃で討伐隊に応戦」したと報道した。根拠地のすべての人びとが哨兵であり英雄であった。

敵の「春期攻勢」を撃破した各県の遊撃隊は武装力を大々的に改善し、隊員数をいちじるしく増加させた。

夏になり、根拠地では野良仕事がいそがしくなった。戦闘経験をつみ、いちだんと強力になった遊撃隊は根拠地の防御だけでなく、敵の支配地域にはいって政治工作や遊撃戦を力強く展開するまでに成長した。

将軍が「反日部隊」の前方司令呉義成と会談し、東寧県城の攻略戦闘を指揮して最初の大勝利をおさめたのは、ちょうどそのころのことであった。

東寧県城戦闘から数日すぎたころであった。延吉県で活動している遊撃隊きっての名射手といわれた崔賢中隊長が将軍によばれて隊員とともに小汪清根拠地に到着した。

かれは馬村(マチョン)にある指揮部で、金日成将軍との感激的な初対面をおこなった。その日、将軍は夜おそくまで、崔賢同志と今後の闘争について語りあった。

翌朝、歩哨が敵襲の急報をつげてきた。将軍はただちに部隊を高地に配置し、崔賢同志をともなって小高い丘にのぼり、敵情を視察した。将軍が直接指揮をとる戦闘にはじめて参加することになった崔賢同志は、文字どおり感無量であった。

恐怖にとりつかれた敵の「討伐隊」は谷間の入口でながいあいだ発砲したあと、野良につんであった穀物の山に火をつけはじめた。

これを見た将軍は敵を掃討せよと命令をくだし、崔賢同志に話しかけた。

小汪清防御戦闘

「そうだ。かねてから崔賢同志は射撃の名手だときいていたが、きょうは一つお手なみを見せてくれまいか」
射撃にかけてはライバルのいない崔賢中隊長だったが、将軍からあらたまってこういわれてみると、すぐに返事ができなかった。
このとき敵は、約五百メートルはなれたところを移動していた。命中させるにはかなりむずかしい距離であった。崔賢同志はスイス製マレーシャン歩兵銃でねらいをさだめ、引き金をひいた。その瞬間、もみの山に火をつけようとしていた敵兵がたおれた。
「いや、さすがは名手だ。どれ、わたしも一つ射ってみよう」
将軍は歩兵銃をとると無造作にねらいをさだめ、四、五発つづけざまに射った。ところが、なんとそれが一つのこらず命中したのである。神わざのような将軍の射撃術のまえに、さすがの崔賢同志も思わず嘆声をあげた。
この光景を見ていた遊撃隊員は歓声をあげ、敵にいっそう猛烈な射撃をくわえた。そのため敵の「討伐隊」はそれ以上接近してくることができず、敗走せざるをえなかった。
将軍は崔賢同志が滞在しているあいだ、革命の明るい展望について語り、反日民族統一戦線を国内に拡大する問題、党創建の方針、また武装闘争をより拡大するため各地で活動する遊撃隊を質、量ともに急速に成長させる問題など、重要な革命課題について話した。
将軍は崔賢中隊長の出発に先だち、大口径のダテガル銃四挺と琥珀のパイプを贈った。崔賢同志は後日、「それをうけとったわたしは、胸のなかに、なにか熱いものがこみあげてくるのをおぼえた」と琥珀のパイプにひめられたエピソードを回想している。
かれはそののち抗日武装闘争の全期間はもちろん、解放後も、またアメリカ帝国主義によって挑発された祖国解放戦争のさなかでも、つねにその琥珀のパイプをもち歩き、困難な状況にぶつかるたびにそれを見ては将軍を思い

だし、力と勇気をえたという。

この琥珀のパイプはいまでも、抗日武装闘争の時期における無数の遺物や文献資料でみたされた朝鮮革命博物館に保管されている。

金日成将軍の指導のもとに解放地区が日ましに強化され、遊撃隊の活躍がいっそう強力なものになると、日本の侵略者たちは一九三三年の冬、ふたたび東満州各県の遊撃根拠地にたいする「大討伐」作戦を開始した。

今度も敵は、主要な打撃方向を金日成将軍がいる小汪清遊撃根拠地に集中してきた。かれらは数か月もついやした作戦計画にしたがって、「精鋭」を誇る関東軍、朝鮮駐屯軍羅南十九師団の一部、偽満軍など五千余名の大兵力をここに投入した。歩兵はむろん、騎兵と砲兵、それに航空隊までくりだした敵は、必ず小汪清根拠地にたいする「掃討作戦」を成功させると広言してはばからなかった。

かれらは、夾皮溝、汪清、馬盤山などの各方面から根拠地を包囲し、しだいにその包囲網をちぢめながら根拠地周辺を火の海にかえた。

しかし将軍の作戦計画と機敏な指揮によって、多勢をたのんでの敵軍の進撃も遊撃隊と根拠地の人びとの英雄的な防御戦にあい、小汪清入口ののこぎり山で阻止されてしまった。

のこぎり山戦線を突破しようと狂いたった敵はさらに兵力を増強し、二十余日間にもわたって執拗な攻撃をくりかえした。

戦況は楽観を許さなかった。遊撃隊と根拠地の人びとには、敵の大軍を最後までくいとめるだけの武器がなかった。血まよった敵の蛮行によってすべてのものが焼きつくされ、きびしい寒さのなかでからだをあためる一軒の家すらなく、ひとにぎりの米を手にいれることもむずかしかった。病人がでても、一ぱいの湯をのませることさえできなかった。

敵の動きをくわしく分析した将軍は、ただちに新しい戦術に移ることを決意した。
将軍は長期戦をねらう強力な敵を相手に、せまい地域で防御戦だけにたよることは冒険であると判断し、敵が遊撃根拠地の「討伐」にその力を集中しているこの機会に、遊撃隊の力を分散させ、根拠地での防御戦と敵の背後での攪乱戦をくみあわせて、かれらに手痛い打撃をくわえようと考えたのである。
将軍は戦闘任務をあたえながらつぎのようにのべた。
「いま敵は東満州各県の遊撃根拠地を同時に大挙侵攻するために、警察や自衛団まで遊撃根拠地『討伐』作戦に動員している。したがって敵の後方は事実上がらあき同然である。また敵は目下のところ遊撃隊が根拠地をはなれて自分たちの後方にまわりこもうなどとは考えてもいない。このようなとき大胆かつ敏速に敵軍の後方で兵舎、自衛団、警察署などを襲撃して不意に打撃をあたえ、軍需物資の倉庫や供給機関を攻撃し、軍需物資輸送車を待ちぶせておそい、食糧や衣類の供給をはばむ一方、それをろ獲してわが軍の軍需品を補充し、敵がいたるところで不安と恐怖におちいるようにしなければならない。また一方では夜間に乗じて根拠地周辺にもうけられた敵の宿営地を奇襲攻撃し、これをせん滅しなければならない」
事実、敵は東満州各県の根拠地を同時に撃破しようと警察や自衛団まで「討伐」作戦に投入したため、後方はがらあきとなっていた。かれらとしては、こうした状況のもとで遊撃隊が根拠地をはなれ、自分たちの後方に出現するなどとは夢にも考えられないことであった。
この点をいち早く看破した将軍は、数千名の根拠地の人びとを安全な場所へ移動させ、根拠地の兵力を二つの部隊に編成がえした。
その一部は根拠地にのこって防御の任務につき、他の一部隊は将軍がみずからひきいて二十キロあまりの区間におよぶ敵の包囲陣を突破し、その後方に進出することにした。

この作戦計画にしたがい、根拠地にのこった遊撃部隊は人民を十里坪に移し、かれらを保護しながら山のうえに陣地を築いた。そして有利な地形の高地や谷間に隊員をふせておき、近よってくる敵に猛烈な反撃をくわえた。

夜は交代で多くの襲撃班が敵の陣地に夜襲をかけ、輸送路を断った。そのため夜ごと襲撃班になやまされた敵は、寝不足のため昼間の戦闘もまともにできない始末であった。こんな日が数日もつづくと、敵はまったく意気消沈してしまった。

将軍が直接ひきいて敵の支配地区に進出した遊撃隊は、凉水泉子（豆満江対岸の国境地帯）と北鳳梧洞（図們の北約四十キロの地点）一帯で、警察署、自衛団などを襲撃して敵を戦慄させ、その後方の中心地である汪清を襲撃して大混乱におとしいれた。

こうなると、根拠地攻撃にすべてをかけていた敵は自分たちが逆に包囲されかけていることに気づき、四十余日間も執拗にしめつけていた包囲網を解いて退却するよりほかなかった。

同じころ延吉県、和龍県、琿春県の遊撃地区でも敵の「大討伐」を英雄的にうちやぶっていた。こうして敵は冬期作戦でじつに一千余名の死傷者をだしただけで、これといった戦果もなく苦杯をなめた。

遊撃隊の勝利は、金日成将軍の戦術がいかにすぐれているかを遺憾なくしめした。それはまた、極左分子の冒険主義的な主張にたいする実践的な論駁ともなった。

当時、極左分子は敵味方の力関係と具体的な状況も考えず、根拠地におそいかかってくる数十倍の敵と正面衝突することだけを主張した。

万一かれらの主張をうけいれていたならば、数的に優勢な敵との戦闘で受身におちいり、遊撃隊と根拠地の人びとは大きな損失と敗北をまぬがれなかったであろう。

かれらの冒険主義的な主張を一蹴した将軍は、敵が集中的に攻撃してくるときには遊撃隊を分散し、各所で後方を攪乱しながらこれを各個撃破し、敵が分散したときには逆に遊撃隊の集中した力でこれを撃滅するなど、遊撃活動の戦術的原則を創造し、それを機敏に活用したのであった。

将軍のこの戦術は、その後も根拠地防御戦とくみあわさって敵の政治的、軍事的拠点をたたき、遊撃区域を拡大する作戦をつうじてより大きな勝利をもたらした。一九三四年六月初旬におこなわれた安図県大甸子(テンヨンジャ)戦闘の勝利と、同年六月下旬に将軍が指揮した汪清県羅子溝市街の攻略戦闘における輝かしい勝利がそれをはっきりと実証している。

5　団結の力

遊撃根拠地にたいする敵の連続的な攻撃は、根拠地の人びとを極度に疲労させた。敵は根拠地を廃墟にしてしまおうと、攻撃をしてくるたびにすべてのものを焼きはらい、破壊し、踏みにじっていった。

しかしそのつど、家を焼かれた人びとはふたたび新しい家を建て、田畑を荒らされた人びとはふたたび種をまくなど、たくましく生きぬいた。

敵のたびかさなる蛮行によって、多いときには一年間に三十一、二回も、焼土に家を建てなおさなければならなかった。

敵はひきつづきおそいかかり、そのうえきびしい冬の寒さまでかさなって根拠地の人びとの苦難はいいつくせないものがあった。石も凍るという厳冬の吹雪のなかで、かぶるものとてない住民は枯葉をふとんがわりにしてたえぬかねばならなかった。

しかしきびしい冬にもまして、凶悪な敵にもまして人びとに大きな苦しみをあたえたのは、一にぎりの米も塩も

ないおそろしい飢えであった。飢餓は人びとの気力をそぎはじめた。そのため生命をつないでいくこと、それ自体がはてしないたたかいであった。

しかし、根拠地の人びとの意志は不屈だった。人びとは革命の貴重な獲得物をしっかりと手ににぎりしめ、遊撃隊と人民政権を献身的にたすけた。

苦難のたたかいの日々にも、人民の生活はじつに楽天的であった。このことは汪清根拠地をはじめ各地の根拠地で、遊撃隊と人民大衆が運動会やサッカー試合などをしばしばおこなっていた事実からも充分に推察することができよう。

はげしい戦闘がつづけられた。

一九三四年秋ごろから、東満州の遊撃根拠地はふたたびたたかいの炎につつまれた。遊撃根拠地の「討伐」と遊撃隊の城市攻略戦闘で連続的な打撃をこうむった敵は、この年の秋から冬にかけてさらに多くの兵力を動員し、毎日のように東満州遊撃根拠地を攻撃してきた。

敵の魔手がのびたところでは、例外なくすべてのものが破壊され焼きはらわれた。家がこわされ、秋のとりいれを待つばかりの田畑が火の海にかわった。根拠地周辺は敵の軍隊と警察網でおおいつくされ、村という村はすべて警戒のきびしい「集団部落」となり、食糧をもとめる道も断たれた。

将軍はこのような状況のもとで、なによりも重要なことは革命力量をたもつことであり、敵の攻撃をすすんで撃破することであると考えた。

将軍は、まずはじめに新しい根拠地を開拓し、根拠地の人びとと政府機関や革命組織を比較的安全なところに移すことにした。

こうして一九三四年の秋から一九三五年のはじめにかけて、汪清県と琿春県では羅子溝を中心とした汪清県金倉(チンチャン)

一帯に、そして延吉、和龍両県では安図県車廠子などの地に新しい根拠地がつくられ、移動がはじまった。
きびしい季節にさいなまれながら数十里のけわしい山道や密林をかきわけてすすむ道のりは、文字どおり茨の道であった。
しかし人びとは革命と生死をともにするかたい決意をひめ、あらゆる困難にうちかってすすんだ。各県の遊撃隊員は根拠地の人びとを保護するために、おそいかかる敵と血みどろの決戦を展開しながら行軍をした。
このようなきびしい過程をへて、けわしい自然のなかに新しい根拠地がぞくぞくと生まれていった。
新しい根拠地での生活も苦しかった。わけても車廠子根拠地の人びとの苦難はまさに形容できないほど苦渋にみちたものだった。かれらは疲れはてたからだで山をさまよい、どんぐりをひろい、松の木の皮をはがし、草の芽をつんでは飢えをしのいだ。日がたつにつれ、飢えはより深刻になっていったが、だれ一人、車廠子をはなれようとはしなかった。人びとは、敵の足もとにひざまづいて一さじの飯のほどこしをうけるよりは、むしろ死んで石と化しても解放地区にとどまる道をえらんだのである。
ときおり遊撃隊は、幾重にもはりめぐらされた敵の包囲網をつき、食糧を手にいれてくることがあった。しかしそれも当座をしのぐだけで飢えはつぎつぎとおそってきた。
このような苦しみのなかでも、人びとは種穀だけには手をつけようとしなかった。かれらは敵の目をぬすんでは畑にゆき、土地をたがやし、種をまいた。
人民革命政府の幹部たちも作物が芽をふくと、それを何本かひきぬいて人びとに見せて歩きながらいった。
「新芽がでた。さあ、元気をだしましょう！」
穂がでると、こんどはそれをもって歩きながら激励した。
「あとわずかでとりいれだ。さあ、元気をだすのです。もう少しのしんぼうだから——」

美しくも、たのもしい人びとの集まりであった。だれもがたがいに、革命の未来にたいする明るい希望のことばであいさつをかわし、たがいにたすけあい、たがいにはげましあった。
こうしたなかでも、子どもたちは学校で文字をならい、アコーデオンにあわせて革命歌をうたった。
子どもたちは遊撃隊員を慰労する公演もおこなった。
ある日のこと、子どもたちが遊撃隊員のまえで公演をしていたとき、一人の少年が空腹にたえかねてたおれてしまった。遊撃隊員の一人がおどろいて少年をだきおこした。
少年は気をとりもどし、自分をだきおこしてくれた遊撃隊員の顔を見つめていたが、ふたたびたちあがると元気な声で「いざすすまん、たたかいに!」と、うたいながら踊りをつづけた。少年はやせこけ、顔色もよくなかったが、その表情には笑いとよろこびがあふれていた。
感激した遊撃隊員たちは、涙を流しながら少年といっしょにうたった。

いざすすまん、たたかいに!

…………………………

革命をめざし、未来を愛する人びとの力は無限だった。搾取と屈辱からぬけだし、幸福と自由をもたらす革命の獲得物——、それを手にした人民を屈服させる力はこの世にはなかった。かれらは、砲火をあびせる敵を撃滅することができたばかりでなく、貴重な同志と根拠地のためにはためらうことなく、かけがえのない自分の命をささげることも知っていた。
遊撃根拠地——解放地区、それはまさに、遊撃隊と人民の血が大地のうえにつづった英雄叙事詩であった。

遊撃根拠地――解放地区は、敵のきびしい包囲のなかにあっても四、五年間、微動だにしなかった。この時期の将軍の活動では、ここでどうしてもふれないわけにはいかない劇的な場面がいくつかある。

一九三四年の冬、将軍は抗日遊撃隊の一部隊をひきいて東満州と北満州の境にある老爺嶺一帯に進出し、はげしい戦闘を終えて帰途についた。

部隊がひきつづく戦闘と食糧難ときびしい寒さに苦しみながら、天橋嶺（チョンギョリョン）の木材所の近くまできたときだった。将軍が悪感を訴え、病にたおれてしまった。疲労の度がすぎ、からだが極度に衰弱したところへ、きびしい寒さのなかで無理をしたのが原因だった。しかも病状はきわめて重かった。

ところが、その地域は深い雪と寒さで凍りついた、おそらくいままで人間がとおったこともないと思われる密林のなかで、人の足あとはいうにおよばず、けものの足あとさえ見つからないところであった。いくらいっても人家には出会いそうもなかった。そのうえ、このときは主力部隊が先に出発し、将軍の護衛のためにのこっていたのは中隊長以下のわずかな隊員にすぎなかった。

しかも敵は執拗に四方からおそいかかってきた。それは数百名をこえた。

弾薬も食糧もなく将軍の病はますます重くなる一方で、隊員たちはどうしていいのかわからなかった。きびしい寒さのなかで人家に出会うあてもなく、そりのうえによこになって高熱に苦しむ将軍を見守る隊員たちの胸のうちは、はりさけんばかりであった。

しかし将軍は、こうした危急なときでも、超人的な力をふりしぼって詩を書き、うたをつくり、隊員たちの気持ちをほぐして勇気をふるいおこそうとした。

なすすべもなく、うちしおれていた隊員たちは、将軍のつくった詩を読み、感激の涙をのんでふたたび勇気をとりもどした。かれらは、全員が命を失うことがあっても、将軍だけは必ずたすけようと決心した。

かれらは将軍を護衛し、追いすがる敵をはらいのけながら密林をかきわけ、昼夜をわかたず強行軍をつづけた。かれらのただ一つのねがいは、将軍を安全な場所に移すことだけであった。

ところが敵は、すでに四方から二重三重の包囲網をせばめてきた。そのうえ夜が明けてしまった。じつに危険な瞬間だった。隊員たちは深い雪をかきわけながら必死になってつきすすんだ。そしてついに、深い山のなかで木材伐採場のかやぶき小屋を発見した。

かれらは、そのかやぶき小屋で中国服を着た金という苗字の老人に会った。そして、その朝鮮の老人の機知と献身的な努力によって重大な危機からのがれることができたのである。

病人が金日成将軍であることを知った老人は、将軍のためなら命をなげだす覚悟だといいながら一つの計略をあみだした。

その老人の話によれば、ここは中国人材木商の伐採場であり、寧安鎮に住む材木商がちょうど朝がた、この伐採場の視察にくることになっているというのだった。

「いまに数台の馬車がやってきますから、あいつとわたしを、うむをいわさずしばりあげてください。そして、命がほしければいうことをきけと、あいつを降参させるのです。そうしてから、わたしたち二人を道案内人にしたてて出発してください。あの男はこの付近の顔役で軍隊にも顔がきくやつですから、きっと敵の包囲をうまくぬけだすことができますよ」

老人の計略は、なるほどりっぱなものではあったが、危険な面もないではなかった。しかし、だからといってすぐに考えつく他の方法があるわけでもなかった。中隊長は老人のいうとおりに決行する手はずをととのえた。

やがて四台の馬車がやってきた。材木商は遊撃隊の捕虜となった。そのあとは金老人の筋書きどおりにことがはこんだ。

先頭の馬車には戦術にすぐれた小隊長が材木商とともにのりこみ、将軍は三番目の馬車に身をよこたえた。馬車にひそんだ隊員たちは敵の包囲を突破するために決死の戦闘態勢をととのえた。

木材商は、無条件に命令にしたがうことをいま一度約束し、おとなしく遊撃隊員のいうとおりにした。四台の馬車は吹雪をついて、敵の厳重な包囲陣にむけて走った。武装した敵が駐屯している警戒地点では材木商に城内へ買物にゆくのだと大声で叫ばせ、歩哨をひき殺さんばかりの勢いで走りぬけた。

しかし問題は、最後の通過地点である橋を無事とおりすぎることであった。橋の両側には武装した敵兵の姿が見えた。馬車が近よっていくと、敵はそれをとめようと接近してきた。それを見て材木商はうろたえはじめた。

まさに危機一髪の瞬間であった。隊員たちは一戦をまじえる覚悟で、それぞれ銃をかたくにぎりしめた。先頭の馬車にのっていた小隊長は拳銃を材木商の脇腹につきつけた。

材木商は最後の勇気をふりしぼって、寧安城内へ買物のためにいそいでいるところだ、なにを捜索しようというのか、と大声でどなった。敵兵が捜索をためらう一瞬のすきをのがさず、四台の馬車は矢のように橋のうえをとおりすぎた。

こうして一行は、きびしい敵の包囲網を突破することに成功した。材木商の馬車は一行と別れ、寧安鎮へむかって走り去った。

命の恩人である金老人は、高い熱に苦しむ将軍の姿に目をうるませながら、老爺嶺のふもとに、朝鮮の老人の家があると教えてくれた。隊員たちは心から感謝のことばをのべ、金老人に別れをつげた。そして昏睡状態にある将軍を護衛しながら老爺嶺をめざしていそいだ。

寧安県の東南、間島との境界に近い深い山あいに大崴子（ターウエズ）という村があった。そこからまた森のなかをかきわけて十二キロほどはいると、老爺嶺のふもとに着く。

うっそうとした林のなかに、泉をはさんで二軒の丸木小屋が建っていた。そこには趙宅周（チョテクチュ）という老人が二人の息子と孫、それに嫁の崔日華（チュエイルファ）とともに住んでいた。

かれらは咸鏡北道の茂山（ムサン）郡の人たちだったが、日本帝国主義とその手先の抑圧からのがれて満州に移住したのち、浮き草のように方々をさすらったすえ、この地で火田をおこし、ほそぼそと暮らしていたのである。

遊撃隊員は吹雪をついて、やっとこの家にたどりつくことができた。二人の隊員が先に丸木小屋のまえについた。

それは一九三四年十二月、暮れもおしせまったある日の真夜中のことであった。

二人の隊員は戸口で主人をよんだ。おどろいて眠りからさめたこの家の人たちは、すぐには返事もできないほどであった。しばらくして趙老人が戸をあけ外をのぞいた。隊員の一人がていねいに話しかけた。

「おどろかないでください。わたしたちは抗日遊撃隊です」

趙老人はそれをきくと、ようやく安堵の息をついた。

「司令官同志が急病でたおれ、あちらで休んでおられますが、この家におつれしてもいいでしょうか?」

隊員たちは、かいつまんで事情を話した。

「そんなことなら、なぜもっと早くおつれしてこなかったのかね。一刻をあらそうというのに、気のきかない人たちだ」

趙老人は患者がほかならぬ金日成将軍だときいて、びっくりしながらこういった。そして長男と孫の英善（ヨンソニ）を隊員といっしょに将軍が休んでいる場所へいそがせた。それから老人は嫁に大いそぎで湯をわかし、粟がゆをつくるよういいつけたあと、将軍は朝鮮の革命軍隊をひきいて日本の侵略者たちをうちやぶるえらいお方だ、といってきかせた。

雪がひざまでつもったうえに風がはげしく、真夜中の寒さは骨身にしみた。外へでた一行は四キロあまり雪をかきわけてすすみ、以前「討伐隊」が火を放ったことのある、くずれかけた一軒家の土壁のかげで風をさけ、担架によこたわっていた将軍を老人の家へはこんできた。

趙老人の息子と嫁の崔日華は将軍をかまどのそばに寝かせ、ふとんをかけたあと、火をたいてオンドルをあたためはじめた。

将軍は重態だった。みんなの表情は暗かった。

祖国に光明をもたらすため寝食を忘れてたたかう将軍、はげしい吹雪にさらされた異国の山奥で高熱に苦しむ将軍――、その姿を見守る隊員や趙老人の家族の胸には熱いものがこみあげた。

崔日華は舅のいいつけどおり、粟がゆに蜂蜜をとかして将軍にさしだした。趙老人と隊員は懸命に将軍のからだをもみつづけた。まもなく将軍は汗を流して深い眠りについた。

夜が明けるころ、将軍は眠りからさめた。からだが軽くなったような感じがした。

将軍は、うれしさのあまり身のおきどころを知らぬ趙老人の家族に、「みなさんのおかげて生きかえりました」とくりかえし礼をのべた。隊員たちは涙にぬれた顔で将軍を見つめるだけでのどをつまらせたまま、なにもいうことができなかった。

病にうちかった将軍は、この日から二度と病床にふせることがなかった。

将軍の食膳には麦と粟をまぜたご飯と、心づくしの菜汁や豆腐の味噌煮がおかれていた。隊員たちとまったく同じであった。将軍は料理をほめながら豆腐の味噌煮に舌つづみをうった。

病後の将軍に肉料理一つもてなしできない貧しさに心を痛めた崔日華は、台所でいくたびかチョゴリ（上衣）のひもを涙でぬらした。

将軍はからだが回復するにつれ、隊員たちの学習をたすけたり、ときどき付近の山々を歩いては地形をしらべたりした。

こうして半月がすぎた。そして将軍が隊員をひきいて帰路につく日がやってきた。

一晩ぢゅうふりつづいた雪が朝になってやっとやんだ。将軍は趙老人の手をいつまでもはなそうとしなかった。

将軍は、林のなかにぽつんと建っている丸木小屋と趙老人の家族を見やりながら、つぎのように語った。

「みなさんが故郷をすててはるばるやってこられた異国の地でも、こうして日の目を見ることもできずにかくれて暮らさなければならないとは——。これはわたしたち朝鮮の若ものの責任です。けれどもかたく信じて待っていてください。わたしたち朝鮮人民が明るい祖国で楽しく暮らせる日はきっときますから」

うちひしがれた恨み多い民族の胸に燃えるような愛をそそぐ将軍——。このことばをきく趙老人と家族の目には熱い涙があふれた。

しばらく目をそらしていた将軍は、また春になれば敵の「討伐」が強まるだろうから、羅子溝方面に移る方がいいとくりかえし老人にすすめた。

隊員たちを先だたせてゆく将軍は、いくどもふりかえっては手をふりながら、老爺嶺の雪を踏みわけて汪清根拠地へと去っていった。

それから約半年ののち、将軍はふたたび趙老人にめぐり会うことができた。

将軍は北満州遠征をまえにした一九三五年六月のある日、老黒山戦闘で勝利した部隊をひきいて太平溝(テピョング)にたちよった。村人たちは大通りに走りでて勝利の歓声をあげた。

このとき群衆のなかに趙宅周老人とその嫁の崔日華がまじっていた。かれらは将軍がすすめたとおり、羅子溝から近い太平溝へ移っていた。

遊撃隊の隊列のなかから金日成将軍の姿を見いだした崔日華は、なつかしさのあまり、将軍のそばへかけよろうとした。そのとき趙老人は嫁をよびとめ、「大切な仕事でいかれる方を、わたくしごとなどでよびとめたりしてはいけない」といった。

将軍はこの日、部隊の一部を太平溝にとどめ、他の部隊をとなり村に駐屯させた。ところが二日後、かつて老爺嶺で病む将軍を護衛したことのある二人の隊員が道ばたで偶然に趙老人を見つけた。かれらはただちに将軍に報告した。

金日成将軍は非常によろこび、いそいで肉を買いもとめて隊員にもたせ、趙老人の家をたずねていった。家には趙老人と病床にふせているかれの次男がいた。

「あ！　金隊長だ」

「おじいさん！」

将軍は、家のなかからつんのめりそうになりながらかけだしてくる趙老人をしっかりとだきしめた。この日、将軍は趙老人と庭にしいたござにすわり、親しく語りあった。そして、かれの息子の枕もとにそっと金をおいて宿舎に帰った。治療費のたしにという心づかいであった。

将軍は翌日、老黒山戦闘でろ獲した白馬を一頭、趙老人に贈った。馬をひいていった二人の隊員は老人につぎのように話した。

「この馬は老黒山戦闘のときにぶんどったものですが、司令官同志からお宅のみなさんへの贈り物です。ちょっとやせていますが、ふとらせて引き臼や野良仕事につかってくださいという司令官同志のおことばです」

将軍が贈り物とした白馬はその後、趙老人一家の生計をつないでいくうえで大きなたすけとなった。

趙老人はしばらく野良仕事にこの馬をつかっていたが、敵の目をおそれて馬を牛ととりかえ、年がかわるとまた別

の牛とかえて野良仕事にはげんだ。

「わしらは金日成将軍さまのおかげで暮らしていけるのだ!」

趙老人はいつも家族にこう話すのだった。

しかし将軍は、これで決してかれらの恩にむくいたとは思っていなかった。

将軍は解放後、満州の各地に人を派遣して趙老人一家の消息をたずね、すでに六十の坂をこえていた崔日華さんをさがしだしてピョンヤンにまねいた。あのときの若い嫁はすでに年老いていたが、いまも将軍の厚い配慮をうけながら、景色の美しい大同江のほとりの住居で、その息子や嫁たちとともに幸福な余生をおくっている。

このかぎりなく大きな愛、そのなかにひめられている無限の力は、なにをもってしてもはかることはできないであろう。

第五章　革命の危機をのりこえて

1　祖国と民族の運命を一身にになない

一九三五年のはじめ、金日成将軍が寧安県方面からふたたび汪清遊撃根拠地に帰ってみると、革命の隊伍はきわめて危険な状態にさらされていた。すなわち東満州の革命組織とその隊列のなかで、敵のスパイ組織「民生団」に反対する複雑で深刻なたたかいがつづいていたからである。

日本の侵略者たちは満州占領後、炎のように燃えひろがる朝鮮人民の革命闘争をくいとめるため、ソウルの『毎日申報』副社長朴錫胤(パクソクユン)をはじめとする特務分子や手先どもを糾合し、一九三二年二月にいわゆる「民生団」なるものをでっちあげた。またかれらはこれと前後して、自分たちの手先となった全盛鎬(ジョンソンホ)ら朝鮮の民族改良主義者らをあやつり、「延辺自治促進会」と称する反動団体をつくりあげた。そしてこれを「民生団」と合流させた。

「民生団」は、間島における「朝鮮人自治」をうんぬんしながら人民大衆の反日気勢をそぐ一方、革命組織を内部から瓦解させることをねらう日本帝国主義のスパイ団体であった。日本の侵略者たちは、東満州各地に住む朝鮮人民のなかに「民生団」を浸透させようと卑劣かつ悪らつな手法をもちいてはばからなかった。

しかし東満州の共産主義者たちはいち早くその正体を見ぬき、これに反対するたたかいに人びとをふるいたたせた。一九三二年の春慌暴動に決起した革命的な大衆は、「日本帝国主義の手先――『民生団』を撲滅せよ！」という

スローガンをかかげてはげしくたたかった。

反「民生団」闘争によって、その反動的な正体と悪らつな策動が全面的にばくろされるや、敵は一九三二年七月にこれを解体し、あらためて「協助会」なるものをでっちあげ、「民生団」と同じような謀略をつづけた。

日本の侵略者たちは民族改良主義者や革命の裏切りものなどの手先をかき集め、これを革命組織に潜入させて破壊活動をおこなった。かれらは革命組織のなかで弱味のあるものをおどかしては「民生団」にひきいれる一方、堅実な共産主義者をさまざまな方法で中傷し、大衆のなかに悲観的な空気をかもしだすなど、逆宣伝と謀略策動を執拗につづけた。そしてかれらは、「民生団員」が共産主義隊列のなかに数多くひそんでいるかのようなデマを流し、革命組織のなかに不信感と恐怖心を生みださせようと画策した。

しかし実際には、「民生団」がでっちあげられるとすぐ反「民生団」闘争がくりひろげられたため、革命隊列のなかに「民生団」が深く根をはることはできなかったし、またそのような時間的な余裕もなかった。

ところが一時的には、日本帝国主義の破壊策動による影響が予想外に大きく、革命隊列の内部では大きな混乱がまきおこった。なぜなら、日本帝国主義の手先に転落した一部の分派主義者たちが「民生団」の破壊謀略策動に手をかし、反「民生団」闘争を自分たちの分派活動に利用して事態をさらに悪化させたからである。分派分子らはありとあらゆるでっちあげをおこない、自分たちの気にくわない堅実な共産主義者に「民生団」のレッテルをはったばかりでなく、かれらを手あたりしだいに銃殺する蛮行まであえてした。まさにこれは、日本帝国主義がのぞんでやまないところだった。日本の侵略者たちはこの機に乗じ、革命隊伍のなかに潜入していた手先どもを総動員して分派分子をあおる一方、あらゆる手段をろうしてかれらを買収した。

分派主義者たちの悪らつさは、当時、和龍県の革命組織の責任幹部であった金日煥(キムイルファン)同志虐殺事件にあますところなくあらわれている。

金日煥同志は、「民生団」の嫌疑をうけて逮捕されることをまえもって知っていた。しかし堅実な闘士であったかれは、自分の命が惜しいからといって決して卑劣な行動はとらなかった。悲壮な覚悟をきめたかれは、逮捕されてからも分派分子の策動に反対してたたかった。

分派分子らは大衆裁判をひらいて、「こいつは『民生団』の頭目だから告白しないんだ」ときめつけ、でたらめな嫌疑資料なるものを読みあげた。金日煥同志はこれに屈することなく、かれらがでっちあげた「罪状」に反論し、逆に日本帝国主義の手先になりさがったかれら分派分子の罪悪をのこらずばくろした。あわてた分派主義者たちは、ただちに死刑をいいわたした。しかしこれを見ていた根拠地の人びとはむろん、救国軍の兵士まで武器をふりかざしながら抗議した。大衆の圧力におそれをなした分派分子らは、やむをえず金日煥同志にたいする「死刑宣告をとりけす」と宣言し、他へ移送するかのように見せかけながら卑劣にもかれを暗殺してしまった。

このように、抗日遊撃隊が組織された当初から革命闘争に参加し、勇敢にたたかってきた共産主義者たちが、悪らつな分派分子どもの謀略によって無残な最後をとげた例は少なくなかった。しかし「民生団」のぬれぎぬを着せられた堅実な共産主義者たちは最後まで「朝鮮独立万歳！」、「朝鮮革命勝利万歳！」と叫んで死んでいった。

こうして、反「民生団」闘争を形容できないほどの罪悪と血なまぐさいものにねじまげたものは、他国の革命運動にたいして干渉と排斥をこととする大国主義者たちの民族排他的な極左冒険主義の結果であった。

偏狭で民族排他的な毒素にこりかたまっていたかれらは、分派主義者のいうことをそのままうのみにし、革命を重大な危機におとしいれた。思想的にかたわであるばかりでなく政治的にもおろかであったかれらは、分派主義者たちが「民生団員」とみなすものにたいして、なんらの調査も確認もおこなわず即座に銃殺を強行した。さらにかれらは、東満州各県で「粛反工作委員会」なるものをつくり、「粛反工作」の「成績」をあげるために、それを競争するようにまでしむけた。そして反「民生団」闘争を、いよいよ危険きわまりない袋小路へと追いやったのである。

それと同時に、偏狭で民族排他的な大国主義者たちは幹部問題までもちだし、朝鮮人革命家たちを理由もなく排斥して幹部の地位から追いおとそうとした。こうした策動は反「民生団」闘争とむすびついて革命隊列をいっそう混乱と破壊の危機におとしいれた。じつに、民族排他的な大国主義と分派主義が革命におよぼした害毒は身の毛がよだつほどであった。

偏狭な民族排他主義者と分派主義者の結託は、朝鮮の共産主義運動を内部から破壊しようとする日本帝国主義の謀略策動をたすける結果となった。それは、かれらの極秘文書がもっともよく証明している。

「民生団は、共産主義運動の鎮圧を主要目的とし、朝鮮人をその構成員とした。……共産主義撲滅運動を開始したが、実際活動としては別に見るべきものはなかった。しかしながら、民生団の成立が共産主義陣営内におよぼした影響はじつに大であった。……派閥問題などは共産主義陣営内に潜入する民生団員の活動と結合して考えられ、疑心暗鬼を生じて……大恐慌をきたした。そのため、民生団の解体、協助会の成立後においても民生団の名はかかる反共産主義組織の代名詞となったのである」(『満州共産匪の研究』第一集、「満州国」軍政部顧問部編、一九三六年、一一三ページ)。

こうして、多年にわたる武装闘争の炎のなかで育った朝鮮の共産主義隊列は大きな打撃をうけ、きわめて危険な状態におちいった。したがって反「民生団」闘争を正しく導くかいなかは、朝鮮革命の運命を左右する鍵というべきものであった。

偏狭な民族排他主義者と分派主義者が結託し、朝鮮革命を危機におとしいれている条件のもとで、革命の主体をしっかりと堅持してすすむということはきわめて重要な問題であった。すなわち、きびしく緊迫した情勢は、一刻も早く日本帝国主義の謀略と極左冒険主義をうちくだき、危機に直面した朝鮮革命を救いだすよう要求していたのである。

しかし、この死活の問題を根本的に解決できる人は、金日成将軍をおいてほかにはいなかった。だれもが将軍の帰りを待ちあぐんでいた。まさにこうしたとき、将軍は幾重にもはりめぐらされた敵の包囲陣を突破し、汪清遊撃根拠地に帰ってきたのである。

人びとの視線はいっせいに金日成将軍にそそがれた。将軍は革命の危機を打開するため、一身をなげだす決意をかためてたたかいの先頭にたった。

民族排他主義者たちは、東満州で革命運動にたずさわる朝鮮の共産主義者の八〇ないし九〇パーセントが「民生団員」であるときめつけた。

将軍はこれに断固反対した。将軍は、「わたしがひきいている部隊のなかには、問題になるようなものは一人もいない。すべて信頼できるものばかりである」とのべたあと、「科学的な立場から見ても、どんな物体であれ、そのなかにある新しいものと古いものとのたたかいにおいて、本来のものとは異なる要素が八〇パーセントも占めているならば、それはすでに本来の物体としてそのまま存在することは不可能である」と指摘し、もし遊撃隊の八〇ないし九〇パーセントがほんとうに「民生団員」であるならば、それはすでに遊撃隊ではなく、敵であるはずだと反駁した。

将軍のこの整然とした論理のまえに、民族排他主義者たちはかえすことばがなかった。しかしかれらは、自分たちの無責任な発言をあらためようとはしなかった。

その後、汪清県の大荒𡋽(タホンウェ)会議（一九三五年二月末～三月初）においても、反「民生団」闘争についてするどく意見が対立した。

会議で多数を占めた偏狭な民族排他主義者たちは、東満州における「民生団」発生の原因は、朝鮮の民族主義者と共産主義者の派閥あらそいによるものだと主張した。そして、かつて朝鮮国内で民族主義運動に参加したか、あ

るいは一九三〇年以前に革命運動に参加したものは、すべて「民生団」ないしはそれとかんれんしたものであり、東満州の朝鮮人共産主義者の八〇ないし九〇パーセントは「民生団」に参加したか、あるいはそれとつながりのある人間だときめつけた。

　さらにかれらは、「民生団」問題とかんれんして幹部構成もあらためる必要があるとさえ主張した。かれらは当時、大多数が朝鮮人共産主義者によって構成されていた東満州革命組織の幹部陣営を、すべて中国人幹部とかえなければならないと主張したのである。

　これは、朝鮮革命と朝鮮人共産主義者にたいする重大な挑発であった。会議は緊迫し、出席した幹部たちは、だれも自分の見解を自由にのべることができなかった。もし民族排他主義者たちの主張に反対しようものなら即座に「民生団」のレッテルがはられ、処断されることが明らかだったからである。だれもが胸のうちでは憤まんをいだきながらも発言することはできなかった。死をおそれず、真理をまげず、一命を賭して朝鮮革命を救おうという確固とした信念と勇気、不屈の気概と勇断なくしては反対意見をのべることができない空気であった。

　しかし、いかに殺伐としたふんいきであっても、朝鮮革命を一身にになった将軍の闘志をくじくことはできなかった。

　憤然とたちあがった将軍は、かれらの誤った主張をことごとく論駁し、それを是正するための対策を提起した。将軍はまず、「民生団」発生の根源について明確な回答をあたえた。「民生団」が発生したのは、革命組織を内部から瓦解させ、革命運動を弾圧しようと血まなこになっている日本帝国主義者とその手先どものでっちあげに起因するものだと指摘した将軍は、つぎのようにつづけた。

　「かつて民族主義運動に参加したからといって、一律的に派閥分子とみなすことはできない。そのなかには、洪範図（一九〇七年、「救国安民」のスローガンをかかげて反日義兵闘争に決起した勇敢な愛国者。日本の「討伐隊」である宮部中

隊をせん滅させて勇名をはせた）をはじめ、祖国の独立のため良心的にたたかったりっぱな人たちも多い。また民族主義者たちがかつてマルクス主義を知らなかったにしても、いまからマルクス主義を正確に把握し、自己を改造して共産主義運動に献身するならば、それはいいことであり、かれらをかつて民族主義者だったからというだけで責めてはならない。過去に民族主義運動に参加したからといってすべてが『民生団』であるはずはないし、日本帝国主義の手先だときめつけることもできない。分派主義者にたいする問題についても、これと同じことがいえる。われわれは朝鮮共産主義運動に莫大な害毒をおよぼした分派主義者を憎んでおり、当然かれらに反対しなければならない。しかし一九二〇年代の朝鮮の共産主義運動においても、分派主義者の大部分は指導層にいただけである。だから一九二〇年代の朝鮮共産主義者たちがある種の派閥に属していたからといって、その全部が分派分子であるとはいえない。したがって、過去にある種の派閥に属していたからといってかれらすべてを『民生団』ときめつけるならば、われわれの革命隊伍は大きな損失をこうむるだろう。同志をたがいに信じ、実際活動をつうじて点検しあうことが必要なのだ。過去に欠陥があったからといって、いまも悪いだろうと思ったり、やみくもに『民生団』とむすびつけて色眼鏡で見るのは共産主義者のとるべき態度ではない。もし、東満州で活動している朝鮮共産主義者の八〇ないし九〇パーセントが『民生団』であるならば、三、四年間も遊撃根拠地で、きびしい寒さのなかを家もなく、着るものもなく、たべるものさえなくてどうしてたえることができただろうか。これは三つや四つの子どもにも理解できる問題ではないか。また、もし八〇ないし九〇パーセントが『民生団』であるとするならば、どうしてわれわれがここで会議をひらくことができよう。もし、大荒崴の周囲を守っている軍隊の八〇ないし九〇パーセントはともかく、その十分の一の八ないし九パーセントだけが『民生団』であったとしても、われわれは安心して、ここで会議をひらくことも休むこともできないはずだ。われわれは、『民生団』のぬれぎぬを着せられ犠牲となった多くの同志たちが、たとえ死ぬようなことがあっても敵には屈服しないという高潔な精神を数多く見せて

くれたのをおぼえている。『民生団』の烙印をおされて犠牲となりながらも、『共産党万歳！』、『朝鮮独立万歳！』、「朝・中両国人民の革命勝利万歳！』と叫ぶのをみんなはなんども目撃したはずである。これらの人びとが、はたして『民生団』であるといえるだろうか！……」

将軍の明確な分析とするどい反問には、だれ一人こたえることができなかった。偏狭な民族排他主義者と分派主義者たちも冷や汗をかいた。将軍はつづけて、かれらの反「民生団」闘争における極左的な誤りが、結局は日本帝国主義を利することになると批判し、この重大な誤りをすみやかに是正しなければならないと強く主張した。

将軍のマルクス・レーニン主義にたいする深い造詣と、歴史と現実にたいする明確な分析にもとづく理路整然とした発言には、多数を占めていた偏狭な民族排他主義者たちも正面からたちむかうことができなかった。ただ一部の連中が理屈にもならないことばをならべたててかたくなに意地をはるだけだった。

絶対多数の人びとを相手に、ただ一人で真理を擁護し、真正面から激論をたたかわすということは、決してなまやさしいことではなかった。しかし将軍は、十日間にわたる会議で数十回もたちあがり、最後まで整然とした論理で相手をきびしく批判した。

このように、将軍の原則的な思想闘争は、その正しさのためにかれらの心胆を寒からしめた。かれらは結局、将軍には反駁できなかった。将軍のゆるぎない威信と革命闘争における潔白さにたいして、だれもいいがかりをつけることができなかった。かれら自身も、将軍が毓文中学校時代の共青活動をはじめとする革命運動の権威ある指導者であり、いかなる派閥にも加担した事実がないことをよく知っていた。わけても抗日遊撃隊の創建者として、多年にわたる武装闘争で鍛練された強力な革命軍をひきいる将軍に、見さかいなくたちむかうことはできなかったのである。

やがて偏狭な民族排他主義者たちのみにくい謀略策動は、将軍の原則的で断固とした闘争によって決定的な打撃

をうけた。

一九三五年の三月下旬におこなわれた汪清県の腰営溝会議において、将軍はふたたび民族排他主義者の悪どい策動に強力な打撃をくわえた。（この会議では、反「民生団」闘争における極左的な誤りを是正する問題に先だち、遊撃根拠地——解放地区の解散問題が討議されたが、この問題についてはあとでのべる）。

将軍は、敵が革命の隊列を分裂させるために手先どもを放ち、さも「民生団」が数多く隊列内に潜入したかのようにさわぎたてながら、共産主義者同士が不信し反目でもって対立するように策動している事実をくりかえし指摘した。そして将軍のこの正当な主張は反「民生団」闘争での誤謬をただし、朝鮮革命のまえにたちはだかる危機をとりのぞくための有力な指針となった。ごう慢で偏狭な民族排他主義者と、かれらの威をかりて狂奔していた分派分子は、これによって決定的な打撃をうけ、そのみにくい正体は大衆の面前であますところなくさらけだされた。

反「民生団」闘争における極左冒険主義を克服するための将軍の断固たるたたかいは、朝鮮革命の主体を確立するための愛国的で原則的な闘争でもあった。

金日成将軍は、徹底的な主体路線である抗日武装闘争路線を提示した初期から、一貫して朝鮮革命の自主的な立場をしっかりと堅持してきた。将軍は抗日武装闘争の過程をつうじて、朝鮮革命の戦略戦術、遊撃闘争の具体的な問題など、複雑で深刻な諸問題を主体的な立場で独創的に切りひらいてきた。

だからこそ将軍は、多年にわたって育てあげてきた朝鮮革命の主体的な力量がかたくなな民族排他主義者と分派分子どもによって破局に追いやられたとき、その危機に真正面から対処し身をもってこれを阻止したのである。

このように、原則的で断固とした将軍のたたかいによって、朝鮮革命の前途にたちはだかった大きな障害はとりのぞかれ、明るい希望がふたたび人びとの胸によみがえってきた。

金日成将軍の名声はいっそう高まった。共産主義者と人民は、真理をまげず、いかなる犠牲をもいとわず、朝鮮

革命を危機から救った将軍にかぎりない尊敬の念をしめした。大荒崴、腰営溝会議の結果をきいた人びとは、胸のなかにつもりにつもった重苦しいものが一時に消え去るのをおぼえた。

「これでたすかった」、「われわれの気持ちを、どうしてあんなによく理解してくださるのだろう！」、「これで、すべてうまくゆくにちがいない」

人びとはこういって感激し、勝利をかたく信じてやまなかった。かれらの胸の底には、朝鮮革命を救ってくれた人であり、偉大な指導者である金日成将軍の姿が深く刻みこまれた。こうして人びとは、英明な指導者金日成将軍をいっそう敬慕するようになったのである。

将軍は人びとに希望と勇気をあたえ、朝鮮革命の前途に光明をもたらしただけでなく、実際の活動をつうじて朝鮮人共産主義者の威信と権威を磐石のようにうちかためた。

腰営溝会議ののちも反「民生団」闘争における極左的偏向はしばらくつづいた。会議では極左冒険主義が思想的にも理論的にも粉砕されはしたが、もともとその根が深かったために、かんたんには一掃されなかった。

偏狭な民族排他主義者たちは、老黒山戦闘の勝利を祝う大会の真っ最中につかいのものをよこし、ある若い隊員が「民生団員」であることを証明する資料がでてきたから、かれをひきわたしてくれと要求してきた。じつにあきれはてたことであった。しかし将軍はこのとき、つぎのようにいってきっぱりとことわった。

「その同志は、老黒山戦闘で命を惜しまず勇敢に敵とたたかった。このような同志が『民生団』であるはずがない。わたしがひきいている隊員は、わたしが一番よく知っている。わたしは、かれが『民生団』でないことを確信している。だから、かれをひきわたすことは絶対にできない！」

将軍は、反「民生団」闘争での極左冒険主義とその弊害を一掃するたたかいを、武装隊伍の統一団結と戦闘力を強化する方向でおしすすめた。ここで将軍がつねに堅持した原則は、革命の同志をあくまでも信じるということで

あった。「民生団」問題で疑惑と不信がひろがっていたときだけに、将軍は同志をかたく信じるという革命家の信義をなによりも重要視し、隊員たちを実際の闘争によって点検するという立場を堅持した。

将軍のひきいる部隊内に「民生団」の嫌疑をかけられた隊員がいた。かれは忠実な隊員であった。しかし、その隊員が将軍に危害をくわえようとしているという嫌疑をかけられたのである。だが将軍は、そういううわさをそのまま信じなかった。そこで将軍は、嫌疑をかけられた隊員に銃をあたえ、敵地にはいって日本帝国主義の手先をとらえてくるように指示した。そのときかれは、もし任務がうまく遂行できなければ、貴重な銃まで失ってしまうので銃をもたずにいきたいと申しでたが、将軍はそれをききいれなかった。

将軍の指示にしたがい銃をたずさえて出発したその隊員は、途中で銃を土のなかにうめておき、素手で敵地にのりこんでその手先をとらえてきた。また将軍がかれに、鉄橋破壊のための爆発物をしかける任務をあたえたときでも、その隊員はなんのためらいもなく困難な任務をひきうけた。さらにその後、突撃隊として苛烈な戦闘に派遣されたときも、かれは重傷を負いながら最後まで勇敢にたたかった。

将軍はこのような過程をつうじて、その隊員が「民生団」や破壊謀略分子でないことをいっそう確信し、かれを「民生団」にしたてようとした極左分子たちの強硬な主張をしりぞけ、かれを危険から救ったのである。

将軍は、みずからそのように行動したばかりでなく、隊員たちにも革命の同志をかたく信じるように教育した。あるとき、司令部にチョルグおばさんとよばれる炊事隊員が配置されてきた。

そのため、「夫が『民生団員』だといわれ、彼女自身も大衆裁判にかけられたのに、どうして司令部つきの炊事隊員になれたんだろう?」という疑問が、いつのまにか部隊内にひろまった。「どうしたものだろう。司令官同志に申しあげれば、そのままにして教育しなさいといわれるにきまってるし……他のことならいざ知らず、司令官同志の身辺に、そんな人をおいとくわけにもいかんし……」と考えあぐねた司令部勤務の隊員たちは、将軍が戦闘にで

ているあいだにチョルグおばさんを別の勤務に移してしまった。

数日後、将軍が根拠地に帰ってきた。そして戦利品を司令部勤務の隊員にわたすとき、一着分の布地を別に手わたしながらこういった。

「チョルグおばさんに新しい服をつくってあげなさい。年をとっても着物がつぎはぎだらけなので、人まえにでるのが恥かしいらしい。……これまでなんだかんだと悪い連中にいじめられてきたので、いじけているのかも知れない。……それだけに、かえって自分の姉や母のように親しくし、よくめんどうをみてあげなければならないのだ」

同志にたいするかぎりない愛と信頼にあふれた将軍のことばをきいて、司令部勤務の隊員たちは、なんと軽率なことをしてしまったのかと深くうなだれるばかりだった。将軍が革命の同志を信じ、愛し、たすけあわなければならないとあれほど強調してきたのに、とりかえしのつかないことをしてしまったと思ったかれらは、チョルグおばさんを移動させたことを率直に報告した。それを最後まできいた将軍は、つぎのようにさとした。

「わたしもチョルグおばさんがどんな人なのか、なにからなにまで知っているわけではない。わたしはただ、彼女が革命のために忠実にたたかおうとしているその意志を信じているだけなのだ。……革命家であればなおのこと、人間にたいする工作をりっぱにおこなわなければならない。どんな人にたいしても欠点から先にさがしたり、先入観をもってたいしたり、悪い点だけをさぐりだしたりするのが、警戒心をもって活動しているということには決してならない。われわれがことごとく人をうたがい、あらさがしばかりしていれば、最後には自分自身をもうたがう破目になるだろう。こうなれば革命はできない。だれもかれもが怪しく、だれもかれもが危険に見えて、みんな信じることができなくなれば、だれを歩哨にたてても安心して眠ることはできないし、他人のつくった食事もたべられなくなる。こうなれば革命はおろか、息をすることも満足にできなくなるだろう。疑心暗鬼が高ずれば病になるとは、このことをいうのだ。かりに彼女が『民生団』か、あるいはその影響をうけた人だとしよう。われわれ共産

主義者には、はたしてそれに対処するだけの力もなく、またそれをなおすこともできないのだろうか？……表面にあらわれた欠点だけをさぐったり、あとをつけまわしたりしていては内部からうんでいくのがわからなくなる。人間は中身が大切なのだから、心のなかにどんな病が巣くっているかを見きわめてこそ、はじめてそれをなおすことができるのだ。日本帝国主義者よりも味方を憎む結果をまねいたり、小さい傷をなおそうとして命をそこねるようなやぶ医者になってはならない。一人をなおして十人をただし、百人、千人に影響をあたえてわれわれの味方にすることが偉大な変革をおこそうとする共産主義者の工作方法であり、正しい態度なのである……」

将軍はこういって、チョルグおばさんをふたたび司令部で働くように指示した。

反「民生団」闘争の悪影響が、まだ完全に消えていない一九三六年の春のことだった。

将軍は北満州から鴨緑江沿岸の白頭山の西南部にむかう途中、撫松であらたに一個師団を編成した。そして当時、撫松にいた師団から一個連隊を切りはなし、新しい師団に編入させることになった。ところがその師団の政治主任は、優秀な中隊のメンバーがみんなひきぬかれてしまったため、いまのこっている百余名はすべて「民生団」の嫌疑がかかっているものたちで、かれらには弾丸も三発ずつしかあたえておらず、戦闘のときは隊列からのぞかなければならない困りものばかりだといった。

しかし将軍は、その「困りもの」たちをなんのためらいもなく、そっくり新しい師団に編入した。これにおどろいた政治主任は、分厚い「民生団」嫌疑者関係の書類を将軍のまえにさしだし、長期間にわたって徹底的に検討してみないと、このものたちを戦闘隊列にくわえるのは危険であると深刻な表情で意見をはさんだ。だが、将軍は百余名の隊員をよろこんでむかえいれ会議をひらいた。

隊員たちは口ぐちに、ぬれぎぬを着せられた自分たちの立場を訴えた。将軍はかれらの心のなかにわだかまる不満を一つ一つきいたあと、つぎのような結論をくだした。

「みんなをいま、だれが『民生団』で、だれがそうでないときめることはむずかしい。なぜなら、それを証明できる人はだれもいないからである。しかしわたしがここで断言できることは、この場には『民生団』は一人もいないということだ。それはみんなが、自分は『民生団』ではないといっているからである。かつて、それにくわわっていた人がいるかも知れないが、その人は『民生団』にはいらなかった人と同じようにきょうから再出発すればよいし、くわわったことのない人は、もともと『民生団』とは関係がなかったのに理由のないうたがいをかけられたのだから論外である。そこで、いままでに加入したことのある人も加入したことのない人も、きょうからはみんな白紙にかえって再出発することが大切なのだ。だから過去のことは今後いっさい問題にしない。……『陳述書』だとか、『調査書』だとか、『証拠文書』だとかいうこの書類よりも、わたしは革命の道でたたかおうというみんなの決意の方を信じる」

この話をきいていた隊員たちは、ちょうど、荒れ狂う海の真ったただなかで波にほんろうされ、絶望していたところを救助された漁師のように、しばらくはことばもなく、ほおをつたう涙をぬぐおうともしなかった。

将軍は書類づつみを隊員たちのまえにひろげた。みんなの視線はいっせいにその書類づつみにそそがれたが、もうこの書類づつみをおそれるものはだれもいなかった。ほんの少しまえまでは、悪夢のようにかれらを苦しめてきたその書類が、いま将軍の目のまえで正義の法廷になげだされて審判を待つ、けがらわしい紙くずとなってしまったのである。

将軍はためらいもなく、その書類に火をつけた。こうして、革命とその戦士たちを傷つけようとしていた民族排他主義者たちの毒素は、炎のなかでひとにぎりの灰となっていった。

燃えあがる炎をじっと見つめていた隊員たちのなかからは、感激にむせぶ泣き声がもれてきた。いわれのない虐待と脅迫をうけながら、だれに訴えることもできなかった隊員たちは、革命の同志にたいする将軍のひろく深い愛

と無限の信頼に、こみあげてくる涙をおさえることができなかったのである。
その後、かれらのなかからは一人の落伍者もでなかった。かれらは将軍の忠実な戦士として、うって一丸となって将軍のまわりにかたく団結し、祖国の解放と革命の勝利のために最後まで身をささげてたたかった。
敵の離間策動と反「民生団」闘争での極左排他主義的な策動によってひきおこされた同志相互間の不信、離間、あつれきなどの弊害を一掃し、健全で原則的な団結を回復する過程で生まれたエピソードは数かぎりない。
このように、将軍の原則的な闘争によって偏狭な民族排他主義者たちの極左冒険主義はうちやぶられ、その弊害も一掃された。そして同時に、ながいあいだ朝鮮共産主義運動の癌となっていた分派主義的策動も、将軍のひきいる抗日武装遊撃闘争の隊列内では完全に一掃されてしまった。こうして朝鮮革命はきびしい試練をのりこえ、発展の一路をめざしてつきすすむようになったのである。
じつに、反「民生団」闘争での極左的な誤りを克服するたたかいは、朝鮮革命で主体を堅持し、その発展にひろびろとした大道を切りひらいた歴史的な契機となった。将軍の献身的で原則的な闘争がなかったならば、朝鮮革命の命脈はとだえ、長期にわたる抗日武装闘争の輝かしい勝利と栄光は期待することができなかったであろう。

2　偽満軍の瓦解に成功

大荒崴遊撃根拠地の人民革命政府に、陳（チェン）連長（中国語で連長は中隊長という意味）とよばれている人がいた。かれはもともと偽満軍の中隊長をしていたが、遊撃隊の影響をうけて革命の側にやってきた人であった。
ところがその後、しばらくのあいだ陳連長は憂うつな気分からぬけだすことができなかった。共産主義者がほんとうに自分を信じてくれるのだろうかとうたがっていたからである。

かれは自分の過去をふりかえり、偽満軍の将校として遊撃隊の「討伐」にまで動員されたことを考えると、とうてい許してもらえそうもないと考えていた。ながいあいだ敵の悪宣伝にまどわされ、革命の真理も、共産主義者の真の姿もよく知っていないかれにとって、これは無理からぬことでもあった。

かれは同志たちのなに気ない冗談や、心のこもった助言すらまともに耳をかたむけることができず、それが自分をためすものではないかとうたがったりした。そのうえ反「民生団」闘争におけるさまざまな偏向が、かれをいっそう窮地に追いやった。

「陳連長はどうしても信じられない」とか、「敵の将校であったかれと親しくするものは怪しい」とかいうささやきもきかれた。そのためとうとうかれは、自分がみんなから見すてられたと思いはじめた。

かれの苦しみをだれよりも深く察していたのは将軍であった。

一九三四年のはじめ、大荒葳根拠地をたずねた将軍は、陳連長を中傷するものをきつくとがめて人民革命政府の幹部たちにつぎのように語った。

「もちろん陳連長がどんな人間なのか、まだよくわからない人もいるだろう。しかし、かれが日本帝国主義に反対してたたかおうとわれわれをたずねてきた以上、われわれはまず、かれを信じなければならない。そしてかれが偽満軍の恥ずべき生活をふり切ってやってきたときの決心どおり、祖国と人民のためにりっぱにたたかうよう、かれを積極的にたすけなければならない。革命のためにたたかおうとやってきた人間を大胆に信ぜず、心からかれをむかえようとしないのは共産主義者のとるべき態度ではない。われわれはかれの手をとり、あくまでもたたかっていかなければならないのだ」

将軍は直接、陳連長と会ってかれをはげました。そしてその後、将軍はかれを指揮部に配置して生活をともにしながら教育することにした。将軍は陳連長を大胆に信じ、ためらうことなく重要な戦闘任務をあたえ、闘争をつう

じてかれをきたえた。

ある日、将軍が南蛤蟆塘（ナムハマタン）にいる馬窟令（マクルリョン）部隊を攻撃する準備をととのえていたときだった。陳連長は、もっとも困難で骨のおれる任務を自分にあたえてほしいと将軍にねがいでた。

将軍は陳連長の申しでを快くうけいれ、隊員を一人つれて南蛤蟆塘に潜入するよう指示した。目的地についたかれは、将軍の厚い信任にこたえるため敵情を綿密にしらべあげて報告した。

数日後かれは、ふたたび将軍の指示をうけ馬窟令部隊内に潜入して工作をすることになった。しばらくして、かれは兵舎内の一部の兵士を完全に味方にひきいれた。そして遊撃隊が馬窟令部隊を攻撃する日の夜、かれはたくみな方法でその部隊の兵士たちをおさえ、たたかいを勝利へと導いた。こうして悪質きわまりない馬窟令部隊は、またたくまに武装を解除されてしまった。

遊撃隊員たちは勝利のよろこびにわき、心から陳連長を祝福した。かれは目に涙をうかべ、「金司令のおかげです。将軍がわたしを信じてくれたからこそ、わたしは大胆になれたのです」と語った。

きのうまで偽満軍の中隊長であったかれは、このようにしてきたえられ、やがてりっぱな共産主義者に成長したが、これは将軍が偽満軍を獲得し、革命の側にひきいれた一つの実例である。

敵軍から革命の側に移り、将軍と遊撃隊員の努力によって共産主義者となった人びとはきわめて多い。将軍は武装闘争の初期から、敵軍を内部から瓦解させ、かれらを革命の側にひきいれることに深い関心をはらっていた。

将軍は偽満軍兵士の絶対多数が貧農やその子弟であるという事実と、数多くの貧農や雇農からなる兵士大衆を革命の側にひきいれる問題を軽視してはならないといましめ、敵軍の瓦解工作の重要性について要旨つぎのようにのべた。

「銃だけで敵をうちやぶることはできない。すべての朝・中両国人民はもちろん、敵軍内の兵士大衆までも、

朝・中両国人民の不倶戴天の敵日本帝国主義にたいする憎悪と抗日救国思想をもつように扇動し、かれらが抗日救国の偉業に総決起するよう、その態勢をととのえることがもっとも重要である。こうして敵軍を内部から瓦解させ、かれらをわれわれの側につかせなければならない。この活動は反日民族解放闘争において、きわめて重要な位置を占めている」

また将軍は、敵軍をどのように瓦解させるべきかについての実際的な方法をわかりやすく隊員たちに教えた。

将軍がしめした方針にしたがい、遊撃隊では勇敢で知略にたけた隊員たちを選抜し、大胆に敵軍内に潜入させた。また敵軍内の労働者、農民、インテリ出身の兵士や下士官に手紙をだしたり、新聞やポスター、あるいは革命的な内容をもつ書物などをおくったりした。ときには下士官と兵士たちの家族や親戚、親友などをつうじて宣伝工作をおこなうこともあった。

この活動でも将軍はみずから模範をしめした。

一九三六年の旧正月のはじめ、将軍のひきいる部隊が額穆県のある部落に駐屯していたときのことであった。ある日、一人の隊員が歩哨にたっているところへ、十四、五名からなる偽満軍の騎馬隊が、はなやかにかざりたてた一台の馬ぞりを護衛しながら雪煙をたてて走ってきた。

「どこの部隊だ!」

歩哨隊員は中国語で誰何（すいか）した。不意をつかれて狼狽したかれらは、馬ぞりをほうりだしたまま一目散に逃げだした。歩哨隊員は逃げおくれた二人の騎兵をつかまえ、馬ぞりをとめさせた。馬ぞりには美しく着かざった三十前後の中国婦人がのっていたが、そのそばには高価な絹や食糧品がいっぱいつんであった。彼女は近くの町に駐屯している偽満軍連隊長の夫人で、騎兵隊の護衛をうけながら実家の母親に会いにいく途中であった。

その中国婦人と二人の兵士は将軍の指揮部に案内されたが、かれらは最初から真っ青になってふるえていた。

「寒い日ですから、ここでからだをあたためなさい」

将軍は、部屋にはいってきたかれらを親切にむかえた。しかしかれらの顔からは、恐怖の色がなかなか消えなかった。これを見た将軍は、遊撃隊は決してむやみに人を傷つけたりはしないのだといいながら、じゅんじゅんと話してきかせた。将軍はかれらの日常生活についてたずねたあと、朝鮮人も中国人も日本帝国主義の圧制のもとで苦しんでいる人民である、したがってわれわれ朝・中両国人民はたがいに手をとり、朝鮮と中国から日本帝国主義を追いだし、国をとりもどして幸福に暮らさなければならないと、かんでふくめるようにいってきかせた。

はじめは恐怖のためふるえるばかりで、ろくに返事もできなかったその婦人は、気さくでものやわらかな将軍の態度と、理にかなった話に安心したのか、しだいにおちつきをとりもどして自分の考えを率直にうちあけるようになった。将軍は話をつづけた。

「あなたの夫は『満州国軍』の連隊長をしているそうですが、なぜわれわれとたたかわなければならないのか、また、なんのために日本帝国主義の犬になっているのか理解できません。祖国と民族をうらぎっているあなたの夫があわれでならない」

顔を赤らめてきいていた婦人は、やがて気を静めると声をつまらせながら、遊撃隊が祖国と人民のためにたたかう真の人民の軍隊であるということがよくわかった、これからは力のかぎり祖国と民族のために働くよう夫にすすめる、と語った。新しい決意をしめす婦人の表情はきわめて真剣であった。

将軍は婦人に、母親をよくいたわってあげるようにといい、二人の兵士に武器をかえしながら夫人を安全におくるようにといいつけた。

将軍と別れた偽満軍連隊長夫人は実家にはゆかず、そのまま夫のもとへ走った。そしてその途中で彼女は、偽満軍の騎兵隊をひきつれた夫と出会った。かれは逃げ帰った兵士から妻が逮捕されたときき、騎兵隊をかきあつめて

大いそぎでかけつけるところだった。死んだものとばかり思っていた妻と出会ったときのかれのおどろきは、なみたいていのものではなかった。馬からとびおりたかれは、妻がけが一つしていないばかりか馬ぞりもそのままなのを見て、かえっていぶかしく思った。

「これはいったい、どうしたというのだ」

「あなたの部下が、わたしのことはかまわず逃げだしてしまったので、遊撃隊がかえって保護してくれたのですわ」

婦人は夫にこういってから、遊撃隊は日本帝国主義や「満州国軍」の宣伝とはまったく正反対の非常にりっぱな軍隊だということ、また、名前をきいただけでも日満軍警がふるえあがる金日成将軍からお茶までいれてもらい、親切なもてなしをうけたことなどを誇らしげに語った。そして、将軍がきかせてくれた感銘深い話や自分が遊撃隊で見たりきいたりしたことを一つのこらず話した。

すっかり感服した連隊長は、「おまえを傷つけなかったことからしても、その部隊がりっぱな軍隊だということがよくわかる」と語った。

数日後、金日成将軍はその偽満軍連隊長から一通の手紙をうけとった。手紙には、これまでの自分は遊撃隊を「土匪」あつかいしていたが、まったくそうでないことがよくわかった、自分も今後は遊撃隊に協力するつもりであるということなどが書かれていた。実際それ以来、この偽満軍連隊は遊撃隊とたたかわず、たがいに連係をたもつまでになった。

この事実は、偽満軍将兵や各地の人民のなかにひろくつたわった。将軍の原則的で雅量のある抱擁力は、かぎりなくひろく深いものであった。だからこそ、偽満軍連隊長の胸の奥深くうずもれていた民族的良心をゆさぶり、それをよみがえらせることができたのである。

敵軍瓦解工作は日を追って実をむすんでいった。

ある日、聡明で中国語の達者な秘書処勤務の女子隊員が、敵の不意の襲撃をうけて逮捕されてしまった。敵はこの女子隊員にたいしてむごい拷問をくわえ、遊撃隊の秘密をひきだそうと試みた。しかし彼女は逆に敵の罪状を断罪するだけで、革命の秘密についてはなに一つ語らなかった。

そこでかれらは、この女子隊員を偽満軍の食事係につけて働かせ、自白するまで根気よく待つことにした。しかし彼女は敵に利用されるふりをしながら、将軍の教えどおり敵軍の瓦解工作をはじめた。彼女はあらゆる機会をとらえて兵士を一人ずつ根気よく説得していった。また兵士たちにたのまれると、いつでもかれらの集まりにでかけて反日革命歌をうたったり、踊りをおどったりした。

こうして彼女は、しだいに偽満軍の兵士たちと親密になっていった。そしてとくに、機関銃手二名を完全に味方につけ、かれらに反乱をおこして抗日遊撃隊にくわわるようにしむけた。

大胆で忍耐強い工作の結果、二か月ほどたつと下士官までが彼女を信用するようになった。こうして偽満軍一個中隊は、日本人「指導官」と悪質な将校を処断したのち、機関銃やその他の武器をたずさえてその女子隊員とともに革命の側に移ってきた。

これと前後して各地で同じような事件がつぎつぎにおこった。偽満軍内部の動揺は日ましに深刻になっていった。そして一九三五年八月十五日、偽満軍第二軍区はつぎのような報告書を自分の「政府」におくったのである。

「さいきん満州国軍にたいする金日成の策動は相当に効を奏し、兵士はもちろんのこと一部の満人将校までが動揺しており、機会があれば反乱をおこし、前記の金日成と合流せんとしている。……さる七月五日、樺甸県第五区の国軍兵士三百五十名は、連長（中隊長）など将校八名を殺害し、チェコ製重機関銃二挺、軽機関銃六挺、歩兵銃二百二十挺、拳銃十二挺、弾薬五万一千七百八十六発をもって南方へ逃亡した」

将軍は敵軍を瓦解させる場合、かれらの特徴や具体的な動静をよく把握し、遊撃隊や人民にひそかに同調する偽満軍部隊や警察隊にたいしてはなるべく戦闘をさけ、政治工作によって革命の側につくようにさせなければならないと教えた。また逆に、人民と遊撃隊にたいして執拗に攻撃をしかけてくる悪質な敵軍にたいしては、積極的な方法でこれをせん滅しなければならないとのべた。

さらに将軍は捕虜を優遇して全員おくり帰し、偽満軍との交戦中には「朝・中両国人民は団結して、共同の敵日本帝国主義を打倒しよう！」、「諸君はだれのために命をささげるのか！」、「諸君は中国人ではないか！」、「なぜ日本人の弾よけになろうとするのか！」などのスローガンをスピーカーで流すようにと強調した。

そして、このようにしてこそ、遊撃隊が日本帝国主義とそれに忠実な手先だけを相手にしてたたかう部隊であって、中国人民とはたたかわない真の愛国的な革命軍であるということを偽満軍兵士に教えることができ、捕虜を優遇することによって、偽満軍が遊撃隊と戦闘をまじえた場合でも、たたかうことより捕虜になる方をえらぶようにしむけるのだと将軍はのべた。

このような方法によって将軍は、東寧県の老黒山戦闘をはじめとする数多くの戦闘において大きな成果をおさめた。

一九三五年三月、『東亜日報』の紙上にはつぎのような記事が掲載された。

「駐屯満軍を全員捕虜

二百名の共産軍、大荒溝を襲撃

（会寧支局電報）

さる二十一日午前五時ごろ、満州図寧線大荒溝に武装した共産軍二百名があらわれ、満州軍兵舎を襲撃した。

満州軍百名はこれに応戦して一時は激戦を演じたが、衆寡敵せず、結局満州軍は武装解除されて全員が捕虜となっ

た」

この事件の真相はつぎのとおりであった。

当時、大荒溝には偽満軍一個中隊百余名が駐屯していたが、この部隊内には金日成将軍の敵軍瓦解方針にしたがい、二名の遊撃隊員が下士官としてはいりこみ積極的な工作をつづけていた。その結果、偽満軍兵士のなかにはかなりの動揺があらわれた。しかし日本人「指導官」と反動的な将校の弾圧のために、二名の工作員は容易にその目的を達成することができなかった。

そうしたある日、この中隊が大荒溝から移動するという通報が工作員から遊撃隊にとどいた。遊撃隊はこの機会をのがさず、一個中隊をそのまま革命の側につかせる綿密な計画をたて、一九三五年三月十九日、大荒溝にむかって出発した。百二十余名の隊員は二十一日の明け方、大荒溝に到着すると同時に偽満軍兵舎を包囲し、夜明けを待っていっせいに威嚇射撃をしながらこう叫んだ。

「われわれの敵は諸君ではない。われわれの敵は日本の侵略者たちだ。われわれとともに日本の侵略者に反対してたたかおう!」、「銃をすててわれわれの側につけ!」

生きる道をもとめていた偽満軍の兵士たちは、このよびかけにこたえて二名の代表を遊撃隊指揮部におくってきた。その代表の話によると、兵士の大部分が革命の側につきたいと考えているが、一部にはたたかうことをかたくなに主張する者がいて、たがいに対立しているということであった。

遊撃隊指揮部ではただちに、大胆で智略にとんだ二名の隊員をえらんで敵の兵舎に派遣した。かれらは危険をかえりみず偽満軍の面前で、「抗日遊撃隊の側につき、共同の敵日本帝国主義に反対してたたかおう!」と強く訴えた。これをきいた兵士たちは、ためらうことなく遊撃隊の側についた。義挙に反対していた指揮官たちも兵士たちの圧力に屈し、ついに降伏を認めた。こうして百十五名の偽満軍将兵が一人のこらず革命の側につき、抗日遊撃隊

に編入されたのである。

敵軍瓦解工作での将軍の模範と大荒溝戦闘の勝利をはじめとする数多くの事実は、将軍のしめした敵軍瓦解工作の方法がいかに正当なものであるかを雄弁に物語っている。

そののち、多数の偽満軍兵士がかれらのおかれている民族的境遇と階級的な立場にめざめ、遊撃隊側に個別的ないしは集団的に義挙してきた。たとえば遊撃隊が偽満軍と交戦した場合など、かいらい軍部隊はたたかわずに遊撃隊の捕虜となることが多かった。

ある偽満軍部隊などは日本軍警の目をさけ、気づかれぬように遊撃隊へ武器や弾薬をおくったり、日本軍と偽満軍の作戦上の秘密を教えたりした。また日本軍と偽満軍が共同で遊撃隊を攻撃してくるようなときでも、良心的なかいらい軍は日本軍人の目をごまかし、わざと空砲を射つこともあった。

金日成将軍はこのように、大胆に、しかも手際よく偽満軍を瓦解させ、革命の側につかせることによって日本の侵略軍をいたるところでうちやぶったのである。

3　遠征の壮途

金日成将軍は、汪清県腰営溝会議（一九三五年三月下旬）で、遊撃根拠地――解放地区を解散し、抗日遊撃隊を広大な地域へ進出させ、積極的な攻撃に転ずる新たな軍事戦略的方針を提示した。これは当時の情勢と朝鮮革命の将来の発展にもとづく、きわめて正しい方針であった。

当時、日本帝国主義は革命の隊列を内部から瓦解させようと悪らつな術策をろうする一方、数千数万名の大兵力を動員して各県の遊撃根拠地を包囲し、その周辺に長期にわたって駐屯しながら、遊撃隊を各個撃破しようと執拗

におそいかかっていた。

こうして、組織されてまだ日の浅い抗日遊撃隊は、敵の包囲攻撃から遊撃根拠地を守るための防御戦をくりひろげなければならない立場におかれてしまった。このような状況のもとで遊撃隊が根拠地防衛だけにとどまるならば、多年にわたって育成し鍛練してきた貴重な革命勢力を失い、敵とのたたかいにおいても主導権を奪われて守勢におちいるおそれがあった。将棋でいえば、自分の駒をそっくりとられ、ただ王手を待つばかりになったようなものである。

しかし会議では、一部の人びとが「根拠地死守論」を主張した。将軍はかれらの主張が敵を過小評価したものであり、闘争の発展を見とおすことができず、遊撃闘争の戦術的原則も理解できない軍事的冒険主義のあらわれであると、きびしくこれを批判した。将軍はまた、そのような見解が、遊撃根拠地で急速に成長している革命勢力を正しく評価していないだけでなく、遊撃闘争において主導権をにぎることを考慮にいれていない、消極的で保守主義的な傾向を内包しているものであると指摘しながら、軍事冒険主義的な主張を徹底的に論駁した。

こうして会議では、遊撃根拠地——解放地区を解散し、抗日遊撃隊がひきつづき主導権をにぎって積極的な攻勢へと転ずるための将軍の新しい方針が採択された。

将軍の新しい方針はなによりもまず、遊撃根拠地とそれに依拠して発展してゆく抗日武装闘争を抹殺しようとたくらむ日本帝国主義の内外狭撃作戦を全面的に破綻させるための積極的な措置であった。同時にこれは、革命勢力を保存しながら抗日武装闘争をひきつづき発展させ、朝鮮革命の新たな高揚をもたらすための独創的な見解であった。

腰営溝会議ののち、遊撃根拠地——解放地区が解散されるにともなって根拠地内の人びとの大部分が遊撃隊に入隊し、のこりの人びとは敵の支配地区工作の任務をにない、年よりや病人とともに、農民、商人、猟師、そのほか

いろいろな身分をよそおって敵の支配地区にはいっていった。

遊撃根拠地の解散とともに、抗日遊撃隊はただちに東満州、南満州、北満州と、そして朝鮮国内に活動舞台をひろげながら、いたるところで積極的な攻勢をくりひろげた。

金日成将軍の措置にしたがって一部の部隊は、すでに南満州で活動していた抗日武装遊撃隊と連係をたもちながら西南方面に進出し、また他の小部隊は車廠子遊撃根拠地を出発して朝鮮の北部地域に進出し、のこりの一部隊は吉東地区へ進出した。

将軍は遊撃隊の各部隊を南満州や国内に進出させる一方、みずから遊撃隊の主力部隊をひきいて、一九三五年の夏、北満遠征の途についた。

主力部隊の北満遠征の目的は、北満州地方で活動していた抗日遊撃隊との連係を強め、かれらに政治、軍事的支援をあたえると同時に、大規模な共同作戦を展開することによって、より強力な打撃を敵にあたえることにあった。またそれは広はんな反日大衆との連係を強め、北満州の広大な地域に革命の種をまき、反日闘争の炎をより強く燃えあがらせることにもつながっていた。

一九三五年六月のはじめ、将軍はみずから三百余名の隊員をひきいて、その当時、東寧県老黒山に駐屯していた「靖安軍」を掃討するたたかいを計画した。

「靖安軍」とは、「満州国」正規軍のなかでも、とくにえらばれた悪質地主や親日資本家などの子弟によって編成された軍隊で、その装備は普通の偽満軍より数倍もすぐれており、日本人「指導官」が直接指揮をとる軍隊であった。みずから「鉄の軍隊」と称し、「精鋭」を誇っていたこの「靖安軍」は、ごう慢かつ残忍な部隊であった。かれらのゆくところでは人民の血が流されないためしはなく、家畜や家財を奪われないところはなかった。

そのため人民は、袖に赤い筋のついた軍服で略奪と破壊をほしいままにするかれらに、燃えるような憎しみをい

だき、恐怖におののいていた。

金日成将軍のひきいる部隊が行軍をしていたとき、老黒山にいた「靖安軍」が沙道河子部落で、四十九名におよぶ罪のない農民を虐殺したという知らせがはいった。悲惨な出来事を知った将軍は、ただちに部隊をひきいて太平溝へむかった。沙道河子部落についた将軍は、隊員たちとともに犠牲者の追悼式をとりおこなった。深い同情と悲憤にみちた将軍の追悼演説は、きく人の涙をそそり憤激をかきたてた。将軍は人びとの恨みをはらし、かれらのねがいをかなえるために「靖安軍」をうつ決意をかためた。

将軍は老黒山に駐屯する「靖安軍」部隊を掃討するため、駐屯地に近い谷間の両側で敵を待ちぶせることにした。そして山林隊(反日スローガンをかかげる救国軍部隊にいた中国人の集団で、敵の攻撃にたえかねて山へ逃げこみ、人民の財産を略奪して生きていた)に変装した誘引隊を「靖安軍」の駐屯地にむかわせた。

もともと遊撃隊のまえでは手も足もでない「靖安軍」も相手が山林隊だと見ると、獲物をねらう鷹のようにとびかかってくるのであった。将軍はこの機に乗ずるつもりだった。案の定、誘引隊をほんものの山林隊と思いこんだ「靖安軍」は、日本人「指導官」の威勢のよい号令のもとに追撃を開始した。遊撃隊は傾斜の急な左右の山なみにそい、山のうえやふもとで敵があらわれるのを待ちぶせしていた。ねらいは的中した。敵は意気揚々と山をこえて、遊撃隊が待ちぶせしている谷間に斥候をたてながらやってきた。しかしかれらは、なにか不吉な予感がしたとみえ、「こんなところで遊撃隊に出会ったらおしまいだ」などとつぶやきながらあたりを見まわした。

敵の全部隊がすっかり待ぶせ地点にはいったとき、将軍の射撃命令がおり、遊撃隊はいっせいに復讐の火ぶたを切った。降伏すればたすけてやるという声が銃声とかさなりあって谷間をゆさぶった。あわてふためいた敵は、文字どおり袋のなかのネズミであった。遊撃隊の突撃によって敵はばたばたとたおれていった。遊撃隊のまえでは、いわゆる「鉄の軍隊」も「ワラの軍隊」でしかなかったのである。

遊撃隊はこの戦闘で敵の最精鋭部隊を完全に掃討し、のこりをすべて捕虜にした。そして迫撃砲、重機関銃、軽機関銃をはじめ大量の歩兵銃と弾丸、軍馬などをろ獲した。捕虜となった敵兵にたいして、将軍は寛大であった。まずかれらの民族的自覚と良心の覚醒をうながしたのち、旅費まであたえて郷里におくり帰した。

誘引戦術にもとづく老黒山戦闘は、ねりにねられた完成された戦闘であった。以後、敵はこの戦闘の話をきいただけでも戦々恐々とした。そのうえ捕虜に旅費まであたえて帰したといううわさは偽満軍のなかにひろく知れわたり、かれらを深く反省させ、遊撃隊につこうとするものまで続出した。こうして敵の老黒山陣地は撤収され、王宝湾(ワンポマン)に高く築かれた城は、じめじめした廃墟と化してしまった。

遊撃隊は太平溝に凱旋した。数日まえ、必ず復讐してくださいと涙で訴えていた人びとは遊撃隊員とだきあってよろこんだ。生まれてはじめて迫撃砲を見た人たちは、「えらく口のでかい大砲だなア」といってめずらしがった。将軍がふたたび趙宅周老人一家とめぐり会い、馬を贈ったのはこのときのことである。

数日のあいだ部隊に休息をあたえたのち、将軍はふたたび壮途につく準備にとりかかった。しかしある日、羅子溝に駐屯していた偽満軍の孟営(メンヨン)部隊が太平溝を襲撃してきた。かれらは八キロしかはなれていない羅子溝に数日間もいながら、なんの手だしもできないでいたのだが、老黒山で奪われた迫撃砲をとりかえせという上部の爆弾命令をうけ、しぶしぶと挑戦してきたのであった。

敵の襲撃を事前に察知した遊撃隊は、太平溝の裏山に陣をしいた。敵は部落の前方約二キロの地点を流れる火焼舗河を船でわたりはじめた。双眼鏡でこの光景をながめていた将軍は、迫撃砲の砲手に射撃を命じた。すると砲手は、たった二発で河のなかほどにさしかかった敵船をこっぱみじんにした。あわてふためいた敵は、多くの死体を水中にのこしたまま一目散に逃げていった。

これは敵にとって、文字どおり晴天の霹靂(へきれき)であった。遊撃隊にこれほどすぐれた砲手がいようとは想像もできな

いことであった。しかも皮肉なことには、この迫撃砲の名手は偽満軍から移ってきた隊員だったのである。

この戦闘ののち、将軍は遠征軍をひきいて東満州と北満州の境をなすけわしい老爺嶺をこえた。同じころ一部の部隊は、安図、敦化、撫松一帯へ、別の部隊は南満州の濛江県一帯へと進出していた。

遊撃隊の主力部隊が老黒山で「靖安軍」を痛烈に撃滅していたころ、崔賢部隊長のひきいる遊撃隊は腰営溝会議で金日成将軍がしめした方針にしたがい、蛟河県一帯に進出して京図線を走る敵の軍用列車を襲撃した。

襲撃は綿密な作戦計画のもとに、京図線黄松甸（ファンソンジョン）付近の急な傾斜の曲り角を利用し、突進してくる軍用列車を脱線させ、これに痛烈な打撃をくわえた。捕虜を訊問した結果、転覆した列車は会議に参加する将校たちで満員の特別軍用列車であることがわかった。

このたたかいで遊撃隊は敵の将校三百余名を掃討した。また多数の将校を捕虜にしたうえ、各種の武器と現金二十万円をろ獲した。

一方、将軍がひきいる主力部隊は、大陸の焼けつくような暑さになやまされながら、けわしい老爺嶺をこえていた。

それは、のぼってものぼっても頂上の見えない、はてしない山脈であった。谷間や山腹には、いくかかえもある大きな樅（もみ）や落葉松、白樺などがぎっしりと生い茂り、足の踏み場もないほどだった。部隊の前進は苦しい戦闘となんらかわりなかった。無数にいりくんでいる朽木をのりこえ、絶壁をよじのぼりもした。ゆく手をさえぎる大木を切りたおし、岩をとりのぞいて道をひらき、迫撃砲と重い馬の荷をひっぱったり、おしたりしながらすすまねばならなかった。そのうえ携帯食糧までとぎれてしまい、部隊は幾日も飢えとたたかいながら密林のなかを行軍しなければならなかった。

このように千古の密林におおわれた老爺嶺をこえ、寧安県三道河子（サムドハジャ）付近にさしかかったときには、隊員たちはへ

とへとに疲れきっていた。将軍は隊員たちに休息をとらせながら、かれらに闘争の意欲と勝利への確信をもたせるよう努力した。

「革命とは、命をかけてたたかう闘争である。革命は血や汗を流さずに容易になしとげられるものではない。われわれの目的は革命をなしとげ、奪われた祖国をとりもどし、すべての人民がしあわせに暮らせるようにすることだ。……しかし、しあわせはひとりでにやってくるものではない。しあわせはたたかいとらねばならない。これはまさに、われわれがなさねばならない聖なる偉業なのだ。これを思うとき、どうして困難のまえに屈することができよう……」

将軍は隊員たちをはげまし、みずから隊伍の先頭にたって行軍をつづけた。

一九三五年七月、将軍は部隊をひきいて寧安県山東屯（サンドントゥン）に到着し、この地方で活動していた遊撃隊と会い、北満州における今後の共同作戦について討議した。敵はこのころになってはじめて、東満州で活動していた金日成将軍の部隊が北満州へはいり、山東屯付近で活動しているという情報を手にしてあわてた。なぜならかれらは金日成将軍の部隊が小子湾（ソチャヤマン）付近にいるものと思いこみ、大兵力をそこに集中していたからである。おどろいた敵は牡丹江（モクタンガン）市、寧安県城、東京城（トンギョンソン）などに集中していた騎兵をふくむ八百名以上の兵力をかき集め、七月のある日、山東屯に猛烈な勢いで攻撃してきた。しかし午前十一時から日暮れまでつづいたこのたたかいで敵は遊撃隊の集中砲火にあい、屍の山を築いただけであった。かれらは、「共産軍には大砲まである。これではとうてい勝てる見こみはない」と悲鳴をあげ、なだれをうって逃げ去った。

山東屯戦闘の翌日、将軍は部隊を三個編隊に再編成し、一部隊を汪清県と琿春県方面へ進出させ、他の一部隊を寧安県を中心に牡丹江方面で活動させた。そしてのこりの一部隊をひきいた将軍は鏡泊湖（キョンバクホ）をへて吉林省管内にはいり、遠く額穆県方面へとむかった。

ワラをやわらかくして隊員の靴の底にしいてやる金日成将軍

将軍は遠征部隊をひきい、青溝子（チョングジャ）、六号屯など、いたるところで敵をせん滅した。とくに十二月には、額穆県の官地（クワンジ）付近で重武装をした「靖安軍」三百余名とたたかい、そのうち百二十名を掃討する勝利をおさめた。

このたたかいがあってから、この地方の人民のあいだでは「棺桶喜劇」という話と「活劇」物語がひろまり、きく人びとを抱腹絶倒させた。

「棺桶喜劇」というのは、青溝子、六号屯の戦闘のとき野菜畑のなかの中国人の家でおこった話である。たたかいがはじまるとすぐ、敵の守備隊の通訳官が無我夢中で逃げこんできて、この家の庭のすみにおいてある棺桶のなかにかくれた。この地方では、年よりたちがまえもって自分のはいる棺桶を準備しておく風習があったのである。しばらくたって、ただ一人生きのこった日本兵が負傷した足をひきずりながら、やっとのことでこの家までたどりついた。どこかかくれ場所はないかとさがしまわったすえ、かれもその棺桶を発見し、大急ぎでそのふたをあけた。遊撃隊の追跡をさ

けるためには棺桶であろうとなかろうとかまわなかった。しかし棺桶のなかには、生きた屍が頭をかかえこんでよこたわっていた。兵卒と通訳官のあいだでは、棺桶を奪いあう乱闘劇がくりひろげられたということである。

「活劇」の方は、官地付近の戦闘があったのち、三道溝(サムドグ)の日本守備隊の兵舎でおきた話である。数日まえ遊撃隊の猛攻にあい、やっとのことで生きのびたある機関銃手が夜も明けきらぬうちにむっくりとおきあがると、「敵だア、敵だア」と大声をはりあげた。びっくりしたのはそばに寝ていた日本兵たちで、たちまち蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。寝ぼけた機関銃兵は、やにわに機関銃を自分の同僚にむけると、狂ったように引き金をひいた。遊撃隊にたいする恐怖心が高じて精神錯乱をおこしたのである。ところがその事件があってまもなく、もう一人の日本兵が半狂乱となり、「敵だ！　敵だ！」と叫びながら外へとびだすと、町ぢゅうを走りまわったということである。

北満遠征を開始して半年がすぎ去った。

そのあいだ東満州で活動していた遊撃隊と、南満州および国内にむかった遠征部隊はたがいに連係を強めながらいたるところで敵を撃滅し、活動の領域をひろげていった。これによって日本帝国主義がうけた打撃はきわめて大きなものがあった。将軍の指導する抗日遊撃隊が満州各地はもちろん、朝鮮国内をもふくむ広大な地域に一挙に進出し、抗日勢力を結集しながら積極的な攻勢に移行するにつれ、敵はひろい地域に「討伐」兵力を分散させねばならなくなり、全般的な守勢におちこんでもがきはじめた。

金日成将軍の卓越した戦略による抗日遊撃隊のこのような作戦は、日本の侵略者たちに甚大な軍事的打撃をあたえた。それはまず、遊撃隊が敵の包囲をつきやぶり、あらゆる方面で同時に反撃に転ずることにより、敵を収拾のつかない混乱におとしいれたことに見られた。またそれは敵のいわゆる「各個撃破」戦術を破綻させ、各地で活動していた部隊と直接連係をたもちながら、組織化された体系で敵に強力な打撃をあたえたことにあらわれた。さら

にそれは、救国軍部隊に革命的な影響をあたえ、共同作戦を強化することによって統一戦線をいっそう拡大させる成果をもたらした。そのほか、いたるところで敵のいわゆる「精鋭」部隊を撃破する一方、捕虜を寛大におくりかえすことによって日本帝国主義侵略軍と偽満軍との不和を増大させ、偽満軍に大きな動揺をあたえた。

とくに、将軍のひきいる部隊はゆく先ざきで人民を目ざめさせ、かれらのなかに革命の種をまいた。将軍は隊員たちにつぎのように教えた。

「北満州は、東満州地帯とは異なっている。まだ北満州の人民はわれわれパルチザンのことをよく知らないし、日本帝国主義者と土匪の略奪、脅迫と欺瞞のなかで生きている。だからわれわれは日本帝国主義を掃滅するたたかいをつうじて、われわれがほんとうに人民のための軍隊であることをしめさなければならない。そして人民を大切にし、啓蒙する実際の活動をつうじて人民をわれわれのまわりに団結させ、抗日勢力を拡大しなければならない。人民を愛し、社会を改造すること、――まさにこれこそが、われわれ共産主義者の第一の任務であることを忘れてはならない」

隊員たちは将軍の教えどおり、つねに人民のなかで生活した。かれらは戦闘の疲れもかえりみず、民家の庭を掃除したり、くずれおちた垣根や屋根を修繕したり、薪をわってやったりした。

遠征部隊は、抗日遊撃隊が人民のための軍隊であり、朝・中両国人民の共同の敵日本帝国主義をうちやぶる真の軍隊であることを人民に知らせ、人民が貧しい生活をしなければならないのは日本帝国主義侵略者と地主、資本家の搾取のためであることをわかりやすく教えた。

こうした過程をつうじ、以前は遊撃隊を他の軍隊と同じように見て敬遠していた人びともしだいに遊撃隊を正しく理解するようになり、やがては遊撃隊がとめるのもきかず援護物資をはこぶようにさえなった。そして遊撃隊が出発するときなどは別れを悲しみ、涙を流して見おくる人びとの姿が各地で見うけられた。

こうして革命の種は北満州の広大な地域の人民のなかにまかれた。人民大衆は日本帝国主義の軍事施設のための強制労働や搾取に反対して各地で集団的にたたかった。またあらゆるかたちで遊撃隊の活動をたすけるようになり、多くの青年が遊撃隊に志願し入隊した。

官地と南湖頭のあいだの軍用道路工事現場に強制動員された労働者たちは、「祖国にそむく恥ずべき工事から手をひこう！」と叫んでストをおこし、一部の労働者は遊撃隊に入隊した。

額穆県ではこんなこともあった。

劉（リュウ）という老人の一人息子が二十名あまりの村人たちといっしょに、パルチザンのあとを追う日本軍の荷物はこびにかりだされて山にむかった。それからしばらくして、その山の方角から豆をいるような銃声がひとしきりつづいた。この銃声を耳にして、劉老人は自分の息子がてっきり殺されたものと思い、息子の死体でもひきとってこようと大急ぎで夜道をかけていった。

老人が山の中腹へさしかかったころは、もう銃声もやんでひっそりと静まりかえっていたが、頂上のあたりに火が見えた。

「あれはなんだろう？……さきほどの射ちあいは、どうなったんだろう。あの火はどちら側のものだろうか？」と劉老人はしばらく考えこんだが、ふたたび火の方向に足をむけた。

その火は将軍がひきいる遠征部隊のたき火であった。劉老人は、そこで思いがけなく息子を発見した。その息子は老人の姿を見つけると走りよって父をだきかかえた。まったく夢を見ているような心地だった。老人はあまりのうれしさにどうしてよいかわからなかった。たずねてみると、遊撃隊の「討伐」にきた日本軍が逆にせん滅され、息子はほかの人たちといっしょに遊撃隊にたすけだされたというのであった。

息子は、遊撃隊に入隊したいと父にいった。老人は別れたくはなかったが、息子がたすけられたことのうれしさ

に二つ返事でそれを承諾した。
老人は寒さのことが気になり、着ていた綿いれの上着をぬいで息子の肩にかけてやった。ほほえみをうかべてこれを見ていた将軍は、毛皮の外套をぬぐとそっと老人の肩にかけてやった。
「おじいさん、これをおめしになってください」
劉老人はどうしていいのかわからず、将軍のいうとおりにいったんは着てみたものの、それではすまないような気がして外套をぬごうとした。すると将軍は老人の手をおしとどめ、そのまま着ているようにとくりかえしすすめた。そして将軍は老人の息子にむかい、父親が着せてくれた綿いれの上着がたとえ古くてほころびていても、その縫い目の一つ一つにこめられている父母の深い愛情を忘れては、りっぱな遊撃隊員にはなれないのだといいきかせた。
将軍は遠征部隊をひきい、ゆく先ざきで人民の心のなかに偉大な愛と信頼の灯をともし、革命の種をまいていった。隊員たちもそれを見ならい心から人民を愛した。
遠征部隊が額穆県で活動していたときのことである。
一九三五年の冬の夕暮れ、数名の遊撃隊員がとある一軒の家をたずねた。一夜の宿をたのむためであった。しかし若い主人にまねかれて部屋にはいった隊員たちは、二言、三言ことばをかわすとすぐ外へでてしまった。そしてこんどは、庭にある納屋でもいいから貸してほしいとたのんだ。寒い日であった。にもかかわらず隊員たちは、戸外と同様の納屋で一晩を明かすことにしたのである。
それにはこんなわけがあった。
隊員たちはその家の若い主人と話をかわすうちに、かれが結婚してまもないということに気づいた。事実、その夫婦は式をあげてからまだ日が浅かった。そこで隊員たちは、若夫婦がいくら家のなかで休むようにとすすめて

も、決してそれをききいれようとしなかったのである。

するど今度は、若夫婦が親戚のところでとまるからといって家をでようとした。隊員たちを部屋のなかで気がねなく休ませようという気持ちからだった。しかし、こうした夫婦の心づかいもむだであった。夫婦が家をでようとするのを見て、今度は隊員たちがあたふたと家をとびだしたからだった。遊撃隊員に根負けした若夫婦が、やむなく家にとどまったのはいうまでもない。

抗日遊撃隊はゆく先ざきで、このようなほほえましいエピソードを数多くのこした。だから広はんな人びとは、「この世ではじめて見る、もっとも美しく道徳的な軍隊だ」と遊撃隊をほめたたえ、かれらを心から歓迎してやまなかった。

このように、遊撃隊が北満州の広大な地域に革命の種をまき、人民を反日闘争にふるいたたせたことは、革命闘争を新たな高揚へと発展させるうえできわめて大きな意義をもっていた。

金日成将軍は部隊をひきいて北満州へ遠征することにより、東満州にかもしだされた重大な危機から革命の隊列を救ったばかりでなく、東満州と北満州の広大な地域の人民のなかに、朝鮮の共産主義者の戦闘的威力と気高い品性をひれきしたのである。

遠征をつうじて人民のなかに抗日の炎を燃えたたせ、日本帝国主義侵略者に鉄槌をくわえ、かれらを恐怖におののかせた金日成将軍の名声は、文字どおり満州全土にひびきわたった。

抗日遊撃隊が広大な地域へと進出し、積極的な攻勢をくりひろげた結果、敵は甚大な軍事、政治的な打撃をこうむった。日本の侵略者たちは兵力を分散させられ、全地域で守勢にたたざるをえなかった。

その数か月まえまでも、敵は自分たちの「威力ある討伐」によって遊撃根拠地が解体したのだとうそぶきながら、いまにも抗日遊撃隊が崩壊するものと信じこんでいた。しかしかれらは、わずか数か月後に、自分たちの予想

とはまるで逆に遊撃隊が勝利をおさめ、かれら自身がみじめな敗北をこうむるあわれな境地にたたされてしまったのである。

かれらの極秘文書にはつぎのように書かれている。

「赤色地域の撤廃は、一面では皇軍の分散配置による徹底的な討伐の結果であると見ることもできるが、実情としては、上記の新戦術（抗日遊撃隊が広大な地域に進出して積極的な攻勢に移行することについての金日成将軍の方針をさす——筆者註）にもとづいた自発的な行動と認められる……討伐の被害をうけた結果によるものではなく、……広はんな遊撃運動を展開することは……討伐の目標を少なくし、積極的かつ先鋭的な運動を容易にし、今後の討伐に一段の困難さをともなわせると同時に、かれらの運動を激化させるものである……」（在満日本帝国大使館警務部資料『最近の満州に於ける共産主義運動の現況検討』一九三五年）。

このように、遊撃根拠地を解散して広大な地域に進出し、積極的な攻勢を断行することについての将軍の方針は、きわめて成功裏に実現したのである。

第六章　朝鮮全土を照らす白頭山ののろし

1　歴史的な会議

金日成将軍は北満遠征の多忙をきわめた日々にも、革命の途上で提起される新しい問題を解決するために深い思索にふけっていた。

重大な危機から革命を救った将軍は、より広大な地域で朝鮮革命を決定的におしすすめる方針をかためた。それは内外情勢のさしせまった要求でもあった。

そのころ、帝国主義列強は侵略戦争の準備に狂奔していた。とくに、ファッショ独裁を樹立したドイツ、日本、イタリーの独占資本家たちは、あらゆる進歩勢力を徹底的に弾圧しながら、いたるところで野蛮な侵略戦争を挑発していた。

こうした状況のもとで帝国主義侵略勢力、わけても歴史の舞台に正体をあらわしたドイツ、日本、イタリーなど、ファッショ勢力の進出をおさえて戦争策動を粉砕することは、全世界人民のまえに提起されたもっとも切実な課題であった。そして多くの国ぐにでは、ファシズムと戦争の脅威に反対する統一戦線運動が広はんに展開された。スペインの人民は一九三六年に反ファッショ人民戦線を形成し、フランコ・ファッシスト一味と外国の武力干渉に反対する決死的な闘争をくりひろげたし、フランスでも反ファッショ人民戦線運動がおこるなど、世界各国で統一戦

線運動が力強く展開されていた。

こうした事実は、なによりも革命勢力と反革命勢力の激烈なたたかいを物語っていた。

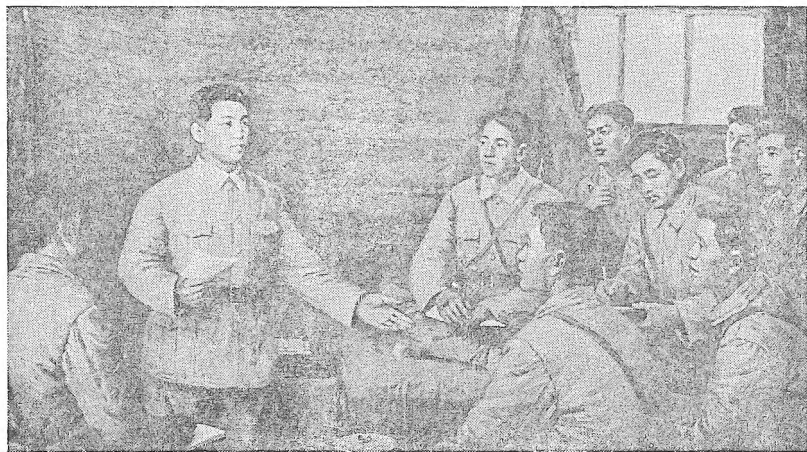
当時、日本帝国主義侵略者は朝鮮において経済的略奪、とくに軍需資源の集中的な略奪を強めるかたわら、いわゆる「国民精神総動員運動」なるものを大々的にくりひろげ、「皇民化」と「内鮮一体」というスローガンまででっちあげて朝鮮人民の民族精神を抹殺しようとやっきになっていた。そして日本帝国主義の手先に転落した民族改良主義者たちまでが「同祖同根」をうんぬんし、その片棒をかついで騒ぎまわった。侵略者は略奪と隷属をいっそう強化した。

しかし朝鮮人民は、かれらの従順な奴隷になることを断固としてこばんだ。血なまぐさいファッショ統治は、かえって朝鮮民族の怒りをかきたてた。そして日本帝国主義侵略者と朝鮮人民の民族的、階級的矛盾はますます激化していった。ごく少数の買弁勢力をのぞく、朝鮮の各界各層人民の反日気勢は高まる一方だった。

このような諸般の情勢をするどく分析した将軍は、朝鮮の北部国境地帯へ進出して敵に連続的な打撃をあたえ、朝鮮人民の士気を高めながら党創建の準備活動をさらに強め、すでに築きあげた土台をもとに広はんな反日民族統一戦線運動を強力に展開する決意をかためた。

これはきわめて困難なたたかいであった。しかし将軍はこの分野における豊富な経験をつみかさねており、活動をくりひろげるための現実的な条件もととのっていた。

新たなたたかいの拠点をしっかりとかため、党創建の準備活動をさらに促進し、広はんな統一戦線を結成するという金日成将軍の構想は一九三六年二月、寧安県南湖頭の密林の丸木小屋でひらかれた軍事、政治幹部会議に提出された。

この会議において、将軍は一九三〇年代のなかばにいたって変化を見せた情勢を分析し、各界各層の大衆との統

南湖頭会議を指導する金日成将軍

一戦線活動におけるこれまでの成果をかため、全国的な地域でより広はんな大衆を結集する、幅ひろく強力な反日民族統一戦線を形成するための方針を提起した。

将軍は、共産主義者の当面する重要な任務は反日民族統一戦線を結成することであると強調しながら、つぎのようにのべた。

「日本帝国主義の弾圧がきびしい条件のもとで、この任務を遂行するためには統一戦線の組織名称にこだわることなく、地方の具体的な実情と住民の準備程度を考慮し、いろいろな名目であらゆる反日勢力を結集しなければならない」

同時に将軍は、この活動で左右両翼の偏向を警戒し、敵の破壊活動を未然にふせぎ、組織の秘密を厳守しなければならないとくりかえし強調した。

将軍はこの問題につづいて、朝鮮革命の参謀部であり、前衛的な役割をはたすマルクス・レーニン主義党創建の準備活動を情勢の発展に応じていっそう強める方針を提示した。

将軍は、党を組織し、その党をひきいることができる指導的中核を形成する問題に特別な意義を認め、つぎのように強調した。

「われわれが指導的中核をしっかりと形成するならば、それを骨幹としてやがて党を創建することができるし、そのまわりに大衆を結集することも可能である。すなわち、たたかいをつうじてきたえられ点検された共産主義的指導中核は、いかに困難な環境のもとでも屈することなく朝鮮革命を勝利に導くことができ、左右両翼の日和見主義と分派主義などを克服し、党創建のしっかりとした礎石となるだろう」

つづいて将軍は、共産主義隊列をたえず育成拡大し、革命組織内でマルクス・レーニン主義の教育を強め、党創建のための組織、思想的準備をいっそう力強く推進しなければならないと指摘した。

最後に将軍は、全国的地域において革命を決定的に高揚させるため、抗日遊撃隊を朝鮮の北部国境地帯へと進出させる方針を提起した。

将軍は、抗日遊撃隊の活動舞台を国境地帯と国内に移すことによってのみ、人民に未来の希望と勇気をあたえることができると強調してつぎのようにのべた。

「今後の活動の中心課題は、白頭山を中心とする鴨緑江、豆満江などの国境沿岸地帯に新たな遊撃根拠地を創設し、武装闘争の範囲を国内に拡大する一方、国内の革命運動を直接、組織指導しなければならない」

南湖頭会議では全員が一致して、金日成将軍の明確な方針を朝鮮革命の拡大発展のための基本路線であると規定し、これを決定として採決した。

将軍はこの会議ののち、全国的な範囲にわたって革命運動を大きく発展させるため、みずから部隊をひきいて朝鮮の北部国境地帯にむかった。

抗日遊撃隊は、このときから将軍の指示によって朝鮮人民革命軍と名づけられた。

将軍がひきいる部隊はうっそうとした密林をついてすすみ、迷混陣（ミホンジン）、漫江（マンガン）などをへて五月初旬には撫松鎮の東南四十キロの地点にある撫松県東崗（トンガン）に到達した。

将軍にとって、これはたんなる行軍ではなかった。数か月もけわしい尾根をこえ、雪深い千里の山道を突破したこの行軍の過程はそのまま革命の未来図と、その後まもなく発表された祖国光復の雄大な構想をねる探求の道でもあった。

将軍には休息のいとまがなかった。困難な行軍をつづけながらも、革命の戦略的な課題を明確にするため心をくだいた。

反日民族統一戦線の形式をどのようにさだめ、どう組織すべきか。そしてその闘争の旗じるしとして提起する綱領の内容はどのように規定すべきか。党創建のための組織、思想的準備をいかに促進させるべきか。白頭山を中心とする新しいかたちの根拠地を創設するためには、どのような準備と措置が必要なのか。――それら一つ一つが重大な問題ばかりであった。

将軍は幾度も吹雪が荒れ狂う密林のテントで夜を明かし、革命の前途に深い思いをはせた。そして、背なかをまるくして眠る若い隊員たちに外套をかけてやり、こごえる手を息であたためながら、ねりにねった構想をたんねんに書きつづけていった。

あるときは朽木に腰をかけ、岩を机にして新たな構想をねり、またあるときは深い山あいの丸木小屋でたき火に身をよせ、夜を徹して革命綱領の推敲に心血をそそいだ。

そんなときにはきまって暗黒のなかでもだえ苦しむ朝鮮人民の姿が目にうかび、救いをもとめる悲痛な叫びが、はてしない海のうねりとなっておしよせてきた。将軍の心はかれらとともに波うち、その筆先には人民にたいするかぎりない愛がにじみ、それが革命の戦略を力強く描きだしていくのであった。

ときには人民の膏血をしぼりとる民族の敵が銃をふりあげ、不気味な暗雲のように眼前をよぎることもあった。すると将軍は胸にはげしい憎悪の炎を燃やし、のたうつ敵の運命を書きとどめるかのように力強く筆をすすめるの

であった。

この愛と憎しみが将軍をして、静かな書斎でもない荒凉たる大自然のなかで祖国光復の歴史的な大画幅を描かせたのであり、あらゆる面で独創的な革命理論を創造させたのである。

人民の生活から遠くかけはなれ、実践闘争の経験もない自称マルキストたちがサロンにたむろし、朝鮮革命には全然ふれずに「世界革命」をうんぬんし、いわゆる「社会主義革命路線」などという現実を無視した空理空論をもてあそんでいたとき、金日成将軍は朝鮮革命の各段階と進路を正しく見とおし、それをたたかいとるために一身をなげうっていたのである。

いかに情勢がきびしく、いかに敵が凶悪であっても、将軍は人民をかたく信じてうたがわなかった。団結すればいかなる泰山をもゆるがし、爆発すれば火山をもしのぐ人民大衆の力を信じていた。だからこそ将軍は人民にあたえる無敵の武器をとぎすまし、どのような嵐のなかでも消えることのない革命ののろしを準備することができたのである。

祖国光復にかんする金日成将軍の偉大な構想は、一九三六年五月の撫松県東崗会議を契機として内外にひろく知れわたった。海抜千八百メートルにおよぶ大高原の樹海につつまれた丸木小屋——、ここで十五日間にわたる歴史的な東崗会議がひらかれた。

この会議において金日成将軍は、南湖頭会議で提示した綱領的方針をさらに具体化し、その実践方法と課題を全面的に明らかにした。

第一の問題は、人民革命軍の国境地帯への進出とかんれんして新たな遊撃根拠地を創設することであった。

将軍は、朝鮮人民の革命闘争を全般的に導き朝鮮革命を飛躍的に発展させるため、古くから朝鮮人民の心のよりどころとなっている霊峰白頭山を中心とする鴨緑江、豆満江沿岸の朝鮮北部地域と長白県一帯の大密林地帯に新た

な革命根拠地を創設する方針を提起した。

将軍は新たな根拠地を創設する必要性と、それが従来の東満遊撃根拠地と異なる点を明らかにしながらつぎのようにのべた。

「いまわれわれに必要な新しいかたちの遊撃根拠地は、まず朝鮮の革命運動を全般的に組織指導することができる有利な地帯でなければならず、思いのままに遊動し、広大な地域で自由自在に、敏速に遊撃活動を展開しうるところでなければならない。そのような地域としては白頭山を中心とする鴨緑江、豆満江沿岸の朝鮮北部地帯と長白県、臨江県、撫松県一帯がもっとも適切である。われわれは、自然の要塞であるこの大密林地帯を利用して多くの密営地（アジト）を設置し、この地帯に包括されている敵支配区域内の人民大衆のなかで、非合法的な革命団体をひろく組織しなければならない。そうなれば白頭密林の有利な地形と地方の革命組織によって秘密が守られ、新たな遊撃根拠地はきわめて強固な不敗の城塞となるであろう。根拠地を設定し革命団体に依拠すれば、われわれは国内に深く進出して抗日武装闘争の炎を力強く燃えあがらせることができるだろう。このことは、白頭山を中心として新たに設置される根拠地が文字どおり、朝鮮革命の城塞となることを物語るものである。われわれはこの城塞のけわしい山々を遊動し、いわゆる『整を以って零と化し、零をもって整と化す』出没自在の戦法をもちいることによって軍隊を敏速に移動させ、敵をして手も足もでないような状態におとしいれることができるだろう」

つづいて将軍は、遊撃隊が天然の要塞と広はんな秘密組織網によって城壁を築き、神出鬼没の遊撃戦術を正しく駆使すれば、「無敵皇軍」を豪語する日本帝国主義の大砲も、機関銃も、飛行機や爆弾も、われわれの革命の城塞をくずすことはできないし、朝鮮革命を全般的に組織指導する活動において大きな成果を達成することができると力をこめて語った。

ついで将軍は、南湖頭会議ですでに提示した方針をさらに具体化し、マルクス・レーニン主義党の創建準備をよ

り力強く展開する方針を明らかにした。

将軍は抗日武装闘争の過程ですでに達成した輝かしい成果と経験にもとづき、今後、党創建のための準備活動を全朝鮮に拡大することが第一義的な課題であると強調し、それを実現するための原則的で実践的な方針をさししめした。

将軍は党創建のための組織的骨幹を育成することがもっとも重要であると指摘し、つぎのように強調した。

「党を創建するためには一定の組織的骨幹が必要である。この組織的骨幹は実際の闘争をつうじて鍛練され、点検された共産主義者の指導的中核によって形成される。したがってわれわれ共産主義者は、党創建の基礎となる指導的な中核隊列の拡大強化のための活動をさらに強くおしすすめなければならない」

将軍はまた、国内の共産主義運動の癌である分派主義や左右両翼の日和見主義的偏向を徹底的に克服し、国内の共産主義者を組織的に結集すべきであると強調した。

東崗会議ではまた、南湖頭会議の方針にしたがって反日民族統一戦線組織を結成し、統一戦線運動をより広はんに展開するための具体的な実践方法が重要な問題として討議された。

将軍はまず常設的な反日民族統一戦線の組織として、祖国光復会を結成すべきであると提案した。そして祖国光復会の組織形態とその組織網を拡大して、全国的な規模で反日民族統一戦線運動を強化発展させるための闘争方針を提起した。

将軍は、共産主義者と労働者階級の隊列を組織的にも思想的にも強化し、統一戦線内におけるかれらの指導的役割をかたく保障することがなによりも重要であると強調した。それとともに、各界各層の広はんな人民大衆のなかに祖国光復会の綱領を深く浸透させ、日本帝国主義に反対する人であれば、思想、政見、信仰のいかんをとわず、だれでも祖国光復会にうけいれなければならないとのべた。そして組織のありかたとしては、組織の秘密をかたく

守ることができるよう、地方の実情といろいろな条件にあわせて各種の形態の大衆団体を組織し、ここに広はんな人民大衆を結集し、低い形態からしだいに高い形態へ、部分的統一から全面的統一へと拡大し発展させるべきであると指摘した。

将軍は統一戦線を拡大強化するにあたって、労働者と農民をはじめとする各界各層の大衆との活動を正しくりっぱに展開しなければならないと再三強調し、各階層との活動方向とその方法、さらに非合法的な宣伝扇動活動において遵守すべき原則的な諸問題を明らかにした。

金日成将軍が東崗会議で提起した諸方針は、朝鮮の革命運動に画期的な転換をもたらした綱領的路線であり、共産主義者と国内の革命家たちに闘争の前途をさししめす唯一の指針であった。

会議に参加した人びとは、金日成将軍のマルクス・レーニン主義的卓見と科学的な洞察力にあらためて感嘆し、将軍の新しい方針を熱烈に支持してやまなかった。

朝鮮革命の綱領的路線と方針を規定した南湖頭会議と東崗会議は、朝鮮革命の発展において新たな局面を切りひらいた歴史的な会議であった。この会議は朝鮮革命にかんする綱領的方針を明らかにしたことと、朝鮮人民に闘争と勝利の旗じるしをあたえたことによって、反日民族解放運動史の栄えある一ページをかざったのである。

2　祖国光復会と十大綱領

反日民族統一戦線を拡大する活動は、金日成将軍が革命闘争をはじめた当初から一貫しておしすすめてきたたたかいであった。

これはきわめて重大な課題であった。なぜなら革命の勝敗は、歴史発展の原動力である人民大衆をたたかいに結

集できるか、いなかにかかっているからである。

革命はもともと、人民大衆の自由と幸福をめざす人民自身の活動であり、人民と革命は、鷹の胴体と翼が一体であるように、たがいに切りはなして考えることができないものである。したがって広はんな反日大衆を結集する反日民族統一戦線の問題は、朝鮮革命における戦略戦術の重要な構成部分をなすものであった。

こうした必然的な要求からして、将軍はすでに革命活動の初期から反日勢力の団結がなされていないことをうれい人民の団結に全力をかたむけてきた。

口先では日本帝国主義に反対するといいながら、派閥あらそいにのみ没頭する人びとを将軍はつねに団結の思想で教育し、二人が集まれば二人を団結させ、会議に参加すれば演壇から団結の理念で百人、千人もの人びとを感化させてきたのである。

一九二九年春の「南満青総大会」に参加したとき、民族主義者が短刀をふりまわす殺伐とした空気のなかで一歩もしりぞかず分裂策動を糾弾したのも、また遊撃隊結成の初期に、共産主義者をおとしいれようとした民族主義者たちにきびしく対処したのも、すべて民族的な団結を実現するための将軍の一貫した闘争であった。

「日本帝国主義に反対する人びとを集めて団結させなければならないのに、なぜ思想が少々異なるからといってやたらに人を殺したりするのか。わたしの考えでは反日勢力を拡大する方がより大切だと思う。考えてもみよう。われわれ朝鮮人民の数はそれほど多くもないのに、満州にまできてそんなことをする必要がいったいどこにあるというのか。まず朝鮮人民を団結させるべきなのだ。共産主義運動をしようと、なにをしようと、団結して日本帝国主義にたちむかう方が有利ではないか」

この将軍のことばには、だれも反対することができなかった。

共産主義隊列のなかにもぐりこんだ分派分子の分裂策動も、民族的団結と反日行動の統一をめざして大衆を動員

する将軍の力強いたたかいのまえにことごとく粉砕された。

金日成将軍は、朝鮮革命の主導的勢力である抗日武装隊伍の組織とその大衆的な基盤の拡大、反帝同盟と農民協会、革命互済会をはじめとする各種の大衆団体の組織、統一戦線に害をおよぼした極左日和見分子にたいする打撃、「反日部隊」との統一戦線などをつうじて反日統一戦線の土台をしっかりと築きあげ、豊富な経験をつみかさねてきた。

このようにして将軍は、広はんな反日民族統一戦線を形成する組織的、戦術的土台を築きあげ、それにもとづき東崗会議において反日民族統一戦線体である祖国光復会の歴史的な創立を内外に宣言したのである。

一九三六年五月五日、わが国における最初の単一的な大衆組織形態である反日民族統一戦線が結成された。

当時、わが国の労働者階級には統一的な党がなく、その他の階級も自己の政党と政治的組織をもっていなかったため、わが国における統一戦線組織は、他国でのそれのように諸政党の連合戦線という形態をとることができなかった。したがって将軍は、民主主義的中央集権制の原則にもとづく単一の大衆組織形態という統一戦線体をえらんだのである。

東崗会議では、祖国光復会の会長に金日成将軍を推戴し、その機関誌として『三・一月刊』を発刊することが決定された。

祖国光復会は将軍が苦難の日々につみあげてきた豊富な実践的経験を分析し、朝鮮人民の念願を科学的に一般化し、将軍自身の手になる十大綱領と創立宣言、規約などを内外に発表した。

歴史的な祖国光復会の創立宣言はその冒頭で、わが民族が代をついで守りぬき、繁栄させてきた祖国の美わしい三千里江山が日本帝国主義に侵略され、聡明な朝鮮民族が奴隷として抑圧され搾取されている現実を痛憤し、朝鮮民族の愛国思想と熱烈な独立精神は、いまもむかしもかわりなくはげしく燃えさかっていると強調した。

宣言は、朝鮮の民族的独立の責任はもともと朝鮮人民にあり、朝鮮人民自身が責任を負い、朝鮮人民みずからがその責任を遂行しなければならないとし、「われわれは国際革命運動が激烈なこんにち、この機会をのがすことなく祖国光復のために、民族を救出するために……、党派（革命団体）、宗教、階級（無産、資産階級）、地方別、性別、年令をとわず、無条件に大同団結し、連合し、一致共同してたちあがり、わが民族の敵である日本帝国主義を……朝鮮から駆逐し、朝鮮の独立、民族の自由獲得に努力するであろう。……富める者は金をだし、食糧のある人は食糧をだし、技能と力のある人は力と技能をだして二千三百万全民衆がうって一丸となり、行動をもって反日祖国光復戦線に参加するならば、祖国の独立、解放は必ずや成就されるであろう。……」と指摘した。

創立宣言にこめられた独立と解放の烈々たる精神は、祖国光復会綱領と組織の生活規範をさだめた規約によってうらづけされた。

祖国光復会の会員資格と組織形式、組織構造などをさだめた祖国光復会規約は、本条項が八章十四か条、付則三か条からなっていた。

規約は日本帝国主義に反対するすべての団体と個人を会員としてうけいれる原則をさだめ、すべての反日革命勢力が祖国光復会に結集できるようにした。また非合法闘争の条件を考慮し、祖国光復会の内部に特殊会員制をもうけ、敵の破壊策動から組織を保護し秘密を厳格に守れるようにした。

十か条からなる祖国光復会の綱領は、祖国解放の偉業を成就するための朝鮮人民の闘争課題をつぎのように明示した。

一、朝鮮民族を総動員し、広はんな反日統一戦線を実現することによって強盗日本帝国主義の統治を転覆させ、真の朝鮮人民政府を樹立する。

二、朝・中両民族の親密な連合によって日本およびそのかいらい「満州国」を転覆し、中国人民がみずからえら

んだ革命政府を創設して中国領土内に居住する朝鮮人の真の自治を実行する。

三、日本軍隊、憲兵、警察およびその手先の武装を解除し、朝鮮の独立のためにたたかう真の革命軍隊を組織する。

四、日本国および日本人所有のすべての企業所、鉄道、銀行、船舶、農場、水利機関ならびに売国的親日分子の全財産と土地を没収して独立運動の経費に充当し、その一部で貧しい人民を救済する。

五、日本およびその手先たちの人民にたいする債権、各種の税金、専売制度を廃止し、大衆の生活を改善して民族的工業、農業、商業をとどこおりなく発展させる。

六、言論、出版、集会、結社の自由をたたかいとり、日本帝国主義の恐怖政策実現と封建思想の鼓吹に反対し、いっさいの政治犯を釈放する。

七、両班、常民その他の不平等を排除し、男女、民族、宗教など差別のない人倫にもとづいた平等と婦人の社会的待遇を高め、女性の人格を尊重する。

八、奴隷労働と奴隷教育を撤廃し、強制的な軍事服務および青少年にたいする軍事教育に反対し、わが国のことばと文字で教育し、無料義務教育を実施する。

九、八時間労働制、労働条件の改善、賃金のひきあげなどを実施し、労働法案を確立して国家機関が各種の労働者保護法を実施し、失業勤労大衆を救済する。

十、朝鮮民族にたいして平等な立場をとる民族および国家と親密に連合し、わが民族解放運動にたいして善意と中立を表明する国家および民族と同志的親善を維持する。

祖国光復会の十大綱領は、わが国の社会経済的状況と階級相互の関係をマルクス・レーニン主義的に分析し、朝鮮革命の性格と任務、革命の同盟者と闘争対象、戦略戦術上の諸原則などを明確に規定した歴史的文献である。

朝鮮は封建的な諸関係を清算できないまま日本帝国主義の植民地に転落した。したがって植民地半封建的関係がわが国を支配し、民族的矛盾と階級的矛盾が複雑にからみあっていた。

当時の朝鮮の社会における基本矛盾は、労働者階級、農民、都市小ブルジョア階級、民族資本家を一方とし、日本帝国主義およびそれと結託した地主、買弁資本家、親日手先などを他方とする両者間の矛盾であり、その主要矛盾は、日本帝国主義と朝鮮民族間における矛盾であった。したがって、革命によって解決しなければならない基本課題は、朝鮮人民の主要な敵である日本帝国主義を打倒して民族的独立を達成し、社会の民主化を実現することであった。

これから出発して綱領は、朝鮮革命が反帝反封建民主主義革命であることを明らかにし、日本帝国主義植民地支配の転覆と民族的解放を革命のもっとも先決的な課題として提起した。

そして革命のもっとも基本的な政治的課題としては、労働者階級の指導のもとに、労働者、農民をはじめ各界各層の広はんな反日愛国勢力が参加する人民政府を樹立することであるとした。

人民政府路線は政権の形態問題において左右両翼の偏向を排撃し、当時の朝鮮の現実にもっとも適した政権形態を明示したものであり、それはまた東満州遊撃根拠地——解放地区での実践的経験にもとづいて確立されたものであり、すぐれた生活力をもっていた。

綱領はまた、革命の基本課題を実現するための主要方途として反日民族統一戦線を拡大発展させ、革命軍隊を組織する問題を提起した。

このほかに綱領は、人民の民主主義的自由と権利、日本国家と日本人および親日分子所有の鉱山、企業所、土地など生産手段の没収、人民的教育制度の実施など社会経済的課題をも具体的に明示した。

じつにこの綱領は、すべての点で勤労大衆の根本的利益と各界各層の人民の共通する民族的利害関係から出発し

たわが人民の唯一の闘争綱領であり、歴史上、わが朝鮮人民がはじめてもつにいたったマルクス・レーニン主義的革命綱領であった。

朝鮮の社会発展の特殊性によって、朝鮮革命には独創的に解決すべき多くの複雑な問題が提起されていた。これはマルクス・レーニン主義にたいする豊富な知識と高い識見をもった人のみが解決しうる複雑な問題であった。それだけにこれは、朝鮮革命における未解決な問題として、課題としてのこされていたのである。

金日成将軍が作成した祖国光復会綱領が内外に宣布されたことによって、わが国では、はじめて独創的で科学的なマルクス・レーニン主義革命路線が樹立されたのである。

この偉大な綱領は、革命を誹謗中傷していた敵にとっては恐怖の爆弾であり、かれらの滅亡を宣告する歴史の判決文であったが、暗黒のなかでもだえる朝鮮人民にとっては灯台の明かりであり、革命的な情熱をよびおこす壮快な春雷であり、自由な未来を開拓する強力な武器であった。

またこの綱領は、植民地民族解放革命にかんするマルクス・レーニン主義理論を発展させたものであり、民族解放闘争をすすめる各国人民に大きな革命的影響をおよぼした。

将軍が作成した祖国光復会十大綱領の威力は、それが朝鮮革命に一大高揚をもたらした事実によってはっきりと実証されている。

金日成将軍の発起による祖国光復会の創建は、朝鮮人民の反日民族解放運動史上きわめて画期的意義をもつ出来事であった。

祖国光復会の結成により、わが国の民族解放運動において長期にわたる癌となっていた運動隊列内の不統一と分裂、対立、あつれきなどの悲劇は幕をとじ、すべての愛国的反日勢力がただ一つの旗——祖国光復の旗のもとにかたく結集されていった。

朝鮮人民はながいあいだ、外来侵略者と封建官僚支配層に反対する力強いたたかいをつづけてきた。歳月は戦乱のなかで流れていった。みすぼらしいわら屋根のしたでも刀がとがれ、たたかいがはじまればシャベルや鍬も武器となった。そして朝鮮の国土は愛国的な志士と人民の血でそまった。しかし、それまでの朝鮮人民の聖なるたたかいも卓越した指導者の導きをうけることができなかったし、明確で本質的な闘争目標と人民の利益と念願を集約した科学的な綱領をもつことができなかった。おびただしい犠牲をはらいながらも、たたかいが終局的な勝利を達成しえなかった原因はここにあった。

日本帝国主義の朝鮮占領を前後して展開された反日義兵闘争も、唯一の指導とたたかいの組織性、統一性を保障することができなかった。民族主義者の独立軍運動もやはり数十の群小集団に分裂し、独立闘争はおろか分派あらそいに終始した。

一九二〇年代の共産主義運動も分派分子の分裂策動と破廉恥な派閥あらそいによって、革命勢力を唯一の綱領のもとに統一し結集すべき自己の歴史的使命を実現することができなかった。

しかしこのような破壊的な分裂は、すべて運動の上層部をしめていた連中の犯罪であった。これに反し、広はんな人民大衆はたたかいにおいてにがい失敗を経験するたびに力強い団結をもとめ、この団結の中心にたって闘争を勝利へと導く偉大で賢明な革命の指導者の出現を待ちのぞんだ。

歴史の流れとともに、革命の指導者を待ちのぞむこの切実な念願は、一九三〇年代にいたってはじめて実現された。

こうして朝鮮人民は、民族の英雄金日成将軍を自己の賢明な首領として、偉大な指導者としてむかえ、そのまわりにかたく団結することによって分裂と対立に明け暮れていた悲劇的な過去と訣別し、ついに民族的な大同団結を達成することができたのである。

祖国光復会の創建によって、抗日武装闘争とマルクス・レーニン主義党創建の大衆的基盤はさらに拡大強化され、各界各層の人民大衆の多種多様な反日闘争は一つの大きな流れに統一されるようになった。そして朝鮮人民の全般的な革命闘争は、抗日武装闘争を中心にして急速に進展していった。

まさに祖国光復会の創建は、朝鮮人民の民族解放闘争史上に燦然たる一ページをかざり、不滅の金字塔をうちたてた。

祖国光復会綱領の偉大な思想は、解放後の共和国北半部で輝かしく実現された。綱領が提起した反帝反封建民主主義革命の課題を完遂することによって、北半部の人民は主権を自己の手中におさめた国の主人公として、社会政治生活のすべての領域において真の幸福を享受し、輝かしい社会主義の地上楽園を建設した。

幸福な北半部の人民は、朝鮮労働党と敬愛する指導者金日成首相のまわりに心を一つにしてかたく団結し、千里馬の勢いでひた走りに走りつづけている。

3 撫松県城の攻略戦闘

一九三六年の春は希望にみちみちていた。密林の深い渓谷には名も知らぬ山鳥が空高く舞いあがってはさえずり、遊撃隊員のうたう歌声が力強くこだました。一大高揚期へとつきすすむ革命、その革命の熱い息吹きのために、密林と山々が季節に先んじて緑をましていくかのようであった。

金日成将軍は南湖頭会議と東崗会議で提起した重大な方針にしたがい、朝鮮の北部国境に接した広大な地域に、日本帝国主義の急所をつく新たな遊撃根拠地——密営（山のなかに設置された秘密基地で、兵営、被服廠、兵工廠、裁縫隊室などがあった）を創設するたたかいを展開した。遊撃根拠地は部隊の積極的な遊動作戦を保障する軍事活動の拠

点であり、反日民族統一戦線運動と党創建準備活動を力強くおしすすめる足場であった。

このような根拠地創設のたたかいは、たえまのない戦闘によって遊撃隊の戦闘力を不断に強化し、住民にたいする敵の統制機能をまひさせる一方、地方の大衆のなかで政治工作を活発にくりひろげ、祖国光復会をはじめとする革命組織をひきつづき拡大しながら、革命の大衆的基盤をかためる方向で展開しなければならなかった。

これは容易なことではなかった。一つの目標を突破するたびに多くの複雑な課題を同時に解決しなければならなかったため、水ももらさぬ作戦と機敏な知略が必要であった。いたるところで強大な敵がいどみかかる条件のもとでは、新たな密営の創設は連続的な戦闘をともなわざるをえなかった。

将軍は一九三六年の五月、撫松県の西崗に司令部を設置し、密営を創設するための戦闘を組織してその指導にあたった。

将軍のひきいる人民革命軍部隊が撫松一帯に出現したという知らせにおどろいた敵は、兵力を増強して防備をかためる一方、人民にたいする弾圧と革命軍の「討伐」にやっきとなった。

敵は撫松県内に偽満軍第三混成旅団を駐屯させ、県城内には第三歩兵連隊と関東軍一個大隊を配置した。そして県内の中心的な部落と人蔘栽培部落には大隊ないし中隊の兵力をおき、そのほかにも警察隊として六個の歩兵中隊と一個の機関銃中隊および迫撃砲中隊を動員した。

当時、撫松一帯における敵の「討伐隊」の駐屯中心地域は、撫松県城、松樹鎮、馬良鎮、抽水洞、北崗、東崗、西崗、西南岔などであった。敵はこれらの地域に多数の兵力を配置し、その周辺部落にも小部隊を配置して大部隊を随時移動させながら「討伐戦」を強行した。

敵の大兵力がひしめく撫松県に進出した人民革命軍部隊は、県内の敵の中心地域を包囲できるよう馬鞍山、大鏚廠、楊木頂子、黄泥河子など、撫松県城をとりまく大山林地帯のほとんどすべての地点に戦闘部隊の休息と軍政訓

練を保障しうる密営をもうけた。
　このような密営を中心として、将軍はまず小部隊で手うすな敵に打撃をくわえ、以後しだいに敵の中心的拠点に進攻して大部隊をうつ方針のもとに戦闘を組織した。
　この方針にもとづくたたかいの幕は、一九三六年四月の撫松県漫江戦闘によって切っておとされた。
　漫江は、臨江、撫松、長白などをつなぐ山間の中心地であり、遊撃活動のうえで重要な位置を占めていただけでなく、兵力配置のうえから見ても敵の弱点の一つとなっていた。そこで将軍はまず漫江の敵をうちやぶり、付近一帯に駐屯していたかいらい軍警の行動を封じこめ、山林地帯における遊撃隊の自由な活動を保障しながら遊撃根拠地の創設に有利な条件をつくりだした。
　ひきつづき将軍がひきいる部隊は、五月に臨江県と撫松県の境にあたる老嶺（ロリョン）の敵を撃破した。連続的な打撃をうけた敵はあたふたと撫松県西南岔一帯に兵力を集中し「討伐」に血道をあげた。しかし人民革命軍部隊は翌六月、西南岔部落を奇襲して強力な一撃をあびせ、「討伐」どころか逆に敵を大きな混乱におとしいれた。
　果敢な奇襲攻撃に狼狽したかいらい「満州国」安東省警務庁と偽満軍第三混成旅団本部は、撫松一帯の各要衝の警備を強める一方、強硬な「討伐命令」を各駐屯部隊にくだした。しかしすでに浮き足だっていた敵は、将軍の奇抜な戦術と人民革命軍部隊の敏速な遊動戦術によっていっそう混乱におちいった。
　西南岔の敵を撃破した将軍は西崗進攻戦闘をすすめたのち、革命軍部隊を付近で休息させながら撫松県城を攻略する作戦計画をたてた。
　当時の県庁所在地であった撫松県城は、二万八千余名の人口をもつ大きな城市だった。
　山林地帯の中心にあたるこの県城は、敵にとっては人民革命軍に対抗するうえでの重要な軍事的要衝であり、東辺道（トンビョンド）一帯における「治安粛正」のおもな拠点でもあった。そのため敵はここに関東軍部隊と偽満軍部隊はもちろ

ん、県内の警察隊本部、警察の迫撃砲中隊、軽機中隊、独立基本分隊、遊撃捜索隊まで駐屯させていた。

当時この一帯には、王なにがしが指揮する偽満軍部隊に追われて山中にとじこめられた万順(マンスン)、占山好(チョムサンホ)、文明軍(ムンミョングン)などの「反日部隊」がたむろしていた。

将軍はかれらを味方にひきいれて連合作戦をおこなうことにした。しかしじつは、臆病な「反日部隊」に人民革命軍の勇敢な戦闘ぶりを見せようというものであった。将軍の戦術と人民革命軍の威力をすでに知っていたかれらは、すぐこれに同意した。

将軍は木だちのあいだから遠くひろがる撫松県城を見おろした。

忘れることのできない数多くの思い出につづられた少年時代と、情熱に燃える青春時代の一時期をおくった撫松――、この地で将軍は熱烈な反日闘士である父を失った。そしてあらゆる苦しみにたえて生きぬく母の毅然たる姿に心をうたれた。

将軍の脳裏には、すぎ去った日々の思い出が走馬燈のようによみがえってきた。華成義塾から帰ってセナル少年同盟を組織し指導した日々のこと、新聞をつくって配布したときのこと、大きな希望に胸ふくらませて任務を遂行した友人たちのことや、真理をもとめて飛躍をねがい、夜を日についでたたかいながら探求した日々のことなどがつぎからつぎへとうかんでは消えた。

この思い出多い撫松に別れをつげ、いたるところで敵をうちやぶりながら広大な地域に革命の炎を燃やしつづけてきた金日成将軍は、いまや日本帝国主義侵略軍を恐怖におののかせる人民の指導者として、ふたたびこの地に姿をあらわしたのである。

千八百余名の連合部隊をひきいた将軍は、撫松全市をくまなく見わたしてから緻密な作戦計画をたてた。

まず敵の増援部隊が予測される安図、濛江、臨江などの三方面に部隊を派遣して道路を遮断させ、「東に声をあ

げて西を撃つ」陽動戦術をもちいた。

八月十六日の夜、まず一部の部隊が将軍の命令をうけて県城付近の拠点である松樹鎮を奇襲し敵を混乱におとしいれた。

敵の混乱に乗じて翌十七日の夜明けまえ、人民革命軍部隊が城市へむけていっせいに攻撃を開始した。敵は城内の堅固な砲台を楯に重機関銃と軽機関銃、迫撃砲などを乱射し、死にもの狂いで抵抗した。しかし人民革命軍部隊はつづけざまに敵を撃破し、攻撃の手を少しもゆるめなかった。城市の小南門では、もっとも熾烈な戦闘が展開された。

ところが時間が経過するにつれ、戦況はしだいに革命軍側に不利になっていった。戦闘を開始したのちに夜が明けはじめ、北門から攻撃していた「反日部隊」が敵の反撃にぶつかって退却しはじめたからである。

この戦況を見てとった将軍は革命軍に有利な地点へ敵を誘導し、これを掃討すべきだと判断した。敵を城外におびきよせることによって、城内の人民の生命財産に被害をあたえまいという配慮からであった。

誘導戦術にひっかかった敵は東山にのぼり、そこから正面突撃をくりかえしたが、そのつど人民革命軍部隊の集中砲火と肉迫戦によって撃破された。

将軍の誘導戦術によって手痛い打撃をうけた敵は、ただちに関東軍司令部へ増援をもとめた。急報をうけた関東軍司令部は新京から飛行機二機を急派する一方、各地の部隊を撫松県城にむけて出動させた。

当時、咸鏡南道警察部長が「敵軍の撫松県城ならびに松樹鎮襲撃」と題して、いわゆる「討伐隊」と国境警備関係責任者におくった報告書にはつぎのように書かれている。

「人民革命軍および……その他各種の敵軍約一千名が撫松県城を包囲襲撃したため、同県城警備官憲はこれを撃退すべくつとめたが、弾薬欠乏のため苦戦中である。他方これとときを同じくして同県松樹鎮市にも前記敵軍のか

撫松県城の攻略戦闘

たわれと認められる約三百名が襲撃し、市街を完全に占領した。急報をうけた関東軍は、新京から爆撃機二機を県城に急派して弾薬を空中から補給すると同時に、空中爆撃をおこない、山城鎮(サンソンジン)、通化、桓仁駐屯の各部隊を出動させた。そして帽児山(モア)から満州国軍二個中隊、治安隊一個中隊、濛江県から治安隊二個中隊を出動させ、平安北道中江鎮守備隊田中大尉以下八十名も、この討伐のために十八日午後三時、越境して出動した…」（咸鏡南道警察部『対岸匪賊の状況にかんする件』一九三六年五～八月、九九～一〇一ページ）。

しかし敵は、いかに強力な部隊の増援をもってしても、すでにこうむった惨敗からのがれることはできなかった。将軍は全部隊に突撃命令をくだし、最後のあがきをつづける敵を谷間の一隅に追いつめ、せん滅的な白兵戦をくりひろげた。

撫松県城の攻略戦闘は、人民革命軍の大勝利に終った。

この戦闘において偉勲をたてた隊員のなかには、将軍が撫松地方で新たな師団を編成した際、「民生団」の

嫌疑をうけながらも新師団に編入された百余名の男女隊員もまじっていた。

かれらのなかに金鶴実（キムハクシル）女子隊員がいた。

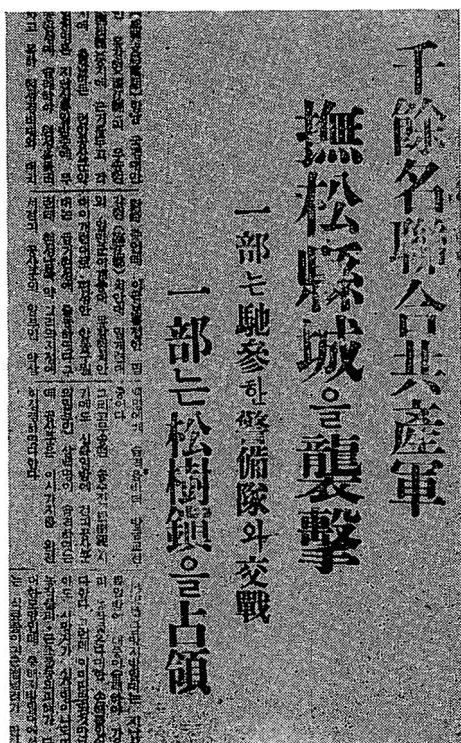
彼女はこの戦闘で軽機関銃の射手として両眼をしっかりと見ひらき、おそいかかる敵をつぎつぎと射ちたおしていった。凶悪な敵を片目で照準するだけでは気がすまなかったのである。

彼女は白兵戦でいつも先頭にたって数多くの敵をたおし、部隊を危機から救いだすためには単身で敵を誘引したこともあった。そのために将軍は彼女を、「朝鮮の娘であり、パルチザンの女将軍」であるとさえたたえた。

人民革命軍は、この戦闘で日本帝国主義侵略軍と偽満軍三百余名を殺傷または捕虜にしたほか、大量の戦利品をろ獲した。

こうして金日成将軍は、敵の要衝である撫松県城の攻略戦で勝利をおさめ、白頭山根拠地を創設するうえで有利な軍事的、政治的条件をととのえた。また、この戦闘をつうじて「反日部隊」との統一戦線が強化され、この地域一帯の反日勢力を結集して撫松県内各地に祖国光復会の組織をつくった。

撫松県城の戦闘で大きな勝利をかちとった将軍は、部隊をひきいて鴨

千餘名合共産軍
撫松縣城을襲擊
一部는駐參한警備隊와交戰
一部는松樹鎭을占領

撫松県城の攻略戦闘についての報道

緑江沿岸の長白県にむかう途中、撫松県南端の山奥にある漫江部落にたちよった。部落の大部分は朝鮮からの移住民で、かれらは血と汗でもって荒れ地を開拓し、やっと暮らしをたてていた。

将軍が部隊をひきいて漫江部落にたちよったのはこれが二度目であった。最初は四か月まえの南湖頭会議のあと、すなわち一九三六年の四月で東崗にむかう途中のことであった。そのとき将軍は部落の人びとに隊員たちのバラエティーにとんだ演芸を見せ、反日思想と愛国心を鼓吹する演説をおこなった。つまり、この部落の人びとと将軍は顔見知りの間柄だった。そのうえ部落の人びとは、数日まえにおこなわれた撫松県城攻略戦闘の勝利をつたえきいて知っていたため、村ぢゅうが総出で万歳を叫びながら熱烈に遊撃隊をむかえた。

村の若い娘たちは顔見知りの女子隊員を見つけると、なつかしさをかくしきれずにその名をよんだ。

「鶴実(ハクシル)さん！　このまえよりふとったのね」

「まあ、貞淑(ジョンスギ)たち！」

「貞淑たち」というのは、たまたま遊撃隊に金貞淑、許(フォ)貞淑、李貞淑という、同じ名前をもつ女子隊員が三人もいたので、その三人をひとまとめにしてこうよんだのである。

村人たちが歓声をあげながら将軍にあいさつをすると、満面に笑みをうかべた将軍は、その一人ひとりに会釈をかえした。

漫江で滞在した数日のあいだ、将軍は以前と同じように毎晩、村の小学校の講堂で隊員たちの演芸を披露した。将軍が戦闘と行軍のあいまに創作した劇『血の海』、『城隍堂(ソンファンダン)』（日本のほこらにあたる）、『慶祝大会』などはとくに人びとに深い感動をあたえた。なかでも、『血の海』の反響はきわめて大きかった。

劇『血の海』のあらすじはつぎのとおりである。

――貧しい農家で暮らす一人の母親。彼女には三人の子どもがいた。夫は祖国解放のたたかいのために家をでて

久しい。母親は三人の子ども、元男（ウォンナミ）と甲順（カプスニ）と乙男（ウルナミ）とともに苦しい生活をおくっていた。
第一幕では、日本の警察と中国の地主に迫害をうけ、貧しくしいたげられた一家の涙ぐましい生活が描かれる。きびしい敵の監視と虐待のなかで、かれらの生活はぎりぎりまで追いつめられた。
そうしたある日の夜、長男元男は弟と妹に別れをつげ、母親にあとのことをたくして抗日遊撃隊に入隊するため家をでる。母親と弟と妹は別れを悲しみながらも元男をはげましておくりだす。
第二幕では、それから一か月ほどあとの出来事が描かれる。姿を消した元男を追って日本の官憲が夜昼の別なくやってくる。そうしたある日、遊撃隊の偵察兵が負傷したからだをひきずってこの家にころがりこむ。母親と乙男は急いでかれをかくまう。しばらくすると日本の軍警が血まなこになってやってくる。そして母親と十一才の乙男に、遊撃隊員をだせと銃剣をふりかざす。しかし死をおそれぬ母親と息子は、あくまで知らぬといいはる。すると敵は乙男の胸に銃をつきつけ、母親にむかってどなった。
「さあ、これでもいわぬというのか！」
母親は真っ青になりながらも沈黙を守る。白状しなければ息子を殺すぞとおどかしながら、敵は引き金に指をかけた。母親は一瞬たじろぐ。しかし乙男は燃えるようなまなざしで母を見あげ、いってはならないと身ぶりで訴える。母親は吐きだすようにいう。
「絶対に知らない！」
ことばが終るやいなや銃声が鳴り少年がたおれた。母親も気を失ってたおれる。そうして敵はひきあげていく。
このとき妹の甲順がはいってくる。意識をとりもどした母親と甲順は、血にそまった乙男の屍にとりすがり涙にぬれながら悲しみの歌をうたう。

寒風すさぶ間島の
ちまたをひたす血の海よ
うらみを胸にゆきしひと
革命(しんく)の血流し死せるひと
ああいくばくぞ　ああ　かなし

しかばね累(るい)なし前ふさぎ
悲憤は胸をはや裂きぬ
骨身にしみるこのうらみ
いくたび死すとも忘るべき
かならず　はらさん　この　うらみ

歌はしだいに悲しみから怒りへと移っていく。このとき遊撃隊員が姿をあらわし、悲しみと怒りに身をふるわす。母親と娘は悲壮な決意をかため遊撃隊員とともに山へのぼる。

つぎの場面では、母親と娘が遊撃隊根拠地で、りっぱな遊撃隊員となった元男に会う。母親は裁縫隊員となり、十六歳の甲順は宣伝隊員になる。やがて遊撃隊は反動地主と悪質な軍警をうつためその村へおりてゆき、人民大衆を解放する——。

将軍の指導をうけた遊撃隊の俳優たちは、芸術の分野においても、かざり気のない素朴さと生活の真実を描く情熱的な演技によって村人たちの心をとらえてはなさなかった。

とくに母親と甲順が乙男の屍をだいて悲しみの歌をうたう場面では、すべての観衆が声をしのんで泣いた。それもただ泣くのではなく、こぶしをかためてひざをたたき歯ぎしりしながら泣いた。

劇が終わると、場内では「日本帝国主義侵略者を打倒しよう!」というシュプレヒコールがわきおこり、多くの青年たちが遊撃隊に志願してでた。

漫江にとどまっているあいだ、毎日のように入隊志願者が将軍をたずねてきた。将軍はかれらに、銃をもってたたかうことも重要であるが、穀物をつくって遊撃隊に食糧を供給することも大切だといってきかせた。それでも熱心に志願する青年には入隊を許したが、そのうちの一人は漫江で入隊したことから「漫江トンム」(同志という意味)とよばれた。

こうした演芸と娯楽会は、遊撃隊がたちよるすべての村や部落でおこなわれた。隊員たちも将軍の教えと模範に学び、自分たちの手で数多くの歌舞や戯曲を創作して上演した。

踊りと歌は遊撃隊員の生活の一部であった。それは戦闘のさなかに士気を高める陣太鼓の音であり、人民を教育する手段でもあった。

遊撃隊の芸術は人民のねがいを敏感にとらえたものであり、内容の真実性と平易さとによって高度な人民性をおび、明確な党派性と革命性につらぬかれていた。抗日武装闘争の時期に生みだされたこのような文学芸術は、わが国の革命的な文学芸術の誇るべき伝統となり、解放後の北半部において正しくうけつがれ、いま発展の一路をたどっている。

数日のあいだ漫江に滞在した将軍は、ふたたび部隊をひきいて撫松県と長白県の境にあたるトエゴル嶺をこえ、長白地帯へと進出した。

4　白頭山根拠地

霊峰白頭山のふもとから山なみをおこし、見わたすかぎり山また山のけわしい山岳地帯をなしている長白の大自然は、じつにすばらしい天然の要塞であった。
白頭山からのびているトェゴル嶺がこの長白県の北部をさえぎって高くそびえたち、その支脈がいくすじも東南にむかって走り、鴨緑江のほとりまできて絶壁をなし朝鮮の地とむかいあってそそりたっている。
その切りたった絶壁にそってせまい谷間をのぼっていくと、海抜千数百メートルの高地から見えるものは天涯につらなるはてしない大樹海だけであった。
子熊をつれた親牛ほどもある熊が出没する密林と貧しい村々をとりまいている深い谷間——。しかしこうした谷間も、敵をうちくだく朝鮮人民革命軍の耳をつんざくような銃声と勝利の歓声でわきたった。
長白一帯は東満州の他の地方と同じように、十九世紀の後半から朝鮮の移住民たちの手によって開拓されたところで、西間島としてひろく知られていた。
金日成将軍が人民革命軍をひきいてはじめてこの地域に進出した一九三六年当時は、長白県の人口約四万四千名のうち半数以上が朝鮮からの移住民で、その九〇パーセント以上が貧しい小作農と火田民であった。
将軍が遊撃隊をひきいて進出するまえまで、この長白一帯には「反日部隊」が横行していた。かれらのすることといえば貧しい農民のわずかばかりの家財を奪いとり、日本軍がくるといううわさを耳にすれば、たちどころに逃げだすことであった。
そのほか、古めかしい武器を手にする独立軍もときどき姿をあらわした。かれらは「独立軍」という名前のおか

げで人民から手厚いもてなしをうけたた。しかしかれらにはもともと人民の念願をかなえるだけの力も士気もなかった。

ちょうどこうしたとき、いたるところで日本の侵略者をうちやぶり、世間の注目を一身に集めていた金日成将軍が人民革命軍部隊をひきいてこの地にあらわれたのである。

これを知った長白地方の人民は大きな感激とよろこびにわきかえった。そして人びとは、将軍が長白についてからは夜空によこたわる銀河のなかに、いままで見られなかった新星が一つ光りはじめたとうわさした。銀河に新星が輝いた事実があったかどうかはともかく、将軍を慕う人びとの目には、まさしく希望の新星が明るく映っていたのである。

森のなかや谷間でとぐろをまいていた匪賊のたぐいはおそれをなして身動きもできなかったし、人民の利益をそこなう「反日部隊」の行為はきびしく取締られた。

しかし金日成将軍の長白進出はだれよりも敵の心胆を寒むからしめた。このころの将軍は敵から「白頭山の虎」とか「長白山の虎」という異名でよばれ、その勇敢さと威厳は世にひろく知れわたっていた。それまでは「無敵」と豪語していた日本の侵略者たちも、金日成将軍が長白の地へ進出すると「白頭山の虎」があらわれたといってふるえあがった。

長白に進出した将軍は、まず黒瞎子溝（ヒシャズゴウ）（中国語で熊の谷という意味）一帯を活動の拠点とさだめた。そして将軍が指揮する遊撃隊は国境付近の敵の「討伐隊」と要衝をうちくだくことによって白頭山の西南部一帯における新しい根拠地の創設を保障し、国内の人民大衆の反日気勢をより高めることを目的とする数多くの戦闘をくりひろげた。

一九三六年九月一日、長白県進出以後はじめての大徳水（チェドクス）戦闘における勝利は、国境一帯の人民に朝鮮人民革命軍の威力をいかんなくひれきした。

大徳水戦闘の翌日、人民革命軍は小徳水(ソドクス)でふたたび敵をうちやぶったが、これはとくに異彩を放ったたたかいでのちに「望遠戦闘」とよばれた。

小徳水に到着した革命軍部隊は、部落からおよそ二キロはなれた馬登廠(マドウンチャン)で休息をとった。ところが昼ごろ、「反日部隊」にたいする「討伐」で悪名高い日本軍中尉今野と偽満軍大尉のひきいる部隊が二道崗(イドガン)と十五道溝の二方面からしのびよってきた。

部下を待機させ双眼鏡で人民革命軍のようすをさぐっていた日本人将校が、大きくうなづきながら「よおーし」とつぶやいた。その瞬間、遊撃隊の歩哨がたった一発でかれを射ちたおしてしまった。おどろきあわてた敵は、やみくもに攻めこんできた。

敵の弱点を見ぬいた将軍は、はさみうちしてくる両翼の敵を同士うちにする作戦をたてた。

敵は南と北の両翼から、うっそうと茂った密林を利用して近よってきたが、別々の方向から接近してきたためたがいに味方を見わけることができなかった。

将軍は敵に気づかれないように部隊をいち早く西へ移動させた。そして革命軍は十五道溝の谷間をつたい、むかい側の山の尾根にのぼった。

まもなく馬登廠の密林のなかでは一大射撃戦がはじまった。将軍の予測どおり、二道崗方向の敵軍が十五道溝側からあらわれた味方を人民革命軍部隊だと早合点して射撃を開始すると、十五道溝方向の敵もこれに応じていっせいに火ぶたを切った。かれらは猛烈な勢いで同士うちをくりひろげた。

人民革命軍は、むかいの山の尾根で敵軍同士の白熱戦を見物した。射撃戦は二時間以上もつづいたが、二道崗方面の敵が退却ラッパを吹いたとき相手側はやっとそれが味方であることに気づき、あわてて射撃を中止した。しかしときすでにおそく、損害はあまりにも大きかった。

このように、人民革命軍にとっての小徳水戦闘は、たった一発で多くの敵を掃討した痛快きわまりない一戦であり、高見の見物で勝利をかちとった「望遠戦闘」なのであった。

後日この地方では、子どももおとなも、「『よおーし』がやられた」といっては敵のおろかさを笑ったという。

この戦闘ののち、将軍はひきつづく敵の攻勢に対処して敵後方の要衝を襲撃する大胆で積極的な作戦を展開した。

将軍はまず、鴨緑江をはさんで朝鮮の三水(サムス)郡好(ホ)仁(イン)面の対岸に位置する半截溝(バンジョルグ)を攻撃し（一九三六年十月十四日）、またたくまに部落を占領して敵に甚大な打撃をあたえたが、この勝利は直接、国内の人民に大きな影響をおよぼした。

またこの半截溝攻略によって、長白一帯の敵「討伐隊」と警察隊は、かつてない恐怖と不安につつまれた。

将軍は敵が混乱におちいり恐怖におののいてい

機關銃까지携帶한
共軍部隊陸續南下
長白縣內의人心은去益騷然
國境警備隊非常警戒

三百餘共軍大部隊
十九道溝를占據
銃聲은不絶、住民續續避難
騷然한咸南道對岸

東邊道와間島에
五千餘共軍活動
結氷期임으로出沒더욱旺盛
國境住民에一大威脅

朝鮮人民革命軍の朝鮮北部国境地帯への進出とその活動にかんする『朝鮮日報』の報道（1936年9月3日付）

る好機をのがさず、連続的な打撃をくわえる作戦をたてた。

半截溝戦闘の十日後の二十四日には二十道溝戦闘をおこない、その数日後には敵の「討伐隊」の本拠である二道崗を攻撃して、敵をよりいっそう大混乱におとしいれた。

白頭山根拠地の創設を目的とする一連の戦闘において、金日成将軍のすぐれた戦術による革命軍の猛攻撃をうけた敵は、まさに息つくひまもないほど連続的な大打撃をこうむった。

人民革命軍はひきつづき展開した敵との戦闘をつうじ、白頭山を中心とした長白一帯に密営地を創設した。

将軍は長白山脈のトエゴル嶺のふもと（海抜千五百メートル）の大密林地帯や国内進出に有利な地点である黒瞎子溝を革命根拠地の中心地帯とし、ここを中心密営地とさだめた。そこから東南約四十キロの地点には白頭山がそびえ、密林をぬけて北方約十六キロの地点にはトエゴル嶺の主峰である紅頭山（ホンドウ）があった。

黒瞎子溝からは、撫松、東崗、樺甸地方へ進出できるばかりでなく敦化方面にでることもできた。二十道溝、十八道溝、十三道溝など敵の後方の居住地区にはいつでもおりてゆくことができ、密林地帯とつながる鴨緑江さえわたれば、そこはもう朝鮮の大地であった。そのうえ長白山脈のけわしい山なみと深い渓谷、はてしない大樹海を自然の楯とするここに根拠地を設置すれば、朝鮮国境一帯のひろい地域と国内をまたにかけて、縦横無尽に遊撃活動を展開することができた。さらにここは国内と密接な連係をたもちながら、朝鮮革命を統一的に指導するうえでも最適の地帯であった。撫松県へ進出した当時からこの点に着目していた将軍は、ここを白頭山根拠地の中心密営地帯ときめ、これを中心としていたるところに密営を創設していった。

黒瞎子溝には、革命軍が長白地帯にはじめて設営した黒瞎子溝第一密営を中心として、紅頭山の周辺十キロ内外の地点に、黒瞎子溝第二、第三、第四密営がつくられた。またトエゴル嶺連絡所とよばれる紅頭山密営と白頭山密営（黒瞎子溝の最後の密営）が第一密営地から約四十キロはなれた白頭山のふもとに創設された。

この白頭山密営は将軍が撫松県で活動していた一九三六年の春ころ、すでに撫松の後方根拠地として設置されていたもので、兵器修理所、被服廠、病院などをもつ密営であった。負傷者と病弱者たちは撫松からこの密営におくられて休息をとり治療をうけた。そのため白頭山密営地は「療養所」ともよばれていた。

密営は黒瞎子溝だけでなく長白地区密営地帯のいたるところに散在していた。黒瞎子溝の第一密営は将軍がいる司令部のほか、長さ三十メートル、幅八メートル、高さ二メートル半の二百名を収容できる大きな兵舎と後方勤務室、衛兵所、特別兵舎などがある丸太づくりの大きな密営であった。

この黒瞎子溝第一密営に朝鮮革命の参謀部がおかれていた。将軍はこの密営で祖国解放の作戦計画をたて、満州一帯と国内の奥深くに祖国光復会組織網と革命組織をひろげ、それを直接指導した。将軍はこの密営で長白地帯と国内で活動していた共産主義者たちに会い、みずから作成した統一的な指導路線と運動方針をかれらにさししめした。

人民革命軍部隊は将軍の作戦計画にしたがい、北部国境地帯にひろく展開して敵に大きな打撃をくわえ、朝鮮国内へ急速に革命的影響を拡大していった。

人民革命軍の長白進出に大きな脅威を感じていた日本帝国主義は一九三六年十月、「朝鮮総督」南次郎と関東軍司令官植田とのあいだで緊急に図們会談をひらき、人民革命軍にたいする「討伐」をいっそう強化して長白地区の革命勢力を「圧殺」しようとくわだてた。

同年十一月、日本帝国主義は「通化討伐司令部」なるものを組織し、その指揮下に「靖安軍」および偽満軍混成第二、第三、第四旅団などをおき、長白一帯で「討伐戦」を強化する一方、いわゆる「東辺道復興委員会」を設置し、農村の「経済復興」という欺瞞的なスローガンをかかげて軍事道路と通信網などを大々的に拡大した。そして一九三七年には、長白県だけでも百七十五キロにおよぶ警備道路と六十三キロの警備電話線を新設した。

またかれらは、人民革命軍と人民とのつながりを断ち切るために「集団部落」と「保甲制度」を強化するかたわら、山奥にある住民の家屋を手あたりしだいに焼きはらったが、その数は一九三六年十二月末現在、長白県だけでも千百九十二戸に達した。（雑誌『三千里』一九三七年十二月号）。

さらに日本帝国主義は国境の警備陣を強化するため、朝鮮の北部国境地帯へ朝鮮駐屯軍第十九師団の兵力を増派した。そして国境沿線に砲台をそなえた警察官駐在所を二キロ間隔で設置し、国境警備隊には飛行機や重機関銃、大砲などを増強して「金城鉄壁」の陣をしいたと豪語した。

こうして、長白地帯と朝鮮の北部地域に大兵力を集中した敵は、人民革命軍にたいする大規模な「冬期討伐」を強行した。しかしこの気ちがいじみた攻撃も、一九三六年末から一九三七年のはじめにかけておこなわれた黒瞎子溝、紅頭山、桃泉里（トチョンリ）、鯉明水（リミョンス）などの戦闘においてあえなく撃破されてしまった。

なかでも一九三七年二月におこなわれた紅頭山戦闘は熾烈をきわめた。この戦闘に大軍を投入した敵は戦術上有利な高地にあった人民革命軍の歩哨所を占拠した。力関係は二十五対一だった。人民革命軍は劣勢のうえ不利な地点でたたかわなければならなかった。将軍は左右の森林のなかに一小隊ずつ配置したが敵は司令部のある密営を占領しようとして攻撃の手をゆるめず、迫撃砲、重機関銃、軽機関銃などで集中砲火をあびせてきた。しかし将軍はこの戦闘で積極的な防御と戦術的な退却とをたくみに駆使しながら数十回にわたる敵の攻撃をついに撃退した。

紅頭山戦闘の勝利は、将軍の機敏な戦法と司令部防衛の決意に燃えた人民革命軍隊員の英雄的なたたかいによってかちとられた。

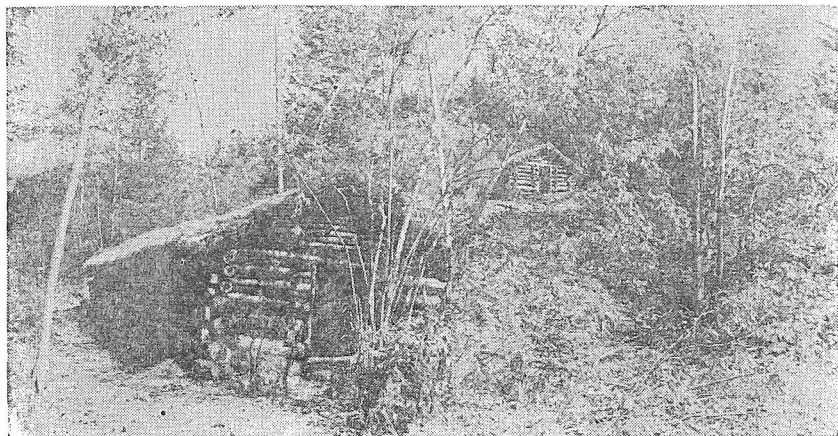
紅頭山で惨敗した敵はさらに兵力を増強しながら、ひきつづき追撃戦をいどんできた。将軍は同年二月二十六日、ふたたび鯉明水戦闘を指揮して敵兵百十余名を殺傷、六十余名を捕虜とし、軽機関銃をはじめ教多くの武器をろ獲する勝利をおさめた。

将軍は敵の戦術に対処し、密営に侵入してくる敵にたいしては正面攻撃と誘導と奇襲をもってこれを粉砕し、敵の本拠地を奇襲攻撃して混乱におとしいれたり、敏速な移動によって敵の包囲作戦を破綻させるなど、たくみな戦術を縦横に駆使して敵の「冬期討伐」を完全にうちくだいてしまった。

このような戦闘をつうじて人民革命軍の威力は日ましに高まり、人民大衆の反日気勢もいっそう高揚した。朝鮮人民は、日満軍警の大兵力を撃破した人民革命軍の戦闘威力、とくに金日成将軍の神出鬼没かつ絶妙な戦術に感嘆の声を放ち、将軍にたいする敬慕の念をますます深めていった。

そのころ朝鮮と満州各地では、「金日成将軍さまは、縮地法（地殻をたぐりよせて距離を縮め、遠方に早くつくことができるという術）をつかい、山をひとまたぎしてかけめぐられる」とか、「わが将軍さまは天がさずけた将帥で、いまや大変事がおころうとしている。日本帝国主義が支配するこの世のなかも、そうながくはない」などという話が伝説のように人から人へとつたえられていった。

こうして金日成将軍の名声は満天下にひびきわたった。日本のある雑誌はつぎのように書いた。

「金日成は、反満抗日の嵐のなかで……朝鮮人民革命軍をつくり、

黒瞎子溝密営と金日成将軍が指揮をとった司令部室

また祖国光復会長となって、……十万のパルチザンをひきいて日本の関東軍をなやまし、またそのころ満州にいた二百万の朝鮮人を反日闘争にたちあがらせた。この一九三〇年代の満州東辺道を中心とした大暴れによって金日成は『長白山の虎』と日本にも勇名をとどろかせた」（雑誌『新評』一九六六年八月号、四二～四三ページ）。
　このように「金日成部隊」という名は、敵にとっては恐怖と不安の代名詞となり、朝鮮人民には歓喜と希望の灯台となったのである。

5　祖国光復の旗ひるがえる

　金日成将軍がひきいる抗日遊撃隊によって、いたるところでせん滅的な打撃をうけた長白県とその一帯の敵は極度の不安におそれおののいていた。
　山とつまれた同僚の死体のまえで涙を流しながら、つぎの日には自分自身が死ぬか重傷を負うかも知れないと思うかれらの気持ちは、みじめでやりきれないものがあった。
　敵は恐怖のあまり風のある夜は木の葉のそよぐ音にも肝を冷やし、引き金に手をやってはまんじりともせず夜を明かす始末だった。いわゆる滅死奉公の精華を自認していた将校たちも、かたときも心がやすまらず風呂場へゆくにも武装した当番兵をつれていくありさまであった。
　このように日本の侵略軍のあいだでは、抗日遊撃隊にたいする恐怖が伝染病のようにひろがっていった。
　これに反し、広はんな人民大衆はよろこびにわいた。将軍はこの有利な情勢を利用して祖国光復会の組織をいっそう拡大しながら、そのまわりに各界各層の大衆を幅ひろく結集していった。
　将軍の方針にしたがって遊撃隊の数多くの政治工作員が軍服をぬぎ、労働者や農民に変装して長白一帯の部落と

国内各地にむかった。

将軍はかれらに、地下活動の原則と工作上とくに留意すべき点や具体的な任務とその遂行方法などをくわしく教えた。

とくに国内に派遣される政治工作員にたいしては、工場や農村に深くはいって祖国光復会の下部組織をつくること、またすでにある革命的な諸団体を改編し統合して祖国光復の唯一の旗じるしのもとに結集すること、さらにそれらの組織を拠点として分散している国内の共産主義者を結集しながら分派主義を徹底的に粉砕し、党創建の準備活動を着実におしすすめることなどを強調した。

政治工作員たちは組織の秘密を自分の瞳のように守りながら、大胆さと創意性、臨機応変の機知を十分に発揮してりっぱに活動した。

かれらは以前から連絡をつけていた区長や村長からニセの「住民証」や「渡江証」などをつくってもらい、日中でも公然と部落に出入りしたり、国境をこえて活動したりした。かれらは流浪民をよそおったり、知人をたずねる旅人に変装したりして各地に散らばっていった。

かれらのなかには権永壁（クォンヨンビョク）、金貞淑（キムジョンスク）、金在洙（キムジェス）、朴永煕（パクヨンヒ）同志らをはじめとする数多くの人民革命軍隊員と児童団員がふくまれていた。

派遣された政治工作員たちは、労働者、農民、学生、知識人をはじめ、手工業者、商工業者、民族主義者、宗教家、はては反日的な傾向をもつ地主にいたるまでの広はんな層に深くはいり、祖国光復会の創立宣言と綱領をくわしく解説した。

かれらはまず、地方によって異なる実情や住民の意識程度とさまざまな層の大衆の要求を正しくつかみ、それにあわせて談話、演説、文芸活動などの多様な形式と方法で宣伝活動をくりひろげた。

政治工作員たちはいろいろな層の大衆のなかに、朝鮮民族は党派のいかんをとわず、階層のいかんをとわず、信仰の有無をとわず、財産のあるなしをとわず、地方の別をとわず、すべて祖国光復の旗のもとに団結し、力のある人は力をだし、金のある人は金をだし、知識のある人は知識をだしあって、日本帝国主義を追いだすたたかいにこぞってたちあがらなければならないと訴えた。

日がたつにつれ、祖国光復会の綱領の偉大な思想は広はんな大衆のなかに深く根をおろしていった。

長白一帯の人びとは、全部で十節からなる「祖国光復会十大綱領のうた」をおぼえ、集会や仕事場でそれをうたった。

二千万の朝鮮人民　決起して
反日統一戦線　しっかりかため
敵の野蛮統治　うちこわし
人民政府樹立が　第一条

政治工作員たちは長白県の新興村、王家洞（ワンガ）、桃泉里、臨江県の七道溝などに定着して生活をいとなみ、その地方で活動する共産主義者たちに祖国光復会の十大綱領で明きらかにされた政治路線を解説し、かれらをしだいに祖国光復会の組織へと結束していった。こうして、祖国光復会の下部組織網の中核がかたちづくられた。

将軍は各地に一定の中核分子が養成され下部組織がつくりあげられた条件のもとで、これらの組織を統一的に指導するため、一九三七年二月に祖国光復会長白県委員会を組織した。そして祖国光復会の組織は、県委員会、区会、方面区会、支会、分会などと整然とした体系をもって拡大されていった。

祖国光復会の下部組織は将軍の方針にしたがい、地方の特殊性と各階層の意識水準にあわせて反帝青年同盟、婦女解放同盟、少年探険隊など各種の名称で組織された。

将軍は祖国光復会の組織を拡大するうえで下向組織と上向組織の方法を適切にむすびつけ、非合法組織と合法組織を正しくくみあわせる方針をとった。

将軍は大衆の組織、政治活動において、合法的な可能性を最大限に利用するよう指導した。

この方針にしたがって共産主義者たちは大衆のなかにはむろんのこと、敵の機関や御用団体にも大胆にはいりこみ、合法的な地位を占めて祖国光復会の組織網を拡大し地下革命組織を保護した。

祖国光復会の会員たちは、屯長、十家長、あるいは自衛団長、協和会長（いずれも敵の御用団体）などの職責を占め、その合法的な職務を利用して人民大衆に政治的影響をあたえる一方、祖国光復会会員の地下工作を保障した。共産主義者たちは大胆にも警察署長、税関長、区長、村長に接近してかれらと義兄弟の関係を結び、それによって敵の監視の目をさけたばかりでなく、人民革命軍に送る軍需物資の調達や逮捕された同志の救出など、重要な任務をりっぱにやりとげた。

長白県桃泉里では、十三道溝に駐屯していた偽満軍混成旅団が上部に送る総括報告を書かせる「信頼のおける人」をさがしていることを察知し、祖国光復会の中核的な会員二名を謄写専門の筆耕係としておくりこみ、約一か月にわたってかれらの秘密資料をそっくり探知し、それをただちに将軍に報告した。

正確で自由自在な組織戦術と機敏な活動によって各地に無数の根をはった祖国光復会の組織は、広はんな各界各層の人民大衆を革命の側に結集した。

白頭山根拠地を中心とする祖国光復会の組織は、満州の長白、臨江、撫松、安図、和龍、延吉、汪清、琿春、東寧、敦化、額穆、寧安、林口（リムグ）、牡丹江、吉林、濛江、磐石（パンソク）、樺甸、長春、輝南（フィナム）、通化、輯安、桓仁、寛甸（クワンジョン）など東

満州、南満州、北満州各地の市や県などにひろく根をはった。

とくに祖国光復会の組織網は朝鮮国内で急速にひろがっていった。

国内各地に派遣された政治工作員は、いたるところでたくみに祖国光復会の下部組織をつくった。恵山(ヘサン)、三水一帯にいち早く祖国光復会支会、分会などが組織され、豊山地区に派遣された政治工作員は、虚川(ホチョン)江発電部の黄水院(ファンスウォン)堤防工事場の労働者たちのなかに祖国光復会の組織をつくった。また興南(フンナム)地区に派遣された政治工作員は移住民に変装して興南肥料工場と本宮(ポングン)化学工場の近くに定着し、興南地区労働者と咸州(ハムジュ)郡を中心とした農民のあいだで精力的な政治工作をおしすすめた。

このように将軍は全国各地に政治工作員を派遣する一方、国内で活動していた共産主義者に直接会って、闘争路線と方向を明示しながら、闘争における欠陥とそれを克服するための方法についてもくわしく教えた。

将軍は権永壁、李悌淳(リジェスン)同志らをつうじて、国内で革命活動をしていた朴達(パクタル)同志と連係をむすんだ。このときから朴達同志は、それまでねがってやまなかった金日成将軍の直接の指導をうけることになった。

一九三六年十二月、将軍は黒瞎子溝の密営で朴達同志に会い、国内の革命家たちの活動状況を具体的に聴取したのち、今後の活動方向について明らかにした。

将軍は朴達同志に、祖国光復会の国内下部組織の一つとして朝鮮民族解放同盟を組織し、その組織網をひろげる課題と人民革命軍を積極的に援護する課題を提示した。

一九三七年一月に組織された朝鮮民族解放同盟は甲山(カプサン)一帯の祖国光復会下部組織として、金日成将軍の統一戦線路線を大衆のなかに浸透させ、各界各層の大衆をその傘下に結集した。

こうして祖国光復会の組織は、将軍の正しい指導と政治工作員の積極的な活動とによって、わずか数か月のあいだに、甲山、恵山、好仁、新乫坡(シンガルパ)、豊山、厚昌、新義州(シンイジュ)、茂山、会寧、穏城(オンソン)、羅津(ラジン)、富寧(プニョン)、清津(チョンジン)、鏡城(キョンソン)、朱乙(ジュオル)、明(ミョン)

朴達同志に朝鮮民族解放同盟を組織する任務をあたえる金日成将軍

川(チョン)、吉州(キルチュ)、城津(ソンジン)、端川(タンチョン)、北青(プクチョン)、興南、咸興、新興、永興(ヨンフン)、元山、鉄原(チョルウォン)など全国各地にひろがっていた。

祖国光復会の組織が急速に拡大発展することによって、広はんな反日大衆が革命の側にしっかり結集し、朝鮮革命全般にたいする唯一の指導体系が確立されていった。そして国内と満州一帯で急速に拡大していった祖国光復会の会員数は、じつに数十万におよんだ。

祖国光復会の組織が拡大発展していくにつれ、遊撃隊と人民大衆との血縁的な連係はますます強固になっていった。金日成将軍の指導する人民革命軍が、自分たちの幸福のためにたたかう真の人民の軍隊であると知った人民大衆は、あらゆる力と手段をつくして遊撃隊を支援した。

祖国光復会は民族解放の目的と課題を広はんな人民大衆に解説し、祖国解放のための共同闘争の旗のもとに、すべての愛国勢力を動員し結集させるうえで、じつに巨大な役割をはたした。

数多くの青壮年が祖国光復会の組織をつうじて人

民革命軍に参加し、人民革命軍の隊伍はたえず強化された。長白地区だけでも一九三六年八月以後、数か月間に三百余名の青壮年が先をあらそって人民革命軍に入隊した。また国内の数多くの愛国的青年が金日成将軍をたずね、人民革命軍の隊伍にくわわった。

朝鮮青年が人民革命軍に入隊した状況について、『三・一月刊』創刊号はつぎのように報じている。

「民族解放戦線の拡大、熱血青年、愛国勇士が金師長部隊にぞくぞく加入

（××通信）満州で神聖な……民族反日革命戦線が拡大されるにつれ、鴨緑江、豆満江沿岸からきこえてくる正義のときの声、これはわが祖国の熱血に燃える青年、愛国的勇士の戦闘的気勢をはげしくゆすぶっている！　朝鮮西北部各地の熱血青年と愛国青年は、列をなして毎日七、八名ずつ鴨緑江、豆満江をわたり……金師長部隊に加入している。その後、満一か月間に反日新戦士たちは九十余名に達した。かれらは朝鮮国内の地勢と道路および各地の状況に明るく、武装隊伍の前衛として朝鮮国内に進出のときは、その先頭にたつことを志願したという。日本帝国主義は大きな恐怖を感じながら国境防備に死力をつくしている」（『三・一月刊』創刊号、一九三六年十二月、五六〜五八ページ）。

このように祖国光復会は、決意のかたい、たくましい青年たちをえらんで遊撃隊に参加させる一方、数多くの大衆をめざめさせ、真心こもった莫大な援護物資を遊撃隊におくりとどけた。

また祖国光復会の組織は、全人民の武装化にかんする金日成将軍の方針にしたがい、会員のなかの優秀な青年を中核として生産遊撃隊を組織した。この生産遊撃隊は結成後わずか五、六か月のあいだに、ほとんどの支会で一個中隊程度の勢力に成長した。生産遊撃隊は直接、人民革命軍の指導をうけながら軍事訓練をおこない、敵の手先を摘発して処断した。また軍需物資を集めて遊撃隊におくり、敵情をさぐっては上部に報告した。

こうした人民革命軍と祖国光復会のめざましい活動によって、白頭山の西南部一帯は朝鮮革命の力強い堡塁にか

わり、全国的な規模で革命運動を新たな高揚へと燃えあがらせる根拠地として、また人民革命軍の強固な後方としてはかり知れない大きな役割をはたした。

金日成将軍は国内深く祖国光復会の組織網を拡大しながら、独立軍をはじめ民族主義者、宗教家たちをも祖国解放の旗のもとに結集した。

そのころまでのこっていた独立軍部隊は、梁世奉（リャンセボン）が指揮する「朝鮮革命軍」だけであった。一九三〇年代のなかばにいたって金日成将軍のひきいる抗日遊撃隊の威力が日ましに強化されるにつれ、「朝鮮革命軍」の隊列のなかでは共産主義者と接近し、かれらと連係を結ぼうとする動きが高まっていた。

「朝鮮革命軍」の多くの隊員のあいだでは、金日成将軍にたいする敬慕と敬愛の情が高まり、将軍が指導する人民革命軍に合流しようとする動きがしだいに大きくなっていった。一方この部隊は、日本帝国主義侵略軍の「討伐」と切りくずし策動によって日ましにその隊伍が弱まり、人民革命軍と合流しなければ、抗日の旗じるしを守ることができない状態におちいっていた。

将軍は祖国光復会創建の直後、「朝鮮革命軍」の指導者たちに祖国光復会の創立宣言と十大綱領をそえた手紙をおくり、反日闘争で協同することを提議した。将軍はかれらに、「血の歴史によってはぐくまれてきたわが独立運動は、政治上、軍事上、その組織の統一性がなく……、一つの民族でありながら数十個の団体と軍隊を封建割拠式にあちこちに分散させただけでなく、たがいに衝突をおこし、血を流し、手にした銃を自分の隊列にむけて発射するようなことまであった」過去のにがい教訓を想起させ、「この鉄の教訓と経験により、わが民族の総意を把握し、独立運動の唯一の統一的機関である祖国光復会（その宣言と綱領だけではなく実際の活動にもとづいた）の旗じるしのもとに総動員することを」訴えた（『三・一月刊』創刊号、一九三六年十二月）。

祖国光復会の創立宣言と綱領および将軍の提議は、「朝鮮革命軍」の隊員たちに大きな感銘をあたえ、強い支持

をうけた。将軍の提議にたいして「朝鮮革命軍」は、一九三六年の八月、参謀長の名義で「祖国光復会の盛況をきいて、祖国の民族事業のためよろこびにたえません。……貴下の代表を派遣してくださるならば、たいへんうれしく思います」(『三・一月刊』創刊号)と返書をおくってきた。

一九三七年八月、将軍は人民革命軍代表を「朝鮮革命軍」に派遣し、祖国光復会の組織問題を中心に反日統一戦線のための会談をすすめた。そのうちかれらは、朝鮮人民革命軍に合流することを熱烈にねがってでた。そして「朝鮮革命軍」は一九三八年三月、崔允亀司令の指揮のもとに光明の道を見いだし、人民革命軍に編入されるにいたった。

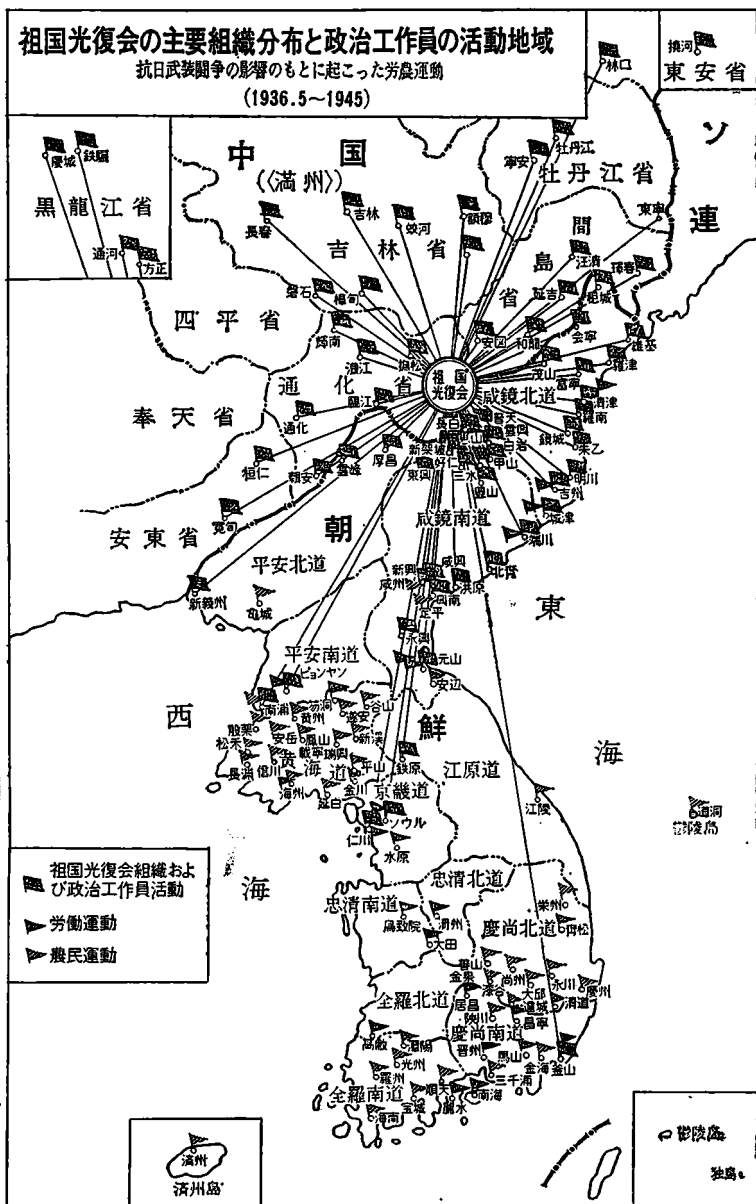
人民革命軍に編入された崔司令をはじめとする「朝鮮革命軍」の隊員たちは、金日成将軍の深い愛情と正しい指導のもとにすべてが共産主義者に育ち、一人の変節者や逃亡者をだすこともなく祖国解放の日まで勇敢にたたかいぬいた(崔允亀司令は人民革命軍の司令部参謀として活躍したが、一九三八年十二月、樺甸県で戦死した)。

一方、金日成将軍は、天道教(朝鮮におこった宗教で、天と人が一つに和合した理想郷をめざした)の教徒をはじめとする宗教家たちをも反日民族統一戦線に結集させた。

将軍は政治工作員に、「宗教の信者たちにも祖国がなければならない。植民地の信者たちには事実上、信仰の自由がない。祖国が独立してこそ信仰の自由も保障されるのだということを教えなければならない」とのべた。

政治工作員は将軍の教えを肝に銘じ、宗教家たちのなかでねばり強く活動した。

かれらは一九三六年十一月、天道教の長白県宗理院院長李典華を説得して祖国光復会に加入させ、かれをつうじて県宗理院さん下の多数の教徒を組織化した。かれらはまた、三水、甲山、豊山郡内の宗理院に派遣され、組織宣伝活動をすすめた。さらに政治工作員たちは一九三六年十一月、天道教の咸鏡南道の道正であった朴寅鎮と連係を

祖国光復会の主要組織分布と政治工作員の活動地域
抗日武装闘争の影響のもとに起こった労農運動
(1936.5～1945)
中国
(〈満州〉)
ソ連
黒龍江省
吉林省
牡丹江省
間島省
四平省
通化省
奉天省
安東省
東安省
祖国光復会
朝鮮
咸鏡北道
咸鏡南道
平安北道
平安南道
黄海道
京畿道
江原道
忠清北道
忠清南道
慶尚北道
慶尚南道
全羅北道
全羅南道
西海
東海
ソウル
済州島
鬱陵島
独島
祖国光復会組織および政治工作員活動
労働運動
農民運動

むすび、かれに祖国光復会の綱領と宣言をつたえた。

朴寅鎮は政治工作員たちの指導のもとに祖国光復会の会員となり、数多くの天道教徒を会へ加入させた。かれはソウルにおもむき、天道教の中央上層部に金日成将軍の反日民族統一戦線路線を解説し、天道教もこれに合流すべきだと提起するまでにいたった。

またこのころ地位の高い宗教家が直接、金日成将軍をたずねて祖国光復会の十大綱領を積極的に支持し、反日闘争にたちあがる決意を表明したこともあった。

これについて『三・一月刊』は、「天道教上級指導者某氏、わが光復会の代表を親しく訪問」という見だしのもとに、つぎのように報道した。

「内外地において有力な大衆的基盤をもつ天道教××委員某氏は、燃えたぎる愛国の熱情をいだいて、親しくわが代表司令金日成同志を訪問した。

前記某氏は個人的に、わが光復会綱領といっさいの主張について賛意を表明するとともに、天道教青年党員百万名を朝鮮独立のための戦線に出動させる意見を明示し、将来光復会といっそう緊密に連絡をとることをかたく約束したという」（『三・一月刊』創刊号、一九三六年十二月）。

祖国光復会の組織網が拡大するにしたがって、金日成将軍にたいする朝鮮人民の敬慕と期待は日ましに高まり、将軍が指導する抗日武装闘争への支援は、人民大衆のあいだで動かしがたい趨勢となっていった。これについて日本警察の秘密文書はつぎのように指摘している。

「国境地帯の住民は……とくに対岸……長白県を根拠地として活動中である……金日成を……世界的偉人、または朝鮮民族の救世主のごとく信じ、かれを敬慕し、陰に陽に支援するものたちが多い。」（恵山警察署の『恵山事件調書』一一ページ）

朝鮮人民は明るい未来にたいするかたい信念をもって、金日成将軍がかかげた祖国解放の旗を高くひるがえしながら、反日民族解放闘争をいっそう力強く展開していった。

6　人民のなかで

金日成将軍が長白山に進出し、敵をひきつづきうちのめしているという消息をつたえきいた人民大衆は、かぎりないよろこびにわいた。

どこもかしこも祝いごとがあったかのようにわきかえり、人が集まるところではどこでも将軍の話でもちきりであった。そのため将軍に会うことが、だれもの強いねがいであった。将軍と握手をしたという人でもいようものなら、みんながそれをうらやんだ。

しかし将軍は謙虚そのもので、自身を目だたせないように心がけていた。将軍の身なりはいつも質素で、隊員のなかにまじってかれらと同じように働いた。行軍の途中で部落にたちよるようなときには、隊員たちとともにほうきを手にして家のまわりを掃除したりした。そのため将軍のまえで、金日成将軍はどこにおられるのか、とたずねる人がいたほどである。

しかもそれは、一度や二度ではなかった。

一九三六年の夏、将軍のひきいる部隊が長白にむかって行軍をつづけていたある日のことだ。部隊はある製材所の近くで休息した。将軍は軍需担当の同志をつれて製材所労働者の宿舎へはいっていった。

労働者たちは目をまるくした。日本軍隊とかいらい軍警にしいたげられてきたかれらの顔には、一瞬おどろきの色がうかんだ。

将軍は親しみをこめたあいさつをのべ、朝鮮人民革命軍だが少し休むためにたちよったのだとつげた。そして食事の準備をしてもらうわけにはいかないだろうかとたのみながら、かれらのまえに金をさしだした。

「そうですか。あなたたちは金日成将軍さまの部隊の方々だったんですか！　ほんとうにご苦労さまです」

労働者たちは、うれしさのあまりどうしてよいかわからず、われ先にとあいさつをしはじめた。

かれらは、だされた金をおしかえしながら口をそろえて、国を奪いかえすためにご苦労なさっている方々に食事のおもてなしができなくてどうしましょうといった。

だが炊事場に目をやるかれらの顔には困惑の色がありありと見えた。そこには、じゃがいもの袋しかなかったからである。

かれらの気づかいを察した将軍は、「ご心配にはおよびません。わたしたちは人民と運命をともにする革命軍です。あなた方がめしあがっているものなら、なんでもかまいません」といって安心させた。

かれらはすぐ食事の準備にとりかかった。将軍は隊員たちを宿舎によびいれた。そうして袖をまくりあげると隊員たちとともに労働者に手をかしてじゃがいもの皮をむき、薪をわり、水汲みもした。それればかりか、ほうきをもって宿舎のまわりをていねいに掃き清めた。

将軍はかれらの生活状態をきいてから、労働者が苦しまねばならない原因がどこにあるのかをわかりやすいことばでくわしく説明した。そのためかれらは労働者の生活状態にくわしい将軍を見て、ついさいきんまで労働者の生活をしていて遊撃隊にはいった隊員にちがいないと考えた。

食事を終えた遊撃隊は出発準備にとりかかった。将軍は隊列がととのうと、夜間行軍のときに注意すべき点を強調した。

将軍が出発命令をくだそうとしたときであった。群衆をかきわけてまえにすすみでてきた一人の労働者が将軍に

たずねた。
「司務長（事務担当士官のこと）さん！　金日成将軍さまはどこにおられるのでしょうか？」
その労働者は、さっきまで平凡な軍服を着て隊員たちに食事の準備をさせ、労働者たちに手をかしてくれた将軍のことを司務長だときめこんでいたのである。
労働者たちは一瞬しーんとなって将軍の返事を待った。
将軍は微笑をうかべたままだった。たまりかねた隊員たちはどっと吹きだした。その労働者とほかの人たちはなんのことかわけがわからず、きつねにつままれたようにきょとんとしていた。
将軍は質問した労働者の肩にやさしく手をのせ、こう話しかけた。
「わたしたちは、日本帝国主義に反対してたたかう朝鮮人民革命軍です。だからおたずねの金日成も、かれら隊員とともにすぐ近くにいるにちがいありません」
「ええ？　すぐ近くにいるとおっしゃるんですか。どこに？」
かれはこういいながら、列をつくってならんでいる遊撃隊員にむかい、「一度でいいから、ぜひ将軍さまにお会いできるようにしてください」とたのんだ。
このとき軍需担当の同志がいった。
「あなたのすぐまえにいらっしゃる方が金日成将軍です」
思いがけないことばに労働者はしばらく口もきけず、ぽかんと将軍の顔をみつめていたが、「将軍さま！」といったきり、ながい別離ののちに母親と会えた子どものように将軍の胸に身をなげだして涙ぐんだ。
「お許しください！……」
かれはのどをつまらせ、とぎれとぎれにこういっただけでそれ以上ことばをつづけることができなかった。

波のうねりのような感激が群衆をつつんだ。どの顔にもよろこびの涙が流れていた。
将軍はどよめく群衆にむかって謙虚で素朴なあいさつをかえした。
人びとは奥深い感動に身をほてらせながら、部隊をひきいて出発する将軍のうしろ姿が遠くなって見えなくなるまで、その場を動こうとしなかった。
こうした場面は、将軍のゆく先々でよく見かけることであった。
将軍はつねに人民大衆を自分自身と遊撃隊員のうえにおき、自身を一人の平凡な人民の息子にすぎないと考えていた。
遊撃闘争の初期のころ、部隊を引率した将軍がある農家のまえでしばらく休息したときのことだった。
将軍は、寒いときはすわって休息をとるよりもからだを動かした方がよいといいながら、農家の庭につんであった薪をわりはじめた。隊員たちも山へいって薪をとってきたり、家のまわりの雪をかき、水をくんできた。
しかし薪をわってくれた人が、ほかならぬ金日成将軍であると知った家の主人は、「司令官がそんな仕事をなさるなんて……」といいながらとまどった。すると将軍は、「司令官も人民の息子です。みなさんがする仕事なら、わたしにだってできるはずでしょう」と笑ってこたえた。
ここにこそ、将軍の偉大さと人民大衆をひきつける大きな力があったのである。
将軍は、しばしば隊員たちにつぎのように話した。
「共産主義者は、大衆からはなれてはいっときも生きられないものだ。大衆をめざめさせ、大衆を教育して革命隊列に結集させることだけに目的があるのではない。共産主義者は大衆の血となり、肉とならねばならない。人民の利益のために身を賭してたたかい、人民のために生きなければならない」
将軍は人民の真心こもったもてなしにたいしても、それがかれらの生活に負担をかけるような場合には、そのも

てなしをかたく辞退した。
一九三七年の春、将軍が百余名の隊員をつれて長白県新興村にたちよったときのことである。思いがけず将軍をむかえた新興村は歌と踊りでわきたった。村ぢゅうの老若男女が将軍と隊員たちにあいさつをのべ、歓呼の声をあげた。
将軍は、まず村の老人たちに会ってあいさつをしながら、かれらの異国での苦しい生活をなぐさめ、力強くはげました。
婦女会員たちは祝いごとのある家の主婦のようにはしゃぎながら、大切なお客をもてなす料理づくりに大わらわだった。大きな釜がかまどにかけられ、若ものたちは豚をつぶすために包丁をといだ。そばをつくる用意もととのった。村ぢゅうの人びとが真心こめて遊撃隊を歓待しようとつとめているのだった。
このようすを見た将軍は祖国光復会の責任者をよび、みんな生活が苦しいのだから豚をつぶすようなことはしないで、もっと大きく育てて生活のたしにするようにと指示した。
村の人びとは心のこりでならなかった。心づくしのもてなしができないのを残念に思い、婦人たちのなかには涙ぐむ人さえいた。しかし将軍の意にそむくわけにはいかなかった。
食事には結局、すりごまの汁をかけたそばだけがだされた。村の人たちは申しわけなさそうであったが、将軍と隊員たちには、かえってこのような質素な食事の方が、ぜいたくな料理よりもはるかによかった。将軍はよろこびの色をかくさず、そばの味をくりかえしほめながら、おいしそうに箸をはこんだ。
これとおなじような出来事は、一九三六年の正月をまえに人民革命軍部隊が官地付近の村にとどまっていたときにもおこった。
村の人びとは金日成将軍といっしょに正月がすごせるものと、心からよろこんでその日を待った。

かれらは一つ家族のように正月を楽しくすごそうと、心のこもった贈物まで用意していた。将軍は村人たちのあたたかい心づくしに感謝のことばをのべながら、家々をたずねては生活の状態をくわしく見てまわった。村人たちの感激はひとしお大きかった。どの家でも、将軍と遊撃隊をもてなすために腕によりをかけた。そして、正月には必ず自分の家にきてください、と申しあわせたようにたのむのだった。

しかし将軍は、大晦日になると急いで理由もあかさず部隊をひきいて村からたち去った。村人たちのさびしがりようはたいへんなものだった。将軍は、ていねいなお礼のことばをのこして部落をあとにしたのだ。

部隊は黄泥河子の深い森林地帯にはいり、製材所の労働者がつかっていた丸木小屋を修理して宿営した。このとき将軍は、部隊を村からひきあげた理由をはじめて説明した。

「正月というものは、だれにとっても楽しいものだ。……しかしわが朝鮮と、この東北の地に日本帝国主義者と地主たちがいる以上、正月を心から楽しめる人がはたしてどのくらいいるだろうか。官地付近の部落の人たちの状態を見よう。何人かの地主をのぞいては、裕福に暮らしている人が一人でもいただろうか。住民の大多数は、衣服さえ思いどおりに着られず、その日の食事にもこと欠く人たちなのだ。……かれらのなかに、その日の食事も満足にできないような人がいることを知っていながら、かれらが準備してくれる食事をためらいもなくたべ、正月を楽しむことができるだろうか。一人や二人でもないわれわれの部隊全員が、たとえ一日だけだとしても、あの村の人びとにどれほど大きな負担をかけることになるだろう。……われわれはマルクス・レーニン主義思想で武装した軍隊であり、人民の真の息子たちであり、娘たちである。われわれは祖国と人民のために、ためらうことなく命をささげる闘士たちである。だからわれわれは、たたかいにおいてもつねに機敏でたくみでなければならないが、いかなるときでも人民を大事にし、人民の利益を自分の命のように守りぬき、どのような艱難辛苦にもたえぬくことを知り、人民とともに楽しみ、人民とともに前進する心がまえで生活しなければならない。まさにここにこそ、われわれ

われの真の幸福と誇りと希望があるのだ」
隊員たちは将軍のことばをききながら、人民のためにたたかう誇りを強く感じた。
将軍はこの地で、隊員たちとともに正月をすごした。正月の特別料理といっても、せいぜい粟飯がでるだけだった。将軍は微笑をうかべ、わずかな粟飯だが山海の珍味のつもりでたべようといいながら、祖国で楽しい正月をむかえる明るい未来について語った。
将軍からこのように教育され、訓練されていたからこそ、遊撃隊員は、いつ、どのような環境のもとでも人民の利益をそこなわなかった。規律のためだけではなかった。それが遊撃隊員の使命であり、本来の姿であって、それだけがかれらのとりうる唯一の道だったのである。
幾日も飢えにさいなまれる苦難にみちた行軍の途中で運よく民家を見つけだしたときでも、その家に人がいなければ食糧には手をつけず、いつ帰るとも知れない主人の帰りを待つこともしばしばあった。いくら待っても主人があらわれず、やむなく無断でその家の食糧に手をつける場合には、必ずその場所に余分に計算した代金をおいてくるのが遊撃隊のならわしであった。
将軍によって教育され、将軍によって育てられた遊撃隊員のこの美しく高尚な品性は、いかなる逆境のもとでもくずれることがなく、逆境にあればあるほど、ますます気高く輝く気質なのであった。
これは、かたむきかかったわらぶきの家で生まれ、不正だらけの社会におしひしがれ、身もだえしながら成長した人間だけがもつことのできる尊い品性であり、不幸な人びとの苦しみと憎しみを自分のものとした人民の真の息子と娘たちだけがなしうる美しい行為であった。
これはまた、国を奪いかえし、人民の社会を築こうとする気高い思想をもつ闘士たちの本領であった。
こうした行為も将軍と遊撃隊員にとっては、とりたてていうほどのことではなかった。村に到着すれば人民大衆

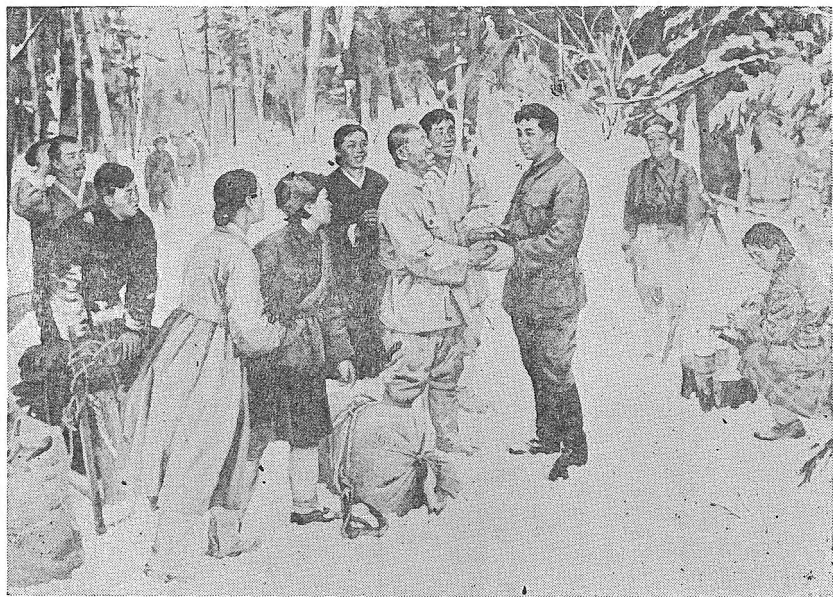
に戦利品をわけあたえ、家の主人よりも熱心に家事や野良仕事を手つだうことが習慣のようになっていたからである。

人民もだまってはいなかった。かれらは少しでも将軍の大きな愛情と配慮にむくいようと、先をあらそって遊撃隊を支援した。かれらは危険をもかえりみず敵情をさぐっては遊撃隊に知らせ、すすんで道案内をひきうけたりした。またかれらは政治工作員を命がけで守り、食糧、衣料、はきものなど、あらゆる援護物資を集めておくった。

幼い少女も遊撃隊におくる援護物質をにないさえすれば、けものがほえる真っ暗な密林もおそれず、からみあった朽木をかきわけて任務をなしとげた。

人民革命軍隊が長白に進出して以来、人びとは毎日のように米や被服やはきものなどを背にし、けわしい山なみをこえては部隊をたずねてきた。

こうして一九三七年の春、この一帯の二十余か村の人びとがわずか一、二か月のあいだにはこんだ遊撃隊への援護物資は穀物十石以上、木棉百余反をはじめ、地下足袋、わらじなど莫大な量にのぼった。こうした援護活動は、決してなまやさしい仕事ではなかった。日本の警察は各地にスパイ網をはりめぐらし、住民を徹底的に監視していた。はなはだしい場合は、市場や商店での売り買いにも難くせをつけてきた。そして革命軍とのあいだに、ほんのわずかなつながりでもあれば無条件に銃殺であった。

こうした状況のもとで、祖国光復会の組織は不必要な犠牲をださないために、まえもって援護物資を準備しておいてから革命軍部隊に連絡する方法をとった。そして部落に攻めてきた革命軍部隊によって、それが「押収」されるというかたちをとって援護物資をわたしたりした。ときには革命軍に「脅迫」され、強制的に物資を提供させられたかのように見せかけることもあった。

援護物資をはこんできた人民と会う金日成将軍

このように革命軍への援護のためにはあらゆる方法がもちいられた。人が寝静まった真夜中に穀物を刈りとり、それを釜でかわかし、一晩ぢゅう重い臼でひいて食糧を保障することもあった。

また革命軍へ送る大切な日用品を手にいれるために、マッチ箱までひっくりかえして調べるという国境警備網をくぐり、鴨緑江をゆききしたことも数えきれないほどだった。

人びとは革命をたすける仕事のためなら、昼夜の区別なく働いたし、けものさえ凍え死ぬという真冬の吹雪もおそれず、滝のような豪雨もいとわなかった。

そこには、奪われた国と夢にも忘れることのできないなつかしい故郷をふたたびとりもどそうという燃えるようなねがいと、そのねがいをこの世でただ一人かなえてくれる金日成将軍と人民革命軍にたいするかぎりない愛情と真心がこめられていたのである。

しかし将軍は、たとえそれが人民の真心こもっ

た援護物資であっても、それをむやみにうけとるようなことはしなかった。
　一九三六年十月の下旬、将軍のひきいる部隊が長白県十九道溝の趾芉界（ジサンゲ）の奥に、しばらくとどまっていたときのことであった。二人の隊員が、みそ汁にいれる大根や白菜の葉をもとめて、とりいれが終ったあとの薬水洞（ヤクスドン）の畑を歩いていた。
　そのとき、黒い牛をひいて市場から帰る村の人たちがかれらを見つけた。そして、かれらが食糧をもとめていることがわかると、何人かで相談をしたうえ、「これは、わたしたちのささやかな贈り物です。どうかうけとってください」といって、ひいてきた黒牛の手綱を隊員の一人ににぎらせようとした。
　おどろいた隊員はそれをかたくことわりつづけたが、村人たちの強いすすめにほだされてその牛をひいて帰るほかはなかった。
　牛をひいてきたのを見た炊事隊員たちは、はしゃぎながら包丁をといだ。そのとき隊員の報告をきいた将軍が姿をあらわした。将軍はしばらくだまって牛をながめた。そして、よくこえた牛の背中をなで面繋（おもがい）にぶらさがっている銅の鈴やかざりの一文銭などに手をふれていたが、炊事隊員に食事の準備を中止させると、隊員たちにむかってこう話した。
「牛を飼い主にかえすことにしよう。……わたしが飼い主に牛をかえそうというのは、村の人たちの真心がわからないからではない。つまり、あの牛を飼い主に返すことがかえって人民を愛し、人民のためにたたかうわれわれの本分にもそうことだと考えるからだ。……たった一頭しかない牛まで、惜しみなくわれわれにあたえようとする薬水洞の人たちの真心は、ことばでいいつくせるものではない。ただ感謝あるばかりだ。……それなのに、わたしが牛をおくりかえそうというのは、あの牛には飼い主の深い愛情がこもっており、薬水洞の人たちの明日の生活がかかっているからなのだ。あの牛の飼い主が、自分の牛をどれほど心をこめて世話していたかは、みんなも見れば

よくわかることだ。あの牛の面繋につけられたかざりの鈴と穴あき銭をよく見なさい。あの鈴はおそらく飼い主の家で何代にもわたって大切につたえられてきたものにちがいない。そしてあの穴あき銭は、その家のおばあさんが嫁にくるとき財布のひもにつけてきて一生大切にしていたものだろう。わが国の母親たちは牛にたいする愛着を、そうすることによってあらわしたものなのだ。……牛をかえしてやらねばならない理由のもう一つは、牛の飼い主ばかりでなく、薬水洞の農民たちの生活問題があの牛にかかっているからだ。たぶんあの牛は、飼い主の全財産であるにちがいない。薬水洞全体からしても、数頭しかない牛だけに、あの牛は薬水洞の全農家の畑仕事になくてはならないものにちがいない。われわれがこうした実情を考慮にいれず、人民の真心こもった贈り物だからといってあの牛をつぶしてしまえば、その結果はどういうことになるだろう?……つぎの日から牛の飼い主はもちろんのこと、薬水洞の農民たちはあの牛の仕事を自分たちの力でやらねばならなくなるだろう。あの牛がはこんでいた荷物を背負ってはこび、あの牛が掘りおこしていた畑を鋤や鍬で耕さなければならなくなると、農民たちはたいへんな苦労をすることだろう。そうなれば人民の誠意をうけいれることが、かえってかれらの苦しみをまし、かれらの生活にいっそうの困難をもたらすことになるのだ……」

人民を愛し、かれらの境遇を深く考える将軍のことばに、隊員たちは強い感動をおぼえた。首をうなだれていた二人の隊員はまえにすすみでていった。

「司令官同志! わたしたちは司令官同志のお心にそむきました。人民を愛せよという規律に違反しました。わたしたちを処罰してください!」

将軍は、おだやかな語調でつづけた。

「牛をかえしてやろうというのは、きみたちのあやまちをとがめるためではない。もう一度いうが、人民にたいする愛情——、これはわれわれが堅持しなければならない本分なのだ」

将軍のことばが終ると、二人の隊員は明るさをとりもどしてこういった。
「司令官同志！　いますぐ飼い主のところへいかせてください」
「そうしなさい。すぐ牛をかえしてやり、食事は白菜や大根の葉で準備しなさい」
将軍は明るい表情で指示をあたえると、さらにことばをつづけた。
「われわれは、いつどこで、どのような不利な条件におかれても、つねに自分たちが人民の軍隊であるということを忘れてはならない。敵とたたかうときはいうまでもないが、人民をたすけ、人民から協力をうけるときも、すべて人民の利益を擁護し、かれらの生活を心の底から守るという立場にたって考え、行動しなければならないのだ。われわれが草の根や木の皮で飢えをしのぎ、あらゆる苦しみをなめて敵とたたかうのも、すべて人民につくすためであり、われわれが飢えに苦しみながら人民に迷惑をかけまいとするのも、すべて人民を愛するがためである。このことを知っているからこそ、人民はこんなにもわれわれを愛し、すべてを惜しまずわれわれを支援してくれるのだ。もしわれわれが人民を愛さなかったなら、人民の愛情をうけることはできないと肝に銘じておくべきだ」
ここに、真に人民のなかにいる将軍の姿を見いだすことができる。一農民の牛をまえにして、人民にたいするもっとも美しい愛情がなんであるかを隊員たちに語る将軍であったからこそ、泰山峻嶺をもたぐりよせて人民の敵をうち、百雷の威力をもつ将軍としてその名をとどろかせることができたのである。

第七章　マルクス・レーニン主義の党を創建するために

白頭山根拠地を拠点に、朝鮮人民革命軍部隊がいたるところで敵をうちのめしているとき、その勢いにのって満州と国内各地では祖国光復会の組織網が力強くひろがり、マルクス・レーニン主義党を創建するための準備活動も大きな成果をおさめていた。つまり党を創建する準備が新しい段階にはいったのである。これはもちろん、金日成将軍の指導のもとに、何年ものあいだしっかりと地ならしをしてきたところから生じてきた一つの大きな飛躍であった。

なによりも貴重な成果は数多くの共産主義者が育ってきたことであった。かれらは抗日パルチザンの隊伍で、また遊撃根拠地――解放地区内のいろいろな革命組織で、あるいは政治工作員の指導をうける敵の統治区域の地下組織などできびしいたたかいをつうじてきたえあげられ、革命教育をうけながら共産主義者となった。

しかしこれは、決して平坦な道のりではなかった。かれらは、日本帝国主義と分派主義、事大主義と民族排他主義などとの軍事、政治、思想、理論の領域にわたる複雑多難なたたかいのなかで、みずからの意識を革命的に改造しながら、堅実な共産主義者に成長してきたのであった。

マルクス・レーニン主義党の創建を準備するうえで、もっとも重要なことは党の柱となる骨幹部隊をしっかりと組織することであった。

二十年代の共産党が労働者階級の政治的指導勢力としての使命をはたすことができず、四分五裂の苦痛を経験し

なければならなかった基本的な原因は、きたえあげられた共産主義者からなるしっかりとした中核が存在しなかったからである。

将軍はこのようなにがい教訓からして、朝鮮革命のために最後まで献身的にたたかうことができ、マルクス・レーニン主義の革命思想でしっかりと武装した共産主義中核部隊を育てあげることに心血をそそいだ。

共産主義の中核部隊をしっかりと組織することなしには、各地に散在して思い思いの活動をしている共産主義者たちと革命組織を団結させることはできないし、隊列内に潜入した分派主義者や左右の日和見主義者、各種の破壊謀略分子の策動をうちやぶり、隊列の思想的な純潔性と統一団結を強めることもできなかった。そして反動どもの悪らつな攻撃をしりぞけ、大衆を革命闘争に組織動員することも、創建後の党を急速に発展させることも、さらに党の指導的使命を十分にはたすこともできなかった。

将軍は党創建の骨幹をつくりあげるにあたり、なによりもまずその隊列を労働者、農民出身のえらばれた中核たちで新しくかためることを重要な原則とした。

当時、わが国で党創建の骨幹を築きあげることは、既存の共産主義者たちを結束するだけでは解決できない問題であった。なぜなら既存の共産主義者の隊列のなかでは派閥闘争が一掃されず、革命的な思想鍛練のたりないブルジョア、小ブルジョア・インテリが多数をしめていたからである。

共産主義運動と革命闘争の力強い発展のためには、共産主義隊列そのものを革命の主力である労働者や農民を土台にしてまったく新しくうちかためなければならなかった。こうしてはじめて、真に革命的なマルクス・レーニン主義の党を創建することができるのである。

したがって将軍は、労働者と農民出身の先進的な人びとを遊撃隊と祖国光復会をはじめとする革命組織にうけいれ、思想教育と実践闘争をつうじて、かれらをすぐれた共産主義者に育成することに大きな力をそそいだ。

将軍は抗日遊撃隊を、共産主義者たちの骨幹を育てあげるもっとも重要な学校とみなした。遊撃隊員たちはすべて、祖国解放のためにみずから志願して入隊してきた人びとであり、敵との武装闘争では命をもささげる決意をもつ労働者、農民のすぐれた息子や娘たちであった。

このような人びとをマルクス・レーニン主義で教育し、敵との直接的なたたかいのなかできたえあげるならば、かれらがいかなる逆境のなかにあっても屈することなく、最後まで革命のためにたたかう共産主義者に育つことは明らかであった。

将軍は、いくどもつぎのように強調した。

「実際の闘争で洗練され、点検された共産主義者たちは、いつ、いかなるところにおいても、わが革命の遂行において中核的な役割をはたすことができるであろう。われわれがどんな難関にぶつかるにしても、かれらを骨幹にしてそのまわりに革命大衆をしっかりと結集させるならば、われわれはマルクス・レーニン主義党を創建することも、提起された複雑な革命の課題を正しくなしとげることもできるだろう。したがってわれわれは、抗日武装闘争をすすめる過程で、われわれの武装隊伍をたえず拡大強化し、敵とのたたかいのなかで共産主義者たちを育成し、鍛錬しなければならない」

これは将軍が抗日武装闘争の初期から一貫して守ってきた原則であった。

人民革命軍部隊がいたるところで敵をうちくだき、祖国光復会の組織がより拡大されるにつれ、生存と闘争の活路をもとめていた多くのめざめた労働者や農民、青年たちが先をあらそって遊撃隊にくわわった。

かれらはみな、きびしい闘争のなかで将軍の指導と教育をうけ、短期間に共産主義者に成長した。

将軍はその偉大な事業の多忙な日々にも、けわしい山なみや峰をこえ、麾下の部隊を一つ一つたずねては隊員たちとじかに会い、かれらの生活と学習、あるいは任務遂行の状況などをこまかくきき、具体的な指導と教育をほど

こした。

部隊の指揮官たちは、多忙な将軍が何回も自分たちをたずねる労をはぶくため、そのつど具体的な報告を提出することにしていた。しかしそれに満足しなかった将軍は、「みんなが提出してくれる報告や通報そのものは、隊員たちのなつかしい顔のかわりにはならないし、かれらの素朴な心情をすべて反映することもできない」と語り、昼夜をわかたず隊員たちをたずね、かれらのために心をくばり教育をほどこした。

また将軍は直接、隊員たちに具体的な任務をあたえ、実際の活動をとおしてかれらをきたえもした。

このように遊撃隊員たちは将軍の直接的な指導と教育をうけ、不屈の共産主義者に成長した。かれらのなかには幼いとき鉱山であらゆる苦しみを体験したり、農村でしいたげられ、遊撃隊に入隊して共産主義者に成長した若ものもいたし、また敵のために両親を失い、十代の孤児の身で将軍のふところにいだかれ、成長するにつれて若くたくましい共産主義者になった隊員もいた。やさしく純真な少女から、勇敢な遊撃隊員となった女性共産主義者も多かったし、将軍に教えさとされ、敵との激しいたたかいのなかできたえられたインテリ出身の共産主義者も少なくなかった。

さらに、かれらのなかには最初から遊撃隊にくわわり、一兵卒から小隊長、中隊長となり、のちには連隊長の重責をになうなど、有能な軍事指揮官に成長した人もおり、また地下革命活動から遊撃隊にくわわり、すぐれた政治活動家になった人もいた。

将軍は、かれらをりっぱな共産主義者として育てあげるために、つねにかれらを厚く信頼し、かぎりなく愛してやまなかった。

将軍はもともと、革命の同志をこの世のなかでもっとも貴いものと考えていた。そのため革命の同志を得るためにはきびしい難関や危険をもかえりみず、それを大胆にのりこえていった。まさに血をもって同志を獲得し、一度

手をとればかれらを心から愛し、あらゆる努力をかたむけてたすけていった。じつに母親のような心情で同志たちに気をくばり、はげまし、かれらが誤りをおかせば自分のことのように胸を痛め、それをただすためにはなにものをも惜しまなかった。

将軍が一九三六年の春に北満州から白頭山の西南部地帯に進出した際、撫松で新しい師団を編成するとき問題となった「民生団」容疑者百余名をりっぱな共産主義者に育てあげた事実は、その代表的な例の一つである。将軍はかれらを心から愛し、かたく信頼しながら、教育と実際の闘争をつうじて、かれらをみな不撓不屈の共産主義者に育成した。

将軍はまた、各種の革命組織においても共産主義者をたえず育てあげていった。

わが国に統一的なマルクス・レーニン主義の党がなく、またそれをすぐさま結成することもできない当時の状態では、革命組織を拡大し、その組織にすぐれた闘士たちをうけいれ、かれらを系統的に共産主義者に育成し鍛練することは非常に大きな意義をもっていた。

将軍の直接的な指導のもとに、革命組織は広はんな革命大衆を日常的に教育し、かれらを実際の闘争にひきいれながら、きたえられた闘士に、不屈の共産主義者に育てあげていった。

ここでとくに重要な役割をはたしたのは祖国光復会の組織であった。

祖国光復会は統一戦線体として創建されたが、将軍は最初から、この組織がわが国の革命の具体的な実情からして党創建の地盤をかためる任務をも同時にはたさなければならないと考えた。したがって将軍は、各階層の反日大衆を祖国光復会に幅ひろく組織する一方、かれらを実際のたたかいできたえながら共産主義者に育成する活動をも体系的に指導した。

このような過程で祖国光復会にもうらされた多くの人びとは階級的に急速にめざめ、組織生活ときびしい実践闘

争をつうじてたくましい革命闘士に成長した。祖国光復会の指導部もまた、こうして育てられたメンバーによって構成されたが、最初はまず、かれら自身が共産主義者として育成されたのである。

まず国内における共産主義者たちの活動をくわしく把握し、かれらに朝鮮共産主義者の任務と当面する課題を明らかにし、祖国光復会の下部組織を党創建の基礎をととのえる拠点にするよう指示した。国内に派遣された政治工作員たちは、将軍がしめした路線と方針にしたがい、祖国光復会の下部組織を指導しながら、各地で分散的に活動していた共産主義者たちを将軍の唯一の革命路線にひきいれた。この時期の政治工作員たちの活動は、咸鏡南道一帯をはじめ、江原道、平安南北道から、遠くは京畿道その他の地方にまでのびていた。

金日成将軍は党創建の準備活動を国内にひろげるにあたって、反分派主義闘争に特別な注意をはらった。将軍は、国内の共産主義運動にのこっていた分派主義を早く一掃し、共産主義隊列の統一をかためることが党創建準備の先決条件であると強調した。

将軍は分派的な傾向と徹底的にたたかいながらも、分派の同調者たちを一律にとりあつかうのではなく、主動分子は無条件にたたき、一時的に分派分子に利用されたか、あるいはそれに追随した人びとにたいしては、かれらを分派的傾向からひきはなして教育する原則をうちだした。それとともに、分派主義を根こそぎなくすため、分派分子がまきちらした毒素ののこりかすと、分派の温床となる地方割拠主義や家族主義を一掃するたたかいを積極的に展開するよう強調した。

政治工作員と国内の堅実な共産主義者たちは将軍の方針にしたがって、共産主義隊列内に入りこんだ分派分子や異質分子たちとのたたかいをくりひろげながら、革命隊列を結束する活動を積極的におしすすめた。

このようなたたかいをへて、共産主義者と人民は、朝鮮革命の偉大な指導者金日成将軍のまわりにいっそうかた

く団結するようになり、党創建のための組織的準備は全国的な規模で成功裏に実現されていった。

将軍は革命的な党創建のための骨幹をつくりあげる活動とともに、マルクス・レーニン主義思想の唯一の旗のもとに共産主義者をしっかり団結させ、思想と行動の統一をもたらすための活動を力強くくりひろげた。

ここで重要な役割をはたしたのは、将軍がみずから作成した祖国光復会の綱領であった。

祖国光復会の十大綱領には、朝鮮革命の展望と戦略戦術が全面的に明らかにされ集大成されていた。

当時のわが国における社会経済状態と階級の相互関係にたいするマルクス・レーニン主義的分析にもとづいて、反帝反封建民主主義革命路線とその課題を科学的に明らかにした祖国光復会の綱領は、やがて創建さるべき党のもっとも基礎的な綱領でもあった。

十大綱領は各地で分散して活動していた共産主義者たちに正確な闘争目標と戦略戦術をあたえ、共産主義者たちの路線の一致と思想、行動の統一の基礎となった。

また綱領は、共産主義者を分裂させせようとしていた分派分子と左翼日和見主義者たち、あるいは朝鮮人民の民族的および階級的意識をまひさせようと策動していた民族改良主義者たちに甚大な打撃をあたえた。そして綱領は、革命隊列の統一と団結をもたらし、広はんな人民大衆の革命意識を高める強力な武器となった。

このように祖国光復会の綱領は、朝鮮革命の全般的な発展についてだけでなく、党創建の準備においても決定的な転換をもたらした。

祖国光復会の綱領は、東満州一帯はもちろん、北満州の遊撃隊や国内の革命組織と人民のなかにまで急速に浸透していった。

綱領の偉大な思想は共産主義者たちと人民大衆の心を強くとらえ、かれらを将軍のさししめす闘争の道へとふるいたたせた。

各遊撃隊と革命組織では綱領にもとづいて、朝鮮革命の性格、革命の対象と動力、政権問題、反日民族統一戦線運動など、革命の基本的な戦略戦術の問題について熱心な討論がすすめられた。

こうした討論には、分派主義や左右の日和見主義とのするどい思想闘争がともなった。

その過程で遊撃隊員と共産主義者たちは、朝鮮革命の目標と具体的な闘争の方途をはっきりと認識するようになり、金日成将軍を中心として組織、思想的にいっそうしっかりと団結するようになった。

こうして、革命路線の確立を契機に革命的な党を創建し、いかなる困難にもめげずマルクス・レーニン主義を守りぬき、左右の日和見主義的な誤りをおかすことなく革命闘争を正しく展開しうる思想的な準備ができあがったのである。

すべての共産主義者を唯物論的マルクス・レーニン主義の世界観でしっかりと武装させる活動も力強く展開された。

マルクス・レーニン主義的世界観を確立するということは、古い資本主義社会は滅亡し、新しい社会主義——共産主義社会は必ず勝利するという確固とした信念をもち、社会を革命的に改造することにすべての力をそそぎ、労働者階級をはじめとする勤労大衆を搾取と抑圧から解放する共産主義偉業に献身し、革命闘争においてプロレタリア的階級性と革命性をあますところなく発揮することを意味する。

それはまた自分個人の名誉や利益のためにではなく、人民大衆と革命のためにすべてをささげ、革命とその指導者にかぎりなく忠実で、いかなる逆境においても革命的節操をかたく守る不撓不屈の革命精神で武装することをいう。

共産主義者たちがこうした革命的世界観で武装したときこそ、その隊列の鋼鉄のような団結と革命偉業の終局的な勝利が可能なのである。

それゆえ将軍は、遊撃隊員と共産主義者たちをマルクス・レーニン主義の革命的世界観で武装させる政治教育活動をねばり強くおしすすめた。

将軍によれば、学習と革命は切りはなすことができないものであった。したがって革命が困難で複雑になればなるほど、学習をいっそう強化しなければならなかった。

将軍はつねに、遊撃隊員たちにむかってつぎのような意味のことを話した。

「朝鮮人民革命軍は、たんに敵とたたかうだけの軍隊ではない。人民の利益、人民の念願を自分の生命と考え、それを実現するためにたたかう軍隊である。したがってわれわれは、人民を革命の勝利へとふるいたたせるすぐれた組織宣伝者、教育者とならなければならない。そのためには、まず学ばなければならない。学ばずしてマルクス・レーニン主義科学の頂上をきわめることはできない。基礎から徹底的に学ばなければならないのだ」

将軍はまた、読経式の学習をきびしく批判しながら、学習はたんに知識をうるためのものではなく、革命闘争の糧（かて）を準備し、実践闘争をりっぱにやりとげるための革命的資源を養うものでなければならないとのべた。

遊撃隊員と共産主義者たちは、将軍のこのような教えにしたがって、マルクス・レーニン主義の古典と他国の革命の経験にたいする研究を朝鮮革命の実践的諸問題にたいする研究と密接に結びつけてすすめた。

他のすべてのことと同じように、将軍は学習でも率先して模範をしめした。苛烈な戦闘のさなかでも学習を中断しなかった。いつもマルクス・レーニン主義の文献を読み、ノートをとり、それをもって隊員たちを教育した。学問は金のある人だけが学ぶものでも、学校にいかねば学べないものでもなく、敵とたたかいながらでも学ぶことができるのだと隊員たちをはげまし、みずから講師となって多くの革命理論を隊員たちに教えた。そして隊員たちにパンフレットをわけあたえたり、学習ノートをつくって、その表紙に隊員の名前を書きいれてやったりもした。

抗日遊撃隊のなかには、書物だけを背負って歩く隊員がいた。かれは「行軍図書館」とよばれ、みんなに親しまれた。部隊が野営したり、行軍中に小休止するときなど、かれはやおら本の荷物をほどき、「図書館」をひらくのだった。すると隊員たちは、各自でむさぼるように読書をはじめた。ときには輪になって読書会をひらくこともあった。かれらははげしい戦闘のあいまにも決して学習をゆるがせにはせず、ゆく先ざきで壁新聞もつくってはりつけたりした。紙がないときには木の皮をむいて書いたりもした。

このように、学習は遊撃隊の重要な生活となっていた。重要で困難な任務が課せられたときは、なおさら学習に拍車がかけられた。

将軍は遊撃隊員と共産主義者たちを革命的世界観でしっかり武装させ、かれらの政治理論水準を高めるため各所に講習所をつくり、必要に応じて集中的な学習を組織した。

共産主義者と人民を革命思想で教育するにあたって、革命的な出版物がはたす役割はきわめて大きい。

将軍は南湖頭会議と東崗会議ののち、日々に拡大してゆく革命隊列の思想的水準を高め祖国光復会の綱領をひろく宣伝するため、革命的な出版物の刊行活動をいっそう活発におこない、それにたいする指導を強化した。

将軍は朝鮮革命の性格と任務、共産主義者の課題などを理論的に解明した多くのパンフレットを書き、政治新聞や政治理論雑誌をはじめ各種の出版活動を指導した。祖国光復会の機関誌『三・一月刊』をはじめ、人民革命軍機関紙『曙光』、人民革命軍の部内出版物である週刊新聞『鐘の音』などが発行されたのは、ちょうどこのころのことであった。

革命的な出版物は、将軍の正しい指導のもとに祖国光復会十大綱領の思想と内容、革命路線と朝鮮革命の戦略戦術問題などを解説し、広はんに宣伝した。これは誤った思潮をうちくだき、共産主義者の思想と行動の統一を実現するうえで大きな役割をはたした。また革命的な出版物は共産主義者と大衆を闘争へとふるいたたせ、かれらを革

命にたいする必勝の信念と不屈の闘争精神で教育した。こうして革命的出版物は日本帝国主義のきびしい弾圧のもとでも全国各地に普及され、党創建の組織、思想的な準備をととのえるうえで大きな役割をはたした。

将軍の直接的な指導のもとにすすめられた政治教育活動と革命的な実践闘争をつうじて、遊撃隊員と共産主義者たちはマルクス・レーニン主義にたいして確固とした信念をもつようになり、共産主義思想の偉大な生活力を肌で感じるようになった。かれらは、帝国主義は必ず滅亡し、社会主義——共産主義は必ず勝利するものであり、おそかれ早かれ日本帝国主義も滅亡するのだという真理を確信し、祖国の自由と解放のためにあらゆる難関を克服しながらたたかった。マルクス・レーニン主義にたいする確信が強かったからこそ、かれらは身を切るような酷寒も、たえがたい飢えも克服することができたし、絞首台にあがっても共産主義の輝かしい未来と独立した祖国の青空を心にえがき、笑みをたたえながら死んでいくことができたのである。

じつにマルクス・レーニン主義は抗日遊撃隊員と共産主義者たちにとって、革命のためには死をも堂々とむかえることのできるもっとも威力ある思想的武器であり、いかなる難関にぶつかってもすすむべき明確な道をさししめしてくれる羅針盤であった。

このように将軍によって正確な革命路線と戦略戦術がうちたてられ、それにもとづいて共産主義隊列の思想的統一が成就し、マルクス・レーニン主義教育によって抗日遊撃隊員と共産主義者たちが不敗の隊伍に成長したことにより、マルクス・レーニン主義党を創建するための思想的準備はきわめて成功裏になしとげられた。

祖国光復会のまわりに広はんな大衆が結集するようになり、党創建の大衆的基盤をつくる活動においても画期的な成果が生まれた。

遊撃隊員たちは将軍の教えを肝に銘じ、たんに敵とたたかうだけの戦士ではなく、人民を教育する宣伝扇動者として、人民を組織動員する組織者として、ゆく先ざきで大衆工作を強化した。

全国各地に派遣された政治工作員たちは、難関にもひるまず大衆のいるあらゆるところに深く根をおろし、各界各層の大衆をめざめさせ、かれらを革命組織と大衆団体に参加させるために精力的な活動をおしすすめた。大衆との活動において遊撃隊員と共産主義者たちは、つねに大衆の利益のためには自分のすべてをささげてたたかいぬき、いかなる場合にも絶対に大衆の利益をそこなわず、人民大衆と生死苦楽をともにし、人民のまえでつつましく素朴であり、あらゆる活動で身をもって模範をしめす革命的な大衆路線と人民的な活動作風を徹底的に守りぬいた。

その結果、人民大衆は共産主義者こそ真の愛国者であるとさとり、自分たちの運命を共産主義者にゆだね、そのまわりに結集して未来をかたく信じ反日闘争に力強く決起した。

党創建の準備活動は全国的な範囲でいっそう深く根をおろし、活発にくりひろげられていった。

このように党創建の準備が力強く展開されたのは、金日成将軍がマルクス・レーニン主義党を創建するための正確な方途を明らかにし、その活動をりっぱに導いたからである。

将軍は革命活動の初期から、当時の共産主義者の隊列が労働者や農民を中核にしておらず、正しい革命路線がないために人民大衆を一つの旗じるしのもとに結集することができず、みにくい派閥闘争に終始したため、共産主義者たちの思想、行動上の統一が生みだされていなかった一九二〇年代の共産主義運動の基本的な弱点をきわめてはっきりと見ぬいていた。

そのため将軍は、抗日武装闘争の初期から「党再建」の看板を真っ先にかかげてただちに党創建を宣言することはまったく無謀なことであると断定し、なによりもまず、初期共産主義運動がもつ本質的な弱点を克服するための徹底したたたかいをつうじて、党創建のための土台を組織的にも思想的にもしっかり築きあげることに全力をそそいだ。

将軍は一九三三年九月、小汪清遊撃根拠地の司令部でつぎのようにのべた。

「党——、これはわれわれをあらゆる勝利へと導くものである。したがってマルクス・レーニン主義党を創建することは、われわれ朝鮮共産主義者のまえに提起されたもっとも切実で基本的な任務である。もちろん、だからといって一部の分派主義者たちが主張するように、われわれはいまの状態でただちに党を創建しようというのではない。われわれがなんらの準備も革命的な力量の蓄積もなしに、いますぐ党を創建することができると考えるならば、それは空中に家を建てようとするのと同じく、むなしい妄想にすぎない。したがってわれわれは、もっとも慎重に、そしてもっとも精力的に党を創建するための組織的、思想的な土台を一歩一歩築いていかなければならないのである」

事実、一九二〇年代の共産党を破壊した派閥闘争の常習者たちが依然として共産主義者の隊列内にのこっている状況のもとでは、比較的長期間の実践闘争をへることなしには、新しい共産主義者を育てあげることも、党創建の大衆的基盤を築きあげることも、そしてまた共産主義者と革命組織を一つの統一体にしっかりと結束させることも期待できなかったのである。

金日成将軍はまた党を創建する活動で、事大主義、教条主義的傾向を徹底的に排撃し、確固として主体性を堅持した。

将軍は朝鮮革命のあらゆる問題と同じく党創建も、まさにそれを実現する主体的な要因である朝鮮共産主義者の隊列のたゆみない拡大強化と、それを指導する中核勢力の準備と、そして大衆の意識水準の高まりにかかっており、それをどう準備するかに問題解決の基本的な鍵があると考えた。

そのため将軍は、いわゆる「国際路線」とかコミンテルンをあてにせず、朝鮮の具体的な実情にあうように、朝鮮共産主義者たちの力に依拠し自主的で独創的な党を創建する基本原則を明らかにしたのである。

一九三三年の四月から五月にかけてのコミンテルンの派遣員との会談において、すでに将軍は、朝鮮人は朝鮮革命のためにたたかわなければならないと強調し、党を創建するためには主体的な立場にしっかりとたたなければならず、分派分子は決して共産主義運動をになえるものではないことを明らかにした。

一九三六年十二月、将軍は国内の共産主義者たちとの談話においても、一部の共産主義者のなかで、あたかもコミンテルンの批准があってこそ党を組織することができ、朝鮮人自身の手では党を組織できないかのように考える誤った見解を強く批判しながら、党創建のための主体的な立場についてつぎのように明らかにした。

「マルクスが党を創建したのは、だれかれの批准や承認をうけてからそうしたのではない。問題はコミンテルンの批准があるか、ないかにあるのではない。重要なことは朝鮮の共産主義者たちが主体的な立場で党を組織し、朝鮮革命を正しく指導してゆくことなのである。こうして組織された党が革命闘争をりっぱにおこなえば、コミンテルンは自然についてきながらその党を承認するようになるであろう」

事大主義者や分派主義者の空虚な主張とは完全に対立する将軍の立場は、そのころ右往左往していた共産主義者たちに確固とした信念と明白な進路をしめした。

将軍はまた、党創建の準備活動を実際の闘争とはなれて手工業的におこなうのではなく、武装闘争、統一戦線運動と密接に結びつけてすすめる原則を堅持した。

マルクス・レーニン主義党創建のための準備活動は、金日成将軍の朝鮮革命にたいする闘争路線のもっとも重要な部分の一つであった。しかし日本帝国主義のファッショ的暴圧が絶頂にたっしていた当時の情況では、党創建の準備活動は武装闘争に依拠してこそ実現することができ、広はんな統一戦線運動と結びついてこそ、その大衆的基盤をしっかり築きあげることができるのである。武装闘争は党創建の準備活動を促進させる決定的な手段であり、統一戦線運動は党創建の準備を強固な基盤のうえで拡大強化する推進力であった。

将軍はこのような相互関係を正しく見ぬいていたために、武装闘争と統一戦線運動を発展させながら、同時に党創建の準備活動を幅ひろく展開する創造的な原則をうちたて、これを徹底的に堅持したのである。

このように金日成将軍の科学的で主体が確立した正しい路線があり、その賢明な導きがあったからこそ、苦難にみちた武装闘争のさなかでもマルクス・レーニン主義党の創建準備が成功裏におしすすめられた。

党創建の組織的、思想的な基盤は、その後の闘争の過程でいっそうしっかりとうちかためられ、これが八・一五解放後に創建され、強固に発展した革命的なマルクス・レーニン主義党――すなわち朝鮮労働党の根源となったのである。

第八章　朝鮮は生きている

1　普天堡ののろし

軍国主義日本は、中国本土とソ連にたいする侵略戦争の準備に狂奔していた。

日本帝国主義者たちは全アジアに燃えひろがる火の手を想像しながら、そこから生みだされる「無限なる収入」を計算していた。

かれらの軍隊は、すでに突撃線上にいた。その前途にたとえ滅亡が待ちうけていたとしても、とどまることはもはや考えられないことであった。なぜなら連続的な侵略と無謀な突撃こそは、軍国主義そのものの本性であるからである。

しかし日本の侵略者たちは全アジアを征服しようという野望にいらだちながらも、自分の政治版図内にある白頭山を中心に、金日成将軍がつきつける朝鮮人民革命軍部隊の軍事的な攻撃と政治的な攻勢にたいしては、ただぼう然とならざるをえなかった。

恐怖にふるえ極端なノイローゼにおちいった侵略者たちは、一九三六年の末から翌年の春さきごろまで、ふたたび朝鮮人民革命軍にたいする気ちがいじみた「討伐」をくりひろげた。

しかしそれも、むだだった。おそいかかる敵を痛烈にうちのめした人民革命軍部隊は、すばやく撫松県の西崗密

営へと移り、新しい作戦を準備していた。

敵の大「討伐」部隊は人民革命軍が移動したことも知らず、深い雪におおわれた長白県の山々を空しく見張っていた。遊撃隊の行方を見失った敵は、どうにもならない自分たちの立場をとりつくろおうと「金日成負傷、治療中」とか、「金日成部隊全滅」などという根も葉もないデマ宣伝をくりかえした。

その後一か月がすぎ、やっと人民革命軍部隊が移動したことを知った敵軍の将兵たちは、あまりのことにおどろいて、「金日成の戦術は神出鬼没だ。いままで長白県にいたのに、いつ、どこからぬけでて撫松へいったのだろう」と目をまるくし、また痛い目にあうかも知れないとおそれた。

ちょうどそのころ、将軍は部隊を西崗密営で休息させながら、かれらの軍事政治学習を指導する一方、すでに構想していた国内進攻作戦をねっていた。

当時の朝鮮の状態はじつに暗たんとしていた。日本は全アジアを支配する凶悪な計画をたて、その「後方」である朝鮮では形容を絶する略奪と弾圧を強行していた。かれらは「内鮮一体」とか、「同祖同根」などと騒々しくさわぎたてる一方、国内の愛国者たちを手あたりしだいに投獄し、虐殺した。かれらは朝鮮の民族文化を抹殺しようとしただけでなく、はては朝鮮語の使用さえ禁止した。農土は軍需工場の日かげとなり、民族経済の全面的破産のうえには買弁資本の毒きのこが生え、日本の財閥がわがもの顔でふるまった。

まさに太陽や月さえ光を失なう暗くみじめな歳月であった。自分の大切なものすべてを奪われた朝鮮人民は、ひたすら金日成将軍の武装隊伍を唯一の希望としてあおぎみながら、文字どおり生か死かの岐路でさまよっていた。

こうしたとき金日成将軍はみずから部隊をひきい、朝鮮国内に進出して敵をうちやぶり、苦しみもだえる朝鮮人民の頭上に救国ののろしを高くかかげ、かれらの胸に勝利の信念をいだかせようと決心したのである。

将軍は一九三七年三月、撫松県西崗で朝鮮人民革命軍部隊の幹部会議をひらき、国内進攻にたいする戦略的な方

針をさししめした。

「……われわれは国内に進出しなければならない。そうしてこそ、日本帝国主義の統治のもとで苦しんでいる国内の人民に革命の勝利にたいする信念をあたえることができる。朝鮮人民の息子や娘であるわれわれ人民革命軍が健在だということを知らせるだけでも、それは人民にとっては大きなはげましとなり力となるのだ。われわれが祖国へ進出するのは、大都市でも攻撃して占領しようというのではない。朝鮮にはいって銃を何発かうつだけでも、それは人民にはかり知れない大きな力をあたえるのだ。気骨あるたくましい朝鮮共産主義者の大部隊が連合して威風堂々と進出すれば、それはまさしく一大示威となる。わが人民に朝鮮は必ず解放されるという確信をあたえるところに、国内進出の巨大な意義があるのだ」

将軍は普天堡（ポチョンボ）一帯と茂山地区に進出し、敵を掃討するための国内進攻作戦をたてた。

将軍の戦略上の方針にしたがって各部隊の具体的な行動方針が決定された。将軍がひきいる主力部隊は、撫松県西崗の密営から中部を主要打撃の方向ときめて長白から普天堡へ進撃し、崔賢連隊長が指揮する部隊は東部を補助打撃方向として安図、和龍をへて茂山地区へ進出し、敵を掃討してふたたび長白県黒瞎子溝の密営に帰り、他の一部隊は西部を補助打撃方向とさだめて、国内と隣接した臨江一帯から長白へとすすみながら敵をうつ作戦であった。

将軍は敵を分散して混乱におとしいれるために、補助打撃方向をうけもつ部隊を先に出発させた。こうして敵を収拾のつかない混乱におとしいれた将軍は、主力部隊をひきいて主要打撃の方向である普天堡をめざして遠征を開始した。

このとき将軍は主力部隊の普天堡進出をかくすため、まず先に小部隊を撫松と臨江の県境にある海青嶺（ヘチョンリョン）へむかわせ、通過してゆく敵の軍用自動車を襲撃させた。二か月以上も革命軍の行方をもとめて奔走していた敵は、思いも

かけない場所で不意の襲撃をうける破目になった。あわてふためいた敵は、ふたたびこの方面に兵力を集中しはじめた。しかし結局かれらは、将軍のたくみな戦術によってまたまた空っぽになった撫松、濛江地区に集まる結果となった。

こうしたとき部隊をひきいてふたたび長白に進出した将軍は、待ちに待った国内進攻作戦の具体的な準備に着手した。

まずはじめに、そのころ長白県に派遣されて工作をしていた権永壁同志を偵察にだし、普天堡一帯の軍事、地理的条件と敵の動静をさぐらせ、一九三七年五月二十五日には、長白県二十道溝の山中で国内の同志たちと会い、当面の闘争方針をしめしたのち普天堡一帯にたいする詳細な偵察を指示した。こうして将軍は、総合された偵察資料にもとづいて具体的な戦闘計画をたてた。

将軍のひきいる部隊が黒瞎子溝で国内進攻の準備をととのえていたとき、崔賢連隊長が指揮する部隊は将軍の命令どおり敵の厳重な警戒網をついて茂山地区へ進出し、国境一帯に駐屯していた敵軍に大打撃をくわえていた。

国内の敵情をさぐっていた将軍は、普天堡襲撃を即刻断行する決意をかためた。

将軍は黒瞎子溝の密営に近い山林のなかで隊員たちに、祖国の地にひびきわたる銃声は敵の頭上に火を放つことであり、朝鮮は死なずに生きているという信念を人民にいだかせることになるだろうとのべた。

部隊は深い感動につつまれ、夢にまで見たなつかしい祖国へむかって出発した。行軍する部隊の気勢は、まさに泰山をもゆりうごかす勢いであった。

遠征隊は六月二日、予定された時刻に二十三道溝の入口にある部落に到着し一晩の休息をとった。そして翌三日の朝には、はじめて祖国の山河が見わたせる口隅水谷(クシコル)の丘にのぼった。

おそらく、この地球が生まれて以来こんにちまで、白頭山の天池から流れつづけているにちがいない鴨緑江の青

い流れが眼下にくねり、高く低い山なみが、はるか遠くにまでつらなっていた。

やむことを知らない吹雪をついてすすむ苦難の行軍のときも、けわしい戦闘のさなかでも、異国の星空を屋根とするかがり火のそばでのつかのまの眠りのなかでも、なつかしくよびつづけてきた祖国――、その祖国の荘厳な姿をまえにした隊員たちは感激のあまりものもいえず、ただ目がしらをおさえるだけだった。

日が暮れると部隊はふたたび夜の闇をぬって行軍し、口隅水の流れにいかだの橋をかけるとすばやくむこう岸にわたった。対岸には傾斜の急な崑将徳（コンジャンドク）の丘がたちはだかっていた。

夜明けまえ、隊伍は崑将徳の丘のうえにたどりついた。将軍は休息命令をくだした。ここで隊員たちは、夢にまで見た祖国での最初の朝をむかえた。六月四日のことだった。

朝の光をあびて輝くなつかしい祖国の山河――、それを見つめる隊員たちのよろこびはたとえようもなかった。崖のうえで背くらべをしている朝鮮唐松のありふれた風景ですら、それが祖国の地の一部であるというだけで、この世にまたとない美しい景色のように思われ、感嘆を禁じえなかった。ある隊員は感激のあまり、思いっきり草のうえにころがった。またある隊員は土をにぎりしめてはほほずりさえした。

将軍の顔が紅潮した。将軍は、はげしくこみあげてくる熱いものをおさえきれないかのように、目のまえにひろがる普天堡の街なみや、はるか遠く、もやのなかにうかぶ祖国の山河に燃えるような視線をおくっていた。

崇高な思想の探究へとはげまし、知略と勇気をはぐくんでくれた大地――、水をわたって千里、陸をかけめぐって千里のたたかいの日々にも、ほほえみと歌をあたえてくれた母なる祖国――。しかしその母なる大地は、侵略者たちの目に見えない鎖によってつながれ、苦しみもだえながら救いをもとめているのだった。救援者としての偉大な使命をになった将軍にとっては、侵略者、――刑吏どもをうちのめしてこそ真に祖国とあいまみえることができるのであり、不幸な祖国を救うことができるのであった。

闘志は炎のように燃えさかった。将軍はふたたび偵察隊を普天堡の街に派遣した。そして崑将徳の草むらで指揮官たちの集まりをもち、各区分隊に戦闘任務をあたえた。

暗くなって部隊は崑将徳をくだり、佳林川（カリム）をわたった。将軍の指揮所は街の周囲を流れる佳林川のほとり、でろの木のしたにさだめられた。

夜十時――。闇をつんざく銃声が街にひびきわたった。

またたくまに赤々と燃えあがる炎――。普天堡は真昼のように明るくなった。火の手は面（ミョン）事務所（日本の町役場にあたる）、山林保護区事務所、郵便局、消防隊本部、金融組合などではげしく燃えあがり、火の粉が空高く舞いあがった。人民革命軍部隊がすばやく警察署をはじめとする敵の統治機関を占領し、つもりつもった復讐の火を放ったのである。

普天堡そのものが巨大なのろしであった。それは、朝鮮が死なずに生きているという事実を明らかにしたのろしであり、暗くきびしい祖国のまえに、苦痛に身もだえしていた人民のまえに、革命と解放の前途を照らしだすのろしでもあった。それはまた、人民の救援者の偉大な姿と、その足もとでネズミのようにふるえている侵略者たちのみにくい正体を、世にあますところなくさらしたのろしでもあった。

「朝鮮独立万歳！」

「朝鮮革命万歳！」

「金日成将軍万歳！」

路地という路地からとびだしてきた同胞たちは、感激の涙にうちふるえる歓声をあげながら、人民革命軍部隊の隊員たちとだきあっておどりあがった。街ぢゅうには「祖国光復会十大綱領」と「朝鮮人民に檄す！」などの布告文と檄文、ビラなどがはりだされた。

金日成将軍の名義による布告文「朝鮮人民に檄す！」には、つぎのように書かれていた。

「凶悪このうえない強盗日本帝国主義は朝鮮を占領してから二十余年間、総督政治という植民地統治によって、わが朝鮮同胞を踏みにじり虐殺している。そのためわが朝鮮同胞はかれらに血と汗からなる財産をことごとく略奪され、悲惨な植民地奴隷の生活をしいられてきた。

それぱかりでなくかれらはわが民族を第二次大戦の弾丸よけとして、中国を侵略する戦争の道具にかりたてている。わが朝鮮民族は、いま生死存亡の危機にさらされている。われわれはわが民族の活路を切りひらき、自分たちの生活を打開し、日本帝国主義を打倒して祖国を解放するためにたたかう朝鮮人民革命軍である。われわれが六、七年のあいだ、満州の広野において日本帝国主義侵略者たちとの決死的闘争でこれに致命的な打撃をあたえてきたことは、世人がひとしく認めているとおりである。

わが軍は、朝鮮にいる愛国の志士と熱血的なわが軍の勇士との強力なかたい団結のうえに、朝鮮民族の血を吸いとって腹をこやしている吸血鬼朝鮮総督府と直接たたかう目的で豆満江と鴨緑江をわたり、咸鏡南北道一帯に遠征してきたのである。

不幸な朝鮮の同胞兄弟よ！

すみやかに決起して反日民族統一戦線に団結し、各種の闘争でもってわが軍の遊撃戦に呼応せよ！

一日も早く日本帝国主義統治を粉砕し、真正な朝鮮人民の政府を樹立するために邁進しよう！

一九三七年六月一日

朝鮮人民革命軍　北朝鮮遠征隊

司令　金　日　成　」

人びとは先をあらそって警察官駐在所のまえの通りにおしよせた。かれらは夢にまで見た民族の英雄金日成将軍

をまのあたりにする感激と興奮でわきたっていた。
　将軍は歓呼する群衆に熱い答礼をおくりながら街にはいった。
　将軍は凶悪無道な日本の侵略者たちを糾弾したのち、祖国の自由と独立のためにすべての反日愛国勢力がかたく団結し、日本帝国主義に反対してたたかわねばならないと訴える演説をおこなった。
　やがて惜別のときがきた。将軍と遊撃隊員たちは、別れの悲しみにうちふるえながら手をふる同胞たちに、また会う日の約束をかわしながら、炎で赤く染まった普天堡に別れをつげた。
　人民革命軍の普天堡襲撃にかんする急報をうけた日本の軍警は肝をつぶさんばかりにおどろき、さっそく緊急非常会議を召集した。
　あとの祭りということばがあるが、それを地でいくかのように、四方八方から部隊が集まりはじめた。まず大川警部が引率する警察隊が普天堡にかけつけ、つづいて広橋、今村、栗田部隊と、その付近の国境地帯に出動していた飯野、隈田部隊、そして長白にいた呉部隊などがいっせいに追撃を開始した。
　一方、金日成将軍がひきいる部隊は、翌六月五日、傾斜の急な口隅水の丘のうえに陣をしき、追撃してくる敵を待機していた。
　はじめに口隅水の谷間にあらわれたのは大川部隊であった。このとき将軍は敵を二、三十メートルの線まで接近させたのち、射撃命令をくだした。敵味方のあいだで猛烈な射撃戦が展開された。しばらく戦闘がおこなわれたのち、将軍は敵側の弾薬が底をついたのを見やぶると、銃をうたずに石をころがして敵をうてと命令した。
　隊員たちは、あらかじめ準備しておいた石をころがしはじめた。ころげおちる石は岩にぶつかっていくつかにわれ、勢いよく落下していった。石のなだれをうけた敵は逃げ場を失って悲鳴をあげ、岩のすきまにへばりついた。だがそれもむだだった。敵は文字どおり、すわってもうたれ、たってもうたれる逃れようのない立場におかれてし

まった。かれらは当時の状況をつぎのように記録している。

「午前十一時ごろ、敵は山頂からいっせいに大きな岩をころがしながら気勢をあげ、勢いに乗じて猛烈な逆襲に転じ、わが方の殉職者から武器、弾薬を奪取、……これに先だち大川警部は、すべて終ったと断念し、……全員枕をならべて討死する覚悟をかため、生存者集まれっと叫んだが、このときすでに川本、林、安藤などの各部隊長はみな弾薬がきれたうえ、重傷を負い、集まった者わずか十余名……であった」（咸鏡南道警察部発行『咸南警友』一九三七年、六〜七ページ）。

大川部隊が全滅したという急報をきいた今村部隊の兵士たちは、たがいに「自分がやられるのも知らず、あとを追って死んだ大川はバカの骨頂だ」と非難したという。

このように、将軍の指揮のもとに人民革命軍部隊は敵を射撃と石攻めで壊滅させたのである。

ロ隅水の丘の戦闘で勝利した将軍は、敵連合部隊の追撃を予測して革命軍部隊をすばやくそこから撤収し、悠々と帰路についた。

普天堡の街にあらわれた人民革命軍の偉容については敵側までが、「……その活動が組織的であり、よく統制がとれていたということは、じつに一国の独立した軍隊と少しもかわりなかった」（咸鏡南道警察部発行『咸南警友』一九三七年）と書かざるをえなかった。また、普天堡戦闘でこうむった日本の敗北の状況について、当時の新聞はつぎのように報道している。

「台風一過後の普天堡

普天面事務所、郵便局、山林保護区、……消防会館などの重要な建物が全部、一夜のうちに灰となった。まず駐在所をたずね、左右を見まわすと、あわれにも事務室は銃弾で蜂の巣のように穴だらけとなっていた。……面事務所、そこはいまも煙がもくもくとたちのぼり、柱と梁が燃えて真っ黒な炭のかたまりだけがつみあげられ、文書の

束もそっくり燃えてしまって、その灰が風に舞っていた」(『東亜日報』一九三七年六月九日)。

普天堡戦闘でうけた惨敗について、当時の恵山警察署長であった塩谷は、『普天堡事件についての感想』という一文のなかでつぎのように書いた。

「六月四日午後十一時二十五分、……佳林駐在所から緊急電話をうけた刹那、わたしは予想だにしなかったあまりにも重大な事件の突発に、まるで後頭部を、があんとなぐられたかのように全身が硬直した」

つづけて塩谷は、遊撃隊を追撃した自分の警察隊が苦戦をなめた事実を指摘しながら、つぎのようにのべている。

「刻一刻、わが方の不利な情勢は度を深めてゆき、心身が燃えつきるかのようであったが、仏道でいう地獄でもあるとすれば、実際その暗黒のもとで彷徨する餓鬼の思いにも似て、そのときの悲愁、痛憤、苦悩、焦慮というものは、まさに筆舌につくしがたいものがあった。……考えてみれば普天堡事件に関しては、千日もかけて刈りとった茅(かや)を一瞬にして灰にしてしまった気持ちである。将来、警備対策上において偉大な教訓をうけたが、あまりにも大きな犠牲をだしたため

『朝鮮日報』と『東亜日報』の報道

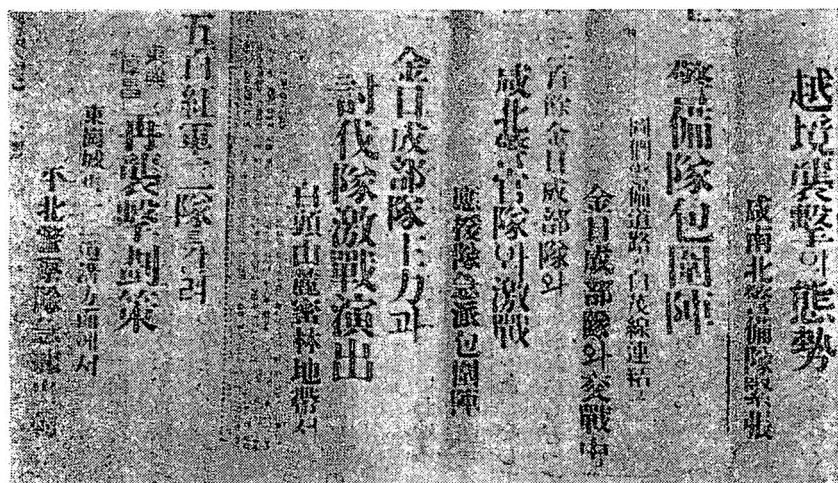
上級機関、罹災者その他一般社会にたいし、自分は責任を痛感する。……ああ六月五日！　一生忘れられない悲しい記念日である」（咸鏡南道警察部発行『咸南警友』一九三七年、十七～二〇ページ）。

普天堡戦闘で勝利した人民革命軍部隊は、意気高らかに黒瞎子溝の密営に帰ってきた。そこには補助打撃の任務をうけて進出した部隊や他の部隊が、戦闘任務をりっぱにはたしてひきあげてきていた。

黒瞎子溝の密営に集結した人民革命軍部隊は、国内進撃の勝利を祝う盛大な大会をひらいた。

将軍は勝利を熱烈に祝福しながら、こうした成果を記念するために、日本の侵略者をいっそう強力にうちくだく英雄的な戦闘を組織しようと提議した。将軍の提議は全指揮官と隊員たちの絶対的な賛同をえた。

新たな決意をかためた人民革命軍部隊は、天をもつく勢いで黒瞎子溝の密営を出発し、間三峰（カンサムボン）にむけて行軍した。六百余名で編成された人民革命軍連合部隊が将軍の親率のもとに間三峰地域に到着したのは、一九三七年六月二十九日のことだった。

越境襲擊의態勢
咸南北警備隊緊張
警備隊包圍
金日成部隊와交戰中
應援隊急派包圍
金日成部隊와討伐隊激戰演出
再襲擊計策

朝鮮人民革命軍部隊の国内進出にかんする

間三峰は千古斧を知らぬ大木が生い茂った高原地帯のなかにそびえる、まるで海のなかの孤島のような三つの峰からなっていた。将軍はこの三つの峰のまわりに宿営地をさだめたのち、隊員たちに休息命令をくだした。

そのころ敵は、みじめな敗北を挽回しようと血まなこになっていた。しかし、かれらの士気は一向にあがらなかった。国境に配置された守備隊と警察隊は、逃げだすことばかり考えていた。そして隊から逃げだす口実をつくるために、自分で自分を射ったり、仮病をつかったり、のどにやきごてをあてたりするなど、ありとあらゆる悲喜劇を演じていた。

国境一帯の兵卒たちがこんな状態では、「討伐」など思いもよらぬことだと考えた「朝鮮総督府」は、さっそく緊急会議をひらいて朝鮮駐屯軍第十九師団所属咸興七十四連隊の兵力二千余名と、長白駐屯偽満軍混成旅団の約五百名を動員した。

咸興駅前の広場では騒々しい儀式がくりひろげられた。かれらは市民を強制的にかりだして、いわゆる「討伐隊」の「壮行会」なるものまでおこない、人民革命軍を全滅させてみせると豪語した。このとき日本帝国主義の手先である金錫源は、武運長久と血でしたためた日章旗のしたで「天皇」にうやうやしく忠誠を誓った。そして、「おれがこんどいけば、きっと遊撃隊をつかまえてくる。みんな待っていろ。そして見てくれ！　おれがもどってくるときは、どんなふうに車をおりるかを！　諸君は必ず遊撃隊長をおがむことができるだろう」と胸をそらし、大言壮語をはきながら咸興駅を出発した。

約百台の自動車に分乗し、恵山を通過する二千余名の「討伐隊」の行列はまったく見ものであった。

六月三十日、敵の大連合部隊は深い霧を利用し、三つの方向から包囲陣をしきながらおしよせてきた。しかしかれらが間三峰につくやいなや、霧のなかからものすごい爆音がきこえた。

あらかじめ敵の動きをとらえ、間三峰一帯に水ももらさぬ陣をしいていた将軍が、ただちに射撃命令をくだした

からだった。先頭にいたかいらい軍がまず出鼻をくじかれた。そして先鋒が惨敗をこうむるや、敵の後続部隊は前進することができず、林のなかからやたらに大砲をうちはじめた。
　新たな情況を機敏にとらえた将軍は、総突撃して敵をせん滅するよう命令した。人民革命軍の一部隊は高地を迂回しようとした敵を正面から攻撃し、他の部隊は敵を包囲しながら総突撃を開始した。
　ちょうどこのとき、金錫源がひきいる「討伐隊」がたちむかってきた。将軍は各部隊に陣地を死守するよう指示し、敵の攻撃を混乱させながら、かれらを至近距離まで十分にひきつけておいて射撃命令をくだした。
　まるで山がくずれおちるかのような耳をつんざく銃声のなかで、敵兵はつぎつぎにたおれていった。しかしかれらは、いわゆる「さむらい精神」を発揮して自軍の屍をのりこえ、死にもの狂いではいあがってきた。革命軍の隊員たちは敵があがけばあがくほど憎しみに燃え勇敢にたたかった。
　朝からふっていた雨は、どしゃぶりになった。そうなればなるほど、戦闘もいっそう激烈になった。敵はふりそそぐ雨のなかで血と屍の修羅場におちこんだ。やがて最後を思わせる敵軍の突撃ラッパが鳴った。そのとき革命軍部隊のラッパ手たちは、いっせいに『アリラン』を吹きならした。そしてこれにあわせ、数十名の女子隊員が声高く『アリラン』をうたいはじめた。
　『アリラン』の歌声を耳にした敵兵たちには、それがなにかしら天の声のようにもきこえ、また、将軍がさらにおそろしい戦術をつかう合図のようにも思われて、いっそう色を失った。
　歌声とともに革命軍は総攻撃に移り、おそれおののく敵軍を一気に掃滅してしまった。遊撃隊は大勝した。千五百余名におよぶ敵の将兵を殺傷したのである。これは侵略者たちにとって、きわめてみじめな敗北であった。
　この戦闘で生きのこった敵兵は身につけていたすべてのものを投げだし、われ先にと逃亡した。金錫源も負傷して命からがら逃げだした。そして、あれほど大言壮語を吐いて出陣したはずの金錫源は満身傷だらけとなって、わ

ずかに生きのこった兵卒の首に白木の箱をぶらさげ、ぶざまによろけながら咸興駅におりたった。
売国奴の悲喜劇はまだつづいた。かれは死ぬ気力もないくせに、「天皇」のまえに罪をおかしたから死をもってわびると日本刀を腹にあてて見せ、そのじつ、だれか走りよってとめてくれないかと涙を流して待ちつづけた。
ちょうどそのころ、間三峰付近では「かぼちゃが豊作」という話がはやり、またもや敵はもの笑いの種となった。というのは間三峰戦闘ののちに敵側が、世間に知れわたっていた自分たちの敗北をとりなそうと試みて、かえって、逆に真相がことごとくばくろされてしまったからである。
数多くの死体処理に頭を痛めた敵は、戦闘地域に付近の人民が出入りすることを禁止する一方、死体から首だけ切りとり、胴体は現地で火葬にするか土にうめ、首は南京袋につめこんだ。そしてこの地方の馬車を総動員し、南京袋の中身は極秘にして道路まではこばせた。
ところが強制的にかりだされたこの地方の農民たちは、袋の中身がなんであるかを承知していながら、空とぼけて警備兵にこうたずねたのである。
「このなかには、なにがはいっていますんで?」
「見てわからんか。かぼちゃだ、かぼちゃだというんだ」
「ほう、かぼちゃが豊作だったんで……。いいおつゆの実に

間三峰戦闘で惨敗をこおむった敵軍の一端

なりますわい。たくさんめしあがってくだされ」
「かぼちゃが豊作」という話はこうして生まれたのである。
このように、金日成将軍のすぐれた戦術によって普天堡戦闘で大きな勝利をおさめた朝鮮人民革命軍は、ひきつづき間三峰一帯で敵の大兵力を撃滅し、国内進攻作戦の勝利をいっそう輝かしいものにした。
国内進攻作戦における朝鮮人民革命軍の勝利は、ごう慢な敵をふるえあがらせ、亡国の鉄鎖につながれて苦しんでいた朝鮮人民に、たたかえば必ず勝てるという確信と明るい未来にたいする大きな希望をあたえた。この勝利はまた、敵がわめきたてていた「内鮮一体」と「同祖同根」論にたいする強力な否定であり、朝鮮人民に朝鮮語をすてることを強要し、人間を番号でよびつけ、弾丸よけとして大陸侵略にかりたてようとした暴挙にたいする怒りにみちた決定的な否定であった。
それはまた人民にたいして、侵略者はうちのめさなければならず、また敵をうちやぶるためには団結し、反日民族解放闘争に力強く決起しなければならないという訴えでもあった。
こんにち朝鮮人民は、金日成将軍が三十年まえ、この地に高くかかげた不滅ののろしを子々孫々にながくつたえるため、白頭のふもと、歴史の地である恵山市に雄壮な普天堡戦闘勝利記念塔を建立している。
大勝した人民革命軍部隊は「遊撃隊行進曲」をうたい、意気高らかに十三道溝にむかって力強く行軍をつづけた。

同志よ　そなえよ　武器を手に
帝国主義侵略者を　うちくだき
雄々しく進もう　意気たかく

いくたび死すとも　敵をうとう
同志よ　いざたて　決戦に
銃把をかたく　にぎりしめ
雄々しく進もう　意気たかく
いくたび死すとも　敵をうとう

2　九月のよびかけ

一九三六年と一九三七年を勝利につぐ勝利でむかえた長白の地は、よろこびと感激一色につつまれた。
白頭山につらなるけわしい山なみにはさまれ、うっそうとした原始林におおわれた長白をはじめとする満州各地と革命の曙光に照らしだされた朝鮮国内では、あいつぐ勝利の知らせにわきたった。痛快きわまりない消息を耳にした人民は、「金日成将軍万歳！」を叫びながらたがいにだきあい、心ゆくまで踊りつづけた。
こうしたとき、ながいあいだ大陸侵略を準備してきた日本帝国主義は、間三峰戦闘の一週間後にあたる七月七日、ついに中国にたいする全面的な侵略戦争をひきおこした。
中日戦争の挑発とともに日本はドイツ、イタリアとの同盟関係を強化しながら、ひきつづき中国内で軍事行動を拡大していった。
そのため日本帝国主義は、自国の人的および物的な資源を総動員する一方、朝鮮における略奪と暴圧をいっそう強化する道につきすすんだ。

新しい情勢に対処して、将軍は一九三七年八月にひらかれた人民革命軍指揮官兵士大会における演説と、その年の九月の「全人民におくるよびかけ」のなかで新しい闘争方針を明らかにした。

将軍は演説で、日本帝国主義は一時的には優勢であるかも知れないが、終局的にかれらは滅亡し、革命は必ず勝利するという確信をひれきした。そして人民革命軍の戦闘行動をいっそう積極的なものにし、侵略戦争に狂奔する敵の背後を攪乱する作戦を強め、日本帝国主義にたいして、より大きな軍事的、政治的打撃をくわえなければならないと強調した。

作戦をねる金日成将軍

また将軍は、人民のなかにおける政治活動を強化し、反日民族統一戦線運動をいっそう拡大発展させ、人民革命軍の軍事的行動とくみあわせて、国内の人民大衆を決定的な闘争にたちあがらせるよう準備しなければならないとのべた。

将軍は、この「よびかけ」でつぎのように指摘した。

「われわれは訓練された政治工作員を朝鮮の重要な軍事基地、すなわち興南、咸興、元山およびその他の地域へ派遣しなければならない。そしてかれらを、すでに派遣した同志たちとしっかり連係させ、その組織を拡大、強化することに着

手しなければならない。後方での武装暴動と破壊工作を実現するための前衛的執行組織として、労働者突撃隊を創設することはとくに重要であり緊要である。上部から命令がくだったときは、自己の組織のメンバーを総動員し、この突撃隊を先頭にして武装暴動をおこし、後方で破壊工作を組織し、軍需工場その他の重要な企業所に放火および破壊をおこない、武器と弾薬を獲得するために駐在所を襲撃し、鉄道を破壊して軍事物資の輸送を破綻させながら国内に混乱をひきおこし、そうすることによって日本軍隊を敗北へとおとしいれなければならない」

終りに将軍は、各指揮官と兵士たちが武装隊伍を拡大すると同時に、マルクス・レーニン主義の原理を深く把握し、遊撃戦術を研究して革命軍の伝統的な自覚的規律をいっそう強化しなければならないと指摘した。

将軍の方針によって城市攻略戦、襲撃戦、待ちぶせ戦、鉄道と道路を破壊し軍需倉庫を焼きはらうたたかいなど、敵の背後をうつ作戦が広はんにくりひろげられた。

一九三七年九月二十五日におこなわれた輝南県城の攻略戦闘は、その代表的なたたかいの一つであった。またたくまに城市を占領した崔春国(チュエチュングク)警衛連隊長指揮下の約四百名の革命軍進攻隊は、城内に各種の宣伝ビラをまき人民大衆を反日闘争へとふるいたたせた。

輝南県城をあとにした革命軍進攻隊は、盤石、樺甸、朝陽鎮(チョヤンジン)方面で追撃してくる日満軍数千名を分担射撃と逆襲でうちくだいた。

この戦闘をとおして遊撃隊は、「満州国は王道楽土」であるとか、「国防は銅牆鉄壁(どうじょうてつぺき)」で「南満の共産軍は完全に粛清され、治安は確保された」とわめきたてていた日本軍国主義のデマ宣伝を一挙にくだき、人民の反日気勢をいっそう高めた。

将軍は日本帝国主義の背後をたたく軍事作戦を強化する一方、咸興、興南、元山をはじめ、軍事戦略上とくに重

要な意義をもつ国内の軍需産業地帯に数多くの政治工作員を新しく派遣した。

これらの政治工作員たちは、すでに活動していた同志たちに将軍の新しい闘争方針をつたえ、「九月のよびかけ」と、『三・一月刊』、『朝鮮共産主義者たちの任務』、『祖国光復会十大綱領』、その他の檄文を伝達し、かれらとの連係のもとに活動した。

政治工作員たちは、広はんな各階各層の人民のなかへ祖国光復会の十大綱領と朝鮮革命にかんする将軍の戦略戦術方針を浸透させ、祖国光復会の組織を数多くつくりあげた。

とくに政治工作員たちは、革命の主力軍である労働者、農民大衆のなかへ深くはいり、かれらを思想、階級的にめざめさせるかたわら、分散して活動していた国内の共産主義者たちを一つの闘争の旗じるし——祖国光復会の旗のもとにしっかりと統一団結させた。

政治工作員たちの不眠不休の活動によって、国内各地では短期間に数多くの祖国光復会の組織が生まれ、そのまわりに広はんな大衆が結集した。

興南、咸興地区に派遣された政治工作員たちは、一九三七年七月と八月のはじめ、いち早く興南肥料工場、本宮化学工場、興南火薬工場などを中心に祖国光復会の下部組織をつくり、それにもとづいて祖国光復会興南地区委員会を結成するまでにいたった。

祖国光復会の組織は、咸興市と咸州郡をはじめとする周辺の都市と農村地帯に組織網をひろげ、労働者、農民はもちろん、インテリ、青年学生、手工業者のなかにも深く根をはっていった。

祖国光復会興南地区委員会は一九三七年十月二十七、八日に、「帝国主義戦争に反対し、反日民族統一戦線を拡大強化しよう!」という檄文を市内各地にまき、人民を反日反戦闘争へとふるいたたせた。こうした闘争は、全国各地に力強くひろがった。

政治工作員と共産主義者たちは、金日成将軍のすぐれた指導と朝鮮人民革命軍の輝かしい軍事政治活動について、ひろく人民のなかに宣伝した。

抗日の英雄金日成将軍の偉勲にたいする物語は、たちまち伝説のように全国津々浦々にひろまっていった。朝鮮人民は勝利にたいする信念をいっそうかため、反日闘争を力強く展開していった。

将軍の「九月のよびかけ」にしめされた闘争方針は成功裏に実践されていった。

興南をはじめとする各地の労働者たちは、労働者突撃隊を組織する準備活動を活発にくりひろげた。

このように、各地に派遣された政治工作員たちの献身的で勇敢なたたかいによって、大衆の革命気勢はいっそう高まり、労働者、農民の運動と大衆の革命的な闘争は日ましに大きく発展した。

政治工作員たちのこのような活動について、日本帝国主義警察当局は、「道内（咸鏡南道をさす）興南、咸興、元山などの軍事上、国防上の重要都市および咸北（咸鏡北道）方面などへも、……政治工作員を派遣し、各種の非合法団体を組織したり、あるいは天道教徒との提携をはかることによって、抗日人民戦線運動の拡大強化を企図すると同時に、このたびの事変（中日戦争をさす）にたいしては、失地回復と、朝鮮独立のもっともよい機会であると認め、鮮内結社員を総動員し、武装蜂起、後方攪乱など」を計画し、それを遂行しつつあると悲鳴をあげている。

（咸鏡南道警察部発行『治安状況』、一九三八年、四七ページ）

金日成将軍が統率する人民革命軍の活動と、将軍の崇高な思想にはげまされた国内の労働者や農民たちは、反日反戦闘争にいっそう強力に決起した。

労働者、農民をはじめとする大衆の革命的な進出は、とくに普天堡戦闘ののち連続的におこなわれた。これは日本帝国主義のどのような弾圧も、抗日武装闘争のはげましのもとで日ましに成長する朝鮮人民の力強い反日気勢を絶対にくじくことはできないということをしめしたものである。

労働者たちは、一九三七年九月の興南製錬所溶鉱炉におけるスト、十月はじめの本宮化学工場におけるスト、虚川江発電所工事場におけるストなどをはじめ、各地で強力なストと大衆的なサボタージュ闘争をくりひろげた。こうした闘争は南浦製錬所の労働者千二百名のストをはじめ、釜山港改築工事場の労働者千三百余名の賃金切りさげ反対スト、仁川地区労働者数千名のストなど、日本帝国主義の軍需生産とかんれんした部門でいっそう強力に展開された。

翌一九三八年の冬には、日本帝国主義が軍需物資略奪の目的で建設していた端川、豊山間の鉄道敷設工事に強制動員された労働者のうち、二千七百余名が脱走して工事を遅延させることに成功した。

労働者たちのストライキとサボタージュ闘争は、ピョンヤン、新義州、清津、羅津、興南、元山、ソウル、仁川、釜山、東萊、晋州をはじめ、広はんな地域に波及した。

農民の闘争も各地で活発に展開された。小作権の確保と小作料のひきさげを要求してたちあがった農民の争議件数は、一九三七年だけでも、じつに一万七百余件に達していた。

闘争は高揚の一途をたどった。敵のどのような攻撃も、野蛮な弾圧も、金日成将軍をあおぎみて祖国の解放と自由のための決死的な闘争にたちあがった朝鮮人民の革命的進出を妨げることはできなかった。

第九章　峻嶺をこえて

1　きびしい冬

侵略者は密林をおそれた。

かれらは大陸の真夏のやけつくような暑さのなかでも、白頭の密林を想像すると心が凍りつくような気がした。なぜなら、そこにはたくみな戦術とおそろしい打撃力で、つねに急所をこっぴどくたたく金日成将軍の遊撃隊がいたからである。

革命は前進していた。朝鮮人民革命軍部隊が進出するいたるところで侵略者のとりでがくずれ、人民の歓声がわきあがった。

とくに普天堡戦闘のあと、間三峰戦闘と輝南県城戦闘をはじめとする数かずの戦闘で敵につぎつぎと大きな打撃をあたえた朝鮮人民革命軍部隊と、これにはげまされた人民大衆の闘争気勢は日ましは高まっていった。

敵は比較にならないほど大きな武力をもっていたにもかかわらず、精神的には非常にみじめな状態におちいっていた。かれらは深刻なあせりと恐怖のなかにつきおとされ、そのためにますます人民大衆にたいする中世紀的な弾圧と封じこめ政策にしがみつかなければならなかった。

ちょうどこのような時期、抗日武装闘争はふたたび外部から極左冒険主義路線をしいられる危機に直面した。

当時、コミンテルンの内部にもぐりこんでいた一部の極左冒険主義者たちは、満洲一帯の朝・中抗日武装部隊を熱河地方へ遠征させようとしていた。すなわち、都市と工業地帯があり、交通網が集中している南満洲のひろい平野地帯へ遊撃隊を進出させようというのである。

そのころ熱河地方には、日本帝国主義の大兵力がとぐろをまいていた。日本帝国主義は中国本土を侵略するため、南満洲の平野地帯と熱河地方に大軍を集結させていた。したがって熱河遠征は、敵の大兵力の包囲のなかに抗日武装部隊を投入する危険このうえない冒険でしかなかった。これこそ遠い外国にいて、遊撃闘争の実情も知らない者たちの主観主義的な危険な路線であった。

こうした極左冒険主義路線に盲従すれば、抗日武装部隊がとりかえしのつかない損失をこうむることは火を見るより明らかであた。

金日成将軍は、この路線が遊撃隊の戦略戦術的な原則からしても、また当面の情勢にてらしてみてもまったく誤った路線であることを見ぬいていた。

将軍は無謀な路線によってもたらされるかも知れない万一の事態に対処して、朝鮮革命の主体的立場から、しかるべき措置をとらなければならなかった。

将軍は、それまで東満洲や北満洲でたたかっていた朝鮮人民革命軍の各部隊をひきつづきその地域で活動させるとともに、一九三七年の秋、みずから主力部隊をひきいて平野地帯ではなく、勇躍として臨江、濛江地方の山岳地帯へ進出し、誘導戦術と奇襲戦術をもちいて敵に甚大な打撃をあたえた。

やがて冬がおとずれた。

冬は人民革命軍のまえに新しい苦難をもたらした。それは日本の侵略者たちが大量の「討伐隊」を人民革命軍にむけてくりだしたこととかんれんしていた。輝南県城の戦闘と、それに先だっておこなわれた普天堡、間三峰の戦

闘で大きな打撃をうけた敵は、まさに死にもの狂いであった。こうして人民革命軍と敵軍とのあいだでは、連日のように大小の戦闘がくりひろげられた。

この冬は例年になく大雪がふりつもった。寒さもいちだんときびしかった。それに連日はげしい吹雪が視界をさえぎり、山や平原で野営する遊撃隊の苦痛はなみたいていではなかった。

敵の部隊は冬の季節が自分たちに味方するとでも思ったのか、まるで日課のようにおそいかかってきた。かれらは多数の同僚の戦死体や凍死体を供物としてささげながらも、それから教訓をえようとはしなかった。

将軍は追撃する敵の部隊を雪のなかにひきまわし、敵がへとへとになったころあいをねらっては痛烈な打撃をくわえた。

そうなればなるほど敵はますます狂いたった。一つの部隊がうちのめされると、すぐ別の部隊が追撃してきた。すると将軍はすばやく部隊を濛江県馬塘溝(マダンコウ)の密林へ移動させ、姿をくらましてしまうのだった。

将軍はこのようにして極左冒険主義路線をふり切ってしまったばかりでなく、敵の悪らつな「討伐」部隊を雪深い山奥にくぎづけにし、いろいろな面できびしく不利であった情勢を一挙に余裕のある有利な局面にかえてしまったのである。

人民革命軍の行方を見失った敵は進退きわまった。

しかし敵が凍死者までだしながら雪深い山奥をさまよっていたとき将軍は、濛江県馬塘溝の密林のなかに用意しておいた密営で部隊の冬期軍政学習を指導していた。

ひと気のない山をむなしくさまよっている敵と、背のうをおろして学習と訓練にはげんでいる革命軍——同じ時刻に、敵と味方のあいだではまったく対照的なことがおこなわれていたのである。

朝鮮人民革命軍部隊において、軍事、政治学習は大切な革命的課題であった。そのころの部隊には一九三七年に

国内や長白、臨江県一帯から志願してきた数百名の新入隊員がいた。そのため一日も早く、かれらを軍事、政治的にきたえられた革命軍兵士として育成しなければならなかった。

将軍はこの冬期学習を夏ごろから準備していた。一部の隊員を派遣して学習期間に必要な食糧をととのえさせる一方、濛江県の深い密林へ秘書処勤務の隊員を送り学習資料の出版をすすめていた。

将軍は主力部隊をひきいて馬塘溝の密林に到着すると、隊員たちといっしょにきちんとした兵舎を建てる仕事からはじめた。せわしい時期に多くの労力をついやし、数十里の深山幽谷と密林を征服して無から有をつくりだす過程は、戦闘におとらない革命的な情熱を必要とした。

軍事、政治学習がはじまると、将軍はみずから講義をうけもち、それについてこれない隊員たちにたいしては個別的な指導がおこなわれた。数多くの質問には即座に科学的な解答があたえられた。隊員たちは自習班と識字班とにわかれ、熱心に学びつづけた。

ところがはじめのうちは、文字をよく知らない何人かの新入隊員が、学習をむずかしいものと思いこんでしりごみする傾向を見せた。

ある日、このことを知った将軍は朴昌淳（パクチャンスン）という隊員をよんで学習状況をたずねた。家が貧しく入隊まえは文字をならうことができなかったかれは、このときとんでもない意見をだした。

「司令官同志！　わたしは石頭なので字をおぼえるのはごめんです。字をならう時間に射撃練習でもよけいやって、一人でも多く日本の侵略者をやっつける方が自分にはむいていると思います」

将軍は微笑をうかべながらかれを見つめていたが、目のまえにあるつたもみじの枝をさしてこうたずねた。

「この木は、なににつかったらいいと思う？」

「斧の柄にすればいいと思います」

農民として育ったかれは、ためらうことなくこたえた。

「そうだ、これは斧の柄につかえばいい。革命をするのもちょうどそれと同じことだ。なにがどこに必要であり、それをどういうふうにつかいこなすかをよくわきまえていないものは、革命をなしとげることはできない。ところで勉強をしないものには、斧の柄にどんな木がいいのかもわからないだろう。日本帝国主義をうちたおすことも知識がなければうまくいくまい。鉄砲だけでは敵にうちかつことはできないのだ」

将軍のことばに強く刺激されたその隊員は、中隊にもどると同志たちにこう話した。

「鉄砲だけで日本帝国主義をやっつけることはできない。知識があってこそ、りっぱにたたかえるのだということをいまはっきりわかった。これからは一生懸命に勉強するぞ」

実際その日から、かれは熱心に学びはじめた。ところがもう一人の新入隊員だけはあいかわらず射撃練習にばかり熱中して、だれがなんといおうとも「心配するな。勉強はできなくても、日本帝国主義者をやっつけることにかけては、だれにもひけをとらないから」といって、一向にその態度をあらためようとはしなかった。

これを知った将軍は、ある日その隊員あてに手紙をしたため伝令兵にもたせてこう指示した。

「だれもこの手紙を読んでやってはならないと、まえもっていっておきなさい」

将軍から手紙をもらったその隊員は誇らしげに中隊や連隊のあいだをかけずりまわり、早く読んでくれとみんなにせがんだ。しかしあれこれと口実をもうけて、だれ一人その手紙を読んでやろうとはしなかった。かれは同志たちをうらんでもみたが、どうにもならなかった。考えあぐねたすえに、かれはしかたなく顔を赤らめながら将軍のところへいった。

「司令官同志、だれもこの手紙を読んでくれないのでもってまいりました」

将軍はだまってその手紙をうけとり、内容を読んできかせた。
その手紙には緊急な任務がしるされていたが、指示した時間はとっくにすぎていた。新入隊員は冷や汗をかきながらついに深くうなだれてしまった。
将軍はおだやかな口調でさとした。
「同志がもしも敵の後方に派遣されたとき、指揮部からの手紙が読めなくて、そこに書いてある任務をすぐさま遂行できなかったとしたら、いったいどういうことになるだろう。いうまでもなくそれは、革命に大きな損失をあたえることではないだろうか。われわれの双肩には重大な任務がかかっている。一日も早く日本帝国主義をうちたおし、祖国を解放するという崇高な革命の任務がわれわれに課せられているのだ。もしわれわれがマルクス・レーニン主義を知らず、大衆を教育してたちあがらせることができなければ、どうしてその革命の任務を遂行することができるだろうか。だからわれわれは学習に学習をかさねなければならない。革命家にとって学習は第一の義務なのだ。いくら文字をならうのがむずかしく条件が困難であっても、またわれわれがいつ、どこにいようともねばり強く学習をしなければならないのだ」
将軍の一言一言は隊員の胸に深く刻みこまれた。かれは目に涙をうかべながら、自分のあやまちを悔いあらためると将軍にかたく誓った。その後、かれはこの誓いをりっぱに実行した。
馬塘溝の密林における冬期軍事政治学習は、一九三七年十一月から翌年の三月までつづけられた。学習がおこなわれているあいだ、敵は人民革命軍の行方をさがしもとめ、山という山にスパイを放っていた。
一九三七年の冬のある朝のことであった。
宿営地付近をうろついていた一人の老人を歩哨の双眼鏡がとらえた。農民のような格好をしたこの老人は、イタチをとりにやってきたのだといった。しかしそれはいつわりで、敵にそそのかされて遊撃隊の動向をさぐりにきた

のだった。
知らせをうけた将軍はその農民に会った。
将軍は老人の手をとってすわらせてから、住居がどこか、家族は何人いて暮らしむきはどうなのか、また村の人たちの生活はどうかとくわしくたずねた。そして、いつからイタチとりをしているのか、イタチとりの一番いい時期はいつなのか、収入はどれくらいになるのかなどについてもたずねた。
こうしてながいあいだ農民と話をしながらも、将軍はかれが遊撃隊の宿営地近くまではいってきたことについては一言もたずねなかった。それだけでなく将軍はその農民に、疲れているだろうから数日のあいだ休んでいくようにとすすめさえした。
農民を休ませたあと将軍は隊員たちに、農民が自分からすべてをうちあけるよう親切に接しなければならないとつぎのように話した。
「われわれはあの農民をうたがうまえに、まずかれがどういう人間であるかを知らなければならない。われわれと同じ階級的な境遇にある人にたいしては、かれがどうして敵にそのかされたのかをよく知ったうえで、自分からうちあけられるようにしんぼう強く説きふせ、できるだけわれわれの側につくようにしなければならない。こうしてはじめて敵は足の踏み場もなくなり、その謀略はことごとく粉砕されるのだ」
将軍の指示どおり隊員たちは農民に冬服をあたえ、寝床をととのえ、食糧事情が悪かったにもかかわらず農民にだけは特別なもてなしをした。
数日後、将軍はふたたびその農民と会った。そしてかれの生活が非常に苦しいようすなので帰りに食糧をもたせるよう隊員に指示したのち、「家に帰れば敵の迫害がひどいでしょうに、どうして暮らしていくつもりですか」と老人にたずねた。

密林の宿営地にいるあいだ、将軍の寛大でいつくしみ深い徳性や思いもよらぬもてなしに強い感動をおぼえた老人は、もはや良心の苛責にたえられずついに自分の正体を率直にうちあけた。自分のあやまちをさとった農民は部落にいる敵の数と動静をあらいざらい話したうえ、遊撃隊が敵を攻撃しにいくときは自分が道案内にたつという決意までひれきした。

将軍は二名の隊員を偵察にだして敵情をたしかめたのち、その農民とともに小部隊を派遣して濛江県西牌子（シイパイズ）にいる日本軍「討伐隊」を奇襲した。

このほかにも数回にわたって敵の後方奇襲戦闘がおこなわれた。これは革命軍部隊の行方をさがしもとめていた敵を混乱におとしいれ、学習時間をより多く生みだすための戦闘であった。

ところが、こうしておこなわれた濛江県四区靖安屯（チョンアントン）の戦闘（一九三八年のはじめ）において、将軍に深く愛されていた崔京華（チュエギョンフア）隊員が壮烈な死をとげた。

「大学生」というあだ名があったかれは、背が高く楽天的な性格の持ち主でどんな仕事でも献身的にやってのける情熱家であった。遊撃隊の新聞『鐘の音』の編集をうけもっていたかれは、心血をそそいで詩をつくったり、さし絵を描いたりしていた。かれには、たたかいがよろこびであった。いつもすすんで危険な任務をひきうける気性だったかれは、戦闘がはじまるとまるで火の玉のように勇猛果敢であった。

靖安屯の戦闘でも城門をあけた瞬間、同志たちにむけられた敵の銃火を自分の方へひきつけながら単身で突入したところを腹部に致命傷をうけたのだった。

戦闘は勝利のうちに終った。

しかし崔京華隊員が致命傷をうけたことを知った将軍と隊員たちは、いい知れぬ悲しみに沈んだ。部隊が帰路についたとき、将軍はかれの担架について歩きながら自身の外套をぬいでかけてやり、幾度もはげましのことばをか

けた。

崔京華隊員は最後の瞬間まで将軍を見つめたままだった。それはちょうど、みじかかった生涯の大きな生きがいと祖国の未来を読みとろうとするかのようであった。

かれは、もうこれ以上、祖国のためにたたかうことができない自分をなげきながら静かに息をひきとった。

将軍はかれの肩をだき、なんどもかれの名をよび、声をつまらせながら「……また、貴い戦友を失った……」とつぶやくと、それ以上ことばをつづけることができなかった。隊員たちの目からも涙がとめどもなく流れた。

その夜、将軍は密営の灯りのまえで声もなく悲しみにくれて朝をむかえた。せき切ったように流れる涙をぬぐおうともせず、一字一字、崔京華隊員への追悼文をしたためていたのである。

異国の寒空のもとで、多くの戦友たちが永遠の眠りについた。そのたびに将軍は、かぎりなく深い悲しみにつつまれた。かれらはみな静かな微笑をうかべてこの世を去ったが、その微笑のなかにひめられた英雄的な人間像が将軍の胸をいっそうはげしくゆさぶった。

命をかけて救いだし、たゆまぬ愛をそそいではぐくんだ隊員たち——、かれらすべてが岩を枕にし、雪のなかで眠りながらも歌を生み、功を生んだ愛国者であり英雄であった。それゆえ将軍は、世間的な苦しみをのりこえることはできても同志の死にだけはたえることができなかった。そしてそのたびに、敵への炎のような憎しみと革命にたいする重い責任をあらためて強く感ずるのであった。

将軍と隊員——、それはわかつことのできない血肉のつながりでむすばれていた。だからこそ将軍は、はげしいたたかいのなかでも雪をかきわけてすすんだ道をひきかえし、戦死した同志を手厚く葬ったのである。

将軍はおごそかにとりおこなわれた追悼式で、崔京華隊員と永遠の別れをつげた。楽天的で英雄的だった同志の死をいたみ、その復讐を誓う悲壮な追悼文が読みあげられた。

深い悲しみにつつまれた将軍がみずからしたためた追悼文の一言一句は、全隊員の心をはげしくゆさぶった。

「ああ、崔京華同志、永遠に帰らぬ同志よ！　なつかしいふるさと、愛する父母兄弟に別れをつげ、はるかな国境をこえて抗日武装闘争に身を投じたその日から、同志は一命をささげて革命と戦友たちのためにたたかいぬいた。はげしい夏の雨の日も、吹雪が荒れ狂う冬の日も、飢えをしのび草を枕にしながらこえてきた苦難の道のりは、また幾千里であったことか。同志は祖国の解放と独立、人民の自由と解放のために夜を日についでたたかってきた。惜しいかな、崔京華同志よ！　胸深くひめた大志をとげえずして、不屈の革命精神をいだいたまま敵の凶弾にたおれ、道なかばに逝（ゆ）きし同志よ……」

追悼辞は故人の熱烈な革命精神と闘争業績をたたえ、つぎのようにむすばれた。

「同志よ！　同志の骨髄に徹した敵への憎しみと恨みは、われらが必ず百倍千倍にして復讐するであろう。また同志がはたしえなかった革命の偉業は、われわれが必ず最後までなしとげるであろう。祖国の大地に自由と独立の旗がひるがえり、人民のしあわせが花ひらくその日まで、われわれは同志の志をついで屈することなくたたかい、必ずや勝利をかちとるであろう。同志よ、やすらかに眠れ！」

追悼のことばにつづいて全員が悲憤にみちた声で追悼歌をうたった。

胸いだき
木の下に
たおれし友よ
ほとばしる
汝（なれ）が血潮は

大地を染めぬ
かなしきは
父母とも別れ
つれもなく
つもりたる
恨みをいだき
息絶えぬ

山鳥よ
屍(かばね)を見て
鳴くなかれ
身はたとえ
朽ちはてるとも
革命の魂は死なじ

戦友たちは涙にしわがれた声で追悼歌をうたい、銃を手にして、かたく復讐を誓った。
密営地での学習がつづいた。貴い戦友を失った隊員たちは、敵にたいする燃えるような憎しみをいつにもまして学習をはげむことにそそいだ。復讐のための戦闘的な学習であった。

革命軍部隊を見失って山という山に捜索網をはりめぐらした敵は、どこをどうかぎつけたものか馬塘溝西方の密営のすぐそばまで近づいていた。こうなれば接近戦をくりひろげるしかなかった。部隊は猛烈な攻撃をくわえて敵を完全に撃退したのち、雪におおわれた密林をぬい、そこから四十キロほどはなれた馬塘溝東方の密営へ移っていった。

将軍はこのとき、一部隊に撫松方面の街道を遮断させ偽満軍の馬ぞりを襲撃させた。これは革命軍部隊が敵を追撃し、撫松街道まで進出して他の方面に移動したかのように思いこませる作戦であった。ことは思いどおりにはこんだ。将軍は敵の目をくらましてから馬塘溝の東方の密営にはいり、一時中断していた軍事政治学習をつづけた。

馬塘溝の東方の密営での学習は一か月半のあいだつづけられた。この期間中、敵は影さえ見せなかった。

馬塘溝密営における四か月間の集中的な冬期軍事政治学習は、隊員たちが後日、感慨深く回想しているようにまさしく「革命の大学」であった。

学習が終ると春になった。将軍は各部隊に出動命令をくだした。

「冬のあいだ、わが軍が戦略上の小規模な作戦に移行したため、敵はいま油断しきっている。わが軍は敵のこうした弱点をつき、適当な時期に奇襲、または誘導戦術で敵の兵力を掃滅しなければならない。と同時に、朝・中人民のなかで愛国主義思想を鼓吹し、わが軍の必勝不敗の信念と戦闘士気を高めながら、これからの大規模な作戦の遂行に必要な被服、食糧、弾薬その他の軍需物資を解決しなければならない」

この命令にしたがって革命軍部隊は春期攻勢に移った。隊員たちは冬のあいだにたくわえておいた旺盛な戦闘力で、狂奔する敵に復讐の銃火をあびせた。

将軍は主力部隊をひきいて鴨緑江対岸の長白、臨江県一帯を遊動しながら、奇襲や誘導戦術をもちいてつぎつぎと敵に甚大な打撃をくわえた。四月はじめの長白県佳在水（カジェス）の戦闘につぐ臨江県の六道溝（リュクトグ）、双山子（サンサンヂャ）、賈家営（ジャジャヨン）戦闘と長

白県十道溝の戦闘において、革命軍部隊は敵にせん滅的な打撃をあたえた。
冬期軍政学習で軍事技術をみがき、将軍の革命精神と闘争の科学で武装した人民革命軍は、文字どおり泰山をもゆり動かす勢いであった。

2　大敵に包囲された密林のなかで

一九三八年の秋、日本帝国主義は十余万にのぼる大兵力をあわただしく西間島一帯に、すなわち中国本土侵略戦線の後方へ投入した。
すでに中国で広大な戦線をはっていた日本の侵略者たちが、いそいで大軍を西間島へまわしてきた大きな理由は、そこが戦略上大陸への重要な関門であり、そこで連続的な攻撃をくわえている朝鮮人民革命軍に強い恐怖を感じたからであった。
一方、アジア占領の野望にみちていた日本の侵略者たちは、「反ソ反共」をいっそう騒々しくわめきたてながら満州一帯に軍需物資をつぎつぎとはこびこんでいた。
このように日本帝国主義は中国にたいする侵略戦争をおしすすめながら、自己の戦略的基地である満洲に莫大な兵力を増強した。
かれらは後方の安全のために「支那」派遣軍をはじめ、関東軍、朝鮮駐屯軍、偽満軍、警察、自衛団など、いっさいの武装力を「パルチザン大掃討戦」に総動員するかたわら、朝鮮国内と国境線に厳重な警戒網をはるなど、いわゆる「国防治安」に狂奔していた。
敵は一九三七年の十月以来、北部朝鮮と長白一帯の革命組織を破壊するために大検挙旋風をまきおこしていた。

かれらは数千名の朝鮮共産主義者と愛国的な人民を監獄につなぎ、野獣のように虐殺してはばからなかった。
革命の前途には、ふたたびきびしい試練のときがせまっていた。日本の侵略者たちが全面的な攻勢をとり、多くの革命組織が破壊された。朝鮮と満州で数多くの共産主義者と人民が検挙され牢獄につながれた。満州では「治安粛正」のスローガンのもとに、軍隊と警察がいっしょになって共産主義者の武装闘争と大衆運動を弾圧した。

　このように各方面でつぎつぎとおこった重大な事態は、革命にとって不利であり、きわめて危険な情勢をかもしだした。

　金日成将軍は、このきびしい現実をふたたびのりこえなければならないと痛切に感じた。一見、これ以上攻勢をとることもできなければ後退することもできないような局面ではあったが、将軍は革命的な情熱と深い科学的判断にもとづき、あらゆる常識をうちやぶって勇躍攻勢にでる決意をかためた。当時この局面を打開できる人は金日成将軍をおいてほかになく、また将軍にはそれを遂行する歴史的な使命が負わされていたのである。

　敵の気ちがいじみた弾圧に苦しむ朝鮮人民と朝鮮革命の運命を思い、将軍は日本の侵略者たちに強力な軍事的打撃をあたえて革命運動をふたたび高揚させるための具体的な方法を構想した。そして将軍はまず、東満州と南満州の遊撃隊を濛江県の南牌子(ナムペジャ)に集結させた。

　将軍の召集をうけた各地の革命軍部隊は敵の包囲網を決然とつきやぶり、ぞくぞくと南牌子に集まってきた。その途中、優勢な敵の大兵力とはげしい戦闘をくりひろげたことも一度や二度ではなかった。たとえば熱河方面からでようとして莫大な損害をこうむり、やむなくひきかえした南満州の中国人抗日部隊は臨江県外岔口(ウエチャグ)の平地で敵の大部隊に包囲され重大な危険にさらされた。このとき将軍の命令をうけてその抗日部隊と共同作戦をおこなっていた朝鮮人民革命軍の朴先鳳(パクソンボン)連隊は、勇敢な突撃作戦を展開して五百余名の敵を掃討し、南牌子へとはせ参じた。

　その年の十月末、将軍は南牌子のうっそうと茂る密林のなかにぞくぞくと集結する戦友たちと感激的な再会をし

た。将軍は、革命のためにのみ生き、革命のためにのみ死ぬことを誓い、万難を排して集まってきた戦友たちを、「同志たちこそ真の共産主義者であり、不死鳥である」と高く評価した。

ところが革命の攻勢を期すための重大な会議がおこなわれている密林のなかへ、一人の招かれざる客が姿をあらわした。十一月のある日だった。以前、将軍の指導のもとに青年運動に参加していたが、敵にとらえられて変節した李鐘洛(リジョンラク)という男で、将軍をたずねてやってきたものである。しかし将軍は、この裏切りもののことはあとまわしにして会議を続行した。

十一月に南牌子の密営でおこなわれたこの会議では、革命において攻勢をとる深刻な問題が討議された。南牌子会議で将軍は、熱河遠征の冒険主義的な本質とそれによる重大な悪影響について深く分析し、これを強く批判した。

つづいて将軍は、現情勢と抗日遊撃戦の今後の戦略的方針について報告した。将軍は当面する情勢をくわしく分析し、これに対処すべき新しい闘争任務を明らかにした。将軍は敵の大規模な「掃討戦」に対処して武力装備をいっそう強化し、戦略上、大部隊機動作戦を基本としながら、これに小部隊作戦を並行させなければならないと強調した。そして敵にたいする大量せん滅戦を展開する一方、朝鮮と満州において人民大衆を反日民族解放闘争へとふるいたたせ、破壊された革命組織をたてなおす活動を積極的にくりひろげなければならないとのべた。

こうして会議では、敵の大規模な「掃討戦」に対処して部隊を三つの方面軍に再編成した。将軍は自身のひきいる部隊の一部をさいて他の部隊を補強したのち、主力となる方面軍をひきいて敵の包囲陣を突破し、ふたたび白頭山の西南部地帯と国内へ進出する困難な任務をひきうけた。

一週間にわたっておこなわれた南牌子会議は、抗日武装闘争をいっそう積極的なものに高め、人民を新しい勝利へとふるいたたせるうえで重要な意義をもっていた。

会議は終始、朝鮮革命の主体的な路線を確固として守ってきた将軍の立場と、朝鮮人民革命軍の独自な活動を保

障しながら、その力量を保存し強化してきた金日成将軍の賢明な指導性をいま一度あますところなくしめした。こうして東満州と南満州一帯の抗日武装闘争は、いっそう力強く展開されていった。

会議を終えた将軍は李鐘洛の問題を処理した。

将軍は、かれが敵のいわゆる「帰順工作」の任務をおびてやってきたことをすでに知っていた。当時、「討伐作戦」をくりかえすほど、かえっておそろしい報復をうけてさんざんな目に会っていた日本の侵略者たちは、武力だけでは将軍をどうすることもできないと痛感していた。そこで最後の切り札として革命の隊伍から脱落した変節漢を利用し、おろかにも将軍を「帰順」させようと試みた。

日本帝国主義の頭目たちは、李鐘洛を派遣するまえにも幾度か「帰順工作」を試みたことがあった。将軍が親思いであることを知った敵は、将軍の祖父母を利用しようと画策した。

かれらは革命の隊列から逃亡して自分たちの手先になった者を利用し、将軍の祖父母を懐柔しようとした。敵の手先どもは、将軍が帰順すればまちがいなく出世をするし一家そろって幸福になると甘言をならべたてた。しかし将軍の祖父母はかれらをさげすみ、そのたわごとには耳をかそうともしなかった。

すると敵は大金をつみあげ、歓心を買おうとさえした。そのとき将軍の祖父は、「どんなにもうろくしても、このわしが孫の命を金とかえるとでも思うか！」と一喝し、それをはねつけた。

業をにやした敵はついに牙をむきだした。かれらは本性をあらわし、将軍の祖母を脅迫してむりやり満州へつれだした。

しかしこれは、かれらにとって恐怖の行脚でもあった。なぜなら金日成将軍の祖母を満州までつれだしたからには、将軍のおそろしい視線が自分たちにそそがれるのは必定であり、それを思うと生きた心地がしなかったからである。敵の手先どもは、将軍の祖母にたいしてぶしつけなまねでもしようものなら、それこそ自分たちの首があぶ

南牌子会議を指導する金日成将軍

ないとばかり、ゆく先ざきで一番上等な家か一流旅館に将軍の祖母をとめ、下僕のように平身低頭してもてなしたりした。一方、将軍の祖母は威厳をもってふるまい、敵の手先どもを召使のようにあしらった。しかしそれがどうあれ、この旅は将軍の祖母にとって気のすすまぬ心苦しいものであった。

変節漢どもは気候も不順な季節に、六十の年老いた将軍の祖母をつれて、長白、撫松、濛江のけわしい道のりを歩きつづけた。かれらは、なんとかして将軍の祖母の歓心を買おうと、やれ食事だ、やれ高価な服だとさわぎたて、お世辞をつかうのに懸命だった。そしてかれらは、口をひらけば「お孫さんさえよんでいただければ、どんなぜいたくだってできますよ」とくりかえした。しかし将軍の祖母は、白鷺（しらさぎ）が鴉（からす）にたいするかのように、大きな誇りと気概にみちてゆるがなかった。

敵はときどき「帰順」をすすめる手紙を孫に

書いてくれと哀願したり、脅迫したりした。そうしたときの将軍の祖母のこたえはことのほかきびしかった。
「そんな手紙を孫に書くようなばあさんなぞ、この朝鮮の国には一人もいないよ！」
にもかかわらず、敵はそのおろかな試みを一向に断念しようとはしなかった。ある山のふもとにさしかかったときなどは、「おばあさん、この山のなかには金日成将軍がたしかにいるんですが、なんとかしてくれませんか」と泣きごとをならべた。将軍の祖母はすぐさま、「ばかなことをいうでないよ。それならおまえがいくがいいさ」、「おまえのようなばかものを生んだ母親がかわいそうだよ」とどなりつけ、決してかれらがとりいるすきをあたえなかった。
山そのものがおそろしい将軍の要塞のように思えて、かれらは足音をしのばせてひきかえしたりもした。恐怖からのがれるすべはなかった。たえず酒でも飲んで酔っていなければ歩きまわる気力さえ生まれなかった。そのうえ将軍の祖母が、わたしを苦しめれば孫の金日成将軍がただではおかないとおどかすので、かれらはよけいに意気消沈してしまった。
敵の策謀をうちくだいて帰路についた将軍の祖母は、白雪におおわれたけわしい山なみをいつまでも見つめていた。その名は太陽のように輝き、すべての人びとが慕いうやまうりっぱな孫、遠くからでも、ほんのひと目でも会ってゆきたい孫、しかしいまは会うこともできず、また会ってはならない孫——、その孫のいる山なみを見つめる祖母の胸には、熱いものがこみあげてならなかった。
将軍の祖母は流れる涙をぬぐい、孫の身を案じながら帰途についた。
みじめな失敗にいらだった敵は、今度は裏切りものの朴且植（バクチャシク）を将軍のもとへさしむけた。しかし、かつて自分を教えてくれた将軍にいざ対面してみると、かれはとても「帰順宣伝」どころではなかった。むしろかれは涙を流しながら、自分が敵からうけた指示と裏切り行為についてあらいざらい告白した。そして、民族反逆者の李鐘洛が敵

の軍属として服務していることもうちあけた。
将軍はかれを処罰したい気持ちだったが、自分の罪をかくさず告白したことを考慮して寛大に許してやった。将軍は、おまえを切っても刀がけがれるだけでなんのたしにもならないと強くいましめ、民族の良心をとりもどし、今後は決して革命家を売る日本帝国主義のけがらわしい手先になってはならないとさとしてかれを帰した。
しかしおろかな日本の侵略者たちは、朴且植の失敗がなにを意味するかを知らなかった。かれらは逆に、それを自分たちに有利な材料であると解釈して李鐘洛をさしむけてきたのだった。
日本の侵略者たちは、自分たちの忠実な手先であり、しかも「皇道思想」が骨の髄までしみこんでいる李鐘洛に大きな期待をかけた。
当時、みにくい売国奴におちぶれた一部の「民族運動家」たちは愛国心を時代錯誤だとけなし、天皇の「勅語」を声を大にしてほめたたえたりした。したがってかれらにとっては、中国南部の広大な地域にまで侵入した日本帝国主義は全アジアにまたがる「大きな希望」なのであった。堕落して敵の手先となりさがったこれらもろもろの「運動家」たちは、当然の帰結として侵略勢力の道案内をつとめる卑劣な役割をはたした。
朝鮮の解放と独立のためにたたかった真の愛国者は、まさに金日成将軍とその導きをうける抗日遊撃隊、そして将軍を慕ってたたかった闘士たちをのぞいてはほかになかった。
将軍は、李鐘洛を朝鮮人はおろか人間だとも思っていなかった。将軍がもし不快に思ったことがあるとすれば、それはかれがあまりにも醜悪だったからである。したがって、かれをすぐに処断する必要もなかった。むしろそれよりももっと重大な問題、すなわち、どうすれば敵の包囲のなかで時間の余裕を生みだし、計画した会議をすすめることができるかということに心をくだいたのである。
将軍は李鐘洛に手紙を書かせ、金日成将軍にはまだ会えず、その指揮下にある小部隊にやっと会えただけで将軍

のところまでは、二百八十キロもゆかなくてはならず困っているところだというような内容を敵側につたえさせた。この手紙をうけとった敵はたいへん満足した。だが結局のところ、将軍の計略にまんまとひっかかったのである。

こうして時間をかせぎ、計画どおりに南牌子会議を終えた将軍は、李鐘洛問題の処理にあたった。

将軍が自分を相手にしてくれるものと早合点した李鐘洛は、革命闘争の無益さをとうとうとしゃべりまくった。

「世のなかがかわったのですから、日本軍とたたかうのはやめた方がいいです。日本はいずれ、朝鮮を独立させてくれるでしょう。そのときに将軍は陸軍大臣になれますし、栄耀栄華をほしいままにして一生を安楽に暮らせます。『満州国』ができてからというものは、もうここはたたかえるところではありません。ですから方向をかえた方がよいと思います」

将軍は、かれと話す必要がないと考えた。革命の変節漢を人間あつかいする気になれなかったからである。こんな、とるにたらない者をつかって自分の心を少しでも動かしてみようと試みる敵のおろかさと、こんな愚劣な手までつかわなければならなくなった「大日本帝国」の深刻な苦悩に嘲笑を禁ずることができなかった。

処理はかんたんであった。将軍は隊員たちに、裏切りものであり日本帝国主義侵略者の手先である李鐘洛を処断させた。もともと正義にそむき反人民的な悪業をこととするやからだけに、その死はきわめて当然であった。そこには、ただそれにふさわしい懲罰と醜悪で破滅的な終末があるだけだった。

かれの屍には、同窓生であれ、親戚であれ、革命を裏切り妨げるものは、李鐘洛と同じ運命にさらされるであろうという警告状がはりつけられていた。

部隊は南牌子を出発した。

地中にもぐったのか、空に舞いあがったのか、遊撃隊の姿は一向に見えず、南牌子のうっそうとした森林のなか

には反逆者のけがらわしい死体だけがころがっていた。その屍にはりつけられていた警告状は、たんに一人の反逆者だけにあたえられたものではなかった。それはまさに、日本帝国主義侵略者とそのすべての手先たちにあたえられた革命の側からのおごそかな警告だったのである。

3　苦難の行軍

歳月はきびしく革命は苦難にみちていた。朝鮮を血ぬられた巨大な監獄にかえた日本帝国主義侵略者は、類例のない大兵力を投じて、あくまでも金日成将軍のひきいる朝鮮人民革命軍を「討伐」せんものと狂奔した。

このようなときほど、革命における主導権を奪われてはならなかった。逆に険悪な情勢を真正面からうけてたち、敵の大軍をうつ決心をした金日成将軍は一九三八年の十二月、主力部隊をひきいて南牌子を出発し、長白と国内への苦難にみちた行軍の途についた。

将軍は、けわしい前途を予測した。敵はとくに長白地区の全域と国境線一帯、それに北部朝鮮一帯を大兵力でおおい、じつにものものしい警戒態勢をとって遊撃隊の出現をうかがっていた。

こうした情勢のなかで臨江、長白、白頭山をむすぶ敵の三角地帯の中心部深くつきすすむことは、かれらに包囲される危険が大きかった。それればかりでなく、一週間で到着できるはずの長白への行軍が、たえまなくおこなわれる戦闘と複雑な迂回前進と、これから生ずる難関などによって大幅におくれることも予想しなければならなかった。

しかしそれにもまして危険にさらされていたのは、地獄絵図さながらの祖国と同胞たちの運命であった。したがって、たとえ怒濤さかまく荒海が前途によこたわっていても、将軍はこれをのりこえなければならなかった。

行軍は最初から困難をきわめた。

荒れすさぶ吹雪とたたかいながら背丈をこす雪をかきわけてすすまねばならず、零下三、四十度の寒さにもうちかたなければならなかった。しかも食糧難がつづいたうえ、数万の大軍が足跡を追ってせまっていた。

敵は「後方の安全」のため、南満州と北満州の全域に二十万の大兵力と航空隊まで動員し、いわゆる「大掃討戦」なるものをくりひろげた。とくに将軍が指揮している遊撃隊司令部を「消滅」しなくては、遊撃隊をつぶすことも朝鮮革命の命脈をたちきることもできないと考えた敵は、遊撃隊司令部の追跡に血道をあげた。そしてこのときから敵は戦術をかえた。それまでの一度攻撃してはしりぞき、またおそいかかる「ピストン式」戦術ではとうてい遊撃隊を「掃討」できないと考えた敵は、遊撃隊にぴったりとくっついてまわる「ダニ戦術」をとりはじめた。またかれらは、櫛（くし）ですくように山野をしらみつぶしにする「櫛すき戦術」も併用した。

敵は遊撃隊があらわれそうな要所ごとに兵力を集中し、一定の「討伐」区域を担当させておいて遊撃隊を発見ししたらすぐあとを追い、一日に十数回もおそいかかったりした。

遊撃隊は雪におおわれた密林をかきわけながら、ダニのように追跡してくる敵を粉砕しなければならなかった。こうした状況のもとでは司令部を守ることがもっとも重要であった。遊撃隊員たちは先をあらそってこの任務にあたろうとしたが、結局この重大で栄誉ある任務は呉仲洽（オジュンフプ）連隊長にあたえられた。

かれは自分の部隊とともに腰までつかる雪をかきわけながら進路をつくり、追撃してくる敵を勇敢に撃退した。司令部を死守してこそ朝鮮革命を守ることができると全身で感じとっていたかれは、敵を遠くまで誘引したり、間一髪の危険な戦闘をくりかえしながらも疲れることを知らなかった。かれは不意に敵があらわれるとまず将軍の身を案じ、危険がせまるとためらいもなく身をなげだしてそれをふせいだ。

部隊がはてしないたたかいをつづけながら、もつれあった糸くずのような迂回路をたどり、一か月近い行軍のすえに長白県七道溝の奥地にたどりついたとき、隊員たちはすっかり疲れきっていた。服はちぎれ、凍った手足はひ

びわれて血がにじんでいた。それに食糧まで底をつき、干し野菜でやっと飢えをしのぐありさまであった。

それにひきかえ敵の攻撃は数十倍も強化されていた。うしろから追ってくる数万の敵軍のほかに、長白の谷間や丘陵に待機していた数千の敵兵が狂気のように前後左右からおそいかかってきた。

敵は遊撃隊を包囲し、深い雪のなかにとじこめ、兵糧攻めと眠りにつかせないようにして疲れきったところを一気に「掃滅」しようという魂胆であった。情勢はきわめて重大だった。

敵のこうした企図を見ぬいた将軍は、部隊は兵力を敏速に集中、分散、移動させながら敵を混乱におとしいれ、部隊の勢力を保存する新しい戦術をとった。部隊は三方面に別れて行動することになった。小部隊は将軍の直接の指揮のもとに長白県の七道溝、佳在水方面へ進出し、いま一つの部隊は呉仲洽同志の指揮のもとに長白県の黒瞎子溝一帯に、また別の一部隊と独立大隊は金一(キムイル)同志の指揮のもとに撫松県東崗一帯へ進出することになった。そして裁縫隊と老弱者は長白県青峰(チョンボン)の密営に移動させた。

この戦術的な方針は敵を分散させ、混乱におとしいれることによって、司令部をねらおうという敵の企図を破綻させる妙計であった。

夜明けであった。千余名の敵が背後から谷間にそっておしよせはじめた。このときむかい側の高地にいた呉仲洽連隊からラッパの音が高らかにひびきわたった。敵をうつ轟然たるいっせい射撃の音とともに呉仲洽連隊長の大声がひびきわたった。

「七連隊は正面突撃!」

「八連隊は左右に迂回し、退路を遮断せよ!」

これはかれが自分の部隊を司令部のように見せかけ、敵を誘引するためのにせの号令であった。案にたがわず敵は呉仲洽部隊を追撃しはじめた。

このようにして自分の部隊を司令部に見せかけることに成功した呉仲冶部隊は、おしよせる敵軍をうちやぶりながら、いいつくせない困難を切りぬけて二十道溝方面へと脱出した。しかし敵は飛行機までくりだし、密林のうえからくまなく偵察しながら少しでもかわった気配を認めると、むやみやたらと機銃掃射をあびせ爆弾を投下した。また地上では軍用犬を先頭に「討伐隊」がおそってきた。呉仲冶同志はなおも自分の部隊を司令部に見せかけながら、敵を地形上不利なところにさそいこんでは猛烈な銃火をあびせた。危険にさらされても司令部を守る一念に燃えていたかれは、それをこのうえない誇りとした。

やがて将軍のひきいる部隊をさがしだした敵は、またもや執拗に追撃してきた。敵は強力な反撃にあいながらも息せききって追跡してきた。行軍はますます困難になった。

将軍のひきいる部隊には十七、八才の若い隊員たちが多かった。しかしかれらはみな英雄であった。

その年の長白山中はとくに雪が深かった。かがり火をたきながらうとうとと眠り、夜明けになって目をさまして見ると火を燃やしたところだけ雪がとけて、まるで深い井戸のなかでも見おろすような穴ができていた。雪が浅くつもったところでも胸までつかった。

そのため数名の隊員が先にころがって雪をかため、そのあとから部隊が前進する苦しい日がつづいた。食糧も底をついた。非常用のはったい粉までなくなると、隊員たちは雪をほおばりながら行軍をつづけた。

きびしい寒さのために、全身の感覚がまひすることもしばしばだった。一度たおれると、自分の力ではとてもたちあがれなかった。しかし、そうしたはげしい吹雪と寒さのなかでも、隊員たちは休息命令がおりるとその場で眠りこけた。将軍は隊員たちとともに、この困難なたたかいと苦しい行軍をつづけた。将軍とて疲れないはずはなかった。しかし将軍は、少しも疲労と苦痛を顔にあらわさなかった。いつも明るい表情で隊員たちを勇気づけ、はげますことに心をくだいた。

将軍はこういった。

「われわれはこの長白の密林のなかで敵を疲れさせ、その力をできるだけ弱めなければならない。しかも自力で食糧問題を解決し、敵中を切りぬけてこの冬をもちこたえなければならない。そうしてこそ、われわれはふたたび祖国に進軍することができるし、革命を危機から救いだすことができるのだ」

将軍は一日になんども隊列の前後を往復し、隊員たちをはげました。

「さあ、もう少しがんばろう。元気をだしてこの困難にうちかってこそ、なつかしい祖国へ進出することができるのだ！」

力つきてたおれた隊員も、将軍のはげましには歯をくいしばっておきあがり、一歩一歩まえへとつきすすむのであった。将軍自身も隊員たちのこうした姿に力をえた。

しかし日がたつにつれ、行軍はいっそう苦しさをました。敵の銃声が背後にせまる危険な状況のなかで、年少の隊員たちは雪のうえにたおれてはおき、おきてはまたたおれた。あまりにもかれらは飢えていた。疲れきっていた。このままでは敵の追撃をしりぞけることも不可能のように思えた。

そこで将軍は、まず食糧を解決しようと決心した。そして七道溝の製材所付近を行軍していたとき、将軍は日本人経営の製材所を襲撃することにした。それは数千の敵の兵力を分散させることにもなり、食糧も解決できる作戦であった。

この戦闘で製材所の馬を数頭生け捕った六名の隊員は、遊撃隊がすすむ方向とは逆の七道溝方面へ人馬の足跡をのこしながらすすみ、すばやく姿をくらました。やがてかれらは馬肉をぶらさげて帰ってきた。将軍の計略どおり、敵はあくる日その足跡をたどって七道溝へむかい、またまたむだ骨をおった。

食糧のない遊撃隊にとって、馬肉はたいへんなごちそうであった。しかしそれも数日たべると、すぐ底をついて

しまった。またのろわしい飢えがつづいた。

将軍はいつも、自分にまわってくるわずかな食物をからだの弱い隊員にあたえた。ときおりくばられてくるいく粒かのとうもろこしをたべずにとっておき、たおれそうな隊員にわたして、「これを口のなかにいれてごらん。きっと元気がでる」とはげましたりした。そのたびに隊員たちは慈愛のこもった将軍の表情に母のおもかげを見いだし、死んでもこの道からしりぞくまいとかたく決心するのだった。

そうしたある日の朝、指揮部の伝令兵たちが将軍に一合ほどのはったい粉をさしだした。各自の背のうをはたいて集めたものだった。将軍はそれを知っていた。

伝令兵たちをじっと見つめていた将軍は、なかでも一番年少の伝令兵にはったい粉をわたしてその場をたった。しかし伝令兵はそれをたべなかった。夜になると伝令兵たちは、そのはったい粉をまた将軍のところへもっていった。

「きみたちは、何食ほど欠かしたのかな」

将軍はそれをうけとろうともせず、こうたずねた。

「司令官同志、わたしたちは先にいただきました。司令官同志の分だけがのこっております」

隊員たちを見まわすと将軍は微笑した。

「だから、わたしにだけたべろというわけだね。……これだけかな」

それしかありませんと伝令兵がこたえると、将軍は背のうをもってこさせ、なかをしらべた。一人の伝令兵の背のうから、将軍の食事用としてしまってあったはったい粉がでてきた。

将軍は声をたてて笑った。そして、それを新聞紙のうえに全部あけてから三人をすわらせた。

「これを一斗ぐらいあると思ってたべればお腹がふくれるぞ。さあ、早くおあがり」

自分に分配された1合のはったい粉を隊員たちにわけあたえる金日成将軍

将軍は紙でさじをつくってそれをわけだした。しかし自分にはくばらず、隊員たちにだけわけたので、みんなはすぐそれを将軍のまえにもどしてしまった。しかたなく将軍は自分の分を少しとってから、のこりを隊員たちにわけあたえた。そして隊員たちがはったい粉を水にとかすのを見てから、やっと自分のものに手をつけた。

熱いものがこみあげてきて、はったい粉は伝令兵たちののどをとおらなかった。一合を一斗と思えといわれたが、数千、数万石の食糧が目のまえにつまれたような思いで胸がいっぱいになった。三名の伝令兵は、しきりと手の甲で目がしらをぬぐった。

将軍のかぎりない愛情に隊員たちはみな目をうるませた。胃袋は軽かったが、心は山海の珍味を腹いっぱいたべたようにみちたりた。

食糧難は、いっそうはげしさをました。しかし遊撃隊は、限度をこえる苦痛にたえながらも人民のものには決して手をふれなかった。

一九三九年二月、十三道溝戦闘のときのことであった。遊撃隊が敵の機関からろ獲したもののなかに牛がいて、みんなを非常によろこばせた。ところが何頭かの牛の角には、どうしたわけか烙印がおしてなかった。

当時、敵の機関にあった牛には、その角に必ず「王」の印がしてあった。将軍は「王」の烙印がおしてない牛を、きっと敵の機関に徴発された貧しい農民のものにちがいないと考えた。そこで将軍は、すぐに持ち主をさがして牛をかえしてくるようにと隊員に指示した。

命令は実行された。牛はふたたび飼い主の手にもどり村へ帰された。

将軍とならんで、それを見おくっていた隊員たちの心は晴ればれとして明るかった。飢えも疲れも忘れ、遠ざかる牛と農民のうしろ姿をいつまでも見おくった。

苦しい思いをしたのは食糧だけではなかった。休息のない行軍で隊員たちは極度に疲れていた。しかし敵はますます執拗に追撃してきた。七道溝の製材所が襲撃されてからというものは、狂ったように遊撃隊の行方をさがしもとめていた敵はついに司令部を発見し、必死になって追いすがってきた。遊撃隊はふたたび雪をほおばり、敵の攻撃をかわしながら強行軍を開始した。

ときには飢えと疲れのため、敵にねらいをつけたまま力つきて引き金もひけずにたおれる隊員もいた。しかしかれらは歯をくいしばっておきあがった。

将軍は困難につきあたるたびに、すぐれた戦術で敵の目をそらしては隊員たちを休ませた。敵の足跡を一つ一つそのまま踏んで行軍したかと思うと、急によこへぬけて部隊を休ませたり、雪のなかにかくれて敵をやりすごしてから休息をとることもあった。

数千名の敵をあとにしたがえて、夜ふけの府厚沼(ブフムル)のまわりを二度目にまわっていたときであった。遊撃隊と敵軍とのあいだに新たに数百名の敵がわりこんできた。敵のようすをいち早く見てとった将軍は、隊員たちに沼のまわ

りをもう一度かけ足でまわるように命令した。そうして出発地点にもどってきたとき、すばやく真っ暗な沼のほとりに隊員全部をひそませてしまった。将軍は生い茂った林のなかで隊員を休息させた。そんなことは知るよしもない敵は見失った遊撃隊をさがして沼のほとりをうろつくうちに、後方からくる味方を遊撃隊だと思いこみ夜どおし必死になって射撃戦をくりひろげた。

また将軍はときどき、敵をうっそうとした森のなかや雪のなかへ何日もひきまわし、かれらの力がつきたところをねらい、不意に強力な集中攻撃をかけてせん滅する方法もとった。

これは有名な「蝶と鶏のけんか」という戦術であった。将軍のこの戦術は、小汪清遊撃根拠地時代から隊員たちにひろく知られていた。当時、将軍は少い兵力で多くの敵をひきまわし、敵が疲れたところをいっせい攻撃するというこの戦術をときおりもちいながら、隊員たちにも「蝶と鶏のけんか」の話をよくしてきかせた。

「鶏と蝶がけんかをすると、欲の深い鶏はすぐにでも蝶をとってたべられると思いこみ、必死になって追いまわすものだ。しかし蝶はとまっていて、鶏がくちばしでつつこうとすると、ひらりと舞いあがってまた先の方へいってとまる。すると鶏は、また懸命に追いかけていく。そうして蝶は、鶏がくたびれて走る気配も見せなくなるまでひきずりまわし、もう追いかけてこないとなると、その頭上をゆっくりと舞いながら、とさかのうえにそっととまったりして欲ばりな鶏の食欲をあおりたてる。すると鶏は、また欲をだして追いかける。こうして蝶は、鶏を水たまりや崖ぶちで一日じゅうからかい、疲れはてた鶏を高い崖のうえにまでひっぱっていっておとしてしまうのだ。だから蝶をとってたべようとした鶏が結局、蝶に負けてしまうということになるのだ」

苦難の行軍のときにも、将軍はこの戦術で数多くの敵を痛めつけた。

このように将軍がひきいる部隊は、長白の密林の数多い尾根から尾根をつたいながら、敵に大きな損害をあたえつづけた。

敵はあせった。力だけでは遊撃隊を屈服させられないと知ると、敵はスパイを放ちビラをまいた。将軍は敵の策動を見ぬき、隊員たちに警戒心をいっそう高めもつよう教育した。

「敵はいま、われわれを内部から切りくずそうとしている。したがってわれわれは、いっそう警戒心を高めなければならない。いまはどんなに苦しくとも、必ず勝利の日がやってくる。これから三か月だけもちこたえれば、そのときは雪もとけるだろう。雪さえとければ、われわれの活躍する舞台がひらける。だからどんなことがあってもそのときまでたえぬき、必ずなつかしい祖国へ進軍しなければならない。もし、われわれの世代に勝利をかちとれないとしても、革命を放棄することはできない。いまのわれわれにとって、ほかにゆくところがあるだろうか。敵はわれわれの父母兄弟まで虐殺し、故郷を焼きはらってしまったのである。だから死んでも復讐しなければならない。ほかにいくところなどありはしないのだ」

将軍のことばは隊員たちの心をいっそうひきしめた。「苦難のなかで死のうとも、決して敵には屈しない」と心に誓い、傷つき凍えて感覚を失った足をひきずりながら前進をつづけた。

武力によっても、ビラとスパイによる懐柔によっても目的を達することができなかった日本の侵略者たちは、卑劣にも遊撃隊員の父母や妻子を脅迫して送りこみ、肉親の情によって、そのかたい決心を切りくずそうとした。しかしそれも敵の妄想にすぎなかった。遊撃隊員の父母や妻子は、かえって息子や夫を力強くはげましつづけた。かれらは、この冬をりっぱにたえぬき必ず敵をうてとはげまし、敵情まで遊撃隊に知らせたりした。

ねらいがはずれると敵はいっそう凶悪卑劣な行動にでた。

遊撃隊が十三道溝付近で敵をひきまわしながら、苦難の行軍をつづけていたときのことだ。遊撃隊は敵の拠点をおそって食糧は少し手にいれたが、塩をきらして何か月もたっていたため非常に苦痛を感じていた。

ちょうどそのとき、将軍は荷物を背負ってきた村長と農民に金をわたし､塩を買っておくってほしいとたのんだ。

ところが、その村長はかくれた敵の手先であった。敵はこの機会を利用し、毒薬をまぜた塩をおくって遊撃隊を一網打尽にしようとたくらんだ。

敵は村長だけを先によこし、塩はすぐあとからもってくるといわせた。将軍は村長がなにももたずに一人できたのを不審に思い、隊員に調査を命じた。案の定、村長が警察に密告していたことがばくろされ、かれはすぐ処断された。

そんなこととはつゆ知らず、敵は毒をまぜた塩と一包の煙草をおくってきた。かれらは遊撃隊がそれをたべ、たおれたすきに生け捕りにしようとねらっていた。

将軍は隊員たちに塩をたべないようにと指示した。ところががまんしきれなくなった一部の隊員が、その塩を水で洗って少しずつ口にいれたため、翌朝かれらはみんな寝こんでしまった。

将軍はただちに応急治療をさせ戦闘準備を命じた。日がのぼり、毒薬の効果があらわれるころと見はからった敵は大兵力を動員しておしよせてきた。遊撃隊は一日ぢゅう敵をひきまわしてこれを撃退した。しかし敵は、なおも追撃をあきらめなかった。あくる日も、そのあくる日も、敵は司令部の行方を追ってダニのようにつきまとってきた。行軍は依然として苦難にみちていた。

将軍はここで、大胆に敵の後方をうつ方針をたてた。

「敵がこの山奥に兵力を集中しているから、われわれは手うすとなっている敵の後方をうってかれらを混乱させ、分散させなければならない」

将軍は、敵の全勢力が長白の奥地に集中して後方ががらになっているため、大胆かつ敏捷な行動をおこせば、むしろ敵の後方をうつ方が容易であると考えた。そして遊撃隊が敵の後方をおそえば、かれらは必ず長白奥地に集中していた兵力を後方の守備にまわすだろうと判断したのである。

将軍はただちに後方奇襲作戦をたてた。そしてすべての条件と勢力関係を慎重に検討したのち、真昼に大洋岔と長白へつうじる幹線道路を襲撃するという大胆な計画をたて、二つの襲撃隊を敵の後方に派遣した。

将軍の予想どおり、敵は後方の守備をおろそかにしていた。大きな「集団部落」には若干の「討伐隊」がのこっており、小さな部落には自衛団だけしかいなかった。大洋岔にはいくらかの守備隊がいたが、遊撃隊がやってきたときには、かれらはキジ狩りにでていなかった。

大洋岔と長白幹線道路の襲撃は成功裏にすすめられた。遊撃隊は大洋岔の襲撃戦で精米所にうず高くつんであった日本人の供出米を大量にろ獲し、部隊の食糧問題を解決した。

真っ昼間に大洋岔と長白幹線道路を同時に襲撃された敵は大混乱におちいった。かれらは遊撃隊の大部隊が新しくやってきたか、それとも完全に包囲したはずの「金日成司令部」がまたこっそりぬけだしてきたにちがいないと思った。かれらは遊撃隊が後方深くはいりこんで行動している事実から見て、これはきっと大部隊にちがいないと判断した。

急報をうけた敵は、長白の奥地で人民革命軍司令部の行方を追っていた兵力の一部をさいて後方守備にまわしながらも、どちらが司令部であるかをつきとめるため血まなこになった。敵はいっそう執拗に追撃してきた。しかし将軍はこれまでと同様、敵をあちこちへひきずりまわし、疲れきったところを不意うちにしてせん滅するか、あるいは別の方に足跡をつけておいてすばやくよこにそれ、追ってくる敵を雪のなかに立往生させて背後からうつなどの方法をとった。また敵が力つきて野営でもしようものなら、敵陣のなかへひそかに少数の隊員をもぐりこませ、前後左右からいっせいに射撃することで敵を同士うちさせる手もつかった。

この冬期作戦でみじめな境遇におちいったのは、遊撃隊ではなく敵側であった。けわしい山岳と寒さと飢えにきたえられた遊撃隊は、数か月にわたる苦しい行軍においても自己の勢力をたもったばかりでなく、それをいっそう

鍛練し強化することができた。反面、敵は遊撃隊にうちたおされ、凍死し、同士うちで無数の戦死者をだし、その屍を長白の密林の雪のなかにさらす結果となった。

それでも敵は追撃をあきらめなかった。半狂乱になった敵は、いままでよりももっと多くの兵力を動員してきた。

そこで将軍は、敵の要衝地帯である十三道溝を襲撃する計画をたてた。十三道溝はかれらの「討伐」根拠地の一つであるばかりでなく、対岸の新乫坡とむかいあっている要所でもあった。したがって十三道溝で戦闘がおこれば、凍りついた鴨緑江をわたって新乫坡の日本守備隊はもちろん長白と邱家店(クカジョム)からも応援部隊がおしよせてくる可能性があった。

将軍は隊員たちにつぎのようにのべた。

「これは、われわれにとって生死を決する戦闘ともなろう。しかしあそこを攻撃しなければ、敵を遠くへ追いちらすことはできないのだ」

つづけて将軍は、迅速に攻撃し、すばやく撤退することによって敵を混乱させ、数日後にせまった正月用の物資も手にいれようと語った。

将軍みずからの指揮のもとに、遊撃隊は文字どおり電光石火のように敵の中心部をおそったあと、山へのぼって休息をとった。敵は自分たちの後方の中心部が不意におそわれたので大混乱におちいった。そのすきに将軍は部隊をすばやく長白奥地の府厚沼へと移動させた。

府厚沼の奥地につくと、将軍は休息命令をだした。部隊はここで旧正月をむかえた。遊撃隊は長白での数か月にわたる行軍ののち、はじめてテントをはり、数日間の休養をとった。大きな枯木のしたに寝床をつくり、久しぶりの休息をとった。うす暗くなると、そこから百メートルばかりはなれたところで炊飯もした。

だが、それもながくはつづかなかった。また敵が四方からひそかにおしよせてきたのだ。将軍は部隊をこっそり移動させ、ここでも敵に同士うちをさせた。

将軍は敵の包囲陣を突破してから新しい戦術に移った。将軍はこうのべた。

「こんど敵は、正面攻撃をしかけずにこっそり包囲する作戦らしい。だから、すばやくここからはなれた方がよい。敵が森林地帯を中心にして追撃し包囲してくる場合は、平地の方へ移って行軍をする。そして敵が平地の方へやってくれば、こちらはふたたび森のなかへはいって行軍する」

将軍は部隊を統率して山をおり、大胆にも敵の中心部へつうじる幹線道路にそって八十キロの道を強行軍した。部隊が八方頂子（パファンティンズ）集団部落近くの山のうえに到着すると、将軍はそこでテントをはって休むよう命じた。将軍はここにいるあいだ隊員たちに学習をさせ、行軍中の疲労もいやすようにした。

自分たちの目と鼻の先にある山のうえで、遊撃隊が休息しているとは夢にも考えなかった敵は、冬が去るのを残念がりながら遊撃隊をさがしもとめてあいかわらず長白の奥地をさまよっていた。だが、かれらをむかえたのは遊撃隊ではなく、この冬、遊撃隊との戦闘で戦死または凍死した同僚たちの死体だけであった。かれらは戦慄した。かれらはそれらの屍のなかに日本帝国主義の悲惨な運命をみてとり、そのために命をすてなければならない自分たちの不運な境遇をなげいた。

遊撃隊員の死体は一つも見あたらず、同僚の屍だけが無数にちらばっているのを見たかれらは、いったい、だれがだれを討伐していたのか、うたがわざるをえなかった。そしてなぜ、「全知全能の天皇」があの白い手袋をはめた手をあげて、この惨事を未然にふせげなかったのかとなげかざるをえなかった。生きのこった敵は恐怖におののくばかりだった。

敵の敗北をあざけ笑うかのように春がやってきた。

遊撃隊は数万の敵をあとにし、長白の深い山林地帯を一冬ぢゅうまわりつづけながらも、ついに敵の大軍をしりぞけたのである。

まさにこの行軍は、朝鮮人民革命軍の司令部を死守した行軍であり、朝鮮革命を救った行軍であり、苦難にみちてはいたが主導権をにぎって敵に徹底的な打撃をあたえた勝利の行軍であった。

深い雪と、きびしい寒さと、食糧難と睡眠不足と、たえまなくおそいかかる敵の大部隊との戦闘など、この行軍の苦しみは人びとの想像をはるかにこえるものであった。

なにが、いかなる力が、ことばではいいつくせないこの苦難をのりこえさせたのだろうか。まぎれもなくそれは、朝鮮人民の指導者であり、革命と闘争の英雄であり天才である金日成将軍がつねに隊員たちとともにいたからである。将軍は隊員たちの力であり、よろこびであり、祖国の輝かしい未来であり、希望なのであった。

将軍は隊員たちに、祖国と人民に不幸と苦痛をしいる敵を懲罰する力をあたえ、祖国のために生き、祖国のために死ぬ崇高な思想をはぐくみ、かれらをりっぱな革命家に、りっぱな遊撃隊員にきたえあげた。じつに将軍は、かれらに世のなかのどの母親もなしえない、もっとも偉大な愛をあたえたのである。

ぼろ靴をはく隊員には自分のものをあたえ、偵察にいった隊員の帰りがおそければ食事もとらずにとっておき、自分は氷でのどをうるおした将軍。

戦友の武勲を自身のことのようによろこび、戦友の死にはだれよりも悲しんで必ず復讐した将軍。そして戦友の遺児たちを宝のように大切にし、苦難の日々にも文字を教え、季節のかわり目ごとに新しい服をあてがい、成長すれば栄誉ある遊撃隊の隊列にくわえた将軍――。

それゆえ隊員たちは、地のはてまでも将軍と行動をともにする決意をもっていた。将軍に育てられたかれらは、同じ思想と同志的な義理でかたくむすばれていた。熱烈な革命思想に根ざすこのような同志愛は、試練につきあた

るたびにいっそう熱く燃えあがり、美しく花ひらくのだった。
一人は全体のために、全体は一人のために生き、そしてたたかった。だれもが同志を信じた。信じることはそのまま力となった。同志にたいする献身は栄誉ある使命であり、義務であり、生活そのものであった。
重傷を負いながらも雨とふる敵弾のなかにとびこみ、戦死した同志を背負ったまま息絶えていった隊員。同志たちを救うため敵の砲火を一身にあび、名もない谷間で散っていった隊員――。このような美しいエピソードは数かぎりない。
祖国の解放めざして最後までたたかうためには、同志にたいする愛は未来へのいしずえであり、同志の生命は自身の命と同じであった。
だからこそ、将軍とともに苦難の行軍をつづける隊員たちにとっては、のりこえられない難関も、うちやぶれない敵も存在しなかったのだ。だれもが将軍と隊伍を信じ、だれもが将軍と隊伍の守り手となった。いかなる逆境におちいっても、だれもが革命のためにつくしたし、またそうしなければならないとかたく信じていた。そして苦難のなかでこそ、かえってふるいたつ気高い自力更生の精神が全隊員にみなぎっていた。
みんなが革命の勝利を信じていた。侵略者はいっときであり、共産主義の真理と人民は永遠であると信じていた。だからこそ、かれらは革命の勝利のために血と汗を流すことをこのうえない栄光と考えたのである。
こうした人びとの集まりが、まさに前例のない苦難の道のりをつきすすむ朝鮮の革命軍なのであった。そしてこの隊伍の先頭には、つねに日本の侵略者たちを戦慄させた朝鮮人民の偉大な指導者金日成将軍がたっており、祖国へ進軍するこの隊伍をはばむ力はどこにもなかった。
じつに将軍は、南牌子から長白にいたる冬の行軍のあいだ、いかなる困難につきあたってもつねにしっかりと主導権をにぎり、敵を思いのままにうちのめし、ついにその追撃をふり切ったのである。

長白の深い密林にも春がおとずれた。すさまじかった酷寒と吹雪はあとかたもなく消え去り、祖国の土の香りをふくんだ春風がはるかな鴨緑江をわたって吹いてきた。

遊撃隊があれほど待ちこがれていた、そして将軍が指おり数えて隊員たちをはげましてきたこの勝利の春が、ふたたび祖国へ進軍できるその春が長白の地におとずれたのである。

部隊が八方頂子付近の山をおり、佳在水の奥地にある北大頂子の密林のなかにはいって野営することになった四月はじめのある日、将軍は遠く、白頭の連峰をながめながらこう語った。

「われわれは冬を無事にすごした。ちびっこ隊員もあの苦労にたえぬいたのだから、これからは一人だちできる強い闘士になったわけだ。もう問題はない。春は万物がよみがえる季節だ。われわれもこの春には力をあわせて祖国へ進軍しよう。朝鮮へ進出して勝利の火の手をあげよう！」

将軍は各地に隊員を派遣した。また作戦のため別々に活動していた呉仲洽、金一同志の部隊を北大頂子に集めた。こうして密林では、数かずの死線をこえながら敵とたたかってきた戦友たちの感激的な再会がおこなわれた。

司令部の安全を守るために敵の大軍を遠くへさそいだし、英雄的

濛江から国境対岸まで苦難の行軍をおこなう朝鮮人民革命軍の隊員たち

にたたかった呉仲洽同志は、将軍の無事な姿に接すると感激のあまりことばもつかえ、とめどもなく涙を流すばかりだった。かれの肩を強くだきよせた将軍の目にも涙が光った。指揮官と隊員のすべてのほおが涙にぬれていた。それは革命と、指導者と、国のために偉勲をたてた人びとだけが流すことのできるもっとも気高い涙であり、もっともよろこびにあふれた涙であった。

苦難にみちた偉大な行軍は勝利した。一週間もあればゆきつく距離を、毎日のようにはげしい戦闘をくりかえしながら想像を絶する難関をつきやぶり、百余日をかけてようやくたどりついたこの行軍――。これはまさに、抗日遊撃隊の戦闘力と、政治、道徳的な力にたいする一大試練であったし、堂々たる勝利の示威であった。

じつにこの行軍のもつ意義は、敵に甚大な打撃をあたえたことだけにとどまるものではなかった。それよりも重要なことは、いかなる困難にもうちかつ不屈の闘志と、革命と偉大な指導者のために一つに団結した力がいかに強大であるかを示威したことにあった。それはまた、想像を絶する威力を生む共産主義理念と強じんな力をもつ自力更生の精神の勝利であり、一つの思想のうえに花ひらく革命的な同志愛の勝利でもあった。

だからこそ、北大頂子における戦友たちの再会は、勝利者たちの再会であり、英雄たちの再会であった。隊員たちを祝う将軍の顔には、革命の明るい前途にたいするかぎりない確信がみなぎっていた。将軍はしばらくのあいだ心が静まらなかった。凍傷で荒れこわばった隊員たちの手をかわるがわるにぎりしめ、なでまわす将軍の胸底には、いかなることばをもってしてもいいあらわすことのできない熱いものが流れていた。

4　茂山地区戦闘

将軍は一九三九年四月、北大頂子で人民革命軍の幹部会議をひらき、一九三八年から一九三九年へかけての冬期

軍事行動を総括したのち、春期大反撃戦に移ってふたたび祖国へ進軍する方針を提示した。

「敵が冬の『討伐作戦』でへとへとになり自分たちの古巣へ帰っていったこのとき、かれらに息つくひまをあたえずわれわれは総反撃に移るべきであり、祖国へ進出する準備をととのえるべきである。……こうすることによってわれわれはすばやく被服や食糧、武器を補充して力を回復することができるし、ふたたび祖国へ進軍して人民に解放の曙光をもたらし、破壊された革命組織をたてなおし、かれらを新たな力で闘争にふるいたたせることができる」

こうして勢力を結集した人民革命軍部隊は、将軍の方針にしたがって怒濤のように敵陣をうちくだく春期大反撃戦を開始した。

四月八日の佳在水戦闘を皮切りに、四月十二日には警察隊と偽満軍張兆部隊など敵の大兵力が駐屯していた邱家店を攻撃し、敵に息をつくひまをあたえず十五道溝（四月二十六日）をうって敵の中心部を粉砕し、半截溝（五月三日）にも攻撃をくわえた。

一方、将軍は住民地域へ政治工作員を派遣し、破壊された祖国光復会の組織をたてなおすと同時に、人民大衆のなかで政治組織活動を活発にくりひろげた。

抗日遊撃隊が国境地帯で敵の要衝をひきつづき攻撃しているという知らせに、人民は新たな希望とよろこびにわきかえった。

祖国進出を目前にひかえた朝鮮人民革命軍部隊は、将軍の臨席のもとに馬登廠で一九三九年の五・一節（メーデー）記念慶祝大会をひらいた。

将軍はここで、全世界の労働者階級の国際主義的団結の思想とその威力について強調し、朝鮮人民革命軍の戦闘過程を総括したのち当面の戦闘課題をさししめた。

こうして人民革命軍のなかからえらばれた数百名の隊員は五月十六日、、暗たんたる祖国にふたたび解放の曙光

部隊をひきい祖国にむかって進軍する金日成将軍

をもたらすため、将軍の統率のもとに咸鏡北道茂山地区へむかって出発した。

五月十八日の午前、遊撃隊は鴨緑江と小白水川(ソベクス)が合流して曲りくねっている浅瀬をわたり、疾風のように祖国の地にその姿をあらわした。普天堡戦闘がおこなわれたときから二年目に、ふたたびなつかしい祖国の地を踏む遊撃隊員の胸は、感激と興奮にわきかえった。

祖国——、それは遊撃隊員たちが戦闘と行軍のとき、あるいは密営地のかがり火のまわりで、いつも情熱をこめてよんでみるなつかしい名であり、かれらを不死身にさせた名であった。

遊撃隊員は耳や目でなく、からだ全体で救いの手を待ちこがれている不幸な祖国を感じとった。

隊員たちはみな、胸の底にまで香りがしみとおる祖国の土くれをにぎりしめ、すみきった流れのなかから小石をひろってきては、大切な宝物のように背のうのなかにそっとしまいこむのであった。

将軍は、美しく咲きこぼれているつつじを一枝手折ってその香りをめで、感慨無量のおももちで隊員たちにこういっ

た。

「朝鮮のつつじは美しい。見れば見るほど美しい」

鴨緑江の岸辺で小休止を終えた将軍は、青峰で部隊を野営させた。祖国の地ではじめて野営をする遊撃隊員たちは、祖国をきっと解放せずにはおかないという新たな決意もかたく、木の幹に「朝鮮民族の自由と独立、解放のために最後までたたかおう！」、「日本のファッショ軍閥を打倒せよ！」、「朝鮮の青年よ！　すみやかに来たり、抗日戦に力強く参加しよう！」というスローガンを刻みつけた。

十八日に青峰で夜をすごした部隊は、十九日には建昌（ゴンチャン）で、二十日には枕峰（ベゲボン）で野営したが、この間、日本人経営の製材所を数回襲撃し、敵を混乱におとしいれた。

朝鮮人民革命軍部隊が祖国に進出したという急報に、いま一度おどろいた日本帝国主義は咸鏡南北道の中心地域の守備隊、武装警察隊を総動員する一方、長白県駐屯の関東軍と偽満軍一千余名の「討伐隊」を国境沿岸に集結させ、いわゆる「鉄壁」の警備陣をしくのに大さわぎをした。

朝鮮人民革命軍の隊員たちが青峰野営地の木の幹に刻んだ反日スローガン

そうしてからひと安心したかのように、「討伐隊はいっそう緊張し、今度こそは徹底的に掃討する決意で昼夜の別なく猛烈に活動しているため、朝鮮と満州の国境は近来になく緊張した空気につつまれている。共産軍は暗い森林でたくみに身をかくしてはいるが、逃げ道をふさがれているのでとうていぬけだすことはできないだろう」（『朝鮮日報』一九三九年五月二十五日付）と豪語した。

将軍は五月二十日、枕峰野営地で指揮官会議を招集して状況を分析したのち、敵が胞胎山（ポテ）を中心とする山岳地帯と鴨緑江沿岸にむらがっていることを指摘し、真っ昼間から大胆に一瀉千里の勢いで茂山地区へなだれこみ、敵の弱い側面をうちやぶる決意を明らかにした。

枕峰をあとにした部隊は、まるで一幅の山水画のように美しい三池淵（サムジョン）のほとりで昼食をとった。将軍は隊員たちとともに、祖国の三池淵の美しい景色をながめながら疲れをいやした。

将軍と隊員は三池淵のきれいな水をすくって飲みほした。まるで三池淵は、母なる祖国が愛する息子ののどのかわきをいやすために、ながいあいだ待ちつづけた大きな器のようであった。将軍は隊員たちを見まわし、「三池淵は景色も美しく水もうまい。この水を心ゆくまで飲んで力のかぎりたたかい、祖国を解放しよう」といい、なんども水を口にふくんだ。

しかし将軍は隊員とともに祖国の美しい自然をなつかしむいとまもなく、せわしくそこをたたなければならなかった。そして勝利したあかつきには祖国をより美しく築き、人民が幸福に暮らす地上の楽園を建設する偉大な構想を胸にひめて出発した。

崇高で偉大なこの構想は、やがて実現された。それから二十年の歳月が流れた一九五八年五月、将軍は三池淵を感慨深くたずねた。

このとき将軍は、「じつにいいところだ。ここに家を五棟ぐらい建て、壁を白くぬり、屋根を赤くしよう。食堂

も建てよう。そうすれば白頭山探険隊も休んでいけるし、夏は林産労働者の休養所ともなろう。冬は全国の大学生や少年団員のスキー、スケート場にすればよい」と語った。

それから三池渕にはりっぱな休養所が建設され、毎年、数多くの勤労者がゆっくりと休養をとっている。

三池渕を出発した人民革命軍部隊は、将軍の指示どおり恵山から茂山へつうずる「甲茂(カブム)警備道路」を真っ昼間から堂々と行軍した。この「甲茂警備道路」は「朝鮮総督府」が普天堡戦闘の翌年にあたる一九三八年三月、「天皇」の追加予算承認によって、まる一年間死力をつくしてつくりあげた国境警備道路であった。しかも開通式を目前にひかえていたため、この道路の通行は禁止されたままだった。

敵が国境を「警備」するためにつくり、検査をうけるためにきれいに掃除までしておいた道、軍警のきびしい監視ぶりにとぶ鳥も羽根をすくめるというわくつきの道をへて、ほかならぬその敵をうちにゆくということはじつに大胆きわまりない戦術であった。

遊撃隊員の士気は天をもつかんばかりであった。たとえ百倍もの敵とむかいあったとしても、それを一挙にうちやぶるほどの勢いであった。その勇気をあたえてくれたのは、ほかならぬ祖国であった。祖国はかれらに泰山をもつらぬく力と強じんな翼をあたえた。祖国の空も、林も、踏みしめる大地も、飲む水も、すべてがかれらに誇りと勇気をあたえた。

敵は遊撃隊がよもや白昼に、しかも自分たちの軍用道路を行軍してこようなどとは夢にも思わなかった。獰猛(どうもう)な敵はいつも誤算をかさねた。かれらは遊撃隊の行方をもとめて密林をさまよい、「甲茂警備道路」には全然注意をむけていなかった。将軍はこうした点を見ぬいて白昼行軍を決断したのであった。その洞察力と大胆さは隊員たちの胸をいっそう燃えたたせた。

遊撃隊が整然と隊列をくみ堂々と警備道路を前進していたとき、敵はまだ、建昌と枕峰一帯のひろい密林のなか

で目を皿のようにしてさがしていた。遊撃隊は四〇キロあまりの警備道路を悠々と突破した。

こうして革命軍部隊は二十一日、茂浦（ムボ）へ到着した。隊員たちは深い森林と静かな大地の一部をぬって流れる石乙（ソクル）川のほとりを野営地にきめ、将軍とともに一夜をすごした。

将軍はここでふたたび指揮官会議を召集し、大紅湍（テホンダン）地区へ進出する具体的な作戦計画を提示した。

将軍の指示にしたがって二十二日に大紅湍地区へと進出した人民革命軍部隊は、その夜、新四洞（シンサドン）と新開拓（シンケチョク）の二方面にむかって進撃を開始し、またたくまに敵を掃滅してその地区を完全に掌握したのち、人民にたいして反日宣伝をおこなった。

隊員たちは金日成将軍と朝鮮人民革命軍について説明し、革命軍の使命とこのたびの国内進出の目的および祖国光復会の綱領についてくわしく解説した。大衆の感激は波濤のようにひろがっていった。銃撃におどろいて避難していた老人や婦女子も集まってきた。

「金日成将軍がこられたぞ！」という知らせは、たちまちひろまった。大衆は先をあらそって将軍のいる場所に集まってきた。

将軍は新四洞の木材労働者たちとも会った。合宿所の外まであふれる労働者たちのなかに腰をおろした将軍は、かれらのみじめな労働条件と話にもならない暮らしむきに同情し、心からかれらを激励した。みんなの目がしらが急に熱くなった。飢え死をしても、仕事に疲れてたおれても、訴えるところとてなかったかれらは、生まれてはじめてきくなぐさめのことばに肉親のようなあたたか味をおぼえて声をつまらせた。

やせおとろえ黒ずんだかれらの顔、生活の道をたたれ、家族と生き別れなければならなかった悲惨な過去が刻む額のしわと白髪、苦しい労働を物語るふしくれだった手とつぎはぎだらけの服——。こうしたみじめな姿を見つめていた将軍も、こみあげてくるものをおさえることができなかった。

将軍は一人の子どもをひざのうえにすわらせ、やせこけた肩や、やわらかな髪を静かになでた。そして独特のよくとおる太い声で朝鮮人民革命軍の使命と目的を話したあと、つぎのようにつづけた。

「労働者のみなさん！　朝鮮人民は日本帝国主義者の侵略による抑圧と搾取のもとで、貧困と無権利にあえいでいます。……それなら朝鮮人民には、自分の祖国を解放する力がないのでしょうか。決してそうではありません。力はいくらでもあります。その力はほかでもなく、朝鮮のすべての善良な人民、とくに労働者と農民のかたい団結にあります。わたしたちはこの力を信じ、その力を団結させて日本帝国主義を打倒し、祖国を解放する闘争にむけなければなりません。……いまこそわたしたちは祖先の尊い愛国精神をうけつぎ、日本帝国主義に反対する民族解放闘争に力強くたちあがらなければならないのです。労働者階級であるみなさんは、朝鮮人民のもっとも先進的な部隊なのです。無産大衆の自由と解放のために、みなさんは反日戦線の先頭にたたなければなりません」

こうした趣旨の話が終ると、労働者たちは先をあらそって遊撃隊へ志願しはじめた。

将軍はかれらをたたえながら、反日闘争に人民を団結させることは、銃を手にしてたたかうことにもおとらない重要な革命の任務であると話した。そして今後のたたかいの方向をさししめし、組織をつくって遊撃隊と連絡する方法を教えた。

朝鮮人民革命軍の茂山地区進出にあわてた敵は、各方面から攻撃をくわえてきた。

将軍は敵が追撃してくることを予測して、集結地の大紅湍に帰っていた一部隊と直属部隊を有利な地点に待機させた。

五月二十三日、大紅湍地区では痛快な戦闘がくりひろげられた。将軍の計画は正確無比であった。

日がのぼり八時ごろになると、日本国境警備隊と警察隊数百名が重火器を増強して遊撃隊の待ちぶせ地点にあらわれた。敵はちょうど新開拓を攻撃して集結地へもどってきた人民革命軍の一部隊を発見し、ひそかにあとをつけ

ながら攻撃のチャンスをうかがっていたところだった。

状況を把握した将軍は、その部隊に待ちぶせ地点のまえをすばやく通過させてから、追跡してくる敵の近づくのを待って軽機関銃や歩兵銃などでいっせい射撃をくわえた。同時に、通過部隊と待ちぶせをしていた部隊を合流させ、敵を正面からはげしく攻撃した。側面と前方からいっせい射撃をうけた敵は、銃を手にとるいとまもなく屍の山を築いた。

その日、革命軍部隊は各方面からおしよせる敵を協同作戦で痛撃した。革命軍の強力な打撃をうけ、やっと命びろいをして幽谷（ユコク）方面へ逃げた日本軍の敗残兵は、救援にきた味方の守備隊と同士うちをする醜態まで演じ、数多くの死傷者をだした。

大紅湍でまたも輝かしい勝利をおさめた将軍は、祖国進出の目的をりっぱに達成し、悠々と豆満江をわたって長山嶺（チャンサンリョン）へひきあげた。

そのとき多くの人民がすすんで遊撃隊の荷物を背負い、危険をおかして長山嶺まではこんでくれた。一夜を明かした将軍は長時間、同胞たちの苦しい境遇をきき、闘争の方法を教えて勝利の信念をもたせた。

あくる日、出発をまえにした将軍は人びとに別れのあいさつをおこなった。別離を惜しむ同胞たちは、自分の服や靴をぬいで遊撃隊員にわたそうとした。遊撃隊員もやはり、自分の着ていた服や靴をぬいでかれらにあたえようとした。たがいに目に涙をうかべ、しばらくは子どものようにおしくらをした。満足な贈り物一つできない身のうえが悲しく、またうらめしかった。しかしこれは、遊撃隊と祖国の人民との燃えるような愛のあらわれでもあった。

同胞たちは、祖国を一日も早く解放してくれるように、また達者でりっぱにたたかってくれるようにと口ぐちにいった。そしてたがいに姿が見えなくなるまで手をふりあった。みんなの胸には感謝の気持ちと勇気がわきあがった。その一瞬は時間もとまり、林もざわめきをためらうかのようであった。

祖国よ、われらを待ってくれ！
われら必ずそなたを解放するであろう！

長山嶺をおりた革命軍部隊は、士気も高く和龍県内に深くすすんでいった。

このように茂山地区における人民革命軍の勝利は、抗日遊撃隊を「せん滅」させたと豪語していた日本帝国主義侵略者に致命的な打撃をあたえ、ひきつづき強化されている人民革命軍の威力を内外にあますところなく示威した。そして人民に勝利の信念をいだかせ、革命組織の破壊によって一時ひるんでいた人びとに新たな力をあたえた。それだけではない。人民革命軍のこの勝利によって一九三九年五月、中日戦争と並行してハルヒンゴル地方たいする武力侵攻（ノモンハン事件）を開始していた日本は、後方で甚大な打撃をこうむったのである。

各地の人びとのなかでは、「茂

二百餘金日成團과
咸北警官隊와激戰
應援隊急派包圍陣
金日成一派六百名
越境襲擊의態勢
咸南北警備隊緊張

茂山地区戦闘にかんする当時の新聞報道

山で数百名の日本兵がやられたそうだし、日本帝国主義が滅びる日もそう遠くはない」、「日本の侵略者がいくらじたばたしても、白頭山の精気をうけついだ金日成将軍にかなうものか！」というささやきがひろまっていった。

日本帝国主義は、朝鮮人民革命軍が人民大衆にあたえた政治的影響がひろがるのをおそれ、ただちに茂山地区の数百名の林業労働者を全国各地の鉱山や鉄道、その他の部門にこまかくわけて配置した。しかし、これはまったく逆の結果をもたらした。この労働者たちをつうじ、茂山地区戦闘で人民革命軍が勝利したというニュースが朝鮮各地にひろまり、その影響力はひろく、深く、大衆のなかにしみこんでいったからである。

将軍は茂山地区戦闘の直後、政治工作員を国内へ派遣し、反日気運の高まった各地の住民のなかで破壊された革命組織をたてなおし、大衆的な反日運動を展開するようにした。

各地でふたたびたちあがった祖国光復会の地下組織は、「(反日民族統一戦線が)日本のファシスト軍閥を徹底的に撲滅する正しい路線である。朝鮮の同胞よ！　一日も早くたちあがれ！　武器をとってたちあがり、日本帝国主義に最後の決戦をいどもう！」(祖国光復会の檄、一九三九年六月十一日)と訴え、広はんな人民大衆の反日闘争を指導した。

抗日武装闘争の影響のもとに、労働者や農民の大衆的な闘争もはげしく展開された。一九四〇年一月から八月までの期間に労働者の罷業総数は六百二十三件に達し、その参加人員は四万九千余名にのぼった。

第十章　日本帝国主義を戦慄させた大旋回作戦

1　白頭山の東北部をぬって

国内に大きな革命的波動をよびおこした茂山地区戦闘ののち、将軍は白頭山東北部一帯を活動舞台にして敵に連続的な打撃をあたえる大旋回作戦を展開した。

将軍は、まず強盗日本帝国主義が挑発したノモンハン侵攻事件とかんれんして、一九三九年八月の初旬、樺甸県寒葱溝（ハンチョング）で敵の後方を攪乱し打撃をあたえるための作戦をいっそう強化するよう命令した。

この命令で将軍は、日本帝国主義の反ソ侵略企図をばくろし、人民革命軍が朝鮮と満州で日本の後頭部をうつ作戦を強化することはソ連を武力でもって擁護する正義の闘争であり、緊急に提起された国際主義的な任務であると指摘した。またこのような背後作戦を強めることは日本帝国主義の滅亡を早め、朝鮮民族の解放を促進する道であると強調した。

将軍の八月命令をうけた人民革命軍の各部隊は、広大な地域で日本帝国主義の背後に打撃をくわえるための積極的な軍事行動に移った。

一九三九年八月下旬、安吉（アンギル）、崔賢同志が指揮する部隊は「武力によってソ連を擁護しよう！」というスローガンをかかげて大沙河地区作戦を展開し、悪質な山本部隊五百余名を完全に殺傷、捕虜にした。そしてひきつづき九月に展開した要岔（ヨーチャ）戦闘をつうじて、敵の将校七十余名と兵士二百余名をのせた軍用トラック十二台を襲撃し、それを

焼きはらって敵を完全に掃滅したのち、迫撃砲と重機関銃など数多くの武器をろ獲する戦果をあげた。
また九月末には延吉県方面で福満村(ポクマン)、鶴林村(ハクリム)、福興村(ポクフン)など十二か所および「集団部落」を一夜のうちに襲撃し、敵に連続的な打撃をあたえた。
このとき北満州地域では金策(キムチェク)、崔庸健(チュエヨンゴン)同志たちの指揮する革命部軍隊が饒河(ヨハ)県三義屯(サムイトン)、楊木崗(ヤンモクカン)、三江口(サムガング)、嫩江(ヌンガン)県科洛(クワラク)、克山(ククサン)県城、依蘭(イラン)県城などでの戦闘をつうじ、日本の侵略軍の背後を痛撃していた。
朝鮮人民革命軍部隊が茂山地区戦闘をはじめ各地で連続的に展開したこのような敵の背後撹乱作戦は、朝鮮と満州における日本帝国主義の植民地支配と戦争拡大政策に深刻な打撃をあたえた。そのため日本の侵略者たちは、満州を確保して安全な戦略的後方にしたてなければ、中日戦争の勝利はおろか、ソ連侵略の成功もありえないと考えはじめた。
こうしてかれらは、一九三九年の下半期から「東南部治安粛正特別工作」という名目で、ふたたび朝鮮人民革命軍にたいする全面的な「討伐」に軍事力を集中してきた。
かれらは吉林に関東軍司令官の直属として「野副(のぞえ)討伐司令部」を設置し、関東軍管下の軍団と「支那」派遣軍をはじめとする偽満軍、憲兵、警察、武装自衛団など、あわせて二十余万の大兵力を人民革命軍の「討伐」に投入した。
吉林では連日、日満軍閥による「討伐」謀略がおこなわれ、「野副討伐司令官」の訓辞やら、作戦計画やらがぞくぞくとつくりだされた。そして「地区別討伐隊」を編成し、そのしたに県を単位とする「小地区討伐隊」を各地に設置した。かれらの今度の計画で目新しいものは「討伐隊」を山奥に潜入させ、人民革命軍の密営地を襲撃することによってその根拠地を破壊しようということであった。そのため「討伐司令部」は攻撃のほこ先を東満州、通化省東北部、吉林省東部にむけ、人民革命軍司令部の「掃滅」を基本目標とした。

情勢は朝鮮人民革命軍にとってきわめて不利であった。人民革命軍は、東、南満州地区の強敵と単独で対決しなければならなかった。とくに敵は将軍がひきいていた部隊が活動する和龍一帯に大兵力を集中し、人民革命軍を包囲封鎖してその指揮部をさがしあてようと懸命になっていた。

こうして国境ぞいと和龍、安東一帯に大「討伐隊」が集結したため、白頭山東部の奥地は文字どおり身動きもできない状態であった。

しかし金日成将軍の頑強な革命的展開力——、いかに困難な状況のもとでも主導権をにぎり、敵の弱点をつき、連続的に敵をうちくだく攻撃精神、そして臨機応変の卓越した戦術により人民革命軍部隊はこの難関を勇敢にうちやぶって前進をつづけた。

将軍は、敵がすぐ背後からおそいかかろうとしている切迫した状況においても、悠々と隊員たちを休息させながら奇抜な戦術をあみだしたりした。

その年の秋、部隊が剕沂江(オルキ)のほとりで休息したときのことである。

敵が近くで機会をねらい危険な状況にあった。隊員たちは当然、出発命令がくだるものと考え万端の準備をととのえて待機していた。ところが将軍は意外にも朝早くから伝令兵をつれ、静かな沂江のほとりにでて釣り糸をたれていた。むらがる敵の大軍の包囲のなかで泰然自若として釣りをたのしむ将軍。その悠々とした姿を見つめる伝令兵は感激に胸が熱くなった。将軍は釣り糸をたれてまもなく、ピチピチとはねるやまめをつぎつぎに釣りあげた。だがどうしたわけか、伝令兵の釣り糸には一匹もかからなかった。将軍はやきもきしている伝令兵に釣りのコツを教えた。

「むかしのことわざに、兵術にたけた武将は敵をよく知り、おのれをよく知る人間だというのがある。いま、われわれが日本帝国主義をうつのも同じことだ。敵の兵力や武装の状態、戦術などをよく知り、その長所や弱点もよ

くわきまえたうえで味方の力をよく考えてこそ、たたかって勝つことができるのだ。魚釣りも同じことだ。釣ろうと思う魚がどんな性質をもっており、どんなところを泳ぎまわり、どんなところにかくれていて、なににょく喰いつくかということを知らなければ、魚を釣ることはできないものなのだ」

やまめを釣る方法をこまかく教えられた伝令兵は、そのことばどおりに釣りはじめた。「釣りをなさるのも、そういうおもしろ味があるからなんですね」と伝令兵がいうと、将軍はにっこり笑いながらこたえた。

「釣りが好きなのは、ただ魚を釣るおもしろ味があるからではない。魚を釣るたのしみもあるが、それに劣らぬほかのおもしろさがあるのだ。たとえば詩人が糸をたらして詩句を考え、発明家が釣り竿を手にしながら解けなかった問題を解きほぐすように、魚を釣るたのしみに決して劣らない妙味があるのだ。きみも釣りをしながら、ひっかかった問題を考えなおしてみなさい。おもしろいほどすらすらと解けることがわかるだろう」

そして将軍は、釣り糸をたれた水面をながめながら深い思索にふけった。

「まだ劉通事（通訳）の弟は先方へついていないだろう。敵がかれの訴えをきけば、蜂の巣をつついたような騒ぎになるだろうに……」

将軍は伝令兵をふりかえって見ながら、このように自問自答した。

伝令兵はやっと思いあたった。資金工作の途中で捕えられてきて、のちにおくり帰された劉通訳の弟のことである。もどってきたかれを見て敵側がどんな反応をしめすか、将軍の考えはそこに集中していた。無心に釣り糸をたれているがのように見えながらも、敵がどうでてくるか、どれくらいの兵力をつぎこんで、いつごろここまでやってくるのか、そして、やってきたらかれらをどのようにはばみ、どのようにうつかという戦術をねっていたのである。

その夜、将軍は剳沂江で釣ってきた魚を料理して隊員たちとゆっくり食事をとったのち、娯楽会までひらいてた

のしいひとときをすごした。敵の大軍が息せききって攻めてくることは、まるで眼中にないようであった。隊員たちはこのような将軍のようすを見て、「もう、敵をこっぴどい目にあわせる妙案をすっかりおたてになったのだ」と考え、静かな眠りについた。

その翌日、将軍は出動命令をくだして部隊をすばやく安図県三道溝方面へ移した。そののち〓浙江の密営地には数百名の敵兵がなだれこんできた。また肩すかしをくった敵は、腹たちまぎれに空屋に火を放ってひきあげた。

その年の十月、人民革命軍部隊は敵の包囲網をうちやぶり安図県の三道溝についた。

将軍はここに部隊を集結し、敵の新たな冬期攻勢に対処する戦術をたてた。将軍は敵が人民革命軍の密営を破壊するために兵力を集中し、司令部の位置をさぐりだそうとあがいている情勢のもとでは、根拠地にとどまることは不利だと判断した。そのため従来の密営をはなれて敵が想像することもできない軍事拠点をつくり、ときには部隊の所在をかくして敵をあわてさせ、ときには大部隊で一挙に敵を奇襲し、これを全滅させる作戦をくりひろげた。

将軍は情勢が困難であればあるほど、消極的にではなく敵を攻撃しながら主導権をにぎってすすむ積極的で大胆な作戦をとった。

一九三九年の秋の終り、将軍は部隊をひきいて和龍、安図県境を出発し、敦化県方面へ北上した。そして敦化の奥地に進出した革命軍部隊は、敵の重要駐屯地である六棵松（リユクククワソン）製材所をおそい、つづいて夾信子（ジャシンズ）製材所に猛攻をくわえた。

「討伐隊」の厳重な警戒体制がしかれた和龍、安図地帯を脱出することさえ困難なのに、敦化の駐屯地まで電撃的にうちやぶった将軍の大胆な作戦には、さすがの敵も啞然とせざるをえなかった。

敵は、たとえ「天にのぼり、地にかくれる」才能をもつ「共産軍」であっても、この警戒網だけは決してぬけだせまいとかたく信じていた。まして革命軍が疾風のように北へむけて進撃しようなどとは、まったく夢にも考えて

いなかった。

だから敵は六棵松、夾信子戦闘で自己の守備隊がうちのめされたという急報をうけるや、はじめてそれに気がつき教化の奥地に集結しはじめた。だがそのときはすでに革命軍部隊が数多くの戦利品をものし、製材所の労働者のなかから二百余名におよぶ新入隊員までうけいれ、遠く南下して安図、撫松県境へ進出していたのである。

将軍は敵にいっそう強力な打撃をあたえ、新入隊員を十分に教育し鍛練するために松花江流域の撫松県白石灘(ベクソクタン)の森林のなかに密営を設置し、約四十日間にわたる軍政学習を組織した。

革命軍部隊が軍政学習をしていたとき、その行方を見失って混乱におちいっていた敵は、白頭山東北部一帯の密営や平地や山奥にまですべての「討伐」勢力をつぎこんだ。かれらは「金日成部隊さえうちやぶれば、共産軍は全滅できる」といいながら、革命軍部隊があらわれそうな稜線や山奥などに陣をはり、無電器まで設置するさわぎをくりひろげた。しかし所詮、それはむだのつみかさねにすぎなかった。かれらは人っ子一人いない密林をとりかこむばかりで、遊撃隊の足跡一つ発見することもできなかった。あせりはじめた敵は飛行機までくりだし、だれもいない山奥に「帰順」を説教する大量のビラをばらまいたりした。

「人生わずか六十年の順調な生涯を送るとしても、行路けわしい人の世の絶えざる屈折は、自然、人生の無常を慨嘆させるのに十分であるのに、まして必要のない波乱をおこし、無意味なけわしい生涯をえらび、銃剣に身をおく危険のもとで貴重な君らの生命を投げすてることは、いかに無謀な愚挙であることか」……「ただちに最後の決断をくだし、更生の道をえらびきたれ！」

しかしこのビラは、侵略の弾丸よけにされ、ゆく先ざきで遊撃隊の痛打をあび、絶望と恐怖におののきながら異国の地をさまようかれら自身の病的な心理を反映したものにほかならなかった。敵はビラを書きながらなげき、それをまきながら自分たちの運命をのろった。逆に遊撃隊員たちはビラを見て笑いだし、つばをはきかけたりし

た。

困難なときほど攻撃的であった将軍は、敵が集中している国境へ、茂山地区へと進軍する計画をたてた。ふたたび国内に進出して侵略者にせん滅的な打撃をくわえ、生き地獄のなかであえいでいる同胞たちに民族再生の希望をあたえようと考えたのである。

将軍は機敏な戦術で敵を混乱させながらきびしい警戒網を一気にうちやぶり、ふたたび部隊を豆満江の国境地帯へとすすめた。

一九四〇年三月、将軍のひきいる部隊は紅旗河（ホンギ）の川筋にある大馬鹿溝（テエマロクク）に進攻し、またたくまに敵軍の本拠地を掃討して多くの軍需品をろ獲した。

この戦闘ののち、部隊はすばやく和龍、安図県境にある花拉子（ファラーズ）の森へ行方をくらました。大馬鹿溝に急行した敵軍は革命軍部隊の足跡をたどってすすんだが、将軍の作戦にかかって大馬鹿溝へ逆もどりし、「また革命軍にだまされた！」と歯ぎしりした。いきりたった敵は、また兵力をかき集めて大馬鹿溝の奥地をかけずりまわった。

ちょうどそのころ、敵をたくみにそらした革命軍部隊は花拉子付近でゆっくりと疲れをいやしていた。将軍はかれらがいつごろ花拉子付近に姿をあらわすかという時間まで計算し、それを撃破する作戦をたてて待機した。

その夜、将軍の予想どおり敵の偵察兵が革命軍部隊の歩哨線までしのびこんできた。だが、かれらは逆に遊撃隊の急襲をうけ、どれほどあわてたものか大切な軍用地図までおきざりにして逃げてしまった。

将軍はその軍用地図を見て敵の「討伐隊」が接近していることを知り、ただちに小部隊を派遣し、暗闇を利用して敵を正面からむかえうつよう指示した。

やがて派遣された小部隊が帰り将軍に報告したところによると、敵は方々にかがり火をたき、農民を薪わりにかりだしたりして大騒ぎしていたので、小部隊が目と鼻の先まで近づいても気がつかなかったという。そこで小部隊

は敵を思う存分うちのめし、すばやくよこからぬけだしたため、混乱したかれらはまた同士うちを演じ、暗闇のなかで狂ったように射ちあっていたというのだった。

報告をきいた将軍は笑いながら、「もう追ってこれないだろう」といった。

たしかに翌日から敵軍は追ってこなかった。同士うちをした夜、六十余名の死者と数多くの負傷者をだしたのがたたったのである。生きのこった敵兵は負傷者と死体を処理し、自分だけでも無事に逃げだせたことをさいわいだと考えた。

遊撃隊は花拉子の丘にのぼり、数日間の休息をとった。そして遊撃隊の行方をさがしまわっていた敵がくたくたになり、もとの駐屯地にひきあげたころ、将軍は部隊を蒼坪（チャンピョン）方面へ進出させた。しかし、敵がまた行方をつきとめて追跡してきたため、将軍は部隊を東南方面にむけ、大馬鹿溝のすぐ目と鼻の先で野営することを命じた。翌日、将軍は夜明けまえに各部隊長を召集し、今後の活動方針について討議した。

「きょうは追いすがってくる敵をけちらさねばならぬ。かれらをひきずって茂山へむかったのでは蒼坪を攻撃しにくいだけでなく、攻撃してもひきあげるのがむずかしくなる。茂山地区にたいする進攻を延期しても、まず追撃してくる敵をせん滅しなければならない」

将軍はこうのべたのち、ただちに戦闘命令をくだした。こうして敵が「千軍万馬の古つわもの」だの、遊撃隊から一度も苦杯をなめたことがない「討匪の神様」だのと豪語していた前田部隊と義勇新選隊を一挙に全滅する、有名な紅旗河戦闘がくりひろげられた。

将軍の戦闘計画にしたがい、まず部隊は雪のうえに足跡をのこしながら大馬鹿溝河にそってくだり、とある谷間で一晩休息をとった。そして三月二十五日の夜明け、ふたたび山の尾根をつたって今度は上流の方向へむかい、有利な地点をえらんで待ちぶせした。将軍は大馬鹿溝河支流の北側の高地に指揮所をさだめ、ここに機関銃隊と警衛

中隊を配置し、対岸の高地のふもとには二つの部隊を配置した。

午後五時ごろ、花拉子の方向から敵があらわれた。先頭には住民に変装した六名の斥候兵がたち、そのあとに義勇新選隊と前田部隊がつづいていた。かれらは、人民革命軍部隊が雪のうえにのこした足跡をたどって追撃してきたのであった。しかしかれらは、まさかこの地点で遊撃隊に遭遇することなど考えもせず、みずから死をもとめてやってきた。

敵が完全に袋のネズミとなるのを待って、将軍は射撃命令をくだした。機関銃がいっせいに火を吹き、手榴弾が炸裂した。両側面から不意の砲火をあびた敵兵は、するどい悲鳴をあげながら将棋だおしにたおれていった。敵軍は総くずれとなり、指揮系統も完全に乱れてしまった。隊列の収拾もできないまま敵はいくども突撃を試みようとしたが、そのつど数多くの死者をだす始末だった。将軍は生きのこった敵兵を一掃するため突撃命令をくだした。やがて壮絶な肉迫戦がくりひろげられた。

金日成 와 激戰

我方部隊長以下六十餘名戰死

朝鮮側警備 江岸一帯를 嚴戒中

金日成 一派

警察本部襲撃

紅旗河戦闘で前田部隊が惨敗したことを報じた新聞

この日の紅旗河戦闘で遊撃隊は、捕虜三十余名をのぞいて前田部隊と義勇新選隊を完全に掃討してしまった。そして機関銃六挺、歩兵銃百余挺、拳銃三十余挺、弾薬数万発をろ獲した。

こうして金日成将軍は、紅旗河戦闘をつうじて日本帝国主義の「討伐作戦」を大きく破綻させたのである。

この攻撃がいかにおそろしいものであったかは、あとにつづく五百余名の偽満軍奉天部隊がただ遠くからめくら射ちをするだけで全然近よらず、結局ちりぢりになって逃げだした事実によくあらわれている。国境をこえてきた三長（サムジャン）駐屯守備隊もやはり、はるか遠くからめくら射ちをするだけにとどまった。

「あれを見よ。おそろしくてこれ以上近よれないのだ。あんなに遠くの方で発砲しているのは、道を少しあけてほしいということなのだろう。ひとつ機関銃でおどかしてやりたまえ」

将軍は愉快そうに笑いながらこういった。

隊員たちはすぐ、ろ獲したばかりの六挺の機関銃で臆病ものたちに集中射撃をあびせた。敵はクモの子を散らすように散りぢりになってしまった。勝利をおさめた将軍は意気揚々と部隊を花拉子方面へ撤収した。

安図県の花拉子についた将軍は、国内への政治工作と豆満江流域の国境地帯にたいする偵察活動をいっそう強化した。将軍は小部隊を編成して茂山郡三長地域に進出し、政治工作と偵察活動をおこなうと同時に、すぐれた政治工作員をえらんで国内へ派遣した。政治工作員たちは咸境北道一帯でめざましい活動を展開した。

紅旗河戦闘で大勝利をおさめた将軍は、豆満江沿岸の敵に連続的な襲撃をくわえる作戦に転じた。一九四〇年三月におこなわれた安図県花拉子戦闘、四月の安図県東南岔、養草溝（ヤンツオグ）戦闘、五月の和龍県十里坪戦闘、それにつづく和龍県の漁郎村戦闘における勝利などは、すべて将軍が指揮した連続的な襲撃戦の成果であった。

この大旋回作戦のとき、将軍は朝鮮人民革命軍の一部隊をして各地で敵の冬期攻勢をうちくだきもした。

将軍の命令をうけた部隊は一九三九年の十月に安図県塞葱溝を襲撃し、吉林省軍区教導連隊の士官候補生と警察

のほとんどを殺傷または捕虜にした。この戦闘の勝利は、とくに柳京洙（リュギョンス）中隊長の機敏で大胆な作戦によるところが大きかった。

このの ち一部隊は延吉方面に移動しながら、天宝山（チョンボ）戦闘や児征陛（アルチョンベ）戦闘でひきつづき敵を掃討し、他の部隊は安吉同志の指揮のもとに額穆県一帯で額穆県城の戦闘のほか数多くのたたかいを展開したのち、ふたたび延吉、汪清県一帯で敵の拠点に痛打をあびせた。

冬のあいだ必死になって悪あがきをしていた「野副討伐司令部」の部隊は、一九四〇年の春になると、ちょうど春のあたたかな日ざしにとける氷や雪のように、もろくも壊滅してしまった。

こうして一九三九年の秋から白頭山東北部一帯で展開された将軍の大旋回作戦は、二十万におよぶ大軍の包囲をうちやぶり、敵にせん滅的な打撃をあたえて偉大な勝利をおさめたのである。

その間、将軍は豆満江沿岸の敵をうち、遠く敦化県一帯を北上して敵の中心拠点を攻撃するかと思えば、悠々とひきあげてきて撫松の白石灘で軍政学習を組織したりした。かと思うとふたたび和龍県境をうって安図と和龍へ移り、奇想天外な誘引戦と猛烈な襲撃戦を連続的にくりひろげながら敵を完全に制圧した。

こうして「野副討伐司令官」の最初の就任訓示と、その後の敗戦の告白とはまったくあざやかな対照をしめし、大言壮語していた日本帝国主義のもろさをいま一度世間にはっきりとさらけだす結果となった。

野副の就任訓示はつぎのようなものであった。

「数年間にわたる討伐にもかかわらず、吉林、間島、通化三省の境界一帯における匪勢いまだに衰えず、不肖野副昌徳、このたび討伐隊司令官の大任をうけ、ただちに征馬を白頭にすすめ、一撃粉砕して匪禍を根絶せんとす。軍隊に服する者は、このたびの聖なる討伐がソ満国境線と表裏一体の関係にあり、その影響の及ぼすところ実に大なるを肝に銘じ、日満軍、憲警、鉄石の如く渾然一体となり、善戦よく短期日内に頑強なる敵を掃滅し、王道楽土

の建設の完遂を期す覚悟なり」（野副討伐司令部『討伐粛正計画要綱』一九三九年九月十日）。

しかしそれから数か月ののち、野副司令官は同じ口から、「金日成の行動はきわめて巧妙であり、同地区討伐隊の不眠不休の索出掃討も水泡に帰した」と惨敗の真相を告白し、すごすごと帰ってゆかねばならなかった。

金日成将軍はこうして、白頭山東北部における大旋回作戦により人民革命軍部隊、とくにその司令部を「掃滅」しようとした敵の一九三九年から一九四〇年へかけての冬期「討伐」攻勢を完全に挫折させたのである。

2　千変万化の戦術

一九四〇年四月、朝鮮人民革命軍部隊は安図県花拉子の密林で野営した。

将軍はここで十数日間にわたる軍政学習を組織し、隊員たちに人民革命軍の遊撃戦術を深く研究させた。

ながいあいだの武装闘争において、将軍が築きあげた遊撃戦術の経験はじつに豊富なものであった。将軍は抗日武装闘争の開始以来、ほぼ十年間にわたる困難な闘争の炎のなかで遊撃戦の戦術を独創的に創造し、それをたえず発展させてきた。

将軍はなによりも自己の戦闘力を最大限に保存しながら、数多くの敵を掃滅することを第一の原則とした。これは遊撃戦が少数の兵力で圧倒的に優勢な敵を相手とするため、遊撃隊の力を最大限に保存しなければ軍事行動を継続することも、頑強な戦闘力を保持することもできないからであった。

将軍は、この問題で生まれやすい二つの傾向にたいしてつねにきびしく警戒した。

その一つは、遊撃隊の力量を保存することに少しも考慮をはらわず、ただがむしゃらに無謀な戦闘をおこなおうとする軍事冒険主義的な傾向である。これは主観的な願望にとらわれて敵をあなどり、状況を具体的に判断せず、無分別なたたかいにこだわって偶然的な勝利を期待するきわめて有害な傾向であった。そしてこれはまた、敵の大

軍との戦闘で遊撃隊を受身におとしいれ、不必要な損害をもたらすだけでなく、今後のより大きな勝利をも逃がしてしまう近視眼的な行動にすぎなかった。

軍事冒険主義的な傾向は武装闘争の初期に自分の力がまだ弱いにもかかわらず、なんの準備もなしに優勢な敵と真正面から衝突したり、大規模な戦闘だけを試みようとするところにあらわれた。またそれは遊撃根拠地を解散しなければならない革命の要求が提起されたとき、情勢も敵味方の力関係も考慮せず、やたらに「根拠地死守論」を主張した一部の人びとのなかにも見られた。

将軍は抗日武装闘争の初期から、このような軍事冒険主義的な傾向を徹底的に警戒し、それをつねにきびしく批判した。

第二に将軍は、敵を過大評価するあまり気力と勇気を失い、消極的に行動する投降主義的な傾向も警戒した。

一九三九年四月、北大頂子会議で将軍は、もしおそいかかってくる敵をうたないだけでなく、敵の後方を攪乱しもせずに安全なところばかりさがしまわり、大衆にたいする工作を積極的にくりひろげないならば、弾薬や食糧を手にいれることができないばかりでなく人民との連係もとぎれ、その支持をうけることもできなくなり、ついには破滅以外に道がなくなるであろうと指摘した。そして将軍は、「四方八方に敵がむらがる状況のもとでは、遊撃隊がのんびりと眠る安息所など、どこにもない。遊撃戦それ自体がもともと敵の統治区域で、敵のふだんの包囲攻撃のなかで展開される闘争ではないか」といましめた。

将軍はこの二つの偏向を同時に警戒しながら、たたかいに勝利するためにはつねにそのときの状況と敵味方の力関係を正しく判断し、それにもとづいて戦闘を準備し、組織し、それを強力におしすすめていかなければならないと教えた。

将軍が一貫して、遊撃隊の戦闘力を最大限に保存しながら敵をうつ基本原則を守りぬいたからこそ、武装闘争を

長期にわたって持続させることができ、もっとも悪らつで優勢な敵を徹底的に撃滅して人民革命軍の勝利を保障することができたのである。

将軍は「無敵」を誇る日本帝国主義侵略軍の大兵力を天才的な戦法とすぐれた指揮でもって掃討しつづけた。

戦争において力量上の優勢と戦術上の優勢を占めることは、ともにその主導権をかちとるための重要な方法である。この問題について将軍は、遊撃闘争の特性と敵が量的にも武装の面においても優勢である事情を考慮し、主として遊撃隊のすぐれた戦術によって主導権をかちとることを基本とした。むろん、戦術的優勢の一面だけを堅持したわけではない。ときには力量上の優勢と戦術上の優勢をくみあわせる方法もとった。抗日遊撃隊を主力とし、「反日部隊」をひきいれて展開した東寧県城の進攻戦闘と羅子溝の戦闘をはじめ、人民革命軍各部隊が連合しておこなった数多くの作戦は、まさにそうした方針にのっとった戦闘であった。

将軍はつねに敵の弱点を最大限に利用し、かれらを進退きわまった受身の立場にたたせ、主導権をしっかりとにぎりしめてたたかった。これは数量においても装備においても、はるかに優勢な敵を相手としてたたかう条件のもとで生みだされた戦術であった。将軍は戦闘で主導権をかちとるために、敵と味方の力量を正確に分析して評価することがなによりも重要だと教えた。

この問題について将軍は一九三三年のはじめ、小汪清根拠地でつぎのようにのべている。

「われわれが敵とたたかうのは、端午の節句のときに相撲でもとるように、正面からくみついていって勝てばよく、負ければもう一度とりなおすといったような気分的なあそびや賭けごとなどではない。われわれは革命をおこなう人間の集まりである。たたかいには必ず勝たなければならない。いまのわれわれは、どれくらいの敵をたおすことができるか、どのようにたたかえばわれわれが損失をこおむらず敵により多くの打撃をあたえ、決定的な勝利をかちとることができるか。われわれの長所はなんであり、敵の弱点はどこにあるのか。またわれわれに不十分な

点はないのか。もっと良い方法はないだろうかといろいろ考え、詳細に検討してみなければならない」

将軍はつねに、敵味方の力関係を正確に評価したあとは敵の弱点を最大限に利用すると同時に、その弱点をもっとさらけ出させてこそ主導権をかちとることができると強調した。

将軍はまた、つねに敵のもっとも弱い環をみつけだし、それを利用し、その弱点を拡大させるために、敵が攻撃してくれば戦術的に後退して混乱をあたえ、敵がとどまればそれを攪乱し、疲れさせ、弱めて、敵を内部から瓦解させる方法をとった。

一九三四年一月、小汪清根拠地の防御戦闘で将軍があみだして活用した戦術はその模範的な一例である。

このように将軍は、敵の動静、はてはその心理状態まであたかも自身の手のうちを見るように把握し、それにもとづいて正確な戦術をたて、それを大胆につらぬいていった。つねに敵の弱点を最大限に利用した将軍は、たくみな戦術で敵のきびしい包囲をうちやぶり、強力な敵を弱め、受身におとしいれてしまうのであった。

将軍はたたかいにおいて主導権を維持しつづけるために、人民革命軍の兵力を自由自在に行動させたばかりでなく、敵の兵力をも意のままにあやつったりした。そのため敵は人民革命軍を「討伐」するとはいったものの、実際には将軍の指揮棒で動いているのとかわりないありさまであった。

将軍はまた、人民革命軍の兵力を自由自在に活用する機敏な戦術で勝利を保障した。機敏な戦術とは、主として兵力を自由自在に活用し、敏速に分散、集中、移動することである。将軍は広大な地域で部隊を敏速に分散、集中、移動させることにより、敵を混乱におとしいれ、かれらをいたるところで撃破した。たとえば人民革命軍の部隊が東満州の根拠地をあとにして南満州、東満州、北満州、国内をふくむ広大な地域に進出し、各地で積極的な攻撃をおこない、敵に強力な打撃をくわえながら武装闘争の範囲を拡大した一九三五年夏の作戦や、その後の鴨緑江、豆満河沿岸への電撃的な進出、また長白から撫松県の西崗地域へ進出した一九三七年のはじめの作戦などがそ

れである。

このような機敏性は広大な地域でばかりでなく、個々の戦闘や行軍中にも活用された。将軍は敵が密林地帯に集結すれば遊撃隊を丘陵地帯に移動させてそれを撃破し、敵が丘陵地帯にあらわれると部隊を敏速に密林地帯へ移動させた。

また敵の大兵力が性こりもなく追撃してくれば、それを部隊の一部でさそいだして攻撃し、主力部隊をよこからぬけださせて敵を混乱におとしいれ、危機を有利な状況にかえたりした。敵の大包囲網を突破し、濛江から長白への英雄的な移動を実現した一九三八年の苦難の行軍とその過程で活用された「蝶と鶏のけんか」戦術は、その代表的な実例である。

将軍はまた速戦即決の戦術で敵を急襲し、増援部隊の追跡を失敗させ、どれほど優勢な敵でも受身の状態におとしいれてしまった。隠密性、計画性、機動性を基本とする戦術を活用し、力量や装備のうえでいかに優勢な敵でも混乱させ、それを一撃のもとにうちくだいた。日本帝国主義にせん滅的な打撃をあたえ、朝鮮人民には革命の曙光をもたらした普天堡戦闘は、この戦術を適用した模範の一つであった。

将軍はまた、誘引欺瞞戦術をいろいろと活用した。将軍は文字どおり意のままに敵をまるめこみ、かれらを陣地からさそいだして撃破したり、あちこちにひきずりまわし、有利な地形へさそいこんでから一網打盡にしたりした。数名の誘引隊で敵をさそいだし、それにせん滅的な打撃をくわえた一九三五年夏の老黒山の戦闘をはじめ、大小無数の戦闘でこのような戦術が適用された。

ときには奇抜な誘引戦術をもちいて敵に同士うちをさせ、その光景を山のうえで悠々と見物したこともあった。「望遠戦闘」として名高い一九三六年九月の小徳水戦闘がそれである。

ときにはまた、遠くへ移動するかのように見せかけて敵の鼻先にあらわれたり、大部隊を威風堂々と行軍させせな

がら突然、分散行軍に切りかえたりすることもあった。将軍の指揮のもとにおこなわれた茂山地区の戦闘をはじめ、数多くの作戦で活用された「一行千里」戦術はその実例の一つである。
将軍が比較的多くもちいたのは、いわゆる「東で声をあげて西をうつ」(声東撃西)陽動作戦と、東と西を同時にうちやぶる両面作戦であった。
じつに、将軍の戦術は千変万化であった。
将軍のすぐれた戦術は、「いくたび死すとも敵をうつ！」という決意に燃える人民革命軍隊員の不撓不屈の闘志とむすびついていたからこそ、いっそう大きな威力を発揮した。
古今東西の兵書と遊撃戦争史上にもまれな金日成将軍の天才的な戦法と用兵術は、文字どおり日本帝国主義侵略者の心胆を寒からしめた。
かれらは、「共産軍の戦略戦術はまさに鬼神も泣くほどである。かれらは、いかなる兵書にもない兵法で戦争をおこなう。そして皇軍の正規作戦とはまったくあわない方法で対抗するため、もっともやりにくい相手である」と悲鳴をあげた。
そのため無敵といわれた日本「皇軍」の白兵戦も、退却を知らぬといわれた「大和魂」も、朝鮮人民革命軍のまえではことごとくうちやぶられ壊滅したのである。
縦横無尽に敵をうつ将軍の威力のまえでかれらは恐怖におののき、われを失って、金日成将軍の名前をきくだけでもふるえあがった。
つぎのような話もある。
一九三九年の半截溝戦闘ののち、恵山のある新聞支局長が「討伐」状況を取材するため長白県の県警務課長をたずねた。かれはなんども頭をペコペコさげながら自分の名刺を警務課長にさしだした。

ところが突然奇妙なことがおこった。名刺をうけとった警務課長が急に気絶しそうになり、顔を真っ青にしたかと思うと、するどい悲鳴をあげて椅子からころげおちてしまったのである。

いったい全体どうしたことかと、新聞記者もわけがわからずふるえあがってしまった。ところがようやくおきあがった警務課長は、もう一度おそるおそる名刺をのぞきこむとまたひっくりかえってしまった。

それは名刺にあった記者の名前が、将軍の名前と同じ発音の金一成だったからである。つまり悪名高かった警務課長は、金日成将軍が自分を処断するため新聞記者に変装してあらわれたと惑ちがいしたのだった。

このように、金日成将軍の名はそれ自体が一つの大きな威力であった。そうした将軍であったからこそ、またそのような将軍によって育てられ、きたえられた隊員たちであったからこそ、世界史に類例のない苦難にみちた長期の遊撃闘争で百戦百勝の輝かしい勝利をおさめることができたのである。

遊撃隊には安全な後方も補給基地もなかったし、かれらの行軍には終点もなかった。いたるところに敵がむらがり、情勢は日ましにきびしくなっていった。しかし朝鮮人民革命軍は嵐の海をつきすすむ勇敢な艦隊のように、革命の炎のなかで前進に前進をかさね、ゆく先ざきで敵の屍をこえ、広はんな人民大衆を闘争へとふるいたたせたのである。

いいあらわすことのできない苦難や危険のなかでも、つねに明るい歌声や笑いがたえなかった。かがり火をたいてもなお寒く、ふところに雪が吹きこむ冬の夜でも、かけがえのない祖国と未来への夢はつねに明るくゆたかであった。人民にたいしては温順な忠僕であったが、戦闘では虎とも獅子ともなった抗日遊撃隊——。かれらの脳裏にはつねに苦しみもだえる同胞のねがいと未来があり、胸底には炎のような情熱がたぎっていた。知略も勇気も、また超人的な忍耐も、すべてここから生まれでたのである。

まさにそのために、金日成将軍は遊撃隊をひきいて世界にその「精鋭」ぶりを誇る日本帝国主義の関東軍と朝鮮

駐屯軍および偽満軍を相手に、長期にわたる戦闘をくりひろげることができたし、また連戦連勝することができたのである。

こうしてわが人民のなかには、「金日成将軍は地殻をたぐりよせる縮地法をはじめ、変身術、隠遁の術、分身術を思いのままにつかわれるそうだ」、「金日成将軍は白頭山の精気をうけてお生まれになった方だから、天地の摂理を知りつくされ、未来を予見されるのだ」、「将軍は山をひきよせたり、ひきはなしたりし、一夜に数千里を往復されるそうだ」とか、または、「砂粒を米粒にかえたり、木の枝で爆弾をつくり、紙一枚をうかべて水のうえをわたられるそうだ」、「将軍はふしぎな力と才能をもっておられ、同じ時刻に、まえとうしろの山で敵をうち、東と西の敵を同時にうって、かれらをみな殺しにされる」などという無数の伝説がひろがっていった。

将軍によってあみだされた戦略戦術は実戦における教範であった。したがって、それはたんに将軍だけでなく、将軍によって育成された遊撃隊のすべての指揮官と隊員たちによって日常的に活用された。こうして満州と朝鮮をふくむひろい領域で、数万回にのぼる戦闘の勝利をかちとることができたのである。

「朝鮮総督府」は、一九三二年の春から一九三六年六月までのあいだ、抗日遊撃隊と日本軍とのあいだにおこなわれた戦闘を二万余件と記録し、これに参加した遊撃隊員の数はのべ百万名以上であると記録した。日本の侵略者たちが縮小して発表した不十分な統計によっても、一九三七年には中国東北一帯で三千九百回以上の戦闘がおこなわれ、一九三六年から一九四〇年にいたる五年のあいだに、抗日遊撃隊はじつに六個師団の兵力に相当する敵の将兵六万余名を殺傷し、捕虜にしている。

とくに、かれらの「討伐」がもっともきびしかった一九三九年のはげしい戦闘で、遊撃隊は敵軍三万余名を殺傷、捕虜にし、軽機関銃百十七挺、歩兵銃二万余挺、モーゼル拳銃三百余挺、擲弾筒二十余挺、各種弾丸数百万発をろ獲したし、このほかにも数多くの軍需物資を獲得する輝かしい戦果をおさめた。

こうして当時、『東亜日報』や『朝鮮日報』をはじめとする数多くの新聞は、金日成将軍がひきいる朝鮮人民革命軍部隊の勇敢な活躍ぶりを特筆大書して報道した。しかしそれが人民大衆にあたえる影響をおそれた敵は、一九四〇年代から遊撃隊にかんする報道をいっさい禁止してしまった。

一九四〇年四月中旬、将軍は花拉子の密営地で当時の軍事、政治情勢と、過去十年間の闘争過程であみだされた遊撃戦の戦略戦術と経験を総括し、軍政幹部たちにつぎのようにのべた。

「偉大なレーニンがのべたように、最後に笑うものこそもっともよく笑うものである。われわれは、過去十年間のながい歳月にわたって白頭山のけわしい山々をくまなく歩きまわり、零下四十度のきびしい寒さも、真夏の炎天下でも屈することなく、つねに日本帝国主義の鉄鎖につながれて苦しむ祖国の同胞に思いをはせ、雄々しくたたかってきた。われわれは過去十年間の武装闘争で、毎日のように苦しい行軍をしなければならなかった。あるときは一日に十里ないし十五里も行軍した。もし一日に平均五里ずつ歩いたと計算しても、われわれはこの十年間に約二万里の長征をおこなったことになる。

二万里の長征――、これは朝鮮人民革命軍の不撓不屈の闘志と、朝鮮人民の愛国思想を実証する生きた実例である。もちろんわれわれは、過去十年間の輝かしい功績を堂々と誇ることができる。しかし最後に笑うまえに過去の闘争の業績を誇るのはまだ早すぎる。われわれは最後の勝利のために、最後に笑うために、日本帝国主義侵略者を朝鮮と満州から追いだし、朝・中両国人民の真の解放と独立のために、さらに数万里の道を歩むことを誓おう！そのときは必ず、祖国の美しい山河に勝利のあかつきがおとずれるであろう！」

二万里長征の苦しい茨の道を切りひらいてきた人民革命軍の隊員たちは、将軍の教えのとおり祖国が解放される日まで行軍と戦闘をつづける決意にみちあふれていた。

抗日武装闘争の過程で金日成将軍によって創造された天才的な戦略戦術は、決して日本帝国主義侵略者を破滅に

おとしいれることだけでその役割を終えたわけではない。それは解放後の朝鮮人民軍創建とその軍事技術の基礎となり、いっそう大きく開花し発展した。その客観的な実証は、祖国解放戦争でアメリカ帝国主義者がこうむった歴史的な惨敗と、アメリカ侵略軍の頭目たちがあげた悲鳴によって明らかである。

金日成将軍が創造し発展させた遊撃戦の戦略戦術は、こんにち、民族的独立と自由のために世界反動勢力の牙城であるアメリカ帝国主義侵略者に反対して、勇敢な武装闘争を展開しているすべての植民地、半植民地国家の人民にとって、はかりしれない貴重な教範となっている。

第十一章　最後の勝利のために

1　革命の大転換期をむかえるための方針

情勢は急変していた。

一九四〇年代にはいり、世界には大戦争の炎が燃えひろがりはじめた。ファッショ国家であるドイツ、イタリア、日本が徒党をくんで強行した侵略戦争は、一九三九年九月、ドイツのポーランド侵攻を契機に世界大戦へと拡大していった。

世界制覇の野望に燃えるヒトラー・ドイツは大戦の初期、すでにフランス、オランダ、ベルギーなどヨーロッパの各国を占領し、イギリスを制圧しながらソ連に侵攻するための準備に狂奔していた。ファシスト・イタリアもまた対外膨張にやっきになっていた。

東方では帝国主義日本が中日戦争を早く終結し、ほこ先を東南アジア地域とソ連の極東地域にむけようと策動していた。

一方、イギリス、アメリカ、フランスの帝国主義者たちは、自国にむけられている狂暴なドイツの武力をソ連へ集中させようとあらゆる策略をめぐらしていた。かれらはドイツとソ連が決戦をおこない、双方ともに破滅することを期待しながら、あわよくば世界制覇を実現する漁夫の利をえようとねらっていた。またソ独戦争でどちらか一

方の勝利が確定的となれば、その国と「同盟」を結んで戦勝国となり、莫大なわけまえをせしめようとたくらんでいたのである。

これらすべての事実は、ただ略奪と侵略によってのみ生きながらえるイギリス、アメリカ、フランスとファシスト・ドイツ、イタリア、日本など帝国主義列強の矛盾が非常に複雑にからみあっており、わけても帝国主義列強と社会主義国家ソ連との矛盾が激化の一途をたどっていることをしめしていた。

このような国際情勢は、そのまま朝鮮にも反映した。一九四〇年代にはいり、ファシスト日本と朝鮮人民間の矛盾は頂点に達した。

ソ連侵攻の機会をうかがいながら、まず南方への大々的な膨張をもくろんだ日本帝国主義は、その先決条件として朝鮮と満州を「強固な後方」にし、戦略的橋頭堡としていっそうがんじがらめにしようとたくらみ、そのためには手段と方法をえらばなかった。とくにかれらは朝鮮人民革命軍が深刻な「頭痛の種」であり、おそろしい「暗礁」であると認め、その「完全撃滅」に血まなこになった。

かれらはまた、「朝鮮は異域ではない。九州や四国と同じく強力な皇国の一環とならなければならない」とわめきたて、無制限な経済的略奪をはかるとともに、つぎつぎと新しい悪法をでっちあげていった。

一九四一年、かれらは「思想犯予防拘禁令」を公布したのにひきつづき、同年三月七日には「国家保安法」を、三月十日には「改正治安維持法」を、十二月には「朝鮮臨時保安法」をそれぞれを矢つぎばやに公布した。

こうして「戦時条件」ということばは収奪と窒息の代名詞となった。つくられるものは人民の血と汗によって建設される軍需工場だけであった。工場の煙で田野は枯れ、おそろしい「供出制度」によって収穫の場はそのまま収奪の場とかわった。

工場は牢獄と同じであった。労働者は十二時間、十五時間の苦役をムチで強制され、疾病と飢餓賃金に苦しみな

がらたおれていった。また青壮年は、ふたたび生きて帰ることのない徴用、徴兵へと狩りだされた。そのためかれらが流したものは涙ではなく血であった。

民族的なものはすべてが犯罪とみなされた。日本の侵略者たちは、朝鮮語をつかったといっては幼い生徒まで厳罰に処し、白髪の老人があいさつをしなかったといっては野蛮な暴行をくわえたりした。しかし日本帝国主義者の弾圧がきびしくなればなるほど、朝鮮人民は炎と燃える復讐の日をかたく誓った。

じつに日本帝国主義の流血的植民地支配の歴史のうえで、この時期ほどかれらの残忍さと野獣性が赤裸々にさらけだされたときはなかった。

他方、日本帝国主義は、一九三九年から一九四〇年にかけての冬期作戦の恥ずべき惨敗にもかかわらず、「精鋭」部隊を大々的に投入して朝鮮人民革命軍にたいする「最後の掃蕩戦」なるものを強行した。いわゆる「大日本帝国の生命線」とよばれた満州でかれらの後頭部をうちくだき、侵略戦争の遂行に決定的な打撃をくわえていた朝鮮人民革命軍を「完全掃滅」しようというものだった。そしてかれらは、「精鋭」を誇る関東軍の主力部隊と朝鮮駐屯日本侵略軍、偽満軍、警察隊など、数十万におよぶ大兵力を毎日のように人民革命軍にたいする無謀な攻撃に動員した。他方かれらは経済封鎖と各種の謀略、デマ宣伝を強化し、集団部落の規模を拡大し、いままでの小集団部落を大集団部落につくりかえて人民革命軍を孤立させようとたくらんだ。

かれらは大衆のなかに組織されていた革命組織を破壊しながら、数多くの革命家と政治工作員を手あたりしだいに検挙して虐殺し、ひいては人民革命軍の隊列を内部から瓦解させようと悪らつな策動をつづけた。このように敵は、いかなる犠牲も、いかなる高い代価をもいとわぬ覚悟で、朝鮮人民革命軍にたいして「最後の決戦」をいどんできたのである。

急激な変化と激動する情勢は革命隊列のまえに、それに対応すべき新たな対策を要求した。

将軍は一九四〇年八月、敦化県の小哈爾巴嶺で人民革命軍の軍政幹部会議を召集した。この会議で将軍は、国内外の情勢の展望と現在の敵と味方のあいだの力関係を正しく分析し、新たな闘争方針をしめした。

将軍はまず現在と将来の国際情勢を評価し、いまファシスト諸国が侵略戦争を拡大している点からみればかれらが優勢であるかのように見えるが、その滅亡の日は遠くないことを明らかにした。

このことを将軍は、ますます強まっていく社会主義ソ連の威力と、アジアとヨーロッパでいっそう力強くくりひろげられるであろう反ファッショ闘争と民族解放闘争、そして帝国主義諸国の経済恐慌と政治的、軍事的危機および矛盾の尖鋭化と、とくに戦争の長期化とそれにともなう莫大な軍備の消耗、兵卒の士気の低下、支配層内部のあつれきによる日本の苦悩、日ましにはげしくなる朝・中両国人民の抗日武装闘争などの諸点をあげて論証した。

将軍はファシスト諸国のいわゆる「三国同盟」と「反共協定」についても、これは苦しまぎれの虚勢であり、三国の膨張と強奪の野望がからみあった狼の「同盟」であるため遠からず崩壊するであろうと断言した。また将軍は複雑な情勢の底流にもとづいて朝鮮革命の将来を見とおし、遠からず有利な決定的局面が切りひらかれることを確信をもって予見した。

しかしこうした趨勢にもかかわらず、朝鮮人民は完全な民族解放を達成するまでひきつづき困難なたたかいをくりひろげなければならなかった。とくに人民革命軍は数十倍、数百倍も優勢な敵を相手に苦難にみちたたたかいをすすめなければならなかった。このような情勢にもとづいて将軍は、朝鮮人民が民族解放をかちとる日は近づいているが、同時に前例のない困難な試練が待ちかまえていると指摘した。

ファシズムが世界的な規模で荒れ狂っているだけでなく、祖国が悲惨な地獄相を呈し、民族反逆者どもが敵とみにくい茶番劇をくりひろげていたとき、金日成将軍は、朝鮮および世界の現在と未来をはっきり見ぬいていたので

ある。

一般にいって、複雑な事態もすぎ去ってみればその曲折は明確になるものである。しかしそれが進行の過程にある場合には、単純な事件であってもその方向を見さだめることはきわめてむずかしい。しかし将軍は、世界のすべての国ぐにがぶつかり、からみあって転変する暴風雨のなかでも、鬼畜にたいする人間の勝利を確信し、朝鮮の夜明けを予見した。

このような洞察力はそれ自体、朝鮮人民の幸福を約束するものであった。なぜならば将軍は、このような正確な判断にもとづいて祖国解放のための天才的な路線をうちだしたからである。

将軍は会議で、到来する民族解放の革命的大転換期を主動的にむかえるために、ながいあいだ苦難をへて育てあげた革命力量を最後まで保存することを第一義的な課題として提起した。将軍はつぎのようにのべた。

「われわれはまだ、敵とのたたかいで最後の決戦段階にいたっていない。最後の決戦にはわれわれは、あらゆる犠牲をいとわず祖国と人民のために、最後の勝利のために決然とたちあがらなければならない。しかしいまは、まだ最後の決戦の時期ではない。われわれは、十年間の実戦をつうじて政治、軍事的にきたえ育成した堅実な幹部たちを革命の利益となんら関係のない激烈な大戦闘に追いやり、無謀な犠牲をしいるような極左冒険主義をきびしく排撃しなければならない。われわれはこのような現情勢に正しく立脚して、これから先、敵に決定的打撃をあたえ革命の大転換期をむかえるために、われわれの貴重な革命力量をひきつづき保存し育成しなければならない」

将軍はとくに、全隊員と指揮官がマルクス・レーニン主義理論と先進的な軍事科学知識でしっかりと武装し、最後の決戦にそなえて万端の態勢をととのえることがもっとも重要であると強調した。

革命力量の保存と育成方針は、ただたんに日本帝国主義を打倒し、朝鮮を解放する当面の革命課題だけを予見したものではなかった。それは有利な情勢が到来したとき、最後の決戦によって抗日武装闘争の終局的目的を達成す

るための準備であり、ひいては蓄積されたその力量を基礎に、解放された祖国の地に新しい社会を建設することまで予見したじつに遠大な構想であった。

将軍は敵の大兵力がひきつづきおしよせる条件のもとで、人民革命軍が多くの犠牲をともなう大部隊活動をさけ、奇襲を基本とする小部隊活動に移る問題、密営と連絡所形式の臨時根拠地を設置し、それを軍事政治的拠点として利用する問題、小部隊で地下闘争をはげしく展開し、破壊された革命組織を復活する一方、人民大衆を反日反戦闘争へと決起させる問題など、新たな軍事政治的課題を提示した。

将軍が明らかにしたこの方針は、敵の大規模攻勢にたいし正面衝突をさけ、より多くの革命力量を保存し育成する一方、敵の弱点をついて主導権をにぎり、いたるところですばやく猛攻撃をくわえることによって、人民大衆を反日反戦闘争へ力強くたちあがらせる方針であった。

このように、部分的な目前の勝利でなく、革命の全般的利益と終局的勝利の観点にたってうちたてられた将軍の戦略戦術は、将軍自身の熱烈な愛国心と確固とした主体路線をあますところなくしめしたものであった。

2　小部隊活動

朝鮮人民革命軍部隊は敦化県小哈爾巴嶺会議ののち、金日成将軍の方針にしたがって全面的な小部隊活動へと移行した。

朝鮮人民革命軍部隊は汪清県、東寧県、延吉県などの山間密林地帯に数多くの臨時根拠地をもうけ、状況に応じてすばやく移動しながら猛烈な活動をくりひろげた。

将軍は一九四一年五月に人民革命軍の一部隊をひきいて安図をたち、汪清県夾皮溝の臨時根拠地へむかった。

この行軍は最初からきわめて困難な行軍であった。ゆく先ざきで日満軍警が山間地帯の要所要所からおそいかかってきた。将軍は大胆な戦術をもちい、敵の中心を深くついて間島省庁所在地である延吉市街を指呼の間におく老頭溝(トウグ)付近を通過することにした。ところが延吉には日本の憲兵隊が駐屯しており、その周辺には日本の守備隊と数多くの日満軍警が配置されていた。このほか、いたるところで特務がうろついていた。

日本軍の将校服を着た将軍は、隊員たちにも日本の軍服で変装させたのち厳重な警備網をつきやぶって行軍をつづけた。

ある日のこと、部隊が延吉と老頭溝のあいだにある大通りと鉄道をまだ通過しないうちに夜が明けてしまい、危険な状態となった。しばらく考えていた将軍は隊員をひきつれて道ばたのとある大きな民家にはいっていった。日が暮れるまで休息してから出発するつもりだった。隊員たちが心配そうな顔で、かえって危険ではないでしょうかとたずねた。すると将軍は笑いながら、「危険だからこそ、この家にいた方がいいのだ。灯台もと暗しのたとえどおり、敵の鼻先にいるときほど大胆に行動しなければいけない」といった。泰然自若とした将軍の態度に隊員たちは安心して休息をとった。

陽がのぼると大通りは混雑しはじめ、日満軍警の往来もひんぱんになった。昼すぎ、急に戸があいたかと思うと日本軍の戦闘帽をかぶった男たちが殺気だってはいってきた。とっさに隊員たちは、将軍がかれらを射ち殺すものと思った。ところが意外にも、きびしい表情で壁によりかかっていた将軍はすばやく上半身をおこし、大声で「だれか!」と日本語で誰何した。すると一番まえにたっていた男が将軍を「皇軍」の将校だとでも思ったのか、ぶるぶるふるえながら、「ハッ、ハッ」といって敬礼した。

「みんなはいってこい!」という将軍の雷のような命令に、かれらは腰をかがめたままの格好ではいってきた。その一瞬、隊員たちはいっせいに銃をつきつけた。

「これはどうしたわけでありますか。自分らは金日成共産軍があらわれたという情報をうけたものですから、とんでまいったところであります。失礼のほどはどうかお許しください」

かれらは、がくがくとふるえながら手をあわせて哀願した。隊員たちはすばやくかれらのからだをしらべて武器をとりあげたあと、縄でがんじがらめにしばりあげた。かれらは特務機関から派遣された朝鮮人の密偵であった。

「おまえたちがさがしている共産軍はここにいる！」

将軍のきびしい一言に肝をつぶしたかれらは、ますます青ざめて息もつけないありさまであった。

「おまえたちも朝鮮人ならよく考えてみよ！　なんのために日本帝国主義の犬になりさがっているのか。日本帝国主義者の足の裏をなめながら同胞を敵に売り、手あたりしだいに殺害しているおまえたちのような凶悪でけがらわしいものはこの世にまたといまい。おまえたちのような奴は生かしておけないところだが、弾丸がもったいなくて殺すのはやめておく。そのかわり、われわれがここをでてゆくまで物置にじっとしておれ！」

将軍がはげしい口調でしかりつけると、密偵どもは四つんばいになって物置にはいりわなわなとふるえた。

あたりがうす暗くなると、将軍は隊員たちをひきつれ、ふたたび大通りの敵の目と鼻の先を堂々と行軍した。大通りは夜になっても人の往来がはげしかった。人民だけでなく、ときおり銃をかついだ日満軍警が列をつくって真正面からやってきたりした。しかし、将軍を先頭にした革命軍隊員は平然と敵とすれちがい、老頭溝の市街をぬけて悠々と山林地帯へはいっていった。

敵がいかに捜索網をはっても、銃剣をふりかざして騒ぎたてても、将軍の行方をつきとめることはおろかその活動をはばむこともできなかった。だから将軍が敵がたむろしている地区をつきすすんでいるときでも、かれらは「金日成の所在については目下不明の状態である」（『鴨緑江、図們江対岸情報』一九四一年、一二三ページ）と悲鳴をあげ、

不安をかくしきれなかった。

数日後、付近一帯の住民は祝いごとでもおきたかのように、「金日成将軍の部隊が真っ昼なか、老頭溝の市街をとおりぬけたそうだ」と語りあってよろこんだという。

汪清県夾皮溝についた将軍はそこを臨時根拠地とさだめ、みずからひきいる二百余名の隊員を十余個の小部隊にわけて汪清、延吉、東寧、和龍、安図、樺甸県や、国内の各地に派遣した。

そのころ世界大戦は拡大の一途をたどり、ヒトラー・ドイツは一九四一年六月、ついにソ連にたいして不意の侵攻を開始し、日本帝国主義も同年十二月に太平洋戦争をひきおこした。

この情勢の変化は、民族的大転換期をむかえる準備を促進させるための将軍の方針が正当であり、それが科学的予見にもとづいたものであることをふたたび実証した。

ソ独戦争がおこると将軍は六月三十日、夾皮溝で革命軍指揮官と兵士にたいし当面の任務を明らかにした。将軍は、民族解放の大事変をむかえるためにいっそう緊張したたたかいをくりひろげなければならないと指摘しながら、すべての小部隊と武装グループは敵の後方攪乱と大衆政治宣伝工作に力をそそぐようにと指示した。

こうして、小部隊と武装グループの活動はいっそう活発に展開された。人民革命軍の小部隊および武装グループは敵軍にたいする奇襲作戦を展開するかたわら、地下活動によって革命組織を復旧する活動もくりひろげた。

崔賢同志が指揮する小部隊は、敵軍の駐屯地域である汪清県の羅子溝地域と東寧県のソ・中国境地帯にある老黒山などを遊動しながら、いたるところで敵の守備隊と警察署、憲兵隊などを奇襲し、軍需倉庫に火を放ち、敵が強制的にひらいた大衆集会にまぎれこんで群衆の面前で敵を処断するなど、果敢なたたかいで敵のど肝をぬいた。この小部隊を数百名におよぶ兵力だと誤認した敵は、大「討伐隊」をくりだして執拗に追撃してきた。

小部隊は各地で敵の駐屯基地と重要警備地点、それに軍用列車を奇襲し、道路と橋梁を破壊し、軍事情報を収集

するなど大胆なたたかいをくりひろげた。武装グループも白昼、国境警備詰所を襲撃して敵を処断し、各種の武器をろ獲したり、走る列車のなかで敵を射殺して乗客に反日宣伝をおこなったあと、列車からとびおりるなど機敏に活動した。

小部隊の奇襲活動は北満州の各地でも活発にくりひろげられた。一九四〇年の秋、崔庸健同志がひきいる小部隊は牡佳線の煙筒磖子付近で敵軍用列車を転覆させ、鉄道を破壊し、長期間にわたって敵の鉄道輸送をマヒ状態におとしいれた。

一九四一年十二月、姜健(カンゴン)同志がひきいる小部隊は牡佳線新家店(シンガチヨム)付近で、日本軍将校をのせた二台の客車と装甲車および揮発油などを満載した敵軍用列車を完全に転覆させた。

将軍の方針にしたがって、各地には政治工作と偵察を目的とする武装グループが派遣された。武装グループ工作員は労働者、農民、事務員、失業者、日雇労務者などに変装して群衆のなかに深くはいり、極秘のうちに革命組織をつくりあげて大衆を結集した。

一九四一年の下半期、四十余名からなる一小部隊はきびしい国境警備網を突破し、茂山地区の元祠洞地方へ進出した。その後この小部隊は茂山地区と雄基(ウンギ)にアジトをさだめ、そこでふたたびいくつかの武装グループにわかれて各界各層の人民大衆のなかで広はんな政治工作をくりひろげた。

またほかの武装グループは雄基、羅津、清津、羅南、咸興などをはじめ国内各地に派遣され積極的に活動した。

一九四二年の春から冬のはじめにかけて、金一同志がひきいる政治工作小部隊は延吉県天宝山一帯に臨時根拠地をもうけ、三名ないし五名からなるいくつかの武装グループにわかれて琿春、汪清、延吉、和龍、安図などの各県と朝鮮北部地帯で活動しながら、おもに祖国光復会をはじめとする革命団体の復旧をおこなった。武装グループは祖国光復会の会員と緊密な連係をたもち、かれらから地方の情況と敵情をくわしくききだす一方、かれらに当面の

活動方針をさししめした。

当時、和龍開山屯(ケサントウン)地方で活動していた一グループは青年たちを反日反戦闘争にたちあがらせるため、敵の「青年訓練所」に根をおろし、たくみな方法で解放直前まで地下活動をつづけた。

しかし敵の弾圧と警戒がきびしかったため、政治工作はきわめて大きな困難をともなった。したがって政治工作グループは、非常に不利な条件のもとで活動しなければならなかった。もっとも、いたるところで敵の警備と密偵が目を光らせ、三人集まっても監視されるような時期であったため、これは当然のことかも知れなかった。ひどいときには、むかしの同志を信じてたずねていくと逆に敵に密告されたりするようなこともあった。しかしグループのメンバーはつねに大胆で沈着に行動し、とくに人民大衆をたすけ、人民から愛され、その協力によってあらゆる難関を克服していった。

将軍が日ごろから隊員に教えていたように、いついかなる環境のもとでも徹頭徹尾、人民大衆に依拠することは革命軍部隊の原則であり信条であった。

一九四二年、金一同志がひきいる政治工作グループが細鱗河(セリンハ)小北洞(ソプクドン)でかつての同志と連係をとり、そこへむかって出発した直後のことであった。不純分子の密告によって政治工作グループの行方を知った敵の警察は、農民を強制的に動員し、猟犬までくりだしてあたり一帯をくまなく捜索しはじめた。グループ員は身動きできなくなった。危機がせまった。ところが敵にかりだされてきた農民の多くは、グループ員を発見してもすぐ目で合図をし、そのまま知らぬ顔をしてたち去ることがしばしばだった。かれらはこうして危機を脱することができたのである。

グループ員はふりつづく雨と不眠不休の活動で疲れきっていた。それに栄養不足がかさなり、目にみえて衰弱していた。そのうち、一人の隊員が病にたおれた。肉類がよかろうということで、二人の隊員がさっそく村へおりていった。そしてある農民から百二十円で牛を一頭買った(当時は八十円もだせば牛一頭が買えた)。相手が遊撃隊員であ

ることを知ったその農民は、八十円でいいといってそれ以上はうけとろうとしなかった。しかし二人の隊員はきかなかった。貧しいこの農民に迷惑をかけてはいけないと百二十円をむりやりに農民の手にわたした。隊員たちにとっては金のことよりも農民の身のうえの方が心配だった。遊撃隊に牛を売ったことが敵に知れれば、農民の命がなくなることを隊員たちはよく知っていた。隊員たちは農民に、もしだれかにきかれたときは遊撃隊に売ったといわず、川辺で草をたべさせているうちにいなくなってしまったというようにいいきかせた。

農民はそのとおりにした。家族のものたちにもだまっていた。ところがその農民の義弟が牛をさがすのだといって山のなかを歩きまわり、夜になって家に帰る途中、敵の銃弾にあたって死亡してしまった。うす暗い山のなかで人影を見つけた敵は、遊撃隊の工作員にちがいないと思い、あわてて発砲したのだった。農民は弟の死を悲しみながらも、二人の隊員のことを妹にもうちあけずに、解放の日までかたく秘密を守ったという。

このように、武装グループは各地で人民のあたたかい支援をうけながら、たゆみなく活動した。

人民革命軍の小部隊と武装グループは将軍の方針にしたがい、奇襲戦や政治工作とともに偵察活動も活発にすすめていった。

小部隊活動は第二次世界大戦の転換期であった一九四三年以後、さらに活発となった。最後の決戦が近づくにつれ、武装グループの国内進出はいっそうひんぱんとなった。

朝鮮が解放される日まで、数多くの武装グループは数十回も豆満江をわたって活動をつづけた。かれらは咸鏡北道一帯はもちろんのこと、遠く元山、ピョンヤン、ソウル、仁川、釜山など、じつに朝鮮の津々浦々まで進出した。

人民はかれらを希望と救いの使節のように歓迎し、滅亡寸前の日本帝国主義者はこのうえなくかれらをおそれ

た。敵は武装グループの国内浸透がいっそうひんぱんになると、夜なかに火事にでもあったようにあわてふためき、「防諜体系の完成」という名のもとに国境一帯や内陸の都市と農村、さらに山林地帯まで厳重な警戒網をしいた。遊撃隊武装グループの国内活動は日ましにむずかしくなっていった。しかし将軍は、きたるべき最後の決戦に対処し、人民革命軍の軍事、政治活動をいっそう強化するため、難関を打開する具体的な対策をたてて国内の奥深くまで数多くのグループをひきつづきおくりこんだ。

グループは清津、元山、ピョンヤンなどで敵軍の配置情況と軍事施設などを偵察した。またあるグループは、羅津、雄基の港湾一帯と阿吾地、富居、洛山などで、敵の要塞とその周辺に駐屯している日本軍隊の配置状態などをさぐりながら地下政治工作を活発にくりひろげた。

一九四四年六月、人民革命軍の一グループは、まずピョンヤンを目ざしてひそかに豆満江をわたり国内に進出した。咸鏡北道の慶源をへて二十五日ぶりに西浦についた同グループは、日が暮れてから西ピョンヤン操車場をとおり、普通江にそってピョンヤン市内にはいっていった。かれらは平川里軍需工場やピョンヤン駅などを偵察した。ピョンヤン市内の各要所と、東ピョンヤン飛行場、つづいて美林里日本軍兵舎とピョンヤン周辺の軍事施設いっさいを偵察し、兵舎の石垣のしたにかくれては、日本軍兵士の火炎放射器訓練やトーチカ攻撃演習の場面を撮影し、部隊の番号その他をさぐりだしてからピョンヤンを脱出した。かれらはその足で清津にたちより、市内と港の海軍要塞および施設をしらべ、会寧では飛行場とその他の軍事施設や一般情勢をしらべて無事に本隊に帰ってきた。

大胆で機敏なグループのメンバーは、このように任務をりっぱに遂行した。その成果の一つ一つは、ことばではいいつくせない困難とたたかってかちとられたものであり、多くの貴重な生命の代価でもあった。

かれらのなかには偵察の帰途、敵弾をうけて凍りついた国境の河を血に染め、はってわたった隊員もいた。また重傷の身で山をこえる途中、名もない深い谷間で息たえた隊員もいた。

金赫哲（キムヒョクチョル）同志は一九四三年のはじめ、国内でグループ活動にたずさわりながら悲壮な最後をとげた一人である。かれは自分で集めた敵の資料を同志に託して先だたせたのち、もう一つの任務をはたして単身帰路についたときはあたり一面、ふりしきる雪ですっかりおおわれていた。傷つき、飢え、何日間も敵の追撃をかわしながら山のなかをさまよっていたかれは、雪の深い森にまよいこんでしまった。そしてかれは、とうとう雪のうえにうつぶせになったまま息をひきとった。昼となく夜となく、雪は死体のうえにふりしきった。そして吹雪は、そのうえに大きな雪の墓をつくりあげた。

雪もやんだ初春のある日、豆満江の岸辺へ枯木をとりにきた一人の農民が、雪のなかで静かに眠っている金赫哲同志の死体を発見した。かれの手にはしっかりと拳銃がにぎられており、口には最後まで飢えとたたかったことをしめすかのように、白樺の芽が一つくわえられていた。そして、そのふところにも白樺の芽がひとにぎりほどはいっていた。

知らせをきいて農民たちが集まってきた。祖国の解放のためにたたかい、尊い犠牲となった遊撃隊員の死体であることがわかると、かれらは声をあげて泣き悲しんだ。

農民たちは、敵にさとられないように布地を買ってきて死体をくるみ、日あたりのよい場所に埋葬した。そして毎年、寒食の日（冬至から数えて百五日目をいい、火をつかわず冷い料理で食事をした。またこの日は先祖の墓参りをするならわしがある）やお盆になると、供物をそなえて闘士の冥福をいのった。

朝鮮人民が解放のよろこびにわく日までには、じつに、こうした犠牲が数多くはらわれた。

このように、だれもが英雄であった革命軍小部隊員の輝かしい活動は、敵を滅亡に追いやる最後の決戦に大きく貢献した。

金日成将軍は小部隊と武装グループ活動とともに、人民革命軍隊員をマルクス・レーニン主義理論と現代的な軍

事科学で武装させ、より有能な軍事政治幹部を育成するために心血をそそいだ。

この賢明な措置は、革命の大事変をむかえるための当面の課題であったばかりでなく、解放後の祖国で遂行すべき革命をも考慮にいれた偉大な構想——、すなわち継続革命思想の実現であった。

一九四一年の三月のはじめ、将軍は人民革命軍病院の院長であった李鳳洙同志に会ってつぎのように語った。

「病院の人たちの苦労は、なみたいていのものではなかった。しかしまだ革命は終わっていないし、ますます困難になってきている。もちろん日本帝国主義がまもなく滅び、民族解放の日が近づいていることだけはたしかである。しかし日本帝国主義が滅亡するからといって、また民族解放が達成されるからといって、われわれの革命が終わるわけではない。朝鮮で日本帝国主義をうちたおしたあとは、数十年間も日本帝国主義に踏みにじられた祖国の地に、人民がしあわせに暮らせる新しい社会を建設しなければならないし、またそれを帝国主義者の侵略からしっかりと守らなければならない。これも決してなまやさしいことではない。またわれわれ共産主義者は、自分の国にりっぱな社会を築いたからといって革命が終わったと考えるなら、それは誤りである。われわれの革命は地球上で搾取階級の最後の一人をうちたおすまでつづけられなければならない。われわれはそれを覚悟して、いまからその準備をととのえなければならないのだ」

将軍は祖国解放のための革命の大事変が近づくにつれ、各部門の幹部育成活動をいっそう強力におしすすめた。

将軍がさししめした方針と措置によって最後の決戦の準備がなされるとともに、解放後における軍事建設の基礎が築かれていった。朝鮮人民革命軍隊員は現代的な先進軍事科学知識でかたく武装された軍事幹部に育ち、正規の軍隊をつくり、これを指揮する経験と能力をもつようになった。

この時期にはまた、マルクス・レーニン主義党創建の準備活動がいっそう大きく前進した。党創建の準備は、幹部にたいする再教育活動を基本としてすすめられた。人民革命軍隊員は将軍の指導のもとにマルクス・レーニン主

義理論をより深く研究し、各自の思想および理論的準備をいっそうととのえていった。

小部隊活動は、それまでのながい歳月にわたってつみかさねられた経験と人民革命軍隊員の思想的鍛練の程度を点検し、それを強固にし、さらに完成させていくうえにおいて重要な契機となった。かれらは小部隊活動によって高度に洗練された組織的手腕をみがき、各界各層の人民大衆との活動において豊富な経験をつんだのである。

人民革命軍隊員は革命的理論で徹底的に武装し、共産主義者としての気高い品性をもつようになった。

こうして、やがて創建されるマルクス・レーニン主義党の基本的な骨幹となる共産主義者たちが、思想、理論的にも、実践的にもいっそうたのもしく育っていた。

あの困難な時期に、こうした中核部隊が確固と保存され育成されたからこそ、解放後、党と、国家と、軍隊の各部門をになう柱がかたちづくられたのである。これはいうまでもなく、朝鮮革命の発展にとってかぎりなく貴重な元手となった。

3　あたたかい愛情、かぎりない信頼

朝鮮人民革命軍が小部隊活動を展開していたときは、じつにきびしい試練の時期であった。

満州の野と山は「討伐隊」でうめつくされていた。敵は四方に捜索網をはりめぐらし死にもの狂いで遊撃隊にたいする「討伐」をおこなう一方、「帰順」と「投降」を勧告するビラをまきちらした。そのうえ人民革命軍には食糧難までかさなり、闘争の困難さは形容できないほどであった。

しかしこのような状態における小部隊活動は、隊員たちの思想的鍛練と革命的修養の程度をためす一つの点検の場ともいえた。

幼い隊員をはげます金日成将軍

将軍は困難がかさなるにつれ、ながい歳月にわたって育成し、生死苦楽をともにしてきた隊員たちをいっそう深く信頼した。そしてかれらに熱い愛をそそぎ、心をくだきながら、革命的同志愛で隊列の団結をはかっていった。

将軍は困難な環境のなかでも、つねに隊員たちの健康に注意をはらった。

敵が策動する状況のもとでも、後方病院をつくって負傷者や病弱者を治療させ、医薬品を手にいれるため敵の兵営を襲撃したり、なんども後方工作を組織した。栄養のある食物は、まず患者と病弱者におくるのを忘れなかったし、自身にくばられた食糧や医薬品、衣服や靴でも、すすんで隊員にわけあたえたりした。

これは武装闘争の初期から、将軍が堅持してきた日常生活の態度であった。苦難の行軍をはじめ、たびかさなる強行軍と食糧難などにより、将軍も目に見えて衰弱していたにもかかわらず、一人の隊員が山奥で掘ってきた一本の山

人蔘を一年以上も伝令兵の背のうのなかにしまったまま、自分でたべようとはしなかった。
小部隊活動に移る少しまえの一九四〇年春のある日、将軍は隊員たちに鶏をもってこさせ、それを土鍋にいれて水だきをはじめた。将軍の健康を案じていた隊員たちは、きょうこそは例の山人蔘をたべてくださるにちがいないとよろこんでいた。ところが将軍は、その貴重な水だきを安図県の韶湯溝(ソダンコウ)付近の姚灘(ヨダン)で病んでいたある連隊長におくったのである。
将軍にとって、このような例は枚挙にいとまがないほど多い。たとえば小部隊活動の困難な時期、真冬に地方工作にでかけた隊員の帰りがおそいと、将軍はお湯をわかして自分にくばられたはったい粉をとかし、夜がふけるまで待ちつづけたりした。将軍は全隊員の親であった。
将軍は、指揮官はいつも部下を肉親のように愛さなければならないとのべながら、つぎのように教えた。
「自分が寒くてひもじいときはもちろんのこと、あたたかくて腹いっぱいのときでも、隊員は寒くてひもじい思いをしているかも知れないと、いつも考えなくてはならない。そのようにしても、なおかつ、かれらの悩みをすべて知りつくせないことがあるのだ」
こうした将軍の配慮と愛情は、遠くで活動している小部隊へもくまなくゆきわたっていった。
一九四〇年の秋、各地に小部隊を派遣していた将軍が伝令兵と機関銃班員だけをひきいて、敵の集中する和龍一帯で活動していたころのことである。
将軍は小部隊の安否を気づかって、各地に派遣した通信員の帰りを夜も寝ずに待っていた。そうしたある日、ある小部隊に派遣された連絡員が敵の「討伐隊」に射殺されてしまった。しかし将軍はひきつづき、その小部隊の行方をさがしだそうと各地に連絡員を派遣したが、ついにさがしだすことができなかった。幼いわが子の帰りを待つ母親のように、将軍の心痛は深まるばかりであった。

しばらくして、部隊は車廠子の野営地を出発することになった。将軍は隊員たちに、たき火をした場所へ食糧と新しい冬服をうめさせてからこういった。

「きっと、みんな帰ってくるにちがいない。小部隊活動で衣服はぼろぼろだろうし、どんなにひもじい思いをしていることだろう」

それればかりではなかった。車廠子を出発したある日、部隊は大きな鹿を一頭つかまえた。将軍はその肉を隊員たちと少しだけたべたあと、のこりを火で焼き、粉にしてから紙袋にわけてつつませた。そして隊員たちに一袋ずつわけあたえ、五十個の袋だけはのこしておいた。将軍は考えこむ表情で筆をとると、連絡がとだえた小部隊員たちの名前を一つ一つの袋に書いていった。隊員たちの名前を刻みこむように書いている将軍の顔には、必ずかれらは帰ってくるという確信と慈愛にみちていた。

五十名の名前を全部書き終えると、将軍は、それをよく保管しておいて小部隊に出会ったらわたそうと隊員たちにいった。

このような将軍が身近かにいたからこそ、隊員たちは死をもおそれず、将軍のもとにはってでも必ず帰ってくるのであり、そそりたつ崖をよじのぼり、荒れ狂う激流をもおしわけてもどってくるのだった。

かたわらで、五十個の袋を見つめていた隊員たちの目に涙があふれた。それは、無言のうちに隊員たちを革命的義務感で教育し、思想、意識的にかたく団結させる精神的食糧となった。

将軍はこのように隊員たちを信じ、いつくしみながら、いつもかれらに困難な試練にうちかつよう革命の勝利を確信し、革命の志操を最後まで守り、犠牲的にたたかうように教えた。

将軍は隊員たちにつぎのようにのべた。

「共産主義者は革命のために自己の全精力をかたむけてたたかい、そのたたかいのなかに最大のよろこびと誇り

を感じとるものだ。だから革命がいかに困難であろうと、革命家はいつも明朗で、快活で、情熱にみちあふれているのだ。共産主義の赤旗をかかげ、たたかってたおれることは革命家の最大の栄光である。まえの人がたおれれば、そのつぎの同志が旗をにぎってたたかいつづけるのだ。こうしてこそ革命は最後の勝利をかちとるのである」

小部隊活動の前夜であった一九四〇年五月、安図県車廠子付近でむかえた五・一節は、ひたすら革命のために生き、たたかいつづける将軍の高潔な品性と信念とをはっきりとうきぼりにして見せた。このときは最後にわけあった塩水も、とうもろこしの粒も、すでにきれてしまった苦しい時期であった。隊員たちは付近の小川で蛙をつかまえた。蛙料理で祝日の「宴」をはろうというのである。こうして隊員たちは明日の勝利と希望にみちた楽天的な気分で、どんな山海の珍味にもまさる蛙料理に舌つづみをうった。

その日の夕暮れどき、将軍は隊員とかがり火をかこみ、美しい山河と、かぎりなくゆたかな地下資源をもつ祖国について、また、そのすべてを日本の侵略者に奪われた憤りについて、さらに困難な革命闘争ののちにおとずれるであろう感激的で栄光にみちた勝利について、まるで詩でもよみあげるように語りつづけた。

明るい未来について語りながら、将軍はつぎのようにつけくわえた。

「われわれの困難なたたかいは必ず、きょうの蛙料理を大同江のぼら料理にかえるであろう。これは、うたがうことのできない一つの真理だ」

この一言で、隊員たちは革命の未来を生き生きと感じとった。将軍はまたつぎのようにつづけた。

「人間の一生は、ながいといってもせいぜい六十年前後であろう。このながくもない一生を清く生きることができず、目先のちっぽけな利益に目がくらんで自己の良心を売り、祖国と人民にそむいた卑怯者をどうしてあわれまずにいられよう。わが国の素朴な人びとは、むかしから、一日を生きるにも良心的に生きることをほまれとしてき

た。われわれの良心とは、祖国を解放するための愛国的良心、労働者階級の社会的解放のための不撓不屈の闘志、おそれを知らぬ大胆さと剛毅さ、あらゆる困難にうちかってゆく忍耐力、英雄性などの集中的表現であり、まさにこれを革命的良心というのである。われわれは真の朝鮮人民の良心を守り、つねにうるわしいわが祖国を血で守りぬかなければならない」

このことばは、将軍の革命的意志と革命にたいする信念をそのまましめすものであった。

将軍は、革命の志操を最後までつらぬきとおすこと、これがすなわち革命家の本分であり、なによりの義務であるとつねに教えた。

将軍のこの信条は、もっとも科学的で、しかも不敗の思想であるマルクス・レーニン主義と革命の勝利にたいする確信にもとづいており、革命にたいする強い責任感と民族的な任務にたいする自覚にもとづいていた。

金日成将軍の気高い徳性と日常的な教育こそ、勇猛をとどろかす遊撃隊員の不敗の力となったのであり、革命のためにすべてをささげてたたかう、かれらの不屈の革命精神の源泉ともなったのである。

このような将軍が革命の先頭にたっていたからこそ、抗日遊撃隊は前途にたちはだかるいかなる難関と困難にもひるまず、ひたすら将軍を慕い、革命家の貴い良心と革命的義理を最後まで守りとおした。司令部からどんなに遠くはなれていても、また長期間、司令部との連絡がとだえ、その所在すら知るすべもないまったくの孤立無援の状態にあるときでも、かれらはひたすら司令部をさがしもとめ、万難をのりこえて必ずなつかしい将軍のもとに帰ってきたのである。

かれらは、「共産主義者は深い山のなかであろうと、絶海の孤島であろうと、革命のために生き、最後までたたかわなくてはならない」とのべた将軍の教えを胸深く刻み、いつどこででも、これを忠実に実践した。

小部隊活動は、まさにこのような英雄的なたたかいの典型であった。

将軍が車廠子の奥の野営地に食糧と新しい軍服をうめ、五十個の食糧袋をつくって保管しながら待ちあぐんだ例の小部隊は、一九四〇年の冬のはじめ、ひたすら革命の勝利にたいする信念と将軍のもとに一刻も早く帰りたいという一念でもって、あらゆる難関をのりこえながら司令部をさがして歩いていた。はげしい吹雪と、「討伐隊」や密偵どもがたちはだかる道のりを行軍するかれらの苦しみは、形容できないほどであった。だがかれらは、ひるむことを知らなかった。司令部へ、将軍のもとへ、一刻も早くたどりつこうという一念が気力のつきたかれらをささえ、はげましたのである。

かれらはやっと車廠子の奥地にたどりつき、ついに司令部の野営の跡をさがしあてた。地中深くうずまっていた食糧二かますと新しい綿いれの軍服を見つけだした隊員たちは、それを胸にしっかりとだき、感激にむせびながら将軍の名をなんどもよびつづけた。かれらはふるいたつ勇気をもってふたたび司令部をさがしもとめ、そこを出発した。

かれらは途中で同じ遊撃隊の一部隊とめぐり会った。小部隊の責任者であった連隊長は、その小部隊に隊員をあずけ、数名だけをつれて司令部をさがすことにした。

連隊長はからだの頑丈な五名の隊員をつれて出発した。道は依然としてけわしかった。ゆく先ざきに敵がむらがり、投降をすすめるビラがはられていた。寒さと飢えにくわえて、すさまじいほどの敵の追撃が、疲れきったかれらをいっそう苦しめた。

しかし、不撓不屈の革命的闘志と熱い同志愛でもって、かれらはこれらの難関をりっぱにのりこえていった。

そうしたある日、飢えとたたかいながら和龍県の奥地深く雪をかきわけてすすんでいたかれらは、不意に前後から敵におそわれた。かれらは最後の弾丸がつきるまで勇敢にたたかって死のうと悲壮な決意をした。しかしつぎの瞬間かれらは、司令部にたどりつくまでは決して死んではならないと思いなおした。そして、どんなことがあって

も生きぬき、必ず司令部をさがしだす決心をかためたかれらは勇気をふるってたちあがった。

連隊長はいまきた道をとぶようにとってかえすと、高さ百メートルもある断崖からころがりおりた。隊員たちも連隊長のあとにつづいた。鷹さえひるむというけわしい絶壁を、かれらは血だるまとなってころがった。奇跡的にたすかったかれらは、なおもひるまず、むかい側の山の尾根へとよじのぼり敵情をうかがった。こうしたことも知らずに前後からせまってきた敵は、狂気のように同士うちをまじえたのち、暗くなってからひきあげた。

隊員たちは、たとうにもたちあがれなかった。かれらはよこたわったまま夜空にきらめく星と龍井(リョンジョン)の街の方向で光る灯りをながめながら物思いにふけった。これまでのながいたたかいと困難な革命について考えた。やがてかれらは、将軍の真の戦士として革命のため最後までたたかう決意を新たにし、気力をふりしぼってたちあがった。そしてかれらは、数多くの危険をのりこえながら司令部をさがしつづけた。

ある日のことだった。延吉県大蒐溝(ダビゴウ)付近の大きな道路わきで隊員の一人が急にけいれんをおこし、身動きができなくなってしまった。近くには大きな「集団部落」があるうえに、密林のなかでもない幹線道路のそばでの出来事だったため、隊員たちはすっかりあわてた。かれをつれて行軍をすれば全員が危険にさらされるのは必定であり、かといって同志をおきざりにしてゆくこともできなかった。これを察したその隊員は、革命の任務がより重要であるから、自分をここにおいて早く司令部をさがしにいってくれとたのんだ。

連隊長は、かれをだきしめたまま泣いた。

「死ぬときはいっしょに死のう！　きみをのこしてゆけるものか！」

隊員たちの心情とて同じだった。革命闘争のなかで生死苦楽をともにし、はげまし、たすけあってきた同志愛がかれらをひきはなさなかった。

かれらは、かわるがわる自分の体温でその隊員をぬくめ、枯れた芝生を集めてからだのしたにしいてやり、上衣

をぬいでかぶせてやりもした。またかれの手足を交代でもんでやり、敵に見つからぬよう腰をかがめて歩きながら、おちた枯れ木をひろってきては火をたき、おもゆをつくってたべさせるなど寝ずの看病をつづけた。真心こもった同志たちのあたたかい愛情によって翌日、かれは足を動かせるようになった。かれはよみがえったのだ。生きていっしょに将軍のもとへゆけることをよろこび、かれらはうれし泣きに泣いた。

日が暮れると、かれらはまた苦難の行軍をつづけた。こうしてかれらは、敵がひしめく延吉、汪清、琿春の遠い道のりを二か月も歩き、はいずり、あらゆる困難とたたかって、ついに司令部にたどりつくことができたのである。

かれらがこのように、おどろくばかりの同志愛と英雄性を発揮できたのは、金日成将軍から、この世にまたとないあたたかい愛情と教育をうけてきたからであった。

将軍に教育された抗日遊撃隊員は、不幸にして敵にとらわれ、牢獄につながれても、また絞首台にのぼるようなことがあっても、朝鮮革命の陣頭には金日成将軍がたっているのだというかぎりない誇りと自負心をいだき、将軍の戦士として、朝鮮の真の革命家として最後まで革命の節操を守り、敵と勇敢にたたかったのである。

抗日遊撃隊員馬東熙（マドンヒ）同志は将軍の指示をうけ、国内にはいって工作をしていたとき敵にとらえられ、言語に絶する拷問をうけた。かれは、うわごとにでも組織の秘密をもらしてはならないと、みずから舌をかみ切って若い命を断った。まるで火のかたまりのように革命の情熱をたぎらしていたかれは、生きているときは勇敢に敵をうちたおし、死んでは革命と組織を守りとおしたのである。

将軍の忠実な戦士であり、不屈の共産主義者であった権永壁同志もそうであった。かれが肌身はなさずもち歩いていた手帳には、つぎのように書かれていた。

「わたしを生んでくれた祖国は母であり、革命戦線でわたしを教え、育ててくれた金日成同志はわたしの恩師で

あり、父である。わたしはまたとないこの父と母に最後まで忠誠をつくすであろう」

権永壁同志は革命的な闘志をもって、将軍の意志と信念のままにたたかうことを自分の本分とし、栄誉としていた。

将軍の指示により長白県で祖国光復会の組織活動をりっぱになしとげたかれは、敵にとらえられ、あらゆる残酷な拷問をうけながらも革命的節操をまげなかったばかりでなく、法廷ではかえって日本帝国主義の滅亡を声高らかに宣言した。ソウル市西大門刑務所で獄中闘争をつづけたかれは、解放を目前にした一九四五年三月十日、絞首台にのぼりながらも金日成将軍の戦士であることを無上の誇りとした。

将軍によって共産主義闘士にて育てられた朴吉松（パクキルソン）支隊長も、革命的な楽観主義の持ち主であった。かれは戦闘中、敵の手榴弾の破片にあたって片目を失いながらも、「わたしにはまだ片目がのこっている。わたしはこの必臓が脈うつかぎり、闘争の隊伍から一歩もしりぞきはしない」といいながら、隊員たちの勇気をふるいたたせた。

かれは密営で負傷した目を治療しながら、隊員たちに革命の勝利にたいする信念をいだかせ、将軍の忠実な戦士にならなくてはならないと教えた。こうして肉体的苦痛にうちかち、ふたたびたたかいの場にたったかれは、数多くの戦闘を指揮しながら敵をつぎつぎとうちたおしていった。

一九四三年一月、かれは敵にかこまれた自分の部隊を救出しようとすすんで後衛をひきうけ、勇敢にたたかったがついに敵にとらわれてしまった。

しかし敵がどんな拷問をくわえても、かれを屈服させることはできなかった。

かれはこうして、革命のために二十六歳のみじかい生涯を炎のように生きぬき、そしてこの世を去ったが、しかしかれは、自分を共産主義者として育ててくれた金日成将軍のあたたかい愛情のなかで、最後までたたかえずに生

涯を終えることをなによりも心のこりとした。

絞首台にのぼったかれは最後の瞬間まで、「共産主義は永遠の青春」であると叫んで敵をふるえあがらせた。

抗日遊撃隊には、ながい武装闘争の日々をつうじて、命をかけて金日成将軍とその司令部を守り、革命の節操をあくまで頑強に守りぬいた女性隊員も多かった。

熱烈な共産主義者であった金貞淑同志は、そうした女性遊撃隊員の一人であった。幼いころ父母を失い、児童団の生活をへて遊撃隊に入隊した彼女は、ひたすら革命と革命の領袖のために献身的に奮闘した。将軍の指示をうけて長白県で工作中敵にとらわれ、死線をさまよっていたときも最後まで革命の秘密を守りとおし、手元にあった二円の金を農民に託して革命資金にと組織へおくりとどけた。彼女はその後さいわいにも組織によって救出された。

司令部の炊事隊員であった彼女は、苦難にみちた血みどろのたたかいの日々にも、砲火と吹雪とたたかいながら司令部の食事を確保し、革命の指揮部を命をもって守りとおした。

ある日、将軍の指揮のもとに部隊が行軍していたとき、五、六名の敵が葦をかきわけて近より、将軍にねらいをさだめた。まったく危険な一瞬であった。このとき金貞淑同志はすばやく自分の身で将軍をかばい、拳銃で敵兵をうちたおした。いち早く将軍も二番目の敵兵をうちたおした。二挺の拳銃がつづけざまに火を吹き、敵を一人のこらず掃討してしまった。しかしこのような危険にさらされたのは一度や二度ではなかった。そのつど金貞淑同志は憤然とたちあがり、命をなげうって革命の指揮部を守ったのである。

抗日遊撃隊の女性隊員である崔喜淑（チェヒスク）同志は、敵にとらわれて両眼をえぐりとられながらも、「わたしにはいま目がない。しかし、わたしには革命の勝利が見える！　三千万人民が万歳を叫び、解放をつげるその日がはっきり見える！」と絶叫しながら息をひきとった。

金日成将軍と同じ思想、同じ意志で生き、将軍と同じ信念でたたかったのはかれらだけではなかった。抗日遊撃

隊員すべてがそうであったし、かれらすべてが不撓不屈の朝鮮の共産主義者――革命闘士たちであった。

将軍のいつくしみと信頼を肝に銘じていたがゆえに、かれらは絶海の孤島のなかでも革命の勝利を信じて最後までたたかったし、零下四十度のきびしい冬、吹雪のなかでも豆満江を泳いでわたり、司令部をさがしもとめたのであった。将軍の教えをいつも胸深く刻んでいたがゆえに、かれらはいかに困難な逆境のなかでも将軍を慕い、一瞬たりとも闘争の手をゆるめようとはしなかったのである。

抗日遊撃隊の小部隊活動は、革命とその指導者にたいしてかぎりなく忠実な朝鮮共産主義者の気高い精神をひれきしたし、革命の勝利にたいする確信と同志にたいする革命的義理によって、艱難辛苦にうちかった抗日遊撃隊員たちの高貴な革命家的品性をいかんなくしめしたものであった。

じつに、抗日遊撃隊員たちの革命と指導者にたいするかぎりない忠実性――、それは敵のいかなる最新兵器をもってしても、くらべることのできない不敗の威力をもつ最大の武器であった。

日本帝国主義の警察雑誌『咸南警友』は、抗日遊撃隊にたいしてつぎのように書いている。

「秩序整然として、しかも大胆不敵な行動をとる原動力はどこにあるのか。それは内部的な、精神的なものによって説明せねばならぬ。これすなわち、共産軍の結合の核心となった指導精神の他にない。思うに、なんのために野に臥し、山に眠り、終始気候の変遷と食糧の欠乏に苦悩しながら、自分の生命を危険から危険へとひきずってゆく必要があるのか。この疑問の解答のみが、その本質を明白にする。その解答は簡単である。それは、かれらなりの信念があるからだ。この信念はつねに、民族の独立と日本帝国主義打倒を綱領の第一にかかげ、決死的行動をとることを誇りに思い、愛国志士として自認しているところにある。この自負心こそ、留意しなければならない点である」

この告白のなかに、共産主義の威力におそれをなす敵の悲鳴がはっきりとききとれる。共産主義思想――、これ

は刀で切りさくことも、大砲でうちくだくことも、鉄鎖でしばりつけることもできないものである。なぜなら、それは人類の良心であり、知恵であり、もっとも美しい希望であるからだ。
日本帝国主義者も、抗日遊撃隊の思想はなにをもってしても折り曲げることができないということを知っていた。しかしかれらは、その偉大な思想と気高い精神を育てた根源を見ぬく目をもたなかった。かれらはこの高潔な根底に、朝鮮民族の指導者金日成将軍のマルクス・レーニン主義を基礎にした偉大な思想とその信念とがとうとうと流れているのを見ることができなかったし、同志をかぎりなく愛し信頼する将軍に、無限の忠誠をつくそうとする遊撃隊員たちの熱火のような赤い心を理解することができなかった。
この根本的なものにたいする無知と挑戦こそ、とりもなおさず、かれらを悪名高い「大日本帝国」とともに滅亡のどん底へとつきおとした決定的な要因の一つであった。
抗日遊撃隊員たちの革命精神は、こんにち、朝鮮人民の胸のなかに強く燃えつづけている。
全世界の人民のまえで、アメリカ帝国主義をひざまずかせた祖国解放戦争における朝鮮人民の偉大な勝利も、自力更生と千里馬の勢いですすむ北半部の壮大な建設も、ひたすら革命に献身する金日成首相に、かぎりなく忠実であろうと誓う気高い革命精神が生みだした貴重な結実なのである。

4　三千万は将軍につづく

金日成将軍の存在それ自体と、将軍が指導する朝鮮人民革命軍部隊の活発な政治、軍事的活動は、朝鮮人民の胸のなかに消し去ることのできない反日反戦の炎を燃えあがらせた。
人民大衆は、金日成将軍の指導のもとにいたるところで敵をうちくだき、日本の侵略者たちをふるえあがらせて

いる朝鮮人民革命軍の縦横無尽な闘争をかぎりないよろこびと興奮をもって見守った。人民大衆は日本帝国主義の滅亡がさけられないものであることを確信し、朝鮮人民の最後の勝利にたいする信念をいっそう強くした。

ささいなことをしただけでも日本の官憲から残忍な迫害をうけねばならなかった人民にとって、金日成将軍の部下がどこかにあらわれたといううわさをきくことは、つゆ空に陽がさしたようによろこばしい出来事であった。それはきわめて当然であった。一日の苦しみが千年にも万年にも思えるほどさいなまれていた朝鮮人民にとって、すべてをかけて信じたのはただ金日成将軍その人であったし、将軍が指導する人民革命軍の勝利であったからである。金日成将軍の名は、まさに暗やみのなかで前途をあかあかと照らすのろしであり、暁をよぶ太陽であった。

だからこそ遊撃隊員から、「金日成将軍はご健在です。いま多くの隊員たちは、将軍の教えにしたがって解放をむかえる準備を着々とすすめています」という、二言、三言のみじかいことばをきいただけで、人びとのよろこびようはこのうえもなかった。人民革命軍の活動にはげまされて胸をおどらせながら、人びとは将軍の教えるとおりに敵を混乱におとしいれたり、かれらの仕事をぶちこわしたりして、なにか解放に役だつことをしないではいられなかった。

このような確信をもちつづけていたからこそ、日本帝国主義のファッショ的暴圧が絶頂にたっした困難な条件のもとでも、朝鮮人民は各地で敵と生死を決するたたかいを勇敢に展開したのである。

ソウル、ピョンヤン、清津、興南、釜山をはじめ各地の主要産業都市の工場や鴨緑江沿岸の水力発電所の工事場などでは、ストライキやサボタージュがひっきりなしにおこった。

一九四二年七月、興南肥料工場の二千余名の労働者たちは、日本帝国主義のファッショ的暴圧をはねのけて力強いストを敢行し、ときを同じくして咸興片倉製糸工場の女性労働者たちはハンストをくりひろげ、日本帝国主義の戦時生産に大きな打撃をあたえた。各地の軍需工場や飛行場などでは爆発と火災がひんぱんにおこった。

抗日武装闘争の影響が人民のなかにいっそう深く浸透し、日本帝国主義の敗北が目前にせまるにつれ、重要建設場、港湾、軍需工場などにおける労働者たちの集団脱走事件はごく一般的な現象となった。一九四四年には、朝日軽金属株式会社岐陽工場の労働者数千名が集団的に逃走したのをはじめ、南朝鮮から咸鏡南道に徴用されてきた一万三千名の労働者のうち、四千名が集団逃亡したのはその一例にすぎない。

さらに、日本へ強制連行された労働者たちのなかにまでストライキやサボタージュ、暴動、集団脱走など、さまざまなかたちの反日反戦闘争が広はんにくりひろげられた。一九四三年には、日本にひきたてられていった徴用者の三十六パーセントにあたる十一万名が死をものともせず逃走した。

農民たちは留置場にひきたてられながらも強制供出を拒否し、殺人的な戦時負担と強制動員に反対する力強いたたかいをくりひろげた。

各地では、教員と学生たちの思想事件と同盟休校事件がひんぱんにおこり、青壮年たちが徴兵と徴用、強制労働などを拒否することは一般的な現象となっていた。

日本帝国主義の資料によると、一九四三年には五十九回に達する教員、学生たちの思想検挙事件と、百二十回におよぶ学生「不穏事件」がおこっている。軍隊にひきたてられていった青年たちのなかにも脱走事件と、いわゆる「不穏企図」事件なるものがひんぱんにおこった。そして山岳や森林地帯には、警察と憲兵の目をのがれてきた青年学生たちの集団が数多く見られた。

各地の刑務所では、愛国者たちが金日成将軍の指導する抗日武装闘争にはげまされ、頑強に獄中闘争を展開した。権永壁、李東傑、李悌淳、朴達同志をはじめとするパルチザン闘士たちと祖国光復会の会員たちは、獄中で組織的な、しかも血みどろのたたかいをくりひろげた。かれらは刑吏たちの残忍無道な拷問のまえにも、愛国者、共産主義者としての不屈の闘志と革命の勝利、祖国の解放を確信するかぎりない楽観主義をしめした。

共産主義者たちは敵の法廷で死刑の宣告をうけながらも、かえって朝鮮人民と革命の名において敵に死刑の宣告をあたえ、敵の植民地略奪と朝鮮民族にたいする虐殺政策を糾弾し、共産主義の信念を熱烈に主張した。

とくにこの時期、人民のなかでは金日成将軍が指導する抗日武装闘争に呼応し、武器をとって蜂起しようとする気運が急激に高まっていた。

日本帝国主義の秘密の警察文献によれば、ピョンヤンの鉄工労働者たちは、秘密裏に自分たちの鉄工所をたてて武器をつくり、金日成将軍が指導する朝鮮人民革命軍にくわわって、日本の侵略者に反対する祖国解放の最後の決戦に参加しょうと計画していた(平安南道警察部『鉄工所職工などの朝鮮独立企図およびその他の書類』一九四四年)。

慶尚南道晋州では労働者と学生たちが、目前にせまった民族解放のたたかいで抗日遊撃隊に呼応するため、満州にむかうことを計画して闘争した(朝鮮総督府警務局『高等外事月報』一九四三年八月)。

また咸境北道城津市内の革命的な青年たちは、金日成将軍が活動していた白頭山が朝鮮革命の根拠地であるという趣旨から、白頭山会という秘密団体を組織して活動した(咸鏡北道警察部『思想犯検挙月報』一九四二年、一七七ページ)。

さらに、ソウルにある鉄道従業員養成所内の労働者のなかでは、金日成将軍を熱烈に慕い、日本帝国主義の植民地政策に反対するたたかいをくりひろげるなかで敵の弾圧をうけた事実もあった(『高等外事月報』第四八号)。

一九四三年、第二次世界大戦の戦局の新たな転換とともに、朝鮮人民革命軍の国内進出が積極化するや、労働者、農民、青年学生たちの反日反戦闘争はいっそう高まっていった。こうして、広はんな人民大衆のなかでおこった武装闘争に呼応するための動きは一般的な現象となっていった。ソウルとピョンヤンの電気部門の労働者たちは、金日成将軍が指導する人民革命軍によって朝鮮独立の日が近づいていると確信し、秘密裏に反日結社を組織し強制徴用に反対してたたかった。

一九四四年、全羅北道全州師範学校の学生たちは金日成将軍を敬慕しながら、「『金日成は朝鮮独立のためたたか

っている志士であり、多数の部下をひきつれ、絶対的勢力をもっている。さらに金日成は、身体が非常に頑健軽捷であるばかりでなく、その部下もやはりみな優秀なものたちである。全州にその部下がいるが、それは秘密である。われわれはたがいに身体をきたえ、かれの部下となり、朝鮮独立のために尽力しょう』。または、将来『日ソ開戦となれば、麗水港に上陸する日本軍にたいして、その通過を妨害すること』」(『高等外事月報』第五一号、一九四四年、一〇～一一ページ)などを討議した。

また「朝鮮独立を目的とする『ストロング・グループ』事件検挙書類」(平安南道警察部、一九四四年、一四～一七ページ)には、「いま、満州で活躍している金日成は、……朝鮮の独立を目的として活躍している。われわれの先輩として崇拝しなければならない。われわれもその方といっしょに朝鮮独立のため活躍しなければならない。……共産主義理論はわからないが、日本の皇道思想とは相反する点で共産主義に賛成する」と書いている。

全州師範学校の学生たちが金日成将軍の遊撃隊に参加しようとした「謀議」についての『高等外事月報』資料

さらに日本憲兵と警察の警戒がもっとも厳重であったピョンヤン兵器廠にまでも、「数日中に金日成将軍があらわれる」というビラがまかれ、忠清（チュンチョン）南道平川（ピョンチョン）郡の警防団員たちも、「朝鮮の青年たちよ、――金日成将軍が凱旋するまで待とう」というスローガンをかかげ、敵を恐怖におののかせた。

また、鎮海（ジンヘ）の日本海兵団にひきたてられた朝鮮青年たちのなかでも、海軍を結束させ、武装蜂起をおこし、朝鮮人民革命軍に参加する決議をしてたたかおうという事件がおこった。

一九四四年には、日本官憲の監視がきびしかった関釜連絡船興安丸の三等船室の天井に「朝鮮独立大将金日成」と赤く大きな文字で書かれていたかと思うと、日本の金沢にいた朝鮮人学生たちは、朝鮮人民革命軍との連係のもとに反日闘争をおこなうことを決議してたたかい、東京の朝鮮人中学生たちや大学生たちも秘密地下組織を結成し、金日成将軍と連係をとることを試み、将軍の部下となって反日武装蜂起をすすめることと決議してたかった。

関釜連絡船興安丸の３等船室の天井に赤く書かれていた文字

日本の警察当局が摘発し発表した資料によっても、将軍が指導する人民革命軍と連係をとろうとした試みは、一九四二年から一九四四年のあいだだけでも三十余件にのぼった。そして日本帝国主義者は、朝鮮人青年学生たちが、「太平洋戦争で日本の敗戦を信じ、このような絶好の機会に不穏な目的を達成せんとはかり、その具体的方法として、崇拝してやまない金日成将軍と連係をもち、またその傘下にはいり、武装蜂起を敢行しようと計画したものがほ

とんど全部」（『高等外事月報』（一九四三年九月号）であったと悲鳴をあげた。

朝鮮人民は、すべてのものを敵に奪われても、金日成将軍を指導者としてあおぎみていたからこそ、前途にたいする信念とかぎりない誇りを胸の奥深くいだくことができたのである。

朝鮮人民は例外なく、集まりさえすれば金日成将軍についての伝説的な話に熱中した。金日成将軍と、将軍が指導した抗日武装闘争についての数かずの物語はとどまることを知らず、朝鮮人民のあいだにひろくつたわっていった。

日本帝国主義の滅亡がさしせまったのとときを同じくして、将軍についての伝説的な話がますます広はんにひろがっていった事実は、朝鮮人民が将軍に自分たちの栄えある未来と運命を全面的に託し、将軍が一日も早く祖国の解放を実現してくれることを熱望していたことをしめしている。

そのころ、人びとのなかでもちきりであった将軍についての伝説的なエピソードのなかで、とくによく語られたいくつかの話がある。

「金将軍の入院ばなし」というのはその一つである。

人びとはそれぞれ、自分の地方で金日成将軍が入院し、治療したといいはった。これは慕ってやまない将軍を自己の郷土とむすびつけようとする気持ちからにじみでたものであった。

その話によると、将軍が病気で入院したことを、はじめは日本帝国主義者も病院当局も気がつかなかった。そして退院するときになって将軍がわざと知らせたため、はじめて大騒動となったというのである。将軍は縮地法をつかい、すばやく敵の包囲網を突破して無事に脱出し、敵の鼻をあかしたというのであった。

またある地方の話では、退院するときに名刺か、紙切れをのこしたとか、あるいは電話をかけて知らせたというふうにもつたえられている。

開城地方の人びとは、将軍が開城高麗病院で治療をうけたといって一歩もゆずらない。それによると、将軍が退院のおり、牛二十頭と三対の鳥を描いた絵を開城の南大門にはって姿をくらましたという。その後、人びとはその絵の意味がわからず解釈がまちまちであったが、やっとこの絵が、日本の年号で「昭和二十年」には新しい社会がくる、という意味だとわかったという。ここで興味深いことは、この予言がぴったり的中したという事実だ。朝鮮が解放された一九四五年は、日本の年号でいえばまさしく「昭和二十年」であった。

このように、金日成将軍の名は北は白頭山から南は済州島と在日同胞のなかにまで、朝鮮人民の太陽として、朝鮮人民を解放する救世主の象徴となっていた。この事実については、日本帝国主義者も認めざるをえなかった。咸鏡南道の警察部長が「朝鮮総督」におくった秘密報告のなかには、「金日成は、朝鮮人民の救世主のように尊敬をうけるまでになった」(一九四二年『咸鏡南道治安状況』)と書かれていた。

また、日本のある記者はつぎのように書いた。

「七年程前(一九四四年をさす)、私は南朝鮮のある小学校の六年生と、中学校の二年生を集めて講演をしたあとで、『諸君は現在の日本人で(朝鮮人を含めて)、だれが一番偉いと思っているか、正直に無記名の投票をしてみてくれ、決して怖れたり、恐がったりするな』と、すっかり安心を与へて無記名投票をさせてみたら、驚くべし、その六七パーセントに金日成と書いてあった」(鎌田沢一郎『朝鮮新話』、一九五二年七月、三八四ページ)。

このように三千万朝鮮人民は、すぐれた指導者金日成将軍を仰ぎみながら、決定的な瞬間には祖国解放のためのたたかいに決起できる態勢をととのえていた。敵はどこへいっても憎悪とさげすみの目でむかえられた。日本帝国主義の植民地ファッショ支配は風前の灯の運命とかわり、全朝鮮は、いまや革命爆発の前夜にあった。

こうした事実について、日本の歴史家たちはつぎのように書いた。

「金日成の名は、日本帝国主義の憲兵と警察のもっとも密集した網の目の圧制のもとにある朝鮮南部の幼児たち

にまで知れわたっており、かれらの尊敬と敬慕の中心となった。……このようにして、日本帝国主義の朝鮮支配は、すでに敗戦をまえにして最後の崩壊の危機にひんしていた。……祖国の解放を実現する全民族的闘争の精力は、戦争の時期にすでに十分に成熟していたのであった」（日本歴史学研究会編『太平洋戦争史』(四)六四ページ）。

まさにこのようなとき、国際情勢は朝鮮人民の民族解放闘争によりいっそう有利に、かつ急速にかわりつつあった。

第十二章　将軍の祖国凱旋

1　最後の決戦、朝鮮の解放

一九四三年のはじめ、ソ連軍はスターリングラードの激戦でドイツの大軍を撃破し、第二次世界大戦の新しい転換期を切りひらいた。

戦争の主導権をにぎったソ連は、その領土内に侵入したドイツ軍を完全に撃滅した。英雄的なソ連軍は敗走する敵をひきつづき追撃し、ファシズムのくびきから中央ヨーロッパと東南ヨーロッパ諸国を解放した。ファシスト・ドイツの頭上には、その運命の破滅を告げる弔鐘が鳴りひびいた。

米英帝国主義者はあわてふためいた。かれらは、ソ連がファシスト・ドイツと死闘を展開していた戦争の初期には、ずるがしこい見物人にすぎなかった。しかしかれらは、ソ連軍が単独でドイツを撃破し全ヨーロッパを解放しうるような情勢になると、それまでの態度をがらりとすてて第二戦線の実践にのりだしてきた。これはかれらが戦後に、戦勝国としての権利を保有しようとねらった破廉恥な侵略的野望のあらわれであった。

こうした事情は太平洋戦争においても同じであった。一九四二年五月ごろから日本軍の攻撃テンポは急速におとろえ、一九四三年のはじめには決定的な難関にぶつかった。これはソ独戦線におけるドイツ軍の勝利を打算した日本の支配層が、対ソ作戦にそなえて自己の主力軍をソ満国境に集結させていたうえに、のびきった太平洋戦争の補

給線を維持しきれなくなったためである。

このような情勢のため、当時の米英帝国主義者の対日作戦にはきわめて有利な条件がそなわっていた。あえていうまでもなく、人民解放のことなど最初から考えもしなかった米英帝国主義者は、ここでもヨーロッパと同じように戦争をながびかせて金もうけをし、その軍事力を将来の世界制覇の道具として保有するために、積極的な軍事作戦をすすめようとしなかった。しかし、ソ独戦線においてソ連軍の決定的な勝利による戦争の終結が目前にせまると、米英帝国主義者は太平洋戦線でも、軍事作戦の速度を早めざるをえなかった。

一九四五年の春、ソ連軍はドイツにたいする総攻撃を開始し、五月二日にはベルリンを占領、つづく五月九日には、ついにファシスト・ドイツを無条件降服させた。こうしてソ連軍はファシスト侵略者から全ヨーロッパの運命を救い、人民に自由と幸福をもたらしたのである。

ファシスト・ドイツの敗北は、東方における日本帝国主義の滅亡がさけられないことを意味した。

一九四五年七月二十六日、日本帝国主義者に無条件降服を勧告するポツダム宣言が発表された。日本はこの提議をこばんだ。帝国主義日本は百万の関東軍と朝鮮駐屯軍、それに朝鮮、満州などの「後方」に期待をかけて戦争を継続しようとはかった。当時の事態は、ファシスト・ドイツを撃破したソ連軍だけが、東方でも日本帝国主義を最後的に撃滅しうることをしめしていた。

戦争の終末が近づくにつれて国際情勢は朝鮮革命に決定的に有利に展開され、金日成将軍が科学的に予見した朝鮮民族の解放の日は、いまや目前にせまっていた。

将軍はこうした情勢に対応して、日本帝国主義にたいする朝鮮人民革命軍の最後の決戦をめざす戦略を綿密に作成した。人民革命軍の各小部隊が困難なたたかいをつうじて収集した政治、軍事情報は、対日戦争全般の勝利をめざす貴重な作戦資料として利用された。

人民革命軍部隊は、大規模な現代戦に参加するために猛烈な戦闘訓練をおこなった。隊員たちは攻撃戦術をはじめ各兵種別訓練を強化し、万端の戦闘準備をととのえた。

一九四五年八月八日、ソ連はついに日本にたいして宣戦を布告した。

日本帝国主義にたいする最後の決戦の作戦計画をすでに完成した金日成将軍は、ときを移さず朝鮮人民革命軍管下の全軍に出動命令をくだした。将軍の命令をうけた人民革命軍の各部隊は、ソ連軍とともに北満州と東満州、南満州から国内にいたる諸地域で果敢な戦闘行動を展開した。

朝鮮人民革命軍の各部隊は、ソ連軍とともに東満州をへて咸鏡北道南陽(ナムヤン)へ、長春地域をへて新義州へ、さらにまた雄基、清津への上陸作戦をへて、北部朝鮮の東海岸一帯へと猛烈な進撃を開始した。

朝鮮人民革命軍とソ連軍の強力な打撃によって、国境線に構築されていた日本の「難攻不落の防御線」は土塀のようにうちくだかれ、強大さを誇っていた関東軍の主

金日成将軍がひきいる朝鮮人民革命軍部隊とソ連軍との共同作戦（西水羅戦闘）

力はこっぱみじんに撃破された。

ソ連の各戦線部隊と合流した朝鮮人民革命軍は、攻撃戦を開始した数日後にはいち早く満州の広野をへて豆満江と鴨緑江の対岸につき、豆満江の要塞を突破して南陽、雄基地域に進出した。

一方、ソ連海軍陸戦隊と合流した革命軍の隊員たちは雄基、羅津、西水羅（ソスラ）、清津などに上陸し地上部隊と合流した。そして各戦線に進撃した部隊は会寧、清津、羅南、会文（フェムン）、咸興、ピョンヤンなどの敵陸軍の重要拠点と空軍基地を占領し、その一帯を解放した。

十五星霜にわたるきびしい風波のなかで、血をたぎらせて待ちこがれた祖国の解放戦争をくりひろげる朝鮮人民革命軍の隊員たち——、敵に猛攻撃をくわえるかれらは稲妻さながらであり、そのかん声は雷鳴をおもわせた。かれらの意気は、まさに天をもつかんばかりであった。

かれらは犠牲をかえりみずつねに攻撃の先頭にたち、最後のあがきをつづける敵を撃滅しながら部隊の進撃路を切りひらいた。

西水羅解放の戦闘でのことであった。要塞地である西水羅にこもった日本軍は、堅固な防御陣地をたてに最後の抵抗をつづけていた。山頂に構築された三つの火点から射ちまくる重機関銃の火力のために、この戦闘に参加した朝鮮人民革命軍隊員とソ連軍の兵士はしばらく進撃をはばまれた。そのとき八名の人民革命軍隊員が火点を破壊する決死隊を志願してでた。

かれらは弾雨をくぐって敵に接近し、手榴弾をなげて火点を爆破し部隊の進撃路を切りひらいた。

朝鮮人民革命軍隊員は、そのほかの戦闘でもソ連軍とともに英雄的にたたかい勝利をかさねた。

祖国解放をめざす最後の決戦では犠牲者も少なくなかった。

夢にまで描いた故郷の大地を目前にしながら、敵弾にたおれた抗日闘士もいた。かれらは息をひきとりながら

も、祖国の山河を目にやきつけるかのようにその瞳をとじようとしなかった。祖国光復のその日のために一身をささげてたたかってきたかれらは、栄光の歓呼をあびることもなく、生きながらえて祖国が栄えるのを見ることもできずに惜しくも解放戦争の犠牲となった。

朝鮮人民革命軍とソ連軍は、たおれた戦友の屍をのりこえて怒濤のごとく進撃をつづけ、いたるところで敵を撃滅した。

「最後の一人まで」といきまいていた日本帝国主義侵略軍はわずか一週間で壊滅し、一九四五年八月十五日、ついに無条件降服をした。苛烈をきわめた第二次世界大戦は帝国主義日本の敗北をもってその血みどろな幕をとじた。

こうして朝鮮人民は、三十六年間にわたる植民地の暗黒の世界から解放された。天と地のあいだによこたわるすべてのものが解放のよろこびにうちふるえ歓呼の声をあげた。

朝鮮で三十六年ものあいだ銃剣をふるい、暴虐をほしいままにした日本帝国主義侵略者は一団の流浪民と化し、玄海灘のかなたへ追いやられた。これが侵略者の運命であり末路であった。

2　歓呼の嵐につつまれて

金日成将軍は抗日の勇士たちとともに祖国に凱旋した。

心から待ちのぞんでいた民族の指導者をむかえる朝鮮人民は、感激の波濤に身をゆだねた。北のかなた白頭山から南は済州島の漢拏(ハンラ)山にいたるまで、朝鮮の山河の津々浦々が一つの巨大な声となって、祖国に凱旋した民族の太陽金日成将軍を歓呼してむかえた。

「金日成将軍万歳！」

「朝鮮独立万歳！」

虐待と苦役から民族を解放し、敵に死をあたえた金日成将軍——、三十六年間を地獄のなかで生きてきた祖国に光明と自由をもたらした偉大な指導者金日成将軍——、首領をむかえた朝鮮人民のよろこびはたとえようがなかった。朝鮮の津々浦々、町という町、村という村が、将軍のまわりをぎっしりとりまいて踊り狂うかのようであった。しかし、あくまで謙虚な将軍は、すべての栄光を歓迎する同胞にかえし、休むまもなく新しい祖国建設のためのたたかいを指導した。

将軍には休むひまがなかった。なすべき仕事があまりにも多かった。まわりに見えるものは、侵略者の略奪と破壊の痕跡ばかりであった。祖国のすべてを調査し、分析しなければならなかった。創造の情熱で人民大衆をわきたたせ、かれらを組織して新しい朝鮮建設へと導かなければならなかった。

なによりもまず、革命の参謀部であるマルクス・レーニン主義の党を創建しなければならなかった。

幾多の複雑な問題を解決しなければならなかった金日成将軍は、なつかしい祖父母や親戚との再会さえ後日にまわした。

さまざまなエセ革命家が「愛国者」の仮面をかぶって分派活動に血まなこになっているとき、遠大な朝鮮革命の構想をねっていた将軍は連日、数多くの同志たちと討議をかさね、工場、企業所、農村にでかけて、労働者、農民とひざをまじえて話し、かれらを新しい生活の創造へと組織動員していった。将軍は文字どおり寸暇を惜しみ、昼夜をわかたず精力的に活動した。

そうしたある日、将軍は副官をともない、降仙（カンソン）製鋼所（ピョンヤンの西南約一〇キロの大同江のほとりにある製鋼所。いまここはピョンヤン市降仙区域になっている）にむけて車を走らせた。副官はよろこびにひたっていた。ゆく先が万景台と同じ方向だったからである。こんどこそ将軍の故郷をたずねるチャンスが到来したと胸をおどらせた。多忙

な日々をおくっていた将軍は、ピョンヤンに凱旋してから一か月近くにもなろうというのに、やっと数日まえになって普通江（大同江と平行してピョンヤンの西の方を流れている小さな川で、かつては夏になると毎年のように氾濫するので有名であった）の川むこうに住む叔父（母の弟康龍錫（カンリョンソク））宅に人をやり、まもなく帰郷するからと知らせただけで、すぐ近くにある郷里をいまだにたずねることができなかった。

車の窓からは、万景台につづく初秋の田野や緑のはい松に美しくおおわれた峰々がひと目で見わたされた。窓ごしに目をやる将軍の感慨深そうな顔にはかすかな微笑がただよい、しだいに興奮の色がうかびはじめた。

「むかしもいまも、ふるさとの山河はいいものだ！」

目を細めながらこうつぶやいた将軍は、たたかいの抱負をいだいて故郷をあとにしたすぎ去った日々に思いをはせているかのようであった。反日抗戦の行軍の途上でも、かがり火のまわりでも、若い隊員たちに、いつも誇らしげに語っていたなつかしい故郷であった。やがて車は万景台にむかう別れ道にさしかかった。車はそこでとまった。車からおりた将軍は万景台の方を指さしながら副官にいった。

「あそこが万景台です。いいところですよ。わたしのかわりにちょっとよってくれませんか。きっと気にいるでしょう」

副官は、どうこたえてよいかわからなかった。ただ無言で将軍の顔を見つめるだけだった。

将軍は感慨にふけりながらことばをつづけた。

「二十年ぶりに見るふるさとです……。ゆけば年老いたわたしの祖父母に会えるはずです。よろしくあいさつをつたえてください。それから国が解放されたのだから、もうすぐわたしも帰ってくるだろうと知らせてあげてください。これからは住みよい世のなかになるだろうということも、ついでに申しあげて……。では明日の朝、ここでおちあいましょう」

将軍は、夢多き少年時代の思い出が刻みこまれた山のいただきをしばらくながめていたが、そのままゆっくりと車に足をはこんだ。

心もとなくなった副官が、うるんだ目をしばたたきながら懇願するようにいった。

「ちょっとだけでも、およりになったら……」

「いや、つぎの機会にしよう」

将軍は、理解してほしいというような微笑をうかべて車を降仙製鋼所へむけて走らせた。副官は遠ざかっていく車を見つめながら、将軍の偉大な人となりに、いま一度深い感動をおぼえずにはいられなかった。

「偉大なお方だ」

将軍とて、故郷の家がなつかしくないはずはなかった。しかし祖国の運命をまず第一に考える将軍は、故郷の家や祖父母よりも先に、数多くの課題をまえにして将軍の教えを待ちこがれている労働者たちに会うことの方が大切なのであった。こうして将軍は偉業を達成するために、すぐ近くにあった二十年ぶりの故郷をも素通りしたのであった。

一九四五年十月十四日！　牡丹峰（モランボン）のふもとにある公設運動場では、金日成将軍の祖国凱旋を歓迎するピョンヤン市群衆大会がひらかれた。

金日成将軍が大会に出席する！　この知らせは全ピョンヤンをわきたたせた。由緒ぶかい牡丹峰も、ピョンヤンの歴史も、これほど歓喜にみちたたよりをいまだかつてきいたことがなかった。市内や近郊からは定刻まえに群衆がぞくぞくと集まってきた。

さんさんとふりそそぐ黄金のような秋の日ざし。あおげば鏡と見まがうばかりの雲一つなくすみわたった明るくほほえむ青空。

またたくまに十万を数える大群衆が会場の内外にひしめき、近くの牡丹峰の頂上まで人びとで真っ白にうずめつくされた。

群衆のなかには、十二キロの道のりを一気にかけつけてきた将軍の叔母（将軍の叔父金亨禄先生の夫人玄璇心女史）をはじめ、万景台の人びとの姿も見えた。

大会は午後一時にはじまった。大会議事の順序にしたがって、人びとが待ちこがれていた金日成将軍がりりしくも活気にみちた英姿を演壇にあらわした。その一瞬、歓喜の声が熱風のように満場を吹きぬけ、それはやがて熱狂的なかん声とかわり天地をどよめかせた。万歳を叫び、よろこびに舞い、だきあってとびあがる大群衆、それはまるで春の風に波うつ大海原を思わせた。

金日成将軍は手を高くふりかざし、太陽の輝きのような微笑で群衆の歓呼にこたえた。それはまさしく、抗日戦のながい年月、炎と吹雪の万里の道のりを切りひらきながら、つねに祖国の山河を思い人民をいつくしんできた偉大な愛にみちたあいさつであった。またそれは、朝鮮の大地に復活と輝かしい勝利を約束する不世出の英雄、民族の首領が、なつかしい祖国の山河と人民におくる祝福のあいさつであった。

少女たちがささげる花束につつまれてほほえむ将軍の顔！　民族の繁栄と幸福が燦然と輝くその顔！

どんなに待ちこがれた将軍であったろう！　地獄のような生活、奴隷のような生活に苦しんだながい暗黒の日々に、だれもが夢に描き、ただ一つの救いの希望として心に刻んできた金日成将軍、全アジアを炎で焼きつくした日本帝国主義の軍隊に肉迫し、その心胆を寒むからしめた将軍、砲煙にくすんだ赤旗と民族繁栄の綱領を高くかかげ、抗日闘争の鮮血にそまる十五星霜をたたかいぬいてきた金日成将軍——、その千軍万馬の将軍がいま三千万同胞のふところに帰って、花束につつまれてほほえんでいる！

群衆は歓呼をおくりながら感動の涙を流した。将軍の叔母は、それ以上じっとしてはいられなかった。少しでも

近くから将軍を見たかった。彼女は人波をかきわけてすすみながら将軍を見あげた。はなれていた歳月のいかにながかったことか。堂々としたその姿に、はっきりとやどる幼い日のおもかげ。忘れもしないあのえくぼと歯並、あの英知に輝くつぶらな目、あの子だ！　成柱にまちがいない！

うちの金日成将軍だ！

叔母は、まえをさえぎる警備員に「金日成将軍の叔母なんです」と叫びながら、夢中で演壇のしたにかけつけた。

やがて将軍は、感激にみちたつぎのような歴史的演説をおこなった。

「わが民族は三十六年間の暗黒の生活から解放と自由をかちとり、わが祖国三千里の山河は、燦然たる朝日のような希望に輝きだしました。わが朝鮮民族には、これから新しい民主祖国建設のために、みんなが一つになって力をあわせてすすむときがきました。一部の党派や個人だけでは、この偉大な使命を完遂することはできません。力のあるものは力で、知識のあるものは知識で、金のあるものは金で、真に国を愛し、民族を愛し、民主主義を愛する全民族が一致団結して、わが祖国を民主主義的な民主独立国家に建設しなければなりません」（『ピョンヤン民報』創刊号、一九四五年十月十五日）

将軍は、万人の心をゆり動かしたこの演説を、「朝鮮独立万歳！」ということばでむすんだ。

水をうったように静まりかえっていた場内は、ふたたび万歳の声とかん声でどよめいた。

壇上からおりた将軍は、満場の歓呼と感激の嵐につつまれて叔母と会い、そのまま真っすぐに郷里万景台へとむかった。

人民のまえで祖国凱旋のあいさつをおこなったこの日、はじめて将軍は生れ故郷に帰ったのである。

万景台の全村民が走りでて将軍に歓呼をおくった。将軍が生まれ育った村であったがゆえに、祖国解放のたたか

いに身を挺した将軍の両親と叔父が暮らした村であったがゆえに、この村は日本軍警の憎しみを集め、非道なあつかいをうけてきた。その万景台が、いまわきかえる歓喜の丘とかわったのである。

「ほんとうにおまえが……、とうとう帰ってきてくれたんだね！　夢じゃないんだね……」

白髪の祖母は将軍をひしとだきしめ、むせび泣いた。将軍もしっかりと祖母をだきしめた。かつてどのような英雄叙事詩に描かれた伝説上の英雄も、これほど感激的な再会をしたことはなかったであろう。

これは、現実にくりひろげられた民族的叙事詩のもっとも劇的な場面であった。

「これは夢では……」

祖母のこのことばには、あまりにもながかった苦難ののち、やっと手にした幸福の感動が凝結していた。別離の日から二十年、それはまたどんなにながく、苦渋にみちた日々であっただろう！

かつて、二人の息子と嫁は孫をつれて故郷をはなれ、遠い満州の地へ去っていった。祖母の日々は孫恋いしさと、さびしさと、待ちわびることのせつなさで流れていった。祖母にとどいた消息は悲しいものばかりであった。最初にとどいたのは、長男がたたかいの途上で他界したという知らせだった。その心の傷あとがいえやらぬまに、今度は嫁がこの世を去ったという知らせがとどいた。すえの息子が革命の節をまげず、ソウルの刑務所で獄死したという知らせがこれにつづいた。

しばらくすると、白頭の山なみをかけめぐり、日本の侵略軍をうちのめして勇名をとどろかせている金日成将軍が、孫の成柱であるといううわさがひろがった。おどろきながらも誇りにみちていた祖母は、夜ごと寝もやらず孫の無事をねがった。日本の官憲はものものしく家のまわりをとりかこみ、昼夜をわかたず監視の目を光らせ、横暴のかぎりをつくした。土足で部屋をさがしまわり、土間にしいた石まではがす捜索がいくたびくりかえされたことだろう！

悲運はつづいた。二人目の孫の哲柱が日本軍とたたかって戦死したという知らせがとどき、すえの孫の英柱までが、たたかいのさなかで生死不明になったといううわさが流れてきた。

それだけではない！　警察駐在所と面事務所は、こともあろうに、金日成将軍が戦死したというおそろしいうわさまでひろめているではないか（日本帝国主義は、抗日戦をくりひろげる将軍を敬慕して反日闘争にたちあがった朝鮮人民の気勢をくじこうと、くりかえしデマ宣伝をまき散らしていた）。

祖母は、このうわさを決して信じようとはしなかった。だが、たびかさなるデマ宣伝のために、敵の目をさけながらひそかにお悔みの酒をもってくる人さえあらわれる始末だった。祖母には悪夢につつまれたような日々であった。それが事実であってはならなかった。信じたとおりだった。金日成将軍がけわしい山なみをかけめぐり、敵にせん滅的な打撃をくわえているといううわさがふたたびつたわってきたのである。

しかし、この家にたえまなく出入りする洋服を着た男たちはどんな連中であったろうか。敵に屈し、日本帝国主義の犬になりさがった李鐘洛や朴且植どもであった。敵はこれらの手先と共謀して祖母を脅迫した。孫を「投降」させることに協力しろというのだった。祖母は拒絶した。敵は銃剣でおどした。祖母はむりやりに満州の山野につれだされた。将軍の祖母は、将軍の祖母らしく威厳をもってかれらをあしらい、かれらの悪どい策動を容赦なくあばいた。敵はそれ以上なすすべもなく祖母を故郷に帰した。

暗くとざされた日々は、いつはてるとも知れなかった。歳月は流れて祖母の白髪は日ましにふえてゆき、将軍のうわさはとだえがちになるばかりだった。

しかし、苦しみつきなば甘き(らく)たるのたとえどおり、暗い心にとざされた歳月は晴れ、苦労は霧のように散っていった。夢ではなかった。黒髪が銀白にかわるまで待ちこがれた孫の金日成将軍が帰り、いまそのふところにいだかれたのだ！　いとしい孫は国の指導者、人民の太陽となって帰ってきたのだ！

将軍は歓呼をおくる郷里の人たちの手をかわるがわるにぎりながら、なつかしいわが家のしきいをまたいだ。
そのとき病床にあった祖父がはだしのまま、よろめくようにして庭におりてきた。
「帰ってきたのか！　死んだとおもった孫のおまえが……」
深いしわが刻まれた祖父の顔も涙にぬれた。
「おじいさん！　わたしのためにずいぶんご苦労なさったことでしょう」
将軍は祖父をしっかりとだきかかえて部屋のなかにつれていき、心からあいさつをのべた。将軍が部屋にはいったその一瞬、ながい風雪にいたんだこのわらぶきの家は豪華な宮殿のように輝いた。
多くの人びとが部屋にはいってきてすわった。
祖母はチマのはしで涙をふきながら、ただ泣くばかりであった。
「おまえを見たら、この胸につもりつもった悲しみも一度に晴れたようだよ……。でも……どうしておまえの父や母は……、どうしていっしょに帰れなかったのだろう……」
胸をかきむしるようなこの悲嘆の声に、いあわせた人びとは目がしらをおさえた。
この空気をやぶったのは子どもたちであった。無邪気な子どもたちは、将軍のひざにしきりとまつわりついた。
将軍は明るい笑顔で子どもたちをだきあげた。
祖母も笑った。
「解放とはいいものじゃ。おまえの父や母も、草葉のかげでさぞかしよろこんでいることだろう！」
将軍は感無量であった。いくとせぶりのわが家であろう！　故郷の人びとともに何年ぶりの再会であろうか！　よろこびが大きく深ければ深いほど、ことばは少なかった。人びとは涙をふくばかりで、ことばがでなかった。この瞬間にはすべての言葉が意味を失ったのである。

やがて簡素な祝宴がひらかれた。祖父母とともにかこむ食卓には、将軍がもってきた酒もだされた。老人たちは、将軍の凱旋を祝って杯をあげた。このささやかな祝宴は、どんな大宴会にもまさるものだった。家ぢゅうが笑いでみたされた。

叔母が感動をおさえきれなくなって歌をうたった。そのむかし、金亨稷先生と康盤石女史が幼い将軍によくうたってきかせた子守歌であった。感激にふるえるその細い歌声は、遠くすぎ去ったなつかしい日々をよみがえらせた。歌声に耳をかたむける人びとは、このわらぶき家がへてきた美しくも崇高なときの流れに思いをはせた。

叔母はふと、歓呼にわきたつピョンヤン市群衆大会での将軍のことばを思いだした。

「叔母さん！　きょうは叔母さんが母のかわりです」

だが、母にかわりうる人がこの世にいるだろうか！　もしもわたしがじつの母親であったなら、この席が将軍にとって、どれほどたのしいものになっていたことであろう！　十人の叔母も一人の母にはおよばないのだ。――こんな思いにとらわれながら、目をつむって歌をうたう叔母のほおには熱い涙がつたっていた。将軍はいつもの明るい微笑をうかべていたが、その目もとには、なんともいえないさびしさがやどっていた。

ややときがすぎると、静かだった家ぢゅうがふたたび歌と踊りでにぎわった。祖母も庭にでて踊った。それは静かな品のある動きのなかにも、ひめられた情熱とよろこびがはっきりと感じとられる踊りであった。こうして村ぢゅうが踊りと笑いにつつまれた。

この日、将軍は純真な幼な心にかえり、万景台の一農夫の孫として、なつかしい祖父母と叔父、叔母、親戚、知人たちにかこまれ、たのしい一日を心ゆくまですごした。

将軍が祖国凱旋のあいさつをしたといううわさがひろまると、国内の出版物は先をあらそって訪問記をのせ将軍の風貌を紹介した。

一九四五年十二月二十九日、将軍を訪問した『ソウル新聞』の記者はつぎのように書いた。

「えくぼをうかべる微笑、やさしい目にやどる非凡な輝き、

われらの英雄金日成将軍

――いま記者は、わが民族が生んだ軍事的天才、千年の英雄、金日成将軍と会っている。日本帝国主義の圧政のもとでわが民族が暗たんたる逆境にあったとき、金日成将軍の存在は、その名のしめすごとく民族の太陽であり、希望であった。いかに多くの青年がその名にはげまされ、偉大な闘争へと決起したことであろう。……将軍の風貌をつたえよう。浅ぐろい顔、短いハイカラの髪、自然な二重まぶた、笑うたびにできるえくぼ、――一点非のうちどころのない美青年である。背丈は五尺五寸もあろうか。それほどふとってはいない。大陸的であけっぴろげな快活な性格、謙遜で明快な態度、まわりの人びとをして、まるで古くからの知己でもあるかのように感じさせる。あの覇気(はき)と豪胆さが、どこにひめられ

祖国凱旋後の家族との感激的な再会（左から祖母、叔父、将軍、祖父、叔母）

ているのかわからないほどである。将軍の目は人を射るようなまなざしではないが、左右に視線が移るとき、きらりと光るその輝き。両の眉毛のあたりにただようその精気。ふとく力強い声――。これらが風貌の特徴であろうか。十九歳の身でパルチザン部隊を組織し、抗日闘争を展開した。以来、将軍の活動は日本帝国主義者を大いになやまし、かれらは日本軍十五個師団を金将軍部隊にあたらせた。

……かざり気のないことばと、明快な表現をもちいる。

謙虚そのもので、政治家として出馬するのかという質問に、自分はそのような表現には適さないとこたえる。青年や学生が、将軍、将軍とよぶと、『わたしは将軍ではありません、あなたたちの友人です。友人(ドンム)とよんでください』という。

民衆――、なかでも青年たちを深く愛し、だれとでもすすんで会い、かれらのことばに熱心に耳をかたむけ、また質問にたいしては親切にこたえる。……金将軍は、いま一人の市民として民衆のなかにいる。若い英知と勇気がこれから先、民族の発展にどう具現されていくであろうか。朝鮮の関心でなければならない」(『ソウル新聞』一九四六年一月十日付第二面)。

民族の大きな期待と関心のなかで、将軍は人民を新しい民主朝鮮建設の道へと力強く導いていった。朝鮮人民は将軍がさししめした新しい朝鮮の輝かしい前途を確信し、日一日と将軍のまわりに鉄壁のごとく結集していった。

このように、偉大な金日成将軍を指導者にいただく朝鮮人民の前途には、輝かしい勝利だけが約束されていたのである。

第十三章　民族の太陽

1　偉大なたたかい、輝かしい革命伝統

朝鮮は解放された。

朝鮮はふたたび朝鮮人民のものとなった。

金日成将軍の指導のもとにくりひろげられた英雄的な抗日武装闘争は、栄誉ある大勝利をもって終りをつげた。

われわれは国際革命運動の歴史のなかで、民族の独立と階級的解放のために展開された数多くの英雄的なたたかいを知っている。そのたたかいは、どれもが非常に複雑で困難なたたかいであったし、誇るべきたたかいでもあった。

しかしながら、金日成将軍が組織指導した朝鮮共産主義者たちによる抗日武装闘争のような、偉大で英雄的なたたかいはまれである。

まさに金日成将軍の指導のもとに展開された抗日武装闘争は、古今東西の革命史上、例のない長期にわたる苦難のたたかいであったし、朝鮮人民の民族解放闘争と朝鮮共産主義運動の発展に画期的な転換をもたらしたもっとも輝かしい偉大なたたかいであった。

ふりかえってみれば、日本帝国主義の植民地に転落したわが祖国は、暗たんとした歳月を羅針盤も櫓もなく、嵐

が吹きすさぶ暗黒の荒海をさまよいただよう運命にあった。そのために人民は塗炭の苦しみから祖国を救い、民族を明るい理想の実現へと導く偉大な指導者の出現を心の底から待ちのぞんでやまなかった。

しかし、このような難局に登場する指導者は、あらゆる点で巨人的でなければならなかった。その指導者は嵐のなかでも、はるか遠くの岸辺にある灯りを見いだす慧眼と、荒れ狂う大海をも征服するたぐいまれな胆力をかねそなえていなければならなかった。そして前途にたちはだかる世紀的な難関と敵をまえにしては逆に自己の崇高な使命を自覚して突進する、そういう人物でなければならなかった。

それにこたえ、これらすべてを一身にになってたちあがった朝鮮人民の偉大な指導者こそ、まさに金日成将軍その人であった。また金日成将軍であったからこそ、人民の念願と未来を祖国光復の輝かしい綱領に刻み、闘士たちをひきいて数千倍の大敵をうちやぶり、十五星霜にわたって勝利の道のりを歩みつづけることができたのである。

金日成将軍は、わが国の民族解放闘争史上はじめて、マルクス・レーニン主義を朝鮮革命の具体的な実情に創造的に適用し、正しい主体的な革命路線を提示し、抗日武装闘争を組織展開することによって、わが国の民族解放闘争と朝鮮の共産主義運動を新しい高い段階へと発展させた。

抗日武装闘争は、朝鮮人民の民族的栄誉をしっかりと守り、不撓不屈の革命的な気概を全世界にしめした輝かしい闘争であった。

抗日武装闘争はまさに、祖国を踏みにじる日本帝国主義侵略者を独力でうちやぶり、奪われた祖国をとりもどす朝鮮民族解放闘争の決定的で主要な闘争であったし、マルクス・レーニン主義党創建のための闘争、反日民族統一戦線運動などが密接に結合されたもっとも多面的な政治闘争であった。

抗日武装闘争はまた、朝鮮人民の民族解放闘争ではじめて、科学的な戦略と戦術にもとづいて展開されたたたかいであった。主体的な革命路線があり、科学的な戦略と戦術があったからこそ、抗日武装闘争は不滅の栄光にみち

た歴史を創造することができたのである。

抗日武装闘争は一貫して労働者、農民をはじめとする人民大衆の志向をいだき、その利益を擁護してきたし、人民大衆のなかにしっかりと根をはり、人民大衆の積極的な支持声援のもとで展開されてきた。

抗日武装闘争はまた、それがもっともきびしい時期に展開されたもっとも困難なたたかいであった点で、燦然とした光を放っている。

抗日遊撃隊は革命的な大衆の援護のほかは、後方も、なんらの国家的支援もない困難な条件のもとで孤軍奮闘し、武器、弾薬、食糧、被服など、必要なもののすべてを敵とのたたかいのなかで解決しなければならなかったし、波濤のようにおしよせる敵を単独でうちやぶりながら、波瀾万丈、前人未踏のけわしい道のりを切りひらき、のりこえてきた。

じつに朝鮮民族の悠久な歴史において、抗日武装闘争のように、かくも苦難と試練にみち、かくも燦然と輝く不滅のたたかいがあっただろうか。

五千年の朝鮮の歴史は、いまだかつてそのようなたたかいを知らず、そのように偉大なたたかいを見たことがなかった。

まさに金日成将軍の出現と、金日成将軍の指導のもとに展開された抗日武装闘争は、朝鮮人民のもっとも大きな誇りであり栄光なのである。

金日成将軍は、みずから抗日武装闘争を組織指導したばかりでなく、そのきびしい過程で、朝鮮人民のもっとも貴重な財産となった輝かしい革命伝統を築きあげた。

抗日武装闘争の炎のなかで築きあげられた革命伝統の基本的な内容は、崇高な共産主義的革命精神と確固たる主体思想、人民的活動作風と革命的活動方法、輝かしい革命業績と豊富で多様な活動経験である。

抗日武装闘争の炎のなかで、わが国ではじめて崇高な共産主義的革命精神と主体思想の生きた模範がうちたてられた。

金日成将軍によって教育され、育てられた遊撃隊員と共産主義者たちは、革命の指導者を心から信頼し、将軍にかぎりなく忠実であった。かれらは金日成将軍がいる司令部をつねに生命を賭して守りぬき、革命と首領の要求であれば水火をもいとわず任務を誠実に遂行した。

かれらは、偉大な指導者の威信を傷つけ、共産主義隊列の「指導権」をにぎるために悪らつな策動をおこなう分派主義、日和見主義に反対し、それを克服し一掃するために断固としてたたかった。

抗日武装闘争の時期に、朝鮮革命の歴史のうえではじめて主体性が確立され、自力更生の革命精神が徹底的に具現された。

革命において主体性を確立する問題は、一九三〇年代の朝鮮共産主義者たちのまえに提起されたもっとも重要な課題の一つであった。

将軍は革命においてまず、自分の力を信じ、自分の頭で考え、朝鮮革命が提起するすべての問題を朝鮮人民自身の力によって解決する主体的な立場から出発して、すべて独創的に解決し、自力更生の革命精神でたびかさなる難関と隘路を克服した。将軍は、事大主義、大国主義に反対し、身の危険をもかえりみることなく頑強にたたかい、危機に直面した朝鮮革命を救いだした。こうして反日民族解放運動と朝鮮の共産主義運動は、みずからの革命的な力量にしっかりと依拠して勝利のうちにくりひろげられていったし、朝鮮の共産主義者たちは、あたえられた自己の国際的な任務を忠実に遂行することができたのである。

抗日遊撃隊員と共産主義者たちは、社会主義的愛国主義とプロレタリア国際主義の思想をしっかりと身につけていた。

かれらは祖国と故郷の山河と人民を熱烈に愛したし、祖国を搾取と抑圧のない社会主義の地上の楽園にかえるためにたたかった。かれらの社会主義的な愛国精神は、プロレタリア国際主義精神と密接にむすびついていた。遊撃隊員と共産主義者たちは、マルクス・レーニン主義の世界観でしっかりと武装していたし、それによって革命の勝利にたいする確固とした信念をもっていた。かれらはいかなる困難にもめげず、革命的節操をしっかりと守り、不撓不屈の闘争精神を発揮した。

抗日武装闘争の過程ではまた、人民的活動作風と革命的活動方法がりっぱな伝統として確立された。

抗日遊撃隊は、一つの思想と目的をもつた労働者、農民をはじめとする朝鮮人民のすぐれた息子と娘たちが、自覚的に結合して生まれた集団であった。したがって遊撃隊員のなかでは、うちくだくことのできない原則的な団結が確立され、気高い革命的同志愛の精神が発揮された。

人民を愛し、人民のためにたたかうことは抗日遊撃隊の本分であった。将軍は、「魚が水をはなれては生きていけないように、遊撃隊は人民をはなれては生きることができない」という精神でつねに隊員たちを教育し、みずからその模範をしめした。こうして遊撃隊員たちは、いつ、いかなるところでも、ひたすら人民の利益のために身をささげてたたかい、どんな逆境のなかでも人民を生命を賭して守りぬいた。かれらは人民にたいしてはかぎりなく素朴で、謙虚で、礼儀正しく、大衆の要求を敏感にとらえ、真心をこめて人民をたすけ、つねにかれらと生死苦楽をともにした。だからこそ遊撃隊は、つねに人民からかぎりない愛情と尊敬をうけ、絶対的な支持と声援をうけたのである。

人民大衆との血縁的な連係、これは抗日遊撃隊の力の源泉であり、勝利の保障であった。

抗日武装闘争の過程ではまた、気高い革命的業績と革命運動のゆたかで多様な活動経験が蓄積された。抗日武装闘争は、日本帝国主義に反対する民族解放闘争であったばかりでなく、マルクス・レーニン主義党の創建、労農同

盟を基礎とした広はんな反日民族統一戦線の結成、人民政権の樹立、人民武装力の建設、革命根拠地の創設など、朝鮮革命運動のまえに提起されたすべての歴史的課題を成功裏に解決していった偉大な革命運動であった。

将軍は抗日武装闘争の初期から党創建のための準備活動に深い注意をよせ、精力的にたたかった。将軍は党創建のたたかいを武装闘争と密接にむすびつけてすすめた。将軍は労働者、農民出身の洗練され、鍛練された共産主義者を数多く育てあげ、分派主義とあらゆる左右の日和見主義に反対する激烈なたたかいをへて共産主義隊列の統一団結とその純潔性を守りぬき、大衆的な基盤をしっかりと築きあげた。こうして党創建の組織的、思想的な基礎がしっかりとうちかためられたのである。

将軍はまた、革命活動の初期から反日勢力の団結に深い関心をよせ、広はんな反日勢力との共同行動を実現するためにたたかう一方、各地にさまざまな革命的大衆団体を組織し、それを拠点として反日民族統一戦線運動を強力に展開した。将軍は一九三〇年代の前半期に、朝鮮革命の主導的勢力である抗日武装隊伍を中心として革命の主力軍を組織し、そのまわりに愛国勢力が結集されるや、それを基礎として反日民族統一戦線組織である祖国光復会を創建した。

抗日武装闘争の過程では人民政権の根元が形成され、その創設と運営についての貴重な経験が蓄積された。将軍は権力にかんするあらゆる左右両翼の日和見主義的主張をしりぞけ、わが国の革命の性格と階級的な勢力関係にたいする科学的な分析にもとづいた独創的な人民政府路線をさししめし、人民政府をつうじて諸般の民主主義的な施策をおこなった。この過程で、わが国にはじめて人民政府の根元が形成された。

将軍がみずから創建した抗日遊撃隊は、朝鮮の勤労大衆の民族的および社会的解放を目的とする武装力であったし、マルクス・レーニン主義思想を指針として活動する革命軍隊であった。将軍は、抗日遊撃隊内で上下一致、軍民一致の思想を徹底的に具現し、遊撃隊を中核として解放地区の全人民を武装化する軍事路線を実施した。将軍に

よって数多くのすぐれた軍事活動家が育成され、ゆたかな戦闘経験がつちかわれた。

将軍はまた遊撃闘争を展開しながら、遊撃活動の拠点であり、朝鮮革命の策源地となる遊撃根拠地を創設する方針を提示し、武装闘争の戦略的段階に合致するようこれを具現し、さまざまな形態の根拠地を創設した。将軍はこれを拠点とし、抗日武装闘争を力強く展開することによって朝鮮革命をたえず発展させ、この過程で革命根拠地創設にかんする貴重な経験を創造した。

金日成将軍の指導のもとに築きあげられたこのような革命伝統は、それがきびしい武装闘争の炎のなかで創造されたものであるがゆえに、いっそう貴重であり、誇るべきものである。それはまた、革命闘争の複雑なあらゆる問題を統一的に包括しているばかりでなく、現在と未来の要求を科学的に体系化した革命伝統であるからこそ、その内容はかぎりなくゆたかで深いのである。

苦難にみちたたたかいの歳月に、このような輝かしい革命伝統を創造した金日成将軍――、この将軍を民族の偉大な首領とよぶそのなかには、いかに誇らしい意味がこめられていることか！

将軍の指導のもとに生みだされた革命伝統は、まさになにものにもかえることのできないわが人民の高貴な財産であり、朝鮮革命の貴重な元手であり、深い根元である。朝鮮の大地のうえに、民族精神のなかに深く根をおろしたこの革命伝統の根元は、いかなる嵐によっても、いかなる天変地異によってもゆらぐことはない。悪はいっとき、真理は永遠であるように、すべての売国的で反動的なものは歴史の下水道におし流され、金日成将軍の指導のもとに創造された輝かしい革命伝統とその業績は人民とともに永久不滅である。

悠久な朝鮮の歴史の上に、燦然と輝く金字塔としてそびえたつこの革命伝統があるからこそ、朝鮮人民固有の英知と才能は絢爛（けんらん）と花咲き、ゆたかな資源とうるわしい風光にみちた朝鮮の山河も光り輝くにいたったのである。

またこの革命伝統があったからこそ、朝鮮人民は暗黒からぬけだし、新しい歴史の光明にみちあふれた未来をの

ぞみ、世界の人びとのまえで祖国の名を高らかに叫び、堂々と濶歩できるようになったのである。
　こうして侵略者たちを撃滅し、山美しく水清らかな祖国の地に、全朝鮮人民が自由と幸福のよろこびをうたう新しい社会、勤労人民の地上の楽園を建設しようという金日成将軍の念願は、よりひろびろとした大道を前進することになったのである。

2　四千万朝鮮人民の偉大な指導者

　世界には、その名をとどろかせた英雄も多い。しかし、いかなる民族的英雄といえども、抗日武装闘争を組織指導した金日成将軍のように、常識では想像すらできない、かくも困難かつ長期的で、かくもかぎりない偉勲にみちた革命闘争を勝利のうちになしとげた例は、古今東西の歴史のなかに見いだすことができない。
　しかし、この偉大な抗日武装闘争を語ることでもって、金日成将軍についてのすべてを書きつくしたとは決していえない。なぜならば、金日成将軍の革命活動は八・一五解放以後こんにちにいたるまで、巨大な流れとなってひきつがれているからである。金日成将軍は解放後、朝鮮労働党中央委員会委員長に、そして一九六六年十月に秘書制に改編されてからは朝鮮労働党中央委員会総秘書として、また北朝鮮にはじめて樹立された中央政権機関である北朝鮮人民委員会委員長として、一九四八年九月に朝鮮民主主義人民共和国が樹立されてからは内閣首相として、千里をも見とおす慧眼と高度に洗練された手腕をもって朝鮮革命を勝利へと導き、また導いている。こうして輝かしい革命伝統の深い根からは社会主義の巨木が空高くそびえたち、その生い茂った枝々には香り高い花びらが美しく咲きほこっているのである。
　金日成将軍は、南朝鮮にアメリカ帝国主義侵略軍が駐屯し、南と北がまったく異なる道を歩むにいたった複雑な

情勢のもとで、北半部に民主基地を創設する有名な路線を提示した。これは反帝闘争の基地を準備し、分断された祖国の統一と独立を実現する革命の力をたくわえるきわめて重要な路線であった。この路線は党の創建とともに、急速にその偉大な生活力を発揮しはじめた。

金日成将軍は、抗日武装闘争の時期につちかった党創建のための組織的、思想的準備にもとづき、一九四五年十月十日、革命の参謀部であるマルクス・レーニン主義党を創建し、みじかい期間内にそれを不敗の大衆的政党に発展させた。金日成首相の指導のもとに朝鮮労働党は、いかなる風波をものりこえてすすむ革命の威力ある前衛に、全朝鮮人民をひろくゆたかな胸にいだいてはぐくむ慈愛にみちた母となったし、朝鮮人民のすべての創造と勝利の組織者となった。

金日成将軍は党のまわりに全人民を結集し、かれらを民主基地路線の実現へと力強く導いた。将軍は、じつにめざましい展開力をもって日ごとに北半部の様相を一新させていった。朝鮮の歴史はもちろん東洋の歴史においてもはじめての人民政権が樹立され、土地改革と産業国有化をはじめとする多くの民主改革が人民の歓呼のうちに徹底的に実施されたし、抗日遊撃隊員を骨幹として革命の正規の武装力である朝鮮人民軍が創建され、燃えたぎる鉄のような歴史の流れを誇示した。一九四八年九月九日、南北朝鮮人民の総意にもとづいて朝鮮民主主義人民共和国が創建されたことにより、こうした民族的大事業はいっそうその輝きをました。朝鮮人民は大きなよろこびにつつまれ、すでに一九三〇年代から全人民がひとしく尊敬する金日成将軍をこぞって朝鮮民主主義人民共和国の内閣首相に推戴した。

こうして国の主権と、すべての富の堂々たる主人となった人民は、朝鮮の歴史上はじめてゆたかで自由な黄金時代をむかえたのである。

このように、もっともみじかい期間に革命基地が築きあげられたからこそ、朝鮮人民はアメリカ帝国主義が挑発

した苛烈な戦争においても偉大な勝利者となることができた。創建後まもない共和国にしいられたこの戦争は、革命と人民の生死をわける深刻な試練であった。

祖国解放戦争のとき、金日成首相は朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会委員長として、朝鮮人民軍最高司令官として、抗日武装闘争の時期に築いたすぐれた用兵術と作戦とによって創建後まもない人民軍と全人民を指揮し、「強大さ」を誇っていたアメリカ帝国主義をかしらとする十六か国の国際反動武力と李承晩かいらい一味を容赦なく撃破した。

金日成首相は、抗日武装闘争において、また朝鮮人民の武装力である朝鮮人民軍を創建し強化発展させ、アメリカ帝国主義の武力侵略者たちに反対し、自由と独立を守る祖国解放戦争において発揮したすぐれた軍事戦略家としての手腕と輝かしい勲功により、朝鮮民主主義人民共和国元帥称号と英雄称号を授与された。

全国土が火の海と化し、岩も焼きただれ、河もにえたぎる戦争のさなかで、朝鮮人民は偉大な指導者のよびかけにしたがい、全国を不敗の要塞に、敵撃滅の高地に築きあげ、地上と空中からたえずおそいかかる凶悪な敵の大兵力をうちのめし、祖国の山河に葬り去ってしまった。

アメリカ帝国主義は敗北した。これは、肝をつぶしたアメリカの好戦狂たちが告白したように、米国史上最初の、そして最大の惨敗であった。かれらは百万におよぶ屍の山のうえで、戦傷で包帯だらけの頭をたれて停戦協定に調印した。

こうして、百戦百勝の鋼鉄の霊将である金日成首相の名は、英雄朝鮮の名とともに、全世界において正義と勇気と威力の象徴となったのである。

戦争のきびしい時期、数多くの南朝鮮人民が戦火のなかをくぐりぬけ、ひたすら金日成首相のふところをもとめてやってきた。かれらのなかには義勇軍として人民軍の隊列にくわわり、手に武器をとってアメリカ帝国主義侵略

者と勇敢にたたかった青年男女も多く、幼な子を背のうのうえにのせてけわしい山なみをこえてきた労働者や農民も多かった。また弟子までひきつれ人民軍とともに千里の道を歩いてきた白髪の学者や教授もいたし、アメリカの飛行機がじゅうたん爆撃を強行するさなかで声高く『金日成将軍のうた』をうたいながら、ひたすら北へ北へと歩きつづけた少年や芸術家たちもいた。

金日成首相は、かれらすべてをそのひろい胸のなかにつつみ、かれらに幸福な生活をあたえ、かれらを社会主義建設と祖国統一をめざす活動家に育てあげた。

アメリカ帝国主義にうち勝った金日成首相は、全人民を動員して廃墟と化した国土を短時日のうちに復旧改造し、ふたたび全世界を驚嘆させた。

金日成首相は社会主義革命と社会主義建設において、じつになんぴとも歩んだことのないもっとも近い勝利の道へと人民を正しく導いた。

戦後の建設——、これは文字どおり戦争と少しもかわりない苛烈な闘争であった。

村や都市や工場はことごとく廃墟と化していた。まともなレンガ一枚、セメント一袋さえ手にいれることも困難であった。

製鉄所はさびついた屑鉄の山と化し、ぼうぼうと茂る雑草におおわれていた。

建設——、しかしなにをもって、どこからはじめるべきなのか。かんたんに解くことのできないなぞであった。

敵は、五十年、百年かかっても、いや永遠にたちあがることはできまいと豪語した。しかしそれはおろかな戯言にすぎなかった。

つねに人民大衆の威力を深く信じていた金日成首相は、アメリカ帝国主義侵略者をうちやぶった英雄的な気勢で重工業の優先的な成長を保障しながら、軽工業と農業を同時に発展させる独創的な経済建設の基本路線をさししめ

し、人民を全面的な復旧建設へとふるいたたせた。

金日成首相が提示した経済建設の基本路線は、経済を急速に復旧発展させ、自立的民族経済の建設と人民生活の向上にかんする問題をもっとも正しく、大胆に解決するカギであった。

この路線にしたがい、全国は火花とび散る一大建設場と化した。廃墟に巣をつくっていた鳥たちは森のなかへ移っていった。

金日成首相は停戦直後から建設場にでむき、労働者、技術者たちとともに提起された問題を一つ一つ解決していった。どこでも昼と夜の区別がなかった。家庭の主婦や子どもたちまで先をあらそって水をはこび、砂利をはこんだ。だれもが苦難をたえしのび、同胞の幸福と国の統一のため、次代の繁栄のために英雄的に働いた。

こうして停戦後四十日目に、いち早く降仙製鋼所は鉄を生産しはじめた。黄海(ファンヘ)製鉄所や清津、興南地区の大工場をはじめ、各地に戦争前よりももっと大きく、そして現代的な無数の工場が建ちならび力強く生産を開始した。それだけではない。ピョンヤンをはじめとする華麗で雄壮な大都市や文化的な農村が数かぎりなく星座のように美しく地上にちりばめられた。

革命は急速に発展した。金日成首相は独特の手腕で農業の社会主義的協同化と個人商工業の社会主義的改造の道を切りひらいた。金日成首相の構想にしたがって、農村や都市における社会主義的改造はもっともみじかい期間内に順調に完成した。わけても四～五年のうちに農業協同化を細大もらさず完成したことによって農村を裕福で文化的な社会主義農村にかえ、農民を労働者階級の確固たる同盟者とし、勤労大衆の政治、道徳的統一を強化するうえで世界的な模範をしめした。こうして北半部には、勤労者たちがながい歳月にわたって渇望し、金日成首相の指導のもと、革命家たちがそのために尊い血を流してたたかった搾取と抑圧のない社会、労働と自由の楽園である社会主義制度がうちたてられ、朝鮮革命のたのもしい基地が鉄壁のように築きあげられたのである。

金日成首相は戦後の復旧建設において、解放直後からの一貫した施策である自立的な民族経済を建設することに全力をつくした。

金日成首相は、朝鮮人民が自己の力で新しい社会を建設するためには自立的な民族経済を建設しなければならないと強調しながら、つぎのようにのべている。

「自立的な民族経済を建設するということは、国を富強にし、人民生活を向上させるうえで必要な重工業および軽工業製品と農業生産物を基本的に国内で生産し保障することができるよう経済を多面的に発展させ、現代的技術で装備し、自己の強固な原料基地を築くことによって全部門が有機的に連結された一つの総合的な経済体系を形成することを意味する」

これは金日成首相が抗日武装闘争の時期から終始一貫堅持してきた主体的な立場、自力更生の革命精神を経済建設に具現したものである。

金日成首相は、自主的で自立的な重工業の創設、中央工業建設と地方工業建設の並進、大自然改造、民族幹部の大々的な養成、全面的な技術革命と文化革命などの創造的な政策と対策をひきつづき提示した。偉大な指導者の導きにかぎりなく忠実な愛国的人民は、金日成首相のよびかけを心からうけとめ、国の自立経済建設において巨大な偉勲をうちたてた。

それはじつに、おどろくべきことの連続であった。工作機械の「子生み運動」を展開し、わずか一年のあいだに国家計画以外に一万三千余台の工作機械を増産したのをはじめ、地方にうずもれていた資材と労働力で数か月間に千余の地方産業工場を建設したこと、あるいはわずか数か月間に三十七万余町歩の田畑に水を供給することができる大水利灌漑工事を遂行したことなど一、二の事実をあげただけでもその偉勲の一端を知ることができるであろう。

この過程で自力で生産し、衣食住の十分な生活をおくることができる、すなわち自給自足することのできるしっ

かりとした自立的民族経済が建設されたのである。

工業においては、機械製作工業を中核とする重工業基地、中央工業と地方工業からなる軽工業基地をもった自立的な工業体系が確立された。こうして自己の技術と力でトラクター、電気機関車、電車、ブルドーザー、自動車、三千トン・プレス、八メートル・ターニング盤などの各種重工業製品をはじめ、織物、食料品、その他ありとあらゆる軽工業製品にいたるまで、生産できないものがないほどすべてを自力でつくりだすようになり、決心さえすればどんなものでも生産することができるようになったのである。

全国が工場網でおおわれ、その施設が現代化されるにつれて生産は急速に増大した。電力、銑鉄、粒鉄、鉄鋼、石炭、織物など、少なからぬ製品における人口一人あたりの生産量は、一九六四年にすでに日本を追いこし、あるいはそれと対等な水準に到達した。南朝鮮と対比するならば、工業製品の人口一人あたりの生産量において一九六四年にはすでに電力は十一倍、鉄鋼は二十倍、石炭は三・五倍、化学肥料は三十六倍、セメントは五倍といったようにそれぞれ大きくひきはなしたのである。

農村も大きく変貌した。農村には食糧と工業原料を円満に保障することができ、凶作を知らず、毎年のように大豊作をむかえることのできる先進的な社会主義的農業経営が創設された。網の目のような灌漑水路でおおわれ、トラクター、自動車をはじめとする各種の機械が骨のおれる農民の労働をひきうけるようになった。

農民は重労働をしなくても年ごとに高い収穫をあげている。このようにして共和国北半部は、かつての食糧不足地帯から、食糧の豊かな地帯へと変化したのである。

科学、教育、保健、文化、芸術などの分野でも巨大な成果が生まれた。

このように、アジアの一角で植民地奴隷としての苦痛にさいなまれていた国、戦争によって廃墟となった国が、強力な自立的民族経済をもった社会主義強国に、文化的な国家に一変し、まばゆい光を全世界に放つ、アジアの光

明となったのである。

都市と農村で社会主義が勝利し、自立的民族経済が建設された条件のもとで、金日成首相は都市と農村とのあいだの差異、労働者階級と農民との階級的差異を一掃することによって、農民問題、農業問題を終局的に解決する歴史的な課題を提示した。

この課題は、金日成首相の有名な『わが国の社会主義農村問題にかんするテーゼ』で明らかにされた。このテーゼは、農村において思想、技術、文化革命を促進し、党と国家が責任をもって農村を指導援助し、農業経営を工業と同様な企業的方法で指導管理し、協同的所有を全人民的所有にふだんに接近させるなどの原則と方法によって、都市と農村とのあいだの差異を消滅させることについて明白にしめしている。

これはじつに、世界ではじめて社会主義の全面的な建設と共産主義への漸次的移行の方途を科学的に明らかにしたものである。このテーゼを具現するための闘争の過程で、農村には新たな変革と革新が生まれた。

金日成首相は、このようにたぐいまれな革命的展開力をもって革命と建設をふだんに促進させるかたわら、つねに国の防衛力強化に大きな力をそそぎ、自衛路線をしっかりと堅持した。金日成首相は朝鮮がおかれた複雑で緊迫した情勢とかんれんし、経済建設と国防建設を併進させることについての革命的で戦略的な方針を提示した。また金日成首相は、人民軍の幹部化と現代化、全民武装化と全国要塞化の軍事路線をさししめした。このような諸般の賢明な路線と政策が実施されることによって共和国北半部は、いかなる帝国主義侵略もそのつど粉砕し、血をもって獲得した革命の成果を守りぬくことができ、すすんでは祖国の統一を達成することができる鉄壁の要塞となったのである。

国が富強になるにつれ、すべての勤労者は衣食住にたいする不安から完全に解放され、かれらの物質生活は全般的にいちじるしく向上した。すべてが安定した職場をもち、幸福な生活をいとなんでいる。全人民が無償治療をう

けており、子弟を無料で教育している。労働能力を失った人びと、よるべのない老人と孤児たちもすべて国家から安定した生活を保障されている。

こうした施策には、困難な闘争の炎のなかでひたすら人民の自由と幸福のために、血のにじむたたかいを展開してきた金日成首相の人民にたいするかぎりない愛情がこめられているのである。

金日成首相は人民により多くの米と副食物を供給するだけでなく、子どもたちの衣服とはきものにいたるすべての問題にも肉親もおよばぬ配慮をほどこし、勤労者の住む家をより多く、よりよく建てなければならないと建設関係の働き手たちに教えた。

この過程で人民大衆の政治、道徳的統一がいっそう強化された。もちろん、社会主義革命と社会主義建設はするどい階級闘争をともなった。しかし、転覆されたひとにぎりにもみたない少数の搾取階級と反動分子の策動は、人民の団結した力のまえでそのつど粉砕され掃討された。金日成首相は労働者階級の指導を強化し、その革命的作用と影響力をたえず拡大する基礎のうえで、農民、インテリを労働階級化、革命化し、全社会の政治、思想的統一を強化して、これを敵対分子の陰謀策動に反対する階級闘争と密接にむすびつける方針を提示した。そしてつねに反革命勢力の基本的な根源をごく少数の敵対階級のなかにもとめながら、多数の各界各層の人民をすべてかちとり、結束させたばかりでなく、ひいては出身や過去の政治生活が複雑であった人びとをも肉親とかわりない愛情で教育し、社会主義の働き手に育てあげた。

このようにして全社会は、すべての人びとがたがいに信じあい、導きあいながら前進するむつまじく団結した一つの赤い大家庭にかわった。全労働党員と人民は偉大な指導者金日成首相のまわりにかたく団結し、金日成首相の考えどおりに思考して行動し、金日成首相の要求とあれば水火をもいとわずそれを貫徹し、金日成首相とともに革命を最後まで遂行するという一つの思想で徹底的に武装している。偉大な指導者と党と人民の不敗の統一、これ

にうちかつ力はこの世にない。
北半部にはじつに、われわれの祖先がかつて空想だにしなかった大変革が生まれた。
こうして朝鮮人民と外国の友人たちは、「金日成時代」、「労働党時代」という感動的なことばでもってこの偉大な繁栄を表現し、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの人民は、朝鮮を反帝反米闘争と主体思想の騎手とあおぎみるようになった。
これらすべては、その一つ一つが金日成首相の正しい指導によって達成されたものである。
金日成首相は革命を指導するにあたって、つねに主体性を徹底的に堅持した。これはすでに、抗日武装闘争の時期に金日成首相が築きあげた輝かしい伝統である。
主体性を確立するとはなにか。
これについて金日成首相はつぎのようにのべた。
「主体性を確立するということは、革命と建設のすべての問題を独自的に、自国の実情にあうように、そして主として自己の力に依拠して解決する原則を堅持することを意味する。これは教条主義に反対し、マルクス・レーニン主義の一般的真理と国際革命運動の経験を、自国の歴史的条件と民族的特性にあうように適用してすすむ現実的で創造的な立場である。これは他人にたいする依存心に反対し、自力更生の精神を発揚し、自己の問題をあくまでも自分自身が責任をもって解決していく自主的な立場である」
金日成首相は、思想においては主体、政治においては自主、経済においては自立、国防においては自衛の立場をつねにしっかりと堅持した。
金日成首相はすべての政策を作成するにあたり、つねにこのような主体思想から出発した。したがって、金日成首相が提示した政策はそのすべてが朝鮮人民の利益と要求を正しく反映しており、またそれゆえに偉大な生活力を

発揮したのである。
じつに北半部で達成されたすべての成果と偉大な変革は、まさに金日成首相の主体思想とそれにもとづく政策の巨大な結実である。
金日成首相は主体的な立場からもっとも正しい路線と政策を作成して提示したばかりでなく、人民大衆をその実践のための闘争へと機敏に組織動員した。
金日成首相はつねに大衆の力を信じ、かれらの力と創造的な知恵を積極的に発揮させながら、すべての革命課題を遂行してゆくことを原則とみなした。首相はいつも質素な身なりで大衆のなかにはいってゆき、大衆と協議し、かれらを教育し、組織動員して偉勲を創造した。こうして文字どおり全国津々浦々で金日成首相の現地指導をうけなかったところはない。
朝鮮を訪問し、金日成首相の接見をうけたオーストラリアの記者ウィルフレッド・バーチェットは、自分の感想をつぎのように書いた。
「金日成首相と一時間のあいだともにすごしたことを、わたしはかぎりなく幸福に思う。金日成首相は、偉大な人物だけがもちあわせる品性をそなえた方である。金日成首相はりりしく素朴な品性をそなえた方で、どんな複雑な問題もかんたんに容易に理解できることばで解決される方である。金日成首相がわたしの生活と仕事にたいして質問されたとき、すぐにわたしの脳裏には、木かげや工場の椅子にすわり、農民や労働者たちと話しあいながらその場でかれらの胸襟をひらかせ、生活と仕事で解決を待つ問題について気がねなく話をするようにしむけた金日成首相の姿がうかんできた」
金日成首相のこのような指導の賢明さは、全世界に朝鮮の代名詞としてよばれるほど有名になった千里馬運動を発起し、指導したところにも集中的にあらわれている。

千里馬運動は、アメリカ帝国主義者と李承晩一味が「北進」騒動をひきおこし、反革命反党分派主義者が策動した困難な時期にあたる一九五六年のすえ、金日成首相がみずから労働者のなかへはいってゆき、緊迫した情勢と経済建設において生じた難関を打開する方途を協議し、かれらの革命的情熱をよびおこしたことから端を発した。革命の要求と飛躍をめざす人民の熱望を敏感にとらえた金日成首相は、千里馬にのって走ろうというスローガンによって、社会主義建設のすべての部門で疾風のような前進をひきおこした。

いたるところで集団的な革新運動が生まれた。革命的な情熱が燃えたぎり、すべての人びとの心のなかには連日、新たな創造をつげる鼓動がひときわ高くひびきわたった。

朝鮮を訪問した外国の人びとは、そのだれもが、この前代未聞のすばらしい建設速度に目をまるくした。

人民は千里馬の勢いで前進しながら、消極性と保守主義、技術神秘主義を吹きとばし、偉大な指導者のよびかけにこたえて大胆にものを考え、大胆に実践しながら、毎日のように栄光にみちた階段をかけのぼっていった。

こうして千里馬運動は経済と文化、思想と道徳のすべての分野で、いっさいのたちおくれた古いものを一掃しながら、革新につぐ革新によって社会主義建設を一躍促進させる数百万勤労者の一大革命運動に発展し、社会主義建設における党の総路線となったのである。

金日成首相は社会主義建設の新たな現実にあうよう、人民大衆の無限の力と創意性をいっそう発揮させるために、上部が下部をたすけ、上級機関が下級機関を支援し、すべての活動家が大衆との活動をりっぱにおこない、かれらの創意性と積極性をいっそう大きく発揮させる事業方法を発起した。これが平安南道江西（カンソ）郡青山（チョンサン）里にたいする金日成首相の現地指導によって創造された有名な青山里方法である。

金日成首相はまた、経済管理において個人の唯一管理制ではなく党委員会の集団的指導を実現し、上下一致の精神で上部が下部を援助するだけでなく、生産者大衆を直接企業管理に参加させることにより、かれらの責任と革命

的熱情をいっそう燃えたたせる企業管理体系を発起した。これがすなわち、金日成首相が大安電機工場の現地指導で創造した大安の事業体系である。

このような活動方法と企業管理体系は、千里馬の進軍にいっそう拍車をかけた。

千里馬の国朝鮮は、いま意気天をつき、毎日のように奇跡が生まれる国となり、社会主義の真っ赤な花が咲きこぼれる楽園となった。

勤労者が名実ともに政治に参加する搾取と抑圧のない国、全人民が一つの赤い大家庭に団結した国、だれもが平等と自由を享有し、かつてさげすまれた労働がよろこびとなり栄光となった国、わらぶきの家や掘立て小屋をむかしばなしのなかだけにでてくるものにし、だれもが文化的な新しい住宅で生活し、無料で治療をうけ、休養をとり、無料で大学まで学ぶことのできる国、隆々と発展する自主的大工業と凶作を知らぬ発展した農業をもつ国、世界で最初に農民にたいするすべての税金を廃止し、東方ではじめて九年制技術義務教育制を実施した国、燦然たる社会主義的民族文化と世界第一級の黄金の芸術をもった国——、これがこんにちの朝鮮民主主義人民共和国なのである。

そのため日本で生活しているわが同胞たちも、朝鮮民主主義人民共和国の公民としての誇りも高く、すでに数多くの在日同胞が苦難にみちた異国での生活に終止符をうち、金日成首相が導く社会主義祖国のふところにいだかれたし、いまもひきつづきいだかれている。

このように金日成首相は、栄光にみちた雄大な生活によって世界の模範となっている社会主義の大叙事詩を母なる祖国——朝鮮の大地のうえにりっぱにうたいあげたのである。

金日成首相の偉大な指導の賢明さ、その天才的な洞察力と予見性、そしてこのうえなく人民を愛し、民族をいたわる心は、南朝鮮革命と祖国統一のための構想と、その実現のための闘争にたいする指導においても全面的に表現

されている。

金日成首相は、南朝鮮人民の遂行すべき革命が、アメリカ帝国主義侵略勢力とかれらと結託した地主、買弁資本家、反動官僚を一方とし、労働者、農民、インテリ、青年学生をはじめとする各界各層の人民を他方とする両者間の矛盾を解決する反帝反封建民主主義革命であり、これは全朝鮮革命の重要な構成部分であると規定した。

こうして金日成首相は、南朝鮮革命の基本任務はアメリカ帝国主義の植民地支配を一掃し、南朝鮮社会の民主主義的発展を保障しながら、北半部の社会主義勢力と団結して国の統一を達成することにあるとした。

南朝鮮革命の性格と任務を明確にした金日成首相は、また革命の遂行方法と各時期ごとの闘争課題を適時に提示することによって、南朝鮮人民のすすむべき道を明らかにし、その革命闘争をかぎりなくはげましている。

雨の日も、雪の日も、金日成首相はつねに、あらゆる搾取と無権利のなかで苦しみもだえる南朝鮮人民に思いをはせ心を痛めている。南朝鮮の水害罹災民や失業者たち、また孤児たちを救うために肉親もおよばぬ援助を提案したことも一度や二度ではなかった。しかしそのたびにヤンキーどもがそれをさまたげた。

金日成首相は解放後からこんにちにいたるまでのあいだ、南朝鮮人民の解放と祖国の統一についてかたときも忘れたことがなかった。農民に会えば、南朝鮮の食糧の切れた人びとを救援する米を準備することをよびかけ、工場をおとずれては、南朝鮮の復旧建設に必要な機械をより多く生産するよう訴えた。すべての人民を千里馬の勢いで前進させたのも、国の北半部を富強な革命基地に築きあげたのも、ひたすら祖国を統一させ、南北朝鮮人民にひとしく自由で幸福な新しい生活をいとなませるためであった。

民族分裂の元凶であるアメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から追いだし、朝鮮人民の自主的な力によって祖国を統一することは、金日成首相が終始一貫して堅持してきた方針である。

金日成首相は、朝鮮人民自身の力で国の統一問題を解決するために、情勢発展の各段階ごとに正当で合理的な統

一方案を主導的に提示した。
こんにち南朝鮮人民は、金日成首相がさししめした方針、とくに南朝鮮において敵の野蛮な弾圧から革命勢力を保存し、それをたえず蓄積し成長させることにより、革命的大事変を主導的にむかえることについての現段階の基本方針にしたがって、アメリカ帝国主義とその手先に反対する闘争の炎をいっそう高く燃えあがらせている。この反米救国闘争の力強い雄叫びは、やがて敵の頭上に、かれらの破滅を告げる鐘の音となってひびきわたることだろう。
南北朝鮮人民の団結した力によって、ヤンキーどもとその手先をうちくだき、四千万朝鮮人民の敬愛する指導者金日成首相のまわりにかたく団結し、祖国の統一と全民族的な大繁栄を謳歌できる日は遠くない。
また金日成首相のすぐれた指導は、世界革命、国際共産主義運動と労働運動にたいする巨大な貢献にもあますところなくしめされている。
金日成首相は朝鮮革命をりっぱに指導し促進させることによって、朝鮮の共産主義者のになう国際主義的任務を忠実に、そしてもっとも模範的に遂行しており、世界革命の発展に大きく寄与している。
さらに金日成首相は、朝鮮革命と国際革命運動の利益から出発して、自主的で原則的な立場から左右両翼の日和見主義に断固反対し、マルクス・レーニン主義の革命的な旗じるし、反帝反米闘争の旗じるし、民族解放と社会主義のための闘争の旗じるし、社会主義陣営と国際共産主義運動の統一と団結の旗じるしを高くかかげ、断固闘争することによって国際革命運動の発展に貴重な貢献をおこなったし、またおこなっている。
こんにち、社会主義革命と反帝反米闘争における卓越した指導者としての金日成首相の国際的威信は、なんびともこれを傷つけることができない確固たるものとなった。朝鮮における社会主義革命と建設、反帝民族解放闘争と国際共産主義運動にたいする金日成首相の数多くの著書と演説は、世界の広はんな地域において大きな反響をまき

おこしており、すべての人びとに愛読され研究されており、行動の指針となっている。

このように理論と実践においで巨大な功績をつみあげた金日成首相にたいし、キューバのフィーデル・カストロ首相はつぎのように語った。

「金日成同志は、現代の世界においてもっとも傑出し、すぐれた英雄的な社会主義指導者のひとりである。その歴史は、社会主義の偉業に服務する革命家が書きつづけることのできる、もっとも美しい歴史の一つである」

また、朝鮮を訪問したジンバブエのアフリカ人民同盟民族副秘書であるエドワード・S・ノドロフ氏はこう語った。

「金日成首相は、われわれの時代のもっとも偉大な人物のひとりであり、近代史のもっとも偉大な人物のひとりであり、革命のすぐれた指導者であり、正義と社会主義建設のための闘争において、あらゆる希望と成功のためにわれわれが待ちのぞんだ、まさにそのような方である」

その偉大な人物こそ、絶世の愛国者であり、民族的英雄であり、百戦百勝の鋼鉄の霊将であり、国際共産主義運動と労働運動のすぐれた指導者のひとりである四千万朝鮮人民の偉大な民族の太陽——金日成首相その人なのである。

このように偉大な金日成首相を指導者にいただく朝鮮人民の前途には、まさに輝かしい勝利と幸福のみが約束されている。金日成首相がながい歳月にわたって達成した偉業はのちの世まで、千年も万年も燦然たる光を放ちつづけるであろう。

金日成首相にたいする四千万朝鮮人民の感謝と敬慕の情は、国内外のすべての同胞とともに、子どもや老人もよろこんでうたう『金日成将軍のうた』となって朝鮮の津々浦々にひびきわたっている。

長白の山なみ血にそめて
鴨緑の流れを血にそめて
自由朝鮮きずくため
戦いきたりしそのあとよ
　ああ、その名も高き金日成（キムイルソン）将軍
　ああ、その名もゆかし金日成（キムイルソン）将軍

満州の吹雪よ語れかし
密林の長き夜よ告げよかし
不滅のパルチザンはそも誰ぞ
絶世の英雄はそも誰ぞ
　ああ、その名も高き金日成（キムイルソン）将軍
　ああ、その名もゆかし金日成（キムイルソン）将軍

金日成将軍の主要活動年表

（一九一二年四月～一九四五年八月）

一九一二年四月十五日　ピョンヤン市万景台区城万景台里（当時、平安南道大同郡古平面南里）において、金亨稷先生と康盤石女史の長男として誕生。

一九一七年三月二十三日　金亨稷先生が反日地下組織である朝鮮国民会を組織。

一九一七年の秋～一九一八年の秋　金亨稷先生がピョンヤンの監獄において獄中闘争を展開。

一九一九年の夏～一九二三年一月　中江鎮、臨江をへて八道溝の小学校で学ぶ。
金亨稷先生が中江鎮、臨江、八道溝において反日闘争を継続。

一九二三年二月～一九二五年のはじめ　故郷の彰徳学校で学ぶ。

一九二五年のはじめ（十四歳）　祖国解放の大志をいだき鴨緑江をわたる。

一九二六年六月五日　金亨稷先生逝去。

一九二六年の夏～秋　樺甸県華成義塾に入学し非合法組織ㅌ・ㄷ（打倒帝国主義同盟）を組織。秋に華成義塾を中退し撫松でセナル少年同盟を組織。

一九二七年の春　吉林毓文中学校入学。ここでマルクス・レーニン主義を探求。

一九二七年の春～一九二八年　吉林ではじめて共産主義青年同盟を組織。反帝青年同盟を組織。朝鮮人留吉学友会を指導。吉林でおこなわれた安昌浩の民族改良主義的演説を論駁。
康盤石女史、撫松で婦女会主任として活動。

一九二八年十月～十一月　吉会線鉄道敷設反対闘争を組織指導。

一九二九年の春
「南満青総大会」に参加したが、柳河県三源浦で民族主義者の分裂行動を糾弾する弾劾文発表。

一九二九年
満州反動軍閥に反対する青年学生の同盟休校闘争を組織指導。

一九二九年下半期～一九三〇年の春
吉林監獄で獄中闘争。植民地民族解放問題、朝鮮革命路線などを研究。

一九三〇年の夏～一九三一年のはじめ
朝鮮革命にかんする主体的なマルクス・レーニン主義的革命路線を提示。抗日武装闘争のために共産主義者たちの武装組織である朝鮮革命軍を組織。吉東地区で共青組織を指導。卡倫、孤楡樹、五家子、敦化、安図地方の農民大衆のなかで活動。農村青少年のなかで軍事訓練を実施。

一九三〇年八月
武装闘争の最初の試みとして国内に武装グループを派遣。武装グループ責任者の叔父金亨権先生は、豊山、洪原などで活動中、日本帝国主義者に逮捕され一九三五年、ソウル西大門刑務所で獄死。

一九三一年の秋
九・一八「満州事変」ののちに開催された安図地方革命組織責任者集会で、抗日武装闘争路線を具体化。

一九三一年十一月
明月溝会議に参加し、抗日遊撃隊の組織問題を討議。

一九三一年の秋～一九三二年の春
間島朝鮮農民の秋収暴動と春慌暴動に農民大衆を組織動員。

一九三二年四月二十五日
抗日遊撃隊を創建。

一九三二年の夏
民族主義者たちの武装力である独立軍の司令梁世奉と談判、民族団結をよびかける。

一九三二年七月三十一日
康盤石女史逝去。

一九三二年の夏～一九三五年　東満各県に遊撃根拠地――解放地区を創設。根拠地内に人民革命政府を樹立。土地改革をはじめとする社会経済改革を指導。

一九三三年六月　「反日部隊」の頭目呉義成と談判。

一九三三年九月　東寧県城進攻戦闘を指揮。

一九三三年十二月～一九三四年一月　小汪清遊撃根拠地の防御戦闘を指揮。

一九三五年二月～三月　大荒崴会議、腰営溝会議で反「民生団」闘争の左翼偏向路線などを批判。

一九三五年六月～一九三六年二月　老黒山戦闘を指揮。北満遠征おこなわれる。各部隊が南満州、東満州、国内各地に進出。

一九三六年二月　南湖頭会議をひらき、反日民族統一戦線、党創建準備のより積極的な推進および遊撃隊の鴨緑江沿岸、白頭山西南部地帯への進出方針を提示。

一九三六年五月　東崗会議で南湖頭会議の方針を具体化。

一九三六年五月五日　祖国光復会創建。十大綱領を発表。機関誌として『三・一月刊』の発刊決定。金日成将軍が祖国光復会会長に推戴さる。

一九三六年八月十七日　撫松県城進攻戦闘を指揮。

一九三六年下半期　白頭山根拠地創設。

一九三七年一月　甲山一帯の祖国光復会下部組織の一つ朝鮮民族解放同盟結成。

一九三七年六月四日　普天堡戦闘を指揮。朝鮮人民につげる布告文を発表。

一九三七年六月三十日　間三峰戦闘を指揮。

一九三七年九月　日本帝国主義の中日戦争挑発――七・七事変と関連し国内人民につげるアピールを発表。

一九三七年十一月～一九三八年三月　馬塘溝で軍政学習を指導。

一九三八年十一月　南牌子会議で極左冒険主義路線である熱河遠征を批判。三個の方面軍を編成。

一九三八年十二月～一九三九年四月　南牌子から長白への苦難の行軍。

一九三九年五月一日　長白県小徳水でおこなわれたメーデー慶祝大会で演説。

一九三九年五月十八～二十三日　茂山地区戦闘を指揮。

一九三九年の秋～一九四〇年のはじめ　白頭山東北部一帯で大旋回作戦を指揮。

一九四〇年八月　第二次世界大戦の勃発と関連し、敦化県小哈爾巴嶺会議を召集、会議で最後の決戦に対処する方針を提示。小部隊活動へ移行。

一九四一年の春　汪清、延吉、東寧など各県と国内における小部隊および武装グループの軍事政治活動を指揮。武装グループは羅津、雄基一帯で活動。

一九四一年十二月　日本帝国主義の太平洋戦争開始に対応した人民革命軍の活動方針を提示。

一九四二年～一九四五年八月　戦争情勢の新たな転換と関連し、最後の決戦に対処する準備活動を推進。武装グループが東満州とピョンヤン、会寧、雄基、清津、羅津一帯で活動を展開。

一九四五年八月八日　ソ連の対日宣戦布告を契機に、朝鮮人民革命軍に日本帝国主義にたいする最後の攻撃命令をくだす。

一九四五年八月九日～十五日　朝鮮人民革命軍が雄基郡一帯での戦闘をはじめ、羅津、清津、羅南、元山解放戦闘などを展開。

一九四五年八月十五日　朝鮮人民、日本帝国主義の植民地支配から解放される。朝鮮人民革命軍の祖国凱旋。

訳者あとがき

――金日成首相の革命活動の歴史は、朝鮮人民にとってだけ意義があるのではない。全世界の被圧迫人民の闘争、――とくに、祖国の統一と完全独立のために反米救国闘争にたちあがったわが人民にとって大きな意義がある。

（南ベトナム民族解放戦線中央委員会委員・南ベトナム解放職業連盟中央執行委員会委員　フィン・パン）

――朝鮮人民の偉大な指導者金日成同志にみちびかれた朝鮮共産主義者たちが長期間にわたって展開した英雄的な抗日遊撃闘争は、祖国か、さもなくば死かという決死的な闘争であった。……まさにこのような闘争があったがゆえに、朝鮮人民はこんにちのような栄えある祖国をもつことができたのである。……朝鮮労働党は、世界でもっとも自主的な党だ。朝鮮とキューバは兄弟だ。

（キューバ共産党中央委員・外相　ラオール・ロア）

――金日成首相は、現代朝鮮と被圧迫人民を代弁するマルクス・レーニン主義者だ。かれは、かれの思想と教えでもって、朝鮮人民だけでなく、全世界の被圧迫人民に実際に光を照らしてやった偉大な赤い太陽だ。

（ナイジェリア森林および農場員協会中央執行理事会書記長　イジェアイエ・オモレジエ）

わたしたちは手許にある新聞や雑誌のなかから、朝鮮人民の偉大な指導者金日成首相について語った外国の人たちの声を二、三ひろってみた。

もちろん、金日成首相の導きの正しさを語り、金日成首相が国際共産主義運動と反帝反米民族解放闘争の強化発展に、どれだけ偉大な貢献をしているかについて書かれた外国の人たちの文章は、これにとどまらない。

しかし、ここに引用した英雄的な南ベトナム人民の代表フィン・パンをはじめとする二、三の外国の友人たちの声をとおしてみても、こんにちアジアを語り、世界を論ずるうえで、朝鮮人民の偉大な指導者金日成首相を正しく知ることが、どれだけ大切なことかわかるであろう。

わたしたちは、多くの日本国民が、こんにちの朝鮮を正しく理解するためにも、また日本自体がおかれている位置を考えるうえにおいても、朝鮮人民の偉大な指導者金日成首相について正しく知ることが必要だと思う。

この本は、そうした日本の読者のためにも、もっとも手ごろで正確な金日成首相の伝記といえよう。

この本は、ピョンヤンの人文科学社がだした『民族の太陽金日成将軍』の第一部を訳したものである。

つまり、朝鮮人民の偉大な指導者金日成首相の生い立ちから説きおこして、その少年時代と、祖国をあとにして中国東北地方にわたり、早くから革命の道にはいるくだりをへて抗日遊撃隊を組織し、十五年ものあいだ革命的な人民の支援のほかにはなんらの後方も、国家的支援もない困難な条件のもとで武器、弾薬、食糧、被服など、必要なものすべてを敵とのたたかいのなかで解決しながら数千倍もの強敵をうちやぶった抗日武装闘争を格調高く描き、一九四五年八月、日本帝国主義を打倒して祖国の独立と民族の解放をかちとったところまでを書いたものである。

わたしたちは、この本が日本国民のなかで、金日成首相の偉大な人となりや革命思想を正しくつたえ、朝・日両国人民の友好と親善に寄与できればさいわいである。

なお、この本のなかの中国の地名は本来ならば全部中国音でルビをふるべきであるが、慣用上、朝鮮音、あるいは中国音と朝鮮音を混用してつかっている地名は、朝鮮音、または朝・中両国音混用のルビをふっておいた。このことを了承していただきたい。

一九六九年四月十五日

金日成首相誕生五十七周年記念日に

金日成伝翻訳委員会

抗日武装闘争主要戦跡図
（1932－1945）